

俺は、農業がしたかっただけなのに……！

葉川柚介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

銀鳳騎士団に、一人の男が加わった。

フレメヴィーラ王国のとある農村の出身。

ライヒアラ騎操士学園の騎操士学科に所属しながら、鍛冶学科にも顔を出して幻晶騎士の整備や修理の知識も身に着けた変わり者。

修練の傍ら図書館に籠るその男。

彼の運命は、エルネスティ・エチエバルリアに召集されることによって大きく変わる。

「俺は、農業がしたかっただけなのに……！」（サアア……）

農業チートがしたい転生者の明日はどっちだ。

目次

俺は、農業がしたかっただけなのに……	1
！	1
我慢できずに駆けつけた国王陛下	27
農業を、革命する力を！	54
オーヴイニエ……おろおろおおおおし	82
!!	82
鳥を見た	110
この世界だと、マナが枯渇して魔獣が大 量発生する心配がないから気楽	141
アルマダ会戦で使われた火船戦術って、 別に敵軍に直撃したわけじゃないらしい	141
団長、還らず	174
水落はフラグ	205
イカルガさん！ カササギさん！ キレ	236
のいいヤツ、頼みます！	263
番外編 帰省！ ユシツダ村!!	287
番外編 アグリ・ボトル調査録	310
番外編 「ミツシヨンの概要を説明しま す」	333
番外編 銀鳳騎士団物語	358
エルくんケツコンカツコガチ	375
高地農業の可能性に思いを馳せる空の旅	405

番外編	エルくんに似合う服を想像して みてください	432
番外編	ドキッ☆ 乙女だらけの銀鳳騎 士団物語	453
番外編	エルくんに勝てる幻晶騎士なん てあるのだろうか	477
番外編	アグリの悪夢三夜 一夜目	エ 498
	ルくん (女の子)	
番外編	アグリの悪夢三夜 二夜目	エ 509
	ルくん (の娘)	
番外編	アグリの悪夢三夜 最終夜	エ 530
	ルくん	
番外編	銀鳳騎士団の終焉 或いは人類	

種	の天敵	547
番外編	特別訓練「絶対に笑ってはいけ ない銀鳳騎士団」	567
	変態は惹かれあう。しかも浮遊大陸で	584
	若旦那！ 空からエルくんが降ってきた	613
	！ だから敵さん逃げて!!!	637
	王女様は大体しっかりしてて、男の王族 はフリーダムな気がします	
	知り合いとの再会 (ただしお互い二度と 会いたくないと思っていたものとする)	671
	決まり手は「ラストシューティング」と	

「自爆」

699

に目を付けられそうな技がある

857

番外編 30話目なら、そりゃあスパロ

エルくんの大好き物、やっちゃった

ボ30に参戦もしますよね!

725

881

エルくんに目をつけられたモノがどうな

そしてこれからも空に大地は浮かび続け

るか、俺は身に染みて知っている

る

900

745

飛竜戦艦、復活(ただし、エルくんには首輪
をつけられて)

768

純エーテル代謝生物(宇宙怪獣)……って

コト!?

802

浮遊大陸って聞いたときから、最終的に

落ちそうな気はしてました

837

グランレオンで使ったら、絶対エルくん

俺は、農業がしたかっただけなのに……！

ライヒアラ騎操士学園。

そこは、フレメヴィーラ王国最大規模を誇る学び舎。初等部から高等部まで、幻晶騎士を操縦する騎操士以外にも多岐にわたる人材を育成する総合教育機関。

だが最近、そこに別の側面が加わっていた。

「……難儀ですね。まだ完成度が足りません」

「そうか？ 十分実用には耐えるレベルだろう、銀色坊主」

その名は銀鳳騎士団。

遠征訓練時に遭遇しかけた師団級魔獣ベヘモスへ喧嘩を売った挙句勝利を収め、その後生徒たちの助力を得てなんと幻晶騎士に新機軸の改良を施し劇的な成果を上げた若き奇才、エルネステイ・エチエバルリアが団長を務める騎士団であった。

彼らは今、更なる新型幻晶騎士の開発に取り組んでいる。

国王から申しつけられた銀鳳騎士団のお披露目。その場で見せつけるための新型機である。

エルネステイは、興奮した。

そりゃあもう素敵な機体をもって人々の度肝を抜いてやろうと、幻晶騎士の歴史上類を見ない設計を行い、実現に取り組む。

その結果は、半ばまで成功したと言っている。数々の困難こそあったが機体自体は完成し、複雑ながら動力系統、操縦系統もクリア。追々改良の余地は多いにあるが、ひとまず国王の御前に晒すに恥じないだけの出来になったと、鍛冶学科に所属しエルネステイの荒唐無稽な夢である幻晶騎士開発に力を貸すダーヴィドは思っている。

「ええ、実用には十分です。実用には。ですが僕が求めているのはもつとこう……優雅なんですよ！ 今でも確かに機動力では通常の幻晶騎士を上回っていますが、言うなればそう、刃馬一体！ トロンベっていうか、その名のごとく駆けよっていうか!!」

「……わかった、わかったぞ銀色坊主。お前がここじゃないどこかを見てるのはよくわかったから、とりあえず現実に帰ってこい」

ダーヴィドはため息とともにエルネステイの肩を叩く。

よくあることだ、もう慣れた。彼らの団長は紛れもなく天才なのだが、同時になんかもう紙一重の向こう側までイっちゃってるんじゃないかな、と思うのもまた事実なわけだ。

「おっと、失礼しました。幻晶騎士本体は問題ありません。現時点ではこれがベストでしょう。改良の余地があるとすれば制御系です」

「そりやわからんでもないけどよ、そっちは先が長いぞ？ 下手に変えて、改良したつもりが不具合の山になって直すのに一晩かかる、なんてのはよく聞く話だ」

ともあれ、団長殿はご不満の様子。

どうやらこの新型機、まだまだ理想とする領域には届かないのだという。ダーヴィドの目からすれば、既に形からして異形。それがまともに動くようにまでこぎつけたのだから、それだけでさえ幻晶騎士開発史に名を残すこと確実とさえ思えるのだが。

「ええ、そのことはイヤと言うほどわかっています。……なので、協力を仰ぎましょう。この道のスペシャリストに。というわけでちよつと誘ってきますね！」

「あつ、エルくん待って！ 私も一緒に行くー！」

「……そうか、また犠きようりよくしや牲者が増えるのか」

ダーヴィド、涙をこらえる。

なんかいつの間にかやらエルネスティの片腕的なポジションに収まってしまっていることに不満はないが、アレにこの道へ引きずり込まれる誰かが増えるだろうことに多少の感慨を抱くほどには常識人なのだつた。

せめて、その相手がエルネスティを気に入るか、あくまで外部協力者に踏みとどまれますように。柄ではないと思いつながら、ガレージの窓から見える小さく、しかし抜けるような青い空に祈った。

まあ、その祈りは届かなかったのだが。



吾輩は転生者である。名乗るほどの者ではない。

生まれかわりを経験する前は、21世紀の日本を生きる立派な社畜。

上司への恨みとたまの酒、そして幼少期からどっぷり耽溺したオタ的なあれこれを糧として、命燃やすぜしていた。

死に様はよく覚えていない。普通に道を歩いていたらいきなり空が見えた気がしたので、多分車に跳ね飛ばされるか何かしたのだろう。痛みを感じなかったのは良かったのか悪かったのか、まあ今はどうでもいい。

その後気付いたときは病院かと思っただけにあらさに見えたのが知らない天井だったのは当然として、なんか見覚えのない人種が次々に視界に入ってきた。

まず顔立ちが日本人ではなく、髪色もバラエティに富んでいる。ああこれもしかして、という疑惑が確信に至るまでそう時間はかからず、俺が生きていた時代から数百年は遡るだろう生活様式、見覚えのない草花、控えめに言って聞き覚えのない言語に晒さ

れる中で最近流行りの異世界転生だと確信した。

ネットもねえ。アニメもねえ。娯楽もそれほどありはしねえ。

そんな世界で生きていけるのかと恐れおののいたのも今は昔。なんだかんだと楽しく生きてくることが出来た。

俺が生まれついたのはド辺境の農村。

建物は少なく、森が近く畑しかなく経済の概念があるかどうかさえ怪しいレベルの村だった。

だが、だからこそ楽しい。

村にいた同年代の子供たちと野山を駆け回って遊びまわり、その中で年の功と溢れる若さを併せ持ったことでとりあえずその心を掌握して地位を確保。

なんか気付いたらみんな子分みたいになっていたので、さつそくそいつらをまとめて猿でもわかるさんすう教室を開講。文字は読めなくても数学は変わるまいということ。で四則演算くらいは身に着けさせた。

……いやだって、放っておいたらどう考えてもどん詰まりになりそうだし、そうでなくともたまに来る商人や代官からの徴収でちよろまかされてそうだしね！

とまあ、こんな感じの幼少時代を過ごした。

村にいた頭のいいお姉さんから文字の読み書きを習ったり。

前世では日本語とグロンギ語とオンドウル語のトリリンガルだった俺からすればたやすいことよ。

親にバレると土になにするかと殴られるから秘密で作ったたい肥をこっそり土に混ぜたり。

収穫量の増大は寿命と人口に直結するからね。いずれ俺が家を継いだ暁にはこの村を豪農だらけにしてやんよ。高まれ、俺のTOKI○力！

と、暢気していられたのは田舎であることも手伝って俺があまりにもモノを知らなかったから。

この世界は決して人間に優しくくない。ただ生きる、それだけでさえ困難なほど過酷な地。

人の爆発的な繁栄を許さない、人を超越した生命。

その名を「魔獣」と呼ぶ。

魔法を使う獣、ゆえに魔獣。

大小強弱の差はあれど、こう呼ばれるものたちは総じて人より大きく、生身の人間がどれだけ束になっても敵うようなものではない。

村が魔獣に襲われたのは、8歳の時。

正直そのとき何がどうなったのかはよく覚えていない。

断片的な記憶を辿ると、いくつかの情景が浮かぶ。

大声を張り上げる大人たち。

燃える畑。

土の味がしたのは転んだからで、転んだ理由は俺の体がすっぽり収まるほどに大きな足跡が地面に刻まれていたから。

そして、見上げた俺を睨んだ大きな目。

目が合った。多分死ぬ。二度目だけど、怖いなあ。

そんな感情とかいろいろごちゃ混ぜになったスライドショー。

しかし最後はいつだって。

『獲物み————————つけえ!!!』

——シャギャー!?!

そんな魔獣に飛び膝蹴りをかます、巨大な騎士だった。

これが、俺と幻晶騎士との初めての出会いでしたとき。

この世界には、人類より強大な魔獣がいる。

後に知った俺の生国、フレメヴィーラ王国は人類生存圏が魔獣の生息地と接する最前線。そこで人々が生きるために生み出された魔獣に対抗しうる力。

かつて親しんだ単位で身長10mほど。魔獣と同じ目の高さで向かい合い、戦う鋼の勇者こそが、幻晶騎士なのだ。

これまたあとで知ったところによると、このとき魔獣に対して華麗なシャイニングウィザードをキメたのは俺が住む村を含む一帯を治める領主さまだった。

魔獣襲来の報告を受けて出陣……というか、幻晶騎士が大好きで口実を見つけては出撃するようなお人で、この日も特に理由もなく幻晶騎士で領内をパトロールしていたところ、魔獣の襲撃を発見して大喜びで討伐に来たらしい。

単騎で。

領主なのに。

被害状況確認に来た副官的な人の話によると、パトロールとかほぼ脱走だったのだとか。それが日常茶飯事だというのだから心労はいかほどか。

「休んでいる暇はないぞ副官、出撃だ！」

という感じで連れ回されたこと多数、と語っていた。

魔獣の被害にあつた小僧にさえ愚痴らなければいけない副官さんのストレスが真剣に心配だ。

まあそんなわけで畑の大部分が燃えたとはいえ大半の村人は無事。

副官さんの胃痛と引き換えに村は守られ、領主さまはこんな感じで魔獣が出るや即片付けてくれるからと領民からの支持も厚く、税の免除その他の被災者支援もしてくれたおかげでそこそこ平和な日々が戻つて来た。

……かと思つたのだが。

「お前、中々才能ありそうだな。ちよつくらライヒアラ行つて幻晶騎士について勉強しなきゃよ」

「えっ」

この世界、魔法の才は極めて属人的な物で、俺のような普通の農民に資質が認められることもある。

領主さまはあんな感じとはいえ極めて優秀な騎操士。俺の中にある資質を見出だして、この国でも最高の教育機関たるライヒアラ騎操士学園に俺を送り込んだのでありましたとき。

この世界、王が国を治めて貴族がそれを支える程度には中世しているが、幻晶騎士を

操縦する騎操士になりうる資質を持つていけば貴賤を問わず訓練の機会が与えられる程度には切羽詰まっているのだとか。最前線つてつらいね。

学園での生活は、中々に刺激的だった。

当たり前のように闊歩する幻晶騎士。前世で知っていた天を突くビルと比較してすら巨大な城、城壁、学園都市。

ここ10年近く田舎暮らしが染みついた身には目もくらむような大都会で、そこでいろいろ学ぶ生活というのも悪くなかった。

時々無性に土いじりが恋しくなるけど。忘れないうちに肥料やら水路作りやらため池作りやらしたくてたまらないけど。

だがそれも少しの我慢。ここで幻晶騎士について勉強して戻れば、領主さまからいろいろ褒美がもらえるはず。そうして俺は故郷の村に錦を飾るのだ。

とりあえず、魔獣対策のために軍事用一辺倒である幻晶騎士を家畜を越えた農業機械として使えるようにする方法とか考えようかな。

量産機を払い下げてもらうのも魅力的だけど、戦闘用としての機能がどうしても農業には邪魔になる。ならいっそ農作業に必要な機能だけを付けた新型なんてどうだろうか。少なくとも考える価値はある。

そう考えて、学業にいそしんだ。

同級生の真面目なエドガー、気障つたらしくチャライディートリヒ、おっぱいの大きいヘルヴィなんかに実技を教えてもらったり、鍛冶学科に顔を出して幻晶騎士の構造や整備を学ぶ傍ら、図書館にも足繁く通つてこちらでは主に制御系の勉強をしたり。

とりあえず、街道やなんかと違つて道が不安定な場所でも行動しやすいように四脚機の可能性と、もし仮に幻晶騎士が手に入るとしても中古でガタが来てるやつだろうから、出力を補うために複数のエーテルリアクターを使つてもでも出力を上げる方法を考えてみよう。

——そんな生活を初等部からずっと続けていた平穩無事な学園生活。それを壊すのもまた、外から来たモノだった。

「ふむ、ふむ……なるほど！」

「……………」

きつかけは、声。

高さからして後輩。男のものとも女のものともつかない綺麗なそれが図書館の中に響き、視線を吸い寄せられた。

そして見た。

熱心に本を読む、とんでもない美少年を。

一瞬美少女かとも思ったが、アレは男だろう。幻晶騎士に関する本をキラキラした目で読んでるし。まあ、アニメだったら女性声優が声を当てそうだなーとは思うけど。

微笑ましいことだ、と俺は笑う。俺もかつてあのように勉強に邁進したし、毎年新生が入って来る時期になると数人はああしている。その中で学年を重ねてなお続けるもの好きはさすがに少ないが、いずれにせよ希望に満ちた学園生活を期待しているように何よりだ。

おそらく貴族の出だろうあのお坊ちゃんが、この学園で良い経験を積んでくれることを祈るばかりだった。

……まあ、すぐにそんな祈りは撤回する羽目になるのだが。

「んっ……はあ……すっ(っ)おい♡」

「……んん?」

再び自分の勉強に熱中することしばし。

今度も声が、それもなんかいかがわしい声が聞こえて思わず顔を上げた。

おい待てまさかありえないよな、と思いながらも出所に顔を向ければ、そこにはさっ

きと同じ位置に、おそらく読み終えたであろう本を山と積み上げてさらに別の本に取り掛かっている例の美少年が。

……なんか、エロい表情を浮かべていた。

紫銀の髪がさらりと揺れる。頬はまるで恋する乙女のように紅く染め上げられ、花弁を思わせる唇が朝露に濡れたように光っているのは、小さな舌がなぞったからか。

瞳はうっとりとおめられ、瞬きの度に長いまつげが瞳を覆う涙の幕を弾いてきらめく。

なんだあれ。まさか、この図書館に隠されているという噂のえっちな本を見つけて堂々と読んでいる猛者なのか。

一瞬そんなことも思ったが、すぐに違うとわかった。

「ああ、なんて素敵な本なんでしょう。上から下まで丸裸じゃないですか……!」

と、やはりえっちな本かと思うようなことを言いつつ手に取り、頬擦りした本のタイトルがちらりと見えた。

分厚い表紙にタイトルを押しされた、「幻晶騎士応用構造学概論」。100年に渡り新型機の開発が停滞していることと引き換えに、溜まりに溜まった現行機の実験と実用、開発者の知見と騎操士の体感、ナイトスミス達の整備に基づく経験則に至るまで、あらゆる知識を網羅した良書だ。俺も1年くらい前に読みました。

確かに、彼の言う通りあの本の中では丸裸になっている。幻晶騎士が。

応用の名がつく通り、この書の内容を我が物とするためには幻晶騎士の構造や操縦感覚についての知識と経験が必要とされるが、それらを兼ね備えた者には素晴らしい知識を与えてくれる。

……無論、間違つても新入生があつさり読み下せるものでもなければ、えっちな本でもないです。

そういえば、聞いたことがある。今年の新入生にやたらめつたら優秀で、妙に幻晶騎士が好きな生徒がいると。学園長の孫であり、人呼んで「エチエバルリア家のヤベー奴」。たぶんあの子だ。

「……見なかったことにしよう」

だから、アレは多分触れちゃダメな奴なんだと思う。

そんな美少年のエロい表情を垂涎モノの愉悦顔でガン見してる図書館の住人達もいるにはいるが、俺にはさすがにレベルが高すぎだ。

その後、さらにしばらくして。

「ドヒャアアアアアアア!!!」

「……」

ああ、ついにか、と俺は思った。

見るまでもなくわかるが、見ずにいるのもそれはそれで怖い。顔を動かさずにちらりと目だけで絶叫の出所を見ると、もう完全にイっちゃった目で、そしてすさまじい勢いでノートになにがしか書き綴っている美少年がいた。

どこぞのマンガ家のような完全トリップ。きつと幻晶騎士をキメ過ぎたのだろう。彼が現実に戻ってこれることを心から祈りつつ、ちよつと遠くの席へと逃げた。

触らぬ神に祟りなし。近づかないに限るのだ。

——もつとも、神の側から触って来るなら避けようもないと、この時の俺は知りもしなかったのだが。

農業用に便利な四脚機の制御術式は机上の理論レベルながらそれなりの形になってきたので、ここらで一つ複数のエーテルリアクターを直列高出力化するための下調べとして既存のエンジン出力について調べ、まとめていたとき。

「なに書いてるんですか？　せ・ん・ぱ・い♡」

「おふう!?!」

耳の穴の中にするりと入り込む、熱い吐息と甘い声。一瞬で全身に鳥肌が立ったのは、小悪魔系後輩的なナニカに誘惑された歓喜、ではなく多分獣の顎に捕らえられた恐怖から。

椅子の上で飛び上がり、耳を押さえながら振り向いたら、そこにいたのは目を爛々と輝かせ、椅子と机に手足をかけて覆いかぶさるようにして俺の手元を覗き込む、割と小柄な美少年。

ついさつきまでイっちゃったエチエバルリア家のヤベー奴くんであった。

ちいつ、書物のみでは飽き足らず、いかにも独学で幻晶騎士について学んでるっぽい先達にまで食指を伸ばして来やがった!?

「ねえ、教えてください。先輩が何を考えているのか、どんな未来を見ているのか。すう、はあ……っ。匂いで分かります。きつと先輩も、今まで誰も見たことがない幻晶騎士をその目で見て、その手で操るために学んでるんですよね?」

ひい、エスパーかこいつ。目の中にハート浮かべながらハアハアしながら寄って来るんだけど! コワイ! 誰か男の人呼んで! 俺も男だけど! この子も男だけど!
! 多分!

「先つちよだけ、先つちよだけでいいですから!」

「や、やめ……アツ……!?!」

そして、この後幻晶騎士についてすげえ話し合った。

ひとしきりマシンガントークをしたあと落ち着いた彼が名乗ったところによると、彼はエルネスティ・エチエバルリアというらしい。やはり例のヤベー奴で、噂通り、あるいはそれ以上の逸材だった。

これが俺とエルネスティくんとのお出会いであり、その後も三日にあげず幻晶騎士の構造やシステムについて教えたり教えられたりすることになった。

それだけで済んでくれれば、よかったのに……っ！



「ふう、平和だ。やっぱりこうして静かな環境で勉強するに限るね。激しい喜びはいらぬ。そのかわり深い絶望もない、植物のような心こそが農業には重要なんだよ、うん」
図書館の静寂は何物にも勝る財産だ。

ライヒアラの図書館は極めて実用的な知識収集の場であるため、ただ調べ物をする、本を読むだけではなく周りの迷惑にならない程度の声量の会話は必要なものとして黙認される。

……まあ、最近の俺はエルネスティくんに絡まれてアレコレ話しているうちにヒート

アップした彼のとぼっちりで司書さんに怒られたりもするんだけど。

ともあれ彼との交流は悪いことばかりでもなく、既にしてそこらの中等部生程度とは隔絶した知識と発想、やたら滾っている行動力で新型機を開発したとかなんとか。そんな彼からのフィードバックもあり、四脚型のシステム面は大幅に改善されつつある。

実物はまだ作ってないけど。まあその辺は卒業して村に帰って、お上の目が届かなくなつてからこっそりやる方がいいだろう。幻晶騎士ラポラトリの顔を潰すわけにもいかないし。

この学園で学んでいるとはいえ、俺はあくまで一農民。その誇りと立場は忘れずに立ち回らないと。

それこそが平和。それこそが平穩。

オラ、この学園を卒業したら村さ帰って今度こそ実家の農業継ぐだよ。

それが夢だった。

そうなるはずだった。

しかしそれは、人の夢と書いて儚いもので。

「せんぱい♡」

「……ああ、またか」

俺の平和を断ち切るギロチン、エルネスティくんの声が響いた。

ちなみに、彼が俺を呼ぶときの声が甘えた感じであればあるほどヤバいというのが経験則で、この日は俺の農業センスが過去最大級のヤバさを告げた。

……よし、逃げよう。

「あつ、先輩なぜ逃げるんです!? ちょっとお話があるだけです! 多分先輩にとって
も耳寄りな!」

「エルくん待って……っていかあの先輩足速っ!? 私達でも普通じゃ追いつけないって
てどういうこと!?!」

前世でついで遭遇することがなかったキャッチセールスの謳い文句よりも信用できない言葉が飛び出した。

ばさばさとノートを引つ掴んで席を飛び出したのは正解だったと言わざるを得ない。
フハハハ、捕まえられるものなら捕まえて見るがいい年不相応に小柄なお貴族様よ。田舎暮らしで鍛えたこの足腰、騎操士としての鍛錬でさらに磨きをかけられたのだからそう簡単に捕まりはひでぶ。

「もー、いきなり逃げるなんてひどいですよ。ちょっとだけ、ちよーつとだけお話聞いてくれればいいんです。大丈夫、損はさせませんから……ね?」

「ぐつ、ぐえつ、ぐおお……!」

何が起こったのかわからないうちに、気付けば俺はヘッドスライディング。立ち上がろうにも背中にかかるゆさゆさした重みのせいで身動きが取れない。

チクシヨウこの後輩、図書館の中だつてのに魔法使つて一気に飛んで来やがった!

しかも人の背中でなんか体を揺らして遊んでいると来たもんだ。そういうのは親戚のお兄さんとかにしてもらいなさい!

「ああつ、先輩がエルくんとお馬さんごっこしてる……! 羨ましい! 代わつてくたさい!」

「……君、女の子としてそれでいいの?」

図書館のなめらかで冷たい床と頬擦りさせられている俺の目の前に、ずさーつと滑ってきたのはエルネスティくんと同年代らしき女の子。そういえば、エルネスティくんのところには彼と同じくらい魔法に長けた同級生の双子がいるとかいないとか。その片割れだろうか。

でも君、土下座じみた姿勢で俺と同じように床へ頬をつけてまで目線を合わせ、マジ顔で頼んでくるのは、お兄さんどうかと思うな。

「アディからも説得してください。今、僕たち銀鳳騎士団が行っている新型幻晶騎士の開発に、ぜひとも先輩のお力を貸して欲しいんです。……僕も、デイトリヒ先輩たち

も先輩のことを高く評価しています。それに先輩が目指しているこれまでのものとは異なる幻晶騎士の開発という目的にも合致していますから、そちらにとつても悪い話ではないと思いますが。ね？　お願いします。今なら、ドサクサ紛れに先輩が望む機体を一機作る権利もプレゼントしますから」

「お願いしますー！」

あ、これ逃げられない奴だ、と俺は察した。

もとより狙った獲物は逃さずどこまでも執拗に追い続けるタイプであることは、幻晶騎士に向けるエルネステイクンの異常な愛情、または私は如何にして心配するのを止めて農業を愛するようになったのか、的に考えて明らかだ。

「ちらりと背後を振り返れば、卑猥は一切ない女の子座りっぽい感じで俺にまたがるエルネステイクンがにっこりと笑う。

俺の学園生活の全てとも言えるこのノート渡したらそれで満足してくれないかな。

……ダメだろうなあ。

ため息を一つ。

祈りは天に。

拜啓、田舎の父さん母さん。そして俺をライヒアラに放り込んでくれやがった領主さま。

村に帰って畑を今の3倍くらいに広げるのはもう少し先になりそうです。



こうして、一人の男が銀鳳騎士団に加わった。

騎操士学科の生徒でありながら幻晶騎士の構造や整備にも精通した変わり者。農村出身のド平民であり、なんか妙にマイペースだった男が、エルネステイに手を引かれて加入した。

銀鳳騎士団の面々はいかなる勧誘が為されたのか、団長が浮かべる満面の笑みを見て大体察し、生暖かい励ましと共に彼を迎え入れた。

団長直々の勧誘は伊達ではなく、当時既に十分な稼働を果たしていた新型機、人馬騎士たるツェンドルグの完成度向上に貢献。機動力や安定性、その他諸々の制御系統に彼が独自に研究した理論と術式を組み込むことにより、大幅な改良を見せた。

その功績をもって、銀鳳騎士団内で純粹に彼自身の発想と設計に基づく完全新型機の開発権を与えられるという破格の報酬を受け取り、彼もまた幻晶騎士開発史に名を残すこととなる。

「農作業用には悪路を歩いたり馬力が必要だったりするからね。でも幻晶騎士レベルの器用さじゃ雑草取りもできないし、人型の手はいらないかな。だから、完全四足の獣型にしました。幻晶騎士とは呼べないし……幻晶獣機シルエットビーストつてところかな」

「すごいです！ とりあえずライオンの顔つけましょう！ なあに、爪を四本にしておけば王家に対する申し訳も立ちます！」

「団長ー、新しく作った魔導噴流推進器マギウスジェットスラスト、何機かもらつていい？」

「なに作るんですかナニ企んでるんですか機動力ですか幻晶獣機にブースターつけるんですかだつたらついでにブレードもつけましょう！」

「……いや、これと翼があればそれなりに長距離飛べるんじゃないかなつて。たぶん積載量はそんなでもないから、今の段階じゃ武装は乗せられなくて団長の趣味には合わないかもだけど、実家へ帰りやすくなるかなーなんて」

「戦闘機と来ましたかイヤツフー！ もちろん僕はそういうのも大好物ですよ！ ああんもう、先輩つてばいつもいつもそうやって僕の心を弄んでっ！」

「人聞きの悪いこと言わないでくれるかな!? 最近アデイちゃんが俺を見る目が、貴族の奥方たちに大人気な恋愛小説の嫉妬に狂った女の目みたいになってるんだからね!!」

「出来たー」

「なにが、出来たんですか？ こつ、これは……！ エンジン!? まさか、

ストランド・クリスタルティシユ

網型結晶筋肉を使った回転動力機構ですか!?

「お、おう。最近俺が何か作るや否や首に抱き着きながら現れるのやめてくれない?

いやあ、これがあれば村で使ってる荷車の馬力を増せると思ってる」

「いいですね! じゃあついでに履帯作って回転腰部作ってそこに幻晶騎士の上半身乗せましょう! 先輩、開発お願いします!」

「おい。……おい」

当人もそのうち乗り気になったことに加え、自分の中にはない発想に興奮する変態であつた団長のお気に入りとなつてしまったことも一因だつたのだろう。

こんな感じであれこれ作り、気付けばエルネステイ以上のゲテモノ開発者として世間に知られるようになっていた。

だが、彼の不幸はここからだつた。

後に勃発し、セツテルンド大陸を揺るがす大西域戦争。

その中で彼は目を付けられる。

「……なんです。なんですすなんですす! 鬼神のみならずあの……鳥は!! 私のレビテートシップより速い!? 高い!? そんなもの、許されるわけがない!!!」

彼は知るだろう。

後の歴史において「東のヤベー奴」と語られるエルネステイ・エチエバルリアの外付け変態アイデアボックスとして。

同じく「西のヤベー奴」として知られるジャロウデク王国の天才オラシオ・コジャーソの目の敵として。

なんやかんやと追い回され、故郷の村の開拓に戻るまで想像の10倍くらい時間がかることになることを。

「俺は、農業がしたかっただけなのに……!」

「ああつ、なんか先輩がさらさら崩れ落ちていく幻覚が!」



「ちよつと! 砦の中庭を耕しちやダメだつて言ったでしょ!? あなたの畑はあつち!」

「ハッ!? す、すまないヘルヴィ。土を見ると畑を広げたくなるのはオラみたいな農民

の倅の本農だでよ」

「都合が悪くなると故郷の言葉で誤魔化すのもやめなさい」
がんばれ転生者。

この世界の農業事情は別にお前の双肩にかかっていたりはしない!

我慢できずに駆けつけた国王陛下

「ほえー、本職相手に互角なんてすごいなあ、団長たち」

「そういうお前さんは参戦しなくてよかったのか？　銀色坊主に頼めば幻晶騎士の一機くらい都合してもらえただろうよ」

鋼の咆哮が、エーテルの轟風が王都の空にこだまする。

ここはフレメヴィーラ王国首都、カンカネン。近衛騎士団用演習場の入場ゲート。

演習場の中央では今まさに多数の幻晶騎士が走って飛んで跳ねて回っての激しい模擬戦が繰り広げられている。

今日は、なんかいつの間にか俺が所属していることになっている銀鳳騎士団にとって記念すべき日。

エルくんが開発した新型機テレスターレをベースにこの国の幻晶騎士開発機関、シルエットナイトラボラトリ国立機操開発研究工房が開発した新型量産機カルダトア・ダーシユのお披露目と、エルくんがさらに新規開発した幻晶騎士の模擬戦が行われている。

場所が場所、内容が内容だけあってこの場を集ったお歴々はすさまじい肩書のオンパレードだった。

主催者である国王、アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラ陛下はもちろんのこと、なんか偉いお貴族方。銀鳳騎士団と対する相手もなんかどう見ても精鋭で、しかも新型機を見事使いこなしている。

見た目からしてデカいし異形な人馬騎士、ツェンドルグの他、やたらデカい盾をサブアームでぶんぶか振り回したり、なんかかつとんで来る赤い二刀流だったり、それよりさらに早く飛びまわるエルくんの幻晶騎士に対し、初見でありながらしつかり対応しているのだからして。あの人たち、実はとんでもない精鋭なんじゃなかるうか。学生相手にめっちゃ必死だな国機研。

「いやいや、俺なんかじゃ無理だよ親方。デイトリヒたちと比べたら幻晶騎士の操縦技能はまだまだだし、それに銀鳳騎士団に入ってから日も浅い。ここはこうやって見学するのが一番さ」

「そんなもんかね。新型開発への貢献で言えば銀色坊主に次ぐくらいだと思っただが」と、いう試合を傍から眺めつつ必死で影に徹する俺。

ダーヴィド親方の言葉には笑って返したけど、その実必死だ。

ただでさえなんかエルくんに入られたつぽい昨今、このままじゃぶずぶと取り込まれかねない。なんとか存在感を失くし、フェードアウトしなければ……！

「いやいやそんな。それに、そもそも俺はド辺境出身の小心者な農民だよ？ 国王陛下

の御前に出るようなことになったら心臓止まっちゃうね」

「はっはっは、小心者つてのは完全に冗談だが、お前さんならそういうこともあるかもなあ」

「あっはっはっはっは」

だから、こうして試合にも出ず、隅っこにいるのがお似合いなのさ。

……そう思っていた時期が、俺にもありました。



「本日は模擬戦のご観覧、ありがとうございます。国王陛下にご紹介いたします。先日より我ら銀鳳騎士団に加わり、ツェンドルグの開発に貢献してくださいましたライヒアラ騎操士学園の騎操士学科所属、アグリ・ボトル先輩です」

「うむ、大義である」

ピッ、ピッ、ピッ、ピ——。

そんな感じで、心電図が止まる映像を幻視した。

な、何を言っているのかわからないと思うが、ありのまま今起こったことを話すぜ？
「ダーヴィド親方と『国王陛下と会ったら死ぬわ』と笑ってから数十分後、王城たるシユレベール城謁見の間で、後ろに控える銀鳳騎士団の面々から一步前、エルくんの隣で国王陛下に紹介された」。

何これ怖い。

「本日お見せしたツェンドルグの四脚制御系、並びに出力確保のため2基搭載したエーテルリアクターの同調と出力向上に大変寄与してくれました。きっと、これからも銀鳳騎士団での新型機開発において先輩の発想と技術はとても役に立つてくれることでしょう」

はい、終わりー！

俺の人生終わったよいまー！

エルくんにお買い上げされましたよチクシヨウ！ 国王陛下の前でこんなこと言われていまさら実家戻りますとか言えねえー!?

「アグリ、と言ったな」

「は、ははーっ！」

ひい、ついに陛下から直々に名前を呼ばれた！

「そう恐縮せずともよい。確か、おぬしの出身は我が国の東端、ユシツダ村であつたか」

「は、はいその通りでございます。な、なにか……う？」

うわスゴイ。しかも陛下の口からフレメヴィーラ王国端の端、村に住んでるころは特に気にする必要なかったからと誰も口にせず、ライヒアラに入学してから初めて知った俺の村の名前が出た。

「ということは、領主はモルゲン家であろう。かの家の先々代、〈鉄腕〉のマクシミリアンには昔、世話になってな」

マジかよ領主さま。

陛下が語ったところによると、まだ即位する前の若かりし頃、魔獣討伐のための遠征の折にうちの村の近くまで来たときの案内と先陣を務めたのが、先々代の領主さまだったらしい。

ちなみにそんな領主さま一族、家督と共に代々〈鉄腕〉の異名を継いでいるそうです。……その割に当代領主さまは蹴りを多用してた気がするけど。

「思い出すのお、魔獣共に囲まれ、その包囲を力尽くで突破するとなり、どちらが多く魔獣を仕留めるかあやつと競争したものよ。ふふふ、一晩かけてなお勝負がつかなかったのが昨日のことのようだわい」

そのとき、「小型魔獣は1点、決闘級魔獣は10点な！」的な会話が為されたらしい。年寄りの昔話は大抵盛られているものだが、陛下の側近で若い頃から付き従っていた

というデイクスゴード公爵が胃の辺りを押さえて頭痛そうな顔してるところからして、混じりけのない事実だったんだと思います。苦勞してますね。俺の50年後の姿みたくで涙が出ます。

「というわけで、おぬしのことは当代の領主に話をつけておいた。手土産に献上されたテレスタールを添えてな。その時手紙を預かっておる。読むがよい」

「……失礼いたします」

うわーい根回しばつちりで嫌な予感しかしなーい。

お付きの人が豪華なお盆的なものに乗せて持つてきてくれた、封蝋止めの手紙を開いて中身をささつと読む。

「村の麒麟児を取られるのは痛いかなーと思ってただけど、何この新型すごいイイ。お前これからこういうの作る騎士団に入るんだよな？ でかした！ たくさん作つてたくさん貢献して、新型機こつちに回して！ がんばれ♡がんばれ♡」

的な内容が、一応貴族の公式な手紙としての体裁と修飾を整えて書かれています。……これは、エルくんの気が済むまで銀鳳騎士団から出られないコースですわ。

「よかったですね、先輩！ これでまたたくさん幻晶騎士を開發できますよ！」

そして何より辛いのが、エルくんが俺に向けるまっすぐな笑顔。

こ、断れない……！ 眩し過ぎて断れない！ 世間一般的には紛れもなくシンデレラストーリーレベルの栄達だしね！

くそう、こうなったら本格的に農用幻晶騎士作ってやる。

村に帰るのが1年遅れるのか3年遅れるのかわからないけど、遅れた分を取り戻せるくらいのヤツを……！

「おお、先輩が燃えてる！ 僕も負けませんよー！」

「……先輩とエル、似た者同士だよなー」

「燃えてるエルくんもかわいい……でも先輩と一緒にだからこそっていうのがぐぬぬ……！」



そんなこんなで、銀鳳騎士団の場所と人と資材を一部借りて俺が構想していた新型機を現実のものとするになりました。

「そのことなんだけど、エルくん。確かツエンドルグはもう使わないんだっけ？」

「はい、貴重なデータが取れましたので、今後は単座型の量産仕様を開発して、それを配

備する予定です」

「じゃあこの胴体部分もらっていいかな。埃被らせておくのももったいないし」

「マジですか！ 先輩の新型がエーテルリアクター双発タイプ……これは面白くなってきました！」

という感じで、気前のいい団長さんがさぱつと提供してくれたのでそれをベースに作っていくことになりました。

「さて、手伝いに来てくれたみんな、まずはありがとう。とりあえず俺が作る機体は農業用です」

何言ってるんだこいつ、みたいな目にもめげず、新型を作ることにしました。

「モノの仕様はまとめておいたんで、まずはそっちの加工と組み立てをよろしく。システム面はこっちで用意しておくんで、定期的な進捗報告だけよろしくね。人手が足りなかったりしたら都合するから。あ、それから資材はあっちの倉庫にまとめておいたんで、必要になったら適宜持つて行って。許可はいらさないけど、資材管理はしっかりするんで持ち出し管理簿への記載を忘れたら怒ります」

さて、俺が作るのは四脚の獣型。

ツェンドルグは人の上半身を持つていたけど、農業の細やかな作業は直接人がする必

要があるので、幻晶騎士が入るとしたら伐採や開拓なんかの大規模かつ馬力のいる仕事になる。

そのため、要求される仕様は荒地や緩い地面でも踏ん張れるパワーのある四脚。

エーテルリアクター双発仕様のツェンドルグ胴体をもらったから出力は十分。あとはその辺をうまく動かすシステムが必要だ。

あと、一応この機体は銀鳳騎士団印のものになるわけだから、アリバイ作りのためにサブアームも付けておこう。

なんだかんだで農業の中で必要とされる作業は多岐に及ぶからその辺も開発させてもらうとして、下手に専用設計をするより共通規格を採用した方が後々便利かなー。

で、しばらく。

「先輩、とりあえず新型の足、仕上がったぜ」

「報告ありがとう、バトソンくん。えーと……うん、スケジュール遅延は許容範囲内、と。あー、でもそろそろ資材の在庫確認した方がいいか。よし、こっちのシステム終わったらスケジュール組み直すから、みんなには組み立ての準備進めるように伝えてもらえるかな」

「おう。……先輩は幻晶騎士の制御術式の構築かい？」

いやー、銀鳳騎士団のナイトスミスのみならず優秀。あと素直。

いきなり入って来た俺の下につけられたつてのにさばさば仕事してくれる。

……なんか、たまにエルくんを見るとときと同じ呆れたような諦めたような目で俺を見るのだけはやめて欲しいけど、まあ気にしたら死ぬから気にしない！

そんな俺がいまやっているのは、ツェンドルグの機体制御術式を元に獣型のものに修正する作業。今日までに続々出揃ってきた各部のデータをもとに見直している最中だ。

……それにしても楽だなこの作業。

「うん、ツェンドルグのころと比べて重心位置や出力が変わるからね。……まさか、その辺の作業がほぼステータスの設定変更だけで何とかなるとは思わなかったけど」

「……俺は制御術式の方は詳しくないんだけど、それってすごいことなのか？」

「すごい、というか天才の仕事だね。アディちゃんもキットくんがメインだったっていうツェンドルグ開発に関わったところから思ってたことだけど、エルくんが作った基礎部分はすごいよ。こんなに綺麗な制御術式は見たことがない。適切に機能が分割されて、整理されていて、機能の追加と削除が簡単なように何もかも計算尽くで構築されてる。エルくんが作った制御術式は今後1000年使われるかもね」

「そ、そんなにかよ……」

バトソンくんの頬がひきつる。

だがその気持ちはむしろ俺こそ強い。短期間でいろいろな幻晶騎士や装備を開発したということは、当然その制御のための術式も新規に開発する必要があるということ。それを主導的な立場で作ったエルくんとそのシステムだが、これがまたすさまじい。

世に天才プログラマーと言われる人は存在するが、エルくんの場合は特に人と一緒に何かを作るときに力を発揮する。

例えるなら、容量に空きがあつたからと15パズルを仕込んだりする代わりに複雑過ぎて他の誰も手を入れられない代物ではなく、いまあるものを活かしながら作つたら4年かかるシステムを、一から作つて半年で完成させるタイプだ。

コードが美し過ぎて惚れそうです。

とまあそんな感じであれこれと。

「先輩！ 今日もいろいろ新しい装備を設計したんで意見聞かせてください！」
「……はいはい。とりあえずお布団敷こうね。また寝ちゃうといけないから」

毎晩のように、山ほどの設計図を抱えたエルくんがぐぐふぐふ笑いながらこれはこう使いたいここにこんな機能を付けたいと語りに来るんで、最近すっかり寝不足です。

それでいてエルくんはまだ子供だからか、ある程度話すと突然電池が切れたように寝ちゃうし。仕方ないから自分の部屋にエルくん用の布団用意しましたとも。

「布団の上でうつぶせになって足をばたばたさせながら資料読むのやめなさい、マシユ
リリイくん」

「先輩、僕の名前はエルネスティ・エチエバルリアですよ？」

「失礼、噛んだ」

なんだろう、この一切遠慮なく人の部屋に馴染んでる子。

……もしかして、今度エルくんちのご両親に挨拶しに行った方がいいのかなあ。

でも、最近アデイちゃんが俺を見る目が怖いしなあ。



そしてみんなの頑張りが実を結び、予定の通りにその日が訪れる。

「さあみなさんご覧ください！これが先輩の設計による新型機、〈グランレオン〉です
！」

抜けるような青空の元、ライヒアラ騎操士学園のアリーナに銀鳳騎士団の団員が集つ
ていた。

エルくんが参集をかけた目的はその言葉の通り、俺が中心となって開発させてもらっ
た新型機を団員達にお披露目するため。

だからこうして、俺は新型のコックピットで客席のみんなの視線を一身に集め、なんかおなか痛くなってきました。

「特徴は何と言っても見ての通りの獣型！ さすがに幻晶『騎士』とは呼びづらい形状なので、先輩と協議の末幻晶獣機シルエットピストと呼称することになりました。……はああ、カッコいいな。こういうのもいいなあ。特にこの太くて逞しい脚……素敵♡」

説明役はエルくん。幻晶獣機の足元やら背中やらを魔法まで使ってちよこまか飛び回りながら、そりやもう嬉々として説明している。

「ただ途中で時々べったり張り付いて頬擦りしてる。団員達の目が生暖かいぞエルくん。「また始まったよ」みたいな顔で見られてるぞエルくん。」

「詳しいスペックについては、みなさんお手元の資料をご覧ください。機体のベースは先日国王陛下にもお披露目した複座型ツェンドルグ！ その胴体を使用しているためエーテルリアクター2基分のエネルギーを詰め込み、それでいて騎士要素である上半身をオミット。その結果全高は通常の幻晶騎士の腹部分ほどまで。重量は幻晶騎士約1.5機分と、ツェンドルグが2機分だったことを考えると大幅な軽量化に成功してます。さらに見てくださいこの脚部！ 太いでしょう逞しいでしょうカッコいいでしょう！ 安定性と瞬発力を重視するためにツェンドルグ時とは配置も構造も大きく変更してあるため、どんな動きを見せてくれるのか僕も楽しみです！ 装備に關しましては背部

に幻晶騎士と共通規格のサブアームを採用。通常はブレード2本と射撃用の杖を2本装備しているのですが、遠近どちらにも対応できる一品となっております!!」

すごいな、エルくん。ここまで一気にしゃべり切った。しかも早口で。良く舌噛まないな。まるで、大好きなシヨタキヤラについて語る女性声優さんのようだ。

「そしてそしてえ！　さらにこの機体のイイ所！　見せてあげてください、先輩！」
「ああ、うん」

なんか客席のみんながドン引きしてる気がするな！。

つか勘弁してよ。エルくんがコックピットに張り付いてイっちゃった目でバンバン叩きながら指示してくるの、控えめに言ってホラーなんだけど。

まあとにかく、団長のご要望に応えなければなるまい。

エルくんたつての希望で付けた、この機能。
エルくんがひらりと飛び降りたことを確認して。

操縦桿から指令を伝達。特に難しい操作は必要ない。

エーテルリアクターの出力を上げ、グランレオンが首を俯け、四肢を踏ん張り。観客席で、何事かと身を乗り出してしまった団員に心の中で謝りながら。

——ガオオ!!!

天に向かつて、吼えた。

「うおわー!？」

「ほ、吼えた!? 幻晶獣機が!？」

「わっはー! すごい、すごい迫力ですたまりません!!」

そうだねすごいね。喜んでるのエルくんだけで他はみんな驚いてひっくり返ってるよ。

……まあ、腹に響くこの咆哮がちよつと気持ちいいことは、認めるけど。

「……あー、すまない団長。吼えたのはわかった。とてもよく分かった。度肝を抜かれた。が、その機能にどんな意味が?」

いち早く立ち直り、エルくんに疑問を呈したのはエドガー。さすが委員長体質。冷静で的確な質問だ。

どのくらいの確かってーと、エルくんの目が待ってましたとばかりにギラつくくらい。

「意味ですか。いいところに気が付きますね。先輩の機体に咆哮機能をつけてもらった理由。それは……」

「そ、それは……?」

なんとか椅子に這いあがったデイートリヒも固唾を飲み、なんだか真面目な意味があ

りそんなキメ顔のエルくんを見つめ。

「カツコいいからです!!!」

「……そうか」

「ツェンドルグの時も同じこと言っていたな」

「そうよね、私達の団長さんだもんね」

諦めたように、遠い目をした。

すまないな、エドガー、デイトリヒ、ヘルヴィ。

この子エルくんなんだよ。知ってると思うけど。

まあ、そんなこんなで俺の新型のお披露目も行われた。

この後アリーナの中を歩き回ったり走り回ったりジグザグに走って見せたり跳んだり穴を掘ったり。

『うひょー！ ナニコレめっちゃ土掘れる！ これならバリバリ畑が広がるぜえー！』

「ちよ、こらー！ アリーナ掘り返したらあとで戻しておきなさいよ!」

つい地面を掘り返すのに夢中になってヘルヴィに怒られたりもしたけど、これにて全

工程終了。

この機体は銀鳳騎士団の所有物という扱いになるからさすがに村へ持つて帰ることはできないだろうけど、実際に四脚の幻晶獣機を作った、という実績は何物にも代えがたい経験になった。

あとは村に戻り、今回得られたノウハウをもとにどうにかして古くて廃棄寸前の幻晶騎士でも払い下げてもらって、四脚の農業用に改造できたらいいな！。

そう、思っていたんだ。

今ならわかるよ、この時の俺がとんでもない甘ちゃんだったって。

気に入ったおもちゃを手に入れた子供はどうするか？

まずは楽しむだろう。愛でるだろう。

そして、そのあとは？

……誰かに自慢するだろう。



「それでは、次は幻晶獣機の模擬戦です！ お相手を務めていただくのは、我らが銀鳳騎

じゃないですかこれえええええ!!

「さて陛下、今回の試合の見所はどのあたりだとお考えですか？」

「やはり、なにより興味を引かれるのは幻晶獣機がいかなる戦いを見せるか、そしてあからさまに幻晶騎士とも魔獣とも異なる幻晶獣機に対し、幻晶騎士がいかに対するか。それに尽きる。……獅子を象っているのだ、期待が高まるな」

ひいひい、期待しておられるうううう!!?

「エ、エドガー。ディートリヒ……」

「……みなまで言うな、アグリ。お前の気持ちはわかっている」

「お、お……！ エドガー！」

さすが、さすがだぜ第一中隊長！ 俺の心を読んでもくれるとは最近リーダーシップが出てきたね！ そう、ここは一つお手柔らかに……！ 立ち合いは強く当たってあとは流れでお願いします！

「国王の御前だからとて、手を抜くなど騎士の恥。お互いに全力で戦うということだな

!!」

「……ディートリヒ……！」

「あー、すまんアグリ。現状それしか手はない。諦めろ」

「うおおああああ……!!」

ダメだったよ。

ちきしようエドガーの脳筋め！ 騎士として正しいと思うけど少しは友達として手心加えて欲しいなあ！

「さあ、先輩方も闘志十分のご様子！ 会場もいい感じに盛り上がってきました！ それでは、始めていただきましょう！」

エルくんにはこれのどこが盛り上がって見えるのか割と真剣に疑問だけど、まあ気にするだけ無駄だろうか。

前の客席に片足乗せてノリノリで試合を始めようとしてるし、こりやもう腹くくるしかないな。国王陛下も見てることだし、そこで無様を晒したらそれこそ俺の首が危ない気さえする。

仕方ない。

覚悟、決めるぜ。

「それでは！ シルエツトファイ 幻晶格闘！ レデイイイイ、ゴオオオオオ!!」

「ところでエルネステイよ、その掛け声はなんだ」

「我が銀鳳騎士団内で採用されている試合開始の合図です、陛下」

ちなみにこの後、ライヒアラ騎操士学園を中心にこの掛け声がフレメヴィーラ王国中に流行つて後にスタンダードとなるが、それはまた別の話である。



「ゼーっ、ゼーっ！ 勝った！ 第三部完!!」

「いやはや、まさか2度の試合どちらも勝つとはな」

「素晴らしい試合でした！ みなさん、先輩方に盛大な拍手を!!」

わーっ、と歓声と鳴りやまぬ拍手が花吹雪のように俺たちに降り注ぐ。

いやあ、エドガーとディートリヒは強敵でしたね！ いやマジで！ 幻晶獣機なんてあいつらにとって初見の機体じゃなかったら絶対ボコボコにされてたよ！

まず、エドガーとの試合。

相手は堅忍不拔の騎士だけに、幻晶騎士の防御も厚い。グランレオンは一応武装こそしてあるものの幻晶騎士相手の戦闘でどれだけのことができるかは未知数もい所

だったので、まずはとりあえず機動力でかく乱。

この機体、飛んだり跳ねたりが実はすごく得意だったりする。ツェンドルグの出力に軽量化が合わさって、そりやもう猫のように飛んで跳ねて捻って回る。

それで翻弄した後、正面から突撃して剣の振り下しを誘発。それを背部ブレードをクロスさせて受け止めて……目の前に並ぶ幻晶騎士の足に、前足で足払いしました。

「派手さはないが、四脚の安定性があればこそその技と言えるだろう。普通の幻晶騎士であれば、つばぜり合いをしながら相手の足を狙えば己が突き崩されることになるう」

とは国王陛下下のコメント。笑ってくれてたので卑怯とは映らなかつたみたい。やったぜ。

「では、エドガー先輩にもご感想を窺いたいと思います。グランレオンとの戦いはいかがでしたか？」

「完敗、だな。背が低いからまず剣を振るつても有効になる太刀筋が少ない。ならば魔獣相手のときのようにと意識したのだが、人の知恵と戦いを知っているだけにそれともまた違った感触だった。パワーとスピード、いずれも高いレベルだ。少なくとも敵に回したくはない。……加えて、獅子の姿というのも無視できない。幻晶騎士に匹敵する大ききさで牙を剥き、吼えられるとそれだけで身が竦む。咆哮には確かな意味があつたぞ」

続くデイトトリヒ戦はもつとキツかった。

エドガーが足払いを食らうのを見ていたデイトトリヒはそれを警戒して、最初からスラストアーを駆使した高速戦術を展開。

アリーナ狭しと飛び回って何度となく斬りつけてきた。

ので、びよんこびよんこ避けまくる。そしてその最中に気付いたのだが、どうやらグランレオン、全力で突つ走るとグウエラリンデがスラストアーで飛んでくるのとほぼ同じ速さで走れるっぽい。

そこで、あえてグウエラリンデの突撃を誘って背中を見せ、壁に向かって全力疾走。このままでは俺が壁に激突するのでは、とデイトトリヒが戸惑っただろうタイミングで後方へ杖から射撃を放つ。

牽制だと思ひ込んだようだが、さにあらず。当てる必要はない。グウエラリンデの足元に狙い通り着弾した結果舞い上がった砂煙による視界の遮断こそが俺の狙い。

デイトトリヒから見えなくなっているうちに壁に向かって飛んで、ぶつかるとは必ずの壁に足を突いて三角飛び。砂煙を突つ切つてすぐ、目の前に迫るこちらへ驚き避ける間も与えず爪で殴りつけ、大破判定勝ち取りました。

「というわけで、デイトトリヒ先輩も一言お願いします」

「アグリのやつ、普通の幻晶騎士を使うときより強いではないか！ エーテルリアクター双発の出力と、それを四脚で駆使するというのがどういうことか思い知らされた。……それと、エドガーも言っていたが獣型というのは独特の迫力があるな。最後に爪を振りかぶって飛んできたときはさすがに恐ろしかったぞ」

いずれも紙一重。たぶん二度目は通じない。

!!
ただどその勝利、国王陛下の前で勝ち取れてよかった……！ これで首も繋がるはず

「アグリ・ボトル。エドガー・C・ブランシユ。デイトリヒ・クーニッツ。いずれも見事な戦いであった。我が国の次代を担う騎士たちにこれほどの力が育っていること、余は心より嬉しく思う」

試合後。

ライヒアラ騎操士学園の学園長室にて国王陛下から直々のお言葉を賜ることに。

部屋に入って来たときの学園長先生の顔、忘れられないよね。めっちゃ驚いて椅子から転げ落ちてたし。

つーかもしかして学園長先生にすら言わずに来てたんですかフットワーク軽すぎで

すよ国王陛下。

「さて、アグリよ」

「ははっ」

一通りの感想が終わったのち、やはりというべきか俺の名が呼ばれた。

怒られないかな。一応勝ったしそんな卑怯でもなかったし、大丈夫だよね……？

「幻晶獣機、だったな。見事である。性能もさることながら幻晶騎士にまだこれほどの可能性があると示したこと、紛れもなく歴史に残る偉業である。これからもエルネスティを支え、精進するがよい」

「……仰せのままに」

セーフ……！

なんか俺の人生銀鳳騎士団に固定されたような気もするけど、むしろ明日の朝日が拝めることを喜ばないとだよね！

「そこで、だ」

……ん？

これで終わりじゃないの？ まだなんかあるんですか国王陛下!?

「エルネスティのそれともまた異なるおぬしの才気と発想、余も大いに興味を引かれるところである。次の新型機、楽しみにしておるぞ」

「あつ、それなら先日言つてたマギウスジェットスラストを使った機体なんてどうでしょう！ 多分、他の幻晶騎士では不可能なことができるようになりますし！」

「ほほう、それは期待できそうだ。では、頼んだぞ」

……ああ、やつちまつたぜ、と俺は己の愚かさを恨む。

せめて、普通の幻晶騎士っぽい機体を作っておけば、まだしも言い訳のしようがあつたかもしれないのに……！ これ、エルくんに加えて国王陛下からも完全にロックオンされてない!?

これでまた、村へ帰れる日が遠ざかった。

そんな俺の心境を一言で表すならば、もうこれしかない。

Oh、農……！



「アグリ、正直に答えて。……朝起きたら倉庫の裏に一反くらいの畑が出来てただけど、あなたの仕業ね？」

「……………」

「沈黙は肯定と受け取るわよオラア！」

「ああつ、やめてくれヘルヴィー！俺も知らない！多分俺だけど記憶がない！やつたとしても無意識だ！もしくは寝ぼけて、つい！」

「余計悪いわよ！」

なお、幻晶獣機が農作業にも使えることはきっちり確認していた模様である。

農業を、革命する力を！

「ところでエルくんや、モートルフトー機もらつていい？ 村に送つて農業に使つてもらおうと思つて」

「もちろんかまいませんよ。……あ、でもそれならもう何機か送つたほうがいいのでは？」

ある日のこと。

最近あんまり土いじりしてないな、と思つたら唐突に村のことが気になりだした。今の時期だと、きつと新しい開墾の計画を立てながら追加の肥料の相談とかしてるところだろう。くそつ、混じりたい！

そんなわけで、とりあえず俺の存在を忘れられないようにするためにモートルフトを送ろうと思いついた。

幻晶甲冑、モートルフトタイプ。

幻晶甲冑の中でもエルくんたちが使うハイスペックにして魔法能力が高くないと扱えないモートルフトタイプ。小型のマジウスエンジンを搭載して魔法面での操縦をサポートして、人間のサイズを一回り大きくした程度に収まり、重量物の搬送

などに適したタイプ。

そう、つまり農業のために生まれたような幻晶甲冑だ。そうに違いない。これぞ農業の神が俺をライヒアラに送り、エルくんと出会わせた意味そのものだ。多分！

……いやね、幻晶騎士や幻晶獣機が農業に向いているという持論は揺るがないんだけど、銀鳳騎士団として開発やらなにやらに携わると幻晶騎士のコストやらエーテルリアクターの希少さその他が身に染みてわかってきて。

エルくんの騎士団だからその辺あまり気にせず使える状態ではあるけど、これを農業用に普及させるとか不可能に近い。

その点モーターフトなら比較的量産もしやすい。まさに福音と言つていいだろう。

農業を、革命する力を！

「いや、それには及ばないよ。1機送りつければ、あとは村の人たちが勝手に増やすだろうから」

「増やす。……もしかして、他は全部現地で新しく作ると？」

「うん。うちの村、基本的に『買うって発想がない』から」

そんなものでさえ、うちの村の人たちならホイホイ自分達用に作ってくれるに違いない。あまりに自給自足が過ぎて外との経済的な関りが少々不安だったけど、最近俺が銀鳳騎士団所属になったことで領主さまも目をかけてくれてるし、村に残してきた同年

代の友人たちも教育の成果あつて簡単な計算くらいはできる。きつと、俺が村に帰るころには見違えるほどに発展しているだろう。

「うう……俺も村の開墾手伝いたい」

「ま、まあまあ先輩落ち着いて。ほら、その寂しさは幻晶騎士開発で埋めましょう!」

目蓋に映る故郷の畑が眩しい今日この頃。

俺は変わらずエルくんや国王陛下に求められるがまま幻晶騎士のようなそうでないようなものの開発に勤しんでいます。



そんな俺の、現在の開発テーマは「空を飛ぶもの」。

エルくん発明の魔導噴流推進器マギウスジェットスラスターがあるから推進力には困らないし、既にこの装置を使つて幻晶騎士を飛ばす方法、並びにその際のバランス制御に関するノウハウは得られているから、全くのゼロから作り出すのよりはよほど楽なはずだ。

まあ、そうは言つても地に足をつけた幻晶騎士と、完全に空を飛ぶものとは根本から違う。フレーム設計は新規になるんだよなー、と思ひながら図面を引いていた、ある日のこと。

「先輩!!」

「なんだいエルくん」

資料とか一か所にまとめておいた方がいいよね、ということに俺とエルくん、あとついでに各種パーツを新造するときには図面を引くナイトスミスの人たちが使っている製図室的な部屋の扉をドバンと開いて、エルくんがやって来た。

そこまではいつものことだ。何か別のことをしている最中に画期的な構造を思いついたりすると、時に魔法すら使つてすつ飛んできて作業机にかじりつき、狂気交じりの真剣な目で図面を書き始めるのがエルくんという子なのだからして。

だが今日はちよつと様子が違う。

片手に図面らしき紙を持って、ずんずん俺の方へ近づいてきて……。

ドンツ、と手で壁を打つ。

「先輩に、折り入つてお願いが」

「うん、わかつた。とりあえず話を聞くよ。話を聞くから、壁ドンやめて」

俺を壁際に追い詰め、片手を壁について顔を寄せる、いわゆる「壁ドン」状態でなんかお願いされました。

やめて！ エルくんのさらつさらの髪の毛が顔にかかってくすぐりたい！ あと扉に隠れてアデイちゃんが見てるから！ 完全な無表情で！ シャレにならないくらい

怖いから!!

「お願いというのは他でもありません。先輩がいま作っている空を飛ぶための幻晶獣機の脚部機構を、この通りにして欲しいんです」

「脚部? 着陸脚と状況次第では支持架に使うくらいしか想定してないから、よつぽど変なものでもない限り平気だと思うけど、これは……もしかして、ドッキング機構?」

「さすが先輩、お目が高い! 一目で理解してくれるなんて!」

で、拝見した図面に書かれていたその意味。
どうやらエルくんは今日も絶好調なようです。

「じゃあじゃあ、ついでに翼が光るようにできませんか?」

「できなくはないかもしれないけど、マナの無駄にしかないから却下で」

「そこをなんとか! 僕の前前前世あたりが光る翼を求めているんです!」

「知らんがな」



そんなこんなの開発を経て、色々試験や山のような修正、時に部品の作り直しを経て、やってきました実地試験。とりあえず人というか俺を乗せて飛んでみることになった。

のだが。

「何度も言わせないでください、先輩。これは銀鳳騎士団団長としての命令です。いい加減に聞き分けてもらいたいものですね」

晴天で風が少ない日を選び、オルヴェシウス砦から少々離れた草原に引き出された鳥型の幻晶獣機。今日はひとまずここからとりあえず飛び立ち、無事に着陸することを目標としているのだが、そんな俺や立ち会ってくれているエドガー達各中隊長の前で、エルクくんが冷たく言い放った。

「いや、ただどねエルくん」

「だけでもディケイドもありません。……仕方ないですね、もう一度だけ命じます」
はあ、とため息を一つ。

わがままな子供を諭すように滾々と。

「……この機体の初飛行テスト、僕も一緒に乗ります！」

「危ないからダメだつってんだろ団長」

自分自身が全力のわがままをぶちかましていた。

「いやーでーすーいやーでーすー! 僕も乗ーりーたーいやーでーすー!」

あ、ついに寝転がって手足をじたばたさせ始めた。

事の起こりは、飛行試験をするとエルくんに伝えたときのこと。

そりゃあ重要な工程なわけだし、団長への進捗報告は必要不可欠。てなわけで農民生活で培った農業センスで天気を読み、よさげな日取りを決めてそれを伝えたのだが。

「じゃあ、僕も一緒に乗りますね!」

「は?」

と、いうわけだった。

ちなみに、当日となりここに至るまでの間にも「事前にコックピットに忍び込んでおく」「見つかって引きずり出されそうになると機体にしがみついて抵抗する」「引つ張る俺の手を噛む(ただし歯型がつく程度の甘噛み)」などなど狼藉の数々を働き、ついに騎士団長としての権力まで持ち出した。

そんなことまでして、エルくんが団員に嫌われないか心配だ。

「駄々こねてるエルくん……かわいい!」

訂正。そんな心配いらなかったわ。

たとえ権力振りかざしてもアデイちゃんは嬉々としてエルくんを愛でるに違いない。

「ふう、仕方ありませんね。中隊長のみなさん！先輩を説得してください！」

お、今度は数に頼りでした。

この場に顔をそろえたエドガー、デイトトリヒ、ヘルヴィ。ライヒアラ時代の同級生でもあるこの三人からお説教されたらさすがに俺だって折れるかもしれないな。目の付け所はいい。

「いや、ダメだろう」

「なん……!?!」

「アグリの言葉ではないが、さすがに初試験ではな。危険に過ぎる」

「です……!?!」

「ほら、私達つて一応エルくんを守るためにいるわけだし?」

「とお!?!」

オンドウルルラギツタンデイスカー！と叫んで膝から崩れ落ちるエルくん。

甘いな、三人ともエルくと違って手段のために目的を忘れたりはしないのだよ。

「……そこを何とか、お願いしますよ先輩。フーンフーフーフフフフ、フーフーフフフフ」

ン♪」

そして今度はおねだり作戦か。

後ろ手に手を組んで、体を揺らしながら上目遣いで寄つて来る。

しかも、ますます頭に竹とんぼ的なナニカを刺して空を飛びたくなるような鼻歌を口ずさみながら。ちゃんと歌うのはナシで頼むよエルくん。

そのテの趣味の人だったら一瞬でころつと言うこと聞いてしまいそうな有様だが、しかし甘い。そつちがその気ならこつちにも考えがあるぞ。

指を、パチン。

「アデイちゃん、ゴー」

「エルくんかわいいいいいいいいいい!!!」

「こつふう!? アデイ!?」

さつきからエルくんが繰り出すいろいろな表情に荒い息を吐いていたアデイちゃんに許可を出すと、弾丸のような速度で突つ込んでエルくんの腰のあたりにタツクルをかました。うーん、重心が低くていいタツクルだ。体重差もあつて真横に吹つ飛んだエルくんがちよつと心配だけど。

「よし、これで安心だ。じゃあ行つてくるわ」

「気を付けてね。私たちも一応幻晶騎士で待機しておくけど、あんまり遠くに行かれた

ら万が一のときに助けられなくなるわよ」

「お前のことだ、考えられる限りの対策は講じていると思うが、無事を祈っているぞ」
「団長殿も我慢の限界だろうからな。さっさと完成させて乗せてやれ」

「ああ、がんばるよ」

とはいえ今がチャンス。

エドガー達に後を頼みつつ、俺は鳥の姿をした幻晶獣機へと乗り込んだ。

「ああああああ、待って！ 待ってええええええ！」

「エルくんエルくんエルエルエルルルルくくくくんん！ かわかわかわわわわわわわわわ!!」

……なんか、腰にアデイちゃんをしがみつかせたまま必死の形相で這いずって来るエルくんと、そんなエルくんの尻の辺りに顔を埋めて高速頬擦りしてるアデイちゃんという正気度下がりそうなものも目撃してしまったことだし、彼らの精神安定のためにも成功させないとな、うん。

ちなみにその後、幻晶獣機の飛行は見事成功。

まだ試すことや追加の装備開発、この機体がどの程度の性能を発揮できるかの測定など山ほど作業は残っているが、ひとまずの目処は立ったと言える。

代償というかなんというか、拗ねたエルくんはこのあと三日くらい口きいてくれなかったけど。



その後もエルくんは絶好調だった。

具体的には、国王位をリオタムス殿下に譲って先王陛下となられたアンブロシウス様と、その孫であるエムリス殿下から新しい幻晶騎士の開発を依頼されて作ったり。

「新型幻晶騎士はフレメヴィーラで生まれました。テレスターレを奪った賊の発明品じゃありません、我が国のオリジナルです。カザドシユ事変では少々後れを取りましたが、今や巻き返しの時です。……パワーがお好き? 結構。ではますます好きになりましたすよ。さあさあ、どうぞ。銀鳳騎士団のニューモデル、ライオン丸ゴルドリーオとタイガージェルジョーバティエーガです。快適でしょ? んああ、おつしやらないで。装甲は厚め。でも装甲の軽量化なんて

見かけだけで、夏は暑いし、よく滑るわ、すぐひび割れるわ、ろくなことはない。結晶筋肉もたっぷりありますよ。どんな脳筋力白癡の方でも大丈夫。どうぞ回してみてください。

……いい音でしょう? 余裕の音だ、馬力が違いますよ」

みたいな感じのセールストークで引き渡してきたらしい。

エルくんも満足、陛下と殿下も大満足だったと聞いた。

と、暢気に開発だけやっていられたらよかったのだが、俺たちの所属は銀鳳「騎士団」。新型機開発の結果保有することになった戦力はそれなり以上で、時に戦力として頼られることもある。

たとえば魔獣出沒の際の討伐なら学生時代から普通にあつた話。

……もつとも、あそこまでの規模の魔獣討伐することになるなんて、さすがに思つてもみなかったけど。



「害虫殺すべし。慈悲はない。イヤーツ！」

「アグリのやつ、なぜ殻シェル魔獣狩りにあんなに熱心なのだ？」

「ほら、魔獣つて畑を荒らすから……」

「積年の恨みというヤツだな。……オルヴェシウス砦にいつの間にかできていたアグリの畑にだけは注意しよう。うっかり幻晶騎士で足を突っ込んだりした日には何をされるかわからん」

銀鳳騎士団の役目は新型幻晶騎士の開発。

エルくんの趣味は最強の一機を作ることに注がれているが、量産型もいいですよね！
という愉快な嗜好をしているため、結果として現状銀鳳騎士団が保有する戦力はフレ
メヴィーラ王国内でも屈指のものになっている。

しかも設立から間もなく、国王直轄。構成員は身分の貴賤を問わずライヒアラ騎操士
学園直送ということで、そりやあもうしがらみのない戦力であると言える。

そんな出自を見込まれて、ある日舞い込んできた先王陛下からの命。

それが今俺たちの成している仕事、とある場所に向けて進行中の殻獣の大規模な群れ
の退治だった。

ギガントガーデン

巨樹庭園と呼ばれる、幻晶騎士と比べてもやたらめったら巨大な樹木からなる森の中
に突如現れた殻獣の群れ。蟻のような生態を持つこの魔獣の習性の一つである、女王の
巣分けが行われたらしく、信じられないような数の殻獣が大移動を開始したのだとい
う。

当然、その進行方向にあるものはただでは済まない。すぐにも国軍を派遣するべき事
態だ。

……が、なんでもその進行方向とやらが機密性の高いところらしく、色々懸念される
従来の戦力ではなく、少数精鋭の銀鳳騎士団にお鉢が回って来たわけだ。

なので、俺は魔獣を狩る。

俺がこの世で一番好きなことは農業。そしてその次に好きなことは、いつぞや村の畑を焼き腐った魔獣共の殲滅です。

「食らえ、殻獣ボンバー！」

「なるほど、殻獣を殴り飛ばすと、殻獣同士の甲殻がぶつかって破損する、と。いい手だな。……第一中隊、見ていたな！ 武器は周りに山ほどある！ 投擲という人の英知を見せてやれ！」

というわけで、手近な殻獣をグランレオンの前足で弾き飛ばし、直撃した碎デモリッション甲殻シェルケースの甲殻にひびを入れ、間髪入れず飛び掛かって爪とブレードでザクザクと傷口を広げたところに法弾を叩き込む。

炎熱系の術式は、強固な殻に守られている内部を焼き尽くし、殻獣のつぼ焼き一丁上がりだ。

ククク、昔村を襲ったのは殻獣じゃなかった気はするけど、魔獣であるという一点のみで俺にとつては十分すぎる理由になる。村を襲ったのはいいとしても畑を焼いた恨みは忘れてないぞ……！

「先輩、この場はひとまず戦線を再構築できたので、僕たちは森の奥へクイーンの排除に向かいます。先行偵察をお願いしますか？」

「え、俺？」

「はい。ツェンドリンブルの3式装備も十分な機動力はありますが、森の中の入り組んだ地形では先輩のグランレオンが一番踏破力が高いはずです」

「あー、まあ確かに。それじゃちよつと行つてくるよ。……すぐついて来てね? 俺一人でクイーンの手とか無理だからね?」

でもさすがに旅団級のサイズと魔力が予想されるヤツの相手は勘弁な!

全く、誰か一人でも幻晶獣機に乗ってくれる団員がいればよかったのに。

一応何人かに試してはもらつたんだけど、操縦感覚の違いと飛んで跳ねてを多用する必要からすぐに扱うのは無理だと言われてしまった。まあ、操縦席でげろりんとしなかつただけマシか。

そんなこんなで、現在銀鳳騎士団でもグランレオンを万全に操縦できるのは俺とエルくんだけです。

エルくんは最初に乗ったときからそりやもう楽しそうに扱つてたよ。

興奮のあまり、外部スピーカーから聞こえる言葉が。

「qkde! qkde! g@, ffffff!」

としか聞こえなかつたけど。なんて言つてたんだらうね?



「なあエル、先輩一人で行かせて大丈夫なのか？」

「もちろん、大丈夫です。ほら、行き先は木に刻まれた爪痕でわかりますし」

「そういう問題じゃないと思うけど……」

森の中を行く、エルとアデイ、キッドの3人。ツェンドリンブル2頭引きの3式装備は巨大な木々が幻晶騎士の侵入を可能にするスケールと足元の安定を誇る巨樹庭園の中を、殻獣を蹴散らしながら進んでいく。

その際の目印は、巨樹に刻まれた傷。先行しているアグリのグランレオンが付けたものだ。

まあ、なんかあからさまに幻晶騎士の身長よりも高い所に真横に刻まれていたりするところからして、あそこまで飛び上がって木の幹を蹴るときついにつけて行ったのだと思われるが。

幻晶獣機が飛びついても揺るがない壁がそこかしこにあるこの森の中は、なるほど確かにグランレオン向きの戦場なのかもしれない。

——ガオオオオオオオオオオオオオ!!

「あ、あの鳴き声……!」

「間違いありません、グランレオンの咆哮です。どうやら先輩がクイーンを発見してく

れたみたいですから、急ぎましょう!」

「おう!」

その甲斐あつてか、エルの頼んだ通りに一足早く女皇殻獣を見つけてくれたようだ。かくなれば速やかに合流しなければアグリも危険だ。アデイとキッドはツェンドリンプルを加速させ、森のさらなる奥を目指し。

「うぎやあああああこえええええええええ!」

巨樹庭園の木々と見まがうほどの巨体を誇る女皇殻獣の頭に乗し、ガスガス爪で殴りつけているグランレオンを見た。

「先輩、お待たせしました!! 今すぐ助太刀します!」

「ありがとうエルくん! こいつの足めちやくちや硬いから気を付けてね!」

「……ていうか、先輩はどうやってあそこまで登ったんだ?」

「怖い怖いって言ってるけど、あれ多分女皇殻獣もそうだけど高い所に上って降りれなくなつたことも言ってるよね」

よくよく周囲を観察してみれば、女皇殻獣を取り囲む木々で螺旋を描くように新しい爪痕が見える。おそらく木の幹を足場にあそこまで飛び上がったのだろうが、本当に無茶をする。アデイとキッドはため息をついて、多分これから確実にアグリ以上の無茶

を、それも嬉々としてやらかすだろうエルを戦場へと運んで行った。



「ふう、女皇殻獣は強敵でしたね」

「そりやまあそうだけど、なんかその言い方だとムカつくぞ先輩」

その後、エルくんが大活躍して見事女皇殻獣を撃破。

あとは主を失って統制が取れなくなった殻獣たちを元の防衛戦力である、銀鳳騎士団お披露目時に模擬戦の相手をしてくれた人たち——アルヴァンズ、というらしい——と一緒に残敵掃討をして、彼らが所属する砦に間借りして一息をついた。

とは言っても、砦もなんだかんだ被害が出ているので、銀鳳騎士団はツェンドリンブルの輸送力と機動力を生かして資材をかき集め、砦の補修を手伝うことになった。

「はい資材置きますよー」

「オーライオーライ、そこに下してくれ！ ……それにしてもあの四足、こういうときにすさまじく便利だな」

当然、グランレオンも本領発揮だ。こいつはむしろ戦闘よりもこういう時こそ役に立つ。

四足の馬力で大量の荷物を引き、安定感のある荷物運びはアルヴァンズの人たちにも引つ張りだこだった。

ついでにいろいろ頼まれる合間に砦の隅の土を掘り起こして、こつそり持ち込んだ巨樹庭園のよく肥えた腐葉土を持ち込んで畑化する極秘計画も万全……！ 砦なんだから自給の方策も必要だよね……！

「はーい埋め戻しておくわねー」

「ヘルヴィの鬼ー!?!」

まあ、あつさりその辺の野望は潰えただけだよ!!

ちなみに、このあと要塞の人たちのご厚意で正式にこじんまりした畑を作らせて貰えました。わーい。

その後、どうやらこの場所の防衛に俺たちが駆り出されたのは、この砦が守っているものが極めて重要かつ機密性が高く、ついでにエルクンの望むものに深い関係があるかららしいと知らされた。

そんなわけでエルくんは先王陛下と一緒に砦の奥へと入っていき、しばらくして帰って来たのは先王陛下一人。なんか、エルくんはしばらく出先で勉強してくるそうです。やっただけこれ無茶振りされなくて済む！ なんて思っていないよ。本当だよ。

団長いなくて寂しいなーとちゃんと思ってるよ。

……だって、俺に無茶振りしてくるのはエルくんだけじゃないし。



その日、フレメヴィーラ王国の先王アンブロシウスは先日穀獣に襲われかけたアルチュセール山峡関要塞を訪れていた。

幸い要塞そのものへの被害こそ少なく済んだとはいえ、幻晶騎士には相応の被害が出たので修理や更新の必要はあり、このような事件はそう頻発するものではないが防衛体制の見直しも必要で、それ以外にも為すべき事後処理が山とある。

本来ならば先王自らそのようなことに関わるものではないが、場所が場所。公にできる場所でも施設でもない以上下手な家臣に任せるわけにもいかず、こうしてアンブロシウス自ら数日に一度は要塞を訪れていた。

「親方ー！ 資材が足りねえ！ しかもこれがないとこの先の修理できねえぞー！」

「なにい!? またその口か！ ……まあ仕方ねえか。ツェンドリンブルは砦の補修資材の輸送にかかりきりだしなあ」

その折、ふと格納庫の近くを通りかかったときに銀鳳騎士団のナイトスミス達の声が

聞こえた。

内容は、どうやら先の殻獣退治で損傷した幻晶騎士修理の算段。銀鳳騎士団の機体は新型であるため、既存の機体と部品の融通が利きづらい。

加えて、彼らの主な輸送手段であるツェンドリンブルは現在要塞とアルヴァンズの幻晶騎士修理のための物資輸送にフル稼働中だ。

結果、エルネステイがエーテルリアクターの製法を学びに行っているのを待つ彼らは資材の調達に難儀しているようだった。

申し訳なくも思うが、ここで自分が出て行つては逆に彼らを委縮させてしまう。せめて少しでも早くこの要塞の防衛態勢を立て直し、余裕を取り戻すことが一番の助けになるだろう。

そう考えて、アンブロシウスはそのまま通り過ぎた。

「よし、アグリ。ちょっとひとつ飛びこのリストに上げた資材、オルヴェシウス砦から取って来てくれ。大至急な」

「またそれえ!!? ……実は俺、砦の隅に本格的に許可をもらった畑の手入れが」

「あとにしろ。畑は逃げない」

「ちくしょー!!」

最後に聞こえたアグリの言葉に、きつとグランレオンでオルヴェシウス砦へと戻るの

だろうと考えて。

距離からして、グランレオンの足でも往復に丸一日程度。今日はもうアグリの顔を見ることはないかと概算し。

「ただいまー。取って来たよー」

「……なにい!？」

その日の夕方、当たり前のような顔で帰って来たアグリを見てめちゃくちゃ驚くことになる。



「倉庫に下ろしておいたから確認しといてね、親方」

「おう、ありがとさん。いやー、運べる量が少ないとはいえあつという間に持ってきてくれて助かるな」

親方からの依頼で、銀鳳騎士団の本拠地であるオルヴェシウス砦まで資材を取りに行つてトンボ返りすることになりました。

いやまあ大して難しいことでもないし、操縦訓練にもなるからいいんだけどね？ そ

れにしてもさすがにまだ慣れないから疲れるのは仕方のないこと。よし、とりあえずちよつとでも畑に手を入れよう。

よく肥えた土に塗れていれば元気になるのは農民の習性だよ。

と、思つて格納庫をあとにする……。

「その話、まことか」

「……はい? ……せ、せせせ先王陛下!? なぜここに!?!」

つもりだったのに、なんか真正面に先王陛下が立ちはだかつていたんですが! あば

ばばば、王族オーラの圧が!

「昼頃におぬしたちが話しているのを聞いた。今日ここからオルヴェシウス砦へ向かい、つい先ほど戻つて来た。そういうことだな?」

「は、ははあ! おっしやる通りで!」

「だが、オルヴェシウス砦との距離は決して近くない。人馬騎士の足でも往復すれば日を跨ごう。いかにしてその時間を縮めた?」

しかも、なんだかすごい食いつき。

いつの間にか両肩掴まれてるんですが!!

「え、えーと……あれを使いました。グランレオンに続いて開発した鳥型の空を飛ぶ幻晶獣機の試作型、名は〈ガルダウイング〉です」

「空を、飛ぶ……！」

俺の言葉半ばで駆けだした陸下の行く先には、ついさつきまで俺が乗っていた新型、ガルダウィングが羽を休めていた。

その姿はまさしく鳥。見た目の印象としては、鷹や鷲のような大型の猛禽類に近いだろうか。

翼をたたんだ駐機状態での全高は幻晶騎士の胸程度。飛行時の翼幅は幻晶騎士の身長よりも高いが軽量化を徹底してあるので、ツェンドリンブルやグランレオンどころか普通の幻晶騎士よりも軽い。

こんな姿なので当然インナースケルトンからして新規設計になったこと、マジウスジェットスラストのマナ消費量の多さに対応するため全身の装甲、特に面積の大きい翼部分のほとんどに蓄魔力式装甲キャパシティフレームが採用されている。

離着陸はエルくんから教わった空気圧制御の魔法によって機体を浮き上がらせるので滑走路はいらず、その状態でスラストを使うことで垂直離着陸も一応可能だ。そうすると燃費は悪いけど。

エルくんの機体であるトイボックスが人型のまま空を飛ぶためスラストの推力で飛んでいるのに対し、燃料タンクを兼ねる翼が生む揚力で飛んでいるので航続距離は長い。

とは言ってもまだまだ新開発1機目なので積載量は少なく、大規模輸送には向かない。ちよつとしたお使い程度がせいぜい。武装だつて辛うじて法撃用の杖を1本積んでるだけだし、間違いなく銀鳳騎士団に所属する機体の中で最も戦闘能力が低い。

……とはいえ、先王陛下は一日と掛からずオルヴェシウス砦との往復を成し遂げたことにいたく興味を引かれたご様子で。

「……しばし、待つていろ」

の一言から本当にちよつとだけ待つていろと。

「今からおぬしには首都カンカネンへと飛んでもらう。そして城に詰めているだろうデイクスゴード公爵にこの書を届け、返事を持ち帰るのだ。出来るか?」

「……ハイ、オマカセクダサイ」

わーすごい名誉ー。

先王陛下手ずから渡されたのはくるつと巻いた紙なんだけど、王家の紋章入りの封蝋で綴じられてやんの。

……紙一枚だけど、責任の重さで過積載状態になりませんかねえ!?

「うむ、頼んだぞ。無理に急ぐ必要はないが、あの機体でここから首都までの往復にどれだけの時間がかかるか知りたい。無事に行き来することを心掛けよ。……おう、そうであつた。いきなりあの機体で首都を飛んでは魔獣と間違われるかもしれない。この旗も

持っていけ。この旗と合わせて銀鳳騎士団の旗を掲げておけばおそらく首都の騎士たちも事情を察しよう。さすれば、この国の中でおぬしを害する騎士はいない」

「……アリガタキシアワセ」

うーん、さすが先王陛下下つてば氣遣いの人。

今度はうつかり撃墜されないようにって、王家の勅命を受けた特使のみが使用を許される旗まで貸してくれましたよあつはつはつは！

「……親方、これを機体につけて。絶対外れないように。もし地に落ちたりしたら後追いで俺の首も落ちるから。そしたら絶対絶対絶対に化けて出るから」

「……おう、お前さんも辛いな。安心しろ、魔獣に襲われても外れないようにしといてやるから」

ちなみに、このあとカンカネンには無事たどり着くことができました。

旗のおかげもあつて一発の法弾も飛んでこなかったけど、なんか首都の全戦力集めたんですかみたいな無数の幻晶騎士のただなかに着陸させられて、これまたたくさんの騎士たちに前後左右挟まれて王城へと連れていかれたけどね！

その後引き合わされたデイクスゴード公爵は、手紙を渡すまではめちやくちや険しい顔だったけど、一通り読んだら今度はすごく優しく接してくれるようになりました。出してくれたお茶菓子美味しかったです。

……でも、「ああ、こいつも自分みたいにくれから先思いつきり振り回されるんだなあ」みたいな目で見るのやめてくれませんかねえ!?



この後、アンブロシウスは予想をはるかに超える早さでアルチュセール山峡関要塞へと帰還したアグリが確かにデイクスゴード公爵からの返事を携えていることを確認。

とにかくガルダウイングの量産化に着手するよう銀鳳騎士団と国機研に命じ、後に来る大航空時代に先駆けて空飛ぶ幻晶獣機による高速連絡手段を獲得することになるのだが、それはまた別の話である。

「よし、葉物野菜はそろそろ食べごろだな。エルくんが戻って来るころにはサラダくらいなら振る舞えそうだ」

「それはいいとして、アグリ。収穫までもっと日数かかりそうな野菜やらあの辺一帯の麦畑はどうするつもり?」

「この要塞の人たちが世話してくれることになってるから大丈夫。……ククク、これでこの要塞の人たちはすでに農業の虜よ。一度自分で育てた作物の味を知れば二度とは戻れんからなあ……!」

「そのノリで銀鳳騎士団を農業集団にしようとしたらただじゃおかないから、それだけは覚えておきなさいよ」

オーヴィニエ……おろおおおおおし!!

銀鳳騎士団の拠点、オルヴェシウス砦。

最近、俺たち銀鳳騎士団はようやくここに帰って来ることができた。

俺や第三中隊、ナイトスミスの人たちがちよくちよく荷物を取りに来たり様子を見に来たりはしていたものの、本隊が丸ごと戻って来たのは本当につい最近だ。

なにせ銀鳳騎士団の団長にして存在意義たる、エルくんがようやく謎の出口から帰って来たのだからして。

シェルケレス
殻獣の大群の襲撃を受けたアルチュセール山峡関要塞。アンブロシウス先王陛下直々の命によって、俺たちはその救援に向かつて無事に殻獣の女王を討伐したのだが、エルくんはなんかしばらくその要塞の奥へと行ってしまっていた。あのエルくんが嬉々として足を踏み入れたのだからそこに何があったのかは大体予想がつくが、だからこそ口にしないのが身のためというもの。

銀鳳騎士団は要塞と幻晶騎士の修理と補強を手伝うという体で要塞に滞在し、エルくんの帰還を待つてようやく本拠地に戻って来たわけだ。

「やれやれ、やっぱり自分の部屋は落ち着くね。……さて、とりあえずこれは処分しておかないと」

そして、オルヴェシウス砦に戻ってきた俺がまず真つ先に手を付けたのは機密の廃棄。

アルチュセール山峡関要塞に滞在している際、色々やることはあつたのだが一応の立場はお客さんなこともあつて関わるのを遠慮した方がいいところも多かつた。結果、手持無沙汰になる時間もそこそこ生じたわけだ。

そのときに村の農業のことを考えつつ、簡単に、そしてたくさん荷物を運べたらいいよなーとか考えていた構想を形にした設計図。こんなものがエルくんに見つかつたらまた大変なことになるに違いない。……とりあえず絶対見つからないところに隠して、あとで魔法の練習するときの的にでもして焼却しよう。

と、思うじゃん？

「それを捨てるなんてとんでもないですよ、先輩！」

「うおわあああああ!!? どっから顔出してるのエルくん!?!」

そんな不穩、見逃すエルくんじゃないんだよなあ……。

ノックもなく、いつの間にか俺の部屋に忍び込んだ狼藉者の名は言うまでもなくエルくん。この子、なんか人の脇に頭突っ込んで腕と胴の間から顔を突き出しましたよ。

「ふっふっふ、ダーヴィド親方から聞きましたよ。先輩がまた面白いものを作ったって。さあ聞かせてください! 余すことなく何もかも一から十までエブリシング全部! あふうん♡ こ、この機構今すぐ説明してください!」

そして、そのままでもぞと這い進んでくるエルくん。

机の上に設計図を広げ、椅子に腰かける俺。その俺の開いた膝の間に座り込んだぞおい。……君、ライヒアラ騎操士学園の中等部卒業したお年頃だよな?

ちなみに、後に聞いたところによるとダーヴィド親方は別に「面白いもの」と言ったわけではなく「なんかよくわからないもの」と言ったのにエルくんの脳内で勝手に変換されたらしいです。

「ま、まあまあエルくん落ち着いて。今日はもう夜も遅い。エルくんだつて出向から帰って来たばかりで疲れてるだろう? ひとまず部屋に帰って寝て、明日また話そうよ、ね?」

「無理です! 話を聞かずに眠れません!!!」

「……あ、そう」

振り向くエルくんの髪がふあさつと広がって俺の頬を擦り、キラキラ、というかなんかもうねつとりギラギラした光を宿す目が俺をぶすりと突き刺す。……うん、人生諦めが肝心だよな。農業だつて、茎が折れたり実が落ちたりしたら、それはそれと認めたらう

えで茎を詰めるなりなんなりと、どうにかする方法を考えなきゃいけないわけだし。

俺はとりあえず、一通り説明するまではおとなしくしてやるけど終わった途端山のような質問とアイデアをぶちまけてくるエルくんの相手をする覚悟を、決めた。

その後。

——チュンチュン、チチチ

「で、出来た……！　出来ましたよ先輩、これが先輩が新しく作る機体の設計図なんです
ね!!」

「うん。……うん?」

気付いたら、一睡もすることなく窓から朝日が差し込んで小鳥の鳴き声が聞こえる時間帯になってました。

あと、また新しい機体を作ることになって、いつの間にか設計図まで出来上がってました。

拜啓、故郷のおつとうとおつかあ。

息子は人生初の朝チュンを村の女の子でも都会の女の子でもなく騎士団長の男の子と迎えました。

泣けるで。



「というわけで！ 先輩の新型機、そこに採用されている新しい動力機構について説明させていただきます！ 先輩、どうぞ！」

エルくん、絶好調。

要塞から帰って以来、俺がエルくんたちと関わるようになる前に倒したという師団級魔獣陸皇亀ベヘモスと俺も討伐を手伝った旅団級魔獣女皇殻クワイーンエルケースの素材を使って、なんとエーテルリアクターを作り始めた。

なんでもこれによってエルくん念願の超スゴイ機体を作れる目処が立ったとのこと、それはもう上機嫌に設計と基礎開発を始めて、銀鳳騎士団の開発リソースも徐々にそちらに振り分けられるようになりつつある。

が、それだけでは満足しないのがエルくん。並行して俺の方でも新しい機体を開発せよとのお達しが下ったのでした。

しかも、先日俺が構想した動力機構を使った例の設計で。

「ああ、うん。新しいとは言っても、結晶筋肉を使うところは変わらないからさほど目新しいものでもないよ。だから、親方たちはそんなに怯えなくて大丈夫。また新しくわけ

のわからないものに触ってもらうなんてことはないから。……今回の動力は要するに、結晶筋肉の出力を『回転』として取り出すためのものだ」

「回転……？」

そして、説明。

話を聞くために集まってくれた各中隊長とドワーフたち鍛冶師隊の面々はいまいち想像がつかないのか、何かを伸ばしたり縮めたりするジェスチャーや、腕だの足だのを曲げ伸ばししている。

「すまない、質問させてくれ。結晶筋肉はその名の通り筋肉と同様、伸び縮みしかなないものだ。それをどうやって回転させる？」

「うん、そう言われるだろうと思ってるわかりやすいモデルを作ってきたからこれ見てくれるかな」

そんなわけで、あらかじめナイトスミスのみんなにちよこちよこ作ってもらったものを出してみる。

「なにそれは……何？ 車輪付きの椅子？」

「大体そんな感じ」

ちなみに、この辺りでエルくんの目がきらつきらし始めました。

「そう難しく考えることはなかったんだよ。要するに、結晶筋肉による動きは人間の動

きの延長上。つまり人の体を使って最も効率よく、力強く円運動をさせるにはどうしたらいいか。その一つの答えになると思われるものが、この『クランク』だ」

そう、俺が披露したのは元の世界で言うところの「自転車」。

人を模している都合上、幻晶騎士の中でも特にパワーが出る下半身の構造を半ば流用して股と膝と足首の関節を使い、ペダルを踏んでついでに引つ張って、筋肉による伸縮運動を回転に変換する。

その辺をわかってもらうために作ったモデルはまさに自転車。さすがにアスファルトで舗装された道はないからマウンテンバイク的な構造にして、フレームは銀鳳騎士団の工房のそこら中に転がっている金属、サドルやタイヤ、ブレーキに必要なゴムは魔獣由来のぶにぶに素材で代用して、ギアやチェーンといった精密加工が必要なパーツはドワーフ脅威の技術力がなんとかしてくれました。

これまでも幻晶甲冑で使うバリストタにはまさにクランクが使われてるんだけど、これはそれをさらに大きく高出力にしたものだ。こういうのって使われるとしても目には見えない部分だから、意外と目新しく映ったらしい。

「この部分に座って、ペダルに足をかけて踏み込むと……こう」

「おおー……！」

で、さつそく固定してある自転車にまたがってペダルをこいで、チェーンによって繋

がっている後輪を回して見せるとどよめきが。ドワーフのみんな、軸受けからなからすごい精度で作ってくれたからスムーズに回る回る。

「ちなみにこれ、走れるけど誰か乗ってみる？」

「はい！ 私が乗るわ！」

なんか一部が興味津々な様子だったので提案してみたら、真つ先に手を挙げたのは銀鳳騎士団第三中隊の中隊長を務めるヘルヴィ。さすが、新し物好き揃いの第三中隊をまとめるだけはあるね。

「はいどうぞ。あ、バランス取るのにコツがいるから気を付けて……つてもう乗れてるな。ちよつとフラフラしてるけど」

「よつ、はつ、ほつ……！ た、確かに難しいわねこれ。馬ともツェンドリンブルともまた違った感じで……。でも、楽しいじゃない！」

で、簡単に操作を説明して渡した自転車を、ヘルヴィは最初から転ばずに御して見せた。

さすがにまつすぐスムーズにとまではいれないが、前輪を多少ふらつかせながらもまつすぐ進み……あつ。

「ヘルヴィ、気を付けた方がいいぞ。自転車は地面の影響をモロに受けるから……」

「へ？ ……んつきやあああああ!？」

「……床がガタガタしていると尻に来るぞ、って言おうとしたんだけど遅かったね」

この世界、地面の舗装はせいぜい石畳なんだよね。

工房や格納庫は結構綺麗に整えられてるけど、それでも自転車で走る分にはお察し。段差が多い場所に差し掛かった自転車は、タイヤによる多少の吸収はあつてもデコボコの衝撃をヘルヴィの尻に突き刺し。

「先に言いなさいよ!!」

「言う前にヘルヴィが走ったせいだよね!」

その100倍くらいの衝撃をヘルヴィの張り手という形で俺の頭に叩き込んでくれました。解せぬ。

「そういうときは、ペダルの上に立つようにすればいいんだよ。そうすると衝撃は足まで収まるから」

「こ、こようかしら? ……なるほど! 確かにこれなら痛くないし、しかも速いじゃない!」

ヘルヴィは、なんだかんだ言って本当に飲み込みがいい。

俺が教えた立ちこぎをほんの少しの間でもものにして、軽快にそこらを走って見せた。

全身を使うから、健康的なヘルヴィの肉体が自転車の上で踊る。具体的には自転車を前に進ませる要である脚と太ももと尻が。

「さすがヘルヴィ。見事だな」

「うむ、躍動感がある」

「眼福だね」

「……ハッ！ エルくんは見ちやダメー！」

「ええー」

それを見たエドガーとデイトリヒと俺がコメントして、アデイちゃんが咄嗟にエルくんの目を手で覆って。

「お、ヘルヴィが止まった」

「こちらへ向かってくるな。すごい速さだ」

「顔真つ赤だぞ」

なにかに気付いたヘルヴィが見事なスプリントでこちらへ突っ走ってきて、全力前ブレーキ。慣性によって浮いた後輪を全身のバネでもって振り回し。

「何見てんのよ!!!」

「げっふあ!?!」

まあそうなるよな、とヘルヴィからの制裁を甘んじて受ける覚悟を決めていた俺たち3人をなぎ倒す、見事なジャックナイフターンをキメてくれた。

この子本当に今日が自転車乗るの初めてなんだろうか。



ちなみに、この自転車。

後にいつものごとくふらつとオルヴェシウス砦へ遊びに来たエムリス殿下の目に留まり。

「この速さ……！ 馬でも、幻晶騎士でもない、俺自身の力でこんなに速く!? ……ははは、こいつはいい。たまらねえぜ！ ブハアアアアア——！」

と、服の前ボタンを引きちぎりながら乗り去ってしまいましたとき。

後日聞いたところによると、そのまま首都カンカネンまで自転車で走って帰り、翌日サドルで擦れた尻の痛さに悶絶したのとか。

大変気に入られたようなので、安全のために用意したヘルメットと一緒に献上しておきました。その気になればまた作れるしね。



そんなこんなで、エルネステイが寝食を忘れかねない勢いでやたら巨大なエーテルリ

アクターを自作し、銀鳳騎士団の総力を結集してなんか明らかにヤバい新型機を作り、その傍らでアグリがちまちまとこれまた新型を作っている、その間。

「んぐつ、んぐつ、んぐつ……！　　ぷはー！　　ガッデム!!」

アデイが、荒れていた。

「あ、アデイ？　もうその辺にしておいた方が……」

「聞いてください、ヘルヴィ先輩！」

「アツハイ」

ヘルヴィと、ついでにエドガー、デイトリヒの中隊長3人。そしてキットが揃った食事会的な場にて、ジョッキの中身を飲み干したアデイが早速ヘルヴィに絡む。

ちなみにアデイが飲んでいるのはただのジュースです。

「せっかく、せっかくどこかへ行って、戻ってきてまた会えたのに……。だけどエルくんったら私より、自分の新型機体にお熱なんです！」

「ふ、ふーん。まあ、エルくんだしねえ」

誰か酒入れてないだろうな。そんな恐ろしい真似ができるか。中隊長たちの間で交わされる無言のアイコンタクトにて、アデイが素面であるという事実が確認された。素面でこれってそれはそれで恐ろしくね？　という事実については、意図して目を逸らすこととする。

「それだけならまだいいんです。開発に熱中するエルくんをぎゅーってするのも、それはそれで好きですから。でも、でも……アグリ先輩が!!」

そう、本日の議題はアデイによる愚痴独演会。

最近のエルくとアグリの間向について、であった。

「昨夜のことです。エルくんが部屋に戻ってこないから、きつと工房の方だろうって探しに行っただんです」

「まあ、よくあることよね」

「団長がいなくなったら真つ先にそこを探すな」

「大抵そのあたりにいるしな」

俯くアデイ。ぶるぶると震える拳。さて、彼女がそこで見たものとは。

「夜も遅くて、そろそろ寝かしつけてあげないと体壊しちゃう。そう思って、探して、エルくんの新型のコックピットで見つけたんです。……先輩と二人して寝落ちして、資料と工具に塗れて、なんか積み重なって寝てる姿を!!」

「体痛くなりそうねえ」

「今後は二人がおかしなところで寝ないよう気をつけねばならんか」

まるで兄弟のように仲が良さそうな二人の寝顔であったという。

まあ、アグリのお腹のあたりでエルネステイが丸くなって寝ていたので、アグリは苦し

そうだったようだが。

「それだけじゃありません！ その前はお風呂に入ってるときに……！」

「ああ、あの日ね。……言っておくけど、さすがのアデイでもエルくんと一緒に入ったわけでも、女湯に連れ込んだわけでもないわよ。私達は女湯に入ってたから」

さらに、まだネタはある。

オルヴェシウス砦での開発やらなにやらは体が汚れもするし埃にも塗れるし汗もかく。

そういったときに体を洗い流せるよう、風呂場が用意されているのだ。ちなみに、製作者はアグリ。買い付けた資材をガルダウイングで運び、グランレオンやモートリフトも使ってあつという間に作り上げました。曰く「ユシツダ村の人間に幻晶甲冑を与えれば小屋くらい一人でも余裕」とのこと。奴の故郷が一体どういう村なのか、エドガー達はいまだに想像もつかない。

「むむ、先輩ちよつとそこで壁に手を突いてください。そう、そのまま動かないで」

「うひい!!? ちよつとエルくんなんて背中触るの!?!」

「いえ、いい筋肉のつき方だな、と思ひまして。幻晶騎士は人型で、結晶筋肉で動きますから。より効率の良い動きをするための結晶筋肉配置を知るには人の体についての研究が不可欠です。ちよつと観察させてください」

「いやいやいや、それだったらエドガーとかディートリヒの方がいいから！ あいつら
脳筋だし！ 俺のはただの農筋だから！」

「お、足の方もいいですねー」

「そ、そつちはらめえええ!?!」

「……離してください、ヘルヴィ先輩！ エルくんが筋肉のつき方を知りたいという
なら私の体を見せます！」

「ダメに決まってるでしょ?! 百歩譲って見せるのはいいとしても、ここではダメよ！
壁を乗り越えて男湯に乗り込むなんて女の子としてアウトだから！」

「……なんてこともー！」

「……あのときはアディを抑えるのが大変だったわー」

「大変だな、ヘルヴィ。まあ飲め」

「ん。ありがとエドガー」

そんな感じだった。

ディートリヒたち外野としては、エルとアグリの関係は兄弟のようなものにはしか見え
ない。どちらも発想が人並み外れているし、なんだかんだで仲がいいし。

しかし、だからこそアディとしては納得がいけないのだろう。エルネステイを愛し、

愛でることにかけては紛れもなく騎士団随一。幼馴染として積み重ねてきた年季が違う。

ポッと出の相手に負けるわけには行かないのだ。

「……よし、決めた！」

そう、なんとしてもエルの寵愛を取り戻すため。

アデイは中隊長とキッドの前で、高らかに宣言した。



「アグリ先輩！ あなたに決闘を申し込みます！」

「え、決闘^{デュエル}？ もー、しようがないなあ」

「？ なんで紙束取り出してるんですか？」

「かつ、紙束じゃねーし！」

エルくんご指名の新型がそろそろ動くようになってきたある日、突然アデイちゃんから決闘を申し込まれた。

こんなこともあろうかとデッキの準備は万全だったんだけど、どうやらアデイちゃんが望んでいるのはこっちではない様子。まあ、当然か。

「それにしてもなんでいきなり。決闘を挑まれる心当たりがないんだけど」

「先輩にはなくても、私にはあります! エルくんを賭けて勝負です!」

「おいちよつと待て後輩」

いや本当に待ってアデイちゃん。エルくんを賭けてってなんだおい。

ただでさえ、銀鳳騎士団に所属する一部の女性団員たちからの生暖かく期待に満ちた目が痛いというのに!

「もうすぐ完成する、先輩の新型機のお披露目模擬戦の相手を私が務めます。そこで私が勝ったら、エルくんは私のものです!」

「いや、だからね?」

いかん、アデイちゃんが人の話を聞いてくれない。まるでエルくんのようなだ。

しかし困った。これじゃあ埒が明かない。なんとかして俺のことを恋敵のような目で見ることをやめてもらわねば……!」

「その決闘、合意と見てよろしいですね!」

「よろしくねえよエルくん」

ほら、そうしないとこうやって話を聞きつけたエルくんが飛んできちゃうし!

……この後、俺の説得もむなしく新型機お披露目模擬戦兼アデイちゃんとの決闘がマッチメイクされました。いつものパターンだなおい!



「さあさあ毎度恒例、先輩の面白すぎる新型機のお披露目模擬戦です！ ガルダウイングのときはドタバタしていた上に戦闘向きではなかったので飛ばされてしまいました。今回はそんな心配ありません！ さっそく新型機に入場していただきましょう！」

エルくん、実況好きだなあ。

そんなことを思いながら、俺は新型を前へと進ませる。機体は重い気も重いぜ……。

ため息はコックピットの中で。俺は機体を砦内に用意された幻晶騎士用の練兵場へと進ませる。

響き渡るのはキュラキュラキュラという、普通の幻晶騎士ではありえない音。主にエルくんの新型機開発に携わっていて、俺が作っていたものについて詳しく知らない団員達のざわめきが会場に満ちる。

まあ、そうだろうね。こんなの、それこそツェンドルグの時並みに見慣れない形だろうし。

新型を開発した、とは言ってもエルくんの新型こそ今の銀鳳騎士団にとって最優先開発対象。俺の方はナイトスミスのみんなの手が空いた時間を使わせてもらって、新しく作ったのはせいぜい半分程度で残りはカルディトーレをベースにしている。

で、その新しく作った部分というのが。

「みなさん驚いたでしょう！ 先輩の新型はその名もへカルディタンク〜！ 先輩発案による動力機構、結晶動軸フリスタルクラフを採用した下半身、タンク脚にご注目ください！」

エルくんが嬉々として説明してくれた下半身。

前世知識を応用して作った戦車的な部分と、ついでに余裕ができた積載量と転んだときに起き上るためパワーを増した両腕だ。

すごいよね、ドワーフのみんな。速度とトルクを制御するためのトランスミッションも抜群の精度で仕上げてくれるし。魔力による強化もあるから履帯もあんまり千切れない。中々にバランスが良く扱いやすいんじゃないかと思う。俺は。

「結晶筋肉のパワーを回転として出力し、さらにその力で履帯を回転させることで効率よく、しかもどんな悪路だってへっちゃら。それこそ火砕流の中だって進めるんです！

しかも安定性と積載量は抜群！ 最高速度は幻晶騎士以上ツェンドリンブル未満とあったところですが、圧倒的な馬力で荷馬車を引いてもほとんど速度が落ちません！ さらにお気付きでしょうが両腕もカルディトーレのものから強化された特別製になっ

ています。万が一倒れてしまったときでも、自力で起き上がれるよう長く、力強くなっているのです！」

いつぞやグランレオンのお披露目をしたときよろしく、エルくんが恍惚とした表情で解説をしてくれる。わかりやすいんだけどみんなは相変わらず引き気味だ。

ちなみにこのカルデイトンク、本格的に農業やら大工仕事に使えるよう追加武装も用意してある。木を切り倒すためのチェーンソー、土を掘るためのバケットアーム、重いモノでも吊り上げられるクレーンに、岩盤粉碎用のドリル、整地用のドーザーブレード。戦闘に使える気はあんまりしないけどね！

……あと実はもう一つ厄介なものがあるんだけど、今日は使わないから放っておこう。

今回の装備はほぼ無手に近い。バックウエポンの杖以外は剣も盾も持たない、一番素に近い状態だ。

「ろくに武器も持たずに出てくるなんて、余裕ですな先輩。でも私は容赦しませんよ……！」

「ああうん、お手柔らかにね？」

対するアデイちゃんは意気軒高。一応刃は潰してあるはずの槍を持つてるんだけど殺気すら感じられるツェンドリンブルが、既にしてがりがりと前足で地面を蹴って

る。怖い。

だが、エルくんのアレっぷりとアデイちゃんの性格からしてこういうことになるのはいずれにせよ避けられなかったこと。ならばここでどうにか話を収めなければ、銀鳳騎士団に俺の平穩はない。

やるだけ、やらねば……!!

俺は珍しく戦う覚悟を決めて、練兵場の対角で戦いの始まりを今か今かと待ちきれずにいるアデイちゃんのツェンドリンプルを前にして。

「それでは、シルエツトナイトル幻晶決闘……ファイトお!!」

エルくんの号令一下、アクセル全開で突っ込んだ。

ちなみにこの新しい掛け声は、語呂が悪かったのかいまいち流行らなかった。



「し、死ぬかと思った……!!」

「激闘を制したのは、先輩だあー！ さすがガチタンだ、なんともないです！ みなさん、あの頑丈さとパワーを讃えましょう!!」

パチパチパチと拍手が降り注ぐ中、くらくらする頭を押さえる俺。

アデイちゃんとの試合も、相変わらずハードだった……。

試合開始と同時に、全速力でまっすぐ突っ込むという判断を下したのはアデイちゃんも同じ。どちらも二本足の幻晶騎士以上の速度が出せるだけに距離はあっという間に縮まり、ツェンドリンプルの槍がまっすぐこちらを……しかもなんかコツクピット狙いだったような気がするけど、とにかく正確な狙いで突き出された。

その一合目は気合で逸らす。カルディタンクの腕は、重量のあるこの機体をいざとなったら自力で起き上がらせるためのものでもある。幻晶騎士2機分の重量を乗せた槍の突きでも、側面を殴れば十分逸らすことが可能だ。

そうして互いに決定打がないまますれ違い、アデイちゃんは速度を緩めることなく場内を旋回。俺は逆に足を止め、その場で「回った」。

「なんだあれは……その場で滑って回っているのか？」

「それだけではないぞディートリヒ。よく見ると腰の部分も回転している。……なるほど、あれが回転動力というものか」

カルディタンクのホテルは戦車。下半身の戦車部分と上半身の人型部分は、当然独立しての回転が可能になっている。

それでいてコックピットからちやんと指示出せるようにするの、結構苦労したんだよなー。

まあとにかくそんなわけで速度に勝るツェンドリンブルを無理に追いかけることはせず、しかし常に正面に見据えて俺は機を待った。

アデイちゃんは冷静で幻晶騎士の操縦に関しても高い技量を持っている。エルくんは直弟子だけあってその点に関しては、それこそ中隊長3人にだって負けてはいない。

だからこそ、俺が勝つために、つつーか勢い余って殺されないようにするために必要なのは、カルディタンクだからこそ出来ることをどれだけ生かせるかにかかっていて。

「おーつとアデイが攻める！ 再びのランスチャージ、先輩も今度はかわせるかー!!」

ツェンドリンブルの性能は機動性特化の騎兵タイプ。足を止めることなど論外で、速度と勢いこそが武器。真正面から受け止めるなど愚策中の愚策で、どうにかして避けなければならぬ。

「先輩……食らえええええええええ！」

「いやだよ！ ふんぬっ！」

「うえ!?! う、受け止めたあ!?!」

と、いう常識を逆手に取った。

ツェンドリンブルの進路と交差する向きに調整しておいたカルデイトンクの下半身に、交差の直前を見計らって前進を指示。わずかだが位置がズレたことで槍の穂先を避け、しかし激突するだろう機体の勢いを、俺はカルデイトンクの両腕で……無理矢理掴んで止めた。

「な、なああ!?! 浮いてる!?! 走れない!?!」

そして、持ち上げる。カルデイトンクの腕のパワーは、有り余る積載量に物を言わせて極限まで高めてある。それこそ先王陛下たちの専用機として贈ったゴールドリーオとジルバティーガにも勝るほど。

しかもタンク脚の安定性はグランレオンの四脚すら凌駕して、その結果ツェンドリンブルの胴を掴んで持ち上げるといふ荒業すら可能にした。

「な、ならこのまま槍で……って、なんなのおおおお!?!」

当然、それだけでは勝てない。だが武器ならある。

そう、この手に、この足に。パワーと足回り、そして何より「ツェンドリンブル自身の重さ」を利用して。

カルデイトンク、再び超信地旋回。ついでに上半身も同じ方向に旋回。

ツェンドリンブルを掴んだ腕は離さず、つまり一緒に回って遠心力に捕らわれて。

「きやああああ!! 目ーがーまーわーるー!!」

「おおおお!! あ、あの技は!!」

エルクンの超興奮した声が聞こえたような気がしたけど、まあわからなくもない。俺がこれからやろうとしていることの予想がつけばそうもなろう。

戦車型のパワーを生かし、相手を掴んでぶん回し、そして投げ飛ばすこの技。この世界を分かっつ大山脈の名を借りて、こう呼ぼう。

「オーヴィニエ……おろおおおおおおし!!」

「つきやああああああ!!」

ちなみに、全力でぶん投げるとちよつとシヤレにならないのでぺいっと放り投げる程度に加減しておきました。



「うっ、ぐすつ。うう……先輩に負けた……これでエルくんは先輩のもの……。そんな、エルくんを失ったら、何も無い……私には、びっくりするほど何もないなあ……」

「アデイちゃん!! 帰ってこい!」

その後。

なんかいつまで経ってもツェンドリンブルが動かないんで心配になって見に来たら、コックピットの中ではらはらと涙をこぼしながら放心しているアディちゃんが発掘されました。やべえ。放っておくと「ガンバリマス」しか言えなくなる奴だこれ。

「先輩？ あ、あ……お、おめでとうございます。エルくと、どうかし、幸せに……」
「やめろー！ それ以上口にすると多分アディちゃんの心が死んじやうから！ あと俺は別にエルくとどうこうとかないから!!」

この子、本当に人の話を聞かずに突っ走るよね!?

ええい、仕方がないどうかして説得してやる！

「えーとえーと……そう、俺はむしろアディちゃんとエルくんのことを応援してるんだよ！ とりあえず今度エルくとアディちゃんとのデートのプロデュースとかしてあげようか!？」

「……本当ですか!？」

「アツハイ」

と、思つて百万言でも費やす気でいたら一瞬で目に光が戻ったんですがこの子。

「エルくとデート……デート……。割と普段からしてる気もするけど、デート……えへへ」

「そうそう、それでいいんだよアディちゃん。エルくんがアディちゃんのことを大事に

思ってるのは傍から見ていてもわかる。……大切なのは、笑顔です」

「はいっ！ これからは先輩のことをプロデューサーさんと呼ばせてください！ アデルトルート・オルター、がんばります！」

そんな感じで、俺設計による3機目の幻晶騎士っぽいもののお披露目とアディちゃん
の精神の均衡は無事にどうにかなったのでありましたとさ。



「……のう、エルネステイよ。なぜオルヴェシウス砦に来るたびに周囲の畑が広がっているのだ？」

「それは、アグリ先輩が開拓しているからです。グランレオンとカルディタンクで耕して土を盛って、モートリフトで細かくあれこれをやっているとあつという間に畑に変わるんだそうです。おかげでうちの砦はほぼ自給自足できそうな勢いになってきました」

「では、向こうの湯気が出ている小屋は」

「あれは温泉です。先輩がカルディタンクでどれだけ深くまで掘れるか試していたら掘り当てたので、浴場を設置しました」

「そうか……」

数日後、オルヴェシウス砦を訪れたアンブロシウスは日々見違える周囲の風景についてエルネステイに問い、割と真剣にグランレオンとカルデイタンクの国土開発用としての重要性について考慮し。

『こらー！ そつちは耕しちやダメだつて言つたでしよ！』

『うるさい！ この辺の土が俺にもつと耕せと囁いているんだ！ 農民は土の声に逆らえないんだよお！』

『なら力づくで止める！』

『ふははやってみろ！ ツェンドリンブルの相手はこの前のアデイちゃんとの模擬戦で……！』

『どうせ直線的な動きしかできないなら！ 薙ぎ払う！』

『うわあああちよつと待て待て待て待てごめんなさひでぶ!?』

『……ああして耕していたのだな』

『はい。おかげで最近では先輩も楽しそうです』

巨大な鋤を引いて爆走するカルデイタンクと、それを追い回して槍で殴り飛ばすツェンドリンブルを見て、やっぱもうちよつと慎重に考えた方がいいよね、と思い直したのであります。

鳥を見た

「それじゃあ、ノーラさん。こちらご注文の幻晶獣機の素体になります」

「はい、受領いたします」

銀鳳騎士団での生活は、基本的に幻晶騎士（俺の場合はたまに幻晶獣機）漬けだ。

寝て起きて飯食って風呂入ってまた寝る間、幻晶騎士なり幻晶獣機を作ってるか動かしているか、そのどちらかで大体説明できる。……まあ、俺はその隙間に気合で農業ねじ込んでるけどね！

そして、現在の銀鳳騎士団で最もアツいのがエルくん専用の新型機作り……のだが、俺はそつちと別口の仕事を任されている。

それが、クール美人なノーラ・フリユクバリさんから依頼されたちよつと特殊な幻晶獣機の開発だった。

ある日エルくんに紹介されたのは、ちよくちよくオルヴェシウス砦でも顔を見ることがあったこちらのノーラさん。その時説明されたところによると、ノーラさんはニンジャらしい。……エルくん、最近ニユアンスさえ通じればいいや的な説明が多いなあ。俺はそれでも通じるんだけどさ。多分「同郷」だし。

ともかくそんなこんなで、ノーラさん……というかその所属元からの依頼という形で、新型というか特殊仕様の幻晶獣機を作ることになった。

何度か打ち合わせをして決まった仕様は、出力が多少落ちてもいいからエーテルリアクタ単発型の小柄ですばしっこい機体。関節の駆動音は小さい方がいいことと、受領後にノーラさん達であれこれ改造したり後付けしたりするつもりなので素体状態で完成として渡して欲しい、とのことだった。

渡した後ナニされるんですかねえと思わないでもなかったが、エルくんも承知の上とすることは紛れもなく銀鳳騎士団としての仕事。砦の回りの畑を広げながら設計を考えて、きっちり作り上げました。

「仕様と整備・運用のマニュアルはこれです。問い合わせなんかがあったらいつでも連絡してください」

「ありがとうございます。素早く正確な仕事、痛み入ります。………とこころで」「はい、なんでしよう」

装甲がほとんどついていない、インナースケルトンむき出しの幻晶獣機。グランレオンなんかと比べると一回り小さくて出力も抑え気味だけど、だからこそ軽く、建造費用も安めで、小回りも利く割りに四足のパワーはしっかりと活かせる。将来農業用とするにはこういうのがいいんじゃないかな、と考えていたものを先んじて作らせてもらった

ようなものなので、俺としても感謝したい仕事だった。
ので。

「……なぜ、注文していない狐の顔がついているのですか？」

「エルくんが『その方がカッコいいじゃないですか』の言葉と共につけることを指示してきました。サービスらしいですよ？ あとノーラさんがシャドウラートの発案者だから、とも」

サービス満点にしておきました。

団長からの指示だからね。仕方ないね。

「そうですか。……ちよつと、かわいいですね」

「さようで」

ノーラさんも気に入ってくれたみたいだし、いいんじゃないかな。

この後、フレメヴィーラ王国の諜報関係者の間で背が低く、素早く、その割に積載量に優れた幻晶獣機がこつそり量産・導入されて高い評価を受けることになるが、そういう時代になってからいい加減経つた後、ノーラさんがこつそり教えてくれたことによつて俺は初めて知るのでありましたとき。

そんな感じで俺もいろいろ作ったりする中、エルくんの新型は着々と完成に近づきつつある。そうなったらきつとエルくんは自分の新型を使うことに夢中になって俺のことを忘れてくれるに違いない。

そうしたら、ちよくちよく村に帰って今度こそ農業に帰るんだ……！

人は夢を見なければ生きられない。

それは明日への希望と未来への懸け橋であり。

……ついでに、そうそううまいこと行くわきやねーものなだけどね。

だって、俺たちの団長はエルくんだし。

新型を作ったら、それにふさわしい派手な使い道を求めるのは当たり前だよ。今にして思えば。



「クリストバル殿下、ご報告いたします」

「その顔、どうやらまた不愉快な話のようだな、ドロテオ」

クシエペルカ王国王都、デルヴァンクール。この地がそう呼ばれていたのは過去のこ

と。

いまやセツテルンド大陸西域にその名を轟かせたこの都に翻る旗はクシエペルカのものではなく、ジャロウデク王国のものとなっている。

かつて西域を統一していた国家、フアダーパーデン世界の父の再来たることを掲げるジャロウデク王国の電撃的な侵攻によって一夜にして陥落したこの都は、すでにジャロウデク王国クシエペルカ領中央護府となっている。

王城にてクシエペルカ侵攻の総大将を務めるジャロウデク王国第二王子、クリストバル・ハスロ・ジャロウデクに報告を上げるのは彼に仕える参謀、ドロテオ・マルドネス。ジャロウデク王国有数の実力を宿す叩き上げの軍人であるドロテオの顔にはいま、苦渋の色が濃い。

緒戦を快勝で飾り、王都の陥落、クシエペルカ王の討ち取りなど快進撃を続けたジャロウデク王国の侵攻がいま、停滞を余儀なくされつつある。

「申し訳ございません。……東方より、都市攻略の予定が遅れていると報告が上がっております。その中に、お耳に入れておきたい話が」

「ふん、クシエペルカの腰抜けどもの仕業にしてはやるではないか」

王都を落とし、クシエペルカ王国は滅亡した。

しかしそれによって国土の全てがジャロウデクの色に染まるわけではなく、各地に残

る都市、貴族領を掌中に収める必要がある。そのために各地へジャロウデク王国の新兵器たる飛空船レビテトシツブと新型幻晶騎士へテイラントへを派遣している最中だ。

当然、闇に紛れて空中から王都に奇襲をかけたあの夜のように劇的に終わることではない。時間がかかることは承知していた。

当然、抵抗はある。だがそれも、テイラントと相対せばカカシ同然の旧式幻晶騎士へレスヴァントへしか保有しない旧クシエペルカ相手。鎧袖一触に進む……と想っていたのだ。

東方から、悲鳴のような報告が上がるまでは。

「鬼神の噂は、依然変わりなく。前線の部隊が丸ごと消えるという事例は確認され続けています。……ですが、本日はまた別のご報告が」

「申してみよ。貴様ほどの男が、よもや根も葉もない噂を俺の耳に入れることもあるまい。意味のある報告なのであろう？」

「はっ、ありがたき幸せ。……兵たちの中で新たな情報が出回り始めています。曰く……」

そして、もう一つ。

ジャロウデクを蝕みつつある、怪異。

「『鳥を見た』と」

「……鳥？」

ドロテオが告げるその言葉に、クリストバルは言いよのない不気味さを覚えた。

「東部の前線で目撃情報が上がっています。極めて高い空を飛んでいるようで目視では詳細が分からず、空の只中でほとんど動かず、羽ばたく様子もない。……そして、この鳥を見た者、あるいはその近くの部隊が必ず鬼神に襲われると」

「またあの忌々しい鬼神か……！」

「鬼神」。

それこそが、ジャロウデク王国の歩みを止めつつある姿の见えない脅威だった。

テイラントーを配備し、各都市を落とす続けるジャロウデク王国。各地へ派遣した部隊のうち、いくつかが突如消息知れずになり、どれほど探しても見つからない、という事例が昨今続発していた。

消えた部隊に所属していた兵がわずかに見つかることはあるが、その兵たちは口をそろえたように言う。「鬼神に襲われた」と。

ほんの少しずつ、しかし確実に兵たちの間に恐怖の代名詞として広まりつつあるその名が、ジャロウデク王国の歩みを阻んでいることは否定しようのない事実だった。

「しかも、鬼神のみならずそれに付き従う別のものまで現れたという情報がごぎいます。

……四つ足で地を蹴り幻晶騎士を襲う、それはまさしく獣のようであったと」

「獣だど!? まさか魔獣がオーヴィニエ山脈を越えたとしても言うつもりか! そのようなことがあるというなら、魔獣番フレグウィーラの連中はとつくに滅んでいるだろうよ!」

「おつしやる通りでございます。おそらく、これもまた鬼神の眷属と思われれます」
悪いことは重なる。

鬼神の名に加えて、さらにはもつとわけのわからないものまでジャロウデクの邪魔をしているという。

ゆえに最近「鬼神」の名のみならず、「鬼神率いる死神部隊」の名もまた兵たちを震え上がらせている。

それもまた、先の「鳥」とやらに導かれるようにして部隊を襲っているというのだから、ただでさえ沸騰しやすいクリストバルの怒りは急速に熱を高めていく。

「それらの噂が合わさって、兵たちの間でこの鳥はこう呼ばれています。『鬼神の先触れ』、『凶兆の禍鳥』、『黒い鳥』、『何もかもを黒く焼き尽くす、死を告げる鳥』、と」

「……っ」

そんなクリストバルでさえ息をのむ。

数多の兵の間を伝わる恐怖の感情が、その名から立ち上って来るかのようで。

「黒い、のか」

「いえ、別に黒いわけではないようです」

「ではなぜ黒い鳥と!？」

「さ、さあ……?」

しかもなんかバカにされた気がした。絶対に許さない。クリストバルは、そう誓った。

「それで! 鳥は置いておくとして、その鬼神以外の獣とやらはなんと呼ばれている!」「いまだ目撃情報が少なく、定まってはいいないようですが多く兵たちの口に上るものがございます。尋常な獣ではなく、しかしこの西域において魔獣の名は伝説と同義。よつて……」



「……なんて噂になってるらしいですよ? 『野獣』先輩」

「その呼び名だけは絶対やめてねエルくん。万が一定着したら、何もかも捨てて村に帰って引きこもるから」

などという情報が、ついさつきしばき倒して縛り上げて捕虜にしたジャロウデク軍の人たちの口から語られた。名誉棄損で訴えるぞ、くそぞう!

ここは、フレメヴィーラ王国の西にそびえるオーヴィニエ山脈を越えた先、通称西方諸国オクシデンツと呼ばれるちほーにある国の一つ、クシエペルカ王国。

……だったんだけど、なんか同じく西の方の国であるジャロウデク王国によって滅ぼされたらしい。

以前から山の向こうがきな臭いという噂は聞こえてきていたが、事態急変の報を受けてエムリス殿下が世話になったクシエペルカを助けに行くと言い出し、そのための戦力として銀鳳騎士団が「銀鳳商会」と適当に名乗ってついていくことになったわけだ。

俺たちが着いたところには、すでにクシエペルカ王国としての国体は消し飛んでいた。

主要街道は西から東、北から南まで全て押さえられ、あとは各地に分散した貴族や都市を落とせば、はいおしまい。

そんな状況だったので……エルくんが、歓喜した。

「周り全部敵つてことはとにかく殴り倒していいですよね！ あと幻晶騎士とかその中のエーテルリアクタも貰っちゃっていいですよね!!」

「いや、その理屈はおかしい」

などという感じで、旧クシエペルカ王国東部をうろつくジャロウデク王国の幻晶騎士ティラントーはエルくんのエサになることが決定しました。

俺がガルダウイングで上空から偵察して、イイ感じに他から離れている部隊を見つけ、エルくんのイカルガとたまに俺もグランレオンで襲撃。1機残らず機体やその残骸を頂戴して、控えていた銀鳳騎士団第三中隊のツェンドリンブルが回収して引き上げる。ことの繰り返しだった。

さすがに部隊の人間を皆殺しにしてるわけじゃないから噂くらいは広まってるだろうなと思っただけ、誰が野獣だこの野郎。

「あ、あの……村を救っていただき、ありがとうございます……」

「いえいえ、お気になさらず。僕たちは『商品の仕入れ』に立ち寄らせていただいただけです」

捕虜にした人に八つ当たりしようか悩んでいた俺の耳に、声が入って来た。

声の主は俺たちが殴り倒したジャロウデクの部隊に因縁をつけられていた農村の村長さんらしき人と、にこやかに応対するエルくん。

エルくんでは、商會を名乗るものだからって「僕たちの商品は『戦力』。なのでミグラントと名乗りましょう！」と言っただけ、多分誰にも通じないからやめてもらいました。

でも名前はさておきやってることは同じだから、存外楽しんでるらしい。

「本来ならば、村をあげて感謝の宴を催すところ。ですが……申し訳ない、ジャロウデクの奴らに踏み荒らされて畑がこのざま。これでは、みなさまにお礼をすることさえ……！」

一方、村長さんを筆頭に顔をそろえて感謝の言葉をくれていた村の人たちの方は完全にお通夜状態。

まあ、そうもなるだろう。俺たちが駆けつけたとき、ジャロウデク軍の幻晶騎士ティラントーが踏み荒らした畑は見るも無残な足跡だらけになっていた。

ティラントーとやら、どうやら以前フレメヴィーラ王国から盗まれた機体が祖となっているらしい。エルくん発案の技術でんこ盛りなテレスターレを解析した技術が使われた形跡があり、綱型結晶筋肉やバックウエポンを搭載しているうえ、それらを活かしてパワーと装甲を重視しているため無駄に重い。

そんなものが足を踏み入れたら畑はどうなるか。奴らはそのことを全く考えていない。

なので、エルくんと一緒に襲撃するときはちよつと念入りに刻んで潰しておきました。畑を疎かにするものには、死を。

だが奴らを血祭りにあげたからといって、荒らされた畑が元通りになるわけではない。

これでは村の総力を結集しても、種まきまでに畑を元に戻すことができるかどうか。農民なら、そんなことは不可能だと誰でも分かる。

「大丈夫。心配いりません」

「……なんですと？」

俺以外なら、だけどね。

ちよつと失礼して、畑の土に手を入れる。

一掴みの土を手の中でこね、指の間から零れる様を見て、匂いを嗅ぐ。

「いい、土です。ここは麦畑ですか。丁寧に畑を守り育ててきたんですね」

「……わかってくれるか、お若いの。だがそれももう終わりだ。おぬしならこの畑を戻すのがどれだけ難しいか、わかるじやろう。少なくとも今年は間に合わん。そうなれば、年を越せるかどうかさえ……」

少しだけ目を開いた村長さんが、しかし諦めのため息をこぼした。

気持ちにはわかる。同じ立場なら、俺だって諦めるしかないと思っていただろう。

……俺が、ユシツダ村の生まれでなかったなら。そして、銀鳳騎士団に入る前だったなら。

「わかりますよ。……この畑がちゃんと復活するってことを。出来ませぬ。俺と、幻晶獣

機なら」

だって、今の俺にはこんなにも頼りになる機体があるのだから。

『どりやああああああああ!!』

「お、おとおお!!? なんだあの獣は!!? すごい勢いで畑が、畑が掘り返されていく!」

「すげえ、踏み固められた土がこんなに深くまで!? 村長、これなら……これなら行けます! ……つて、どこ行っただ!?」

「何をしておるか、村の者が呆けていてもどうにもならん! 鍬を持って、種を撒け! あの獅子殿に続くのじゃあ!」

「お、おおー!!」

「てか村長気を付けてくださいいね!? 去年も張り切り過ぎて腰が逝ったんですから!」

てな感じで、行く先々の村でもし畑が潰されてたら必ず直しつつ、ジャロウデク王国に対する嫌がらせをする俺たち銀鳳騎士団なのでありましたとさ。

——のちに、ジャロウデクの魔の手を跳ね返した新生クシエペルカ王国の東部地方において、獅子が全知全農の神として崇拜されることになるが、それはまた別の話である。



その後。

順調にジャロウデク狩りをしつつ生き残ったクシエペルカ貴族と交渉していたエムリス殿下とエルくんたちだったが、いかに銀鳳騎士団の戦力がジャロウデクを上回っているとは言ってもあくまで部隊単位でのこと。

戦争における勝利に必要な大義も、仮に勝ったとしてその後国を立て直すための支柱もないままでは、大勢が傾くことはなかった。

接触を持った残存貴族の人たちも、希望を見出し出してはくれるがいまいちノリが悪い。

さてどうしたものかと悩んでいた俺たち一行であったが、そこに朗報が舞い込んだ。先日狐っぽい幻晶獣機を納入して、なんだかんだでクシエペルカ王国にもついて来たいたノーラさん。

どうやら彼女たちによるジャロウデク側の情報収集の成果として、クシエペルカ王族の生き残り、正当な王位継承権を有するエレオノーラ姫の所在を突き止めたのだとか。

となれば奪還しない手はない。

第一から第三中隊を東方に残して貴族の掌握策を講じてもらっている間に、エルくんを中心とした少数精鋭部隊でお姫様たちを助けるための救出作戦が実行された。

「……のはいいけど、なーんで陽動が俺一人なんだろうね？」

お姫様たちが幽閉されているという、ジャロウデク風に言うとう東方護府のある街、フォンタニエ。この街の中心にあるラスペード城が四方に備える尖塔のいずれかにお姫様とエムリス殿下の叔母上たるマルティナ様と、マルティナ様の娘のイサドラさんが別々に監禁されているのだとか。

当然、誰か一人でも人質にされれば困ったことになるから、エルくんたちは幻晶甲冑を使ってこっそりと潜入し、同時に3人とも救出してくる手はずになっている。

「というわけで、先輩には陽動をお願いします。……別に、街中のティラントーを倒してしまつてもかまいませんよ？」

「エルくん、勝手に人の死亡フラグ立てるのやめてくれる？」

という感じのやり取りの末、俺はこうしてグランレオンで待機することになったのでした。

まあ、俺はエルくんたちほど幻晶甲冑の扱いに慣れてるわけじゃないから、適切な役割分担だと思うけど。

行動開始は合図ではなくスケジュール式。

潜入を待つてから動き出したほうがいいのだが、何より隠密性が求められる都合上、発光信号なんかを使ってバレたらよくない。

「……さて、時間だな」

だから俺は、エルくんたちが時間通りに動いてくれていることを信じて、グランレオンを起動する。

さて、クシエペルカの国を、人を、そして畑を荒らしたジャロウデクに鉄槌を下す
としよう。



「あふ……」

「おい、弛んでるぞ」

「そう言うなよ。前線ならともかく、こんな街の警備なんて退屈にすぎん」

フォンタニエは本来、交易で栄えた街だった。

道は広く活気に満ちて、太陽が沈んでも明かりを灯す酒場からの笑い声が響いていた。

「なんだ、あれは……四足の？」

「ま、まさか……鬼神の使い魔!？」

フォンタニエに多い、がっしりとした石造りの建物。その屋根の上に、「それ」はいた。月を背に、逆光の影に沈む明らかに人のものではないシルエツト。

爛々と光る眼に見下ろされて、テイラントーの騎操士が感じるのは根源的な恐怖。

あれはきつと、自分という命より強いものだという生命の根底に刻まれた本能が発する叫びで。

「なっ、消え……」

「う、うわああああああ!？」

消えた、と思ったときには隣に立っていたはずのテイラントーの姿がなくなつた。

慌てて振り向けば、そこには篝火にうつすらと照らされた街の闇に蠢く影。

「黒騎士」の名の通り全身黒く夜ともなれば視認性の悪いテイラントーが、「何か」にのしかかられて暴れている。

襲い掛かったものの正体など、考えるまでもない。あの獣だ。すさまじい速さで飛び降り、襲い掛かって来たのだ。

つまりは、敵だ。

街には敵襲を告げる警鐘が鳴り響いた。

緒戦から続く楽勝に浸っていたジャロウデクの騎操士たちに緊張が走り、襲撃者の下へ続々とテイラントーが押し寄せて。

「ひいひいひい!!? やめろ、俺を喰うなあああああ!!?」

「ど、どこだ! どこに行つた!!? ……うわああ!!?」

「だ、誰か助けてくれ! 動けな……ああああ!!?」

正体不明の敵に、蹂躪を許した。

フォンタニエの街は立派な造りをしているが、当然幻晶騎士の戦場となることなど想定していない。

そのため街路は幻晶騎士が歩くことはできるが、それだけだ。テイラントーほどの重装の騎士であればまともに方向転換をすることすら難しく、レンガを削り、屋根に壁に穴を開け、それでいてなお相手の姿を真正面に捉えることすら難しい。

「路地に入つて背中を合わせろ! 正面から相手をすれば、何者であれテイラントーの装甲の敵ではない!」

そう言つて通路の前後に楯を構えたテイラントーは、頭上から襲い掛かった爪に挟られた。

「どこだ、どこだ……どどこにいるんだああああ!」

広場に出て周囲を見渡したテイラントーは、幻晶騎士のものとは異なる四足による独特の足音は聞こえるが姿を捉えることもできず、回り込まれて後ろから引きずり倒された。

「見えた、見えたぞ！」

そのテイラントーはしばらく暴れたのち、動かなくなった。

おそらくマグウスエンジン辺りが破壊されたのだろう。その犠牲を無駄にしてはならない。残ったテイラントーたちは広場へと集結し、謎の獣を取り囲んだ。もう逃がさない。必ずこの場で血祭りにあげ、ジャロウデク軍の進軍を妨げた報いを受けさせる。

そう決意して、いたのだが。

ズル、ズルル……。

耳障りな音がする。

辛うじて残っていた篝火がゆらゆらと照らす街の中に、牙がギリリと輝く獣の顎が浮かび上がる。

音の正体は、たつたいま破壊されたテイラントー。

首を上げる獣の口に、テイラントーの頭部が啜えられている。

何かを引きずるような音は、テイラントーの頭部から胴体へとつながる多数の銀線神経シルバナーブが引き抜かれる音だ。

それはまるで首ごと脊髓を抜くようなおぞましい光景であり、ティラントーたちは数で勝るにもかかわらずじり、と後退を余儀なくされ。

ギ、ギギギギギ……。

獣の顎に力が加わっていくのがわかる。

口の中にあるティラントーの頭が異音と共にひしゃげ始め。

——バギン！

「ヒィ……！」

砕かれ、ぼらぼらになって散らばる様を見せつけられて。

——ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

この夜の支配者があの獣なのだ、思い知らされた。



ちなみに、この獣ことグランレオンの操縦者はというと。

「これは畑を踏みつぶした分！　これはクシエペルカを侵略した分！　これはお前らの相手ばかりしてて最近あんまり畑仕事できない俺の分！　これはオーヴィニエ山脈

の西に来て村とは風とか土とか違うよなって気分になった俺の分！　そして、今日一度も畑仕事できてない俺の分だあああああ！」

ほぼ私怨で殴っていた。



結論から言おう。作戦は成功した。

エルくんたちはお姫様たち3人を無事に救出して、適当に街をひつかきまわしてから撤収した俺と合流して、長居は無用とばかりに東を目指す。

移動速度が命ということなので、アディちゃんとキッドくんのツェンドリンブルと、ついでに俺のカルディタンクが輸送メンバーに選ばれ、ツェンドリンブル2頭とカルディタンクでそれぞれ荷馬車を引いていく。

カルディタンク、こうして街道上を移動するだけだと荷馬車引いてもツェンドリンブルに負けないでやんの。

救出さえ済ませてしまえば割と楽な話。どうせジャロウデクの幻晶騎士じゃ追いつけないし巡航速度で走ればいい……わけじゃない。

「エルくん！　なんか空に変なのが！」

「おお、あれが噂に聞く飛空船とやら！ 飛んできます！ 本当に飛んできますよ！」

「自分の幻晶騎士で飛べるでしょエルくん」

「それはそれ、これはこれです！」

アデイちゃんが発見した、追撃の飛空船だ。

ツェンドリンブルとついでにカルデイタンクが幻晶騎士よりは足が速いとはいえ、さすがに空を飛ぶ乗り物には敵わない。しかも運の悪いことに西から東へ風が吹いている。これを天祐と乗った指揮官がいたのだろう。すでに飛空船は俺たちを射程に捉えるのでは、という距離まで迫りつつあった。

が、それを幸いと思っているのはジャロウデクの側だけだろう。

「いいですねえ、どうやって飛んでいるのか是非知りたいです！ ちよつともらつてきます！ 先輩も手伝ってください！」

「いや、俺が手伝うことなんてないと思うけど。あと強奪はどうかと思うな」

「ジャロウデク王国は以前テレスタールを強奪したから、今度はこつちの番つてこといいんです！ 敵の物は僕の物、僕の物も僕の物です！」

「なにその暴君理論」

なにせ、こつちには航空戦力があるのだからして。

カルデイタンクが引く荷馬車に一応積んできたガルダウイングはおまけみたいなも

のだけど、エルくんのイカルガは完全にガチの空戦ができるヤツだ。残念ながら、輸送船的な運用が主である飛空船じゃあ、ねえ。

そんな風に思いながら、とりあえず俺は飛ぶ。

「じゃ、キッドくん。話しておいた通りカルデイトンクのハンドル頼むよ。普通にツェンドリントンを操縦すればついていくようにはなってるから」

「お、おう。自分が乗ってない幻晶騎士も操縦するつて変な気分だな……」

その際、荷馬車を引くカルデイトンクをどうするかについては、キッドくんにお任せすればいい。

そのための方法は用意してある。

クシエペルカ王国に来て銀鳳騎士団製というか俺が開発に携わった幻晶獣機たちを運用する中で、気付いた問題点が一つある。

グランレオンとガルダウイングとカルデイトンク、ほぼ俺一人しか操縦できねえ。

イカルガのように、そもそもエルくんしか操縦できないというわけではない。

誰が乗ってもそれなりに動かせるんだけど、実戦に耐えるレベルでの操縦となると俺かエルくんしかできないということが判明した。

さもありません、形も動きも何もかも幻晶騎士とは違うんだから、その辺は切り替えと

訓練が必要だろう。

なんか俺は普通にそれぞれ使えるけど。エドガー達には変態を見る目で見られたけど、そんなにおかしいことなのかなあ。

ともあれ、これは何気に大問題だった。

ガルダウイングで偵察して、グランレオンで襲撃して、行き帰りはカルデイトンクで荷馬車を引く。これを一々乗り換えてやっていては面倒に過ぎる。なんとかもちよつと楽にする方法は……と考えた結果編み出されたのが、この方法。

異なる機体同士を、捻り合わせて通信可能な信号量を増やした銀線神経でつなぎ、マギウスエンジンに専用スクリプトを入れて外部からの遠隔操作を可能にしました。

まあ、今のところ遠隔操作できるのは操縦が簡単なカルデイトンクの走行くらいなんだけどね。とはいえ、こうしてガルダウイングの中からカルデイトンクを操縦して、いざとなったら他の人にも操縦頼めるんだから楽なものさね。

事前に用意してあったツェンドリンブルとカルデイトンクの銀線神経接続ポイントをつなげて、操縦権を明け渡す。さて、俺はエルくんと一緒に飛空船の観察に行くつもりでしょうか。

荷馬車の蓋を開き、ガルダウイングで垂直離陸。すでに飛空船に向かって一直線に飛んで行っているエルくんを追いかけて、空を舞った。

「せっかくです先輩！ ドッキングしましょうドッキング！ それで飛空船よりも高く飛ぶんです！ 先輩と、合体したい……♡」

「必要ないから」

ちなみにこの遠隔操縦技術、ガルダウイングに搭載しているドッキング機構の派生だったりもするけど、今は使うまでもないので置いておこうね。



「……は？ なんです、あれは。なんですなんです！ あれが噂の鬼神!? 飛んでるじゃないですか！ しかももう1機……鳥!? 鳥なんですかあれは!? でもあきらかに幻晶騎士……それが、私の飛空船よりも高く!? 速く!? 飛ぶですつてえええええ!」

何者かに奪われたクシエペルカ王族の身柄を追う、ジャロウデク王国の飛空船。

鋭い洞察と天運によつて選んだ進路の先で、異形の幻晶騎士に引かれるあからさまに怪しい荷馬車という、どう考えても怪しい集団を見つけてとりあえず叩き潰してから調べようと思つた矢先、その集団から「何か」が空へと上がつて来た。

迎撃の法弾、ではない。それは確かな質量と、あからさまに見たことのない常識外れ

な姿をした2機の幻晶騎士だった。

1機は、禍々しい面構えになんと6腕。バックウエポンの概念はジャロウデク王国にも普及しているが、それにしても常軌を逸している。なにせ異形の上に、飛ぶのだ。

空とはジャロウデク王国が有する飛空船の領域。まさかそこに幻晶騎士で殴り込みをかけようなどと、尋常なモノではありえない。多分これが噂の鬼神だ、と誰もが確信する。

そしてもう1機、これは鳥。

まっすぐ飛んでいるだけならあるいは鬼神よりも速い、しかしただの鳥ではありえない巨大な、装甲に覆われた翼。これもまた幻晶騎士的ななにかなのだろう。

それを見て発狂しているのは、飛空船の生みの親たる天才、オラシオ・コジャーソ。本国にいるだけでも栄達が約束されているというのに、飛空船が現場でどのように使われているか見たいという理由で戦線へと赴き、今もこうしてクシエペルカ王族追撃の船に乗り込んで来たよくわからない人物、というのがジャロウデク軍の者たちからの評価であり、その見方が間違っていないなかったことは、なんかよくわからないことにめっちゃ怒っていることから明らかだった。

「ふおおおおお!! 私飛空船の上を飛ぶとかいい度胸じゃないですか! ちよつと艦長! いますぐ飛空船をひっくり返してください! あの鳥が見えませんか!」

「無茶を言わんでもらおうか!」

「というか艦長、降下中のティラントーが鬼神に次々撃墜されています! このままでは、本艦にも被害が……!」

血走った眼で繰り出された無茶ぶりにも律儀にツツコミを返すドロテオだったが、事態はそんなことに構っていられる状況をとうに通り過ぎていた。

飛空船は現状の西方諸国において無類の力を発揮する航空兵器であるが、その理由の多くは「他国が同様の兵器を持っていない」ことに起因する、空を飛び、幻晶騎士を輸送できることにある。

つまり、飛空船よりも高く、速く飛ぶものが現ればその優位は崩れ去る。

まさにいまこのとき、しかも2機も現れたことで証明された事実、そのままに。

以前から噂が流れていた鬼神と、おそらくもう1機はこれまた噂の的だった「鳥」と見て間違いない。

それらが旧クシエペルカの王族を奪還し、飛空船に襲い掛かって来た。

勝てるかどうかはわからない。それどころか極めて不利で、しかも間違いないこの情報価値千金。

無理をして挑み、屍を晒すか。

生き恥を晒してでも逃げ帰り、この脅威を伝えるか。

飛空船の指揮を執るドロテオの胸中に襲来した葛藤の結論は。

「おのれ、鬼神！ そして……鳥イ！ 特に鳥！ 空を飛ぶことしか考えてないつばい鳥イ！ あなたは、あなただけは絶対に許しません！ 必ず私のこの手で、その羽引きちぎって地上に墮としてあげますからねええええええ!!」

そんなもの関係ないとばかりに窓にへばりついて怨嗟の叫びをあげるオラシオのことは放っておいて、決断を下した。



「……んひい!？」

「どうしたんですか、先輩?」

「い、いやね? なんかよくわからないけど、こう……初めてエルくんに会った時のような感覚に襲われて」

「なるほど。つまり、先輩のファンが増えたってことですね!」

……そうだね、不安が増えたね。

空域を離脱する飛空船から離れ、なんかいつの間にか別の幻晶騎士に襲われている

ツェンドリンブル達の下へと急行しながら、俺は異様なほどの悪寒に襲われるのでありましたとき。



「というわけで、みなさん。助けたはいいものの塞ぎこんでしまった王女殿下を慰める方法を考えてください」

「……あなたは次に『そういうときは畑を耕すのが一番』と言うわね」

「そういうときは畑を耕すのが一番……ハッ!? やるなヘルヴィー!」

「やるな、じゃないわよこのド農民!」

「褒め言葉ありがとうございます!!」

西方諸国を軒並み巻き込んだ動乱、ウエスト・グランドストーム大西域戦争は、まだ始まったばかりである。

この世界だと、マナが枯渇して魔獣が大量発生する心配がないから気楽

クシエペルカ王国のほぼ東端にある町、ミシリエ。

一度はジャロウデク王国の支配が及んだが、銀鳳騎士団が半ば力技でその魔の手を引つ剥がしたこの街はいま、旧クシエペルカ王国の影を残す飛び飛びとなった土地の中でも特にアツい。

なぜならば。

「失礼します、エレオノーラ姫。ご要望の物をお持ちいたしました」

「まあ！ どうぞ、お入りになって」

扉の向こうから響いてくる、ひよつとしたら世界一かわいい声。

カラコロとカートを押して入った部屋には、一輪の可憐な花が咲いている。

西域にその名を轟かせていた、今は亡き大国クシエペルカ王国。その国すら越えて美貌を讃えられた、エレオノーラ・ミランダ・クシエペルカ姫だった。

ジャロウデク王国によって国王を討ち取られ、形式上は滅んだクシエペルカ王国であ

るが、王族の血は残っている。その、唯一残った正統王位継承者こそがこのお方、エレオノーラ姫だった。

一時はジャロウデク軍によって幽閉されていて、エルくんたちが助け出してミシリエの町へと連れ帰ってからしばらく、当初は塞ぎ込んでいたお姫様も最近はキツドくんたちの励ましもあつて大分元気を取り戻してきた。

……あと、他にも。

「お待たせいたしました。ご要望のプリン・ア・ラ・モード、作って参りました」

「まあまあまあ！ 本当に、何度見てもかわいらしいですわ……」

なんか、俺が作って献上したプリンがお気に召したみたいだね？

助け出された直後の姫様の気落ちした様子と言ったらなかった。

父を、国を失い、逃避行の末に捕まって幽閉され、あまつさえ憎きジャロウデクの王子と結婚させられそうになったというのだから、心身共に疲弊を免れない。

それを気遣い、そしてついでにジャロウデクへ反旗を翻すことを願ってやまないクシエペルカ貴族たちの願いもあつて、とにかく励まそうということになった。

俺も農作業とか気分転換にいいんじゃないかなと提案したかったんだけど、ヘルヴィに却下されました。

結局お姫様を直接助け出したキッドくんが町へ連れ出してミシリエの休日やって、だいぶ心が晴れたようだった。

そして、それ以外にもアレコレと姫様を励ます策を講じていたわけだけど、その中で俺もなんかやれと言われ、農業を封じられて悩みに悩み、選んだのが美味しいお菓子を献上すること。

すごいよね、クシエペルカ貴族。

お姫様に元氣出してもらおうと、どこも物資に困ってるだろうに、肉やら野菜やら果物やら、卵に牛乳、砂糖まで。いろいろ持ち込んで誰か元氣づけられるもの作って！と俺たちにまで頼み込んで来たし。

料理が出来る人はクシエペルカ側にももちろんいるが、こちらでは珍しいフレメヴィーラの料理やお菓子も気分転換になるかもしれないからって。心が広い。

で、なぜか俺も作るようになって、プリンとか作ってみました。

しかも、王族の方にお出しするからにはそのままじゃよくないよね、ということで見目にも気を使って、クリームやら果物やらで飾り付けたア・ラ・モード。

ユシツダ村でも随一の料理の腕を誇るパインさんちの兄ちゃんに子供のころからアレコレ教わっていたので、前世で見たり作ったりしたレシピを思い出せばこのくらいならできるんだよ。クシエペルカに来てからも、出先であれこれみんなのごはん作ったり

してるし。

で、まあ見た目の華やかさでちよつと楽しんでもらえたらイイかな、と思っっていたら。

「これは……すごく、いい……♡」

「……ねえ、エルくん。あのお姫様あんなにクールだったっけ？」

「さあ？」

という感じでめつちや気に入られました。

やたらクールな微笑みを浮かべながらプリンを食べるお姫様の耳がなんか伸びて見えたような気がしたけど、錯覚だよね！

というわけで、今日も今日とて俺はお姫様の注文でプリンを作るのであります。

ちなみに今日は、お姫様とエムリス殿下の叔母上であるマルティナ大公妃様とそのご息女のイサドラ様たちクシエペルカの人たちと、エムリス殿下とエルくんのフレメヴィーラ組とお茶会だ。

……よし、プリンを献上したらすぐ帰ろう。空間の高貴密度が高すぎて、農民の俺は死ぬかもしれないし。

「いつも、美味しいお菓子をありがとうございます。……あの、なにかわたくしでも皆様のお役に立てることはないでしょうか？」

「へ？ ……あ、いや失礼。わ、私にお聞きで？」

「はい」

と思つたら引き留められたあああああ!?

しまった、プリンの魔力が姫様に変な元気を与えたか!?

「周りの皆さまから言われています。女王として立つべきだ、と。ですが、他にも何かできることはないでしょうか。その……騎士様たちのお役に立てる方法が、なにか」

騎士様、ね。お姫様が何を言いたいかわかりました。

マルティナ様は「若いわねー」みたいな目で見ているし、イサドラ様は目を輝かせているし、エムリス殿下とエルくんはきよんとしている。くそつ、なんだこの察しの良さの違いは！ クシエペルカ組とフレメヴィーラ組との間で断絶がひどい。

「えーとえーと、そういうのはうちの騎士団長に聞くのが手っ取り早いと思うのですが」「それはいかんぞ。エルネスティに頼んだが最後、明日にはヘレナの専用幻晶騎士が作られてしまう」

「ご要望とあらば、今すぐにも設計に取り掛かりますが」

「騎士くん、やめてくれ」

ともあれ一応提案してみるが、早速エムリス殿下に却下された。まあ仕方あるまい。エルくん、割とマジで腰浮かしてるし。マルティナ様が頭痛をこらえるように額を押さ

えてるよ。

ちなみに余談だが、エルくんは特に意味もなくマルチナ様専用の幻晶騎士を作りたがっている。

「高機動高火力の砲撃主体の機体作りましょうよ！ 機体名はヘレイテルパラッシュで！」

「やめなさい」

ただでさえクシエペルカの機体生産ラインはフル稼働中なので、みんな全力で止めたけど。

閑話休題。

「あーえーと、とはいえあまりこちら側に関わることはおすすめしません。我らはあくまで『銀鳳商会』として関わらせていただいているわけですから、当然表向きの身分もそのように偽っています。エムリス殿下が『若旦那』と呼ばれているように、実は我らも偽名、通称を使っております」

これは半分くらいマジだ。

作戦中はコールサイン的なものでお互い呼び合うこともたまにある。……エルくんがノリノリでやりたがったからなんだけどね！

「しかも、エルネスティ団長のセンスは微妙です。エレオノーラ姫の場合も、おかしな名

その、数日後。

「さて、行くぜツェンドリンブル！」

『メインシステム、パイロットデータ、認証開始』

「うおおおおお!!? ひ、姫様!?! 姫様の声が!?!」

「ああ、驚かせてごめんねキッドくん。それ姫様の声を録音したヤツだから、本人はいないよ」

姫様の協力したい欲は、キッドくん用ツェンドリンブルのアナウンスボイスという形で満たしてもらったことにしました。音声の録音・再生機能はエルくんが一晩で実装してくれました。

録音時の姫様は緊張していたのか、AI音声みたいにちよつと硬い声になっちゃったのもご愛敬だよね。



その後。

ミシリエにエレオノーラ姫がいることは、旧クシエペルカ貴族たちに大々的に喧伝し

た。

侵略者ジャロウデクの面子を潰し、クシエペルカに反撃の気概ありと知らしめる戦略上欠かせないことであり、それは同時にジャロウデク軍に俺たちの本拠地を知らせることに他ならない。

各地に散って情報を集めてくれているノーラさんたち藍鷹騎士団の話によると、実際にミシリエへ向かって飛空船の大船団が押し寄せているらしい。

接敵前の現段階からノーラさんたちによる遅延工作や破壊活動が行われてもりもり士気と数を削ってくれているし、ミシリエはミシリエでエルくん発案によるクシエペルカ王国製幻晶騎士ヘレスヴァントへの強化策、ヘレスヴァント・ヴィードへの改修が進んでいる。蓄魔力式装甲で全身を覆うことで防御力と魔力容量の向上を図って砲撃主体で戦う、「塔の騎士」の異名を取る機体だ。

……なぜか、たまに騎士甲冑にでっかいタワーシールドを構えた「塔」要素が別のところから来てるっぽい機体が混じってるんだけど、あれはなんなんだろうね？

ともあれ、それらと並んでレスヴァントの設計をベースにカルデイトーレの設計思想をミックスした新型ヘレーヴァンティアが続々とロールアウトしつつある。

決戦は避けられない。

世界で唯一の実用航空戦力と、イカルガを含むあれやこれやを用意して手ぐすね引い

ているエルくんと戦いの日は、近い。

……あれ、これってジャロウデクがボッコボコにされるやつじゃね？

「来たわね、エルくんと私を引き裂くにつつきジャロウデク……！ エルくん、ジャベリンありがとうねえ！」

「姫様のためにも……やるぜ！ ジャベリンはあ、こう使う!!」

ボッコボコにされるヤツでした。

飛空船対策として用意された、垂直投射式連装投槍器が火を噴く。木の枝やらなにや

らで偽装したシートをかぶせて森の中に潜んでいたツェンドリンブル部隊が姿を現し、銀線神経によって有線誘導された槍を空高く舞わせたのだ。

飛空船は既に直上。自然、あるいは魔法の風頼りでしか動けない飛空船には無数に飛び上がるそれらを避ける術などなく、次々ぶつ刺さって何隻かは火を噴いて落ちていく。

エルくんが対飛空船戦術として選んだのは、待ち伏せと対空兵器。

居場所が知られている以上逃げることは下策。藍鷹騎士団の人たちやジャロウデク軍がミシリエへ至るまでの間に立ちほだかつてくれたクシエペルカの人たちが稼いでくれた時間で迎撃の用意を整えて、むしろことごとくを叩き潰す。それこそが銀鳳騎士

団の戦い方だった。

俺も、今日まで結構大変でした。

人手が足りない鍛冶師隊の手伝いをしたり、エルくんにつき合わされて新型機の設計の計算やらなにやらをしたり、ツェンドリンブル配置場所を確保するためにカルデイタンクで森を切り開いたりなどなど。

そして、今日。決戦のこの日は。

「はい、ティラントーを下ろそうとしてる飛空船は燃やしちやおうねー。……あいつら、やたら重くて畑の土を潰すから嫌いなんだよね」

俺が操縦しているのはカルデイタンク。ただし、「フル装備」の。

森の中を適当に切り開いて用意した道を、履帯の安定性に任せて縦横に走り抜けながら、ジャベリンの再装填を幻晶甲冑に頼る都合上あまり移動できないツェンドリンブルの射程外にいる飛空船を地上から狙い撃つカルデイタンク。

そう、いまのカルデイタンクは地对空攻撃ができる。

法撃用の装備、それもツェンドリンブルの3式装備に搭載されている大型魔獣用の魔導兵装フルユニットの槍を両肩に備えているのだ。

……これこそがカルデイタンクの完全武装形態、カルデイタンク・フルパッケージ。

本来武装が少ないカルディタンクの背部に追加された、マルチプルウェポンアーム。カルディタンク本来の両腕に匹敵する臂力とゴツさ、各部に搭載された火、風、雷各系統の魔導兵装と、両肩から突き出る轟炎の槍。そして、それらを運用するために装備した「独立したエーテルリアクタ」。それこそが、カルディタンクを一気に火力特盛にする、エルくんからのプレゼントだ。

「先輩！ タンク脚の幻晶騎士開発も順調のようですね！ ……そこで、僕からのプレゼントです。受け取って……くれますか？」

「一応聞いておくけど、プレゼントってエルくんの後ろに鎮座してるでつかいの？」

「さすが先輩！ お目が高いです！」

これに気付かなかった俺の目は節穴どころじゃねーぞ、という巨大装備。

イカルガを作る傍ら、ありもしないヒマをひねり出してまでエルくんが作りやがったカルディタンク互換装備こそが、このパッケージなのでした。

元々、カルディタンクに限らず銀鳳騎士団で開発する機体の計画や設計図は当然エルくんにも報告してある。だから、構造その他を理解して思いついた追加装備を別口で開発することは不可能ではないんだけど、この子つてば自分用の新型作ってる合間にこんなので用意してたよ何考えてるんだ。

一応、もらったからには使ってみなきやとテストしてみただけど、構造その他に一切の無駄も無理もなく、仕様通りにきっちりカルデイタンクの動作を邪魔せず動いて見せた。エルくん、本当にすごい。

まさかのエーテルリアクタ自前搭載のオプションパーツであるがゆえに、使える魔力は潤沢。各部に搭載された魔導兵装もじゃんじゃん使えるので火力も弾幕も思いのまま。おかげでこんなふうにな格的な戦闘でもない限り使い道がなくて今日まで目を見ることがなかったんだけど……いや、本当にすごいなこの火力。

高度とサイズ、そして速度的に外しようもない的へ向かって放つ大火力法撃。

水に浮かぶ船を参考にしただろう飛空船は軽量化の意味もあつてか木材も結構使われてるようで、着弾地点が燃え、なんかすげえ慌てる感が伝わってくる。

こんな感じで火だるまにしたのがもう何隻か。うーん、一方的過ぎていつそ悪いことしてるような気になってくるね？

などと考えつつも、クシエペルカの畑を荒らしたジャロウデクにかける情けはない。容赦なく墮としてやろう。

そんな気分で、ツェンドリンブルが放つ槍と、ついでにさつきから大暴れしているエルくんのイカルガが夜空に光る軌跡を残す中で森を駆け抜けて。

「……あ、森抜けちゃった」

『ん？ ……な、なんだあの幻晶騎士（？）は？ と、とにかく敵だ！ 囲め、包囲して倒せ！』

「やっべ、変なところ出たな」

勢い余って森から飛び出して、しかもそこが既に飛空船から降下したのか徒歩でついて来ていた組か、ティラントーの一部隊のすぐ横だった。

カルディタンの異様に怯むのも一瞬、すぐに体勢を立て直してこちらを囲むように動いてくるのはさすが本職の軍人。俺みたいな農民とはエライ違いだ。

カルディタンはパワーもあるしいまや火力も我ながら恐ろしいが、だからこそこうして近くを多数で囲まれた場合は不利になる。下手に魔導兵装ぶつぱすると、それこそこつちまで巻き添えくらうし。

だから、ジャロウデクの動きは正しい。

カルディタンを狩るのなら、その行動は一番良い選択肢で、迷いなく初見でこんな判断を下せる辺り敵部隊の指揮官はきつととても優秀で。

「……みんな、丸太は持ったな！」

『隊長ー！ 謎の幻晶騎士が、そこらに転がってた木の幹を武器みたいに構えてるんですがあー!!』

『私に言うなー!!』

「さつきまでカルディタンクが爆走し、とどころどころぶつかって邪魔だからと切り倒したりなぎ倒してた木が転がっている場所」でなかったなら、その評価を下せたんだけどね。

倒れた自身を起こすこともできるカルディタンクのパワーをもつてすれば、そこらに転がっている木など棒きれも同然。だが、当然のことながら質量も長さもそれなりにあるわけで。

「丸太クラツシユ！」

『うおわー!? 枝が、枝がめっちゃ絡む!?!』

『きよ、距離を取れ! あれで殴られたらいかにティラントーと言えど……!』

「はーい、法撃のちようどいい位置まで移動ご苦労さん」

『しまっ……!?!』

と、いう感じでした。

相変わらず俺の作った機体って初見殺しだなーと思いつつ、夜の戦いに興じる。
ミシリエの長い夜は、まだ明けない。

「ええい、鬼神はもう見ました! 鳥はどうしたんです鳥は! 飛空船とも鬼神とも違うと思しき飛び方をしていたあの鳥! もう一度くらい見ておかないと原理がわから

ないではないですかああああ!!」

……飛空船の相手をしなかったのは、以前いやな予感がしたからとかそんな理由じゃないよ。本当だよ。



あの夜の戦いは、文句なしにクシエベルカ側の勝利だった。

銀鳳騎士団の対空装備もクシエベルカのレスヴァント・ヴィードやレーヴァンティアも活躍して、なんとエルくんに至っては敵の総大将を一騎打ちにて討ち取った。

……知らないとはいえ、エルくん相手にタイマン挑むとかジャロウデクの王子とやらもすげえ人だな、とは銀鳳騎士団全員に共通する戦慄だった。

当然のことながら、戦利品も多い。

叩きのめしたテイラントーから回収された素材やエーテルリアクタに加え、ほぼ無傷で鹵獲出来た飛空船。エルくんの喜びようといったらなく、早晩ジャロウデク側の技術は丸裸にされてしまうことだろう。南無。

……と、喜んでいられる時期はそう長くなかった。

さすがに総大将の討ち死には、ジャロウデクにとっても小さくない影響を与えたようで、戦略が大幅に変化した。

これまでは我が物顔でクシエペルカ領内をのし歩いていたティラントーの姿が消え、その代わりジャロウデク支配域の拠点に固く閉じ込められるようになる。

ジャロウデクの主力である幻晶騎士、ティラントーは高出力重装甲の機体。正面きつての野戦はもとより、足を止めての拠点防衛に徹するようになる。それこそ銀鳳騎士団の第一中隊や第二中隊が殴りかかっても容易には突破できない防御力を誇る。

そうして、殻に閉じこもるようになった結果、戦線は膠着。

クシエペルカ側は新型機の量産体制に入って戦力を整える。ジャロウデクは特に動きがないようで……それがとんでもなく、不気味だった。



「さて、噂の竜トレイクとやら、本当に出てくるのかね？」

クシエペルカとジャロウデクの領地が微妙に接していたり塗り替わったりしている、安全とは言い切れない空域をガルダウイングが飛ぶ。後方にはエルくんたちと銀鳳騎士団第二中隊の面々が列をなす、進軍の最中。

俺は空中からの先行偵察を任されていた。

偵察自体は、クシエペルカに来てから何度となくやったこと。今更珍しいものでもないが、目的は極めて珍しい。

それもそのはず、索敵対象は「竜」。最近戦場に投入され、クシエペルカ側に甚大な被害をもたらしているという竜のような姿をした巨大飛空船、すなわち飛竜戦艦なのだからして。

この飛空船に関する報告は少なく、正確性も欠いている。

なぜなら、飛竜戦艦に襲われた拠点はことごとくが陥落し、生き残りも少ないせいだ。そのため、なんかヤバイやつが戦場で暴れているということだけしかわからず、結果として戦力不明な相手への対処のために銀鳳騎士団の総力が投入されることになった。

エドガーたち第一中隊とヘルヴィ率いる第三中隊は別行動。俺は第二中隊を中心としたこちらの部隊に組み込まれ、ガルダウィングの航続距離と速度を見込まれていつものごとく偵察をしているわけなんだけれども。

「ぎゃあああああ!?! 追ってくるううううう!?! しかもあきらかに飛空船より速い
いいいいいい!?!」

ピンゴ。

クシエペルカ軍が詰めている砦を空から襲う、冗談のように巨大なシルエット。

なんか一息で砦を丸ごと包むような火を吹く存在なんて、ジャロウデクの秘密兵器以外ではありえないし、あつて欲しくない。

俺の任務は偵察と陽動。もしも童を見つけたら軽くちよつかいを出してエルくんたちのいる方向へと誘導することだったんだけど……こいつ、予想以上に速い。

あきらかにこれまでの飛空船とは違う、魔導噴流推進器によると思われる加速が、巨体に尋常ならざる加速を与えた。

おそらくガルダウイングの方が最高速では勝っているだろうが、飛竜戦艦はなんか全身至るところに幻晶騎士の上半身を埋め込んで砲台としていているうえ、たまに砦を襲った口から吐く炎まで使ってきた。なんかこう、目の前を飛んでてウザいから、ではなく明らかに俺を狙う強い意志を感じるね？

「エルくん早くきてー！ このままじゃ丸焼きにされちゃうからー！」

「お待たせしました！ これはまた、とんでもないものを作ってきましたね……僕とイカルガの相手として、不足はありません！」

そんなこんなで一目散にトンズラこいて、さつそく飛んできてくれていたエルくんとすれ違つて飛竜戦艦の相手を任せることに成功。ふう、死ぬかと思つた。

少し落ち着いて地上に目をやると、そつちもなかなか大変な状況になっていた。

岩から焼け出された生き残りの幻晶騎士はこちらへ向かって撤退していて、ディートリヒ率いる第二中隊との合流はもうすぐ。だけどそのすぐ後ろからジャロウデク軍の地上部隊が迫っている。

ジャロウデク側の先頭ではなんか機体のあちこちに刃物をくつつけた変態臭い機体が突っ走っていて、アレは絶対にヤバイヤツだという感じがひしひしとするけど、こっちはディートリヒに任せよう。

多分、現状で飛竜戦艦に対抗しうる戦力はエルくんとジャベリン装備のツェンドリンブルで来ているアディちゃん、そして俺くらいだろうから。

「うーん、さっそく恐ろしいくらい激しい戦闘。あそこにガルダウイングで突っ込むのは無理があるな。イカルガの攻撃も防ぐか弾いてるみたいだし、火力が必要だ。……火力、かあ」

というわけで、激しい戦闘を繰り広げながらどこ遠ざかっていくエルくんたちを見送りつつ、俺はガルダウイングの高度を下げる。向かう先は、アディちゃんに引っ張ってきてもらっていたカルデイタンクが置いてきぼりにされている場所、だ。



「おのれ、鬼神！ ヴィーヴィルの力をもってしても落としきれんだと！」

飛竜戦艦。

クシエペルカ側からは竜ドレイクと恐れられるその名は「ヴィーヴィル」。ジャロウデク王国に飛空船をもたらしした天才、オラシオ・コジャーソが鬼神という空飛ぶ脅威に対抗するため作り上げた、戦う飛空船である。

古の伝説に語られる魔獣の姿を模したことは伊達ではなく、その戦闘能力は破格。今日までに狙った敵は防衛拠点ごと燃やし尽くし、叩き潰してきた。

そう、「今日まで」は。

ヴィーヴィルが最強を誇っていられたのは、もう何度目になるか、目の前を飛び過ぎたたった一機の幻晶騎士、鬼神と会うまでの間だった。

鬼神には、以前から何度となく苦汁を嘗めさせられてきた。

王女を奪われ、追撃に向かうも飛空船以外に空を飛ぶ相手と戦う術を知らなかったために撤退を強いられ、あまつさえミシリエに侵攻をかけた際はクリストバルさえ討ち取られた。

謹慎を解かれ、復讐に燃えるドロテオはオラシオ・コジャーソから持ち掛けられた飛竜戦艦の運用という策に、乗った。

その力はまさしく超常。いまだ機能や構造、運用に難がある若い兵器であることは否

めない上に、エーテルリアクタへの負荷も高い。おそらく、寿命はそう長くはないだろう。だが間違はなく最強クラスの兵器であり、これがあるだけでクシエペルカ併呑はたやすいことだと思われた。

鬼神さえ、鬼神さえいなければ。

ドロテオはその怨念にも近い怒りを飲み込んで、艦橋の部下たちへと矢継ぎ早に指示を下す。

「鬼神がまた回り込んだ！ 取り舵、並びに推力上昇！ 引き離しつつ正面に捉えろ！

各砲台は鬼神を射程に捉え次第撃ちまくれ！」

世界で初めて、はつきりとした攻撃能力を有する飛空船。

その艦長としてドロテオの指揮は先例がないにも関わらず最良と言つていい境地にある。

的確にして冷静、大胆不敵。新たな兵器を新たな発想のもとに使いこなすその様は、老練でありながら自在でもあり。

「鬼神、なおも回避！ こちらに向かつてきます！」

「慌てるな、機関最大戦速！ 一瞬で交差して仕切りなোস！」

それでも、鬼神には届かない。

普通の幻晶騎士なら、束になつても平らげるだけの力を有するヴィーヴィル。しかし

鬼神にはそのどれもが通用しなかった。

有利ではある、はずだ。ドロテオの戦術眼はそのように判断を下している。このまま戦いを続けて行けば、いずれ勝てるかもしれない。鬼神の戦いは、なんかもう冗談だろお前と文句を言いたくなるほど激しく、速く、変幻自在ではあるが、ときにドロテオの目からすると驚くほどの単純さを見せる。

おそらく騎操士は年若い者ではないか。それが長年の経験からドロテオが導き出した結論だった。

が、そんなことはどうでもいい。今はあの憎き怨敵を叩き潰すことだけが重要だ。

最初の接敵地点からは離れ、しかしなんやかんやの末に再び元の場所へ戻ってきつつある。

地上の戦況を一瞬だけ垣間見たところによれば、義息であるグスターボ・マルドネス率いる部隊がおそらく鬼神の配下だろう赤を中心とした幻晶騎士とはまだ交戦していた。

まさか、ドロテオの目から見ても変態臭いこだわりと強さを持つグスターボが敗れることはないだろうが、あるいは。

不利はないというのに、収まらない不安。

ドロテオは勝負を急ぐ必要があると、確信を新たにした。

そしてこの時、ドロテオは気付いていなかった。

この遭遇戦の最初に自分達の目に入って来た、「鳥」。

ヴィーヴィルの開発者であるオラシオ・コジャーソが特に執着し、「見つけたら絶対ぶっ殺してくださいね！」としつつこく言ってきた鳥。

鬼神と違って大した戦闘能力を持たない斥候らしく、ヴィーヴィルと接敵するなり逃げの一手を打った、逃げ足だけなら鬼神すら上回るかもしれない、幻晶騎士っぽいもの。

そんな鳥が、その操縦者が、戦場から姿を消してから、一体何をしていたのかを。ドロテオは、その時が来るまで全く予想もしていなかった。



「さーて、準備は上々。……まさか、これを使う相手が出てくるなんてなあ」

竜との戦闘をエルくんに任せてから、俺は地上に降りてデイトリヒたちが戦っている場からも少し離れたところに放置されているカルデイトンクの下へと降り立った。

アデイちゃん、エルくんを追いかけて突っ走っていったけど、カルデイトンクを戦闘に巻き込まれないところに置いていってくれたのは助かった。

ガルダウイングからカルディタンクへと乗り換えて、エーテルリアクタを起動。

対空戦闘が予想されていたので、今回装備してきたのは以前ミシリエ攻防戦の時にも使ったフルパッケージ。

つまり、エーテルリアクタを2機搭載した状態。

このときだけ、カルディタンクが使える奥の手がある。

この機能はエルくんにも伝えていない。

特別な回路や魔導兵装を搭載しているわけではなく、いまあるカルディタンクの機能をちよつと応用することで実現可能なものだし、うっかり伝えたらエルくんがまた騒ぎそうだったからだ。本来なら、使うつもりもなかったしね。

だがそうも言つてはいられない。

あの竜という兵器は間違いなく戦略レベルの影響を及ぼす超兵器。この場で墜とすか、少なくとも被害、あるいは脅威を植え付けておかなければ。

てなわけで、俺は切り札を、切った。

「エーテルリアクタ接続、並びに両機で別個に魔法を起動。パッケージ側の魔法は……
〈大気圧縮〉」

まず第一段階。エーテルリアクタの機能を連結して魔力生成能力を向上させる。

エルくん、最初からこうやって使えるようにパッケージ側を設計してくるんだから本当に未恐ろしい。

ともあれ今はそれを有効に活用させていただいて、ガルダウィングの離着陸と飛行制御にも使用している風系統の魔法を応用して周辺の大気を圧縮し、エーテルリアクタに流し込む。

ここで復習になるのだが、〈エーテルリアクタ〉とは何か。

簡単に言ってしまうえば、というか簡単な原理しか知らないが、大気中に存在するエーテルを魔法の源であるエネルギー、マナに変換する装置だ。

だからエーテルリアクタには吸排気機構が備えられているし、2機詰めば単純計算で生成するマナの量も2倍になる。

では、マナをより多く生成するにはどうすればいいか。

一つの答えは、エーテルリアクタそのものを高性能にするというエルくんが採用している方法。

もう一つの答えは、エーテルリアクタを増やすというツェンドリンブルやおそらく飛竜戦艦も取っているだろう方法。

そして、もう一つ。エルくんが言うにはジャロウデク軍のテイランターがやっているのかもと仮説を検証中の、第三の方法。

エーテルリアクタにより多くのエーテルを注ぎ込むという、エーテルリアクタの寿命を縮める禁断の方法だ。

「さあ、風が来るぞ……」

ヒュウヒュウ、からゴウゴウへと周囲を包む音が変化する。

片方のエーテルリアクタから生成された魔力で意図的に低気圧を作り出して風を集めて、もう片方のエーテルリアクタに突っ込んでいくこの魔法、見た目は地味だが効果範囲はなかなか広い。

結果、集められた大気とその中に含まれるエーテルが圧縮された状態でエーテルリアクタへと入り、飛躍的に上昇するマナプールの魔力量がうなりを上げていく。

これこそが奥の手、へエーテルターボリアクターだ。

……いやちよつと待ってくれ。なんかコックピット暑くなつてない？ エーテルリアクタ、めつちや出力上げてない!?

「うおおお!!? なんかヤバイ! 胸部装甲強化魔法解除! 引つ剥がす……!」

全身の装甲を強化している魔法のうち、胸部装甲の分をカット。あとはカルディタンの剛腕に任せて胸部装甲を力づくで引き剥がす。そうすると、胸部に収められたエーテルリアクタが露出され、魔力が機体内に留まってしまうことを防ぎつつ冷却する、と。

……なんか、ガンガンマナを生み出して光を放ってるエーテルリアクタが！

「マナを溜め過ぎた……？ いや、いまはそれどころじゃない！ とにかくマナを魔法に変換！ 飛竜戦艦、早くこつちへ……ってしまったあ！ マナ制御にマグウスエンジンの全力突っ込んでるから、火器管制に使う余力がない!？」

両腕を掲げ、露出したエーテルリアクタから直接吸い出した魔力をカルデイトンクの正面で結い上げて魔法に変える。術式はシンプルに火炎系。他に複雑なやり方なんぞしている余裕もないし、これだけのマナ容量ならこれで十分だ。てーか眩しいな！ 太陽かこの火の玉は！

「エルくん！ エルくんちよつと来てー!」

『はい、先輩！ なんだかとっても楽しそうなことをしてますね!？』

これをどうにかする方法は、もはや一つしかない。

いつの間にか飛竜戦艦との戦いがこの辺りへ戻ってきていたエルくんに頼る。これに限る。

「ちよつと強い魔法を使おうと思っただけど、魔法の制御にかまけ過ぎて火器管制が出来なくなつちやつてね。悪いけど、照準と引き金をお願いできるかい?」

『見るからにすさまじい威力……！ 光栄です！ ……僕と先輩の、初めての共同作業ですな♡』

「少しは言葉を選ぼう、エルくん。こつちに戻ってきてるアディちゃんのツェンドリンブルが多分俺を狙って全力で槍ぶん投げたから。さすがに遠すぎて届かなかったけど」

飛竜戦艦の頭に銃装剣の魔法を一発ぶち込んで目くらましをしてから、魔導噴流推進器を吹かして文字通りすつ飛んできてくれたエルくんが、地面に足を突いてすごい勢いでスライドしながらカルディタンクの後ろに着く。

俺が説明するより先に頼みたいことを大体わかっていていたらしくて頼もしいね。

……まあ、相変わらず言葉の選び方がアレ過ぎて、最近ようやく仲良くなれたアディちゃんが無かさを察して殺意を飛ばしてきたけど。

後ろからカルディタンクの腕を支え、膝をつけて肩越しに飛竜戦艦を睨むイカルガ。

マナの生成量は十分。威力も間違いなく破格だろう。……というか、すでにカルディタンクの装甲が溶けそうなんだけど！

しかも、正面からは飛竜戦艦が脅威を感じ取ったか、全速で突っ込んでくる。口を大きく開け、灯す光はおそらく皆すら焼き尽くすと言われる大規模砲撃。一気に俺とエルくんを焼き払うつもりなのだろう。

「準備完了だ。高濃度エネルギー変換式大出力魔力砲撃。……名前は？」

『……名付けまで、僕が!? ふ、ふふふふ。ありがとうございます先輩。とっても嬉しいです。——ええ、この名がふさわしいでしょう。おそらく極大の爆発力を、こう呼ば

ねばならない。そんな気がします』

イカルガからの制御によって角度を微調整され、飛竜戦艦を睨むカルデイトンク。

渦を巻いて吹き込む風の中で熱と光を放つ、眩しすぎる光の球体はカルデイトンクとイカルガが重なる影を草原に長く長く刻み、ジュウジュウと装甲を、結晶筋肉を焼き始めた。

空から迫る飛竜戦艦の砲撃が一瞬早い。

カルデイトンクが形成した高密度火炎魔法球が飛び出したのは直後だが、接触はほぼ中間地点。外と中の両方から高温にさらされた魔法球はその形を崩し。

『エクस्पロー………………ジョン!!!』

「ノリノリだねエルくん」

轟音と閃光が、降臨した。

カルデイトンクの重量と安定性に加え、両腕で地面を掴むことでようやく耐えられる衝撃波が地上を薙ぎ払い、なんか遠くの方で戦ってたデイトリヒたち第二中隊とジャロウデクの部隊がバタバタ倒れる。

カルディタンクの影に隠れてしがみついていたイカルガは辛うじて吹き飛ばされずに済んだが、地面が揺れて爆心地直下の草原はめくれあがって焼けた土を晒す、砲撃直後。

「飛竜戦艦は……生きてる!？」

『ですが、無傷ではありません! 見るからに傷ついて、好機……! 先輩、トドメ刺しできます!』

「ああうん、一目散に逃げようとしてるみたいだし、あまり無理しないようにね?」

光が収まったその先にあつたはずの飛竜戦艦は、爆風に煽られたか距離を離し、明らかに動きがぎこちなくなっていた。

それでもなんとかかんとか回頭し、高度を上げつつある。

ぼろぼろと零れるように落ちていく謎の光はおそらく撤退を告げる信号弾で、その予想を裏付けるようにディートリヒたちと交戦していた部隊も後退を始めていた。

なんかよく見たらディートリヒのグウエラリンデが剣をいっぱいつけた変態臭い機体ともつれ合つて大破してるけど、アレは俺のせいじゃないはずだ。多分。

エルくんは元氣いっぱい、さっそく飛竜戦艦を追いかけていったけどさでどうなるか。

巨大で強力な兵器とはいえイカルガとまともに戦つて見せた飛竜戦艦が、いざという

ときの逃げ道になんら策を講じていないとは考え難い。エルくんが深追いしすぎて面倒なことにならないように祈るばかりだ。

「……カルデイトank、こりやもうダメかもわからんね？」

とりあえず俺は、魔力がすつからかんになった上にエーテルリアクタも過剰使用でしばらく使えなくなつてピクリとも動かないカルデイトankの中でしばらく待つておくことにした。

……アデイちゃん、カルデイトankを引つ張つて行つてくれるかなあ。



「かーっ！ カルデイトankが大破！ こりやあ俺はもう戦力になれなくてつれーわー！ かーっ！ というわけで、俺はちよつとクシエペルカの農業を勉強しに……」

「親方、直せますか？」

「大破したのは上半身だけだからな。予備のカルデイトーレの上半身に挿げ替えればそれで終わりだ」

「ちっ！ 農民はクールに去るぜ！」

「知らなかったの？ 銀鳳騎士団第三中隊からは逃げられない……！ というか、そも

そもあんたにはグランレオンもガルダウイングも残ってるじゃない」

「……くっそおおおおお!!」

！
これを機に、乗機が大破したデイトリヒと同じく後方支援に回ろうとしたのになあ

アルマダ会戦で使われた火船戦術って、別に敵軍に直撃したわけじゃないらしい

その日、俺は砂浜で鍬を振るっていた。

水面を遮るものが何もない大海原。穏やかな波がざざん、ざー、ざざんと寄せては返し、植物に元気をくれる眩しい太陽と青い空、その狭間でどこまでも続いていくきめ細かな白い砂が目映える。

「……………耕しても畑にはならねーよなー」

と、思っているんだけどなぜか鍬を振る手が止められない。最近畑仕事してなかったせいかな。あはははは……。

「お〜い、お〜い!」

「……………ん?」

塩気を含んだ海風よりもはるかに乾いたため息をかついていると、どこからともなく声が聞こえてきた。

なんだろう、聞き覚えがあるようなないような、と思いつつ顔を上げると、誰かがこちらへ走ってきていた。

やたらひよろっひよろのもやしみたいな体型をした、騎操士ではありえないおつきん。砂浜だからか海パン一丁の水着姿。

ぼさぼさの髪とメガネの何とも言えないマッドの気配。めんどくさそうな人だなあ。

「いやっほお〜う♪ コジヤーツ最高〜!」

「……」

訂正。間違いなくヤバい人だ。

「あなた、一人で何してるんですか。今日は、飛空船、祭りですよ〜!!」

「え、なにそれ……」

しかも謎の祭りの開催を宣言した。なにこれ怖い。

「お〜い、せんば〜い♡」

「うっ、エルくん!?!」

と、思っていたら今度はコジヤーツさんというらしいおっさんの反対方向からエルくんの声が聞こえてきた。

振り向けば予想通り、蕩けた笑顔でこっちへ走って来るエルくんの姿が。あの声、あの表情。間違いない、相当幻晶騎士をキメている……!」

……でもエルくん、なんで水着は水着でもワンピースなの？ 腰のところではひらひらしてるそれはスカート的な飾りだよな？

「今日は幻晶騎士祭りですよ、先輩！ 僕と一緒に、幻晶騎士の世界を思う存分堪能しましよう♡」

「いえいえ、これからの時代は空！ 私と一緒に、飛空船で旅立つのです！」

「あ、あああ……！」

いかん、あまりの状況に呆然としていたら囲まれた。

砂浜にへたり込む俺の周りをスキップでぐるぐる回りながら洗脳でもしようとするのかお前らつて言葉をかけてくるエルくと謎のおっさん。何この恐怖！

「飛空船、サイコー！」

「幻晶騎士、サイコー！」

「サイコー……海、サイッコー」

「今度は何?！」

しかもまた別の声までもが海の方から聞こえてきた。

何事かと思つて三度目を向けると、そこにはなんかソファアの乗ったイカダが浮いていて、そこに堂々と腰かける水兵服を着込んだちよつとヒゲの生えたおっさんが。誰だお前。

「飛空船サイコー！」

「幻晶騎士、サイコー！」

「海、サイツコー……」

「う、うううう……！」

いずれ劣らぬこと間違いなしの変態三人にあらゆる逃げ道を塞がれ、もはや飛空船か幻晶騎士か海に染まるしかないのか、俺は!? やめてくれ、俺は農業一筋なんだ！ 実家の畑と結婚するんだ！

「さあ、空へ！」

「幻晶騎士のコックピットへ！」

「海、来る？」

包囲の輪が狭まり、三人の手が伸びてきて……！！



「うわああああああああああああああああああああ……あ、夢？」

それら全てが夢オチだと気づき、全身をじっとり濡らすいやな汗の気持ち悪さすら現実の証と思えば愛おしい。

そんな最悪の朝を迎えましたとき。

「うん……？　もう朝ですか、先輩……？」

「そうみたいだね。とりあえず苦しいからどいてくれエルくん」

そうやって飛び起きた俺の体の上に乗っていたエルくんと、ついでに資料がばさりと落ちる。

藍鷹騎士団の人たちが調べてくれたジャロウデク王国の動向に関しての報告で、その中には飛空船の開発者と思しき男、「オラシオ・コジャーソ」の名前が記されていた。



旧クシエペルカ王国首都、デルヴァンクールを守る四方楯要塞^{シルダ・ネリヤク}。味方の時は頼もしかった要塞が、ジャロウデク王国から首都奪還を志して全軍をもって進撃中の新生クシエペルカ王国にとっては大きな壁となって立ちはだかっている。

飛竜戦艦がジャロウデク側に生まれ、それに挑んだクシエペルカ側最強戦力である銀鳳騎士団の戦いは、全体を見れば痛み分け一歩手前くらいに終わった。

負けはしなかったが、倒すこともできなかったわけだ。

飛竜戦艦ははまだ健在である以上、これからの戦略、ならびに女王として立ったエレオノーラ様の拠点となっているフォンタニエの守りにとんでもない不安が出てきた。

そこで採用された作戦が「全軍進撃」。攻撃こそ最大の防御というか、最大の攻撃力を発揮しつつそのついでに最重要防衛対象を守るという一か八かの作戦だ。

もとよりクシエペルカは崖つぶち。ジャロウデクが最優先で狙うだろうエレオノール様のもとに全戦力を集中できるといっても、悪くはない策だと言える。

そして途中に立ちはだかった木端のような砦はことごとくを蹴散らし、たどり着いたのが首都を守る強固な要塞。

要塞を守る川を挟んで展開する平野部にて、ジャロウデク軍とクシエペルカ軍＋銀鳳騎士団の戦力が激突を繰り広げていた。

大地を埋め尽くす勢いの幻晶騎士と、空から襲い掛かる飛空船。

エルくんが技術革新を巻き起こしてから生み出された機体が主力となって繰り広げられたものとしては紛れもなく最大級の戦いだろう。

それを、俺たち銀鳳騎士団の一部は。

「地上は大変そうだなあ」

「ええ、本当に。……混ざりたい」

「ダメだよエルくん。飛竜戦艦の相手をするんでしょ」

「うううう……！ これしか手がないとはいえ、僕も幻晶騎士相手に戦いたいです！」

ジャロウデク軍から鹵獲した飛空船を元に改修した対空衝角艦（ジルバヴェール）に乗って、遠目から眺めていた。

これこそが、クシエペルカというか銀鳳騎士団が用意した飛竜戦艦対策の一つ。基本的にエルくんのイカルガに任せるにしても、二の矢は必要ということだ。

そして、俺もこの船に乗せてもらっている。なにせ、この戦いにおける航空戦力は少ない。前回カルディタンクで痛い目見せた以上そつちの対策は取られてる可能性があるから、こうして地上の手伝いではなく、ガルダウィングに乗って飛竜待ちをしていた。

「とりあえず、先輩。もし本当に飛竜戦艦が来た場合は例の作戦、お願いします」

「……言い出しておいてなんだけど、本当にやるの？ うまくすれば効くとは思うけど、そのあとのリスクもそれなりに高いよ」

「それは僕も、クシエペルカのみなさんも承知しています。現状最優先されるべきは飛竜戦艦の速やかな撃墜。多少の危険は覚悟の上です」

地上で繰り広げられる一進一退の攻防。

要塞を守るジャロウデクと、そこに攻め入るクシエペルカ。藍鷹騎士団の人たちが主導して幻晶甲冑で砦に潜入し、中からはね橋を下ろす計画になってはいるが、その作戦成り立てにはまだかかると見えて、戦線は動かない。

だから、きっとそれは運命だった。

「親方！ 飛竜戦艦だ！」

「来やがったか……！」

ジルバヴェールに鳴り響く警報。地上にもその音が伝わったか、ざわめく両軍。山の影からゾロリと首をのぞかせた、巨大すぎる異形。

この戦争の趨勢を決する巨大兵器と、エルくんが操る最強の機動兵器が、揃った。

『……はじめから、わかっていました。いつか、こんな日がくると』

ジルバヴェールの上に陣取り、飛竜戦艦を見据えるイカルガからエルくんの声が響く。艦内への連絡用伝声管ではなくただの拡声器を使っているから、多分俺にしか聞こえていない、聞かせる気がないのだろう、エルくんが思い描く世界の在り方。

『自分で言うのもなんですが、僕とイカルガは単騎として他のあらゆる戦力と隔絶した強さを持っています。それを上回るために強い〈個〉を生み出せるかは不確定要素が強いことから、たくさんの人の、たくさんの物資の力を束ねて強く大きな兵器で対抗する、大艦巨砲主義の時代が来ることは歴史の必然です』

きつと遠い目をしているのだろう。

ロボット好きで、トチ狂って俺まで仲間引きずり込んで生き生きと日々を楽しんで

いるエルくんからすれば、飛竜戦艦の誕生とその後の派生や進化によって訪れる巨大な戦艦艦こそが戦場の主役を飾る時代は決して望ましいものではないはずだ。

「戦場を巨大兵器が闊歩して、人型の幻晶騎士は片隅に追いやられることでしよう。「大多数の幻晶騎士にとつて、ジャイアントキリングは奇跡の親戚」。そんな風に言われる時代が、いつか来ます。……だけど今日じゃありません」

イカルガが顔を上げる。睨む先には、これからの時代にどちらが残るか、互いの存在を賭けて問うべき相手、飛竜戦艦。

『……だから、ここぞで潰します。「飛竜戦艦はなんかすごそうだったけどやっぱり幻晶騎士だよね」と後世の歴史書に刻んでもらうためにも、今日でその勇名を地に墮とす』

底知れない決意と覚悟が、そこにはあった。

その源は紛れもなく趣味だけだ。

『ええ、やってやります必ずや。その果てに、僕の名前がこの世界から見れば異常極まりないヘイレギュラー』として知れ渡ることになるとしても!』

「言ってることと反対に声がめっちゃ嬉しそうだよエルくん」

哀れ、飛竜戦艦。

君はきつと今日で終わる。その理由は、「エルくんの趣味を邪魔した」からだろう。



「また鬼神ですか。おかしいですね、さつきちらつと鳥が見えたはずなんですが」

「ゴジャーソ卿！ 今はそのようなことを気にしている場合ではない！ 各砲座、状況知らせ！」

飛竜戦艦、ヴィーヴィル艦橋。そこはいま、狂乱の只中であつた。

全軍を投入してきたクシエペルカとの決戦。当然そこには鬼神もあり、いよいよ雌雄を決する時が来たと、ドロテオをはじめとした乗員たちは覚悟を決めてここにある。

なんか一人そういう雰囲気を全く意に介さないヴィーヴィル開発者も同行していたりするが、それは置いて。

鬼神との戦いはこれで二度目。おそらく何らかの対策を取つて来るだろうと予想されてはいたが、まさか飛空船まで持ち出してくると思つておらず、またしても度肝を抜かれた。

しかも、鬼神が座乗する飛空船から放たれた無数のジャベリン。すでに見た装備だからと近接防衛火器で薙ぎ払えば、それこそが相手の狙いと知らされた。

敵の企みは槍ではなく、迎撃されることによつて飛び散るように仕込まれた油。

油まみれになつたヴィーヴィルは鬼神が放つた法撃によつて燃え上がり、甚大な被害

を被った。

それでも平然としているオラシオ・コジャールソが何者なのかという感はあるが、無駄に騒がれるよりもマシだろう。

だが、これほどの攻撃を繰り返せるとは思えない。初手こそ奪われる形になったが、勝負はこれから。ドロテオは必殺の意思を込めて指揮を放つ。どれだけ逃げ回られようと、必ず捕えて引きちぎる。

亡きクリストバルの無念を晴らすためにも、かならずや鬼神の首級を捧げるのだ。

と、思っていた。

ドロテオの目は戦場に最低限の注意を払ってこそいたものの鬼神しか映しておらず。

クシエペルカに与するフレメヴィーラ王国の一番ヤベー奴らの中に、エルネステイと同じくらい頓狂なことを考えるバカがいるなどさすがに想像もできず。

「かつ、艦長！」

「どうした、敵の増援か!？」

周辺警戒に当たっていた兵からの悲鳴としか思えない報告を受け。

「そ、空から……!！」

「なんだ、報告は正確にしろ！」

空に、何が。

飛空船とヴィーヴイル。そして鬼神たちだけがいるはずのこの空に、その上に、一体何がいるのかと上空の様子を窺い。

「空から……飛空船が降ってきます!!」

「な……」

燃え盛る飛空船がまっすぐヴィーヴイルへ向かって落ちてくるのを目にして。

「なにいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

大西域戦争が始まって以来、というか鬼神と出会って以来何度目になるかわからない絶叫を、上げた。

「目には目を、歯には歯を。そして竜ドレイクにはドレイクを。……なーんてね」

そして、この作戦の首謀者のこんな独り言をもし耳にしていれば、必ずやブチ殺すと覚悟を新たにしていたことだろう。



エルくんがジャロウデク軍の飛空船をほぼ無傷で鹵獲したことで、その構造や機能の解析が進み、さらに藍鷹騎士団の人たちによる乗員たちからの「聞き取り」によって運用面での情報が揃ってきた。

それによって判明したのが、緊急時の飛空船脱出方法だった。

飛空船はなにせ強力な兵器であり、機密の塊。万が一にっちもさっちもいなくなつて乗員離脱と破棄が必要になった場合、そこらに放り捨てて行つて敵の手に落ちれば面倒なことになりかねない。

そのあたりを解決するためにジャロウデク軍が周知徹底していた方法が、「乗員離脱後のエーテリックレビテータ暴走」という方法だった。

「エーテリックレビテータ」とは、飛空船の中枢あたりに据えられている浮力の元らしき機構。何らかの手段でエーテル濃度を高めると、物体に浮力が働く力場が発生するという性質がエーテルにはあるらしい。

この装置を使って飛ぶ物体の高度はエーテル濃度によって決まり、濃ければ濃いほど高く、逆に薄ければ低い高度で安定する。言うなれば、ある高度を海面とする船のようなものだろうか。

そして、この性質を利用した脱出マニュアル。

飛空船の自力航行が不可能となった場合、一旦高度を下げた状態で搭載されている幻晶騎士や乗員を鎖やロープの吊り下げによって地上へ降ろす。まあ、そう簡単ではないので各々魔法によるフオローやなんかが必要になるらしいけどそこはそれ。

そうして乗員の離脱後、時限装置によってエーテリックレビテータ内にとびつきりの高濃度エーテルを注入。当然飛空船の高度はガンガン上がり、その後エーテルの枯渇、あるいは装置の故障によって力場が消失。十分な高さ、すなわち位置エネルギーを得た飛空船は重力に引かれて地上に落下し、爆発四散。機密は自然と保持されるというわけだ。

戦場で悠長に降下している余裕があるかどうかは微妙だが、そのあたりは艦長判断による臨機応変によってどうにかする最後の手段としてこんな方法が用意されているとのことだった。

なので。

「はい、幻晶騎士は無事に下ろすわけにいかないから鎖切っちゃいましょうねー」
「うぎやあああああ!」

飛竜戦艦との戦いが始まってしばらく、エルくんが楽しそうに喧嘩売りに行ったのを見計らって、俺はガルダウィングでジルバヴェールから発艦した。

狙うのは、ちょうど近くを飛んで地上を攻撃していた飛空船。

飛竜戦艦には近づきたくないけど、飛空船なら大丈夫。こいつらまともな対空火器積んでないし。どうも、その辺のリソースは全部飛竜戦艦に突っ込んだようで、銀鳳騎士団が首を突っ込んで以降の飛空船に施された変更点と言ったらレスヴァント・ヴィードのパクリである法撃戦仕様様の幻晶騎士を乗せることくらいだった。

なので、飛空船の帆と風を起こして移動するためのブローエンジンを全て外部からガルダウィングの法撃で破壊してしまえば、飛空船の移動能力は完全に消滅する。

そのことが内部にも伝わったのか、ほどなく高度を下げて乗員や搭載されていたティラントーがじゃらじゃらと鎖に吊られて地面に降りていったのを確認し、狙い通りに事が進んで安心する。

さすがに地上のみんなにティラントーの相手までさせるのは忍びないから、幻晶騎士を吊るしている鎖だけは先に法撃で狙い撃って切り落とし、全員退艦したことによって飛空船が急速に高度を上げていくのを確認。

さて、準備はほぼできた。

俺が欲しかったのは、飛空船を一隻。それも、それなり以上に高度があるもの、だ。

さすがに鹵獲した飛空船を使うのはもったいなさ過ぎたから、この戦法を思いついて提案したときはどうしようかと思っただけど、エルくんが飛空船のマニユアル片手に超笑顔で「これならイケますよ！」と推してきたからやる羽目になった。

確かに飛竜戦艦相手にはこれくらいしなきや勝てないだろうけど、いいのかなあ。

「えーと、もうちょよつと左か。エルくんはいい感じに飛竜戦艦を引き付けてくれてるし、なんとかなりそうだな」

戦場をはるかに俯瞰する高高度。ここから落ちれば飛空船だろうとひとたまりもなく、つまりエーテリックレビテータがそろそろ機能を停止する高さ。

そんな場所で俺は、ガルダウィングを飛空船の上に着艦させていた。

脚部でがっしりと飛空船の胴体を掴み、糸の切れた風船と同じ飛空船上でガルダウィングのマギウスジェットストラスタを噴かせて位置を調節する。

さすがに上手いことピンポイントの狙いは出来ないだろうけど、それでもなんとか大雑把な位置合わせくらいはしないかね。

「お？……浮力が消えた。落ちるな」

そうして格闘することしばし。

ついにエーテリックレビテータが機能を停止したようだ。一瞬ふわっと浮き上がるような感覚の後、ガルダウイング諸共飛空船の高度が下がり始める。

最初はゆっくり。次第に速度を上げて。

おそらくこの世界では飛竜戦艦とイカルガくらいしか到達したことがないだろう高さから、地上へ向かってまっしぐらに。

「位置調整はこんなもんでいいか。じゃあね、飛空船。これはお土産だよ」

当然、巻き添えを食らう気はない。適当なところで離れて、ついでに炎の法撃を何発か放り込んでおく。

飛空船は、建造技術の系譜が船に連なるモノであるため、軽量化の意味もあつてか木材の使用率が結構高い。ので、割とあっさり燃え上がり。

「ものすげえ勢いで落下していく燃える船」が出来上がって。

「おお、狙いぴったり。当たるかな……無理か」

その落下軌道のすぐそばにある飛竜戦艦をかすめるどころか直撃しかねない勢いで、めっちゃ慌てて避けたその片翼を、もぎ取っていったのだった。



「おのれええええええええええ！ おのれ、おのれえ、鬼神の使い魔！ 貴様までもが我らの邪魔をするかあああ！」

ドロテオ・マルドネス、咆哮。

鬼神を滅ぼすべく死力を尽くしていたら、なんか頭上から燃え盛る飛空船が落ちてきて、回避こそ成功したものの翼を片方むしり取られた。

何事かと周辺状況を探れば、鬼神に合流したのは初めて鬼神と遭遇したときに寄り添っていた鳥がいる。あれがやらかしたと見て、間違いない。

なんと卑劣なことか。あの鳥は、よりにもよってジャロウデク軍の飛空船をどうやってか弾としてヴィーヴイルにぶつけてきたのだ。

あの野郎絶対殺す。いま、飛竜戦艦の乗員の意思が一つになった。

「……艦長。あの装備を使ってください。鳥には効果が絶大のはずです」

「そうか、その手が……！ 各砲座、法撃の術式を切り替えてあの鳥を狙え！」

そう、オラシオ・コジャーソの意思も、鳥憎しで一致していた。

「ふふふふふ、また会えましたね、鳥。いえ、アグリ・ボトルというのでしたか？ 鬼神

の開発者であるエルネスティ・エチエバルリアもむろんですが、特にあなたに会う日を一日千秋の思いで待ち続けました。歓迎の用意もしてありますので、是非楽しんでいっ

てください」

艦首を巡らせて鬼神と鳥へと向かっていくヴィーヴィル。

諜報活動の結果、鬼神と鳥の開発者にして操縦者として知った名前を囁きながら、オラシオ・コジャーソの目は爛々と輝く。あいつだけは、許さない。

こちらに気付いた鬼神と鳥はそれぞれ別の方向へ離れるが、ヴィーヴィルは迷うことなく鳥を追う。

鳥型の機体にはおそらくロクな攻撃能力がないということだが、これからの脅威にはならなかったとしてもあいつだけは絶対に応報しなければならぬ。飛竜のマジウスジェットスラスターの推力をもつて後を追いつ、距離を詰め。

「やはり、速いですね。直進するだけなら鬼神以上ではないでしょうか。……そして、『一度も止まっていますね?』ね?」

オラシオ・コジャーソのメガネが光る。鳥の挙動の一つも見逃すまいと、一度目に焼き付けた記憶とそれに基づいて立てた対策が間違っていないことを証明するために。

「鬼神は空中で一つ所に留まることがある。飛空船も帆やブローエンジン、マジウスジェットスラスターがなければむしろ移動することさえままならない。だが、あなたは違う。おそらく空を飛ぶための原理が違うのでしょうか。……そして、その飛ぶための方法。もしかして、進み続ける必要が、それによって風を受ける必要があるんじゃないですか?」

狂相がオラシオの顔に浮かぶ。

背後からは鬼神が迫って来るが、距離も離れた。迎撃用の火器もある。今はこの小さな獲物を引きちぎるときだ。

各砲座の射程に鳥を捉え。

「空^{エア}気^{キヤ}砲、撃エー！」

不可視の圧力が、鳥を吹き飛ばした。

ブローエンジンの原理を応用した、風の塊を打ち出すだけの魔法。幻晶騎士に至近距離で放ったとしてもよろけさせるのがせいぜいだろうその魔法が、しかし先ほどヴィーヴィルに苦渋を飲ませた鳥を、木の葉のごとく蹴散らした。

「ははははは、あはははははは！ 思った通りだ！ 所詮は鳥、風を受けて飛ぶしか能がないんですねエ！ 飛空船なら揺るぎもしない！ 鬼神ならすぐに体勢を立て直すでしょう！ ですが、あなたなら!? 機体周辺の風という風を乱されて、まだ飛ぶことができますかねえ！」

そして、オラシオ・コジャーソの勝利の雄たけびが、響いた。



「ぐおお!!」　そ、操縦が効かない!　……こりやもうダメかもわからんね」

やたら執拗に俺を追ってきた飛竜戦艦にやな予感がするなど思っていたら、見事に的中。これまで一度も見せられたことのなかった、おそらく風の魔法がガルダウィングを襲ったのだろう。

吹き飛ばされて速度も向きもめちやくちやになって変な回転を始めたガルダウィングは、もはや自力での復帰は難しいのではなからうか。この辺が、航空力学で飛んでる機体の弱点だ。

さてどうしよう、脱出機構はあるしエルくんに教わった着地の衝撃を和らげる魔法もあるけど、この戦場でそんなことやってて平気かなあ。

『先輩!　大丈夫ですか!』

「おっと、エルくんか。助かったよ、ありがとう」

割と真剣に死を覚悟しつつあったのだが、ほどなく不規則な回転が止まる。すつ飛んできてくれたエルくんのイカルガに掴み止められたようだ。

こうなってくればあとはどうとでもなる。マジウスジェットスラストの向きを整えてイカルガの手から離れ、何とか安定した飛行に戻る。

とはいえ、飛竜戦艦は健在。一時距離が離れたが、こちらが無事と見るや再び機首を巡らせて向かってきている。

「さて、どうしたもんかな。これじゃ俺はもう近づけないし、ジルバヴェールに戻っておこうか？」

『……いいえ、先輩。「アレ」をやりませう』

「……ここは『アレ』って何か聞くべきところ？ それとも『ええ、よくつてよ』って答えるところ？」

そして、ある意味飛竜戦艦より怖いものがぐいぐい迫ってきている。エルくん、イカルガをこつちと並べて飛ばすのはいいけど、近い。ぶつかつたらガルダウイング墜落しちゃうから。

『さあ、行きますよ先輩！ 飛竜戦艦など所詮は木偶の坊！ 大きければいいというのはありません。大きくなるからこそイイのだと、今こそ教育するときです！』

「あー、はいはい」

とはいえこうなつたエルくんを説得する術はない。俺は覚悟を、決めた。

「軌道調整、距離確認。脚部機構、展開」

『ふふふ、うふふふふふふふふふ』

イカルガとガルダウイングがまっすぐ同じ方向へ飛翔する。

軌道は近く、速度は同じに。距離はそれこそ接触するほどに近く、しかしそれこそが

狙い。

エルくんたつての希望でガルダウイング脚部に搭載された機構がいまこそ力を示すとき。

通常は機体の前後方向についている脚部をそれぞれ外側に90度傾けて、向かい合わせる。

そうして爪が囲む空間にあるのは、イカルガの胴体。保持。強化魔法による固定。さらにその他あれこれの部分でも連結を済ませ、銀線神経の接続をすれば、あとはマナプールもイカルガとガルダウイングで共有され……完成。

「イカルガとガルダウイングの連結……いや、〈合体〉完了。ユーハブコントロール」

『アイハブコントロオオオオオオオール！ 待っていましたよ、この時を！ イカルガと、ガルダウイングによる合体！ これぞ、天^{アマツ}イカルガです!!!』

ドギヤアアアン、とSEでも響きそうなカッコいいポーズを空中で決めるエルくん。

心なしか飛竜戦艦もドン引きしているような気がするロボット好きの夢が、誕生した。

……そこからのことは、多く語るまい。

『イカルガのサブアーム制御は先輩にお任せしますね!』

「ああ、うん。同時多目標狙いは無理だけど、一か所に集中して叩き込むくらいならなんとかしてみるよ」

『これがガルダウイングとイカルガの力を合わせた全速力! 飛竜戦艦よりはやーい

!』

「それは元からじゃね?」

『あーっはっはっはっはっは! 当たらなければどうということはありませんよおー!』

「うーん、エルくんには操縦任せるとすげえトリッキー。……吐きそう」

『最高です! 最高の気分です!! 先輩と合体しての空中戦、イカルガとガルダウイングは僕たちのようによくなじむツ! 最高に『ハイ』ってやつですよおおおおおとおアハハハハハハハーツ!』

「……いますぐ合体解除して逃げたくなってきた」

戦闘中エルくんが叫んだこの辺のあれこれを知っていただければ、何があったかは大体察していただけることと思います。



「……ん？ 親方、飛竜戦艦の高度が落ちてる！ しかも、向かう先は！」

「案の定、本陣狙ってきやがったか」

エルネステイが、なんかもう味方からしても目を覆いたくなるほどの大暴れをして、しばし。飛竜戦艦は莫大な魔力によつてなんか巨大化したかのようなバリアっぽいものを形成したりもしたが、それも一時のこと。おそらく内部に突入したイカルガにボッコボコにされたのだろう。いまは元の姿に戻っている。

「この距離なら、バリアは張れませぬ！」

とは、イカルガと合体していたガルダウイングの操縦者であるアグリが後に語った、この時のエルの言葉である。

だが、そこからが問題だった。飛竜戦艦は多少ふらつきながらも舵を切る。その目指す先は、地上。エレオノーラが乗る新生国王機のあるクシエペルカ軍本陣だった。

「アグリ先輩の言う通りになったね」

「まあ、あれだけのものを見せられたんだ。そりゃあ同じことをやり返したくなるだろうさ」

飛竜戦艦が落ちてくることに気付いただろう地上の混乱が見て取れる。しかし、銀鳳

騎士団は慌てない。こうなる可能性は、既にアグリによって予見されていた。

「飛空船を落とすのは多分それなりに有効だろうけど、その戦術の有効性を相手に知らせることにもなる。そして、もし飛竜戦艦そのものを落とすという手を取られたとき、イカルガだけじゃ不安だよ」

というのが、火だるまの飛空船を落とす作戦をエルによって白状させられたアグリが呈した懸念だった。

確かに言われてみれば脅威だ。イカルガならば飛竜戦艦に勝利を収めることはできないかもしれないが、その大質量そのものを完全に制御するとなるとさすがに難しい。

万が一にもその手を使われれば、その時点で敗北が決定することすらあり得た。

……という事態をさけるために用意された切り札こそが、対空衝角艦ジルバヴェールであり。

「野郎ども、気合入れてけ！ マギウスジェットスラスト、全速！ そしてえ……艦首

『回転』衝角、最大出力だ！」

「了解！」

その艦首に据え付けられた、螺旋を描く金属製の衝角。

アグリがカルデイトANKの動力に採用している結晶動軸を使い、とりあえずぎゅおん

ぎゅおん回転させるようにした、ジルバヴェールの切り札であるツツツ!!!

「うおらあああああ！ 行くぜええええええ！」

「……親方も大分染まったなあ」

この、意味があるのかないのかよくわからない機構に大変興奮したのは艦長を務めるダーヴィドと、エルネステイ。今もダーヴィドはもちろんのこと、隣を並んで飛んでいるイカルガがわたわた手を振り回してめっちゃ喜んでるっぽいところから察するに、団長閣下は今日もご機嫌よろしいようだ。バトソンはとりあえず気を取り直し、舵を握りなおす。

軌道はまっすぐ飛竜戦艦への直撃コースへ。そのどてつばらをぶち抜き、クシエペルカに勝利をもたらす最後の一手。決してしくじらないよう、覚悟を決めた。



この戦いが、事実上クシエペルカ動乱最後の会戦となった。

飛竜戦艦はドリルが横っ腹に突き刺さってその時点で致命傷。それでも抵抗を続けていた艦長が座していただろう艦首像は、ジルバヴェールから飛び出して飛竜戦艦の上

を突っ走ったキッドくんのツェンドリンブルが見事に仕留めた。

『キッド、こちらに飛び移ってください！　あと、先輩はツェンドリンブルをお願いします。なんとか軟着陸させてください！』

「え、マジで？　ツェンドリンブルって幻晶騎士2機分くらい重いのに？　まあ、やってみるけど。……うわ無理無理無理なにこれ重いー!?　やっぱ無理ー！　……しかも魔力切れた!?　お、落ーちーるー!?!」

キッドくんを助けるのは当然としてもツェンドリンブルまでどうにか爆発四散から大破くらいに収めようとした結果、引っ搦んで飛んだガルダウイングもろとも半分墜落みたいな勢いで落っこちたけど、まあなんとかあった。

ちなみに、これによってガルダウイングは中破。俺が乗ってた機体はカルディタンクというガルダウイングといい、半分くらい自滅してる気しかない。

その後の政治的なアレコレは、俺が関わるようなことでもないのでスルー。

デルヴァンクールに残っていたジャロウデク王族の人を捕らえたりその人を人質に今後の交渉が持たれる予定だったりしたけど、その辺は噂に聞いた程度。

俺が事後のあれこれでやったのは、各地のジャロウデク軍残党狩りにほぼ無事だったグランレオンで手伝いに行ったり、それを口実に畑を踏み荒らされた村の復興のお手伝

いをするこことくらいだった。

そんなこんなでしばらくの時が過ぎて。

俺たちはフレメヴィーラに帰ることになりました。

しかも、来るときの陸路とは違って空路で。一応都度報告の使者は送っていたとはいえ、国許大混乱不可避だ。

なんだかんだでクシエペルカでは色々とお世話になった。正直、グランレオンが耕した面積だけで言えばフレメヴィーラ以上かもしれない。コツコツ時間を捻出した甲斐がありました。

その合間になんか戦争とかあったような気もするけど、俺にとっては割とどうでもいいので置いておく。

クシエペルカでのアレコレはちよつと非公式な面があるから表立つての功績として大々的に扱われることはないだろうけど、それでも功は功。ここまで大きな事件はそうそうないだろうし、少しは腰を据えて農業できるかな！

……などと、甘いことを考えていたんだ。あの頃は。

飛空船が世に出た以上、世界は、歴史は大きく変わる。

開拓と冒険の時代はすぐそこまで迫っていて、銀鳳騎士団という組織はどう転んでもそういうものに巻き込まれるか首を突っ込むか先導していく立場にあり。

「さあ、それでは帰りましょうか、みなさん。フレメヴィーラに帰ったら、また新しい幻晶騎士を作りましょうね！」

エルくんある限り、どういいうわけか俺もその宿命に引きずられるのだと、まだ心の奥底では、理解できていなかった。



「ほらっ、そこよキッド！ お姫様が何を求めているかくらいわかるでしょ!？」

「幻晶騎士でしょうか」

「騎士としての誓いを新たに、あたりか？」

「まさか剣を教えて欲しいとかではあるまい」

「あーもう、どうしてうちの男どもは朴念仁だらけなのよ!？」

「……ユシツダ村の人参は甘くて美味いぞ？」

「人参みたいに地面に埋められたくなかったら黙つときなさい」

「アッハイ」

騎士の誓いを捧げたお姫様との別れ、という甘酸っぱい経験をしているキッドくんの様子を窺いながら、いつも通りな銀鳳騎士団でありましたとき。

団長、還らず

ざつくざつく、と土を耕す音がする。生命の音だ。

ああ、素晴らしい。俺にとつてはどんな音楽よりも心安らぐ音色だよ。

オーヴィニエ山脈東側の空気と透き通る青い空の下、土に鋤を入れる喜び。

俺は、オルヴェシウス砦周辺に広がる畑で久々の幸せをかみしめていた。

銀鳳騎士団、凱旋。

他国の戦争にこつそり介入するという事情から、表向きはちよつと出掛けていた扱いになつているとはいえ、任務はきつちり達成してきた騎士団のお帰りだ。

しかもエルくんが割と雑に急いで帰つて来るのを良しとしたせいで、いきなりフレメヴィーラ初お目見えの飛空船が王都上空を横切り、まずはエルくんの実家があるカンカネンに降りるという下手したら不敬罪もののミラクルをやらかした。

そのせいもあつてエルくんは国王陛下からお説教されたり、凱旋式典に駆り出されたり、お貴族様方や国機研に飛空船の技術を提供したりなどなどいろいろあつたらしいけ

ど、だからこそ俺には時間が出来た。

ので、早速畑に出ました。

なんだかんだで1年以上戻ってこれなかったけど、近くの村の人たちに農業用にアレコレ装備した、簡単操縦の量産仕様機、カルデイタンクマイルドごと貸しておいたので手入ればバッチリ。

なのでこうしてまた新しい作付けのために土を耕すことができる。

当然幻晶甲冑やらカルデイタンクやら使った方が手っ取り早いんだけど、今は少しだけ生身で土と触れ合う喜びに浸らせてください。じーん。

ああ、平和だ。

最近はエルくんが忙しいらしく、新型作れとも暴れに行くぞとも言われない。

いま、フレメヴィーラ王国は空前の飛空船ブームだ。

なにせ空という、見えてはいても手が届かなかったフロンティアに手が届くようになったのだから、当然だろう。

以前からガルダウィングの量産タイプもこっそり少数作られたり配備されたりはしていたらしいけど、あの機体は遠く、速く飛ぶことに適している代わりに積載量は大したことがない。

その点飛空船は速度こそ風頼りながら安定性と積載量が破格。ついに流通に革命を起こしうる駒が齎されたわけだ。

……まあ、フレメヴィーラ王国は空にも魔獣が多いから難儀してるみたいだけどね。

エルくんなんて、むしろそれを好機とばかりにエーテリックレビテータを使つて空を飛ぶ幻晶騎士の開発を始めたし。

「先輩のガルダウイングはいい機体ですが、参考にするわけには行きません。今必要とされているのは、飛空船と歩調を合わせて空を飛ぶ戦力ですから。ガルダウイングは推力と揚力の発生元をマジウスジェットスラストに頼っている都合上、巡航速度的にこの目的には適しません」

「確かにその通り。……で、本音は？」

「ぼくのかんがえたそらとぶ幻晶騎士も作りたんです！ 先輩には負けません！」
と、いう感じらしい。

自分の欲望を最優先させつつ、それを人に飲ませるためにもつともな理屈をつけることこそプレゼンテーターとしてのエルくんの得意技だ。

てなわけで見事幻晶騎士開発の本流から外れた俺は、クシエペルカでのあれこれで損傷した機体を直しつつ改修しつつ、他の時間は農業に当てるといふ幸せな時間を過ごしているのでありましたとき。

「ああ、この時間がずっと続けばいいのに……」

一通り耕し終わって整えた畝を眺めながら、満足感たっぷりのため息をうつとりと。
……エルくんを目を付けられている限り、叶うはずもない夢を、見た。



さて、フレメヴィーラ王国ではその後もアレコレの出来事があった。

まず第一に、飛空船の就航。

何が起こるかわからないから、ということでした。と武装も仕込んだ近衛所属の飛空船が物資輸送を兼ねた航路開拓を行って、空にはまだまだあちこち魔獣の縄張りがあるということが改めて発覚して難儀しているのだそう。

ちなみに、俺がこれまでガルダウイングで飛ぶときは街道沿いの比較的安全な航路を選んで、ついでに魔獣に目を付けられた場合もすつ飛んで逃げた。ガルダウイングのサイズと重量とマジウスジェットスラスタならそれも可能だけど、さすがに飛空船にそれを求めるのは酷というものだろう。

そして、その辺の事情もあって国王陛下からエルくんを打診されたのが、飛翔型幻晶騎士運用部隊の設立話。

当初は中隊新設、程度の話だったらしいんだけど、なんかいつの間にか膨らんで騎士団新設することになったみたいです。尾ひれ背びれって怖いね。

こんな話が出るからには、当然銀鳳騎士団の飛翔型幻晶騎士も完成している。

名前はシルフィアーネ。数多の試行錯誤の元、エーテリックレビテータによる飛行を可能とした機体だ。

……最初の試作1機目は、なんかひたすら丸っこいデザインセンスの欠片もない形だったけど。

「一応、浮かびはするんですけどねえ」

「アディちゃんも乗ってるんだから、何も起きないといいけど。ところでエルくん、あの機体が暴走してイカルガで助けに行くことになっても、勢い余ってオーヴィニエ山脈の雪山地帯に突っ込んで遭難しかけて、出力落とした火炎魔法で雪を溶かして作った露天風呂入ってきちゃダメだよ？」

「……………そんなことするわけないじゃないですか」

と、いう感じの試行錯誤を経て人魚っぽい見た目のシルフィアーネが完成。

その辺の設計図や資料なんかを国機研に持ち込んで、量産タイプトウエディアーネも続々ロールアウトして飛翔騎士部隊の準備は着々と整いつつある。

さて、そうなつて来ると国内でも情勢の変化は避けられない。

操縦感覚が違い過ぎる飛翔騎士部隊〈紫燕騎士団〉の騎操士は新人を中心に編成されることとなり、その教官役をエドガー達中隊長が担った。

……俺？ 俺が空を飛ぶのに使う機体はガルダウイングなんで、新人たちがある程度動けるようになってからの仮想敵役をさせられました。

「ぎゃー！ 囲むなー！ 訓練用の法撃でも怖いから！ ガルダウイングは下手すると一発で墜落するから！」

「……とかあの人は言ってるんだらうけど、一発も当たらない!?」

「くそつ、トウエディアーネと違って高度を自在に変えられるから、機動力で不利だ！」

「囲め囲め！ 逃がすな！」

みたくない感じで、幻晶騎士の集団に殲滅される魔獣の気分を味わえました。

バレルロールで避けてスプリットSでやり過ぎしてインメルマンターンで上を取って奇襲して、とあれこれやってもすぐに学習されるから厄介極まりない。

なお、余談だがフレメヴィーラに帰つてきてからガルダウイングとカルディタンクはそれぞれ修理がてら改修を施した。

ガルダウイングは飛翔騎士にも採用されている脱出用の幻晶甲冑、デイセンドラート

対応型のコックピットに変えて、実戦での使用によって得られた知見と、エルくんが飛翔騎士用に新設計したマグウスジェットスラストを採用することで航続距離と積載量が向上して扱いやすくなった。

ので、武装を増やしてみたり。これまで機体下部に申し訳程度に一本だけ法撃用の杖をつけておいただけだったけど、新たに左右両翼上部に高威力の火炎魔法の魔導兵装なんかつけてみた。

カルディタンクの方は、戦闘向けの改修をした。

農業用としては今のままで十分なんだけど、エルくんに振り回されていると戦闘に巻き込まれることが多々あり、敵の幻晶騎士に近づかれると上背が足りなくて不利になるので、ちょっとした改良で解決。

カルディタンクをタンクたらしめている部分を取り替えることになったんで、名前も改めへカルディヘッドとした。

披露の機会は、いずれあるかもわからんね。

そういったアレコレの変化はフレメヴィーラ全土に及ぶ。

当然、銀鳳騎士団にも。



「私たちが、騎士団長……か」

「妥当と言えば妥当かな。技量も武勲もコネもある。多少若いとはいえ、エルくんがさんざんひつかきまわしてる今なら誰も気にしてる余裕がないし」

「改めて、うちの団長はすごいな……」

ヘッドハンティング。

エルくんが国王陛下に呼び出しをくらって出かけた時に偶然か、あるいはなんらかの取り決めでもあつて狙い澄ましたのか、オルヴェシウス砦に来客があつた。

その人たちが持ち込んだ話というのが、エドガーたち中隊長を今後新設される騎士団の団長として迎えたい、という各地の貴族からの申し出だったのだという。

飛翔騎士という全く新しいカテゴリーの幻晶騎士が誕生したということは、それを運用する組織も新設した方が手っ取り早いということ。すなわち、それらを率いるポストもまたぼこじゃか出来る。

そしてその枠にふさわしいのは誰か。熟練の騎操士でさえ慣れていないそれらの縦と運用に最も精通している銀鳳騎士団の、それも中隊長を率いてきて部隊指揮の経験もあるエドガー達にお声がかかるのは必然と言えるだろう。

「だが、ここを離れるのは……」

「ま、悩みたまえよ若者たち」

エドガーつてば、悩んでる悩んでる。

エルくんについていくと決めているデイトリヒと、銀鳳騎士団も楽しいしなによりエドガー待ちなどころの大きいヘルヴィはどつしりと構えているが、エドガーは考え込んでいる。

そりゃあそうだろう。新設騎士団長の初代団長なんて、それこそ歴史に名が残る。騎操士として、望みうる最高クラスの名誉だ。

銀鳳騎士団の今の在り方に強い愛着を持っているエドガーだが、だからといって無下にできるような話ではない。

「……と、いうかだ」

「? どうした?」

そんなエドガーの苦悩に満ちた目が、なぜかこつちを向いて。

「なぜ、お前には一切声がかからない!?!」

「ていうか、なんでお茶汲みしてんのよ」

「お茶受けに出した干し芋、気に入ってもらえたみたいでお土産を所望されたよ?」

「そういう話をしてるんじゃないということとはわかってるだろうに、君ってやつは

……」

八つ当たりされました。解せぬ。

「いやだって、俺は中隊長とかじゃないし。平団員だし」

「……うん、まあそうだけどね？ あんたに部隊任せたら、絶対部下を開拓に駆り出すし」

「だからとて、武勲や幻晶騎士開発の功績は十分にあるはず！ なのになぜ！」

「武勲も開発も、いまだほとんど誰も使ってくれない動物型やらタンク脚だからなあ。その辺の部隊が作られるまで俺にお声がかかることはないんじゃないかね？」

そう、騎士団長勧誘の話に俺が呼ばれることはなかった。

エドガーは理不尽だと頭を抱えているけど、道理だと思う。

まともに幻晶騎士を操縦して部隊を率いて活躍したエドガー達と違って、俺はあくまでエルくんを引きずり回されて機体を開発したり暴れてただけだし。いくら何でもこんな経歴の俺を騎士団長に据えようなんて貴族様がいたら、それこそ正気を疑う。

「でも、そろそろ銀鳳騎士団の体制も変わるべき時期だったのは俺も思う。……具体的には人事刷新とか！ 人材の入れ替えとか！ 今こそ俺が農民に戻る絶好の機会!!」

「またそれか」

「そうよねー、あんた騎操士である前に農民だもんねー」

「……お前はお前で、色々悩みがあるのだな」

しかしそれこそが俺の狙い！

この人事異動の季節に乗っかり、ドサクサ紛れで故郷に帰ってユシツダ村の開拓に加わるんだ！　なんかそろそろ美味しい所はことごとく村の人たちに開拓しつくされてる気もするけど！

これからの大航空時代で発見・開拓されるだろう新しい土地も魅力的ではあるんだけど、俺がしたいのは土を耕す方なの。発見に至るまでの冒険とかその辺は他の人にお願います。

ともあれ、時代の流れが変わって来た。これならあまり乗り遅れることなく農民に戻れるぜ！

「というわけで、先輩。大森伐遠征軍の先行調査に向かうことになりました。一緒に行きましょう！」

「……………え？」

……無理そうだぜ！

その日の夜、ちよつと泣きました。



大森伐遠征軍。

それは、魔獣ひしめくボキューズ大森海を切り開くという、ある種フレメヴィーラ王国にとつての国是だ。

数百年前に西域諸国から魔獣を締め出した勢いに乗って行われた最初の遠征は、噂によるとヤバイ魔獣に襲われてズタボロのギタギタにされて撤退を余儀なくされたのだから。

その際のどさくさ紛れに建国されたのがフレメヴィーラ王国の始まりなわけだから、どうにかこうにかしてボキューズ開拓再びというのは、脈々と受け継がれてきた野望と言える。

とはいえ、地上に行くのであれば森に潜む魔獣たちからの熱い歓迎を受けることには確実。いかにエルくん印の新型幻晶騎士がいるとはいえ、そいつらを蹴散らして進むとなったら何百機連れて行けばいいのか想像もつかない。

そんなのはるか高かった夢に手が届くのでは、という希望を見せてくれたのが飛空船。

これと飛翔騎士があれば、地上の魔獣を相手にすることなく、速く、遠くまで足を延

ばすことができる。

まさにうってつけ。とりあえず下調べ的な意味も込めていけるところまで行ってみよう。

そんな、国家の威信をかけた大事業の先駆けが、紫燕騎士団を主力とし、銀鳳騎士団の一部が協力してボキューズ大森海へと旅立って、3か月ほど。

「せんぱーい、ご飯できましたよー……って、干からびてるううううううう!!」

「かゆ……うま……」

俺、干からびてました。

「先輩、しっかりしてください! メディック、メディック!」

「畑耕したい……もう何ヶ月も土に触ってない……!」

「あー、先輩またそうなるんだ。ほーら、フレメヴィーラから持ってきた鉢植えですよー」

「あうう……」

そりやそうもなるよねえ!

地上は危ないからって、常に空中にいるんだからさあ! せめて途中で何度か地上に降りて補給するんだったらマシだけど! こんなこともあるうかと、野菜の鉢植え持つ

てきて世話してなかったら確実に死んでたわ!! 取ってきてくれてありがとうねア
 デイちゃん!

「ふう、少し落ち着いた……」

「すみません、先輩。残っている物資の量や集まった情報量から考えて、そろそろ引き返すことになりそうですから、もう少しだけ我慢してください」

「うん、がんばる……」

「エルくんに背中さすってもらおうの羨ましいなー。……でも今はそつとしておいてあげようかな、うん」

鉢植えを抱え、こんな空の上でもぐんぐん元気に育つ野菜の生命力を分けてもらいつつ精神の安定を図る俺。地に足つかなくなつてから既に3か月ほど、俺はもう限界かもわからんね。

ボキューズ大森海への遠征船団の中核を担うのは、先にも述べた通り紫燕騎士団。空中戦力が重要になるため、銀鳳騎士団は飛翼母船ウイングキャリアヘイズモとその運用を担当する鍛冶師隊、そして騎士団内でも独立した空中戦力であるエルくとアデイちゃん。

……そして、俺も選ばれた。

「ガルダウイングはトウエディアーネでの対応が難しい魔獣が現れたときに有効です。

それに、もし万が一地上に降りての補給が必要になった場合、森を切り開いたり拠点構築にグランレオン、カルディヘッドは最適ですから」

だ、そうな。そんなわけで例によってほぼ俺一人しか運用できない3機を持ち込むことになりました。

うん、冷静で的確な判断だね。

……その間畑仕事一切不可能な状況に、俺が耐えられたらの話だけどなあ！

まあその辺は、いくつか鉢とプランターに野菜の苗を植えて持ち込んでそっちで我慢することにしました。すでに死にそうだけど！ 鍬持って土を耕して草取りして摘果して水路掘ったりしたい！

そんな感じの道中、色々なことがあった。

基本、師団級に代表されるような強力な魔獣は図体もデカイ。

さすがにボキューズ大森海でも、あるいはだからこそ、そこまでの怪物がうじゃうじゃと育ち切ることができないのかあまり見当たらないし、それっぽい痕跡があったとしても空からならば発見も容易。可能な限り危ない所には近寄らずに進路を取って、割と平穩に進んで来た。

無論、飛行可能な魔獣に襲われることはあったし、トゥエディアーネ達だけでは対応

が難しいケースもあった。

例えば、緑色の頭に複眼と足だけくつついたような形の妙に愛らしい魔獣とか。空を飛ぶ上に近づいて来て自爆するというシャレにならない危険生物だったけど。

あと、黒い体に一つ目の、なんとなく生命の基本レベルで俺たちとは違うんじゃないかって感じがする無駄にたくさんいた虫っぽい奴らとか。大勢いたし、それを理由に名前つけてくれようか。

そんな感じの新種魔獣とも戦い、たまにエルくんやアデイちゃん、ついでに俺も出張って蹴散らしつつたどり着いたのが、オーヴィニエ山脈に匹敵するかあるいはそれ以上と目される、大山脈。

どことなくフレメヴィーラ王国にも似た、あるいは国を築くのに適しているかもしれない好立地。そこを見つけたことで、一応の成果としてそろそろ報告のためにも帰るのがいいのではないか、という話が各飛空船の船長たちとエルくんたち騎士団長会議で話し合われているのだという。

ああ、ようやく帰れる。

帰ったら、もう何言われても土にへばりついて離れないからな！

これはもはや、確定事項と言っていいほど強く俺の中で固まった決意であり。

そのためには、まず生きて帰らなければいけない。
この、異形ひしめく森の奥から。



魔獣発見。

その報自体は、飛空船団において驚くものではなくなっていた。

数は1。虫型で、発達した角が特徴という程度のもの。紫燕騎士団が出撃し、念のため排除する。

第一報ではそのように知らされて。

「なんだこれは、魔獣の体液か？ ……うわつ、酸！ 酸だあああああ!?!」

すぐに、最大級の警戒警報が発令された。

『幻晶騎士全機出撃！ 魔獣勢力増大、その数、20以上!!』

「マジかよ」

情報がひっくり返るまで、そう長い時間はかからなかった。

次々に空へ飛び出していくトウエディアーネと、なんかすさまじい勢いで艦橋からすつ飛んできてイカルガのコックピットに収まるエルくんの様子からして、尋常ではないことがすぐに知れた。

「先輩、すみませんが今すぐ出撃を！ 魔獣は酸の雲を作り出して……幻晶騎士を溶かします！」

「そりゃあ……これまで見てきた中でもとびつきり危険だね」

「はい！ なのでちよつと絶滅させましょう!!」

「アツハイ」

エルくん、顔が怖いよ。

割と本気で魔獣を一種、絶滅させる気でしょ。

とはいえ、接敵からのさほど長くない時間で幻晶騎士を溶かしてしまう魔獣なんて、飛空船に近づかれたらそれだけでアウトだ。全戦力をつぎ込んででも倒さない限り、俺たちに生還の目はない。

悪いが俺だって、故郷の土の上で死にたいんだ。ここは頑張らせてもらおうよ。

「……と、思ったんだけどこの数はヤバいだろ」

『みんなはとにかく距離を取って！ 接近戦は禁止！ 法撃で蹴散らして！』

アデイちゃんの指揮のもと、統制の取れた動きで魔獣に対する紫燕騎士団。

だが、魔獣の動きがおかしい。トウエディアーネの部隊が包囲しようとする数匹の囷を残して逆に包囲し返そうとして来るし、陣形が薄いところに集中して酸の雲を打ち込んで突破を試みる。

……妙に頭がいいな、こいつら。

しかも酸の雲は極めて強力で、トウエディアーネ達が動き回れる場所はどんどん狭くなっていく。

それでも数が揃っているから何とか戦ってはいるけど、こりやあ後続を断たなきゃキツいな。エルクんのイカルガが相手をしている本隊をどうにかしないと。

ということで、マグウスジェットスラストの出力を上げて酸の雲を強引に迂回して後方へ。

「手伝いに来たよ、エルくん」

『助かります、先輩！ 新しいガルダウイングの力、見せてください！』

トウエディアーネ達の下へ向かったのはあくまでエルクんの撃ち漏らし。つまり、一番の激戦がここで繰り広げられている。

たった一機のイカルガが立ちほだかっている形だが、なにせ戦力的には紫燕騎士団の総力に匹敵しかねないのがエルくんという規格外。シャレにならないレベルの機動力で酸の雲をかいぐり、蟲型魔獣を一匹ずつ、しかし着実に削っている。

「酸の雲の範囲が広い……こりやまともに飛べないな」

『本気で溶けますから、気を付けてくださいいね!』

エルくんからのアドバイスが飛ぶ。

が、飛べる領域は極めて少なくなりつつある。

イカルガならまだしも、ガルダウイングは常に前進し続けないと飛んでいられない。そして、この虫共の頭の良さからしてそれに気づかれるのは時間の問題。

……危険な賭けだが、切羽詰まってからやるよりはマシだな。よし、やってみるか。

「エルくん、悪いけどダメだった場合のフォローお願い」

『はい? ……ちよつ、先輩!? なんで酸の雲に向かっていくんですか!』

エルくんが驚くのも無理はない。

ガルダウイングを突っ込ませた先には、魔獣が作り出したばかりの濃厚な酸の雲がある。最初に接敵した幻晶騎士はすぐに溶かされたという話だから、ガルダウイングの速度であっても、軽量化してあるこの機体はすぐに溶け崩れてしまうだろう。

そうなることはわかっている。だからこそ、この手が効くかを今のうちに試しておく

ないと。

目の前に迫る、死の体現である霧。

十分に速度の乗ったガルダウイングはもはやいかなる機動でも侵入コースを避けることはできない。さすがにちよつと怖いけど、でもガルダウイングなら大丈夫！ ……
多分！

自分にそう言い聞かせて覚悟を決めて、ガルダウイングの機体が雲に突っ込む、その直前。

「全吸気系、閉鎖！ 空力シールド魔法、展開!!」

マギウスジェットストラスタ、並びにエーテルリアクタの吸気系を全閉鎖。

同時にため込んでおいた魔力をもって、ガルダウイングに実装されている「ある魔法」を展開。その直後に機体の全てが酸の雲に包まれて。

『先輩!』

「……成功だオラア!」

——!?

エルくんの悲鳴のような声に冷えた肝を無理矢理熱くさせる暑苦しい叫びをあげて、ガルダウイングが酸を蹴散らし、突き抜けた。

ガルダウイングは、最近でも先王陛下や国王陛下から急ぎの手紙の運搬を頼まれることがある。なんか最近はノーラさんとここにも少し配備されたらしいからそっちに願わして欲しいんだけど、頼まれたなら断れるわけもなし。

その度に特命勅使の身分を示す旗を任されて、機体に括り付けて飛んでるわけなんだけど、風にバタバタ煽られる旗を気にしながら飛ぶのはさすがに怖い。

と、いうことで開発したのがこの魔法。

エルくんに教わり、ガルダウイングの離着陸時にも使っている大気圧縮。その魔法を応用して旗の周りを風で覆い、内側に疑似的な無風状態を作り出すという優れものだ。

そして今回、その魔法をさらに応用して範囲をガルダウイングの機体を覆うようにしてみた。

これによって内外の空気は遮断されたに等しく、大した質量を持たない酸の粒子もまたそれに倣う。ガルダウイングは酸に侵されることなく、その包囲を抜けた。

「お返しだ、食らえ！」

『先輩すごいです！ そんな方法があるなんて……！ 今のイカルガでは使えないですけど、今度実装しますから手伝ってください！』

まさか真正面から突き抜けてくるとは思っていなかったのか、そんなことを考える知性が仇になったのか。驚く虫に真正面から両翼からの火炎魔法を叩き込み、蟲の爆散と

同時に溢れる酸の雲を再び風の膜で蹴散らして飛び過ぎる。

よし、行ける……！

「改修の話はあとにしよう、エルくん。船団に向かっていった奴らを追おう」

『はい！ じゃあ合体しましょう合体！ その方が早いですし！』

「……隙あらば合体したがるね。まあいいけど」

とにかく、今は船団を守らないとマズい。イカルガとガルダウイングをドッキングさせ、正面を塞ぐ酸の雲をイカルガごと包み込む風の膜で突っ切り、仲間たちの下へと駆けつけた。



「さて、どうするかな。みんなは何とか逃げ切れたみたいだけど」

『ええ、つまりここからが本題。幻晶騎士の天敵である奴らに鉄槌を下す時ですね。』

……喜びなさい、絶滅タイムです！』

「エルくん、セリフが完全に悪役」

船団に近づいた蟲を殲滅し、トウエディアーネ達の推力も合わせた船団が戦闘空域から離脱したところ、俺とエルくんは後続の魔獣の前に立ちはだかる殿となっていた。

どうやら、この魔獣たちの妙に賢く統率の取れた行動は、ひととき大きく赤く角が立派な指揮官役がいるからこそそのものだったらしく、俺たちは完全にロツクオンされたようだ。

先ほどから執拗な集団攻撃を受け、回避に反撃にと忙しい。

こうなってくると合体しているより相手の狙いを分散した方がやりやすいのでイカルガとガルダウイング別々に動いているが、決定打に欠ける。

やってみてわかったけど、ガルダウイングの風バリアも万能じゃない。

酸の雲を通さないとはいっても、しよせん風によるもの。マジウスジェットスラストの出力を上げるとたやすく乱れて周りの酸ごと空気を吸い込んでしまうから、酸の雲に飛び込むときは推力を下げるか完全停止させなければならない。結果、機動力が下がって敵を捉えきれないことが出てきた。

やはり、すさまじい学習速度だ。人間でも中に入ってるんじゃないかね。

それに、何より。

『!? マジウスジェットスラストの、推力が……!』

「エルくん!」

この場に残った最大戦力、イカルガの出力ダウン。

いかに酸の雲を回避し続けたとはいえ、視認できない程度に濃度が薄くなった酸はそ

こちら中に滞留しているということらしい。その空気を吸い込み続けたマジウスジェツトスラストの出力が下がったようだ。

……え、それって俺もそのうちジリ貧になるってことじゃね？

『ええい、鬱陶しいです！』

弱った獲物から狙うのは狩りの鉄則。イカルガに蟲共が殺到していく。

まあ、機動力が落ちて高度が下がり気味とはいえ相手はイカルガ。近づく端からボンガボンガ撃ち落とされてはいるんだけど、奴らは死んでも爆散して周囲に酸の雲をまき散らす。既にイカルガはほとんど姿が見えない有様だ。あれじゃあすべて倒したとしても無事では済まない。

……潮時か。

これ以上は、マズい。イカルガに、そしてエルくんに万が一のことがあつたらフレメヴィーラ王国が被る損失は計り知れないし、なにより。

「そろそろ限界だ。ズラかるよ、エルくん」

『先輩!? あ、ちよつ！ 勝手に合体してイカルガを運ばないでください！』

そんなの、俺が我慢ならない。

エルくんにはこれまで数えきれないくらい振り回されて引きずり回されて畑から引つ剥がされてきたけど、その時間が辛いだけだったか、楽しくなかったかと言えば、そ

んなことはないからねえ。

ガルダウイングで酸の雲を突き抜けて、フラフラと不安定に飛んでいたイカルガと強制ドッキング。じたばた暴れるも、マジウスジェットスラストの出力が下がってまともに抵抗できないイカルガを無理矢理連れ去ることにした。

『まだ蟲が残ってます！ とりあえず見えてるだけでもぶつ殺さないと！』

「分が悪いからあとでね。帰ろう。帰れば、また来られるから」

エルくんでは本当にあの蟲嫌いだな。

とはいえ、根絶やしにすべきというのは俺も同感だ。あんな奴がフレメヴィーラ王国に来たら、土に畑にどれだけの被害が出るのか。

だからこそ、きつちり対策を用意して一匹残らず絶滅させるべきだ。

そのためにも、エルくんは絶対に生きて帰ってもらわなきゃならない。

そう。たとえ、何を犠牲にしても。

いまだ俺たちを脅威と見なしているのか、後方から迫る生き残りの指揮官蟲を、どうにかして。

既に空中戦は出来ない状態のイカルガと……じわじわマジウスジェットスラストの出力が下がり始めた、ガルダウイングで。

……仕方ない、覚悟決めるか。

「……エルくん、悪いけどここから先は1人で戻ってくれるかな。多分そのうちアディちゃん辺りが迎えに来ると思うけど、それまではなんとかしてくれ」

『はい? ……先輩、何をするつもりですか!? 答えてください、先輩!!』

ガルダウイングとイカルガの合体解除。

イカルガは落下していくことになるけど、何基かはマジウスジェットスラストも残っているし、エルくんなら大丈夫。そう信じて、ガルダウイングの機首を返す。

向かう先には赤い指揮官蟲。

マジウスジェットスラスト、出力最大。ここで溶け落ちても構わない。風の防壁は小限にして、接近に気付いた指揮官蟲が展開する酸の嵐に突っ込み、その乱気流に揉まれながら、それでも気合で突き抜けた。

そう、お前もよく知っている自爆覚悟の突撃だ。さつきまで下つ端の蟲にさんざんさせたいだろうか?

知恵が人だけの有利でないというのなら、我が身を顧みないほどの渾身もまた、お前たちだけの武器じゃないんだよ。

『ダメです、先輩! 戻って! そのままじゃ……!』

時折スラストの噴射光を輝かせて落下速度を抑えるエルくんからの声が不思議と届く。

まあ、気持ちはわかる。俺だって、誰かがこんな行動を取ったら止めようとするだろう。

あいにく、もう止まれないけどね。

魔法が効かず、回避もままならないと知った指揮官蟲はおそらく口だろう器官を開き、耳障りな叫びをあげて。

ガルダウイングが体当たりをかましたのか、指揮官蟲がガルダウイングの首筋に噛みついたのか、区別のつかない激突を、した。

「ぐあああああ!!」

当然、衝撃はすさまじい。デイセンドラート越しにシートへ体を固定していなければ、コックピットの中を盛大に跳ね回っていただろう力の全てが押さえつけられた体を襲う。

指揮官蟲はおそらく健在。ギシギシと聞こえる耳障りな音は、間違いなくガルダウイングの機体に蟲の牙的なものが食い込んでいる音だろう。

軽めとはいええ幻晶騎士のぶちかましを受けてなお健在とは、呆れた頑丈さだ。

対するガルダウイングは、もはや致命傷。

十分な速度を得るために酸の雲の中でも機能を発揮したマグウス、ジェットスラストはうんともすんとも言わない。おそらくもう溶けてなくなっているだろう。

指揮官蟲に組み付かれて、その速度もすでにゼロ。もはや二度と飛び立つことは出来ない。

紛れもなく致命傷。あとはほんの少し先の未来に機体そのものも崩壊する。それは確定した未来だ。

なぜならば。

それが、俺の狙いだからだ。

「――薬は注射より口から飲むのに限るぜ、魔獣さん！」

――!?

相手が気付いたときにはもう遅い。

ここまで大事に守り抜いた、機体下部の魔導兵装に残ったマナの全てを注ぐ。

その杖先は既にガルダウイングの首筋とともに蟲の口内へと入っているから、狙いをつけるまでもない。甲殻は頑丈みたいだけど、お前も生物なら口の中、消化器官の中、粘膜まで頑丈かな……?」

「じゃ、エルくん。あとはよろしく」

暴れて逃げる暇など与えず、爆炎術式、起動。
酸すら燃やす紅蓮の華が空に、散り。

『せんばあああああああああああああああああああああああああああああい!!』

エルくんの涙交じりの叫びもまた、誰に届くことなく響いて、消えた。



フレメヴィーラ王国によって主導された、大森伐遠征軍の先遣調査隊はこの後、国許への帰還を遂げる。

少ないながら、被害はあった。

船団の損傷、幻晶騎士の中破や大破。

若くして命を散らした騎士もいた。

そして。

銀鳳騎士団団長、エルネステイ・エチエバルリアと乗機、イカルガ。

銀鳳騎士団団長補佐、アデルトルート・オルターと乗機、シルフィアーネ。

加えて銀鳳騎士団団員、アグリ・ボトルと乗機、ガルダウイング。
未帰還。

その報告は、フレメヴィーラ王国に少なからぬ衝撃をもって、轟いた。



「あのバカ……!」

「おいエドガー、ヘルヴィを何とかしろ。最近アグリを殴っていないところにあんな話を聞かされて、なんかすさまじい雰囲気だぞ」

「無理を言うな!? 私でも恐ろしい! ……というか、アグリは毎度あんなヘルヴィに追い回されていたのか」

「今更ながら、すさまじい胆力だなあいつ」

水落はフラグ

「急げ、取り押さえろ！」

「何人がかりでもいい、王の御前に行かせるな！」

その日、フレメヴィーラ王国首都カンカネンにて騒動が起きていた。

王城の只中、謁見の間のすぐ手前まで響いたそれは当然王の耳にも入る。

リオタムス王は騎士たちの制止も空しく迫りくるそれに対し、ため息をこぼした。来るべき時が来た、その感覚だけは確かなものだ。

「来たか、銀鳳騎士団」

「はっ、銀鳳騎士団第二中隊を預かります、デイトトリヒ・クーンニッツです」

3人の騎士にタツクルされたまま引きずりながら突進を止めないその男。しかもそれを王の前でやってのけるのだ。なんとという瞬発力、なんとという根性。さすがはエルネスティの下についているだけあって一味違う。

先代のアンブロシウスがほぼ独断で新設した騎士団は上から下まで規格外だな、と改めて認識し、声をかける。

「何用か……と、聞くまでもないが、申してみよ」

「では、遠慮なく。我らの団長エルネスティと、アデルトルト、アグリ搜索の許可をいただきます！―」

本当に、予想を違えない。

ボキューズ大森海の調査に向かった船団を率いていた紫燕騎士団と銀鳳騎士団。

全体を見れば損害は少なく、見事生還を果たした。

だが失われたものもあつた。

いくつかの物資に、機体の損傷。若い騎士の命と。

銀鳳騎士団団長とその補佐、そして平団員の計三名。

フレメヴィーラ王国の幻晶騎士開発を支える中枢が、失われた。

「ならぬ」

「なぜですか！―」

だが、だからこそ軽挙は慎まなければならない。

確かにエルネスティ達は樹海に消えた。しかしそれを追いかけて残りの銀鳳騎士団までもが失われることになれば、それこそフレメヴィーラ王国の被る痛手は計り知れない。

エルが墜ちたということは、他のいかなる騎士であれ、騎士団であれ、同じ憂き目に遭う可能性が高い。

リオタムスはその理屈を、ディートリヒに説いた。

王として、無礼を働いた騎士に対するものへの対応としては過剰と言えるほどの温情であるが、それを厭わなかった。

エルネステイが失われたこと、エルネステイでさえ生還しきれなかった脅威があること、それらはフレメヴィーラ王国そのものにとつても尋常ならざる脅威だからだ。

「それでも……それでも行くべきです。団長は、必ず生きていますー！」
「その保証は、ない」

ディートリヒはなおも言い募る。だがそれは、一国の王を動かさうるものではなかった。

「いいえ、必ず。殺した程度で死ぬような団長ではありません。必ずや生きて、おそらく現地で新たに幻晶騎士を作り上げてこちらへ帰還しようとするはずです」

「……いや、さすがにそれは」

無理がある、と言いかけて口ごもる王。

エルとの付き合いは即位してからでまださほど長い時間ではないとはいえ、ぼこじやが増えるカテゴリすら既存と異なる幻晶騎士や飛空船、それらで挙げた武勲と功績。ありえない、とは言い切れないプレッシャーがあった。

「団長が生きているならアデルトルートも死にません。そしてアグリも……アグリ、も

……？」

「その者が、どうかしたか？」

とか思っていたら、今度はディートリヒが口ごもった。

アグリ、とは今回行方不明になった銀鳳騎士団員の1人、アグリ・ボトルのことだろうとリオタムスは思い出す。

エルほどには目立たないが、銀鳳騎士団にて人型要素すらない機体を作ることを得意とする男だ。

あと、かの男の出身地の領主はリオタムスも知っている。子供のころ、初めて会ったときのこととはちよつと思ひ出したくない程度には。

「いえ、その……。アグリもきつと生きていると思うのですが……大森海の奥を勝手に開拓し、既に村の一つも作っているような気がしてならず……」

「何者なのだそいつは」

あの領主のところの奴らは上から下までとんでもねーな。
内心戦慄を新たにするリオタムスであった。

フレメヴィーラ王国にもたらされた、エルネスティ達3人未帰還の報。

それを、銀鳳騎士団たちはとても心配した。

「やべーよ。急いで回収しに行かないとボキューズ大森海がボキューズ大農園になっちゃう」

「で、その農園の向こうから俺たちのより性能のいい幻晶騎士が押し寄せてくるんだろ？」

「……急ごう。取り返しがつかないことになる前に」

何について心配したかは、言うまでもない。

エルネステイ達を搜索するための第二次調査船団の派遣は、近い。



——時は遡り、エル達が森に墜ちた直後。

「エルくん！ エルくん大丈夫!？」

「……アデイ、ですか。僕は平気です。心配かけましたね」

エルとアデイは、生きていた。

飛行能力を失い、落下しつづつあったイカルガであるが、そこへ駆けつけたアデイのシルフィアーネがすったもんだの末に抱え込むことに成功し、地面に不時着して大破しながらも、騎操士二人は無事に生きて地を踏むことができた。

「さっそくですみませんが、アデイ。……先輩は、どうなりましたか？」
「それ、は……」

その喜びに浸るより先に、エルは自身の手を引いて助けてくれたアデイへ縋るように尋ねる。

イカルガと共に離脱しようとしながら、逃げ切れないと悟ってただ一人反転し、魔獣に向かつていったアグリ。相手に食いつかれ、それでもひるまず法撃を叩き込んで魔獣を倒したところまでは、エルも把握している。

その時の爆発の規模からして、アグリもガルダウイングもただでは済まないだろうということを理解したうえで。

アデイの顔にはためらいの色がある。

無事に近くへ到着したアグリとすぐに合流できるという可能性は、ほぼないだろうと察せられるほどに。

「……エルくん。落ち着いて、あれを見て」

「……は？」

シルフィアーネから脱出してすぐに駆け付けたアデイは、デイセンドラートを身にまとっている。エルの体をコックピットから引き上げる程度はたやすいことで、すぐに周囲の様子がエルの知るところとなる。

ボキューズ大森海の中で奇跡的に開けた一角。

そこに一直線に刻まれた、無残に草木を削る幻晶騎士の落下跡。その痕跡を断ち切るように。

あるいはその先から迫る魔獣の盾になるように。

ガルダウイングの片翼が、突き刺さっていた。

「……っ！」

「エルくん……」

痛ましげなアデイの声も、エルの耳にはほとんど入らない。

あのとき何があったのか、はつきりと覚えている。

自分を守るためにアグリが散ったその様、忘れられるはずがない。

唇を噛む。拳を強く強く握りしめる。瞳がゆらゆらと涙で揺れる。

だが、泣かない。

そんな暇は、ない。

「……行きましよう、アデイ。持てるだけの荷物を持って、拠点になる場所を探します」

「先輩を探さなくて、いいの……？」

「探します。絶対に。何かあっても。でも、先輩だって騎操士です。きっと僕たちと同じようにこの森でサバイバルをして、合流するために行動してくれているはずですから」

エルは覚悟を決めた。

必ずアグリと再会する。

そうでなければ、助けてもらった意味がない。

そうでなければ、この恩を返せない。

魔の森何するものぞ。

愛する幻晶騎士をこんな姿にしたことと、アグリを奪ったこと。まとめて応報するのだと、エルネステイは己の心に、誓った。



エルとアディは、ボキューズ大森海の中で逞しく生き延びた。

騎士として学んだ魔獣狩りの技とサバイバル技術で命を繋ぎ、人跡未踏と思しき魔の森を進んでいく。

その中で、二人は巨人と出会う。

人と同じ姿形をして、しかし目の数が異なる。

一つ目の者や、三つ目、四つ目などの異相を持ち、決闘級魔獣に比肩する巨体と、なんとエルたちと近しい言葉を使う、話している内容が理解できる存在。

エルとアディはなんやかんやで巨人たちと知り合い、殴り合いを経て彼らカエルルス氏族の一員として迎え入れられたり、巨人族の慣例を無視して王を名乗るルーベル氏族の行いの是非を問う「賢人の問い」が開かれることになったり、それを察知したルーベル氏族が送り込んだ穢れの獣、すなわちイカルガを落とした酸毒の魔獣によってカエルルス氏族が甚大な被害を受けるなど様々なことがあった。

「……巨人同士のことに口を挟む気も、その資格も僕にはありません。ですが、とりあえず見かけたなら滅ぼす理由が三つくらいになりました」

「オイオイオイ、ルーベル氏族死ぬわ」

「マジステル師匠アディ!? マジステル師匠エルはそれほどまでに怒っていると!」

「穢れの獣はマズいって……。エルくんの大好きな幻晶騎士の天敵で、先輩と離れ離れにして、パールちゃんたちと一緒に作ってた新しい幻晶騎士も溶かしちゃったら、ね。巨人族だからまだいいけど、もし私達の故郷で同じことするのがいたら国ごと滅ぼされてるかも」

「すさまじいのだな、小鬼族の勇者は……」

巨人族の子供であり、エルとアデイに弟子入りした小魔導師とナブがドン引きするほどの怒りをエルが抱え込んだりもしたが、それで痛い目を見るのはルーベル氏族だけだからどうでもいい。

その後、エルたちとカエルレウス氏族は方針を転換する。

ルーベル氏族の行いは問いによつて正されなければならない。だが現状のままでは、穢れの獣に氏族が襲撃される原因となつた諸氏族連合軍を結成したとしても、再び個別に酸の雲によつて壊滅させられるだろうことは目に見えている。

ゆえに、まずは知らなければならない。

ルーベル氏族の専横の原因を。いかにして穢れの獣を従えているのかを。

一路、ルーベル氏族の住処へと向かう、エルたち。

「……そうですか、それを回収しますか。しかもゴミ呼ばわりして。僕の大切な大切なイカルガと……先輩の、ガルダウイングを！」

「ね、言ったでしょ？」

「……あの、師匠アデイ。我が眼が確かなら、ルーベル氏族の首がぼんぼん飛んでるのだから」

「首置いてけ！ 首置いてけえええ！」

「あと、開いた口の中に火炎魔法放り込んだりもしてるね。喉が中から焼けるって、痛そ

う」

「……我らの勇者が師匠エルとしたのが力比で良かった。本気で」

途中、エルたちが撃墜した穢れの獣の素材と、その近くに放置せざるを得なかったイカルガとシルフィアーネの残骸、そして隊長格だった魔獣とともにあっただろうガルダウイングの残骸を回収していたルーベル氏族と出会い、ころしてでもうばいともつたりも。

ルーベル氏族の回収班、不運である。

そして「戦利品」を利用するというエルの提案を受け入れ、カエルレウス氏族はさらにルーベル氏族の領地の奥深くへと分け入り、おそらくルーベル氏族の装備の充実を担っているだろう小鬼族^{ゴブリン}たちの村にたどり着き。

「あ、エルちゃんとアディちゃんだ。無事だったみたいだね。やつほー」

「先輩いいいいいいいいいい!!」

そこで、普通に畑仕事をしているアグリを見た！

最初、なんかあまりにも普通に農作業してるのでただの村人かと思うくらい、当たり

前の様子で!!

「え、ちよ、なんで?」

「いやあ、説明すると長くなるんだけどごっつああああ!」

首にかけた手ぬぐいで汗をふきふき、最後に見たしおしおの顔とは打って変わったつやつやの爽やかな笑顔であっさり説明しようとするアグリだったが、すぐに吹っ飛んだ。

大気推進の魔法さえ使い、一瞬すら惜しむように最高速で抱き着いたエルネステイという砲弾を、腹に食らったことによつて。

「おぐおお、エ、エルくん? さすがに今のは致命的なただけど……」

「……………先輩」

仰向けに倒れ、ついでに自身の身長分くらい地面を滑つてようやく止まったアグリの胴体を抱えたエルは、顔を上げずにふごふごとアグリを呼んだ。

「な、なんでしょ……?」

「先輩、ですよ。本当に、本物で……ちゃんと、生きて……!」

「……本当に、本物だ。俺は無事だよ、エルくん」

ようやく顔を離し、アグリの顔を覗き込む。

そのエルの頬を、涙が伝う。

零れるたびに、アグリの顔を濡らす。

アグリは笑って、その涙をぬぐった。

「泣くことはないだろ、エルくん。一応騎士団長なんだしさ」

「! ……泣いてません!」

「顔を押し付けて、人の服で涙拭くのやめてくれんかね」

ぎゅうぎゅうと、苦しくなるほど抱きしめて、エルは、アグリの側を離れようとしな
かった。

「ところで先輩、どうしてここに? あれから何があつたんですか」

「ああ、それ? そうだね、かいつまんで説明すると……」

ホワンホワンホワンノウギョウ。

「……今、変な音聞こえませんでした?」

「気のせいじゃない?」



「……ぶはーっ! 死ぬかと思った!」

デイセンドライトを着込み、必死に水中から陸へと上がる俺。

さすがに幻晶甲冑着込んでの水泳は無理があった。肉体強化が働いてなければ死んでたね、こりや。

酸の獣をほとんど自爆のように倒す寸前、俺はガルダウイングから辛うじて脱出することに成功していた。

とはいえ、脱出したのは本当に爆発寸前。見事爆風に巻き込まれ、あらぬ方向へとふっ飛ばされた。

ぐるんぐるん変な回転をする中で自分がどっちに向かって飛んでいるのかさえよくわからなかったけど、到着地点に川があったのは幸か不幸か。地面に激突することこそなかったものの、水中に沈んで割と本気で死にかけた。

「……近くにエルくんたちの気配はない。ボキューズ大森海の最奥で、おそらく船団もこの辺りには近づいて来られない。しばらく、一人で生き抜くしかないか」

その後、慎重に周辺の探索をすることしばし。

どうやら、酸の魔獣と戦っていたのは俺が落ちた川の向こう側だったようだ。この川を越えれば同じく森に降りているだろうエルくんたちに近づける可能性はあるが、俺の魔法の腕ではデイセンドライトがあつてもこの川を飛び越えることは出来ないし、泳いで渡るとなると今度は川の中に何がいるか知れたものではない。

よって、とにかく俺はこの地で一人生き抜かなければならないことが確定した。

回収できた物資は、元々着込んでいたデイセンドラートに、近くに墜落していたほぼ残骸状態のガルダウィングのコックピットから引つ張り出してきたサバイバルキットの一部。

「そして、こんなこともあろうかと常に用意しておいたスコップと鍬！ これさえあれば俺は100年戦える！」

ついでに、俺が乗る機体のコックピットには絶対常備している鍬とスコップ。これらをデイセンドラートの背中にマウントして、俺のポキューズ大森海生活が、始まった。

「とりあえずまずは畑作らないとな！ ちようどいいところ探すぜいやっほおおおおおう！」

魔獣ひしめく森の奥、俺の命がけのサバイバルが始まった。

……まあ、地に足ついてる分空の旅よりよっぽど気楽だがな！

で、森の中に入っただけで。

サバイバルキットの中に多少は作物の種を仕込んで来たけど、それらを撒くべき畑を作る場所はどこでもいいというわけではない。水場の確保や土の質、魔獣共に荒らされない場所などなど、長丁場が予想される以上慎重に吟味したい。

というわけでひとまずはそこらの小型魔獣を狩ってそいつらを食料に、いい感じの場所を探すことにした。

なあに、故郷の村にいたころは厄介な魔獣を狩っては食べることがデフォだったし、いまはデイセンドラートも十分稼働している。案外何とかなるものさ。

そういう感じでそこそこ安定した日々を過ごしつつさまよう数日。

——その果てにそこへたどり着いたのは、きつと運命だったのだろう。
主に、畑に魂を惹かれる農民の背負う運命。

「へ、これは……村?! 人が住んでるのか!?!」

森の奥へと分け入るにつれて、なんだか雰囲気が変わって来た。

人跡未踏の魔境、と思っていたのだが決闘級魔獣ものしのし歩くからか獣道は広く踏み固められて歩きやすく、しかもそれだけではなくそこはかたなく人為的な物を感じるものがちらほらあった。

もしかして、ひよつとして。そんな直感に突き動かされてさらに探すこと数日。

俺はついに見つけた。

ボキューズ大森海の中にひっそりとある、見慣れた風景。

どこにでもありそうな、農村の姿を。

しばらく遠巻きに観察すると、予想通りここは今も現役で人が暮らす村だということが分かった。

家々から出てきた人は俺の体に染みついたのと同じようなスケジュールで畑に向かい、耕し、草取りをし、肥料を撒く。

耳を凝らせば農作業の合間にかわす言葉は多少違和感を覚えるが、十分に聞き取れ、理解できるもの。……どうしてそういう人たちがここにいるのかはすさまじい闇を感じなくもないのだが、置いといて。

「うう、腰が……でも今日中にこの辺りを耕しておかないことには……うっ!？」

「おっと、危ない。大丈夫ですか？」

「へえ……? お、お前さんは?」

「まあまあ、お気になさらず。手伝いますよ。ここからそこまで耕せばいいんですよ? ……ああ、ようやくだ」

「なんじやろ、こいつの目、ちよつと怖い」

腰でも痛めているのか、フラフラと鍬を振るっていたおじさんを助けつつ紛れ込むことにしよう。新しく一から畑を作るのも楽しいけど、ここには既に環境整ってるんだから利用しない手はないよね!



「と、いう感じでもまずは深刻な農務シツクを直してからエルくんたちを探そうと思って、滞在してたんだよ」

「その雑な流れでしれつと村に入り込めたんですか!？」

以上、俺がこの村に落ち着くまでの経緯でした。

「そ、そんな……お貴族様の知り合いだったとは……!？」

「おいマジかよ。あいつ、お前んちの倅じゃなかったの?」

「うちには娘しかいねえって知ってるだろ! つーかお前んところの子も兄ちゃん兄ちゃんて懐いてただろうが!」

「言われてみれば、森に入るのは禁じられているのに当たり前のように魔獣を狩ってきていたような……」

「うちも肉のおすそ分けもらったな」

「便利だから、深く詮索せずにいたらこんなことになるなんて……!」

「……どうなってるの、この村の人たち」

「普通こういうところはよそ者に敏感なんだけど、どうもこの辺りって人の出入り自体

がないから、そもそも排他的も何もなかったみたいだよ？」

「だからってあつさり潜り込まないでくださいよ……」

なんだかんだでおおらかな人たちで良かったね、うん。

「……ところでエルくん、そろそろ離れてくれない？ 起き上がれないんだけど」

「ダメです」

「むー、エルくんを抱きしめられて羨ましいなー。……でも！ 聞いてください先輩、

私、エルくんの妻なんです！」

「なにい!？」

「ああ、確かに勇者がそう言っていたぞ、勇者の友よ」

「マジっスか巨人さん！ やったねアデイちゃん！」

「はい！ ……いやー、割と本気で不安だったんですよ。もし、この森で遭難するのがエ

ルくと先輩の二人だけだった場合、エルくんが先輩のお嫁さんになっちゃうんじゃない

いかって……!？」

「そういうのないから」

と、いう話を、エルくんに体当たりくらってすつ転がったまましてる俺でしたとき。

エルくん、全然放してくれない。

周りには、ここに来るまでの間にエルくんたちが氏族の一員として認められたという

巨人のカエルレウス氏族の人たちと、俺が今日までお世話になってた村の人たち。カオスだなあ。

ともあれ、これにてポキューズ大森海に取り残された銀鳳騎士団の面子は揃った。

しばらくの間エルくんがしがみついて離れてくれないことに難儀したりもしたけど、まあ些細な事。こうなってくれば、やることは一つ。

「では、改めて本格的に幻晶騎士を作りましょうか。幸い、イカルガのエーテルリアクタは2基とも無事ですし」

「やっぱりそうなるのか」

そう、小鬼族の村に協力を仰いでの現地資材による幻晶騎士作りだった。

ここの村、結構切羽詰まってるからなんだかんだで取り入るのは簡単だった。なにせ、俺程度の労働力と村の外に隠しておいたデイセンドラートを駆使して狩ってくる程度の魔獣の肉でも大喜びされるくらいだから、エルくんとアデイちゃんに加えて巨人族の人たちまでいるとなれば食料面でも魔獣被害に対する安全面でも盤石なものとなる。

話を聞く限り、エルくんたちと一緒にいたカエルレウス氏族の人たちは、小鬼族を庇護下に置いているルーベル氏族とは敵対的な人たちらしいけど、そもそもここは大分未

端。恩恵なんてあつてないようなものだったからあまり気にならないらしい。

つまり、切り崩し放題。胃袋を抑え、エルくんの口八丁と交渉力をもつてすれば協力を取り付ける程度のことはたやすかった。

「とはいえ、物資が圧倒的に足りません。イカルガとシルフィアーネ、それにガルダウィングの結晶筋肉をかき集めたとしてもまともな幻晶騎士一騎分にも満たない量しかありませんね……」

「装甲や骨格は魔獣由来の素材で何とかなるにしても、こればかりはねえ」

まあ、それにしたつて致命的に素材が足りないんだけど。

銀鳳騎士団にいと、幻晶騎士なんて畑から生えてくるんじゃないかという気がしてくるけど、エーテルリアクタの希少さを筆頭に、結晶筋肉、インナースケルトンや装甲に使う金属、銀線神経、その他諸々加工はもとより生成の段階からして高度な冶金学と錬金術のハイブリッドだ。

だからこそすずであるものは流用可能だが、ないものを作るとなるとそのためには果てしない手間がかかるわけで、事実上補給は不可能だ。

「なので！　こんな設計にしてみました！」

「料理の手順解説の「こちらが一晩寝かせたものになります」みたいにしれつと既に準備してるよね、エルくん。ふむふむ。……これは期待されてるだろうから言っておくね？」

『足は付いてない』

「あんなの飾りです！ 偉い人にはそれがわからんのですよ！」

「飾りじゃねーよ地に足つけて歩くしかないでしょ幻晶騎士は。まあ、この機構からするとあなたがち冗談でもなさそうだけど」

「でしよう？ 先輩が見せてくれた風の防壁、アレを見て考え付いたんです！」

それでも、何があろうと幻晶騎士を作るというエルクンの情熱は、俺の畑に対する執念に匹敵するものを感じるね。

とまあそんなわけで、エルくんは結局幻晶騎士を作り出した。

魔力を通す木材、ホワイトミストミステイククナイトがこの辺に大量にあることが発覚したり、どうや

ら小鬼族が使っている幻晶騎士ミステイククナイトなる幻晶騎士っぽいもののパーツや素材を流用したりして。

ついでに、その傍らで巨人族に使ってもらう用の魔導兵装なんかも作って、俄かに戦力が充実し始めた。もし仮にこの村を制圧するとなった場合、俺なら銀鳳騎士団の中間規模の戦力を要求するだろう程度には、ヤバいことになりつつある。

そんなときだった。

村が、襲われたのは。



「あれは、貴族様がたの幻獣騎士!? なぜここに!」

「みんな、とりあえず逃げてー!」

森が騒がしい、と思つてすぐ。現れたのは慌てた様子で戻つて来るアデイちゃん和小魔導師ちゃん、そして彼女らを追いかけるように現れた、魔獣とも幻晶騎士ともつかない異形の存在、村の人たちに曰く幻獣騎士だった。

一応は人を守護する側の存在がなんで、と思わなくもないけど、今この村には俺たち異邦人に加えてルーベル氏族に敵対しているカエルレウス氏族も逗留している。よくよく考えてみれば、ルーベル氏族配下の小鬼族としては裏切り者として処断する理由がいくらでもあつたわ。

が、だからといつておとなしくやられてやる理由はない。

小魔導師ちゃんが魔法で牽制してくれている間に村の人たちを避難させる。今の俺は使える幻晶騎士がないからね。こうするのが精いっぱいだし。

……どうせ、こういうことを嬉々としてやってくれる子もいるし。

『ヒヤッハー！ ちょうどいいタイミングで的が来ましたね！』

「あー、エルくんやつぱりやるんだ」

村の中にある、割と大型の建物が中から吹き飛んだ。

幻獣騎士の攻撃によって、ではない。その中にいたエルくん、ひいてはエルくんがこの地で作り上げた幻晶騎士によるものだ。

『さあてお披露目しましょう、イカルガとシルフィアーネとガルダウイングの素材を使い！ 魔獣の素材もレッツ・ラ・まぜまぜして！ さらに先輩の技術を組み込んだ新型機へカササギ！ その力をさっそく試せるなんて、ワクワクもんです!!』

カササギ。その姿ははつきり言って「異形」に尽きる。

眼球水晶の保護に使うのは、そのまま魔獣の頭部骨格なので髑髏面。

結晶筋肉の総量が少ないために可動部分は最低限に留め、イカルガに使われていた大型エーテルリアクタが供給する莫大な魔力による強化魔法に装甲を頼った、ほぼ木造。

あまつさえ下半身をこっそり削ったその機体は、失った機動力の解決策として「全身を包み込む虹色の膜」に頼っている。

そう、それこそが。

『先輩が見せてくれた風の防壁。高速還流するその防壁内にマナを再変換して抽出した高濃度エーテルを流し込むことでレピテートフィールドを形成する……これが！ 僕

のへエーテリックプライマルアーマーです!!』

その後の結末は、語るまい。

幻獣騎士も、そいつらが呼び寄せたと思しき魔獣もまた、等しくカササギと駆けつけた巨人族の、餌食となった。



「やあやあやあ、西方の同胞たち！ さつきはちよつとばかり失礼したね！ とりあえず仲良くしようじゃないか！」

「うっわ、胡散臭いのが来た」

と、いう戦いからしばらくして。

幻晶騎士レベルの巨体の戦場と化したことでズタボロになった村を巨人族の人達の間も借りながらなんとかかんとか立て直していると、妙な客が現れた。

襲撃時とは打って変わって幻獣騎士一機だけで、その掌に乗せられた声と態度の大きい人。名乗って曰くオスロン小王。

この地に住まう人間、小鬼族の王だという。

この後、俺たちは小鬼族の都に招かれることになる。

巨人族の戦争、賢人の問い。

生きとし生けるもののみならず幻晶騎士にすら優位を誇る、穢れの獣。

それを操り、主として君臨していたルーベル氏族に反旗を翻さんとする小鬼族。

ボキューズ大森海は、混迷の渦に飲まれようとしていた。

「そのきつかけを作ったのって、間違いなく俺たちだよね」

「穢れの獣、倒しちゃいましたからねえ」

その一連の騒動のきつかけになったのが、絶対の脅威であった穢れの獣を少数とはいえ倒したエルくと俺の行動というあたり、ちよつと冷や汗もんだけど。

そして、もう一つ。

この地に近づきつつある勢力があることを、俺たちはまだ知らなかった。



「さて、この辺りだな。警戒を厳に行くぞ、紫燕騎士団」

「了解。……とところで、ヘルヴィ教官から『森が拓けてる場所を重点的に、そこに畑がな
いか探せ。もし見つけたらすぐに行くから連絡しろ』って言われてるんだけど」

「あ、俺も俺も。さすがに生きてるにしたって畑作るには時間が足りないんじゃないかって
言ったんだけど、『やつならやる』ってすげえマジの目で言われた」

「知ってるか？ オルヴェシウス砦って畑の中に建てたんじゃなくて、建てたあとに周
り全部あの人畑にしたらしいぜ」

「……銀鳳騎士団、すげーな」

微妙な誤解を育てつつ、西方の戦力がやってきていた。

イカルガさん！　カササギさん！　キレのいいヤツ、頼みます！

ボキューズ大森海のはるか奥、人跡未踏の地での望まぬ大冒険。

そう思っていたのは、酸の雲をまき散らす魔獣と相打ちで墜ちてから数日の間だけだった。

エルくんたちと合流して実際に目にした巨人族アストラガリを人としてカウントすべきか微妙だが、この地には確かに人が生きていた。

形も体格も俺たちと同じ。そのうえ話す言葉まで共通とくれば、俺たちと森に住むこの村の人たちが、別の場所でそれぞれ独自に発生した別の生物とは考えにくい。つまりは、「そういうこと」なんだろう。

「大森伐遠征軍。君たちがそう呼ぶものの末裔だよ」

と、いう予想は村を訪れた小王オスロンを名乗るなんかチャラくてうさん臭いヤツに肯定された。

なんとも、信用ならないというか威厳ではなく上から目線を感じる人だ。

この地に生きる人は巨人族の一氏族、エルくんたちがお世話になってるカエルレウス

氏族を筆頭にしたその他大勢の中小氏族と敵対的なルーベル氏族の庇護下にあるらしい。

だからカエルレウス氏族を受け入れた村を一度は殴らなきやいけなかったとか言っていたけど、その結果幻獣騎士と呼んでいる幻晶騎士っぽいヤツが畑を踏んづけた。ギルテイ。

これが銀鳳騎士団の団員のしたことだったら、漏れなくグランレオンで模擬戦の相手をお願いするところだった。

……模擬戦だよ。めっちゃ吠えたり跳んだり跳ねたりで徹底的にビビらせることにしてるけど、ただの模擬戦だよ。

閑話休題。

小王なる人曰く、西方から空を飛んできた俺たちに興味があるとのこと。

小鬼族と名乗っているこの地の人たちの首都的などころに招かれ、話を聞いたり聞かせたり、エルくんがこっそり幻獣騎士の情報を探ってきたりしていたが。

「空飛ぶ船?! エルくん、みんなだよ!」

「そのようですね。予想よりだいぶ早かった」

という情報が舞い込んできた。

なるほど、エルくんが生きていることを信じて、多分猪突猛進エルくん大好き騎士で

あるディートリヒあたりが焚きつけて、ついでに国王陛下もエルくんなら生きてるんじゃないか？ という可能性に賭けて派遣されたのだろう。

穢れの獣は確かに脅威だが、そこはフレメヴィーラ王国。一度見た魔獣に恐れをなしては畑を広げることなどできないからね。

「と、いうわけで状況が変わりました。ルーベル氏族との決戦において、穢れの獣を操る小鬼族はルーベル氏族に敵対的な行動を取るとのこと。その旨を伝え、諸氏族連合軍の再結成を働きかけるべきでしょう」

「おお、真か！ 穢れの獣さえなくば、その後の問いは百眼のお目にかかるべきところ！」

そんなわけで、俺たちはいったん小鬼族の都を出てカエルレウス氏族と合流。

彼らの目的である、ルーベル氏族との決戦のために動くことになった。

巨人族の事情には詳しくないんだけど、なんでもルーベル氏族は巨人族の王になるための条件「六眼」を満たさない五眼の人が王を僭称している状態なのだから。

ちよつとの付き合いで分かったことだが、巨人族は掟とかそんな感じのものを重んじる気風であり、彼らが「百眼」と呼ぶ神様のものを重要視している。

その辺に真つ向から逆らうこの僭称、当然大きな反発があったそうなのだが、それを

ねじ伏せたからくりが、穢れの獣を戦力に組み込んだことであつた。

しかしそれも今や無くなつたに等しいわけで。

「では、小魔導師パールヴアマールガ、他の氏族の人たちに協力してもらいに行きましようか」

「う、うむ。師匠エルのこれに掴まれて飛ぶのは二度目だが、慣れないな……」

「うおおおおおおお! なんのこれしきいいいいい!」

「ザカライアさん、がんばれー」

賢人の問い、再び。そのための使者として選ばれたのは小魔導師ちゃんで、移動手段はエルくんのカササギ。多分これが一番早いと思います。

同行者は、カササギを動かすために必須のエルくと、エルくんから離れる気が微塵もないアデイちゃんがコックピットに。小魔導師ちゃんはカササギのメインアームに抱えられ、ついでに小鬼族から連絡役として派遣されたザカライアさんという騎士の人が定員オーバーのためカササギの掌の上に乗って、飛行の風圧に耐えている。すげえ根性。

そして、俺も。

ディセンドラートを身に着けているのでザカライアさんよりは大分マシだけど、カササギの手に収まっています。

カササギ建造時に教材としてアデイちゃんのディセンドラートはバラしたけど、俺の

方はまた使うことがあるかもしれないからと温存しておいたのが幸いしたね。

「なるほど、諸氏族集めに、と。俺はカササギに乗り切れないだろうからカエルレウス氏族の人たちに村まで連れていってもらって、そこで待つておくよ」

「ダメです」

「えっ」

「先輩からは目を離さないようにすると決めましたから。一緒に来てください。……もう、あんな思いはしたくないです」

「いいなー。エルくんにしがみつかれてる先輩いいなー」

「アディちゃん、目が怖い」

という感じで、回り込まれてしまった！

そんなわけで、諸氏族の住んでいる方へ向かって飛ぶことしばし。

「おーっと、中々いい隊列ですよトウエディアーネ部隊！ だがしかし、まるで全然、僕を捉えるには程遠いんですよねえ！」

「エルくん、自分の部下にも容赦ないね」

なんか、空中戦になりました。

しかも、幻晶騎士と。

喜ぶべきはずである、銀鳳騎士団との再会。

……それが遭遇戦になるんだから、カササギの悪役フェイスも困ったもんだよね。

「お、あれはガルダウイング。たしかあの機体を実戦投入できるのは藍鷹騎士団のみという話ですから、ノーラさんたちも来てくれていいようですね。……純粋な空中戦となるとトウエディアーン以上の脅威。今のカササギにとつては難敵です」

「つーか、エルくん。そろそろお互いに視認できるくらいまで近づいてきたんだし、俺が顔出せば戦闘終わるんじゃない?」

「……………いえ、ここは戦場です。危険ですから隠れていてください」
「本音は?」

「僕が育てた騎士団と本気で戦える機会なんて、これを逃したら多分二度とありません!」

「本当にしようもねーなこの子」

ちなみに、カササギの中の人であるエルくんは面構え以上にマッドサイエンティスト系悪役メンタルです。



「銀色坊主……！ お前、よく生きて！」

「久しぶりです、親方。みんなも元気そうで何よりです」

「エルう……！ それはこっちのセリフだバカ！」

銀鳳騎士団の飛翼母船イズモ。

その格納庫内で、エルくんが親方やバトソンくんたちみんなに取り囲まれていた。

そうもなるだろう。みんなの目からすればエルくんは魔獣ひしめく森に墜ちた。

生きていると信じてここまで迎えに来てくれたようだけど、それでも本当に再会でき

たその喜び、俺も少しはわかるから。

まあ、感動の再会の前に騎士団丸ごと相手に空中戦する羽目になったけどね！

いまはカササギに乗っていたのが俺たちだとわかってこうして迎え入れてもらって

ます。

カササギ自体も、抱えてきたパールちゃんもめつちや驚かれてるけど、エルくんなら

そう言うこともあると納得されている。素晴らしい信頼だ。

「あんたは……！ 生きてるなら生きてるって言いなさいよ！」

「ヘルヴィそれは無茶つてもんグワーツ!」

一方、俺はヘルヴィにキヤメルクラッチされていた。理不尽。でも後頭部の感触が柔らかくてちよつと幸せ。

「事情はいま説明したとおりです。僕はちよつと巨人族の人たちに協力してきますね」「エルネステイ……また君は息をするように無茶をして……」

そして銀鳳騎士団にも状況説明。

エルくんとアデイちゃんが撃墜されてからこれまでにあった出来事、巨人族については実物であるパールちゃんを証拠としての説明、そしてこれから行われるであろう巨人同士の争いについても。

それを聞いて呆れるデイトリヒの様が、団員全ての意思を代弁していると言っているだろうか。

「みんな心配してたのよ! それに、どうせあんたのことだから無駄に大きな畑くらい作ってるだろうからすぐ見つかると思ったのに、おとなしくしてるなんて!」

「さすがにこつちにもいろいろ事情があったんだよグワーツ!」

その傍ら、俺はヘルヴィの繰り出すロメロスペシャルを食らっていた。

格納庫の床の上だから、むしろヘルヴィの背中が痛いんじゃないだろうか。

「お久しぶりです、アグリ様。あなたの開発したガルダウィングは、ここに来るまでも大いに私達の助けになってくれました」

「あ、ノーラさんもお久しぶり。……じゃあその、役に立ったお礼ってわけじゃないですけどそろそろ助けてくれませんかねアバーツ!？」

そして挨拶しに来てくれたノーラさん。

うつすら微笑んでるけど、俺を助けてくれる気はないんですねわかります。

ヘルヴィの腕ひしぎ十字固めで3カウント寸前なんですけどね。でも手首のあたりが大分幸せ。

「……バカ」

「ヘルヴィは人一倍アグリのことを心配していたからな。何よりだ」

「照れ隠しにしてはかける技の本気度がシャレにならないと思うぞ？ そろそろ止めて

やれ、エドガー」

そんなこんなで、とりあえず銀鳳騎士団総出で小鬼族の支援と、巨人族の問いへの介入をすることになりました。



「ふん! 小鬼族ごときが我ら巨人の問いを目に入れると? バカげている!」

当然、その辺の計画がすんなりいくわけはなかった。特に巨人側。

銀鳳騎士団と合流した俺たちは、部隊を分けて小鬼族の村の支援と、パールちゃんを連れて諸氏族連合再結成のために動いた。

……俺としてはエドガー達が向かう村の支援にぜひとも行きたかったんだけど、腕にしがみついたエルくんが断固として譲らなかつたので巨人族の説得に向かうことになりました。くすん。

とはいえずでに一度ルーベル氏族のけしかける穢れの獣によって瓦解した連合軍がそう簡単に再結成されるわけはなく、なんやかんやで再び集まった巨人族の中にも反対意見が根強かつた。

一応穢れの獣に関しては動かない、あるいはこちらに味方するという確約が出ているとはいえ、そもそもその話自体をどこまで信用していいかがまず未知数だ。小王という人物、どうにも信用していい気がしない。

『いやいや、まいったね。巨人というのは図体ばかり大きくても知恵は回っていないらしい。我々の戦力の評価もロクにできないとは』

「……小鬼族、いまならば言葉を翻すことを認めるぞ」

『おい見ろよ、めっちゃ青筋立ててるぞ!』

『あんな軽い挑発で怒ってやんのー! プーツ、クスクス!』

『ブーツ、クスクス!』

『ブックス!』

そんな巨人族、アーテル氏族をめっちゃ煽るのは、会談の場についてきた第二中隊の面々。挑発して、殴り合いに持ち込んで実力を示して認めてもらおうという考えによるものなのだろう。

……エルくん、人選間違えてない? エドガーたちには村の護衛と拠点化を頼んだからって、こいつらに交渉とか絶対向いてない。

「……いいだろう、ならば貴様らの身の程、問いにて示すがいい!」

『そうこなくっちゃ!』

でも、結果オーライかも。なんだかんだで巨人族も問い(物理)による結論を重視する種族。思考の基盤が第二中隊とほぼ一緒みたいだ。……種族総出で第二中隊レベルって大丈夫なのかな、とはちよっと思っただけ。

「では問いの相手は……貴様だ!」

「え、俺?」

でも、なんでその相手に俺が選ばれるんですかねえ!?

「小鬼族にも勇者はいよう。だが、これから行われる問いは氏族の命運をかけたもの。氏族最強の勇者1人の力のみで為すものではない以上、最も小さい貴様の力を見定める」

「ええー、なにその屁理屈……」

とはいえ、この状況で断れるものでもない。

数多の巨人族が集うボキューズ大森海の広場で、巨人族の中でも高位であるとされる五眼の巨人の目の前に引き出された俺が、銀鳳騎士団の代表として戦うことになるなんて、どういうことなの。

ところで、このとき。

銀鳳騎士団と合流して、エルくんのイカルガ再建のための資材すら持ち込んでいた親方たちだけに、グランレオンのみならず量産仕様を元にガルダウイング相当の機体を組んできてくれたのに加え。

「では、問おう!」

「はいはい、わかりましたよ。……カルデイヘッド、スタンディング」

「……ちよつと待てええええええええええ!」

カルデイヘッドもまた、持ち込んできてくれていたわけで。

おそらく一番背が低いからと俺を選んだだろう巨人の目の前で、スタンディングモー

ドへと、変形して見せた。

「え、なんですか？」

「貴様、さつきまで小さかったはずでは!？」

「あー、それはまあ。さつきまでは座つてたみたいなものと思つてください。これがカルデイヘッドの近接格闘戦仕様、スタンディングモードだ」

「ええー……」

『先輩、すごいです！ やつぱり死ぬときはスタンディングモードですよね!!』

「勝手に殺さないでね、エルくん」

カルデイヘッド。

農業用としてはカルデイタンクで十分過ぎるほどに有用だとわかったので、今後銀鳳騎士団としてあれこれ連れ回される中、通常の幻晶騎士と殴り合いをする羽目になることを想定したカルデイタンクの改修型。

最大の特徴は、キャタピラを装備していた脚部を車輪に変え、変形機構を搭載したこと。これにより、機動力と法撃能力に優れるタンクモードと、格闘戦に優れるスタンディングモードへの変形が可能となった。

今回は巨人の人を相手にするので法撃を使うわけにもいかず、スタンディングモードを採用してみたんだけど……なんか呆れられてる気がする。

「まあなんでもいいや。銀鳳騎士団、カルデイヘッドのアグリ・ボトル。タイマン張らせてもらうぜ!」

「……なんかよくわからんが、これも百眼の思し召し! ご照覧あれ!」

という感じで殴り合いになりました。

ちなみに、結果は。

「パワー……ボム!」

「グワーツ!」

本日の巨人プロレス、決まり手はカルデイヘッドのパワーと足腰を活かしたパワーボムでした。



「うーん、ぶんぶんうるさい」

『アグリ! 何匹かそっち行つたみてえだ、撃ち落とせ!』

ボキューズ大森海はその名の通り広大な森のだが、稀に木々が生えず広場になっている空間が存在する。

偶然木が生えていないのか、魔獣あるいは巨人族の影響で出来たのか。いずれにせよ

その中でもとびきり広いこの場が、巨人族の決戦の舞台となるのは必然だったのだらう。

巨人族同士の戦闘が始まる中、俺たち銀鳳騎士団があまり前面に出ないように注意しつつ上空で待機していると、しばらくして現れたのが穢れの獣。

こいつらは予定通りにルーベル氏族へと牙を剥き、地上の一角に阿鼻叫喚の地獄を作った。

そこまではいい。思うところがないでもないが、少なくとも俺が口を挟む話じゃない。

問題は、そこから。

現れたんだ、奴が。

元々は全ての巨人族にとっての敵であったという穢れの獣を従えることができていた理由。

小鬼族が、小王が握っていた切り札。

『やあ、そこにいるねエルネスティくん！ ついに我らの凱旋の時が来た！ とともに西方へと旅立とうではないか！』

「……小王、想像以上にとんでもないものを隠し持っていたようですね」

きつとこの場の誰もが目を疑った。

小王の声が聞こえてきたのは、地上ではなく空の上。銀鳳騎士団の飛空船では無論なく、それはこの場の何よりも大きく空にある。

魔力によるものと思しき虹色の光をまとう、街一つ程度なら乗せられそうなほどに巨大な。

あれはきつと、魔獣だろう。

「魔獣を従える、規格外の巨大さを誇るモノ。……さながら〈魔王獣〉とも呼ぶべきかな?」

そんな魔王獣（仮）と、俺たちは結局戦闘になった。

小王の主張は、あの魔王獣並びに穢れの獣を自分達の戦力として従えたまま西方へと帰還すること。

が、それを許容できるほどフレメヴィーラ王国は魔獣に対して寛容ではない。

穢れの獣は完全な制御化にあるというし、いまこうして銀鳳騎士団とタメを張れる戦術行動を取るのを見るに嘘ではないと思うが、だからこそ危険だ。

もし方が一その手綱が外れた場合、あるいはそもそもその牙がフレメヴィーラ王国に向いた場合、どれほどの被害が出るかは考えたくない。

「人間の意思で操れる魔獣なんて、無人機のようなもの。控えめに言っただけで暴走フラグです」

とはエルくんの弁。なので、とりあえず殴り倒すことになりました。

飛翔騎士部隊が全機出撃して激しい空中戦を繰り広げ、飛翼母船が持てる火力をぶちまける。

いつの間にかエルくんも戦線に出ていて、魔王獣の向こうからやってきたエドガー達第一中隊の船に乗っていたアデイちゃんの操縦するイカルガと合流したようだ。

一方俺は、飛翼母船の甲板上にカルデイヘッド、グランレオン、ガルダウイングを全て銀線神経で有線接続し、持てる火力の全てを駆使して近づく穢れの獣を打ち落とす。そんなことをかれこれだけ続けたか。

いやはや、先が見えないね？

『ぐおお……頭いてえ……！　アグリ、お前は大丈夫か!?』

「えー、なに親方聞こえない！　つーか固定砲台とはいえ3機分1人で操縦するの超大変だからあとにして！」

しかも、なんかよくわからないけどみんなの動きが鈍ったりして超忙しいし。

「埒が明かないな。こりやどう考えてもあの魔王獣本体を叩かないと終わらない……つ

て、ん? なんか穴が開いてる?」

この時、俺が見つけたもの。

あとになって分かったことだが、イカルガとカササギが合体してマガツイカルガとなったエルくとアデイちゃんの幻晶騎士が魔王獣とほぼ単騎で渡り合っている中、いつまで経ってもエルくんたちを倒せないことにキレた小王が繰り出した次の手だったらしい。

魔王獣の体内からさらなる触腕を伸ばしてエルくんたちを叩き潰そうとしたようだけれど、それはつまりあの魔王獣の外と中を繋ぐ通路が出来たということに等しく、ああいうモノは中から潰すのが常套手段。

「……よし、行くか。親方ー、ちよつとあのデカブツの方行ってくるからこつちよろしくー」

『なにいい!? おい待てエー!』

俺が一人でぶん回す羽目になっている幻晶騎士は3機。

フルパッケージ状態で甲板上に踏ん張っているカルデイヘッドと、その後ろから法撃をまき散らすグランレオン、そしてグランレオンの背中にくつついたガルダウイング(新)。

3機のマナプールを共有してあるから魔力的には大分余裕があり、銀線神経による同

調縦も可能な状態。

それを活かして、グランレオンをぴよいつと飛び跳ねさせ、カルデイヘッドの強靱な腕の上に乗せる。

いかにバランスを取ったとしてもすぐに落ちる程度の幅しかないが、それで十分。長居するつもりはない。カルデイヘッドが持つ、大量の結晶筋肉。引き絞つてため込んだパワーを、解放。

「いやっほー！ー！ーう!!」

『ちよっ、アグリ!? アグリよね!』 なにしてんのあのバカー!』

全力投擲される弾は俺。

背中にガルダウイングを搭載したグランレオンが、カルデイヘッドの腕力とマジウスジェットスラストの推力を受け、トウエディアーネたちと穢れの獣の交戦域をあっという間に突き抜けた。すまんなヘルヴィ、こうやって勢い付けないと飛べないんだよ。

「む、迎撃が来た。まあ当然だな。……予想通りだよ」

それでも、敵陣は層が厚い。

以前戦つたときも展開した風バリアで酸の雲を突き抜けた先に、待ち構えていた穢れの獣が2匹迫ってくる。

ガルダウイングと合体したグランレオンはある程度の初速があれば飛ぶことが可能

とはいえ、さすがにイカルガほど自由自在にはいかない。魔王獣までの距離も考える
と、進路を大幅に変えてしまえば届くかどうかがまず怪しい。

ので、俺はくるりとロール。それに合わせて機体も横にズレ。

——!?

「カルデイヘッドとの接続が切れる前に撃つておいた轟炎の槍、召し上がれ」

その背後から追いついてきた轟炎の槍が命中し、爆発四散を遂げた。

さらにその後も2発の轟炎の槍が空を駆け、狙い通り魔王獣の開口部に命中。開いた
穴までを一気に飛びぬけ、俺は体内へと突入した。



魔王獣は強大だ。

だがエルくんはもっとヤバい。この戦いは、その証明となった。

俺が魔王獣の体内に侵入するのとはほぼ同時、どうやらエルくんたちも別の場所から突
入していたらしい。

「むー、めんどくさいですね。まとめてフツ飛ばしましょうか。エーテリックプライマ
ルアーマー内のエーテル濃度を限界まで上昇。……そして限界を超えれば、吹き飛びま

す!!」

「それほぼ自爆じゃないのエルくん!」

みたいな感じで、まとめてフツ飛ばしたりしたのだとか。そういえば、魔王獣の中に入ってしまったらなんかシャレにならない振動が来たりもしてたけど、アレだったのか。

「先輩! やつぱりエーテリックプライマルアーマーでアサルトアーマー出来ました!」ってあとで満面の笑顔で報告されたけど、どんな顔で迎えばよかったんだ俺は。

エルくんの、というかエルくんを抱えるフレメヴィーラ王国の将来が不安だ。

そんなエルくんたちは魔王獣の中枢にたどり着いて小王とあれこれ話したりして魔王獣にトドメを刺したらしいけど、俺はひたすら柱を砕いてました。ストレス解消にちょうどいいね。

運よくお土産も手に入ったし。

「エルくん。魔王獣の中で見つけたこれ、あげる」

「……そ、それは!?! もしかしてあの巨大魔獣の……触媒結晶ですか!?!」

「そうだと思う。これ引つ剥がしたら崩壊が始まったし。……グランレオンでこれを啜えて、崩壊する体内から逃げ出すのはかなり大変だったよ」

という感じで、下手するとイカルガに使われているベヘモスのもの以上の触媒結晶も

ゲットできたし、国に帰っても証拠として提出できるんじゃないかな。

ボキューズ大森海は、変わるだろう。

この一帯で支配的な立場にあるだろう巨人族の脅威となっていた穢れの獣はほぼ根絶やしになった。

加えて、最大氏族であったルーベル氏族もかなりのダメージを受けたことから、今後の別の氏族が台頭していくことになるかもしれない。

大森伐遠征軍の生き残りである小鬼族の人たちも小人族ヒューマンと名を改め、生き残った幻獣騎士と、なんだかんだで例の村——いまや崩壊した首都的などに住んでた人たちも混じり、やけっぱちな発展中——に住むことになったカエルレウス氏族の助力でそれなりの力を示せるようになった。巨人族に対しても、一定の発言力を有するようになるだろう。

「さーてそれじゃあ食糧生産のためにも畑広げないとねー！ カルデイヘッドの前には『すでに畑になってる土地』と『これから畑になる土地』の二種類しか存在しない！」「二応これからの都市計画というものもありますから、ほどほどに頼みますね先輩」

その中で、銀鳳騎士団はもうちよつとだけ助力することになった。

いずれ国に帰るとはいえ、変革真つ只中のこの状況で放り出すのは忍びない、という

エルくんの方針に基づいてのことだ。

エルくん自身は町の顔役として小人族の人からも巨人族の人からも相談や頼みごとをされて大変みたいだけど、俺はひたすら畑作ってました。

現地の土質や作物のことを勉強して、そこにフレメヴィーラ印の農業技術をフィードバック。爆発的に増えた人口を賄うための耕作地はカルデイヘッドとグランレオンを駆使して一気に耕し、十分な収穫が期待できるだけの用意はした。

名残惜しいけど、あとはこの地の人たちに任せよう。

「ところで、少し意外だな。君のことだから巨人族を農民化しようと企むかと思っていたのだが」

「正直、ちよつとは考えたよディートリヒ。でも、巨人族の食糧の役を担えるような作物が見つからない限り、農耕文化は根付かないだろうから。……もし巨人族に本格的に農業をしてもらうなら、この森をくまなく探すか、故郷の村の人たちを呼ぶ必要があるな」

「待て、なぜ森全域の搜索とお前の故郷の人とやらが同列に語られる」

「簡単なことだ、エドガー。あの人たちの前に『希少』という言葉は意味をなさない。いやむしろ『希少なものほど出る』から」

「本格的にどうなつとるんだ君の故郷は」

出来れば、今度は巨人族の腹を満たせる作物を見つけて、あの人たちも農民化してみ

たいなあ……!」

3か月の空の旅で干からびかけ、魔獣との戦いで森に墜ち、サバイバル後紛争介入というすさまじいことになったボキューズ大森海への調査遠征。

それもようやく、終わる時が来る。

懐かしい大地への、凱旋だ。



「意外ね、空の旅なんて渋ると思ってたけど。土耕せないでしょ」

「ふっふっふ、どうやら帰りは一部の巨人族の人たちがついてくるみたいだからな。当然、道中で巨人族の食糧確保のために地上へ降りることになるだろう? ならばその時その場を農地にすれば……!」

「その後放置されて森に還るのが関の山じゃないかしら……」

とりあえず、フレメヴィーラ王国に帰り着くまでの3ヶ月を生き残れるかが問題だけどな!

番外編 帰省！ ユシツダ村！！

「え、実家帰っていいの!？」

「はい。先輩もボキューズ大森海で行方不明扱いになってご家族も心配しているでしょうし、いまは銀鳳騎士団も動くに動けないですから」

「ヒヤツホオオオウ！ 最高だぜえええ!!」

そういうことになった。

大森伐遠征軍の先遣隊としてボキューズ大森海に挑み、その奥地で撃墜され、助けに来てくれたみんなと合流してフレメヴィーラ王国に戻って来た俺たち、銀鳳騎士団一行。

帰ってきてみたら、それはもうフレメヴィーラでは大変な騒ぎになった。

なにせ国の最重要人物であるエルくんが魔の森から生還したわけだから、お披露目に式典に情報の報告と整理にその他諸々やることが山盛りで、珍しいことに銀鳳騎士団の新型幻晶騎士開発が停滞気味だった。

まあ、そうもなる。現地で作った間に合わせの新型であるカササギに、かの地で生きていた第一次大森伐遠征軍の生き残り、人が操っていた魔獣、そして少数ながらついて

きた巨人族の人たち。どれだけ話しても終わるまい。

それでもエルくんは決して止まらないから、寝る間を惜しんで凶面を引いてるらしいけど。そして三日にあげず俺に見せに来て意見を聞こうとするんだけど。

まさに今が、そうであるように。

「エルくん、人のベッド占領するのやめてくれる?」

「えー、ダメ……ですか?」

人のベッドに凶面を広げて、足をぱたぱたさせながらこつちを振り返って来る姿はきつとアデイちゃんなら垂涎モノだろう。あの足の裏をべろべろしたい衝動に駆られるに違いない。あるいは我慢できずに飛び掛かっているかも。

「ダメです。第一、エルくんもう眠そうじゃないか。自室に帰るか、エルくん用の布団で寝なさい」

「あふ……。言われてみれば、たしかに大分遅い時間ですね。……たまには先輩も一緒に寝ませんか?」

「寝ません。そういうことはアデイちゃんに言いなさい」

しかも、いい加減本気で寝ようというのか、いつの間にか杖のホルスターやらなにやら外した部屋着姿でおいでおいでしている。

やめてくれないか! そういう、銀鳳騎士団に生息する腐海の住人を刺激するような

ことをするのは！

あとアデイちゃんに知られたらまた決闘挑まれそんなことをするのも！

ともあれ、そんなわけで銀鳳騎士団は比較的落ち着いている。

そのうち人員の再編成や、国機研との人材交流も始まるという噂は聞こえてくるけど、すぐにどうこうなるわけではない。

そんな状況だからだろう。俺に帰省の許可が下りたのは。

嬉しいなー。

ボキューズ大森海で遭難したのは奥も奥、飛空船を使ってさえ片道3ヶ月かかる距離だったわけで、行って帰って迎えが来て帰って来るまでにまるまる1年以上かかった。

一応村の両親たちには俺の行方不明も情報が行ってはいたらしいし、帰って来たことも伝わっているはずだ。だからこそ、そろそろ顔を見たいし顔を見せたい。

そして村の土に触れたい（超重要）。よし、さっそく荷物まとめて帰るぜ！

なあに、エルくんの言う通りちよつとした里帰りさ！ うちの実家は田舎だから、うっかり雪の降る季節までいたら道が閉ざされて幻晶騎士でもロクに出歩けなくなつてそのままなし崩しに……なんて考えてもいけないぜ！

「さて、それじゃあみんなにも声かけておきますね。先輩の故郷の村見学ツアー、楽しみです。そしておやすみなさい」

「……………なんて?」

……………だって、あのエルくんがそんなこと許すわけないからね!



「うーん、いい天気。こりゃあ帰省日和だな」

「……………ただの帰省というには過剰に過ぎる戦力だがな」

そんなわけで、銀鳳騎士団有志による俺の帰省。

参加メンバーはエルくんと、エルくんがいるなら当然ついてくるアディちゃん。それに面白そうだとついてきたヘルヴィを筆頭に3人の中隊長。

なんだかんだでユシツダ村へはオルヴェシウス砦からは距離もあるので、道中の足にはカルデイヘッドとヘルヴィのツェンドリンブル。そしてこの2機が引く幻晶騎士用荷車にアルディラッドカンバー、グウエラリンデ、エルくんが再建中のイカルガ代わりに使っているカルデイトール。普通にちよつとした規模の魔獣の群れくらいなら殲滅できる戦力です。

「まあ、俺の故郷は辺境だからな。下手すると王都の近くじゃ見ないくらいの魔獣も出るから」

「ここで私たちが襲うような魔獣がいたら、そちらこそ災難だな……」

てなわけで、カルデイヘッドの車輪とツェンドリンブルの4脚がぎやりぎやりどこどこと道を行く。街道は魔獣対策のためにある程度切り拓かれているが、逆に残っている森は切り拓くことさえ難しい魔獣の生息地ということになるわけで、その緑と闇が濃い。

商人でさえ幻晶騎士による武装が必須なフレメヴィーラ王国内で、そんな商人もあまり寄り付かない俺の故郷は伊達じゃない。

「ところでアグリ、気になったのだが……今回の帰省はあまりに急だが、故郷に連絡はしているのか？」

「連絡？　してないよー」

「ちよつと待ちなさいよ。大丈夫なの、それ？」

「大丈夫も何も、直接行くより早い連絡手段がないんだよ。今回は急に決まったことだから、特に」

そう、具体的にどのくらい辺鄙なところかという点、まともな連絡手段もないくらいだ。

フレメヴィーラ王国は魔獣と人間の生存圏がぶつかるというか混じり合っている最前線。街道上の行き来でさえたまに命がけになるせいもあって、郵便制度など夢のまた夢。

遠方に連絡したい、となったら手紙をしたため、連絡先の方へ行きそうな商人に預けて、下手するとさらにその商人も別の商人に中継して、というリレー形式くらいしか手がない。

しかも俺の故郷、ユシツダ村はド辺境なうえに自立精神旺盛な村。商人が寄り付く機会も少ないとなれば、直接足を運ぶのが唯一の方法と言っている。ガルダウイングで一足先について手もなくはなかったんだけど、空を飛ぶ幻晶騎士をあまり見たことないだろう村の人たちには魔獣の襲撃と勘違いされる可能性がある。そうなったら割と真剣に俺の命がヤバイ。

だから、こうして直接行くことにした。俺の故郷だけあって村の人たちはその辺気にしないし別にいいんじゃないかな。

……それに。

「お土産、また増えそうだしね」

「街道沿いの森が騒がしい……魔獣だな。私達も出るか?」

「いや、俺とヘルヴィで平気だろ。数も大きさも大したことなさそうだし。荷車の方の

護衛よろしく」

ざわりと、街道側面の森から異質な気配が漂ってきた。それが魔獣によるものだと思知できないようではこの国で騎操士をやってはいけない。俺とヘルヴィは一旦荷車との接続を解除し、森へと向き直る。

森までの距離はそこそこ。バックウエポンもある。決闘級が2体くらいであれば近づかれる前に対処することも十分可能だが……と、ガサリ。

——ゴアアアアアアアアア!

「決闘級には少し足りないくらい魔獣が1体、ね。来るわよ!」

「ああ、後続がないならどうってことない……が、様子がおかしいな?」

森の木々をなぎ倒して現れたのは、逞しい脚を持った獣型の魔獣。勢いよく飛び出してきたわけだし、ここは近づかれる前に仕留めておいた方が無難だ。

……無難なんだけど、なんか妙だな。魔獣が飛び出して来たはいいものの、その進路がこつちとは微妙にズレている。その割に、走り方は超必死。

まるで、何かから逃げているような……。

バックウエポンの狙いを定め、すぐにも撃てるようにしながらも少しだけ様子見をさせたそんな疑問。

『待てや獲物おやおおおおお!!』

「あ、アレうちの領主さまだ」

「……噂に聞くあんたの故郷の領主、すごいわね」

魔獣を追って森から飛び出てくる幻晶騎士とその叫びが、すぐに氷解させてくれました。

機体自体は、特に珍妙などころのないカルデイトレーベースのカスタムタイプ。

が、背中にたなびく外套型追加装甲が専用機としての存在感を示している。マントをたなびかせて突っ走り、ジャンプ。逃げ惑う魔獣の首に膝を叩き込んで絶命させる様子はバーリトワード感さえ漂うが、機体に刻まれたエンブレム、「片膝をつけて両腕を振り上げ、力こぶを作っで見せる人のシルエツト（虹色）」。あれは紛れもなく領主さまのところの家紋です本当にありがとうございます。

『ツシヤア! 手間取らせるとはいいい度胸! なかなかイキのいいヤツだった!』

「……って、あれー? なにその幻晶騎士の集団。商人? 道案内いる?』

「……いえ、大丈夫です。というか商人じゃないです。お久しぶりです、領主さま」

『久しぶり? ……その声、それにここらじゃ珍しい幻晶騎士だらけってことは……ア

グリ・ボトル!? ユシツダ村の!?!』

うーむ、まさかの領主様に名前を憶えてもらっていたとは驚きだ。

どかどかとカルデイトーレが駆け寄ってきて、そして俺たちの前でずさーと地面を削りながらブレーキをかけて止まり、コックピットハッチが、開いて。

「ひっさしぶりねー！　大森海の奥で行方不明になつて無事帰つてきてたとは聞いてたけど、村にも顔見せに来たのか。そりゃあ喜ぶわよー！」

俺たちが着ているのと大差ない、実用一点張りの軽鎧姿で出てきたのは、やっぱり領主さまでした。

相変わらずポニーテールに結つた髪が長いですね。

「はい、突然の来訪ですみません」

「いいっていいって。よーし、それじゃあさつき仕留めた魔獣はユシツダ村にプレゼントトしましよ。餞別よ餞別。私も行くぞー！　歓迎の宴会じゃー！」

うちの領主さまは本当に話が早い。俺を一目見たその日のうちにライヒアラへぶち込むことを決めただけはあるぜ！

こうして道中で会うことになつたのはさすがに予想外だったけど、一応この旅程の中ではそもそも領主さま、あるいはその不在の間に本拠を守っているだろう代官さまに挨拶することも予定に入っていた。だからまあ、ちようどよかつたのだろう。手間が省けた。

「……ねえ、ちよつと」

「どうした、ヘルヴィ。そんなめっちゃ驚いた顔をして。エルくんまで同じ顔してるのって珍しいけど」

と、思っていたらなんかヘルヴィたちが目を丸くしていた。一体どうしたんだろう。バックウエポンも剣も持つてるくせに蹴りで魔獣を仕留めた領主さまに驚いてるんだろうか。気持ちは痛いほどよくわかるが。うちの領主さまは足癖悪いぜ？

「あんたの村の領主さまって……女の人だったの!？」

「そうだよ？ あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いていないぞ。隙あらば領内を徘徊して魔獣を狩る趣味と実益が両立した人物であるとしたら」

「私もだ。だが、鉄腕という異名にもすごく納得がいったな、うん」

そんな感じのハプニングもありつつの帰省旅行。

いやはや、また一悶着の匂いがするね？



「というわけで、ここが俺の故郷です」

「こう言っただけだが、すさまじい辺境、いや『最前線』だな。ボキューズ大森海の外縁

部が目と鼻の先ではないか」

「村の周囲を守る柵が恐ろしく堅牢で、しかも何度となく修復した形跡がある。どうしてこんなところで生活できるんだ……?」

「畑、広いわねー。それに、アグリが作る畑に雰囲気似てるわ」

「ヘルヴィさん、最近どんどん畑を見る目が肥えてきてませんか?」

領主様に先導され、帰ってきましたフレメヴィーラ王国最東端、ユシツダ村。

背後にはすぐボキューズ大森海の外縁部が鬱蒼と生い茂る、人類と魔獣の境界線。それがこの村だ。

とはいえ、雰囲気はまさしく帰ってくるまでの道中でも見た農村と変わらないのどかな物。家が点在する集落と、そこを囲むように畑が広がる見慣れた景色だ。

……まあ、俺がこの村を出たときと比べて大分畑が広がってるけどね! 見てるそばからモートルリフトががりがり畑を広げてるけど!

「うっ、あれは!? まさか……結晶動軸を使った脱穀機!? くそう、さすがに銀鳳騎士団では戦闘用と言い張れないレベルの農機具は作れないから見送ったのに、うちの村の人たちと来たら自分らで作ってやがる!」

「いやあ、さすが先輩の故郷ですねえ。どうやらモートルリフトも独自の改造が加えられているようですし、僕としても興味深いです」

そんな風に、様子が見えてきた村についてワイワイと語りながら進み、村のみんながちらほらと近づいてくる幻晶騎士の集団に気付いたのか手を止めて。

『ユシツダ村の者ー! 私が出来たぞー! アグリ・ポトルとそこで会ったから連れて来た!』

「領主さまつてば相変わらず軽い」

「……まあ、これほどの場所で魔獣と戦いながら生きていくのであれば、領民との距離も近くなるだろうからな」

ぶんぶんカルデイトーレの手を振って呼びかける領主さまのフレンドリーさにちよつと驚くエドガー達だけど、うちの領地では大体こんな感じですよ。

そして、村のみんなも領主さまの言葉で状況を察してくれた。

「アグリ……ポトルさんちの!?!」

「帰って来たのか……!! どれに乗ってるのかわからないけど!」

「ボキューズ大森海の中で半年以上生き抜いてたって話だ! まるで先祖様たちみたいだよなあ!」

ああ、懐かしい顔が一杯だ。ここ数年口々に帰ってこられなかっただけに、みんなの声と顔が身に染みる。

それに、なにより。

「兄さん！ 兄さーん！」

「ああ、ファム。ただいまー！」

とててて、と駆け寄って来る一人の少女。

農民らしく短めの髪はふわふわ、ぴよんこぴよんこと飛び跳ねてアピールする様は愛らしい。最後に会った時からするとずいぶん大きくなって大人びて、それでも小柄な俺の妹。ファム・ボトルとも再会できたんだから。

「改めてただいま、ファム。大きくなったなあ。元気だったか？」

「兄さんこそ、すつごくたくましくなったのね！ それに、こちらの方たちは兄さんが入ったっていう騎士団の方たち？ すごいわ！」

カルデイヘッドから降りた俺に飛びついてくるファムをがっしりと受け取る。ついでに駆け寄って来た他の村の人たちにもみくちやにされて挨拶を返したりしながら、しがみついて離れない妹の温もりを久々に感じる。あー、やっぱり実家いいわ。

「初めまして、先輩の妹さんですね。僕はエルネスティ・エチエバルリア。銀鳳騎士団の騎士団長を拝命しています」

「私たちはライヒアラ騎操士学園でのアグリの同期です。よろしく」

「はい! いつも兄がお世話になってます! ユシツダ村へようこそ!」

そしてさっそくご挨拶のエルくんたち。ファミも都会の貴族様がたほどではないがしっかりとあいさつ出来るいい子だ(兄のひいき目)。

……でも。

「……すごいわ、兄さん! お嫁さんを3人も連れてくるなんて!」

「違うから。そういうのじゃないから。上司と同僚だから。あと女の子は二人しかいないし二人とも先約あるから」

「なるほど、つまり残る一人が本命ね!」

「おい待て妹。さっきの話の流れからその一人は男つてわかってるよね?」

「可愛ければ大丈夫よ。私の服も貸してあげられそうだし」

……この、何もかも受け入れすぎのブラックホールみたいな懐が人間離れしてるところさえなければ完璧なんだけどなあ。

でもそこが可愛いから許す!

「……すさまじいな、この村は」

「見ろ、エドガー。すでに歓迎の宴の準備が始まっているぞ。……あ、ステージができた」

そして、当然のように歓迎の宴が、始まった。



「よう、アグリ元気そうじゃねえか！　どうだ、森の奥ではいい作物見つかったかよ？」
「兄貴！　いやー、向こうではドタバタしてたんでそっちはさつぱり。……あ、でも現地
の農作業手伝ってきたよ！」

「素晴らしい。きつと素朴で純粹、男女のアレコレなどない平和な村だったのでしよう
……！」

「いや、普通に立派な街とかあったよ？」

「久しいな。まさか生きているとは思わなかった」

「もー、兄さんてば相変わらず一言足りないんだから。『でも生きていてくれて嬉しい』
まで言わないと、村の外の人には通じないよ？」

「見ないうちに逞しくなったな。これならいつ村に帰ってきてきても立派にボトル家を継げ
るだろう」

「ですよね！　ですよねおじさん！　俺も早くそうしたいのはやまやまなんだけど……
！」

「そう言わず、がんばりなさい。幻晶騎士開発も立派な仕事でしょう」

「そうだけどき姉さん……村の畑が恋しい……!」

夜の帳が下りた。

しかしユシツダ村では各所に焚かれた篝火が照らし、ゆらゆらとオレンジ色の明かりと村のみんなの楽しい笑い声が吹きあがる、祭りの夜となっていた。

俺が帰るなり、挨拶もそこそこに祭りの準備を整えて料理を作って領主様に音頭をお願いしての乾杯まで、実に1時間と掛からなかった。

エルくんたちがうちの実家に挨拶して、村の主要な家にも挨拶して、軽く話をして山ほど持ってきたお土産を下ろしていたら、あれよあれよと作りたてのステージの主賓席に銀鳳騎士団一行と共に座らせられて、今に至る。

かわるがわる声をかけに来ってくれる村の人たち。

いま来たのは俺たちより一世代上の面々で、頼りがいのある兄貴分、やたら顔が良く昔都会に出向いたらちよつと女難に会ったというイケメン、農民とは思えない白い肌と一言足りないポジティブシンキングが得意な兄さん、貫禄あるおじさん、そして拳骨が痛いことで有名な紅一点の姉さんたちだった。いやあ懐かしい。兄貴たちいろいろ教わって、小型魔獣を狩ったりしたっけなあ。

「うおおおおおおおお……!」

『うわなにこの村の人たち! 超力強いんだけど!』

あつちでは宴の余興にとユシツダ村名物の挑戦企画が繰り広げられている。

今日の演目は、せっかく幻晶騎士がたくさんあるからということとでカルデイトーレと村の有志による綱引き大会。なかなかいい勝負をしているあたり、さすがだ。

あと、宴会場をぐるつと囲うように超遠距離流しそうめんのナニカ。昔俺がぼろつと発案したら、なんか定番になりました。

「……さつきから耳に入って来る音楽がとても農村のそれとは思えないほど洗練されているのだが、どういふことだアグリ」

「ああ、ユシツダ村の元になった5家の人達はもともと楽士だったらしいから。いまでもその技は伝えてるんだってさ」

「楽士がなぜ農村開拓に……?」

「あと、パイনさんちの当主になるには料理人修行で国を回って来る必要があるんだよ。だから料理も美味いだろ?」

「農村とは一体」

いつの間にか広場中央で焚かれたキャンプファイヤーからの火の粉が夜空の星と並んで灯る。

薪が燃える煙の匂いを運んでくる風に混じる土の匂いが、どうしようもなく懐かし

い。

ジョッキを呷る。酒もしたま出てるけど、これは水。
特別冷たくもない、子供のころから親しんだその水の味が、今は何より愛おしい。
ああ、帰って来たんだなあ。



「ふう、楽しい……」

酔いが回って来た。

辺境の村の宴というものに理性などないに等しく、楽しければいいやというノリと勢いが客と村人の垣根を押し流す。

車座で肩を組んで歌う、調子外れの歌がズレにズレまくっているディートリヒ。

上半身裸になって幻晶騎士綱引きに混じっているエドガー。

ヘルヴィとアディちゃんはファミたち村の若い女の子たちとおしゃべりをしながら無限に菓子を平らげていく。

そんな光景を少し離れたところから一望する。幸せな時間だ。

「よっ、アグリ。やっぱりあんたは元気にやってるのねえ」

「領主さま」

そんな俺の隣に腰を下ろしたのは領主様だった。

仮にも貴族なのに当たり前のように地べたに座り、ジョッキをぐつんとぶつけてごつごつと中身を飲み干すその様、貴族である以前に騎操士であれという領主さまも家の家訓に忠実だ。

「ぶつはー！ この村のエールはいいわねマジで！ 麦から全部自作ってんだからすごいわ。……どう、久々に村に帰ってきた感想は」

「正直もうライヒアラに戻りたくないです」

「あつはつはー！ アグリ、そもそも行きたくないってダダこねたらしいもんねえー！」

ぼっしんぼっしん、と俺の背中を叩いて面白がる赤い顔の領主さま。

こう見えて俺とは10歳と離れていない妙齢の女性、それも独身なのだから驚きである。嫁の貰い手、あるいは婿を貰う目処は立っているのだろうか。村を含む周辺一帯の将来がちよつと心配。

「……まあでも、楽しくやってはいるんでしょ？ エルネスティだっけ。あの子がお前のことを話すときは、すつごく楽しそうだったし。慕われてるみたいね？」

「ええ、まあ。うん。そうみたいですわ……」

だから今日もついてきたし、次に村へ帰ってこれる日がわからないんですけどね！！

「うう、こんなんじや銀鳳騎士団で勤め上げて村に帰ってから嫁さんもらえるか不安ですよう……」

「その辺気にすることないと思うけど。さつきから村の娘たちにもさんぎ囲まれてたじゃない」

「そのうちの何人かは俺より年下なのにお腹大きくなつてましたよね!! めっちゃいいことだしその子らの家にはお土産奮発しましたけど、すごく取り残されてる感が!」

しかも、村で俺らの世代はいままさに結婚適齢期。

俺が村を出てから生まれた子もいるし、そこそこ大きい村の子に元気な声で「はじめまして!」とか言われる気持ちかわかりますか領主様! 本来ならそういう子らのことも産まれたころから知つてお兄さんかおじさんと呼ばれる予定だったんですよ!

「……ま、大丈夫よ。どうあつても結婚はできるから」

「何を根拠に!」

気安い領主様だし酒も入ってるしついついツツコミ入れてしまったが、領主さまの目は真剣で、しかし優しかった。

「んふふ。辺境の村からライヒアラに行つて、優秀な成績で卒業。国王陛下直属の新設騎士団で新型幻晶騎士の開発に尽力。……地方領主の婿に収まるくらい、行けそうな箔がついてると思わない?」

「……………」

抱えた膝に頬を寄せ、横向きになった顔に浮かぶ笑み。

俺を映す瞳には遠くで揺れる篝火の色。

そういうば、初めて会ったころと比べて髪が伸びたなあ領主さま。

この時の俺は、酒のせいで体温上がったはずなのにやたら冷たい汗で背中を濡らしつつちよっと思考停止気味にそんなことを考えて。

「せんば……………いい!! この料理すつ

ごくおいしいですよ!!」

「兄さん! 昔兄さんに教わったほつとけーきつていうお菓子を作ったわ! 食べて!!」

皿を抱え、なんかすごい勢いで駆け寄って来るエルくとファムの声に正気を取り戻した。

「……………いい妹と、いい嫁さんね」

「いやいやいや、ファムがいい妹なのは認めますけどエルくん嫁じゃないですから。会う人会う人初見で勘違いする気持ちはわかりますけど」

駆け寄って来る二人に気付いた領主さまはすくつと立ち上がり、ジヨツキが空になっていることに気付いておかわりを求めに宴の中へと戻って行った。

エルくとファムがニコニコと俺に料理とお菓子を薦めてくるのはそれまでと変わらない。いい加減腹も膨れてきたが、それでもなお食おうと思えば食えるのは騎操士に必須の資質。ありがとうと一言述べてぱくぱくといただく。

故郷の風の匂いは懐かしく身に馴染み、幼いころから食べ慣れた味が今日は特別豪華にもてなしてくれる。

ありがたい故郷。また帰ってきた故郷。

「……あとで父さん母さんとじいちゃんに相談しておくかあ」

でも、次帰って来るときは嫁の算段つけておかないと大変なことになりそうだぜ!!

ライヒアラでもクシエペルカでもボキューズ大森海でも見上げたのと同じ今生の星空を見上げながら、人生設計について考える。

料理の味付けがちよつとだけしよつぱく感じるのは、きつと都会の味とか異国の味とか森の味に慣れたせいだ。そうに違いない。



「さて、それでは帰りましょうか。みなさん、お世話になりました」

「いえいえ、騎士団のみなさんには兄さんがとてもお世話になってますから、またいつでも遊びに来てください」

「……ところで、アグリがいないのだから？」

「ああ、そこで村の人たちに紛れてフード被ってるのがアグリよ。忘れずに連れて帰らなきゃね」

「バカな!? 完璧な変装だったのになぜわかったヘルヴィ!？」

またこの村へ必ず帰ってくるために、騎士団活動をもうちよつとだけ頑張ります。

番外編 アグリ・ボトル調査録

——銀鳳騎士団調査記録 No. XXXXX

前説

先王、アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラ陛下の代に国王直轄として創設された銀鳳騎士団。

団長エルネステイ・エチエバルリアの幻晶騎士開発支援組織としての側面が色濃いこの騎士団は、その前身において他国の間者による新型機強奪を受けた。(カザドシユ事変調査記録参照)

その後、エルネステイ・エチエバルリア並びにその開発成果保護のために設立されたこの騎士団において、極秘裏に団員の身辺調査を行うことは必須のものとなっている。

各団員の来歴、素行、交友関係に至るまで精査し、随時更新することとする。

調査の担当は通常の事務官の他、藍鷹騎士団を以て当たらせ、詳細を調査する。

本報告書において調査の対象とするのは、銀鳳騎士団員。

エルネステイ・エチエバルリア直々の勧誘によつて騎士団設立直後に編入した、アグ

リ・ボトルである。



——聞き取り調査記録

ケース1：エドガー・C・ブランシユ

——アグリ・ボトルさんについて教えてください

アグリについて？ まあ、かまわんが。

初めて会ったのは、私達がライヒアラ騎操士学園に入学したときになる。デイートリヒやヘルヴィ共々、同期なのでね。

入学当初から、アグリは比較的体の出来ている男だった。……今にして思えば、故郷ですでに体が鍛えられていたのだろう。聞けばあの村では畑や家畜を襲いに来た魔獣を返り討ちにしてその肉を食用にすることも普通にあったと聞く。いわゆる僻地の農村、よりは食糧事情もよかつたのだろう。

……いや、幻晶騎士もなしにあの場で魔獣を狩りながら生活を営むことができるのかという点については言っていて私自身も疑問に思うのだが、まあアグリのような奴を輩

出する故郷ならしかたあるまい。

——騎操士としての実力はいかがでしょうか

ライヒアラ時代、騎操士としての腕は中の上と言ったところだった。どんな状況でも驚くほど安定しているが、その分突き抜けたものがない。

……だが、アグリは武器の得手不得手というものが極めて少なかった。

部隊単位での演習や模擬戦のとき、味方の装備を見てから自身の武器を決めていた。剣も盾も杖も、全て人並み以上に使っていたように思う。

……そのとき奴が呟いていた、「重カラサワカラサワイザナミイザナミアラキデアラキデ」や「中カラサワカラサワアマテラスオツクスオツクス」や「ケー」などの呪文がどういう意味だったのかは、いまだに分からない。

だが、最近団長を交えた模擬戦のときも何事か呟いていて、あまつさえ団長も同じように返して通じているようなのでちゃんと意味はあるのだと思う。

……あの二人の間で通じ合う代物なので、正直なところ理解はしたくないな、うん。話が逸れた。

学生時代のアグリが強みは、やはり整備その他幻晶騎士の構造についても精通していたことだろう。当時から鍛冶学科にも出入りしていたようだし、他の騎操士よりも図書

館に籠って勉強に励む時間が長かった。

団長のように寝食を忘れて没頭して気付いたら幻晶騎士の設計図に埋もれて意識を失っているようなことはなかったが、あの二人はそういう点もよく似ているかもしれない。

どうやらそのころから幻晶騎士を農業に応用する、ひいてはそれを辺境にある故郷で行うためにそういった知識も積極的に集めていたようだ。

野営を含んだ行軍訓練でサロドレアにトラブルが起きたとき、皆が真つ先に頼るのはアグリだった。当然鍛冶学科の生徒も随伴していたのだが、同じ騎操士の方が話しやすいというのもあって引つ張りだこになっていたよ。

デイトトリヒのように騎操士として華々しい強さがあるわけではないが、部隊に一人いてくれるとそれだけで隊の士気や稼働率が上がる、稀有な人材だった。料理も上手かったしな。野営の時、アグリと同じ班のメンバーは羨ましがられていたものだ。

——アグリさんが銀鳳騎士団に編入されたときはどう思いましたか

ライヒアラの卒業後は村に帰るのだと嬉しそうに言っていたので、銀鳳騎士団に入ることになったときは私も驚いた。……まあ、当人はその数十倍驚いていると思うが。

そして、銀鳳騎士団に入るまでエルネスティの同類とは気付かなかった。グランレオ

ン、ガルダウイング、カルディタンクにその後継機のカルディヘッド。アグリが開発した幻晶騎士もまた、いずれもいい機体だ。

現状のフレメヴィーラ王国はカルディトールとトウエディアーネの導入に手一杯でアグリの開発した機体の導入には至っていないが、あれらの機体も正式に採用されれば魔獣退治や国土開発において大きな貢献をすることだろう。いまこの瞬間世間に知られているのはエルネスティの名だが、後世においてはアグリの名もまた長く讃えられることになるかもしれない。友人がそうなってくれるなら、それはとても嬉しいことだ。

——では、最後に。アグリさんは今後、銀鳳騎士団でどのように過ごすと思われませんか？

.....まあ、私より早く年季が明けることはないだろう。エルネスティがアグリを手離すとも思えんからな。



ケース2：ディートリヒ・クーニッツ

——アグリ・ボトルさんについて教えてください

また妙なことを気にするのだね。まあいい、私が知っていることならなんでも答えよう。

——騎操士としてのアグリさんの実力はいかほどでしょう

フム、騎操士としてのアグリ、か。

そうだな、優秀、とは言っていないだろう。物覚えもよく、単騎での行動も部隊としての行軍もそつなくこなす。だが一流と呼ぶには少々足りない。それが、ライヒアラ時代に私が下していた評価だった。

剣は並、槍はそれなり、盾も堅実で杖も及第点。どれも実戦で使うに足るものだったが、仮にアグリが敵に回ったとして脅威に感じるかと問われれば、まあそうでもなからう。おそらくそれは今でも変わらない。私とアグリがどちらもカルデイトーレに乗つての模擬戦を行えば、おそらく10に8は私が勝つ。

……まあ、学生時代から既にそうしてアレコレ使いこなせる器用さを備えていたことは、よく考えたらなかなかのものなのだがね。あいつはそういうことをあまりにも自然な顔でこなすからわかりづらいんだ。というか、おそらく当人自身気付いていない。

やつの生まれ故郷に先日行ったのだが、その理由が分かった気がした。あんな環境で育てば、そりやあなんでもこなすようになるさ。

ましてやいまではエルネステイという規格外もそばにいることだしね、磨きがかかっているだろう。

——では、最近のアグリさんの実力は

銀鳳騎士団に入ってから、騎操士としてのアグリは自身で開発した機体の操縦が主になっているな。グランレオン、ガルダウイング、カルデイタンク。最近はカルデイヘッドになったのだったか。

いずれも既存の幻晶騎士とは大きく勝手が違う。私も何度か試しに操縦してみたことはあるが……乗りこなせ、と言われたらどれか一つだけ、数か月の訓練期間をもらいたいところだ。

私はグウエラリンデとトウエディアーネで手一杯だな。操縦系統の異なる機体を当たり前のように、下手をすると戦闘中にさえ乗り換えるなど正気の沙汰ではない。

しれつとそれをこなすアグリとエルネステイは……本当に何者なのか、たまに空恐ろしくなることがあるな、うん。

で、騎操士としての力量だったか。

正直、ライヒアラ時代よりも今の方がはるかに厄介だ。使っている機体が通常の幻晶騎士ではないということもあるが、グランレオンの機動性、ガルダウイングの三次元機動、カルデイヘッドの頑丈さとパワー、どれも既存の対幻晶騎士戦、対魔獣戦のセオリーが通じないからね。

良い仲間、良い騎操士、良い開発者であることは間違いない。間違いないが……どう評価すべきかと言われると、少々困るな。

現状、我が国における幻晶騎士とはカルデイトーレをベースとしたエルネスティの開発による新しいスタイルのものを指す。アグリの幻晶獣機やタンクタイプも可能性は感じるのだが、既に一線で活躍している騎操士の戦力を底上げするためには採用し辛い。

だから、1000年ほど経って魔獣の脅威がさらに減った時代となったら、作業用幻晶騎士の開発者としてアグリの名前も歴史の表に出てくるのかもしれないな。ハハハ。

——では、今後アグリさんは銀鳳騎士団内でも地位を上げていくでしょうか。

変わらんだろう。エルネスティに引きずり回され、そのストレス解消に畑を作り、うっかり調子に乗って畑を広げ過ぎてヘルヴィに蹴り飛ばされて嘆く。

あれで、今の生活を楽しんでいるのだよ、アグリは。



ケース3：ヘルヴィ・オーバーリ

——アグリ・ボトルさんについて教えてください

……あいつまさか、今度は街道の方まで畑広げたんじやないでしょうね?! ちよつと止めに……え、違う? 話を聞きたいだけ? なんだー、それならそうと早く言つてよ。またあのバカが無駄に開墾しようとしたのかと思つちやつたじやない。

——アグリさんのことで相談があればまずヘルヴィさんに聞け、と銀鳳騎士団内では言われています

まあ、いまので分かる通りどういうわけか私がアイツのストッパーみたいな感じになつてゐるわねえ。

……昔はそうでもなかったのよ。ライヒアラ時代は、普通に騎操士見習いだつたの。でも、物覚えは早かつたからそれこそ最初のころに幻晶騎士の動かし方を覚えるのは一番早かつたのよ。

村のおじさんたちがいろいろ扱いが得意で教えてくれたつて言つてたけど、事実なん

でしようねー……。さすがに幻晶騎士の動かし方までは教わってないと思いたいけど、どうかしら。

……そんなだつたのに、いまじや暴れに暴れてるからわからないものよねー。

一応フォローしておく、仕方ないところもあるのよ。あいつ、ライヒアラのころはことあるごとに「俺、ここを卒業したら村に帰って畑継ぐんだ……」って言ってたし。それがどういうわけか銀鳳騎士団第二の幻晶騎士開発者になつてるし。多分、あいつとしては人生設計狂つたつてレベルじゃないんでしようね。まあ、団長に目を付けられた以上絶対に逃げられないと思うけど。

——ストレスが多いようですね。最近変わった様子はありますか？

元からと言えば元からだけど、ボキューズ大森海から帰つて以来ますます畑に執着するようになったわ。最近なんて、森の中に巨人族が動き回れる広場を作つただけど、その時ついでに井戸を掘つて水路を引いてその周りを畑にしようとしてたし。もちろん私が止めたけど。

グランレオンで森を切り開いて、カルデイヘッドで運び出して、他に必要なものがあつたらガルダウイングで買い出ししてくるとあつという間に何でもできるのよねー。その辺は、素直にすごいと思うわ。

あいつ、さすがにそろそろあの辺の開拓欲とかその辺を発散させなきゃ暴走しかねないんじゃないかしら。どっかに大きな工事とか転がってるといいんだけど。

——つまり、銀鳳騎士団から飛び出す可能性があるということでしょうか

……はーん、本当に聞きたかったのはそれね？

心配しなくても、あいつはあいつよ。団長に駆り出されて幻晶騎士を開発して、その憂さ晴らしに畑を作って私にしばき倒される。それは変わらないわ。

なんだかんだ言ってお人よしだから頼られたら嫌とは言えないし、仮に逃げ出したとしても団長が地の果てまで追いかけてでも縋りついて戻るよう頼むだろうし、そんな風に度胸決められるくらいならとくに飛び出してるもの。

……だから、オルヴェシウス砦がオルヴェシウス農場にならないように注意しなきゃいけないんだけどね。責任重大だわ。

——では、最後に。アグリさんととても仲がよろしいようですが、何かこう……：そういつたご関係なので？

……う、ええ。(報告者注：なんか名状しがたいイヤそうな表情でした)

……：……：そう思われるのが仕方ない面もあるとは思いますが、応えは「ノー」よ。いや

まあ嫌いじゃないし、悪いヤツだとも思っていないけどそういう対象じゃないかなって。多分、弟がいたらあんな感じなんでしょうねえ。放っておけないというか目を離せないというか、何かやらかしたときにしばき倒すのに遠慮がいらぬというか。そんな感じ。

だから、「いい友達」なのかしらね。

……というか、一応私には本命がいるんだから間違ってもそういう噂広げたりしないでよ!?



ケース4：ダーヴィド・ヘプケン

——アグリ・ボトルさんについて教えてください

アグリと？ そうさなあ、やつと初めて知り合ったのはまだライヒアラの鍛冶学科にいたところになるか。よくよく考えてみると、銀色坊主よりも付き合い長いな。まあ、エドガー達同期組ほどじゃないとは思うがよ。

鍛冶学科と騎操士学科はどっちも幻晶騎士に関わるんで生徒同士のつながりも強いんだが、あいつの場合は別格だ。

つながりが強いと言っても、鍛冶師は鍛冶師、騎操士は騎操士で当然やることは違う。付き合いは長くても、俺たちは幻晶騎士を作って直す。騎操士はそれを使う。使い方の良し悪しやら調整やら程度で話し込むのが基本なんだが……あいつは、槌を持つようにまでなりやがった。

幻晶騎士の構造についても知っておきたい、とか言っていやがったな。騎操士学科で訓練して、図書室に籠って本を読んで、鍛冶学科に顔を出してパーツを弄る。学生のころはずっとそんな生活してやがったよ。

腕の方は、まあまああってところか。筋は悪くないから、田舎に帰って鍛冶屋をするくらいなら十分だろうが、幻晶騎士の鍛冶師をするなら俺たちドワーフでなきや務まらねえ。

ただ、それはそれとしてなんとかしてみようってところは……へっ、まあ悪くなかったさ。

——銀鳳騎士団の同僚となってからはいかがでしょう。

騎士団の所属となつてからは、俺たち鍛冶師にとつてのアグリは第二の銀色坊主って感じだ。

ちようどツェンドルグを作つた頃に合流してきて、それ以降はグランレオンを筆頭

に銀色坊主に勝るとも劣らねえ新しい幻晶騎士を作り始めたからな。……まあ、あいつの場合は銀色坊主と国王陛下の命令で仕方なく作ってる面が無きにしも非ずなんだが。

とは言っても、やつは新しい技術を最初に作り出すってわけじゃねえ。四脚にせよ魔導噴流推進器にせよ、銀色坊主が基礎を固めたところで新しい方向性を示してる。

カルデイトンクの結晶動軸だって、元になるものはあつたわけだしな。

……なのに、どうしてかあいつが作るものはそれこそ銀色坊主の作る幻晶騎士よりも見た目が妙なことになるんだよなあ。どういう頭してるんだ？

——仕事ぶりは問題ない、ということでしょうか。

おう、鍛冶師からの評判もいいぜ。銀色坊主と違って訳の分からないものを一から作らされることがないからな、その点は楽だ。

少々管理がキツイのは難点だがな。とはいえ、その分資材が足りないだの工具の場所がわからねえだのそういうことはなくなるから、他の開発でもアグリのやつてる管理の仕方は真似し始めてる。

銀鳳騎士団は普通の工廠と違っていつまでに何をどれだけ作る、つてえ仕事じゃあなく試行錯誤してなんとかかんとか新しいものを作り上げることになるが、だからこそ途中で部品が足りなくなつた、なんてことになる则他の全てが止まりかねえ。今何が

あつていつどれがいくつ足りなくなりそうなのか、把握しておくにはアグリの様子も便利だぜ。

銀色坊主もその辺は認めてるからな、仲のいいもんさ。工房じゃあ顔を合わせるたびに話し込んで、なんか「ご安全に」とか言つて別れてるしな。

——では、今後とも銀鳳騎士団で活躍してくれるだろう、と。

……その質問、アグリにはしてやるなよ？

なんだかんだで銀色坊主のお気に入り、どんなに村に帰つて農業したいと思つても放してもらえろとは思えねえんだからよ。

ま、オレとしてはその方がありがてえな。あいつの作る機体も、なんだかんだでおもしろえ。銀色坊主とアグリがいれば、鍛冶師は退屈しねえさ。

ケース5：アデルトルート・オルター

——アグリ・ボトルさんについて教えてください

先輩のこと？

そうねえ、なんだかんだでそれなりに長い付き合いな気もするけど、私とキッドが先輩と知り合つたのはちょうどツエンちゃんを作つた時だったわね。

エルくんから頼まれて、最初のころ複座式だったツエンちゃんの操縦系統のシステムを組んでるときに、参考になることを知ってるからってエルくんが連れて来たの。

……つまりそれ以前から先輩はエルくんと放課後の図書室で仲良くしてたってことなのよねえ……！ 羨ましい……！

——あ、あの。

ああ、ごめんなさい。先輩とエルくんが夕焼けの図書室で一つの本を寄り添って覗き込んでたり、そのとき指先が触れ合ったりしてるのを想像しちゃって、つい。私もそういうのしたかったなーって思ったから。

えーと、まあそんな感じで引き合わされて、ツエンちゃんのシステム構築を手伝ってもらったの。すごかったよー、先輩。元々四脚幻晶騎士の制御系について先輩自身研究してたらしくって、先輩が持ってきたシステムはそのときにはもうある程度形になってたの。それと……エルくんが構築した術式の理解がすごく早かったわね。

「うーん、オブジェクト指向」って、なんのことだったのか正直今でもわからないけど、まるでエルくんのシステムの組み方をはじめから知ってたみたいだった。

——騎士団内におけるアグリさんの仕事や働きぶりはいかがでしょう。

よくヘルヴィ先輩にしばかれてるわね。

大体、製図してるか畑作ってるか鍛冶師のみんなと話し込んでるかエルくんにしがみ

つかれてるか畑作ってるかヘルヴィ先輩に蹴り飛ばされてるか、だと思っ

お仕事はしっかりしてるみたい。よくエルくと夜遅くまで話し合ってるし。ぐぬぬ……！

先輩が作る幻晶騎士は、うーん、私はよくわからないかなあ。

グランレオンなんかはツエンちゃんに近い部分もあるんだけど、やっぱり人型部分がないから操縦感覚は大分違ってくるし、歩いたり走ったりくらいは出来ても、飛んだり跳ねたり戦ったりは無理だと思っ

うーん、やっぱり先輩ってエルくとよく似てるのかも。自分の好きなことに一生懸命だし、幻晶騎士の使い方がなんか変だけど強いし。

——では、今後もアグリさんは銀鳳騎士団で活躍してくれるだろう、と

うん、それは間違いないと思う。というか、エルくんには先輩も幻晶騎士枠のような気がするのよねー。……でも、エルくんのことを一番好きなのは私だから！そこは譲らないから！



ケース6：エルネステイ・エチエバルリア

——アグリ・ボトルさんについてお話を聞かせてください

先輩のことですか!? ええもういくらでも・初めて出会ったのはライヒアラに入学してすぐ! 図書室で幻晶騎士に調べていた時に見かけた同好の士こそが(以下、数時間に及ぶ熱弁の圧によって筆記不可)

——え、えーと、お話はよくわかりました。つまりアグリさんとエルネスティ団長は公私ともに親しい間柄だと

はい、大体そんな感じですよ。新しい幻晶騎士を作るとなったとき、ダーヴィド親方やバトソン、エドガーさんたちの意見ももちろん重要ですけど、やっぱり最初は先輩と話をしてイメージを膨らませるのが楽しくて楽しくて。

ボキューズ大森海に行く前にシルフィアーネを作ったときも、まずは先輩とのブレインストーミングでしたねえ。「とりあえず、エーテリックレビテータに過剰なくらいエーテル突っ込んで光の翼が出るようにしてですね」「それは後継機でやりなさい」的なやり取りをしました。

……はあ、やっぱりいいですねえ。先輩と次の新型機のお話したくなってきました。先輩の発想は、僕にはない物ばかりです。僕はこう見えて幻晶騎士が、それも人型の幻晶騎士が大好きなものでして。でも先輩はその辺りにこだわりがないみたいですよ。より大きなパワーが必要で、そのためには機体を安定させなきゃいけない、となったら

迷わず多脚やタンク脚を採用するくらいに。そうやって作られる機体がまたいいんですよねー。

僕は先輩の一番のファンですから。銀鳳騎士団の中でも、いえこのフレメヴィーラ王国の中でもトップであるつもりです！

あと、先輩はうちの家族とも仲良くしてくれています。

先日も先輩が育ててる野菜をたくさん家に持ってきてくれて母様が大喜びでした。そのあとは母様に誘われた先輩と家族一緒に食事しましたし。

そういうやり取りはちよくちよくありまして、今では先輩と母様は食材やレシピを交換し合う仲です。母様の料理はもちろんおいしいですけど、先輩の料理もおいしいんですねー。野営の時に作ってくれるものももちろんですが、ちゃんとした料理もおいしいんですよ！

——よくわかりました。これからもお二人は銀鳳騎士団での機体開発を続けていくのですね

はい、それが僕のライフワークですから。

先輩についても、とりあえずボキューズ大森海からの「おみやげ」を使えるようにしてあげて、任せようと思っています。

ぐぶぐぶふ、きつといいもの作ってくれるんでしょねえ。あ、でもアレを使うとなると普通の幻晶騎士開発設備じゃ広さが足りないかもしれないかもね。先輩に頼んで、いまのうちにレビテートシップの建造も可能なドックを作ってもらいましょうか。グラレオンたちがあれば割とさっくり作ってくれますし。

——では、最後に。今後アグリさんを銀鳳騎士団内でどのように遇するつもりかお聞かせいただけるでしょうか

先輩の扱いですか？ 特にこれまでと大きく変える予定はないです。なので、基本は新型機の開発を手伝ってもらうことになりませぬ。

正直、僕としては先輩に銀鳳騎士団内で一部隊を預かってもらってもいいと思ってるんですが、ヘルヴィさんからやめといたほうがいいと言われてまして……。

その辺の事情もあるので、少なくとも今後しばらくの間は僕の直属という形で幻晶騎士開発、新型機のテスト対応、新施設の建造・整備をお願いすることになると思います。

……楽しみですね。先輩と一緒にまだ見ぬ幻晶騎士を開発するのって、本当に！だから先輩とは、これからもずーつとずーつと一緒にです!!

——ありがとうございます



結論。

アグリ・ボトルは身辺調査も含めて総合的に問題のない人物であると判断できる。

出身はフレメヴィーラ王国内。経歴にも諸外国との思想的な繋がりや影響はなく、銀鳳騎士団内での信頼も厚く、しかしごく一部からは適度に警戒もされている。

話す内容の端々に理解不能なナニカが混じることもあるようだが、その辺りはエルネステイ・エチエバルリア団長もよく発しているようなので問題はない。

恐らく手綱を放してしまえば辺り一面畑に変えるか、あるいは故郷の村までの道を畑に変えながら帰ろうとするだろうが、銀鳳騎士団第三中隊長ヘルヴィ・オーバーリがその動きを完全に掣肘できるのでこちらも問題にはならない。

唯一の懸念事項は、至極まともに取り組んでいるその職務が暴走しないかどうか。

アグリ・ボトル自身にその意図がなかったとしても、エルネステイ団長麾下でよくあることそのままに、なんかまた得体のしれない幻晶騎士を開発してしまう可能性が考えられる。

特に、エルネステイ団長の言っていた「ボキューズ大森海からのおみやげ」なるもの

が一体何なのか、そしてどのように扱われるか、注意が必要と思われる。

しかし、なんかもうどうあっても銀鳳騎士団からは逃げられない感が漂っているの
で、警戒は最小限とすべきである。

多分こいつはずっとエルネスティ団長のお付きとなるだろう。

◇ ◆ ◇
　　↳ 藍鷹騎士団編纂、銀鳳騎士団調査録より抜粋

「うひいっ!？」

「なによアグリ、風邪でも引いた？」

「……いや、なんかこう、急にめのまえがまっくらになった、というか未来が闇で閉ざされた気がするとか、エルくんのお母さんにネガティブウェーブくらって明日への希望を奪われた気がするとか。いかんいかん、こういう不安を紛らわすには農業に限る! 巨人族の人たちにもフレメヴィーラの作物を食べて欲しいし、ますます畑広げな
きゃー!」

「あの人たちは基本魔獣を狩って食べてるんだから必要ないでしょ! 変な口実見つけ

「た気になつてんじやないわよ!？」

番外編 「ミッションの概要を説明します」

——ミッションオブジェクトタイプは、最近謎の魔獣の出没が確認されたとある農村の防衛です。

——今回は、細かなミッションプランはありません。あなたにすべて任せます。あらゆる障害を排除して、目的を達成してください。

——ミッションの概要は以上です。

——銀鳳騎士団は、人々の安全と、幻晶騎士のさらなる発展を望んでおり、その要となるのがこのミッションです。

——あなたであれば、良いお返事をいただけることと信じています。



「というわけで、よろしくお願ひしますね先輩！」

「今の任務説明聞いた俺が『はいわかりました』って答えると思ってるんじゃないだろうねエルくん」

銀鳳騎士団のアジト、オルヴェシウス砦の作戦会議室には、今日もエルくんの楽しそうな声が響きます。

エルくんから話があると呼ばれてホイホイついて行くのはいつものこと。

作戦会議室ってことは何かの任務だろうかだつたらどこの部隊に組み込まれるんだろうと思いついて足を踏み入れれば、俺以外には誰もいない。

きつとそのうち追加が来るんだろうなと思つていたら特にそんなこともなく、いきなり始まる作戦説明。おいということだエルくん。

「えー、こういう依頼の説明ってワクワクするでしょう？ あ、お母様もありがとうございますました」

「いいのよ、エル。あなたの役に立てるなら嬉しいわ。アグリさんも、元気そうだよかつたわ」

「はい、セレスティナさんも。……でももうちょっとエルくんのワガママを諫めてもいいと思うんですが」

しかもこの説明、わざわざエルくんの母親であるセレスティナさんに読み上げてもらってるんだけど。嫌な予感しかしねえ。

「まあまあ先輩。実際にとある農村がいまも魔獣の影におびえているのは事実なんです。どうか、助けてあげてもらえませんか……？」

「上目遣いで手を握ってくるのやめてもらえるかなエルくん。……できれば今すぐ！
 なんか首筋ゾワゾワするから！ これ多分扉の隙間からアデイちゃんやんがハイライト消
 えた目で睨んでるヤツだから！」

それ以前に、そもそも生きて出かけられるかからして不安になってきたぜ！



「そんなわけで、件の農村とやらにやってきたわけだけど……」

オルヴェシウス砦から、通常の旅程で数日程度。グランレオンに乗って来たのでその
 半分程度でたどり着いたこの村が、謎の魔獣の出没に怯えているという。

俺の故郷ほどではないがそこそこ辺境で、のどかに畑が広がる一方、人跡未踏と思し
 き森の影がちらほらと地形と視界の限界ギリギリ程度の距離に見え隠れする、そんなこ
 く一般的なフレメヴィーラ王国の農村だった。

家の数はそこそこ。広場に井戸に駆け回る子供に畑仕事へ向かう大人に、ところどころで草を食む家畜。どこでも見られる光景だ。のどかのどか！

主要街道からの距離はそこそこ。このくらいの距離なら商人たちの巡回ルートにも入っているだろうし、さほど離れていない場所に幻晶騎士が駐留する砦もある。砦を橋

頭保としてその防衛可能圏内に開拓された村、というありふれたスタイルだろう。

ちなみに余談だが、俺の故郷は近くに砦なんてない、ぶっちぎりの最前線です。（魔獣と）戦わなければ生き残れない。たまにヤバいのが来そうな時は領主さまになんとかしてもらいます。

「事情は説明したとおりだ。我々は次の村への巡回に向かわねばならないので、後のことは頼む」

「はい、了解しました」

などなど、見てわかる情報の他、最近この村に出没するという魔獣についての話を駐留中の幻晶騎士部隊の人から聞かせてもらった。

近隣の砦から周囲の村落を見回るパトロールの最中で、この村の近くに決闘級以上と思われる魔獣の痕跡を発見。搜索と、可能ならば撃退を目的として調査していたらしいが、難航。

他の村の様子も見に行かなければならないため、調査・防衛を引き継ぐ増援の依頼を出し、正体不明の魔獣退治役として白羽の矢が立ったのが銀鳳騎士団であり、俺であるという。

……そう、俺なんだよ。俺一人なんだよ。どうして幻晶騎士を部隊単位で送り込んだ

りしてくれないんですかねえ！

「大変なのだ、君も……。ま、まあとにかく頼んだぞ！　村の命運は君にかかっている！」

「はい。村と畑は俺が必ず守ります。特に畑は」

「お、おう」

でも、ここもまたしつかり丁寧に畑を作り育てている立派な農村。この村の平和を魔獣ごときに奪わせてなるものか。なんか騎士団の人がドン引き気味な目で見てるような気がするけど、気のせいだよな！

「ということ、まずは村の様子を知らなきゃいけないんで畑仕事をお手伝いしますね！！　今はちやうど開墾の時期！　見てくださいますよ俺の幻晶獣機！　でつかい犁がついてるんですよ！！」

「おおー、すごい勢いで土が掘り返されていく！」

「こりゃあ、来年辺りに開墾するつもりだった辺りまで畑にできそうだな！」

どうやらこの村の近くに潜伏中らしい魔獣の発見と退治、となると実のところ中々に大仕事だ。

魔獣を探す必要はもちろんあるが、その間に村が襲われてもいけないし、何よりどう

転んでも数日あるいは数週間はこの村に滞在することになる。

だから、村の人たちと友好的な関係を築くことは必須なんだよ。そうでないと、情報収集すらままならない。

つまり、こうして農作業を手伝うのは騎士団活動の一環……！ 合法……！ 合法的農業……！

最近またエルくんの無茶振りとヘルヴィの監視が厳しくなってきたから、仲間の目が届かないところで羽を伸ばせるとか微塵も考えていない……！



そして、数日が過ぎた。

村が魔獣に襲われるような気配はなく、思っていたより平和なものだ。

しかし、農作業の合間で森に入って魔獣の痕跡を調べてみたところ、確かに見たことのない形の足跡がいくつか確認された。

比較的浅い範囲でも至る所で確認される辺り、この辺りを縄張りに行っていることは間違いない。サイズからして事前情報の通り決闘級以上であることは間違いなく、足跡の並び方からして四足で獣型と推測される。

もし十分な戦力がないうちに村が襲われたら、どうなるか。近隣の騎士団に助けを求め、より先に村が壊滅したとして、全く不思議はない。

村の人たちに聞き込みを行ったところによると、森から魔獣の気配を感じることは極めて稀だそうだが、俺が来る数日前に謎の魔獣によるものと思われる遠吠えが聞こえ、領主に陳情を上げたところ騎士団が派遣されてしばらく周囲の探索が行われたという。

その騎士団が、俺と入れ替わりで別の村に向かったあの人たち。幸い今のところ村への被害はなく、魔獣の確たる存在証拠さえないが、「何かがいる」。騎操士として、そして何より農民として培ってきた勘が確かにそう告げていた。

「おっと、また足跡だ」

森の中の探索。

木々の高さはグランレオンを優に隠すほど。あちこちに散見される獣道は大小色々。こうしてグランレオンが入り込めることからわかる通り、決闘級以上の存在も確実にいる。

問題はその魔獣とやらが人間を襲うかどうかかなわけなんだけど、発見される足跡が

比較的新しい。この様子からするに、俺がこの村について以降に出来たものだ。

「……この形と、深さ。土の質と湿り気。……なるほどねえ」

そういった情報をあれこれ集めて、おぼろげながらつかめて来たミッション対象の正体。

……どうやら、少々覚悟を決めて挑まなければならないようだ。

「というわけで、少し腰を据えることになりそうなのでその間はずっと農作業のお手伝いしますね！ いやあ騎操士は大変だなあ！」

「言葉の割にめっちゃ嬉しそうっスね」

なので、改めてしばらく村でごやつかいになることにしました！

いやあ長丁場ってつらいよね！



それから、さらに数日が過ぎた。

俺はグランレオンで新たな耕作予定地を耕し、村の周りをパトロールし、邪魔な木を

「ヒイツ!？」

「ま、魔獣!？」

「やっぱり……やっぱりいたんだ!」

今日も今日とてグランレオンでごりごりと犁を曳いて畑づくりの準備を手伝った結果、夕飯にお呼ばれした家で早めの食事を取っていたところ、突然その咆哮が聞こえて来た。

音だけから正確な位置がわかるような状況ではないが、村への侵入を許したような距離ではない。方角は、おそらく村の北側の森。大きい獣道が多く、痕跡も他と比べてたぐさん見つかっていた辺り。

……予想通りだ。

「あ、あの騎操士様……!」

「はいはい。……あつつ、熱っ! でも美味しい!」

「は、はい。ありがとうございます……?」

不安げに声をかけてくる家のご主人。俺は色々煮込んだシチュー的な料理をちよつと行儀悪いかな、くらいのペースで一気にかき込んでいく。騎操士にとって早飯は基本スキル。常在戦場の心構えは、この村に着く前から解いていない。

この料理を作ってくれたらしいこの家のお嬢さんが目を丸くしているけど、今はどう

か許して欲しい。

「ふう。ごちそうさまでした、おいしかったです。じゃ、仕事してきますね」

「え、ええ……お気をつけて！」

食器を置いて立ち上がれば、それだけで仕事の時間。

この村に着いてからは常に幻晶獣機に乗るための軽装鎧を身に着けていたから、こういう時でも即座に動ける。

さあて、「エルくんが俺を名指しで任せて来た」厄介な仕事を、片付けるとしようか。

グランレオンに乗って、駆け込んだのは森の中。

尋常ならざる吼え声に驚いた鳥たちが夕焼け空を黒い点となって飛び立ち、森の中の様々な獣や魔獣もざわついている気配が感じられる。

魔獣が使っていると思いき獣道を通って俺がたどり着いたのは、事前に目星をつけておいた戦場。幻晶獣機が多少は動き回れる程度に木々がまばらな地点だ。

空はだんだんと暗くなりつつある。完全に日が落ちればここも完全な闇に閉ざされるだろう。あまり時間はかけられない。

広場の中でも比較的木の密度が低い場所で、一度立ち止まり。

「ま、向こうも長引かせるつもりはないだろうけど……ねっ！」

——ぞんっ

そんな音が、横っ飛びに避けたグランレオンがさつきまでいた空間を抉ったような錯覚に襲われる、魔獣の奇襲が早速出迎えてきた。

「見え……ない！ 思った以上に速い！」

正体見たり、前世魔獣なるか、という期待は外れた。

周りの薄暗さも手伝っているが、あまりにも動きが速くてシルエツトすら捉えられない。

だが、いくつかわかったこともある。

これまでの調査での推測を裏付けることになるが、相手のサイズはグランレオンと同等。森の中という荒地をあれほどの速さで動けるのだから間違いなく四足の獣型。

さっきの攻撃は前足を振るって爪で抉ろうとしてきたことが、地面に刻まれた筋の深さからわかる。

そして既に茂みに飛び込んで見えなくなっていることからして、この場の地形もしっかり把握しているのだろう。地の利も相手にあるようだ。

それから数度、相手は立て続けにこちらの死角から奇襲をしかけてきた。

後ろ、横、はては上。こちらの予想外の位置から飛び掛かり、反撃するより先に茂みの中へと逃げていく。

それを追いかけるといふ手もあるが、おそらく不利になるだけだろう。

多少は動きが読めるようになってきて、カウンターで爪を、牙を、そして幻晶獣機が備える背部武装のブレードを突き立ててはみたものの、一つとして相手に届かないんだから返り討ちに遭うのがオチだ。

相手はこちらの攻撃に対し、身をよじり、素早く地を蹴って間合いを離す。まるで、その動きと武器は全て把握しているぞ、とでもいうような動きだった。

それなのに相手の攻撃はこちらにどんどん近づいてくる。

完全に上を取られかけ、サブアームのブレードで防いだ爪の一撃はコックピットまで大きく揺れるほどのパワーがあった。

がつくんがつくん揺れる頭を振って正気に戻し、とにかく気を引き締める。

俺は魂の底から農民であることを自負しているが、こう見えてライヒアラ騎操士学園をきっちり卒業した騎操士でもある。

学生時代も銀鳳騎士団に取り込まれてからも、魔獣退治はよくあること。決闘級魔獣とタイマンしたことだって何度もあるし、銀鳳騎士団に入ってからにはもつとヤバいあれこれとの戦いだって経験した。

が、今回の相手は特別やりづらい。

恐らく、このままカウンターを狙っても、あるいはこちらから打って出たとしても状

況は変わるまい。そう確信できるだけの鋭さが、相手の動きにはあった。

……まあ、俺の予想が確かなら、この敵は下手すると師団級魔獣なんかよりもヤベーイ相手なんだけどさ！

「……ちつ、また後ろから！ だあーっ、法撃すら届かない!!」

どうやら本気で組み合う気がないらしい。一撃離脱の見本のようなその攻撃の数々、法撃を叩き込んでもジグザグに走られて狙いが定まらず、一層闇が濃くなりつつある森を一瞬だけ火炎が照らし、シルエットがはつきりしない敵の影を浮かび上がらせる。

「……仕方ない、アレを使うか」

だから、策を講じるしかない。

この敵に、最も効果のある策を。

「さあ、来い」

グランレオンの位置を変える。全方位どこから敵が来ても対応できるように開けた場所にいることをやめ、背後に大木を背負って敵の侵入ルートを絞る。

当然相手もそれは承知のはずだから、上や木を回り込んでくることも警戒する必要がある

ある。が、それでいい。

——ガオオオオオオオオオオオオオオ!!

「来たー!」

予想は的中。素直に正面から攻めてくることはなく、真後ろから飛び出し、こちらから見て左側、少し離れた位置にある木の幹を蹴つて上方から飛び掛かって来た。

だが、俺はどうせとんでもないことをしてくるに違いないと予想していた。あわてず騒がずグランレオンでステップ。直撃を避け、向きを変え……すれ違おう!

直後、地面に前足をついた敵魔獣が即座にターン。

格好の条件だったのに攻撃をせず、ただ素通りした俺が何かを企んでいると敏感に察したのだろう。

そしてその時すでにこちらも全く同じようにターンしており、この戦いが始まって初めて向かい合う。

間合いはグランレオンの全長にして2身分ほどか。四脚の瞬発力をもつてすれば即座に捕らえられる間合いであり、同時にこれまでの反応を考えれば回避を許すだけの猶予も与えてしまっていると言えるだろう。

しかし、構うものか。

グランレオン、突撃。全脚力をつぎ込んだの爆発的な一步は踏み込んだ地面を爆裂さ

せる。途中で踏むのはわずかに一歩。それすら更なる加速に利用すればさらに速くなる。

敵、既に回避に入っている。本当に目がいい勘がいい。

こちらの直撃軌道を外れ、それだけで体当たりも爪も届かなくなった。

ブレードを伸ばしても軌道を変化させてもそれを逃げ切るだけの算段は付いているだろうし、法撃ではたとえこの距離であつてもブレてしまつて狙えない。

そういつた、「こちらの持ちうるすべての選択肢を回避できるといふ確信を持った動き」をしてきたのだから。

その時点で、俺の勝利は決まっていた。

加速に使うはずだった途中の一歩で逃げる魔獣に追隨。

そうなるだろうと思っていたとばかりに、なんと相手は真上に飛んだ。

ロクな助走も溜めもないのに、幻晶獣機の頭上をはるか飛び越えるその脚力、反撃を許せば今度はこちらがピンチに陥ることは請け合いで。

「そう、それを待つてたんだよ……!」

君ならそうしてくれると信じていたよ。

グランレオンは、カルデイヘッドほどではないが装備の拡張性が高い。……と、いう体にして農業用のあれこれを装備できるようにしてある。

例えば、マナ駆動式のチェーンソー。
削岩用のドリルや杭打機。

そして。

今日の昼間、開拓するために使ったまま取り外さずに装備しておいた巨大な犁などもあり。

「野性……じゃなくて本能覚……でもなくて本農解放!!!」

実はずっと背負っていた犁の向きを変え、頭上を通り越して前方へ突き出る巨大な爪のようになることを、さすがの「彼」も想像していなかったと見えて。

武器と、間合いと、タイミングと、その全ての変化を完璧に把握し、かわすことはさすがにできず。

「でええりやあああああああああ!!!」

ザン、と初めての快音が確かに伝わり。

「……取った!!」

グランレオンが下を潜り抜けたのち、巨大犂改めタテガミクローの斬撃を受けた敵はバランスを崩して、地に落ちた!

「さあ、いたずらは終わりだ……エルくん」

『……ふふふ、バレていましたか。さすが先輩です!』

と、見せかけて地面スレスレで猫のように体勢を立て直して足から着地するのは、姿を隠すために被っていた文字通りの化けの皮、ギリースーツ状の森林迷彩シートが剥がれた1機の幻晶獣機。

そして聞こえてきた声はあまりにも耳慣れた、女の子と間違えそうな男の子、エルくんのものなわけで。

『騙して悪いですが、仕事なんです』

「知ってた」

予想通りのオチだなオイ!!



『最近、銀鳳騎士団内でも訓練がマンネリしてるような気がしまして。なので、ここらでひとつサプライズと抜き打ちと応用力を試す形の訓練をですね?』

「もつと素直に、自分の鍛えた騎操士と幻晶騎士を相手に戦ってみたかったって言うていいんだよ?」

そろそろ日が沈みつつある頃合いだろうか。藍色が濃くなる空を見上げながら、いまだ森の中でエルくんの種明かしを聞く俺。あー、村に戻ったら何か食べたい。エルくん相手に戦うと腹が減る。

『そんなわけで、まず最初のテストケースとして先輩にお願いしようと思って、今回の依頼を出したわけです。いやー、準備が大変でした。近くの騎士団に根回しをしたり、こっそり魔獣つぼさを醸し出して痕跡を残したり』

「趣味のために騎士団まで動かすんじゃないやありません」

だって、こんな有様だしさあ!

どうせなんか裏があるってことは気付いてたけど、完璧に予想通りどころか他の騎士団に渡りつけてまで実行するとか手が込み過ぎてませんかねえ!

「はあ。それで、感想はどうだったねエルくん」

『すっごく楽しかったです!! ……じゃなかった、とてもいい実績が得られました。やはり不測の事態に対して騎操士としていかに対応できるのか、魔獣に対して戦闘のみならず事前の情報収集と周辺調査がどれだけしつかりできるかがよくわかります。先輩の行動はその点完璧でした。これはぜひ定期的に採用するべき訓練です』

「そりやどうも」

ともあれ、今回の一件で銀鳳騎士団にまた厄介な訓練が追加されたことは間違いない。

恐れるな団員達。そこは多分俺が既に通った道だ。

まあでも、サブライズ形式だから俺は二度とやることないだろうけどね!

『それはそれとして』

……と、考えるのはまだ甘い。

エルくんの俺に対するいささか過大に過ぎる評価を舐めてはいけなかったんだ。

『幻晶獣機を使つての奇襲スタイル程度ではやはり先輩の訓練にはならなかったようですね。……ということ、みなさんよろしく願います!』

「えっ」

突如放たれる、シャレにならない言葉。

エルくんてばやだなーもー。銀鳳騎士団内でも一番、それすなわち下手するとフレメヴィーラ王国はおろかセツテルンド大陸でもトップレベルの騎操士を相手にタイマン張つてもまだ足りない、とか言つてません？

ガサガサリ。

森の木々が揺れる。

広場を取り囲む茂みの中から巨大な影、幻晶騎士が現れる。

『偽りの依頼、失礼しました。先輩にはここでもつと楽しんでいただきます。理由はお分かりですね』

びよいこらびよん、と幻晶獣機を降りたエルくんの乗り換えたイカルガが正面から出てきて六腕を広げて姿を見せる。

いや、理由とかさっぱりわからないから。

『まあ、そういうことだ。どうせ覚悟していたのだろう？ 話しても仕方ない』

諦めたら？ とばかりに呆れた口調で夕焼けよりも赤い機体、グウエラリンデが二刀で枝葉を切り払いながら進み出る。左が塞がれた。

『所詮は騎操士だ。人の言葉も訓練には及ばない』

こちらはめきめきと音を立てて木をへし折りながら、アルディラッドカンバー。よりよつて背後、退路を断つのが堅牢で鳴らすエドガーだなんて。

『先輩とこうなるとは、ですね……。残念ですが、エルくんは私のものです。狩らせてもらいます！』

そして頭上の枝葉を風で揺らしながら高度を下げて来たシルフィアーネ。射撃兵装が充実している空戦機に乗ったアデイちゃんに上を抑えられるとか、それなんて悪夢だろう。

『耕し過ぎるのよ、あんたはねー！』

その理由はちよつと理不尽だと思ふよ、ヘルヴィ。

茂みを飛び越して着地から数歩を踏んで、ツェンドリンブルが右手を固めた。

全方位、逃げ場なし。

銀鳳騎士団上位5人がそろい踏みである。

「……………」、5対1は卑怯だろ」

『大丈夫です、先輩。僕は卑怯もラツキヨウも大好きですから』
絶望に震える俺の声。

嬉しそうに弾むエルくんの声。

間合いを計ってジリジリと距離を詰めてくる、5機の幻晶騎士。

……拝啓、故郷の家族たち。

俺は今日、死ぬかもわからんね。

「ちくしよおおおおおおおおお!!!」

『ひゃっほ—————!!!』

駆けるグランレオン。

嬉しそうに叫ぶエルくと、迎え撃つイカルガ。

左右から挟撃してくるヘルヴィとディートリヒ。

頭上からはすでに法撃の雨あられ。

多分背後ではエドガーがこちらをじっくりと観察して、一番来ないで欲しいときに攻めてくる。

敗北は必至。

それでも俺は、なけなしの度胸と気合と生き残りたいという希望を込めて。

このあとめちやくちや実戦形式で訓練した。



後に。

銀鳳騎士団内にて「近隣の村に出没する謎の魔獣の調査」ミッションが時折発令され、騎士団内で見込みのある若手が単独でその任につき、古参団員たちに生暖かい目で見守られ、数日するとめちやくちやげつそりして帰つて来るといふ事例が伝統行事として繰り返されることとなる。

なお、このミッションが発令される前後でエルくんが退屈そうな様子からめつちや生き生きつやつやした表情へと切り替わる様子が目撃されているが、特に関連はない。

ないっつらない。

「うう、5人相手の戦闘とかめちやキツかった……死ぬ……！ おら、しばらくこの村でご厄介になって休むしかないね！」

「ダメよ。畑仕事は十分堪能したんだから、しばらくは銀鳳騎士団の仕事しなさい」
「ヘルヴェイのいじわる！ 鬼！ おっばい！」

番外編 銀鳳騎士団物語

闇の帳に包まれて、しかし不安とは無縁のざわめきが満ちる。

見えはしなくてもそこかしこに人の気配。うつすらとした興奮と期待に高まる熱気がじわじわと闇の色を染めていく時間が、しばし続き。

「我が国には、数多の人が住み、恐ろしい数の魔獣がはびこり、しかしそれを屠る騎操士もまた、凛々しく雄々しく剣を執る」

突如、朗々と謳いあげられる口上に終わるざわめき。

天から降り注ぐ光が一人の姿を映し出し、讃え、送り出す。

「騎操士は幻晶騎士を駆り、集いて騎士団となり、新たな騎士団が産声を上げる」

中央へと歩みゆくのは白い甲冑に身を包んだ騎操士。

腰に下げた剣を抜き、まっすぐに光へ向かって切っ先をかざすのは白髪白髭、堅牢と老練を絵に描いたような彼の低く、良く響く声が紡がれる。

「我が名はエドワルド。白き幻晶騎士をもって人々を守る楯！」

続いて紅の偉丈夫が進み出る。

胸を張って堂々と、情熱で染め上げたような赤いマントが炎のごとく翻り、抜き放った剣の切っ先はエドワルドのそれと同じく天を衝く。

「我が名はディートハルト。立ちはだかるものを切り裂く剣の切っ先！」

その後も続々と騎士が集う。

しやなりしやなりと優美に色気を振りまき進み出るヘルミーネ。

よく似た男女の双子にして始まりの二人、アーデルハイトとアレクシス。

ちなみにここまで、言うなれば登場人物の紹介コーナーであり、なんか聞き覚えのある名前を微妙に外したところと、特徴を捉えつつもいい感じに脚色が入っていることに大多数の観客はわくわくと期待を膨らませ、俺の周囲の観客たちはなんか頭を抱えていた。

「老騎士……老騎士……」

「……私はあるなにキザつたらしく髪をかき上げないはずだが」

「ちよつと……！　なんであのヘルミーネとかいうのは裸みたいなの衣装着てるわけ!？」

三人ほど小声でブツブツ言っているが、良く聞こえないね、うん。

「では、行きましょう。さらなる先へ。誰も見たことのない世界へ」

そして最後に中央へと進み出るのが、この物語の中心人物。

決して大きな体ではない。だがまっすぐ前を見る瞳に宿した光の色が、不思議と人を惹きつける。

苛烈とは違う。凄絶でもない。

宝石よりも透き通り、太陽よりも眩く光る眼差し。月の光を梳いたような銀の髪。

秘めたる情熱と想いの丈ははるかオーヴィニエ山脈を越え、セツテルンド大陸を覆つてやまないその人物こそ。

「我が名はエルヴィン。今日ここに、我らが騎士団の設立を宣言する！ 我ら……銀鳳騎士団!!」

——オオオオオオオオオオオオ!!!

これこそ、最近フレメヴィーラ王国で流行りの劇、「銀鳳騎士団物語」の序幕なのだった。

ちなみに余談だが、銀鳳騎士団物語を上演する数々の劇団の中で、主人公の騎士団長役を「見目麗しい女優」が演じていないところは一つもなかったりする。



「銀鳳騎士団物語」。

それは、先王陛下の肝入りで設立されるや否や、ぽこじやか新しい幻晶騎士を世に出し続け、一時期国内で姿を見ないと思つたら飛空船などというとんでもないものをお土産に帰ってきて、さらにはポキューズ大森海にて団長をはじめとする数人が取り残されたと思つたらきつちり生還してきた、なんかもうわけのわからない立志伝中の存在である。

……と、市井の人々に認識されるに至つた結果、その活躍が大衆向けの演劇ネタになるのは無理からぬこと。

あちこちの劇場やテントの舞台では、それぞれの劇団が描く銀鳳騎士団の活躍が今日も披露されている。

一応銀鳳騎士団の話ということになってはいるし、大まかな共通した流れはあるが、派手な戦いなんかは国外での活動が多いだけあつてさすがに正確な情報が広まっているわけではなく、つまり各劇団で脚色し放題。

可能な限り噂や情報を集めてリアリティにこだわつた劇場もあれば、どれほど信憑性が低くてもとりあえずそれっぽければいいやと割り切つた娯楽大作に仕立て上げる一

座もいて、それらの違いを楽しむのも最近の流行りであるらしい。

「いざ行かん、我らが盟友クシエペルカへ！ 悪しきジャロウデクの魔の手から救うのだ！」

「はっ！ 殿下の仰せのままに！」

ちなみに今日見に来た劇団は、中でも特に脚色が激しいと噂の舞台だ。

具体的には、「銀鳳騎士団がクシエペルカに行っていたらしきころ、帰ってきていたはずなのに国内で姿を見なかったエムリス殿下が銀鳳騎士団にくっついて行っていた」というアレンジを加えている。

「おいおい、さすがにそれはないって。仮にも王子だぞ」

「だよなあ。王族がこっそり他国の戦争に介入なんて、思い切った話の振り回し方だよなあ」

「は、ははは……」

「真つ暗なのにわかるくらい顔が白いぞ大丈夫か!？」

などなど、近くの観客のささやきと、それを聞いて顔色悪くなってる友人がいたりするけど、この程度の声が聞こえるのはこういう舞台ならはだよな。



その後、舞台の上ではジャロウデク王国に侵略されたクシエペルカ王国を救う、銀鳳騎士団の活躍が進んでいく。

国境沿いの砦にカチコミをかけるなり、警備を担当していた敵国の新型幻晶騎士を見敵必殺。元祖ニュースタイル発祥騎士団の名は伊達ではなく、黒騎士の異名をとる敵の幻晶騎士のボディに骸骨模様が透けそうなくらいザコに見える無双ぶりを発揮する、「空飛ぶ幻晶騎士」。

そう、なんとこの劇団、幻晶騎士をかなり本格的な甲冑で表現するのみならず、団長専用機の飛行能力を再現するためワイヤーアクションを採用しているのだ。

そのため、砦をひよいっと飛び越えて敵の後ろからずんばり、などという過激なショーを見せてくれて観客席は大盛り上がりだ。

「ヒューツ！ さすがの殺陣だな！ まあ、実際にはあそこまで飛んだり跳ねたりはしないだろうが」

「そりゃそうだよ。それに、相手の幻晶騎士は相当硬かったって噂だぜ」

そして、この劇場は観客も現実と空想の区別がすっかりついていようだ。

派手なものは派手なものとして楽しみつ、しかしそれが現実では早々あり得ないこ

とをしつかりと理解している。

「まるで現場を見てきたかのようだな。極めて再現度が高い」

「あれで偶然似てるだけだっていうんだから、怖いわよねー」

「主に我らの団長がな」

なお、一部で懐かしそうな顔で舞台を見ている客もいたりするが。



その後も、いくつかの場面転換を交えつつクシエペルカにおける銀鳳騎士団の活躍が鮮やかに語られていく。

エドワルドが大量の敵軍を押しとどめる渋い活躍を見せ、そこにキユンと来たヘルミーネが熱烈なアプローチをして、年甲斐もなく赤くなるエドワルドの姿にちよつとした萌えが芽生える女性客、多数。

さらに行く先々で女性と浮名を流し、10分に1回くらいの割合でラブロマンスを挟んでくるディートハルトはキザに決めて女性たちの黄色い悲鳴と男性陣の怨嗟を集めまくっている。

「……」

「……」

「いや、私はこう見えても身持ちは硬いのだが……!？」

なんか赤くなってお互いチラチラ見ているのとか、今にも楽屋に殴り込みに行きたそうにしている連れ合いを見てると劇が倍楽しくなる不思議。うーん、来てよかった。

さらに、ここで山場の一つがやってくる。

外道なり、ジャロウデク。なんとかの国はクシエペルカ王国の姫君を捕らえ、婚姻によつて縛ろうとしていた。

それを知つて立ち上がらないようでは、騎士団を名乗れない。

夜闇に乗じた救出作戦。ハラハラドキドキの敵要塞潜入と、月明かりに照らされた絶世の美姫と運命の出会いを果たしたのは……騎士団長エルヴィンの直弟子の一人、双子の片割れアレクシスだった。

敵の魔の手から救い出された姫君。

しかし国を失い、父を失い、深く傷ついた姫にはなによりも優しさと癒しが必要だった。

クシエペルカ王国再興を目指す生き残った家臣一同はもちろん、銀鳳騎士団もまた姫のために心を砕き、特にアレクシスの献身はこの上ない。

足繁く姫のもとへと通い、言葉を、花を贈った。

時にはこつそりと町へ連れ出し、かけがえのない、愛おしい時間を積み上げていく。ゆつくりと元のたおやかさと美しさを取り戻していく姫であったが、しかしそこで立ちただかるのが身分の壁。

いかに救国の英雄とはいえ、アレクシスはただの騎士団員。姫との間に結ばれた絆は、しかしその断崖によって断ち切られる定めにある。

アレクシスが、実はフレメヴィーラ王国のさる貴族の隠し子であると判明するまでの間だが！

「ぶふふうふううー!?!」

「アディ、落ち着いて」

「ご都合主義、ここに極まれり。」

お姫様を救ったナイトくんが実は貴族の血を引いてました、とか今日びそこらの三文恋愛小説でもやらねえぞでもロマンよね、という感想が漏れ聞こえる中、思いつきり噴き出す乙女が約一名。劇場の闇の中に紛れていたからこそよかったものの、もし明るみ

に出ていけば乙女としての絶命不可避な光景だったろう。

そんなこんなで舞台は回る。

元氣を取り戻したどころか王氣すら漂わせるようになった姫様あらため女王陛下が旗印となり、ついにジャロウデク王国との決戦が迫る。

銀鳳騎士団を切っ先に、続々と集った旧クシエペルカ王国の貴族と義勇兵たち。鬨の聲は天をも揺るがす威容を見せて、当たる砦を片端から蹴散らす快進撃が進んでいく。

あの異形が、立ちほだかるまでは。



「なんだ、あれは!？」

「大きい……まるで山だ!？」

「なんてこと! 人が魔獣を作ったというの!？」

なんと、イカルガっぽい幻晶騎士が宙を舞ったのはこのための伏線だったのか。

舞台袖から姿を現したのは、着ぐるみよりなお巨大な顎。

全身金色に煌めく鱗に、燃える目、それらがギシギシ音をたてながらぞろりと現れた

数……何と、3本。

「あれは、まさか……！　我が国にも古い言い伝えで残っています。遙かな過去、一つだった世界を砕いたモノ、文明の破壊者……空より来たりし災厄！　それこそ、金色三ツ首の邪竜！」

そう、背景との配置の妙で山すら巻き取るほど巨大に見えるそれは、3本の首を持つ異形中の異形の魔獣だった。

ちろちろと、舌の代わりに吐き出す火の粉。登場するなりミニチュア幻晶騎士の3個中隊を焼いて強さを示したそれこそが、この舞台最後の敵。ジャロウデク王国が現代によみがえらせた伝説の魔獣であるという。

吐き出す炎は大地を焦がし、咆哮は聞くものの魂をすら震え上がらせる。

まさしく伝説の復活と呼ぶにふさわしい、破壊の化身がそこにいた。

これまでで呑んだ城は両手の指で数えるに余る。

ひと睨みで子が泣き、獣が息絶え、騎士すら憶する魔王の威容。

いかに故国奪還に燃えるクシエペルカの民とはいえ、抗いがたい恐怖に身が竦み。

「銀鳳騎士団、前へ！」

それに怯まぬ者にこそ、「勇者」の名が相応しい。

「勇敢なる団員諸君！　恐れることはない！　たとえいかなる敵が相手であろうと、我

らの幻晶騎士は決して後れを取らない！ 行くぞ、我に続け!!」

誰よりも早く飛び出す6腕の幻晶騎士。書き割り背景の後ろに飛び込むや、掌サイズのミニチュアが糸か何かで吊り下げられているのか宙を舞い、邪竜の三つ首と激しい戦いを繰り広げていく。

「皆の者、団長に遅れるな！ 第一中隊、敵軍を止める！ 踏みとどまれ！」

「第二中隊、抜剣！ 敵陣を切り裂く!!」

そして舞台の上を入り乱れる多数の幻晶騎士たち。

役者総出で幻晶騎士風の着ぐるみを着込んでの大立ち回りは、この劇団最大の売りだという。

「これで……終わりだ！」

——ギャオオオオオオオオオオオオン!!

そして、舞台の上方では中央の首に取りついたイカルガが、なんか力づくで首をねじ切って捨てることで、趨勢は決した。

これが、クシエペルカ王国の、そして銀鳳騎士団の、勝利である。



その後。

ドラゴンスレイヤーとなったエルヴィンはクシエペルカで盛大に讃えられ、帰参した自国でも王から直接の称賛を賜り、銀鳳騎士団の声望はますます高まった。

しかし、それでもなおエルヴィンは止まらない。

さらなる高みへ、もつと強い幻晶騎士を作るために。

銀鳳騎士団の戦いはこれからだ!!

「……………って感じだったな。いやー、いい劇だった」

「……………そうだな」

「……………そうだろうか」

「……………そうだったんじゃないかしら」

「楽しかったね、エルくん！」

「ええ、素晴らしかったですねアディ」

以上、銀鳳騎士団有志による、巷で話題の舞台版「銀鳳騎士団物語」の鑑賞会でしたとさ。

芝居小屋のテントからぞろぞろと出ていく客に紛れ、久々に日の光を浴びたエドガー、デイトトリヒ、ヘルヴィの顔には影が濃い。

自分たちの行動が劇にされている、というだけでもだいたいぶアレな感じなのに、中でもこの劇団は飛び切りの脚色による娯楽大作化が売り。歴史上の人物が軒並み美少女化して現代に召喚される、レベルの思い切った尾ひれ背びれのつけ方は大衆受けこそいいものの、実際に元ネタとなった人物が存命中にやるとは、なかなか度胸があると言わざるを得ない。

まあ、エドガー達はげんなりしてるけど器の大きい人間なので、抗議をしたりする気はないようだ。めっさげんなりしてるけど。

「というか、なんであんたは平気な顔してるのよ」

「いや、だって俺は出番なかったし。やっぱり平団員は気楽だな」

なので、晴れやかな顔をしてるのは色々おらかなエルくと、そこそこエルくん絡みで活躍するシーンが多い役だったアデイちゃん、そして全く影も形もなかった俺くらいなものだった。

……のだが。

「はっ。」

「何を言っているのだ、アグリ」

「君の眼は節穴か」

「えっ」

なんか、ヘルヴィたちからのツッコミが……？

「いやだって、俺っぽい役者なんて……」

「……ああ、うん。『役者』はいなかったわね」

「あっ」

「……君も意外と鈍感なのだな」

「おい待てどういうことだ」

妙な焦燥感に襲われる俺。ヘルヴィたちは一体何の話をしてるんだ!? あの劇に俺

の居場所なんて……。

「アグリ、落ち着いて聞け。お前もあの劇の内容はよく覚えているはずだ。なら、しっか

りと見ていただろう? 常にエルネ、エルヴィン団長の傍らにいた……獅子のことを」

「ああ、団長のペットだっていう?」

着ぐるみだったけど、気合入った造形だったよね。

作中の設定によると、昔々空から降りてきてエルヴィン団長を我が国にもたらした魔獣ストレスレのフレンズらしい。実際、作中の戦闘シーンでは銀鳳騎士団の幻晶騎士に交じって戦って、ジャロウデクの幻晶騎士を食いちぎってたし。

「時々、団長の腕に鳥がとまっていたらどう？」

「鷹狩りのなヤツに使ってたな。偵察してもらったりとか」

割と頭がいい鳥らしく、ジャロウデクの位置を調べてはエルヴィン団長に知らせる先導役を務めていた。味方にとっては吉兆、敵にとっては凶兆とか神話の鳥みたいだね。

ちなみに、色は黒かったです。

「で、そういうのを団長専用の戦車に乗って駆使したり移動したりしてたじゃない？」

「馬のいない馬車みたいなやつだったよね」

進軍のシーンは大体そんな感じだった。

後半になると戦闘するのが面倒になったのか、その戦車が敵の幻晶騎士を轢き潰して省略したりしてたけど。

「それ、全部あんたがクシエペルカでやったことじゃない」

「……………あつ」

——拜啓、田舎の父よ母よ妹よ。

息子は、王都で三分割された上に人間ですらなくなりました。

「すつごく楽しかったですね、先輩！ 今度は『銀鳳騎士団物語く樹海探索編く』も見に来ましよう！ 噂によると、エルヴィン団長と例の獅子が究極の絆を結んで秘められた力が覚醒するらしいですよ！」

「お、おう……」

銀鳳騎士団の伝説が増えるたびにどんどん畑から遠ざかり、しまいには人間からも遠ざかり始めた気がする我が身を顧みて、なんか心が虚無へと旅立ちそうになる、そんな日々。

それでも空は青く、嬉しそうにしがみついてくるエルくん越しにアデイちゃんが女性に人気なドロドロ恋愛演劇の嫉妬に狂った女の目で見えてくるのすら慣れ始めたことが、無性に悲しかった。



「ところで、あの劇の獅子やら鳥やら戦車やらが俺のことを指しているというのなら、農業描写が足りないと思うんだ。というわけで、ちよつと脚本指導に行つてくる。新しいタイトルは『牧場物語』で決まりだな！」

「牧場なのに農業メインっておかしいと気付きなさいよ!？」

エルくんケツコンカツコガチ

その日、フレメヴィーラ王国は、湧いた。

最大規模の騎操士学園を抱えるライヒアラの空に現れた、常ならぬ飛空船の大船団。

その船体に描かれたのは、立志伝中の存在にして革新の切っ先、銀鳳騎士団の旗印。

そして控えめに言って魔獣一步手前の化け物じみた幻晶騎士が飛空船から飛び出して地上へ降りたち、中から銀鳳騎士団の団長が現れた。

諸々の事情を知らない民衆であっても察しよう。

銀鳳騎士団、凱旋。

なお、クシエペルカであれこれやった時以来3年ぶり2度目のことである。

「銀鳳騎士団やつぱすげーな」

「やってることはもちろんだけど、毎回新しいモノ持つてくるよな」

「団長の趣味だからな」

フレメヴィーラ王国における銀鳳騎士団の理解度は、高い。



「騎士団の人たち、帰ってきたんだって？」

「らしいわねえ。この畑もようやくお返しできるよ」

オルヴェシウス砦近郊。

ここには、一面の畑が広がっている。

銀鳳騎士団に所属するとある騎士が農民出身であり、自身が開発した幻晶騎士の性能テスト！ 性能テストだから！ と言い張って耕し整備した、中々に広大な畑である。

植えられた作物も、穀類に始まり野菜も多種多様。

土質の改良や肥料の配合と量の実験、品種改良などといったことやって時間を捻出しているのかわからないほどいろいろなことに手を染めて、それでもなお足りぬと亡者のごとく畑の拡張を続けているという。

これだけの畑を開墾し、維持管理するための労力を幻晶騎士ならぬ幻晶獣機とタンクタイプの幻晶騎士に頼っているため家畜類こそいないが、その辺りをカバーすればそれなり以上の規模の村の食料が賄える。そんな有様になり果てていた。

とはいえ、この畑を広げた張本人が世話をする機会というのが、実は少ない。

なにせ銀鳳騎士団の騎士は忙しい。というか物理的にオルヴェシウス砦を離れることがままある。

畑の主は騎士としての仕事に加えて幻晶騎士開発に携わり、風の噂では団長のお気に入りでもあるという。そのため近隣の村にその騎士当人が頼み込み、留守の間は人手を借りて世話を任せることになっている。

当然、その結果収穫物の一部は謝礼として受け取れるので、手を貸す村の側としては中々に悪くない取引と言えた。

そんなこの畑の主も、そろそろ帰ってきたのだろうか。

騎操士ならぬ身ではわからないが、無事の帰還を祈り、今日も今日とて畑の世話に繰り出す初老の夫婦が一組、ゆったりと語り合う。

のんびりとあぜ道を歩き、自分たちが担当している畑の元にたどり着き。

「……………」

なんか、あからさまに野菜でも木でも雑草でもないものが畑から生えていることに気が付き。

アレは何かと気を付けながら近づいて。

その形が何なのかを理解し。

「…………畑から人の手足が生えてるうううううううううううううううううううううううう!!」

畑から、人の左手と左足が生えているのを、目撃した。ババーン。

「な、何事……!?!」

「まさか魔獣に食われて……!?! 村と砦に知らせに行かないと……!?!」

夫婦、大混乱。

当然そうもなる。昨日まで至つて平和だった、フレメヴィーラ王国でも最高に強く、最高にとんでもない騎士団のお膝元でのあからさまにヤバイ事件。動転するというのが無理な話であり。

「ふう、堪能した」

「手足から人が生えたー!?!」

「生きてたー!?!」

その手足の埋まっていた地面の中から泥だらけの人間が生えてくるに至り、二人揃つて腰を抜かした。

「ああ、やつぱりフレメヴィーラの土はいい。ついつい埋もれて堪能しちゃったよあつはつは。……む、いかん。さすがに土を洗い落とさないとヘルヴィに叱られるな。水浴びしてから帰るか」

全身土まみれの怪人は、地面から生えるなり晴れ晴れとした声で意味不明の供述を繰り返している。

が、恐ろしいことにその声には聞き覚えがある。まつ黒でよくわからないが、顔には見覚えがあるような気も。

「……？ ああ、畑の世話をお願いしてた村の人たちですか？ すみません、驚かせて。フレメヴィーラの土が恋しいあまり、畑と一体化してまして」

「アツハイ」

そう、誰であろうこの畑を作った主、銀鳳騎士団の騎操士の男であることに、気付かざるを得なかった。土に埋もれている間の呼吸はどうしていたのだろうか、と混乱している間に、土から出ていた汚れていない左手を差し出して助け起こしてくる様はまさしくフレメヴィーラ王国において人類の守護者たる騎操士の矜持を感じる振る舞いだ。

土に埋もれてたけど。自分の作った畑に埋もれてたけど。どうやって埋まったのか、がまず疑問なのだが、その辺気にしたら負けな気がした。

「さーて、とりあえず体洗って、草むしりでもするかー！」

そして、取り残された夫婦は件の騎操士が元気にオルヴェシウス砦に帰っていく後姿を呆然と見送り。

「騎操士って、畑から取れるんだっけか」

「かも、しれないわねえ……」

後年、「フレメヴィーラ王国の騎操士は畑から生えてくる」と実しやかに囁かれる冗談の出どころがここにあることを、今はまだ誰も知らない。



さて、帰ってきました懐かしの故郷。

森の中から人類の生きる文明の地へ。帰ってきたはいいものの、帰ってきたからこそ大変なこともいろいろある。

具体的には、帰りの道中にくつついてきた巨人の皆さん。

国王陛下へ帰還の挨拶をしたエルくんがさっそく報告したらしいけど、そりやもう国王陛下卒倒モノのインパクトだったらしい。気持ちはわかる。

その後、当面公表は控えることとなった巨人族の人たちの扱いは銀鳳騎士団預かりとなり、さらに銀鳳騎士団そのものの体制も見直されることになった。

具体的には、エドガー達中隊長を団長とする、新騎士団の創設だ。

「なんだかんだで、大森海へ行く前に言われてた話がそのまま形になるんだなあ」

「アグリ……！ 他人事だと思つて君は！」

「……こんなことなら、無理やりにもアグリに中隊の一つも押し付けておくべきだったか」

「惜しいわね。確実に幻晶騎士式工兵集団の皮をかぶつた農民化させる未来さえなければ、それもできたつていうのに……！」

名譽であると同時に責任その他が迫ってくる立場に、エドガー、デイトリヒ、ヘルヴィは頭を悩ませているようだった。ヘルヴィはどうやら別の考えもあるらしいけど、まあそれはそれ。

……ふふふ、さすがに俺も学習したよ。この人事のどさくさ紛れに今度こそ銀鳳騎士団を退団しよう、などと企んだら今度は巨人族の人たちと小人族の人たちが暮らすボキューズ大森海の奥へ単身赴任とかさせられかねないから、今は我慢……！ 雌伏のときだ……！

それはそれでエルくんの手元から離れてのびのび農業できるかもしれないけど、なんかそう上手いこと行かない予感しかしねえ！



大森海から帰ってきてから起きたことは多いので、ある程度まとめて語ろう。まずは、巨人族の人たちについて。

処遇の預かりが銀鳳騎士団になったのは先にも述べた通り。

巨人族の公表は時期を見てとのことになったので、軟禁とは言わないものの表立ってフレメヴィーラ王国の領内をうろついてもらうわけにはいかなかった。

「というわけで、先輩。いきなりですみませんが巨人族の人たちが寝泊まりするところを作ってください。幻晶騎士の工房くらいの大きさでいいですから」

「あいよー」

「……虹の勇者も我らの目の外にあったものだが、あの者もよくわからんな」

「確か、アーテル氏族を投げ飛ばしていたぞ」

「力はあるのだろうか……ああしてすさまじい勢いで家を建てていく様を目にする……わからぬ」

なので、とりあえずオルヴェシウス砦で姿を隠しつつ寝泊まりしてもらうところを建築しました。

うーん、やっぱりカルデイヘッドはこういうときに便利。巨人族の人たちは事実上決闘級魔獣なので、体が丈夫。多少地面がむき出しでもごつごつしても雨風が漏れても

風邪をひいたりしないレベルらしいので、すぐ建てられた。とりあえず、しばらくはここで生活してもらおうことになるだろう。

とはいえ、いつまでも砦の中に押し込んでおくわけにもいかない。

さすがに巨人族の人たちだって気が滅入るだろうし、そもそもが根っからの戦闘民族。狩りをしたい「問い」をしたいとうずうずしている。

というわけで、外行きのために巨人族の人たちを幻晶騎士っぽく見せるための鎧を作ってもらいました。

銀鳳騎士団の組織再編に伴って国機研から出向してきた若手の人たちにね！

「……私ら、この国の最先端の幻晶騎士を作りに来たはずなんだけど」

「銀鳳騎士団ではよくあることですよデシレアさん。俺も農業全然できないし！」

「おいダーヴィド。これが噂の、頭の中に『農』が詰まってるってヤツかい？ 団長のお気に入り、団長以上に変な幻晶騎士ばかり作って、放っておくと国中を畑にしかねないっていう」

「大体合ってるぞ」

その中の代表格、デシレア・ヨーハンソンさん。なんでも国機研のガイスカ・ヨーハンソン前工房長のお孫さんだそうで、オルヴェシウス砦に来たその日のうちに巨人族の

人たちの鎧づくりを頼まれて卒倒しかけていた。さもありません。

「こらー！ それはあんたら用の兜じゃなくて幻晶騎士の頭！ 引っこ抜くな！」

「そうは言うが……勇者の兜は誇りの証。百眼のお目にかけるものである以上、意匠を尽くし、狩った獲物で飾らねば始まらない。なので元々カッコいいこれをな？」

「そういうのはあんたら用のでやれって言ってるの！ ていうか、下手に魔獣の素材で飾ったら目立つでしょ！」

「我らは一向に構わんツツ！」

「こつちが困るのよ!!」

と、一瞬で慣れたけど。巨人族を普通に生身のまま叱りつけられるって、すさまじい胆力だ。

なお巨人族に対して極めて親しく接する人が、実はもう一人いる。

「老戦士よ、貴様の槍の冴えはしかと見た。二眼にしておくのが惜しいほどだ」

「ふふふ、そういうお主も中々のものよ。年甲斐もなく老骨に血がたぎるわい」

「いい加減おとなしくしましようね先王陛下。国王陛下に言いつけますよ」

それこそ誰であろう、ジルバティーガでオルヴェシウス砦に遊びに来た、先王陛下だつてんだから頭が痛い。

巨人族の人たちを人目につかない森の中に連れて行って羽を伸ばしてもらおうときにしれつとついてきて、エルくんが目を離れた隙に巨人族に勝負をもちかけて一戦交えやがりましたよマジか。

「パールちゃん、あれなんとかならない？」

「なぜだ？ 勇者が力を示すのは百眼も見えておられる。誉れであろう」

「さようで」

いきなり喧嘩売ったも同然のこと、問題になるかと思えばさにあらず、むしろ好意的に受け止められてるんだから先王陛下も持つて生まれたナニカが違う。そう思わされるね。

まあそんな感じで、巨人族の人たちとはそれなりにうまくやっている。

世間に存在を公表するまでには国の側でいろいろ準備を整える必要があるのもう少し不自由を我慢してもらわなければならないけど、今のところそれなりに仲良くできていると思う。

……そして、俺にとつての本題はここから。

銀鳳騎士団の新体制と、新しい活動だ。

「さーて、大森海で思う存分幻晶騎士を作れなかった鬱憤と、その間に溜まったアイデアが火を噴きますよー！」

「銀色坊主……カササギなんてとんでもないもの作ってまだ飽き足りねえのか」

故郷へ帰ってきててテンションが上がったのは俺だけではない。

俺は行き返りの道中で畑仕事ができなくて辛かったけど、小人族の村でお世話になっていたときはまだマシだった。

が、一方エルくん。ありあわせの素材で幻晶騎士を作ったとはいえ、エルくんが本来秘めたる欲望と情熱がその程度で発散しきれるはずもなく、実は一番溜まっていたのかもしれない。

「カササギもイイ機体になってくれましたが、そのまま再建することはできない仕様なので一旦置いておきます。その間にエーテリックレビテータを改良しましょうか。カササギで得られた知見から、より性能を向上させられそうです。……シルフィアーネの側にはもちろんのこと、陸戦機用としても一部応用が可能と見ましたよ！」

「エルくん、落ち着いて。国機研から来た人たちが置いてきぼりになってるから」

「それと！ 先輩の機体もやっぱり強化したいです！ なのでさっそくプランをください！ 明日までに！」

「うん、わかった。何かひねり出すからエルくんはまず深呼吸しようね？」
ぱたぱたと落ち着きなく、あふれるアイデアをまくしたてるエルくん。

幻晶騎士開発の最先端を行く若き天才の開発者に触れられるという期待に輝いていた
国機研組の人たちの目が瞬く間に曇っていく。

がんばれ、ここを乗り越えられれば幻晶騎士開発者として一皮むけると言うから。

……二度と元には戻れないだろうけど。

ともあれ、なんだかんだで銀鳳騎士団の活動も再び軌道に乗り始めた。

基本的に幻晶騎士や巨人族用の鎧を作りつつ、たまに魔獣の征伐に呼ばれたり、暇を
持て余した巨人族を森へ連れて行ったり、その時に先王陛下が付いてくるときは中隊長
以上の誰かが必ず付きつきりでマークしたりなどなど。

「そして……！　土に触れる喜び……！　巨人族の人たちと分かち合えないのは残念だ
けどね」

「仕方があるまい。小人族にとつては糧を得るための欠かせぬ営みだが、我らの命を繫
ぐにはより多くの大地がなければ間に合うまい」

「だよなー。でも、これを振るう動きは剣の使い方に似てるって勇者たちも言ってたぜ
！」

あと、農業も忘れちゃダメだよね！ 最近銀鳳騎士団の資材を流用して作ったおニユーの鋤を持つて畑に出るのがまた何とも言えない。

大森海にいたところから思っていた通り、農業の場合は単位面積あたりで得られる作物量がどうしても巨人族の腹を満たすには厳しいものがあるからあまり興味をもつてはもらえないみたいだけど、小魔導師ちゃんとナブくんはなぜかたまに手を貸してくれている。

今も、幻晶騎士サイズより一回り小さい、くらいに作ったナブくんたち用のスコップで土を掘り返して肥料を混ぜ込んでくれてるし。

「それも道理だけど、二人はなんで手を貸してくれるんだい？ さすがの俺でも、巨人族向けの農業は提案できそうもないよ。今はまだ。今はまだ」

「2回も言うほどの重要ごとなのか。そして最終的には我らにも地を耕す術を教え込むつもりなのか……。なに、我らがこの地に来たのはより多くを見るためのこと。小人族と我らは違う。そして、小人族の持つ力はおそらく我らをも上回るものがある。ならばその違いを、私はより多く見たい」

そう語る小魔導師ちゃん。4つの目のうち半分を閉じて額の汗をぬぐい、空を見上げている。

そんな彼女をすら俺ははるか見上げるほどに体の大きさに差はあるが、明晰な頭脳と

先を見据える思慮深さは、そこらの人間ですらかなわなないかもしれない。

俺は農民だから、巨人族に教えられることはきつと多くない。

だけど、仲良くできたらいい。小魔導師ちゃんの穏やかな横顔を見て、そう思った。

「おお、小魔導師よここにいたか！ 虹の勇者が呼んでいるぞー！」

「……でも、畑をないがしろにするなら決闘も辞さない」

「三眼の勇者、生まれ！ その先は畑だ！ そこにお前が足を踏み入れたら、多分こつちの小人族が穢れの獣より恐ろしいことになる！ そんな気がするのだ！」

だが、決闘級魔獣や幻晶騎士並みの体重で畑を一步でも踏んだ者は許さぬ。

これは、相手が魔獣であろうが銀鳳騎士団員であろうが巨人族だろうが変わらない、俺にとっての鉄の掟なんで、その辺だけは伝えておこうと思います。



さてそんな感じの楽しい銀鳳騎士団生活をしている最中、騎士団の外……というか外郭辺りでの動きもあつた。

大森海からの帰還直後あたりから動き出していた、銀鳳騎士団内の中隊を騎士団とし

て独立させるといふ話の、本格化だ。

「よくぞ生き残った、我が精鋭たちよ。新たな騎士団に加わる、新たな騎操士たち。諸君らの活躍を、我らは大いに期待する」

王都カンカネンにある、幻晶騎士の訓練場。そこに集うのは数多の若い騎操士たち。国王陛下のお言葉を受けて熱い情熱をたぎらせている彼らこそ、新たに創設されるエドガーとデイトリヒの騎士団に入団する候補たちだ。

あ、ちなみにヘルヴィは騎士団創設を断つて、第三中隊のみんなは銀鳳騎士団本体なり、エドガーあるいはデイトリヒの騎士団に編入されることになりました。

ちなみにある日、先王陛下を伴って巨人族を森の中へ連れて行った際のこと。

先王陛下がまたしても大暴れしないようにガードを固めていたエドガーはそのことで陛下にからかわれてました。

「やれやれ、エドガーよ。肩に力が入りすぎじゃぞ。騎士団の副団長として恋人を連れ込む柔軟さはどこへ行った」

「なっ、先王陛下!!? ヘルヴィは決してそのような……!」

「最近、旧第一中隊の団員から『新しい騎士団は団長と副団長の愛の巣になるんでしよう

か……』と相談を受けることが多々ございませう、陛下」

「アグリ!?」というかお前たちそんなことを聞いていたのか!」

初耳だ、と驚くエドガー。

幻晶騎士の顔を明後日の方向に向けてすつとぼける第一中隊の皆さん。さすがのエドガーも先王陛下の前だと形無しだな。

「その問いに、何と答えたのだ?」

『銀鳳騎士団は元々エルネスティ団長と幻晶騎士の愛の巣である』と答えたところ、みな納得と安心をしております」

「エルネスティ……あやつ本当に底が抜けておるのう」

そんな感じ。

すごいのはエドガーなのかヘルヴィなのかエルくんなのか。まあ、銀鳳騎士団ではこんな感じの頓狂な理屈が飛び交うのはいつものことだけど。

ともあれ、第三中隊に集った新しもの好きで好奇心にあふれた隊員たちにぴったりで、なおかつ自分はエドガーの副団長という立場に収まれる選択をするあたり、さすがヘルヴィは強かだ。

「オラオラー! ウチの騎士団に入りたいなら、まず俺らを倒していつてからにしても

らおうか！」

「幻晶騎士はしこたま用意してもらったから、かかって来いやあ！」

「お前たち！ そういう場じゃないから少しおとなしくしていたまえ！」

一方、デイトトリヒの方は第二中隊時代からの団員達がさっそく新入団員候補を煽っていた。

デイトトリヒの制止の声もなんのその、またまた御冗談をと笑われているが、なんやかんやの末に結局デイトトリヒが真つ先に入団試験（物理）をしてるんだから救いが無い。

「おおー！ これぞまさに銀鳳騎士団物語に語られた真紅の第二中隊長殿！ このゴンゾース・ウトリオ、感動です！」

ちなみに、旧第二中隊改め紅隼騎士団入団第一号となったのは、がつつりと筋肉を乗せた2メートル級のガタイに禿頭も眩しいゴンゾースくん。なんとあのナリでライヒアラ卒業直後のフレツシユマンなんだそう。最近国中で話題の「銀鳳騎士団物語」のことをこの場で知らしめたのも彼だ。

後日エルくんを含む有志でその内容を見に行った時はエライ目にあっただけど、まあそれはまた別の話。

うーん、紅隼騎士団がさっそくイロモノ路線を突き進み始めている。

「ふむ。面接と試験で大まかな適性は見させてもらった。では、いよいよ幻晶騎士の縦技能を見させてもらう。全員、搭乗してくれ」

一方、エドガーの方はいつも通り堅実なものだった。

一人一人との面接や身体能力のテストなどで見極め、幻晶騎士での動きも見る。割とよくある光景で安心するね。

「オラオラ遠慮してんじゃねえぞ首取りに來いやあ！」

「気合が足りねえー！ 命知らずに踏み込んで來い！」

「もっと、熱くなれよおおおお!!!」

背後では、紅隼騎士団がすでに大乱闘のあり様だけど、全く動じない辺りさすがの慣れだ。

そのギャップに新入団員候補の人たちがドン引きしてるけど。

「では、次の試験の内容を説明する。特に難しいことはない。銀鳳騎士団でも主たる任務の一つである、対魔獣戦闘の模擬訓練だ。これから用意する標的を狩ってもらう」

へー、エドガー、魔獣の代役なんて連れてきてたんだ。

「魔獣役はそのアグリだ。気をつける、下手をするとエルネスティ並みにやり辛いぞ」
「えっ」

悲報。俺、ライヒアラ時代からの同期に魔獣かエルくんみたいな扱いされてた。

「ほら、早く準備しなさい」

「聞いてないぞヘルヴィイ!? とうかこのためにグランレオン持つてこさせたのかよ!

エドガーとデイトリヒは用意されたカルデイトーレを使うっていうから変だと思っただけどー!」

「あの、騎士団長殿? 我ら全員であちらの方を狙うのですか……?」

「うむ。安心しろ、逃げ足は速く、しぶとい男だ。全力でやっていぞ」

「エドガーってそういうところあるよね!」

「囲んで棒で叩くのがオススメよ」

「必勝の策授けてるんじゃないやねえよヘルヴィイ!」

しかも待ったなし。

ヘルヴィイに引きずられていってグランレオンのコックピットに放り込まれる頃になると、全方位がカルデイトーレに包囲されていました。

「……ちくしよおおおおお! こんなことならエルくんの手伝いしてればよかったあああああ!!」

なお、この後面白がった紅隼騎士団員とそっちの新入団員候補まで加わり、死にそうな目に会いました。



後に、白鷺騎士団、紅隼騎士団の設立時加入メンバーは語る。

「本物の魔獣より怖かった」

「あの機体は強いと思うけど、使いこなせる気がしない」

「アレよりヒドい銀鳳騎士団の団長って一体……」

などなど。

銀鳳騎士団を外から見るといかにアレかということを現すエピソードである。



件の魔獣役をしてのフルボッコは、俺が騎士団長にならないからせめて新しい団員と面通しはさせたかったからだあとでエドガーに聞かされて、気遣いの方向性のおかしさに頭を抱えたりしてからしばらく。

巨人族の人たちがエルくと戦ってみたいと言い出してポコポコにされたり、小魔導師ちゃんが先王陛下と大分政治的な話をしたり、再建というかほぼ新造しているアディ

ちゃんシルフィアーネが一応の形になってきたりしてきたころ、オルヴェシウス砦にエドガーたちが客人としてやってきた。

「おお、おおお……！　これがかの銀鳳騎士団の砦……！　まさしく、伝説の渦中！」

「ゴンゾース、少し落ち着け」

「は、はいいつ！　……おお!?　あそこに並んでいるのは団長に付き従う獅子と戦車と黒い鳥では?!」

「なるほど、新入団員のみなさんの紹介ですか。……ところで、伝説って？」

「ああ！」

「……いや、『ああ！』だけじゃなくて説明しなさいよ、アグリ」

そう、いよいよもって採用枠が固まった、新規団員たちのお披露目兼訓練のためだという。

エドガーたちに連れられてぞろぞろと入ってきた、若手の騎操士多数。そのほとんどは先日の入団試験で俺のことさんざん追い回してきたこと忘れてねえからな。

ククク、だがちようどいい。銀鳳騎士団をただの騎士団などとは思わないことだ。今まで君たちが見たこともないような装備と幻晶騎士と畑仕事の時間ががつり削られるほどの仕事量でその輝く瞳を曇らせてやる……！　というか、俺が何もなくてもエルくんが勝手に曇らせるだろう……！

「さて、それでは銀鳳騎士団式の訓練を始めようか。走って、飛んで、落ちて、幻晶騎士を操縦する。そうだな……優秀そうな者は、エルネステイにも相手をしてもらおうか」
 『何をしているんです新入団員のみなさん！ 早く訓練を終わらせて幻晶騎士で訓練しましょー！』

「エルくん、早い早い」

『そうです！ せっかくだから先輩もぜひ一緒に！』

ほらね。

新人の諸君、立志伝中の人であるエルくんに相手してもらえるのは確かに名誉なことだけど、多分心折れるよ？

『ふーむ、ディートリヒさんのところの彼。可動式追加装甲フレキシブルコートによる
 攻防「体」の重装備ドヤ顔ダブルシールドですか。いいアセンですね！』

「そういうゲームじゃねえからこれ」



その後。

新人の一部はイカルガまで持ち出してきたエルくんにおいて頂かれて（比喩）しまったり、エドガーとディートリヒはエルくんからの餞別として新しい装備、エンチャンテッドソード魔導 剣を贈られたりしていた。

「これは、先輩が作った農具を参考にしました。刀身の中に紋章術式を刻んだ銀板を通してあるんです」

「魔力を込めて地面に突き立てると……！ このように、一振りですべて地面を耕せるという優れモノだ。これなら収穫ハイベストムーン月にも間に合うな」

「君は銀鳳騎士団の資材で何を作つとるんだね」

「まあ、アグリはもともと幻晶騎士自体そういう目的で作ってたわけだし、いまさらじゃない？」

そんな感じで、変わったり変わらなかつたりな銀鳳騎士団。

段々と輪郭が新たな装いとなり、巨人族の人たちも今の生活に慣れてきて、その辺のお披露目がされたのはしばらく経ってからのこと。

王都を上げての盛大な発表で、国中新騎士団と巨人族の話題で持ち切りになり。

しかしその数日後。

銀鳳騎士団団長、エルネステイ・エチエバルリア。

彼の結婚が発表され、全ての驚きがさらに大きな驚きで塗り替えられた。



「見ましたか！ 聞きましたか先輩！ 私、やりました……！ エルくんプロポーズされたんですっ！」

「うん、見たし聞いたしその場にいたし。おめでとう、アデイちゃん。エルくんと幸せにね。……あと、できれば少し落ち着くように手綱握ってくれると嬉しいな」

「これで私の勝ちですね！ エルくんは私のモノです！」

「ダメそうだね。まずアデイちゃんがブレーキぶっ壊れてるっばいし」

銀鳳騎士団の工房にて、新生したシルフィアーネを贈られ、それとともにエルくんからのプロポーズを受けたアデイちゃんが感極まって喜びの涙をこぼしながら、俺に報告してくれた。軽くマウント取ってきたけど、痛くもかゆくもないというかその方面では常に俺の上において欲しいです。

当然、前々からの積み重ねはあった。

ボキューズ大森海で、巨人族とのコミュニケーションの都合的なものもあってそういう体裁を整えた、とも聞いた。だからアデイちゃんの想いは遠からず成就するだろうと

思ってはいたけど、やはりようやくか、という気持ちが強かった。

銀鳳騎士団の工房は広いが物も幻晶騎士も多く、にぎやかだ。

多数の幻晶騎士が見下ろし、鍛冶師隊のみんなに見上げられ、新たに建造されたシルフィアーネをアディちゃんにプレゼントしながらのプロポーズは二人にぴったりのだろう。

親方たちは涙ぐみ、国機研組からはドン引きされるといふ、実にエルくんらしいポーズだった。

「新しいシーちゃんはイカルガとの合体も前提で作られていますし、これでもう幻晶騎士でも先輩に後れは取りませんよ！ ……だけどエルくんの望みはいっぱい叶えてあげたいので、先輩はエルくんの愛人にしてあげます！ 3号さんです！」

「ちよつと何言ってるのかわからないですね」

そして、テンションが上がったアディちゃんが、ガチの真顔で言ってきたのがこの言葉。俺、どんなりアクション返せばいいの？ 割と真剣にわからない……！

「本当は愛人困うなんてサイツツツツツツツツツツテeeeeeee!!! ですけど、エルくんならその辺ちゃんとしてくれると思うので」

アディちゃん、愛人に親を殺されたか親が愛人を困ってたかのような怨念を感じさせ

るけど、それでもエルくんならという辺りに信頼の深さが見える。

「ちなみに、愛人2号さんは誰？」

「イカルガです」

「知ってた」

本当にアデイちゃんの信頼と理解は深い。エルくんの性癖その他を完璧に把握して
るから、こいつはきつといい夫婦になるに違いないね。

ともあれ、エルくとアデイちゃんの結婚を俺は心から祝福する。

プロポーズの日からずっと、アデイちゃんはいつもニッコニコで、エルくんもそれを見
て楽しそうに笑っている。エルくんのあの表情、お気に入りの幻晶騎士を見るとときと
ほとんど一緒だ……。

そんなこんなで結婚はめでたいことなのだが、なにせエルくんは国でも屈指の有名人
たる銀鳳騎士団の団長。そのお披露目は盛大に行われるべきと国王陛下直々のお言葉
があつたらしく、披露宴はなんと王都で行われることになった。

「じゃあ、国中の幻晶騎士を集めましょうか！ 楽しみですね先輩！」

「……あ、これもしかして俺一人でグランレオンとガルダウイングとカルデイヘッド出
さなきゃいけないヤツ？」

俺の腕をつかんでぴよんぴよんと飛び跳ねるエルくんのテンションが留まるところを知らない。

マジで国中の幻晶騎士に召集かけそうな勢いのエルくんを何とかなだめ、国庫から金が出て王都に住む市民の人たちにも酒と料理がふるまわれることになったので商人の人たちとその辺の折衝をして、式場の飾りつけと警備と巨人族の人たちの世話と巨人族の人たちが会場で飲み食いするものの準備というか素材となる魔獣調達のための狩りにと、なんだかんだで忙しい。

「……………ん？　なんで俺が責任者みたいになってるの？」

「そりやおめえ、中隊長が独立した銀鳳騎士団の中で、銀色坊主とアデイが主賓で外れるとなったらお前がやるしかねえだろ」

「……………とりあえず、これが終わったら本格的に人材の確保をしなければ俺の立場がヤバいことになる気がするね、うん。」



そして、結婚式当日。

幸せな、とても幸せな夫婦が誕生した。

「素敵ですよ、アデイ。フルアーマーでフルクロスでフルドレスな感じですよ。……でもちよつとアサルトバスターじゃないですか？ 無理はしないでくださいね」

「エルくんがまたなんだかよくわからないこと言ってる……」

「えーと、『思い切りおめかしして眩しいくらい。その分動きづらくないかが心配』くらいの意味だと思うよアデイちゃん」

「ふんっ！ ちよつとエルくん語が通じるからっていい気にならないてくださいね、先輩！」

「なっていないなっていない」

スマートにして豪華な礼服のエルくんと、きらびやかなドレスのアデイちゃん。

若い二人にとてもよく似合っていて、二人の行く先にはただただ光り輝く幸せだけが待っているのだろうと、そう思わせた。

控室を出てきた二人を出迎え、いつもと変わらない様子に苦笑して、でも二人がつないだ手の自然さと力強さだけはいつも以上で、心配はいらないのだと安心できた。

エルくん、アデイちゃん。

お幸せに。

「……とりあえず、エルくんに先越されたんで俺も本格的に嫁探しと実家帰りの算段つけないと。もしくはいつそ、巨人族の国に向かって伸ばすという噂の道の開拓に潜り込むか……? ご先祖様が成したように、新天地を切り開いて第二ユシツダ村を……やっべ、燃えてきた!」

「……アグリが目的を見つけられたのはいいとして、放っておいたら第二のエルネスティが生まれそうな気がするのはなぜかしら」

なんだかいろんな将来を考える契機になりそうな今日この頃。

さすがのエルくんも結婚直後はおとなしくしてらるだろうし、俺もじっくり腰を据えて先を考えようかな!

高地農業の可能性に思いを馳せる空の旅

「先輩！ 新婚旅行でクシエペルカ王国へ行くので、ご一緒しましょう！」
「ちよつと何言ってるかわからないですわね」

白鷺騎士団と紅隼騎士団が本格稼働を始め、巨人族の人たちがおっかなびっくり混じりながらも受け入れられつつある今日この頃。フレメヴィーラ王国は騒がしくありつつも平和な毎日を過ごしています。

「エレオノーラ姫、いえ今や女王陛下ですね。陛下にはお世話になりましたし、キッドやエムリス殿下にも結婚の報告をしたいですから、ちよつと行こうと思ひまして。なので、ぜひ先輩も一緒に」

「くそ、現実逃避しても逃げ切れねえ！」

だつてのに、なんでエルくんはほにやつと笑いながら無茶苦茶言ってくるのかな？
「何やってるのアディちゃん！ せつかくの新婚旅行なんだよ!? 俺みたいなお邪魔虫を連れて行ってどうするのさ！」

「えー、なんですかー？ 私は今エルくんをえるえるするのに忙しいんです。むふふふ」

「ダメだ、完全に脳みそお花畑だ……い！」

しかも、こういうとき率先して止めてくれそうなアデイちゃんはエルくんには頼ずりしながらトリップしている。アデイちゃんてば結婚してからこっち、エルくん好きにますます磨きがかかってふにやふになっただけの感がある。あと、エルくんと一緒にオルヴェシウス砦に出勤してくるとき妙につやつやしてるときがあるから、つまりそういうことなんだろう。

くつ、正妻の余裕ができたからか、エルくんが俺に接触しようとするのを止める圧が弱まっている……!?!

「……というかですね、実は先輩のクシエペルカ行きは僕だけの要望ではないんです。新婚旅行の行き先としてクシエペルカ王国に事前の打診を試みてみたところ、ぜひ先輩も一緒に来て欲しいと正式な要請があったんです」

「えっ、なにそれ。俺、クシエペルカから名指しで呼び出されるようなことしたっけ!?!」
しかも、なんか外交レベルのご指名が来るとかどうということなの。

そりゃあ、俺だって銀鳳騎士団のクシエペルカ救援にはついて行っただけ、そのときにしたことなんて他の団員と同じようにジャロウデクを殴り倒したり、それ以外では荒らされた畑を直す手伝いをしたくらいで……こんなの、人間の生存本農の一部じゃないか!

「なんでも、各地の農村から『獅子の農神よもう一度』と熱烈な要望が上がっているよう
です。是非先輩も同行を、とのことですよ」

「くうう……！　そう言ってもらえるとちよつと嬉しい！」

と思つたら、まさにその行動が原因でした。

気持ちにはわかる。俺だって、魔獣に荒らされた畑を一晩で直してくれましたみたいな
ことになったらそりゃあもう全力でお礼をしなければ気が済まないさ。痛いほどに気
持ちがわかるから、断れない……！　そうしてクシエペルカに行っている間、俺自身の
畑からは引き離されるけど……！

うう、辛い……！　せつかく大森海から帰ってきたばかりなのに、また畑を離れるな
んて。

オルヴェシウス砦を囲む畑から「イカナイデー」「オセワシテー」「コンニチワ」など
など声が聞こえる気がする……！

頭を抱えてぐおんぐおん体をひねる俺。おいエルくん、微笑ましそうに見てるんじゃない。
ない。

「それでは、さつそくクシエペルカ行きの準備を始めましょうか。実は国王陛下からイ
カルガの持ち込みを禁止されてしまったので、カルデイトーレを使わなければいけない
んです」

「まあ、妥当だね。……で、どんな改造するの?」

「先輩のそういうところが大好きです」

ともあれ、こうなってしまうえば切り替えが肝心。

立ちはだかるトラブルがあればそのことごとくを細切れにして畑の肥やしとして、最速で帰還する。それしかない。

イカルガの国外持ち出しが難しいのは、政治的に見て妥当なこと。

もしも最悪鹵獲されるようなことがあったとしてもエルくん以外はまともに動かせないこと確定だけど、それをもとに掘り返せる技術的な情報は多い、かもしれない。さらに、整備にかかる手間と要求される技術もほかの幻晶騎士とは隔絶しているから、普通に運用するだけでも動員しなきゃならない人的資源が大変だ。

クシエペルカ存亡の危機であったりして銀鳳騎士団総出でついていけるのならいざ知らず、エルくんとアディちゃんの夫婦とそのお世話の人たちだけで持ち込むにはさすがに無理がある。

だが、それでおとなしくしているエルくんであろうはずもなく。

「国王陛下はイカルガではなくカルデイトーレを持っていくようにとおっしゃいました。……が、『原型のまま』とは言っていない。つまり、改造……魔改造も可能だろう……ということ……!」

「えー、大丈夫なの？」

「幻晶騎士関連でエルくんを止められる人っていないし、仕方ないと思うな」

カルデイトーレ大改造計画がここに発令されたのでありましたとさ。

「とりあえず、イカルガをベースにしつつ省エネに気を付けましょう。E管理は基本。小ジャンプ移動でブーストゲージを節約です。それから、やっぱり新兵器も必要ですよね！ イカルガと違って銃装剣は使えないわけですからいつそ武器に頼らず幻晶騎士本体のみで戦える装備を試してみましようかああそうですそうなることやはり執月之手がベースですね使い道が多いですしよいよもって遠距離攻撃手段も持たせて有線式サイコミンがぐぐ」

で、いつものように怒涛の勢いで設計構想をぶちまけるエルくんの新規参入組の人たちがドン引きし始めたんで、口を指で押さえて少し静かにしてもらおう。こうでもしないと無限にしゃべるんだよこの子……。

「はい、主に国機研から来てる人たちが目を丸くしてるからちよつとお口閉じてようねーエルくん。……えーと、マジウスジェットスラスターの飛行システムはイカルガ式をベースに簡略化して、あとはサブアームで法撃を使えるように、つてことはいつぞや使ってたトイボックスの発展形だね。バトソンくん、あの時期に書いた設計図を一式用意してもらえるかな」

「おう、わかった」

「むぐむぐ」

「それから、開発用にスペースを確保しておかないと。大掛かりなことになりそうだから、ツェンドリンプルやシルフィアーネに使うのと同じくらいのサイズで用意してください」

「あ、じゃあ私がスケジュール取ってきますー！」

「はむはむ」

「それから、多分新しい術式をしこたま用意することになるだろうから銀盤の素材確認も……足りなくなったら補充も必要だし」

「わかりました。まずは在庫を確認してきます」

「あぐあぐ」

「……なんだかんだで仕事はええなあ、アグリをやつ」

「エルくんと先輩がああなったことは、新婚旅行までには十分間に合うかなー」

そんなこんなで、とりあえずエルくんたちの新婚旅行の準備を整えることになりました。

どうして旅行に行くだけなのに幻晶騎士やらなにやら新造するんだろうとか考える心は、銀鳳騎士団生活の中で摩滅するもの。気にしてはいけない。

……んだけど、ちょっと看過できないことが一つ。

「……で、エルくん」

「ふぁい？」

「なんで人の指咥えてるの」

エルくんの口を閉じるために突き付けた指。

が、なんでエルくんの口の中に引き込まれてるんでしようねえ……。

小さい前歯で挟まれたり、妙に滑らかな舌がなぞったりするたびに、背筋がぞわわってするんですが！

「ひむあなのれ」

「咥えたまましゃべるんじゃないやせん」

……なんで当たり前のような顔して、人の指を軽く噛みながら返事するんだろう。

身長差の関係でちよつと上目遣いに俺の指を口に入れるエルくんという絵面。早急に逃げなければなんだか大変なことになる予感しかしねえ！

「ほら、離して。おなか壊すよ」

「ふぁーい」

敢えてか無意識か、ちゆつ、と最後に吸い付くようにして唇を離すエルくん。

別に、ちよつと気持ちいいとか思つてないよ。腰が抜けそうになったのを気合で耐え

てなんかないよ。

……本当だよ。

でも、この後に迫る恐怖には本気で膝を折りそうになりました。

「もー、ダメだよエルくん。……すみません、先輩。指、拭きますね」

「ヒエツ」

傍から見れば、おかしなことなど何も無い。

エルくんに啜えられていた指先を、アデイちゃんが自分のハンカチで拭ってくれているという状況だ。

夫のいたずらを詫びる妻。ごくごくありふれた光景かもしれない。

……「あの」エルくんの舌が触れた俺の指一本が、アデイちゃんの両手で包まれている、という戦力比的に絶望しかない状況でなければだが。

アデイちゃんはただでさえエルくん直伝の魔法の使い手。魔法で筋力強化までされたら、指一本じゃどうやっても抵抗できない。

ヤバい……！ どうなる俺の指。ケジメでへし折られるのか……！? エルくんの味がついたから、ということだけで食べるのだけは勘弁してください……！

「はい、きれいになりました！ ……ふへへ」

「え、もう終わり!?」

と、思ったら何事もなく、普通に指を拭いてくれるだけで終わった!?

まあ、エルくんの唾液をぬぐった後のハンカチを見てニヤけているところは、良妻ではなく変態にしか見えないけど!

「はい、終わりですよ。……ふっふっふ、甘いですね先輩。エルくと結婚する前の私だったらうらやましさに破裂してたと思いますけど……もはや私はエルくんの奥さん! エルくんをペロペロしたり、エルくんにペロペロされることなんて当たり前なんです!」

「こんな人がたくさんいるところでそんな自慢するんじゃないやありません」

……本当に、エルくとアディちゃんはお似合いだなあ。

今日も元気に幻晶騎士にベタ惚れなエルくと、そんなエルくんにベタ惚れなアディちゃんを見て、幸せの形は人それぞれなのだと痛感する、俺を含む銀鳳騎士団一行なのでした。



そして、カルデイトーレを含む諸々の準備が整うまで約1ヶ月。

カルデイトーレは余すところなくエルくんの手が加えられ、もはやほぼ面影をとどめないほどになり果ててようやく新婚旅行への参列を許された。

ちなみに、今回の新婚旅行。

メインがエルくとアディちゃんの夫婦で俺がおまけなのは既に語った通りであるとして。

「団長閣下、全て準備整いました。身の回りのお世話は我らにお任せください」

「ありがとうございます、ノーラさん。久々のクシエペルカ王国、楽しみましょうね」

「——ええ、おっしゃる通りです」
エルくんたちのお世話係という名目でついてくる従者としてノーラさんと、ノーラさんの同僚らしきご一行がいる。そりゃあ、ただの物見遊山とはいかないよね、と思いつつその辺を指摘しないだけの分別が俺にもあった。

「なんだかんだで食事だの幻晶騎士の整備の手伝いだのもしてくれるらしいし、俺としてもありがたい限りだ。」

「よろしくお願いします、ノーラさん。ノーラさんたちの荷物についてはスペースを用意して中身をのぞかないようにしますんで、搬入しておいてもらっていいですか?」

「お気遣いありがとうございます。——少し重くなるかもしれませんが、カルデイヘッドの馬力なら問題ない程度に納めますので」

……でも、うっかり知りすぎたら口封じとかされそう！

なんだかんだで、クシエペルカ王国との距離は近い。オーヴィニエ山脈もそれなりに道が整備されている場所を選べば幻晶騎士の足で十分に行き来が可能だ。まして輸送能力に長けたツェンドリンブルであれば荷馬車を曳いても1日で国境を越えられるので、さくつとやってきました国境地帯。

「あの異常な幻晶騎士に、銀の鳳が描かれた旗……銀鳳騎士団だ！」

「救国の英雄!? 相変わらず変な幻晶騎士だな! それに、あの生物つぼくすらないヤツ見覚えある姿と違ってないか!？」

エルくん新婚旅行ご一行の編成は、アデイちゃん操るツェンドリンブルと、俺のカルデイヘッドがそれぞれ荷馬車を曳いている。

その中にはそれぞれエルくんアデイちゃん夫婦と、俺たちその他付き添い勢の生活空間や野営道具、そして新造されたに等しいエルくん用幻晶騎士のトイボックス（新）と、グランレオンとガルダウイング。その他ノーラさんたち用の荷物があれこれと、つ

いでにあまり表に出すわけにはいかない小魔導師ちゃんとナブくん。中々どうして大所帯だ。

そんな異常極まりない集団が国境に迫ってきたにも関わらず、温かく迎えてもらえるのは大西域戦争での暴れっぷりのなせる業か。国境砦の上の兵士の人たちが手を振ってくれるのに幻晶騎士で手を振って返したりしつ、国境越えの手続きに入る。

「俺の実家の村さあ、ジャロウデクのやつらに畑をつぶされて、村のみんなの命は助かったけど来年からどうすればって悩んでたらしいんだよ。そこを助けてくれたのが、あの荷馬車から顔が見えてる獅子なんだってさ。いまじゃ村に獅子の像が建ってるらしいぜ」

「うちの故郷も似たようなもんだわ」

……なんか、こっちを見ている兵士の人たちの口からとんでもなく恐ろしいワードが聞こえてきているような気がしなくもないけど、気のせいだよね！

このままだと王都デルヴァンクールにたどり着くのがすごく大変になる気しかしな
い！



「……で、寄る村寄る村でめちやくちや拝まれつつようやくたどり着いたデルヴァンクールで、俺はなんで厨房に引きずり込まれてるんです？」

それはもう、大変だった……。

休憩と宿泊、補給と幻晶騎士整備のためにクシエペルカ領内の村やら町やらをいくつか経由しながら復興の様子を見つつゆつくりとデルヴァンクールに向かつてきたわけなんだけど、それ以外の普通に通り過ぎるはずだった農村でさえ、銀鳳騎士団の旗が見つかるとそれだけで村の人たちが寄ってきた。

で、なんでもクシエペルカ王国側から正式に頼まれてるらしいから、グランレオンでちらつと外に出たりすると村の人たちが地に伏して拜んでくるんだからたまらない。

口々に感謝の言葉をこぼし、立派に直った村の畑を見せて、ついでに取れた作物をもつていってくれとじゃんじゃか渡される。おかげで道中食料の買い足しはほぼ必要ないような有様でした。

うーむ、あの戦争時のごたごたと、そのときに銀鳳騎士団が売った名の価値を舐めていたかもわからんね。

ともあれそんな大変な道中の末になんとかかんとかデルヴァンクールにたどり着き、エレオノーラ女王陛下と謁見し、さてもう少し気楽に話そうと奥に誘われ、俺はさすがに遠慮したほうがいいよねと隅の方にいたら、なんか腕を引かれて放り込まれたのが厨

房なんだから、わけがわからない。

なので教えてください、厨房で待ち構えていたクシエペルカに仕えるシェフの皆さん。

「実は、ぜひ陛下のために例のプリン・ア・ラ・モードを作っていたきたく……」

「復興成ったクシエペルカ中から取りそろえた最上の材料は、こちらに」

「え、俺が？ レシピは渡しましたよね？ 多分、もう皆さんの方が美味しいの作れると思うんですが」

と、思ったら理由としてはある意味まっとうだった。厨房では料理を作る以外のこともない。とはいえ、「なぜ、いま、俺が」という疑問は残る。

「はい。いただいたレシピはありがたく、研鑽を積んで女王陛下にも日々お褒めの言葉をいただいております」

「そりやそうでしょう。俺だって、多少覚えがあるとはいえ本職に敵うわけもありませんし」

「ですが、だからこそあなたの作るものは陛下の力となります。危急の折に心の慰めとなった味。これに勝るものはありません」

「……すみません、今の話の流れからすると、女王陛下になんぞ悩みの種が？」

「……………」

沈黙は何よりも雄弁で、「お前言葉よ」「ヤだよお前がやれよ」的なたらいまわしが無言のうちに交わされているのを見るに、なぜか俺にまでヤな予感が湧いてきて。

「実は、その……クシエペルカに滞在しておられたアーキッド様が、エムリス殿下に連れられて出奔してしまわれまして」

「すみません今すぐプリン作ります」

エムリス殿下の豪快な笑顔と、それに引きずられていくキッドくんの姿がありありと臉に浮かび、俺は即座にお詫びプリンの作成に取り掛かる。

……エムリス殿下とキッドくんの関係がエルくと俺の力関係みたいだな、なんて思っていないよ。本当だよ。



「事の発端は、大西域戦争後の飛空船開発になる。ある意味戦時中以上の熱狂をもって各国が飛空船を次々と就役させ、自国内での運用のみならず新天地の探索にも乗り出した」

デルヴァンクール王城の比較的こじんまりとした謁見室にて、エルくんたちに合流してエレオノーラ女王とその叔母君であらせられるマルティナ様の話を聞く。

さくつと作ったプリンはそのころと変わらない味だとお褒めの言葉をいただき、恐悦至極。でも今はちよつと聞き逃せない話が進行中だ。

「とはいえ、オーヴィニエ山脈以西はすでに開拓し尽くされている。当然海洋方面への進出が成され、その中の一部に『成果』を得たとする者たちがいた」

「なるほど、島なり大陸なりを発見した、と。そこまでは予想されてしかるべきですね」「ああ。だがその島が空に浮かんでいた、となると話は別だ」

冗談でも何でもなく、未確認とはいえ噂が回っていることは事実。そうと感じられる平坦さを伴って、エムリス殿下の果て無き冒険スピリッツをくすりそうワードがカッ飛んできた。

「……」

「……」

エルくんがちらりとこちらに視線をよこす。

ワクワクに煌めく瞳で、唇だけを「バルス」の形に動かしたので、おとなしく話を聞いてなさいと半眼を返す。既に事情はほぼ全て出揃った気もするけど、情報は聞けるだけ聞いておくべきだろう。

「あの子ときたら、銀鳳騎士団由来の技術も駆使して高速仕様の飛空船を建造して、そのまま飛び出していった。本当に、考えなしのことと言ったら……」

「あー……心中、お察しします」

「アーキッド様……せめて一言くらい……というか残ってくれても……」

そして空気が重くなるクシエペルカ陣営。

頭痛に苛まれていたらしいマルティナ様と、プリンをつんつん突きながら闇のオーラを染み出させるエレオノーラ女王陛下。うーん、罪作りな人たちだ。

「……では、仕方ありませんね。元々エムリス殿下の様子を見ることがキッドに結婚の報告をするために来たわけですから、ちよつと浮遊大陸まで行つてきますね！」

「ま、キッドたちがいないんじゃないよね。飛空船用意しよつか」

「まあ、エルネスティ様。相変わらず息をするように……」

「騎士くん、君は本当にブレないな……」

そして、その罪は連鎖でエルくんの旅行先が増えて滞在時間、ひいては俺が畑から引きはがされる時間を延長させるんですからねえ！

「それでは……ちよつと浮遊大陸まで行つてきます！ ……あ、その前に巨人族を紹介しますね」



飛空船とは、すなわち「可能性」である。

本来人が踏み入ることの許されない大空を越えていける新たな力。

山の向こう、海の彼方、人跡未踏のその先には多くの苦難と、そして手つかずの資源、財宝が眠るはず。

それらを求めて帆を張るのは、まず第一に命知らず。

続いて利を求めめる為政者。

それらが道を開いた後、損益の秤を見極めて十全に準備を整え動く者。

人はその者たちを「商人」と呼ぶ。

「おい、本当にこんなところに隠れてて大丈夫なのかよ……?」

「知るか、そんなこと! でも、まともに戦ったつてどうしようもないだろ!」

イレブンフラッグス
孤独なる十一。西域において多大な影響力を持つ都市国家群。その実態はすなわち

「商人の国」と評するのが相応しいだろう。

利に敏く、損を嫌い、時勢には全力で乗りに行く。

必然、未知の浮遊大陸に富の気配を感じれば、それに応じた規模の商売をしに行くのが定め。

今回の探索出征において、各都市国家から選出される議員たちがはじき出した期待と

利益の目算は、すなわち「飛空船の大船団」を持ち出すに足るもの、と相成った。

輸送力とそしてなにより防御力に優れる重装甲船アイマードリフは直接出向いた議員の数だけ。当然のごとくそれを守る飛空船も十重二十重。

本来ならばその中枢たる重装甲船はただ威容を示すだけの快適な客船にして輸送船となる。……はずだった。

船室の一つで息をひそめ、「仕入れた商品」の心配など、する必要はどこにもないはずだったのに。

「オラーーーーー!! 銀鳳騎士団だよ!!!」

「ギャ—————!?!」

なぜ、扉を斧でブチ破られ、そこから顔を覗かせる戦いの高揚がガンギマリした敵の襲撃に怯えなければならぬのか。

ついさつきまで、捕まえたばかりの鳥つばい人、ハルピユイアの美しさに興奮して「身体を観たいわ! その子の裸をみせてちょうだい!!」とか言ってたイオランダ・ランフランキのわがままに辟易していた彼ら一介の兵士たちには、さっぱりわからなかった。

浮遊大陸。噂のみを頼りに飛び出して、それを見つけられたのは僥倖というしかない。

その辺り、さすがに王族としての血なのだろうか、アーキッド・オルター、通称キッドは思う。

とはいえ、たどり着くなり他国の飛空船が襲撃され、あまつさえ轟沈させられる様を見せつけられた挙句、それを主導していた鷲の頭と獣の体に翼を持った鷲頭獣グリフオンに加え、魔獣を飼いならす人ならざる鳥の要素を交えた人か魔獣、ハルピユアに捕まることになるとは思ってもいなかったが。

その後、捕虜生活をなんとかかんとか耐え忍び、ハルピユアの一人であり奔放な性格をした少女、エージロに連れ出されて鷲頭獣グリフオンに乗る羽目になったり、その過程で隣の村が焼かれているのを発見したり、救援に向かった先でこの浮遊大陸の大地が際限ないほどの量のエーテライトを埋蔵していること、村を襲ったイレブンフラッグスがハルピユア自体を商品と見なして捕獲している可能性があることなど、諸々判明した。

浮遊大陸は、荒れる。

飛空船によるエーテライト需要の爆発的な増加に加え、新天地。

商売にも政治にも明るくない、一介の騎操士の身に過ぎないキッドの目から見ても、この土地が持つ価値が計り知れないものであることはよくわかる。

「……でも、まずはホーガラを助けないとだろ！」

しかし、そのような事態に直面した程度で思い悩むほど、銀鳳騎士団団員は思慮深く

ない。

とりあえず欲しいモノは手に入れる。ないなら作っても手に入れる。邪魔するものは幻晶騎士とか魔法とかで殴り倒す。

エルネスティはそうして生きてきたし、キッドもそれを見習って生きてきた。

あと、エルネスティに振り回されつつも自分好みの幻晶騎士を作り、オルヴェシウス砦を焔に囲まれたのどかな光景に変え果てた先輩もまた、大体そんな感じだった。

クシエペルカでの戦争が終わってから数年、国許のことを懐かしく思い返すとともに、あの焔がどれだけ広がっているかはキッドをしてすら寒気にする想像だ。町の一つや二つ飲み込んでるかもしれないとさえ思う。なにせあの男が焔を見る目は、エルネスティが幻晶騎士を見る目と同じだったから。

「さっきの兵士たちが言ってた場所は……ここか！」

すでに、捕まったハルピユアのほとんどは救出し、仲間たちに任せてきた。あとはただ一人この船の主のもとへ連れていかれたという、キッドの命を救った恩人なんだか、この状況に放り込んだ元凶なんだかよくわからないハルピユアの少女、ホーガラを救うだけだ。

魔力で強化された身体能力は、どうやら船の内部までは頑健さを求めていないらしい

扉を軽々と蹴破り、艦橋にキツドの体を飛び込ませた。

操舵輪、計器類、伝声管。見慣れた艦橋そのものの装置類がひしめく傍ら、飛空船らしからぬ豪華な一角。そこに座す、あからさまに戦の気配がしない、香水以上に銭の匂いを漂わせる老女。

キツドは知らないが、彼女こそイレブン・フラッグスの議会で席を置くイオランダ・ランフランキだ。

「無粋なこと。アポイントもなくわたくしの前に入るなんて、どれだけ礼を失しているかわかつて？」

「そりやどうも。じゃあ今からこいつでアポイントとやらを取ってやるよ。返事はできなくなるけどな」

ガンライクロッド

銃 杖を向けた、あいつが首魁だ。キツドは一目でそう看破する。

船内で戦闘が起きていたことを知らないはずがない。艦橋に詰めている船員たちは、突然飛び込んでできたキツドに対して驚愕もあらわに立ち竦んだり物陰に隠れたりしている。

だが目の前の女は、動じていない。少なくとも、表面上は泰然自若としている。キツドが持つ銃杖を突きつけられてなお表情一つゆるがせないのは、タフな交渉を幾度となく乗り越えてきた商人の矜持によるものか。

だがそんなものはどうでもいい。この女の前で縛られ、意識を失い、倒れ伏しているホーガラを救う。今のキッドに重要なのはそれだけなのだから。

「……そいつは返してもらおう。代金が必要ななら払ってやるぜ？　ただし魔法でだけだな」

「……」

忌々し気に睨みつけてくるイレブン・フラッグスの女であるが、動かない。周りの船員も同様だ。

防御を固めたこの船の中を突破してここまでたどり着いたキッドの銃杖ならば他の誰が動くより早く魔法によって状況を制すると分かっているからだろう。

いかにもその通り。ことこの状況に至って、キッドは欠片も引く気はない。

イレブンフラッグスが得意とするだろう交渉だが、この場合「キッドの要求を全面的に飲む」か「しばき倒されたあとにキッドの要求を全面的に飲む」の二択のみだ。

正直、ちよつと自分のやっつてることも悪役じみてるよなーと思うキッドである。

その時。

「……なんだ、あれは……飛空船？」

船員の一人がぼつりと漏らした言葉に、騎操士の本能がざわめいた。

飛空船、と疑問げに呟いたことからして空を飛ぶもの。

そして、飛空船そのものも、あるいは空を飛ぶ魔獣すら見慣れているだろう船員がお特定できないものとはいいたい。

魔獣にあらず。

飛空船にもあらず。

しかして戦場に足を踏み入れるような、自らの戦闘力への自負。

キッドは、銀鳳騎士団はそれに心当たりがなかったか。

かつて、クシエペルカの地で見えた、異形にして最強の存在に、心当たりはなかったか。

「なんだ……なんだあれは……!?!」

「魔獣!?! 大きすぎるぞ……!?!」

「やっぱりか……ヴィーヴィル!」

やはり、趣味が悪い。その一言に尽きる。

振り向いた窓の外に見えた悪夢のような造形に、キッドは思わず言葉を漏らした。

飛空船に戦闘能力を持たせるのはいいとして、なぜ龍の首など据え付ける必要があったのか。

キッドの脳内エルネステイが「それは、カッコいいからです!」と叫び、「カッコイイなら仕方ないよね」と脳内アグリがグランレオンを吠えさせる。

やっぱり一線越えてるやつらの考えることはわけがわからない、と思いつながらもキツドの体は自然と動く。この好機にしてピンチ、逃がす理由はどこにもなかった。

大気圧推進の魔法を即座に発動。ホーガラに刃を突きつけていた兵士を蹴り飛ばし、ホーガラを確保。ヴィーヴィル名物の火炎魔法がこつちを狙っている気がしたので、そのまま最速での帰還を選択。艦橋の窓を突き破って空へと飛び出し、魔法の補佐によって壁を、船体から突き出た構造物を足場に目指すは突入地点。黄金の鬘号から放たれたミッシレジャベリンの突き立つ場。

「……いよしー ジャベリンの切り離しと巻き上げ開始！」

風より早く飛びぬけて、掴んだ銀線神経に命令を伝達。仲間たちがハルピユイアを連れてすでに戻ったことは確実な程度の時間は経っている。長居は無用と飛んで戻ったその直後、装甲で覆われた船腹が赤く光を放ち、炎が突き抜けた。

間違いない、ヴィーヴィルの砲撃だ。

「マジかよ……相変わらずとんでもない威力だな!? とにかく、逃げるしかねえ！」
 「メインシステム、パイロットデータ、認証開始。——おかえりなさい、キッド様」
 「……あれ、こんな音声パターンあったっけ？」

とりあえず、巻き戻される銀線神経の勢いに乗ってうっかりツェンドリンブルのコックピットに入ったところ、相変わらずエレオノーラ女王の声が使われているキッド専用

ナビゲート音声が届還を歓迎してくれる。

なんかいままで聞いたことがない再生パターンだったような気もするが、そんなことを気にしている場合ではない。

他の音声と違って妙に情念が籠っていたように聞こえたが、きつと気のせいだと思いつつ。なんかちよつと怖かったし。

空にそびえる偉容を示していた重装甲船も、ヴィーヴィルの前では儂い獲物。

厚い装甲も意味をなさないことは、今まさに燃え落ちていく様が証明だ。

かつて倒したはずの邪竜が、ここに蘇った。

欲望と謎の渦巻く浮遊大陸に今、混乱と混沌の嵐が吹き荒れる。



「おお、嵐の壁を抜けたと思つたら、さつそく目の前に見えてきましたね。先輩、浮遊大陸は本当にあつたんですよ！」

「絶対言うと思つたよエルくん。……それにしてもここまで大変だったなあ。なんかあれとは雰囲気の違い空飛ぶ島がたくさんある変な空域に迷い込んだじゃつたし。騎空団の人たちにはすつごくお世話になつたし、アディちゃんによく似た声のアイドルの子も

いたし」

「なんだか他人みたいなのがしなかったな」

「ふむ、あれが空の大地……：我らが乗っても落ちないだろうか」

「心配すんなって、もし何かあってもエルとアグリが助けてくれるさ。あいつら空飛べるし！」

かくて役者は揃いつつ、空に浮かぶ大地の運命はますますの荒れ模様 to 苛まれよう to していた。

「余裕もあるし、ヘルヴィもない……！　　もしや、開拓の大チャンス……!?!」

「あ、先輩。『もしアグリがまた余計なこと企んだらこれで縛り上げておいて』ってヘルヴィさんからロープ預かってるんで、おとなしくしててくださいいね」

「おのれヘルヴィ！　遠く離れてても俺の動きを先読みしやがって！」

番外編 エルくんに似合う服を想像してみてください

「私、女の子の服を着たエルくんが見たいんです！」

「君は何を言っているんだ、アディちゃん」

思わず真顔で聞き返した俺を、一体誰が責められよう。

ある日の昼間、銀鳳騎士団のアジトたるオルヴェシウス砦にて。

唐突に俺の部屋を訪ね、相談があると言い、真剣な表情のアディちゃんが開口一番に放ったのが、この言葉だった。

「聞いてくださいよ先輩！ エルくんはかわいいですよね！」

「まあ、整った顔立ちだしまだに女の子かと思うことさえあるのは、客観的な事実だね」

「つまり！ エルくんがかわいい女の子の服を着たら、かわいい×かわいい＝破壊力！

でもっとかわいい！ でしよう!？」

「いや、その理屈はおかしい」

「というわけで、すでに用意してきました！ このドレスをエルくんに着せてください

！先輩の頼みならイけます！」

「ダメだ、この子もうこつちの話を聞いてねえ」

ハスハスと鼻息荒く、どこからともなく青い生地ドレスを引つ張り出して迫りくるアデイちゃんの目には、きつと俺の姿ではなくこのドレスを着たエルくんしか映っていない。

ウソみたいだろ。アデイちゃんが部屋に来てからまだ一分と経ってないんだぜ。

……アデイちゃんてば、まともに相手するのがめっちゃくちや怖い類の存在になり果つつつあるんですが。

「というか、アデイちゃんが直接エルくんに頼めばいいんじゃない？ アデイちゃんからのお願いなら普通に聞いてくれると思うんだけど」

「……ダメでした。さすがに恥ずかしい、って断られたんです」

「おいちよつと待てアデイちゃん、君が頼んで断られるようなことがなぜ俺だと通ると思っただんだ。ねえ、ねえ!？」

そしてアデイちゃんの中における俺はどういう評価を受けているんだろう。

エルくんは俺のお願いだったら恥ずかしい女装もしてくれるってのかオイ。

……してくれる気がするなあ。代わりに幻晶騎士の模擬戦とか、新規幻晶獣機的设计建造運用とか要求されそうだけど。最近、エルくんが俺を見る目に「そろそろ恐竜型作

らないんですか？」的なオーラを感じます。

いやだなあ……ドレスを着て俺に顎クイしながら模擬戦しましよ、とか耳元で囁くエルくん、やだなあ……。だって、そんなことされたらうっかり頷いちやいそうだし。

「というところで、お願いします！ 実はもうエルくんをこの部屋に呼び出してあるんで！」

「ナチュラルに退路断ちやがったなこの子」

「私はここからこっさり見てるんで、頼みますね！」

「そそくさと人の部屋のクローゼットに潜り込むのはやめた方がいいよアディちゃん」

その後、躊躇いなく部屋に備え付けのクローゼットに入り、扉を締め切らずに隙間を開けてスタンバイするアディちゃん。いいのか、それで。いや、よくないだろ。

いかん、いい加減なんとかしないと……このままではアディちゃんが貴腐人にまで急速な進化を遂げてしまう……！

——コンコン

「お呼びですか先輩何の御用ですか先輩先輩から僕を呼び出すなんて珍しいですねもしかしてまた新しい幻晶騎士ですか一枚噛ませてくださいよもうすぐ例の魔王獣から取ってきた触媒結晶を使ったエーテルリアクタ作りますからイカルガ並みの出力の機体を一緒に設計しましょういつぞやのエクスプロージョンを応用した収束荷電エーテ

ル砲とか実装しましょうかこんにちは！」

「早口すげえ」

俺がこの世で最も恐れる物。

強大な魔獣でも、ヘルヴィの雷でも、畑を荒らす天災害獣でも、スナック感覚で先王陛下から頼まれるおつかいでもない、「テンション上がりきったエルくん」が襲来した。きらつきらと輝く瞳。一応ノックはしたものの、当たり前のように返事を待たず部屋の中へ入ってきて怒涛の勢いでまくしたてながらずんずんと迫ってきてこっちの手を両手で握り締めながらのけぞる俺を追い詰めるように、椅子の上に膝を載せてなお迫ってくるエルくん。顔が近い。

この時点でクローゼットの隙間から妖気が溢れてきたような気がしたけど、エルくんからは見えない位置だから気付かない模様。

これはいかん。まずエルくんを落ち着かせないと、このまま昼から朝まで幻晶騎士談義と設計に関する打ち合わせで潰れかねない。過去何度か、この状態のエルくとそんなことになったしね！

「まあまあ、落ち着いてくれエルくん。まだ出来てないエーテルリアクタの扱いについては、誰の管轄になるかも含めてまた今度話し合おう。俺以外にも有望なナイトランナーとか色々いるんだしそっちに任せる方向で、ね？ あと新機体の開発も今はなし

だ。いまはグランレオン改修プランを進めてるだろう。まずはそっちを終わらせようじゃないか」

「ああ、あの各関節の可動範囲を広げるプランですね。……関節をあんな風にいろんな方向へ動くようにして、ナニをするつもりなんですか？ うふふ♡」

よし、話題の転換成功。エルくんも少しだけ落ち着いてくれたようだ。

……ちよくちよくエルくんにも相談して話を進めているグランレオン改修プランに興味津々なようで、それはそれで心配だけど。

うつとりと微笑みながら、俺の唇をつんつんと指でつついてくる。そんなエルくんの肩越しに見えるクロローゼットが闇のオーラを漏らしつつカタカタと小刻みに揺れている気がするけど、気にしない。気にしないっいたら気にしない。

「……あ、そうだ！ 実はエルくんにお願いがあつてね」

「はい。先輩のお願いならなんでも聞きますよ」

だけど、話は進めた方がいいよね！ 多少唐突で強引な気がするけど、そんなことにこだわっていられるか！ なんかもう挟み撃ちで命が危ないしね！

……銀鳳騎士団の、拠点の、自分の部屋で、なんでこんな不安に苛まれなきやいけないのかは考えないようにしよう。悲しくなる。あと、これが終わったら畑に癒してもらおう。最近畑の片隅に作ったハーブ園直送のハーブティでも飲もうか。

「実は、エルくんに着て欲しい服があるんだよ。はい、これ」

「はい！ これを着ればいい……ん……です、ね？」

無だ。心を無にするのだ。

部屋を訪ねてきた男の子に女物のドレスを差し出すだけの機械になるのだ。そう思
い込まなければ心が死ぬ。

「自分を慕ってくるかわいい後輩（男）に女物のドレスを着てもらおうとする」人間な
んで、ここにはいない……！

服を受け取るまでの笑顔が一転、きよとんとしたあとにだんだん赤くなっていくエル
くんを見ても、何も感じるな……！ それら全てが相変わらず俺の膝の上でされている
という事実を無視するのだ……！

「……これを、着る……んですか？」

「ウン、オネガイ」

俺は機械……口から出るのはただの駆動音……！

とか思っている、しばらく考え込んでいたエルくんがぴよこんと俺の膝から降り
た。すすす、とそのままなんかベッドの方へ行き、顔だけ振り向く。

首の動きに続いてさらりと揺れる銀の髪。その隙間から覗く青い瞳が恥ずかしそう
に揺らめいて。

「……あっち、向いててください。着替えますから」

「えっ」

……なぜ俺は、自室で、エルくんが、服を脱いで女物のドレスを着る衣擦れの音とかを背中で聞かなきやいけないうらさう。ちよつとドキドキしてるのが我ながら辛い。なんだこの状況と感情。

あまりに難解な哲学的命題に直面し、俺の心は宇宙と直結しそうになっていた。ああ、時が見える……。

あと、クローゼットの方から血の匂いが漂ってくるよーな。服には血をつけないようにしてくれると嬉しいなあ……。

「——もういいですよ、先輩」

「アツハイ」

啓蒙を高めて宇宙からの電波の受信に努めていると、準備が整ったようです。

どう転ぶにしてもヤダなあ振り向きたくないなあと思いつながら、それでも覚悟を決めて振り返り。

——女神が、いる。

その光景を一目見て、脳はそう判断を下した。なお、「Gの泉の」という枕詞はつかない。

そこにいるのがエルくんだと理解している。エルくんは男だということも知っている。それでありながら目の前にいるのは紛れもなく美女である、という脳の判断と食い違い、なんか処理しきれなくなったような空白に、息が詰まった。

アデイちゃんが持つてきたのはドレス一着。化粧も特にしていないし、体型を隠すようなものでもない。

……なのに、ちよつと照れて落ち着かない様子でくるくると回って自分の様子を見ようとしているエルくんがこんなにかわいく見えるのはなぜなんですかねえ……。

「……ふふつ、変な感じです。ちよつとすーすーします。……先輩、似合ってますか？」
「ノーコメントで」

俺の脳内に住まうナニカが「こんなにかわいい子が女の子なわけがない！」と叫んだような気もするけど、ノーコメントで。今不用意に口を開くと、大変なことを口走ってしまいそうな気がしてならねえ。

掃きだめに鶴というか、このままお貴族様方の社交界に出ても通じそうなエルくんの姿、どうしろってんだよオイ……。

「……あまり、じつと見ないでください。これでも恥ずかしいんですよ?」

「え、そうなの?」

「そうですっ。先輩の頼みだから、特別なんです」

「アデイちゃんに女装を頼まれたときは断ったって聞いたけど」

「それは……アデイの前では、かわいいよりもカッコいいと思ってもらいたいので。幻晶騎士みたいにな」

その言葉、アデイちゃんが聞けば喜ぶだろう。なんかさつきからクローゼットの中が静かだけど。

あと、解釈によつては「アデイちゃんにはカッコいいと思われないけど、俺にはかわいと思われたい」みたいな言い方は誤解を招くぞエルくん。

この一件はアデイちゃんの野望と欲望によつて始まったもので、エルくんがこうしてドレスを着た以上既に目標は達成できたといえる。

で、このあとはどうするつもりなんだろう。なんかさつきからおとなしい気がするけど、クローゼットの中のアデイちゃんが飛び出してきてエルくんをベッドに押し倒したりするんだろうか。そうになったら俺は黙って部屋を出て明日の昼くらいまで近づかな

い気んでいるけど、この部屋でつてのは勘弁して欲しいなあ……。

でも、エルくんを抱えてくんくんはすはすしながら部屋に拉致つていくアディちゃん
の姿が目撃されたら真面目に事案だよなあ……。

くるんくるん、ひらんひらんとドレスの裾をつまんでスカート
の動きを珍しそうに堪能しているエルくんのぱっくり空いた背中とか見て、
これからの展開がどうなるのかわからず途方に暮れていた、そんなとき。

——カンカンカンカンカンカンカン!!

「!」

「半鐘の連打……魔獣の襲撃!」

突如、オルヴェシウス砦に鳴り響いた鐘の音。

火急を知らせる連打音が意味するものは、「近隣に魔獣の襲撃発生」。騎操士として、
緊急出撃を要するサインだった。

フレメヴィーラ王国の騎操士ならば聞き慣れたもので、反射的に体が臨戦態勢へと移
行する。速やかに格納庫へと走り、幻晶騎士で出撃しなければ。

「先輩!」

「ああ、エルくん……つてちよつと待つて! エルくん待つて! その服で行くつもり

!? ちょっとー! 魔法使って飛んでいかないでー!?

……なんだけど、ドレス姿のまま行くのはどうかと思うよエルくん!?

「親方! 状況は!?

「魔獣の襲撃場所は近くの村だ! 他の駐留地にも話に行ってるだろうが、おそらくここから俺たちが飛んでいくのが一番早え。イカルガはいつでも出られるから、行ってこい銀色……坊……主……?」

「ありがとうございます!」

「えっ」

「いま、ドレス着た女の子が飛んでいかなかった?」

「なんかめちやくちやかわいかったような」

「スカート、ひらつて……」

「ああ、もう……!」

慌てて駆け込んだ格納庫に満ちるざわめきは、普段の喧騒とも出撃前のあわただしきともなんか違ってました。さもありません。最後にちらっと背中が見えたエルくんは、ドレス姿のままスカートをつまんで魔法まで使ってふわりと飛び上がり、イカルガのコックピットに飛び込んでいた。なにあの絵になる姿。

一瞬のことだったので整備士のみんなもはつきりとは見ていなかったらしく、「なんかエルくんがまた変なことした」くらいにしか思われていないようだ。あるいは、ドレスがあまりに似合っていて違和感なかったとか。……ありえるなあ。

『先輩！ 魔獣が襲撃している村の場所は聞きました！ 時間がないのでまずは僕が急行します！ ついてきてください！』

「アツハイ。親方、グランレオン出せる？」

「おう。最近つけたマジウスジェットスラストの調整も問題ねえ。あれを使えば空を飛んでいく銀色坊主にもそう遅れはしないだろうよ」

普通、幻晶騎士に乗るときは軽装鎧を身に着ける。

操縦の振動と衝撃と、幻晶騎士を降りた後の活動時に身を守るためだ。

今のエルくんは急いでいたためそれらを身に着けていないわけでもあるし、誰かしらついて行かなければならない。

トウエディアアーネも続々飛び立つだろうけど、まだ騎操士が到着していないからとりあえず俺が最速でついていくしかない。こういうとき、ガルダウィングは速くていいんだけど武装が少ないからね。

エルくんにさんざんねだられていて、最近マジウスジェットスラストを実装したグランレオンで突っ走ることにしました。

日はまだ高い。今日はよく晴れているから空は青く、速いわ高いわで飛行機雲まで引いているイカルガの軌跡を走って追いかけているが、俺はまたきつとロクでもないことになるんだろうな、という予知にすら近い予想を嘯みしめていた。



「ふう。なかなかイキのいい魔獣たちでした」

「ほとんどエルくんが一人でひき肉にしたけどね」

戦闘自体は、割とあっさり終わった。

村を襲撃していた魔獣は獣型の群れ。決闘級魔獣が数匹とその他多数の小型魔獣。真つ先に駆け付けたエルくんが上空から魔導兵装で決闘級魔獣をさっそく丸焼きに変え、地上に降りては近づいてくる小型魔獣を斬り飛ばし蹴り飛ばし、執月之手で引きずり倒し、と俺が村にたどり着く前からすでに決着はつきかけていた。一応、俺も残った決闘級魔獣にトドメ刺したり、畑を荒らそうとしてたやつらを念入りに食いちぎったりしておきました。今も魔獣の血がだらだら垂れてる口回りの掃除が大変そうだ。

うーん、いまごろ後続の銀鳳騎士団がこっちに向かってるだろうに、もう片付いちやった。

まあ、被害の確認やら増援の魔獣の警戒、復旧作業なんかが残っていてどう転んでも人手が必要だから、いいんだけど。

「ありがとうございます！　ありがとうございます騎操士様……！」

「あ、あの紋章……まさか、噂の銀鳳騎士団!？」

「近所にいるとは聞いてたけど、まさか来てくれるなんて……！」

決着がついたことを察してか、家の中に隠れていた村の人たちがわらわらと出てきて、イカルガの周りに集まりだした。

イカルガはどこから見ても異形で、なおかつ顔が怖いから噂に聞いている程度でも即わかるだろう。しかも今回は紛れもなく村の救世主なわけで、そういう立場としてみるといかつきもまたこの上なく頼もしく見えるもの。人々の称賛の声はどんどん大きくなっていく。

そして、こうなると騎操士はコックピットから出て笑顔を見せたり手を振ったりしてより一層安心できるよう慰撫すると相場が決まっている。吟遊詩人なら話のクライマックスに持ってくるハッピーエンドのシーンで、エルくんもこれまでこんな感じを出撃したときにはそうして応えてきた。

んだけど。

「……あれ？　エルくんって確かいま……！」

「やーやー、どうもどうもー」

ガコン、と開くイカルガのコックピット。

そこからひよこりと現れる銀の髪と整った顔立ち。それを見て一層盛り上がる村人たちの声と。

「よいしょ、っと」

すると出てきた全身は。

当然のように出撃した時と変わらずドレス姿で。

「えっ」

村に、沈黙が、満ちた……！

移動と戦闘で時間がたち、今は夕暮れ、空が茜に染まるころ。

村人たちに対して紅い太陽を背負う位置関係にあるエルくんはまるで後光がさしているかのように、風になびく髪の一筋一筋がきらめいている。

「みなさーん、ご無事ですかー？ これから銀鳳騎士団の幻晶騎士が続々到着するので、復旧作業に幻晶騎士の力が必要な場合は言ってくださいねー」

村の無事を確認して、ほっと安心した笑顔。かけられる優しい言葉。

もともと整ったエルくんの容姿がアデイちゃんセレクトのドレスで一層際立ち、さながら天使か女神といった有様で。

「銀鳳騎士団の、団長さん……だよな？ 確か、男だつて……」

「いや待て。俺は銀鳳騎士団物語の劇を見たことがある。劇の中で団長は……女だつた！」

「あ、う……？？」

あかーん!?

なんかエルくん女の子説が急速に認知されつつある……！ 確かにその説は、いまでもたまに銀鳳騎士団内で持ち上がる学説だけど！

あと、ついでに今のエルくんの笑顔で村の男の子数人がときめいてしまった気が！

このままでと彼らの初恋がエルくんになってしまう。目を覚ませフレメヴィーラ王国の性癖がエルくんに侵略されてるぞ。

ちなみに、幻晶騎士はとつくに征服されている。

それこそ、決闘級魔獣複数に囲まれたとき以上の戦慄が俺の体を走り抜ける。エルくん、幻晶騎士のみならず性癖の面においてもこの国に革命を巻き起こすつもりなのか。それも、幻晶騎士の時と同じく特に何の自覚もなしに。

いまさらながら、エルくんつてなにもかもすげーなど呆然としていた俺。

当のエルくんは周囲のそんな反応に気付いた様子もなく、イカルガの肩に上ってから村人たちのもとへ降りようとして。

おそらく、自分が今ドレス姿だということを全く自覚しておらず。

「——あれ？」

裾を踏み、バランスを崩した。

幻晶騎士の全高は10m級。膝立ちになった待機状態でも数mは優にある。そんなところでバランスを崩せば、どうなるか。幻晶騎士の開発現場でもある銀鳳騎士団においても常に嚴重な注意の対象となっている危険であり、普段ならば目隠ししてでも足を滑らせたりしないだろうエルくんが、常ならぬ衣装によって予想外の事態に陥り、表情はきよとんとしたまま何が起こったかわからない様子で、俺の目には妙にゆっくりと落ちていくように見えて。

「エルくん!!!」

俺もエルくん同様、グランレオンのコックピットから顔を出していたことが幸いし

た。

アデイちゃんたちほどではないものの、エルくんに教わって練習した身体強化魔法を瞬時に最大出力で発動。グランレオンの鼻先を蹴って、ほとんど一直線にイカルガとの間数メートルの距離を飛び。

伸ばした手は、幸いエルくんの腕に届く。地面まではもうわずか。それでも残った勢いで体を丸めて抱え込み、気付けばぐるりと一回転。ずん、と地に着いた足から返ってくる反動は強く、重い。

が、代償はそれだけ。エルくんの体は地に落ちることなく、俺の腕の中で目を丸くしてこつちちを見て……なに？ 「俺の腕の中で」？

「おお……！ 騎操士様が団長様を助けたぞ！」

「すごい……おひめさまみたい！」

「えっ」

……現在の状況を説明しよう。

時は夕刻、ロマンチックな茜色の世界。

場所は村人の集まる中心、イカルガの前。

中央には俺とエルくん。イカルガの上から転げ落ちかけたところを助け、なんやかんやの末にどういう物理法則のもつれがあったのか、エルくんをお姫様抱っこした形にな

り。

ふわり、と一拍遅れて降りるスカート裾が長い。

「あ、あはは……なんだか、恥ずかしいですね」

当のエルくんは、よく似合うドレス姿の美少女フォームなわけでした。

夕暮れ空の中、落ちてくる美少女とそれを救う騎操士の図、完成である。

なお、登場人物はどっちも男の模様。

「……エルくん、さつきからやんややんや盛り上がりまくってる村の人たちを収める方法、ある？」

「時間に任せるしかないかと」

「ですよねー……」

人の勢いというのは、幻晶騎士でも止められない。

エルくんを助けたことに後悔はないけど、何とかしてほしい状況だけが残ったことに頭痛を覚えつつ、置き場に困ったのだろう手を首へ回そうとしてくるエルくんを誰か何とかしてください。

俺たちをはやし立てながら、礼だ宴だと安心して騒ぐ村人たちに水を差すことは、で

きそうもなかった。



なお、これだけの騒ぎの最中に事の発端であるアディちゃんがなにをしていたのかという。

「ふ、ふひひ……エルくん、かわいすぎい……♡」

どうやら女装エルくんを一目見ただけで脳が限界を迎え、クローゼットの中で昇天してたらしいです。皆に帰って着替えるんでクローゼット開けたら鼻の下から顎のあたりまでかびかびになった鼻血で赤黒く染めたアディちゃんが転がり出てきた時の俺の恐怖を、誰か癒してくれ。

「先輩！ 聞きましたよ先輩！ 最近、例の銀鳳騎士団物語の劇で『実は銀鳳騎士団団長は女の子で、兄のように慕っている団員にそのことがバレてなんやかんやの末に団長がドレスを着て舞踏会に参加して兄枠の団員と一緒に踊る』シーンが追加されたって！ やっぱ先輩のことは放っておけません、決闘です!!」

「今度ばかりはアディちゃんのせいだよね!? さすがに受けて立つぞチクショウ!」

「もしくは、エルくんはこの服を着せてくれたら許してあげます!」

「なにそのミニスカ和服（狐のお面つき）!?! どの戦艦!?!」

「この、なんか十字の盾つきのぴっちりスーツとか、襟の辺りを持ち上げると音がよく聞こえそうな服でもいいですよ?」

「エルくんの声と髪型に似合いそうなチョイスしてんじやありません」



「……というわけで、昨今の銀鳳騎士団物語ブームのせいもあって噂が広まりつつあるので、発生源である村に行って噂の火消しをします! しばらく泊まり込みで!」
「とかなんとか言って、村に入り浸って畑広げるつもりだったのはお見通しだから、ダメよ」

「くそうヘルヴィにはノータイムでバレてやがる!?!」

番外編 ドキツ☆ 乙女だらけの銀鳳騎士団物語

「おはようございます、先輩！」

「うん、おはようエルくん」

違和感を覚えた。

いつもと変わらない、オルヴェシウス砦の朝。

実家から出勤してきたエルくとあいさつを交わすただそれだけのことなのに、何かが違うという確信にも似た直感に苛まれる。

はて、何かおかしいなところはあっただろうか。

朝っぱらから眩しいくらいに笑顔を向けて横を歩くエルくんの態度にいつもと違うところはない。ただいつも通り「どこからどう見ても女の子っぽい」かわいらしさなだけだ。

「ああっ！先輩がエルといちゃいちゃしてる！」

「してないしてない」

目ざとく見つけたアディちゃんがまなじりを吊り上げて張り合ってくるのもよくあることだ。

……あるはずなんだけど、ちよつと待つてくれないか。

あのアデイちゃん、なんか変じゃね？

というかアレ、本当にアデイちゃん？ キッドくんじゃなくて？ なんとなくいつもより少し背が高い気がするし、ロングヘアでこそあるもののなんとなく精悍でイケメンな顔つきだし、体つきもがっしりしてるような。

それに、「エル」？ あのアデイちゃんが、エルくんのことを「エル」と呼び捨てに……？

でも、キッドくんは今クシエペルカにいる。

それなのにあのアデイちゃんはまるでキッドくんみたいなわけで……？ うん？

その時俺は、猛烈に嫌な予感がした。

こう、何か致命的な間違いをしたまま設計を進めてしまったみたいというか、それが試験でも見つからず本番運用のためのステータスに切り替えた瞬間に現れて取り返しのつかない状態に陥っているような気がするというか。

「なんだなんだ、また朝から騒ぎか？」

「あつ、ヘルヴィさん！」

そんな俺たちのもとに、さらなる集団がやってきた。

……男が一人、女が二人。

最初に声をかけてきた、筋骨隆々にうつつら褐色肌のマツシヴなイケメンを、エルくんが「ヘルヴィ」と呼んで。

「相変わらず仲がいい。だがエルネステイはもちろん、みな立場というものもあるのだから、ほどほどにな」

「そこまで気にしなくていいんじゃない？ 私たちはもともとこんなだったでしょう」

長い白髪を優雅に揺らす、「女騎士」を絵に描いたような美人。なぜ俺は、彼女のことを「エドガー」だと思っただろう。

そして当たり前のように金髪ツインテールが靡く小柄なもう一人の女の子を見て「ディートリヒはやっぱり軽いなあ」という印象を抱くのか。

「……………」

「？ 何ですか、先輩？」

すつと視線を横に。エルくんを見る。

頭のでっぺんからつま先まで、いつもと大して変わらない小柄な体格。

「可憐、と評して誰も否定しないだろう整った顔立ち。

パワーは魔法に頼るので肉付きは騎操士の標準よりも少なくほっそりとした腕と足。だがそこに、俺がこれまで知っているエルくんには決してなかつたうつつすらとした丸みがあつて。

そして。

胸元にも確かな盛り上がりがあることは間違いない。

腰回りはいつものショートパンツかと思つていたら、股部分がぐるりとながつてい
る、つまりはミニスカートで。

わー、良く似合つてるな……。。

「…………ふう」

俺は、意識を手放した。

「先輩……………!?!」

なお、この後しばらくして目覚めたとき、俺の頭はエルくんならぬ「エルちゃん」の
膝枕の上にあつたとき。



狂ったのは世界なのか俺の頭なのか。

ある朝目が覚めると、俺は自分の周りの人たちが軒並み性別逆転していることを発見した。

うっそだろオイ。

……うん、いつそ俺の精神が狂ったのだと言ってくれ。

ヘルヴィの二の腕がたくましい上腕二頭筋に覆われていることとか、エドガーがめちゃくちゃ美人な女騎士になってることとか、ディートリヒがツンデレ金髪ツインテールと化していることを抱えたまま生きていくのって辛すぎると思います！

あと、バトソンくんはおさげ髪が似合う素朴なドワーフ少女になっていて、ダーヴィド親方はタンクトップオンリーでなんかもう色々見えそうになるおっぱい大きい褐色美人になってました。ドワーフ特有の身長の高さで、合法無防備口リ巨乳とか、属性盛りすぎじゃなかるうか。

……いつそ殺せ。

ボロが出ないよう息をひそめて銀鳳騎士団内の様子を観察した結果、大体こんな感じ

だった。

この調子だとオルヴェシウス砦の外もどうなっているか分かったものではないので、正直あまり知りたくない。

ちなみに畑の方にもばつちり影響出ていて、雌株と雌株に分かれている作物はきつちり雌雄逆転していて作付け計画と一緒に俺の頭も狂いそうになった。いや、もう狂ってるのかもしれないねアハハハ……。

人間関係はあまり変わっていないようで、ヘルヴィがエドガーにちよつかいを出していたりするのはいつも通り。なので対人面での距離感に悩む必要はないんだけど、そもその絵面的な違和感が恐ろしいほどに俺を苛んでくる。

……くそう、ダーヴィド親方の脇がチラチラ見えてドキドキするとか死にそうだよ！



「アグリ、すまないが白鷲騎士団の演習相手を頼みたい。今日はカルデイヘッドを相手に対法撃戦の訓練をさせてもらえないか」

「アツハイ」

エドガーは、こうして時々俺を騎士団の模擬戦相手に駆り出すことがある。

通常の訓練とは毛色の違った経験を積ませることで、自分が率いる騎士団の技量向上に熱心だ。

もともとよくあつたことで、でも今のエドガーが屈強なヘルヴィ以下男女入り乱れる白鷲騎士団で襲い掛かってくるんだから頭が痛い。

「助かる。お前のおかげで、白鷲騎士団はどんな魔獣と戦っても『この前戦つたグランレオンよりマシ』と言って怯むことがなくなつた。その礼に、今度一杯おごらせてくれ」
「あー、うん。気にしなくていいよ。ヘルヴィー！ 今度エドガーがおごつてくれるらしいから一緒に来てー！」

しかしそこは頼れる騎士団長、エドガー。苦勞を掛けたら勞いも忘れることはなく、同期の気安さで肩など組みながらのお誘いは普段の堅苦しさが少しだけ取れていて親しみやすい。

……それによつて、これまで押し付けられてきた固くてパツパツの大胸筋が大きくも柔らかいおっぱいになつたことによつて、俺の精神が破壊されかけたりもするんだけどね！

そして、二人だけだといろいろ不安なのでヘルヴィも呼ぶことにしました。

よし、適当にエドガーとヘルヴィを酔わせて二人きりにしてとんずらしよう。そして翌日「ゆうべは おたのしみでしたね」とか言うんだ。

「さあ、今日も勝負と行こうか、アグリ！ グランレオンで相手を頼むよ！」
「なんでやねんデイトリヒ」

一方、少々変化が見られるのがデイトリヒだ。

エドガーは体格こそ紛れもない女性のものになっているが、身長などは変わらない。それに対してデイトリヒはなんかもう見るからに「女の子」になっていた。エルくんほどではないが低めの背丈。こうして模擬戦を挑んで来るのはいいとして、妙にパーソナルスペースが近いせいで俺を見上げるような姿勢になっている。

少し勝気な眼差しは変わらず、それがまあ金髪ツインテールに似合うこと似合うこと。

颯爽とした身のこなしは踊るようにツインテールを靡かせて、もしやデイトリヒは女の子に生まれた方がより一層モテたのでは、などと思ってしまう。

「隊長どの、紅隼騎士団一同、準備整いました」

「うむ、ありがとうゴンゾース。というわけで行くぞ、アグリ」

ちなみに、予想通り紅隼騎士団の新顔であるゴンゾースくんも女の子になってました。

ライヒアラ卒業したてな禿頭の巨漢だったゴンゾースくんが、エルくんよりも小柄で

長い黒髪を揺らす幼女化している落差に、姿を見るたび眩暈がするけどな！

「親方ー、エルくんの承認もらった図面持つてきたよー」

「おう、来たか！ ちよつと見せろ！」

ダーヴィド親方とも、これまで通りに仕事をしている。

書いた図面、必要とされる修理改修改善改造、そういつたあれこれを相談しては槌を片手に実践し、失敗しては挑戦しての繰り返しが銀鳳騎士団鍛冶師隊のお仕事で、俺は基本的に騎操士なのにどういいうわけか鍛冶師隊と仕事することがエルくんに次いで多い。

「……ほお、カルデイヘッドの改修か。こりやまた随分と余裕を持った設計じゃねえか、ええ？ 何企んでやがるんだ」

「いやあ、これまで得られた知見をもとに整備性とか重視しただけだよ？」

「はっはっは、まあいいぜ。今はこれ以上聞かずにいておいてやるよ。どうせ、銀色坊主が好むものになりそうだしな」

がしっ、と肩を組んで豪快に笑う親方。

うん、これまで通りだね。男だった時と変わらない。

……ただ、今の姿になると首元だるんだるんのタンクトップから防御力ゼロであれこ

れちらほら見えそうになるのがなんかさあ！

褐色の肌がこれまでは岩みたいだったのに、なんかはちきれそうになってるんだけど！

鍛冶仕事でかいた汗の匂いが、なんか今はそんなにいやじゃないんだけど！

そういう風に思う自分が死ぬほど頭痛いよチクショウ！

ダーヴィド親方はああ見えて俺らと同年だし、ドワーフの人たちって男性は実年齢より年上に、女性は実年齢より年下に見えるし、女になった親方はなんかもう色々大きくて……ね？

「ロリ巨乳なダーヴィド親方」とか、字面だけで発狂ものだよ……。

とはいえ、この程度の変化は序の口。

変わったことは大変頭が痛い、何より恐ろしいのは「変わっていないもの」だ。

「せんぱい♡」

「……………はい」

耳から入って脳まで蕩けそうなほどに甘い。

聞き慣れた響きが少し違って届くそれこそは、女の子となったエルくんの声だった。ぶつちやけ、他のメンバーが声帯ごと変わってるっぽいのに対してエルくんはあまり変わっていない。具体的に言うくと、エルくんだけ担当声優さんが変わっていない感じ。ただ、後輩感のマシマシ。そのうち前髪伸びて片目を隠すんじゃないかなろうか。

「これ！ これ見てください！ また新しい装備を考えてみたんです！ 今度はですね、先輩のカルデイヘッドの両肩に折り畳み式の超火力爆裂法撃術式内蔵型キャノンとか、いいと思うんです！」

「いつかきつとエルくんがそれを持ち出してくると思ってた」

そんなエルくんは楽しそうに笑い、ぱたぱたと駆けてきて俺の腕に抱きつきようやくやぐ止まり、抱えていた凶面を広げて見せる。

頬を腕に擦り付けながら見上げてきた瞳に輝くのは、尽きぬ探求心とロボへの愛とうつすら狂気。いつも通りだ。

長く見続ければ吸い込まれて戻って来れない底なしの欲望渦巻く、それでいてとんでもなく美しい光。

……そして、そんなこれまで通りのエルくんのそれとちよつとだけ異なるのが、肘の辺りに感じるふにつとした柔らかさ。

髪からふわりと香るいい匂い。

しにたい。

発作的にそんなことを思って目が曇ってしまうような、美少年改め美少女なエルくん
にこれまでと全く変わらなず慕われて、俺は湧き上がる感情をどう整理すればいいのか、
いまだにさっぱりわからんのでありましたとき。

「……本当に、先輩はエルと仲いいなー」

「アデイくん目怖っ!」

あと、アデイちゃん改めアデイくんが俺を見る目が死ぬほど怖い。

どうやらこれまでエルくんと同性だったころは、あれでもまだ嫉妬パワーが抑えめ
だったらしい。いまや女の子となったエルくんからのスキンシップ混じりのアレやソ
レやが、そしてそれを受ける俺がどう映っているのかはちよつと想像したくない。

このままだと、割と真剣にエルくんを賭けた決闘とか申し込まれかねない……! !

「よしわかったさっそく親方にも見せて強度計算とかしてくるからエルくんはスクリプ
トの方を留意しておいて頼んだよ!!」

「あつ、先輩……」

ので、こうしてエルくんととの接触は最小限に抑える立ち回りを心がけております。

元からほとんど変わっていない服装プラスミニスカートなエルくんは、元と同じくら
いのスキンシップとかされたらさすがの俺もなんか大変なことになりそうだしね!

という感じできっさかエルくんを背を向けて逃げ出していたせいか。

……俺の背中を見送っていたエルくんの表情がどんどん寂しそうになっていたらしいことを、全く気付かずにいて。

きつと、それが、致命傷だった。



「ん、んーっ。あふ……さすがに眠いな」

魔法の光に照らされて、エルくん発案の装備の各部強度計算を進めていた手を止めて、ペンを置く。

椅子に座ったまま伸びをすると背中から腰のあたりからぴきぴきと痛いような気持ちいいような感覚がして、身体に溜まった疲れのほどを自覚する。

エルくんに捕捉されないよう資料を抱えて部屋に引っ込み、計算作業に没頭していたらいつの間にか夜も遅くなっていたらしい。一応夜食も持ち込んでつまんだから腹は減っていないけど、これはもうそろそろ寝た方がいいかもしれない。

キリのいいところまで来たし、これ以上根を詰めても計算結果はのたくった線だけと

いうことになりかねない。いやあ、仕事と農作業してるときだけはこの世界が俺の知ってるものと違うってことを忘れられるね。

一日ももう終わる、達成感と満足感。

あとは寝床に倒れ込むだけでいいという幸福に浸かり。

——コンコン

「はい、どうぞぞ〜」

まるで狙い澄ましたかのように。

油断と隙の極致にあつた俺はノックの主を確かめもせず反射的に招き入れる言葉を放ち。

「こんな遅くにすみません……先輩」

控えめに開いた扉の隙間から恥ずかしそうに半分だけ覗くエルくんの顔を目にして。

息が、止まった。

「ちよつと、お話しさせてもらつても……いいですか？」

「……ウン、ドウゾ」

返事をするまでに一拍の間。

その瞬きするようにならずかな時で、俺の脳内は凄まじい速度で計算が行われた。

「エルくんを、部屋に入れるべきか否か」。

こうして夜も遅くなつてから、いまだ男な俺の部屋に、いまや女の子となつたエルくんがわざわざやつてくる理由に心当たりはある。最近エルくんとの距離を取つた接し方がお気に召さなかつたからだ。これまでも、お互いの仕事の都合で顔を合わせる時間が少なくなつた時期は、こうして寝る前の時間に部屋を訪ねてきていたからわからないでもない。

ただそれは、同性だつた時の話。女の子が夜遅くに男の部屋を訪ねる。なんかもう色々とアレな想像しかできない。

いやまあ、邪推はよくないところではあるんだけど、じゃあ「エルくんが、その辺の知識がないか」「考えなしにこんなことをする子か」と考えると、答えは「否」なわけで。

つまり、「現在の状況をすべて正しく理解したうえで、さらに覚悟までキメて来ている」なんてことが……？

だが、いまさらエルくんを追い返すこともそれはそれで下策な気がする。

……だって、エルくんだし。やると決めたらやる。そう思わせるだけのスゴみがあるッ！ 下手な拒絶と刺激は、より強硬な手段に走らせることになりかねない。

「じゃあ、失礼します」

「……………」

俺が激しく考え込んでいる間に、エルくんがするりと部屋の中に入ってきた。

こちらに体を向けたまま、後ろ手に扉を閉める。

……ちなみに、そのままカギをかけられていないかめつちや耳を澄ませて気にしておいたけど、幸い杞憂に終わったらしい。セーフ。ここでもしエルくんが鍵かけていたら、なりふり構わず窓ブチ破つてでも逃げなきやならなかった。逃げ切れる気はしないけど。

が、実はそれどころではないくらい息をのむ羽目になった。

「……………かわいい寝間着だね」

「そうですか？ 先輩にそう言ってもらえると嬉しいです」

はにかむように笑うエルくんは、寝間着の裾を持って右、左と体をひねって見せてくれる。

薄い、というのが第一印象だ。

生地が薄い。安っぽいのではなく、うつすらと透けることを初めから意図したような

生地が使われているらしい。

だがあくまでも全体のベースにであって、肌の露出や透けて見える肌の部分は多くない。

せいぜいへその辺りしか生地越しに見える場所はなく、あとはフリルや刺繍がしとやかに飾る、女の子の夜の服。

それを当たり前のようにかわいく着こなすエルくん（男のときとほとんど顔が変わっていない）は何者なのかという気がしなくもないけど、まあいまさらか。

「話が、あるんだよね。まあベッドにでも座りなよ」

「はい、ありがとうございます。……じゃあ、先輩もこつちに」

「えー……」

エルくんがかわいいというかつてとの共通点をよすがに平静を少しだけ取り戻し、さりげなく自分は椅子に座ろうとしたのに機先を制された。

腰かけたベッドの隣をぼんぼんされ、仕方なしにそこへ俺も腰を下ろす。ここで強引に椅子に座れないのが俺の弱いところだ。自覚はある。

でも無理して椅子に座ったら、エルくんは俺の膝に座ってくるだろう。賭けてもいい。だからこれが最善とは言わないまでも次善なんです。

ほすんと座ったのはエルくんから体半分ほど離れた位置。

横目で見たエルくんの眉が少しだけ不満げに寄った気もするけど、俺はそれを見なかったことにする。というか、気付いたら気付いたでどうしろってんだよ！

「話というのは、他でもありません。……最近の、先輩の様子です」

「……」

そして、すぐに本題に入った。エルくんの話はいつも単刀直入だ。

並んで座る隣。さらに体を寄せ、ベッドに置いた俺の手に自分の手を重ね、身を寄せ。ヤバい逃げられない気がしてきた。

「ど、どうかした？ 別に、何も変わってないと思うけど……」

「変わりました。僕が近づくとビクつとします。今も。たくさんお話したいのに、忙しいからってすぐどこかへ行っちゃいます。なのにヘルヴィさんやアデイとはあまり変わらないどころか、むしろ一緒にいる時間が増えたって、聞きました」

ここで、ぷくつと頬の一つも膨らませて拗ねた様子であるならかわいもの。

「ただ、エルくんガチなんだよねえ……。ひやっとした風が吹いたか、と思うほどに真顔。じわじわと追い詰められて下がる俺に、その分距離を詰めてくる。最初は手を重ねていただけだったのに、いつの間にか袖をつかみ、肩に手を置き、吐息を感じてしまう距離。」

あと、試しに身をよじってみただけどビクともしない。これ確実に強化魔法使って

る。物理的に逃げられん……！

「……寂しいです。先輩と離れ離れなんて、きつともう耐えられないんです。ねえ、先輩……」

それでいて、エルくんからは闇の欲望ではなく飼い主に縋る子犬のオーラがにじみ出るんだから性質が悪い。目に涙を浮かべ、体を震わせているエルくんは思わず抱きしめたくなるような庇護欲をそそり、手が勝手に頭を撫でないようにするために必要とされる精神力は尋常なものではない。

落ち着け、落ち着くんだけ俺……！ どうせまたいつものエルくんの幻晶騎士向きの欲望がちよつと方向性を変えただけだから……！

なんて、この期に及んでも俺は甘い。

エルくんは、エルくんだけだ。だが「俺が知っているいつものエルくん」ではなく、「俺の知らない別の可能性を持って生まれた、女の子としてのエルくん」なわけだ。

「——そう思っただけです。だから」

「へ？」

声が、流れた。

エルくんの声の聞こえ方が妙な変わり方をした、と思っただけ背中を感じる柔らかさ。

ベッドの感触だ。

そしてぐいと引き上げられる腕。手首に絡みつく少しだけキツイ痛み。

……えっ。

「聞いてください、先輩。僕、考えたんです。先輩と、ずっと、ずっと一緒にいられる方法。……わかりますよね？」

「うん、待て落ち着こうエルくん冷静になるんだ人類の英知たる言葉を交わそうじゃないか交渉に応じる用意があるから互いの条件を提示して落とすどころを見つけてるんだそれが一番平和だから待つて待つてお願いだから服のボタン外さないで指先で肌などらないでええええええあふん!」

……正直、いつかこんな日がくるんじゃないかなと、思わなかったと言えば嘘になる。

自室にて、両手をワイヤーでベッドに縛り付けられてエルくんに跨られるという、絶体絶命の窮地に陥ることが、いつかあるんじゃないかな、なんて。

しにたい。

「はあ……せんぱあい♡」

「落ち着けー！ 落ち着けエルくん深呼吸ー!!」

ゆつくりと、焦らすようにボタンを外し、あらわになった俺の胸板に赤く染まった頬を寄せるエルくん。熱い吐息が胸を這い、体が跳ねるけどエルくんは離れない。

いかーん！ エルくんの目がかつてないほど幻晶騎士キメた状態になってる！ こんなのイカルガを初めて起動させたとき以来だよ!! どうなるの俺!! どうなっちゃうの!?

そつと、エルくんが俺の頬に手を添える。小さく柔らかい掌の感触が滑り、指先が耳を挟み、後ろ髪の生え際をなぞる感触にぞくぞくする。うひい。

「大丈夫です。誓います、先輩。絶対絶対、幸せにしますから……♡」

「ちよ、えつ。なんで俺の顔に手を添えるの？ なんで顔を近づけてくるの!? ねえ、ちよつとー……!!」

どんどん近づいてくるエルくんしか、もはや見えない。

これが何かの未来の暗示なのだろうかと何かを悟りながら、化粧気がほとんどないエルくんの顔貌で輝くように鮮やかな唇の紅に目を奪われながら、エルくんの「誓い」を受け入れ――



「……………ッ!!!」

目が覚めた。意識は驚くほどはつきりと覚醒し、でもまだ目は開かないまま、全身ドツと汗をかいたことを自覚した。

とびきりの悪夢が最悪の結末を迎えたかのようなこの反応。イヤになるくらいはつきり覚えている夢の内容を考えれば、さもありなんと納得がいく。

受け入れ、じゃねえよ何考えてるんだ俺。

確かにあの状況なら性別的な問題はないけど絶対一生エルくんのものにされるし、そうなる過程でアデイちゃんくんと決闘不可避だよ絶対命賭ける類のヤツだよさすがにエルくんのために本気なアデイくんちゃんに勝てる気しねーよ。

夢の中の自分が選んだ、あるいは選ばざるを得なかった未来に待つあまりの絶望に寒気がする。ドキドキを越えてバクバクと胸を内から叩く心臓の爆音に苛まれつつ、それでもあれはあくまで夢だったのだから、現実ではないのだからと少しだけ心を落ち着かせて目を開けて。

「すう……………すう……………んっ」

わー、エルくんのまつげながーい。

目蓋を開いた目の前ガチ恋距離にエルくんのあどけない寝顔が飛び込んできて、さつきまで跳ねまわっていた心臓が間違ひなく鼓動を止めた。全身汗ばむほどに燃えていた体温は氷点下まで冷え込んだ。

……え、なんで？ 夢？ 夢じゃないの？ 正夢？ 俺は、昨日の夜、一体……何を……!?

と、絶望の中で必死に記憶をたどったことまでは覚えているが、その直後あまりにあまりな状況に意識を失ってしまったらしく、しばらくしてからエルくん普通に起こされ、昨夜新型魔導兵装の設計を相談されて二人そろって寝落ちしたと思ひ出させてもらうまでほぼ死んでたのでありましたとき。

でも、夢でよかつた……！ エルくんが男の子で、本当によかつた……！



「……………」

「ちよつと、なによアグリ。人のことをそんなにじつと見て」

「いや、ヘルヴィの二の腕辺りがぶにぶにだと安心するなつて」

「……………そのぶにぶにな腕の力を思い知つときなさいよオラア!!」

「らめええええええ!! ヘルヴィのアイアンクローで頭握りつぶされたら自転車乗るのが速いスカシ気味のイケボになつちやううううううう!!」

番外編 エルくんに勝てる幻晶騎士なんてあるんだろうか

右、わずか後方。

目で見た確たる情報ではないが、ことここに至ってはそのことがはっきりと「わかる」。

彼我の機体と反応速度、間合いと次の一手とさらにその先。諸々の要素を合わせればこの期に及んで選べる道など一つしかなく、斜め右前方へとグランレオンの身を投げ出すという必然だけがそこにある。

直後、一瞬前までいた位置を燃やす豪炎。ついだとばかりに振りぬかれた銃装剣の切っ先は、ダメ押しで体をひねっていなければ確実に後ろ脚を切り飛ばしていた。

こちらが苦し紛れに放った法撃など当たるはずもない。相手は砂煙を引き連れながら機首を引き起こすことすらなく、冗談のようにこちらの手が届かない高度まで上がるのは推力方向自由自在なればこそ。

遥かな高みからこちらを見下ろす怒りの鬼面。

イカルガ。

やはり、分が悪いか。マジウスジェットスラストを実装して以来瞬間的な速度では負けていないが、相手は無尽蔵と言つていいエーテルリアクタ出力を持つ上に、その能力を十全に引き出せるだけの操縦技量を有している。

対してこちらは空も飛べない、法撃は射程、威力ともに平凡。むしろここまで戦い続けられたことこそ奇跡というか、大分甘い判定だろう。

イカルガの滞空はほんの数秒。こちらを中心とした旋回に移行してしばらく。敢えて動かさず出方をうかがうこちららのちょうど背後を通り過ぎた、その直後に急速転回。一気に距離を詰めてきた。

前に走れば追い付かれる。横に逃げても間合いのうち。反転するような時間すらなく、すなわちほぼ詰んだ。……なんて、言わせない。

グランレオン、跳躍。ただし、真上に。

いつそ体当たりすら辞さないだろう激突コースを取っていたイカルガはグランレオンの真下を潜り抜ける。……ならば！

ライオンを模した首を反り上げさせ、同時にマジウスジェットスラストを起動。空中で無理やりのけぞつた機体は地面に背を向け、ブレードと法撃用の杖を備えたグランレオンの背面をイカルガへと向ける。

交差は一瞬。それでもせめて一太刀浴びせれば、次につながる事ができる……！

出来れば、の話だ。

コックピットの中、こちらも首を反らして見た景色の中、地面スレスレを飛びカールがはまるでこちらとシンクロするように背面飛行をされていて。

両手と背部4本のサブアームがこちらに向けられているということとは。

逆る灼光が、答えだった。



「……ダメ、か。やっぱり勝てねえ！」

という妄想だったのさ！

などというのは半ば冗談で、しかし「もしもエルくんと本気でやりあうことになったら」という検討をしていたのは事実である。

エルくん操るイカルガ対俺の操るグランレオン。脳内のシミュレーションとはいえ、かなり甘めに考えてですらこれなのだから、現実になつたとしてもこれ以上に健闘できるといふことはないだろう。

こんなことを考えているのは、別にエルくんに対する謀反を企てているからとかそういう物騒な理由ではない。

いや、物騒ではあるか。いつの日か、エルくんが本気で俺と戦いたいと願う可能性。それを無視できるほど小さいと考えるには、彼の幻晶騎士愛は大きすぎる。

備えよ常に。その時がいつ訪れるかは、全く予想のしようがない。

だが、その日はいつか必ず来る。そんな予感が、ある。

……エルくんが俺を見る目、時々ねつとりとした欲望に彩られてますからね！ あれは絶対「いつか捕食してやる」って目だよ！ 結婚してからも結婚前と変わらず、アディちゃんが見るときの目と一緒だもん！

閑話休題。

とにかく、エルくとイカルガの強さの分析とその対策の確立は常に必要とされている。いろいろ考えた結果「どうあっても勝てない」という結論が出ました。まる。

で、いろいろ考えた結果「どうあっても勝てない」という結論が出ました。まる。

……いやいやいやマジでヤバイってエルくとイカルガ。

アホみたいな出力のエネルギーアクタを2基も積んでるって時点でヤバイのに、しかも騎操士がエルくん。強い×強い＝超強いみたいな頭の悪い方程式を現実のものとし

てるってんだから性質の悪さは天井知らず。

俺が主に使ってるグランレオン、ガルダウイング、カルデイヘッドで戦ったらどうなるか脳内シミュレーションしてみたけど、結果はすべて同じ「諦めたら？」状態だった。ひどい。

グランレオンは、まあ比較的善戦したと言っているだろう。なんだかんだでバランスがいいし、最初に建造しただけあつて俺も扱いに慣れてきた。改修も重ねて良い機体になつている。

が、どうしたつて地上戦用。空を飛ばれては手も足も出ないという点がいかなともしがたく、イカルガの距離からいいようにされるのがオチだった。

なら空を飛べるガルダウイングなら少しはマシかというところ、こっちはもはや戦闘にならない。

そもそもから戦闘用として設計してないので、辛うじて自衛用の武装がついている程度。巡航速度と燃費ではイカルガに勝っているけれども、戦闘機動となると翼が生む揚力に頼らないイカルガの自由度が圧倒的で、何もできずに落とされることになるだろう。

結果、少し意外ながらカルデイヘッドが最も相手をできる気がするという結論に至つた。

グランレオンと違って重装甲であり、火器も豊富。射程も長めなのでたとえイカルガが空に上がったとしても多少は追隨しての射撃が可能となる。

とはいえ、弱点もある。どうしようもない足の遅さだ。

攻撃可能な局面は多いものの、被弾数もそれに比例以上の勢いで増えていくのがカルデイヘッドの特徴。しかも相手はイカルガとくれば、数発だけでも致命傷は避けられない。

まとめると、「どうやっても勝てない」ということになる。

まじめ腐って考える前から分かっていたと言えばわかっていたことなんだけど、改めてはつきりと確定するとさすがに少しへこむ。

無論、勝負の内容が農業であつたりしたらこの命に代えても負ける気はないが、幻晶騎士での勝負となつたらそれこそエルくんだつて死に物狂いで勝ちに来る。めっちゃ笑いながら。死ぬほど楽しそうにしながら。怖い。

とりあえず大前提として第一に認識しよう。

「現行のいかなる幻晶騎士でも、エルくんには勝てない」。



『あははははははははは！ 楽しいですねえ巨人族のみなさん!!』

「ぐわああああああああ!!」

墜落するかと肝が冷えるような急降下から、完全武装で居並ぶ巨人族の膝下を滑るほどの低高度水平飛行へと移るといふゾつとするようなイカルガの動きに、何人かの巨人族がすつ転ぶ。

それでいて巨人族から伸びる手にも武器にも一つとして絡めとられることはなく、追撃として放たれた魔導兵装は活躍を彩る後方の爆風として受け取り、お返しは銃装剣からの威力控えめ法撃。こっちは巨人族の足元を的確に爆発させ、まとめて数人の巨人族が吹き飛ばされた。

さすがの頑丈さでケガの類はないようだけど、エルくん一人に対して巨人族は十数人の大立ち回り。それでいて有利は播るがずエルくんの手の中に。本当にどういう頭してるんだあの子は。

「師匠エルの力は知っていたつもりだった。だがこれだけの眼位を持つ勇者たちが、策を練ったうえで挑んでなおしかと目に捉えることさえできぬとは……」

「まあ、エルくんだしねえ」

オルヴェシウス砦から適度に離れた森の中に、カルデイヘッドで切り開いた広場がある。

そこらの幻晶騎士練兵場と同程度の広さで、切り倒した木は隅にまとめて積んでおいて、いずれ材木か薪にでも。適度に均した地面は巨人族十数人が走り回っても問題ないほどに固められている。

食料確保とストレス解消のための魔獣狩りをしに森へ入る巨人族の人たちが、最近なんだかんだでエルくんとの「問い」も所望するので用意した空間。

そこで今日もまた、いつもと同じようにおおはしやぎのエルくんと、それに挑みつつも吹っ飛ばされる巨人族の人たちという絵面が描かれていた。

「……それにしても、わからぬ。師匠エルは確かに強い。目も広い。だがあれだけの勇者が手も足も出ないのはなぜなのだ」

「『早い』からだね」

「早い……?」

イカルガの機体性能という個としてのスペックに優れるとはいえ、圧倒的な数の差があつてなお最強として君臨できる理由。俺は、それに心当たりがある。

巨人族よりむしろエルくんのお目付け役として乗ってきたグランレオンのコックピットハッチを開けて、パールちゃんと一緒に暴れまわるエルくんの無駄に楽しそうな

笑い声を聴きながら、俺の見解を語る。

「エルくんは紛れもなく最強の騎操士だけど、それを支えているのはエルくんの魔法能力だ。魔力量も潤沢だけど、なによりエルくんは魔法の構築が信じられないくらい速い。紋章術式刻むときなんかもガリガリ直で書いていくし」

あー、と心当たりがありそうな声を上げるパールちゃん。

俺は俺で、新しい魔法術式を描いているときのエルくんが下書きもなしに鼻歌交じりでもりもりやっていく姿を思い出してしまう。ちなみにあれ、たとえるなら「コマ割りだけしたマンガの原稿用紙に直接ペン入れベタ塗り効果線入れをする」ようなものだ。控えめに言って信じられない。

「実戦での魔法行使、幻晶騎士の操縦でも同じだ。エルくんの場合は、おそらく素の演算速度が速いし、使ってる術式の効率が良い、あと多分並列処理もやってる。……だから、ああやって剣で斬りあいながら後ろに法撃飛ばして横から近づいてきた相手を執月之手で投げ飛ばせるんだよ」

「……師匠エルがたまに3人分くらい動いている気がしたのはそのせいかな」

単純に手数が多い、という話ではない。それだけだったら頭数を揃えることで十分に勝ちの目も出てくる。が、エルくんの性質は「早さ」。つまり簡単に言うとは

「イカルガに乗ってる限り魔力はほぼ無尽蔵で、しかもこっちが1つの動作をする間に

3つ動くみたいなんだね。たとえば、エルくんがイカルガに乗つてるところに剣で斬りつけたら『防ぐ』んじゃないかと、『超魔力で強化された剣で何でも斬り裂いて、あらゆる攻撃を魔法強化された装甲で弾いて、なんか不死鳥みたいな形した火の玉叩き込む』くらいのことはやってくる」

「手に負えないではないか」

「手に負えないんだよ」

『あつはははははははははは!!』

ゲーム的なたとえをすると、「MPが無制限で3回行動」くらいのヤバさなのだった。

エネルギーチャージは常時してるし、行動後の隙もないとかどうなってんだ大魔王よ
りヤベーぞ。

実際今も、そのアドバンテージをいかに発揮して巨人族の人たちをボコボコにしている真つ最中だし。

なんか無駄に両手を上下に構えて待つていたイカルガに背後から切りかかってくる剣をサブアームで真剣白羽取りしつ、振り向きながら投げ飛ばしてさらに続けて飛びかかろうとしていた巨人族の人が驚いて止まる間もなく弱目の法撃（威力を抑えざるを得なかったから形にこだわった、という代物）をどてつ腹に叩き込む。この間1秒と経っていない。

「ふとした疑問なのだが、もし仮に師匠エルが倒さねばならぬ脅威となった場合、その……どうにかなるのか？」

「……………」

「答えよ師匠の友!?!」

君のように勘のいい女の子は嫌いだよパールちゃん。

その疑問、フレメヴィーラ王国中の幻晶騎士関係者が全力で考えないようにしてるんだから。

少なくとも、幻晶騎士に乗られたらどうしようもないんじゃないかな。

「その点、穢れの獣は一度エルくんを撃墜してるんだからすごいよね。多分、同じ手は二度と通じないけど」

「……もはや我が目には師匠エルに勝利しうる何物も見えぬのだが」



飛び切り頑丈な床材は、そこを歩く時の足音も固い。

コツコツとよく響くなあと思いながら俺が足を踏み入れたのは、オルヴェシウス砦の

資材倉庫。

幻晶騎士の建造に欠かせない構造材の数々から、銀線神経、紋章術式を刻む銀板その他、ついでに仕留めた魔獣から剥いだ素材なんかも隅の方にゴロゴロと。いろいろなものが詰め込まれた魔窟だ。一応どこに何があるかの棚卸は定期的にやっているし、使う機会が多いものほど手前に置くようにしてあるので使うに困ることこそないものの、雑然とした印象を受ける。

通路に物は置かないように徹底しているし、幻晶騎士で重量物を運び込むこともあるので人が歩くには困らない中をゆっくりと奥へ進み。

「……改めて見てもデカいなあ」

その最奥に鎮座する、触媒結晶の前に辿り着いた。

忘れもしない、いろんな意味で死にかけてボキューズ大森海の調査行。その中で最大の脅威となった魔王獣。その内部に突っ込んで、うっかり見つけて拾ってしまった触媒結晶だった。

エルくん喜ぶかなと思って持ってきたはいいものの、喜ぶあまり俺にプレゼントすると言い出した時は肝が冷えた。

フレメヴィーラ王国へ帰ってきてからあれこれと忙しいのでその後手つかずにはなっているが、エルくんのことだからいつか必ずこれにも手を伸ばすだろう。

なんに使うのかわからない……というのはあくまで国家の機密に関わるからこそそのスタンス。イカルガに搭載されている皇之心臓、女王ノ冠の名前とそこから想定される出所を考えれば、コレが今後何に化けるかは大体の予想がつく。

そして、そんなものを俺に与えて、何をさせようと、何を作らせようと考えているのかも。

ある意味、渡りに船ではある。

それがあれば、単純な魔力的に考えて通常の幻晶騎士の数十倍でも効かないイカルガに対し、優位とまではいかないまでも互角になりうるだけのポテンシャルは確保できるだろう。少なくともエルくんならそこまでやってのけるに違いない。

ただ、それをもつて何をすればいいか。

ぶつちやけ、そんなアホみたいな出力もらっても農業には余るんですけどねえ！

そんなことを考えながら、明り取りの小さな窓から差し込んでくる外の日差しが夕暮れの色に染まりだしたのに気付いたころ。

「——先輩？」

「……やあ、エルくん」

最近俺の心の中を占めてやまない問題児が、現れた。

「散歩かい？」

「はい。こういう、素材とか工具とかがたくさん並んでるところに来るとワクワクして、新しい幻晶騎士や装備を作りたくなりますから！」

気持ちちはわかる。

女性がアクセサリーショップや小物売り場を感じる気持ちや、男がホームセンターに行って感じる衝動と似たようなものだろう。

……まあ、エルくんの場合はそれをさらに激しく強くしたものだろうけどさ。夕陽を受けて一層きらめくエルくんの瞳には、決して消えない炎が宿っている。欲望の炎だけ。なんか最近、俺を見てるときは一層ねっとりしてる気がするけど。

「触媒結晶、大きいねえ」

「ええ、今まで見たことがないサイズです。あの魔王獣の大きさを考えれば納得……というか、むしろこれと同等の物を体内に複数持っていても不思議ではないくらいでした」

「怖い推測やめて」

そんなエルくんがとことこと俺の隣にやってきて、二人して触媒結晶を眺める。

エルくん視点からしても史上最大つてことは多分人類が目にした中でも最大、もつと言つちやうと師団級魔獣のそれをすら超える……すなわち、イカルガ並みのエーテルリアクタ出力を取り出せる可能性がある、ということだ。

「すみません、先輩。本当はすぐにでも先輩用の『すごい』エーテルリアクタを作りたいんですけど、いろいろと他にも仕事があつて……」

「うん、大丈夫だよエルくん気にしないで。むしろ一番後でいいから。年単位で先送りにしてくれていいから」

そんなとんでもないものを、最終的に俺のものにすること前提で考えているフシがあるエルくんの思考が最近の悩みの種です。なんとか延期してうやむやにできないかなあ……。

「——それで、先輩。無限に等しいマナ供給が可能だとしたら、先輩ならどんな機体を作りますか？」

「……そうだねえ」

……俺の服の袖を掴んでニコニコと見上げながら聞いてくるエルくんを期待

するのは、無理が過ぎると思うけど。

この双肩にかかる期待が重い。だって、エルくん。

そうやって作った最強の機体で、いつか自分を倒して欲しいと、そう思っているのだから。

いや、正確には「未だかつて見たことないほどに強い幻晶騎士」を、自分以外の誰かが作り出すのを見たい、と言ったところか。なんだかんだで負けず嫌いだから、そのころにはエルくん自身イカルガを改造するなり新造するなりして、さらなる最強を追い求めてくるだろう。

だが今、間違いなく、エルくんには比肩しうる幻晶騎士と騎操士は、この地上に存在しない。

かつて戦ったヴィーヴイルという例はあるものの、あれは多数の人間が集って運用する戦艦。幻晶騎士とは兵器としての質が違いすぎる。

それを倒すこともまた喜悦。でも、いつかは幻晶騎士同士で最強の座を決したい。

エルくんの中に渦巻く渴望は、紛れもなくそれ。

そしてどうやら光栄にして絶望的なことに、その幻晶騎士を作る役を俺に任せようとしているらしい。まあ確かに、西方諸国でエルくん式の新型幻晶騎士が続々ロールアウトしているらしいとは言っても、あくまで軍として、兵器として、量産機として戦力と

しての側面が強い。

最強たることを目指して作られたものではない以上、なんだかんだ一品物に近い幻晶騎士をエルくん以外で作っている人間となるとそれこそ俺くらいしかいないし。

「出来れば、イカルガとは違うタイプがいいです。……その方が楽しそうでしょう?」
「というか、あそこまで操縦系統が複雑だとエルくん以外でまともに動かせる人がほとんどいないから、必然的にそれ以外のアプローチを考えるしかないね」

そんな風に軽く話ながら、頭の中の設計図に手を入れていく。

将来的なものも含めて使いうる手札は、銀鳳騎士団で培われた幻晶騎士建造技術の数々と、おそらくイカルガ級のマナ出力を有するエーテルリアクタ。

そして仮想敵は、通常の幻晶騎士や魔獣とは一線を画す火力と速度、そして反射速度を持つている。

こちらが1手を繰り出す間に相手は2手3手やり返してくることは确实。

回避と攻撃、それも超火力がすっ飛んでくるだろうし、俺はどうやったってそこまでのことはできない。

ならば、どうする。

「……………ふんふん」

エルくんの、楽しそうな笑い声が聞こえる。

騎操士としての技量差からして、攻撃を回避することは現実的ではない。3倍撃たれることを覚悟の上で、3倍以上の頑丈さをもってライフで受けるしかないだろう。

幸い、魔力量は潤沢になる予定だ。マジウスジェットスラストによる常時飛行も採用する気はないし、その分の魔力を強化魔法に回せば何とかなるだろう。

火力面は、範囲攻撃が必要になる。

相手の動きが相当速いことを考えれば、射程と効果範囲の両立は必然。素早く逃げてしまふなら、逃げた先まで届くようにすればいい。

それから、機体そのもの。

触媒結晶が相当の大きさなので、おそらくそれを収める機体自体も通常の幻晶騎士より大柄にせざるを得ないだろう。

その状態で直立した場合の安定性を図るとなると、二本足では足りないかもしれない。

さらに、距離を離されすぎるとよくない。相手を追いかける高速走行もするとなると、前傾姿勢を取って一気に突っ走るしかないだろう。その状態でもバランスを崩さないようにするにはカウンターウエイトも必要か。

幻晶騎士とは、兵器だ。

戦う。そして勝つ。

純粹な目的に沿って磨き上げられた機能を体现するその姿形はある種の美しさすら備えるほど、唯一無二の回答としての必然にたどり着く。

俺が想定している戦いは少々どころではなく特殊なものだが、だからこそそのためだけに研ぎ澄まされた形は一つの姿に収斂していく。

——オオオオオオオオ

「素敵ですよ、先輩。先輩がいつか作ってくれる新しい幻晶騎士……いえ、もしかしたら幻晶騎士でも、幻晶獣機ですらない新しいナニカ。楽しみに待っていますね？」

「……それはどうも」

日が暮れようとしていた。

倉庫の中はすでに薄暗く、石壁に囲まれた室内は肌寒さすら覚えるほど。

それでもなお、エルくんの目に宿る温度は熱い。

期待と興奮、はち切れんばかりの高揚がさらさらの髪をふわりと浮き上がらせているようにさえ見える。

今はまだ、形を成していない。

だからたとえエルくんさえ、見えていないだろう。

闇に溶け込みつつある壁に、俺の目にだけ浮かび上がる巨大な影。

幻晶騎士に倍する巨体、力強い顎^{アギト}。無数に、逆立つ棘のような突起を背負い、それら

が長く長く伸びた尾までも続く。

人ではない。獣でもない。飛竜戦艦が模した竜でもない。

二本の足で立ち、長大な尾が大地を叩く。

唸りを上げる口腔と、背から漏れ出る破滅の光。

今はまだ名もないその姿が、しかし確かに俺の胸の内に、刻まれた。



「これだけのデカブツとなると畑仕事には向かないよな……。いや待て、畑そのものを作るのには向かなくても、木をなぎ倒して軒並み土を穿り返して下地を作るのにならむしろ最適……。？」

「……アレはまだ実際に手を出していないからセーフね。やらかし始めたら力づくで止めるけど」

「アグリを力づくで止めることを前提に、ヘルヴィがトレーニングを積む。なんだこの

「回りくどきは」

「止められるとしたら君だけだぞエドガー」

「……そっとしておこう」

番外編 アグリの悪夢三夜 一夜目 エルくん（女の子）

「大変です先輩！ エルくんが錬金術で作られたちよつと珍しいお薬を飲んだら女の子になっちゃいました!!」

「なにその頭の悪すぎる状況」

オルヴェシウス砦周辺での畑仕事を終え、鍬とか担いで帰ってきた俺に向かってものっせい勢いで走ってきたアデイちゃんが開口一番に告げた言葉がこれだった。

銀鳳騎士団は今日も賑やかだなあ、と現実逃避に走るも数瞬、うっかり言われた内容を理解してしまったわけだが。

なにそれは……なに？ すごくコメントに困る……。

「とにかく、来てください！ エルくんが大変なんです！」

なりふり構わなくなったアデイちゃんは容赦なくエルくん直伝の魔法を行使する。

愛と魔法でパワーアップした女の子らしからぬゴリラ腕力が俺の腕を引つ掴み、砦内引き回しのような勢いで突っ走った先は、エルくんといえはここにいる、というイメー
ジさえうつすらあるいつもの格納庫。

そこには当然というべきか、黒山の人ばかり。なるほど、どうやらエルくんの女装姿

に味を占めたアデイちゃんの妄想とかではなく、少なくとも何か起きてはいるらしい。

……アデイちゃんの証言からすると、地獄のようなことがね！

「あつ、先輩……」

予想は果たして正解で、アデイちゃんが力づくでこじ開けた人垣の中心にいたのは、やはりエルくん。

俺の顔を見るなりちよつと恥ずかしそうに身をよじる、とかいう中々見ないリアクシオン。

右手で左手の肘辺りを掴み、体を隠そうとしているようにも見えるその仕草、女の子がすると大変可愛らしいものなわけで、つまりエルくんがしても可愛いということだ。

「ああ……女の子になつてもエルくんかわいい……!」

「ごふっ!? 落ち着いてくださいアデイ……」

案の定、我慢できなくなつたアデイちゃんがタツクルのような勢いでしがみつきのめつちや頬ずりしている。

だが、待つて欲しい。エルくんが女体化したという話だが、それは本当なのだろうか。ぶつちやけほとんど変わつてないように見えるので、よくよく観察してみる。

顔立ちは、いつも通りだ。整った鼻梁、さらつさらの銀髪、花の色より鮮やかにさえ

見える唇に、長いまつげ。……うん、まあその辺はもともとたまに女の子かと思うほどだったから、実質何も変わっていない気がする。ただ、なんとなく雰囲気が違うかも……？ という気がする程度だ。

体格。これも変わらない。同年代の男性と比較して明らかに小柄。腕力体力は魔法と魔導甲冑でカバーするスタイルなので腕なんかもほっそりしていて、アデイちゃんのそれとほとんど変わらない。

アデイちゃんとくんずほぐれつしながら上げている声も、声変わりというイベントをすつ飛ばしたらしき女性声優さんが演じてそうなもののまま。

そう、いつもと何も変わらない。

……んだけど、ごめんこれやつぱりエルくん女の子になってる。

一つ一つのパーツを見ていくと普段と変わらないのはもともとエルくんが初見だと女の子に見えかねない美少年だからだろう。もうお嫁さんもらってる年だけど、十分美少年で通用する。

ただなんてーの？ 全体を見ていくと、やつぱり違う。

なんとなく肉付きとか骨格とか違うし、全体的な雰囲気柔らかい。

多分中身は変わってなくて、幻晶騎士を与えたら無限に興奮していくんだろうけど、なんともいえない「しな」があるというかなんというか、こう……わかるだろう!!？ こ

の場に集まった銀鳳騎士団のみんなはわかってくれているはず！ アデイちゃんにすりすりさわさわされてもぞもぞしているエルくんを直視できず、そっぽ向いてるんだしさ！

なお、見る気はなかったんだけど自然と視界に入ってきた胸元は、ちよつとなだらかにしかし確実な曲線を描いていた模様。



「すみません、先輩。ちよつとお願いが」

「アデイちゃんが俺の部屋に来るって珍しいね？ しかも、エルくんも連れて」

あのあと。

状況は詳しく聞かせてもらえた。なんでも、結晶筋肉とか作ってくれてる錬金術関連の工房から流れてきた謎のお薬を、うっかりエルくんが飲んでしまったのだと。そういうことになるから、物の名付けと置き場と管理と受け入れ品の確認はしっかりしろとあれほど。

幸いなことに、飲んで毒になるようなものではなかった。体が女の子になっちゃった

けど。解毒剤というか中和剤というかを飲まない限り永続的にそのままらしいけど。

そして、その中和剤作るのにしこたま時間かかるらしいけど。

アデイちゃんがツェンドリンブルかつ飛ばして薬の製造元に殴り込み、製作者の錬金術師さんを連れてきて、銀鳳騎士団総出で「お話」させてもらったところ、中和剤はないう上に「オーヴィニエ山脈の奥深くに湧くという、昔若い男が溺れ死んで呪われた泉の水」とかその他もろもろ材料を集めた上で、加工と熟成に1年くらいずつかかるのだとか。

つまり、エルくんは年単位で女の子生活が確定しました。

さっそくアデイちゃんとヘルヴィを筆頭にした銀鳳騎士団女性陣に連れ去られたエルくんがライヒアラの街へ繰り出し、女物の服やら化粧品やらアクセサリーやらしこたま買い込んで帰ってきたのは日もとつぷりと暮れてから。

幻晶騎士に乗っていけば、熟練の騎操士でさえ足腰立たなくなるような訓練や模擬戦を経てなおつやつつやの表情を見せるエルくんがげっそりと疲れた顔でいたのはかなりレアだと思う。

その後、帰ってきた女性陣とエルくんが夜食を用意してついでお酒も出してということなぜか俺がやらされ、長い一日だったしこれからエルくん女の子モードの日がしこたま長く続くなあ、と部屋で一息ついていた、その時。

ノツクの後に聞こえた声は、アデイちゃんの物だった。

なんか前も似たようなことがあった気がするし、そのときはエルくん女装させるとかいう大分頭おかしいことを頼まれたな、というアレ過ぎる思い出が脳裏をよぎる。

でもまさかねー。今のエルくんは「女の子！ 女の子になったから！ 男の子ムーブとかダメだから！」という理屈にもなっていない理屈による説得で問答無用に可愛らしいスカートとか履かされていたし、大丈夫だ。

……アデイちゃんに手を引かれて部屋に入ってきたエルくんが、なぜか顔真つ赤でスカートの裾握り締めながらうつつむいてるけど、大丈夫なんだ。多分。誰か大丈夫だと言つて。お願い。

「……結論から言います。エルくんとシてください」

……言つてよ。誰か大丈夫だつて言つてよ！

エルくんがますます真つ赤になってアデイちゃんに顔押し付けてなんか隠れてるのは俺の気のせいだつて言つてよ！ でないとそのうち俺の胃がねじ切れて死ぬぞ！

「……してつて、何をかな？」

「ナニつてそれは、もちろん子作」

「あ——————」

今は夜。オルヴェシウス砦で寝泊まりする銀鳳騎士団員はそれなりにいる。

この状況でなお、そんな彼ら彼女らの安眠に配慮した限度いっぱい音量にとどめた俺の理性を誰か褒めて。そろそろ泣くぞ。

「何言ってるの!? アデイちゃん何言ってるの!? 状況わかってる!」

「はい、もちろんです。エルくんが女の子になって、男の子に戻るまで1年以上かかる。……つまり、その間私はエルくんの赤ちゃんを産んであげられないんです!」

まあ、道理ではある。

この世界の文化的背景による事情はさておき、少なくとも俺個人としては同性愛について思うところはない。その辺はあくまで個々人の問題だ。まあ、この場合はTSしたエルちゃんとアデイちゃんの間なので複雑なのかもしれないけど、それはそれ。少なくとも俺が間に入る話じゃないのは確実だ。

確実だよな? 百合の間に挟まる男なんて、死しかないじゃないか!

「なので、とりあえず先輩がエルくんに赤ちゃん産ませてあげてください!」

「急転直下で道理ぶつちぎってトチ狂った結論に至るのやめてください!」

「大丈夫です! エルくんの赤ちゃんを産んでいいのは私だけですけど、先輩ならエルくんに赤ちゃん産んでもらっていいですから! そのための愛人さんですから!」

「くそう、有耶無耶になったと思ってた妄言がここにきて息を吹き返しやがった!」

エルくんはプロポーズされたときにアデイちゃんが言ってた愛人がどうのの契約が

なんで今日まで有効なんだよ！ あれ冗談ですらない奴じやなかったの!?

「平気です！ エルくんも先輩とならいいって言ってますから！ ね、エルくん！」

「いやいやいやいやいや」

「……………っ」

「いやいやいやいやいや、小さく頷かないでエルくん。アディちゃんの体で半分顔隠しつつちらつとこつち見ないでエルくん。……待って。待とうエルくんにあディちゃん。二手に分かれて俺を包围しないで。じりじり距離を詰めないで。……や、やめろ！ それ以上近づくな！ それ以上来ると大声出すし窓プチ破って逃げうわああああああワイヤー本当に便利だねエルくん!」

エルくんの操るワイヤーで縛り上げられてベッドに放りこまれる俺。

こんな経験ないはずなのになぜかデジャヴを感じる。ふしぎ！

そしてアディちゃんが足の辺りに乗っかって体重をかけてくる。本格的に逃げられねえ。

「……………先輩」

「うわー、エルくん顔まつかー」

ぎし、とベッドがきしむ。そもそも一人用なのに、エルくんとアディちゃんと俺の3人が乗っていればそうもなろう。

外は夜。部屋の照明はランプが一つ。ゆらゆらと頼りなく揺れる暖色の灯りが作り出す陰影に彩られたエルクンの表情が示すのは、衝動と羞恥。

さすがに恥ずかしいこととしてるという自覚はあるけど、それすら上回る何かが体を突き動かしている、という色。具体的に言うとう瞳の中に浮かぶピンクのハート。

今になってよくよく見れば、エルくんが着ているのは女物という言葉だけでは説明がつかないほどに煽情的な夜着。ひらひらですけすけでさらさらで、脱がしやすそう。ちのうしすがさがつてことばがうかばないです。

「僕、変なんです。頭の中は今も男だった時のままのハズなのに……先輩となら、つて思っちゃいます」

「うん確かに変だねそれ多分お薬のせいだしこうなつてすぐだし何日か置いたら落ち着くと思うよだから冷静にね、エルくん？」

「それに、こうなつてからずっと、体が熱くて……ずっとずっと、熱くなり続けてるんです。……ほら」

「それ、別に俺の手をエルクンの胸につけなくてもわかる奴だよな？」

ふに。

この状況に対するこれ以上の説明を求められたら俺は泣くからな!？」

「ふーっ……ふーっ……」

「荒い息だけ吐きながら顔近づけないでー！ 変な生々しさがー！」

「大丈夫ですよ、先輩！ エルクんってこう見えて結構タフですけど、その分気持ち良くしてくれますから！」

「君たち夫婦のそういう話を聞かせないでくれる?！」

ますます興奮したらしいエルくんは、もはや言葉もなく顔を近づけてくる。

喉を鳴らし、俺だけを見て、アディちゃんのアレな告白も耳に入っている様子がなく、当然俺の制止も聞こえていないっほい。

農業で鍛えた筋力に自信はあるが、フレメヴィーラ王国屈指の騎操士二人にマウント取られた状態から逆転するのはさすがにちよつと難しく、決まりきった運命が当然のよくな顔をして俺の未来を刈り取りにやってくる。

「……せんぱい♡」

「エ、エルくん……」

俺を呼ぶエルくん吐息が唇にかかる。

そして、俺は俺で名前を呼び返さなければいけない気がした。

視界に映るのはエルくんの顔だけ。空より綺麗なサファイア色の瞳の中に見える俺の顔はひどく間抜けで、笑みの形に細められてエルくんの顔すらほとんど見えなくなつて。

番外編 アグリのお夢三夜 二夜目 エルくん（の娘）

「ライヒアラ……雰囲気変わったなあ」

グランレオンで乗り付けた校門前から、ライヒアラ騎操士学園の城みたいな建物を見上げ、もはや遙か遠い学生時代に思いを馳せる。

考えてみれば、あれはまさしく時代の転換点、前時代最後の時期だった。

エルくんの入学とその後の大暴れ、新型幻晶騎士や幻晶甲冑の開発、飛空船と飛翔型幻晶騎士の登場。

激動の時代を乗り越えたライヒアラ騎操士学園は、既に俺が在籍していたころとはその趣を異にしている。

建物なんかは変わっていないが、青空をバックに映える尖塔の向こうを飛空船とそこから飛び立った飛翔型幻晶騎士が編隊飛行の訓練でよたよた飛んでいたり、アスレチックじみたコースを幻晶甲冑がびよこら飛び回っていたりなどなど、おそらく今教えられているカリキュラムは俺の在籍していたころとは全く違うものになっているだろう。

だがそれでも、卒業を迎えた新たな騎操士たちのワクワク顔は、変わっていない。

そう、今日は毎年繰り返される卒業の日。

祝え！ 新たな騎操士の誕生である！ って感じ。

俺は式典には参加しないが、ある理由からこうして久々に学園の前までやってきた。門から続くまっすぐな道には綺麗に飾られた幻晶騎士が掲げた剣で作るトンネルの下、胸を張って進む彼女らの誇らしげな顔と初々しさに思わず目を細める。

……そうだよなあ。俺が卒業してから、もう「20年以上」経ってるわけだし。

あと、卒業間近はほぼ銀鳳騎士団入り浸りになってたし。……懐かしいなー。

そんな風に思い出やら何やらを噛みしめながら待つことしばし。別に物見遊山に来たわけではない俺は、列成し歩く卒業生たちの顔を順々に眺め……るまでもなく、先頭に。

いた。

「……………」

見つけたのと同時に、向こうもこちらに気付いた。ぱちりと目が合い、ぱつと笑顔が弾ける。

お行儀よく先頭を歩いていたのもそこまで。一応行事としては終わっていたからか、一目散にこちらへ走ってくるのは、とても見慣れた顔。

よく晴れた日には輝くようにさえ見える紫銀の髪が踊る。

飛ぶように走ってくるのは自然と魔法で身体強化をしているからで、明らかに他の卒

業生より2、3歳年下なのではと思うほど小柄で、それでありながら実力トップの首席卒業を果たしたことが伊達ではないと思いい知らせる。

同期の仲間が苦笑で見送る、その新米騎操士。

最後の3歩は驚くほどに大きく跳ねて、最後にたわめた体を爆発させるようにグランレオンのコックピットから身を乗り出した俺の腕の中へと飛び込んで。

「会いたかったです……おじ様！」

エルくとアディちゃんの「娘」。

アリス・エチエバルリアのおむかえ第一段階は完了となった。



「それですね、同期の人たちはいろんな騎士団にそれぞれ入団が決まったらしいです」「よかったなあ。……あの子ら、アリスと一緒に暴れまわってたクチだから、手に負えないって放り出されるんじゃないかってちよつと心配だったんだ」

「あー、なんてこと言うんですかおじ様！」

ライヒアラからオルヴェシウス砦まで、幻晶獣機の足ならさして遠くもない道を、アリスと話しながら帰る。

……ちなみに、グランレオンは単座タイプなので、なぜかアリスは俺の膝の上にいる。今日でライヒアラ騎操士学園を卒業した、れっきとしたお嬢さんなのに、だ。

昔からそうだったよな……。アリスがよく乗ってくるから、と複座型にするか補助席つけようとしたら真顔で止められたし。

アリス・エチエバルリア。

その名が示す通り、エルクンとアデイちゃんの娘である。

エルクン譲りの小柄と銀髪に、アデイちゃんから受け継いだまつすぐでブレーキぶつ壊れた暴走特急な性格。素直で明るく元気よく、こうと決めたらガス欠になるまでフルスロットル。まさしくあの二人の子だと誰もが納得する少女だった。

銀鳳騎士団団長として、それはもうしこたま忙しく、どこか下手するとセットルンド大陸すら飛び出して冒険の数々を繰り広げていたものの、そこはさすがのアデイちゃん。きつちりと子供を授かり、元気に産んでのける辺り、根性の据わり方が尋常ではない。

「でも、やっぱり学園生活は楽しかったです。毎日のように手合わせに来てくれる人がたくさんいて、たくさん幻晶騎士に乗れましたし！」

「……さよか」

アリスが生まれたときはフレメヴィーラ王国中が祝賀ムードに湧くほどで、各地のお貴族様や騎士団関係者から祝福の言葉と面会、プレゼントの類が山と届いた。

その量たるやすさまじく、それらを収めるための倉を急遽建てるべくカルデイヘッドをフル稼働させ、訪問客との応対で幻晶騎士に乗る時間を作れずストレスのたまったエルくんが来客ごとごとくをイカルガで蹴散らそうとするのを宥めすかし、としこたま忙しくなるくらいだった。なぜ俺が。

あと、アリスに模擬戦を挑む生徒が多かったのは、「幻晶騎士で勝てたらアリスに告白していい」という不文律ができていたからとかなんとか噂で聞いた。結果、在学中無敗の王冠を被って卒業するんだから本当に罪作りな子だ。

「うふふ、心配しなくても平気ですよおじ様。私が戦っていて一番楽しいのは、もちろんおじ様ですから」

「エルくんがそれ聞いたらちよつとショック受けると思うぞ？」

「仕方ありません。お父様は娘の私から見ても強すぎます。あと、当人が楽しみすぎて全く手加減とかしてくれませんし」

「わかる」

当のアリスは、もちろん銀鳳騎士団総出の勢いで大事に育てられた。

なにせ、エルくとアデイちゃんの娘。その愛くるしさたるや、鋼か岩かという厳つさを誇るダーヴィド親方の表情を初見でトロツトロにさせ、赤ちゃんつていいよね、という気分になったヘルヴィが一日中エドガーの腕を組んでおっぱいとか押し付けていたくらいだ。なお、二人の間には翌年元気な男の子が生まれました。

そんなこんなでオルヴェシウス砦のアイドルと化したアリス。

エルくんの膝に乗ってイカルガで空を飛び、アデイちゃんに背負われてツェンドリンブルで突っ走り、その他団員達にもわかるがわる幻晶騎士に乗せてもらってとエルくん印の英才教育に余念なく育った結果、当然のように年齢一桁代から幻晶騎士の操縦に精通した。

成長に合わせて服を新調するような勢いで娘専用の幻晶騎士を作ろうとするエルくんを止めるのは大変だった……。

「ライヒアラでは幻晶騎士の整備と設計についてもたくさん勉強してきましたから、今度は私も自分の機体を作ってみたいです。幻晶獣機を作るときは手伝ってくださいね、おじ様♡」

「……うん、まずは魔導兵装辺りから始めようね？ さ、もうすぐオルヴェシウス砦に着

くぞ」

そして、アリスはすすくと育っていく。

生まれた直後から市井で呼ばれた「銀鳳の姫」という呼び名が、子供らしからぬ幻晶騎士操縦技術によって畏怖の響きを帯びるようになったのは10歳になるかどうかのころ。当然のようにライヒアラ騎操士学園に入学するころにはすでにそこの騎士団だったら余裕で入れるんじゃないかね? という実力になっていた辺り末恐ろしい。

もちろん、騎操士として必要なのは幻晶騎士操縦の腕のみならず、騎士としての肉体的精神的成熟と、魔獣の知識、部隊運用のノウハウ、仲間との連携などしこたま学ぶことがあるので入学は必須。エルくんの娘だけあってその辺全くいとわず邁進した結果が、晴れて今日の首席卒業と相成った。

そんなアリスを乗せたグランレオンがオルヴェシウス砦の門をくぐり。

「……あら? 皆さん、姿が見えませんがどうしたんでしょう」

ゆつくりと速度を落として、立ち止まり、伏せて。誰もいない砦内の様子に不思議そうな顔できよろきよろするアリスを促し、コックピットハッチを開くと。

「アリス、卒業おめでとう!!!」

「つきやーーーーー!!」

この日この時を待ちわびていた銀鳳騎士団一同による、卒業おめでどうサプライズパーティーの始まりだった。



パーティーは盛り上がりに盛り上がっている。

開幕ドツキりでアリスをしこたま驚かせた後、銀鳳騎士団の結束力を発揮して即座にオルヴェシウス砦中庭に設営されるテーブルと料理と飾り付けとお立ち台。

最初は目をぼちくりさせていたアリスだったが、すぐに馴染んで見せる辺りはさすがの慣れ。

俺もいくつかアリスの好物を作っておいたよ、と伝えたら料理を食べにすつ飛んでき、一品食べるたびにまた俺のところへ取って返して腹のあたりにタツクルがてら抱き着いて美味しい美味しい言ってくれる。可愛いんだけど、ライヒアラを優秀な成績で卒業する子にされるとダメージキツいからほどほどにね？

「みなさーん！ 今日ありがとうございまーす!!」

イエーイ、と轟く叫び声。

お立ち台でジュース片手に愛嬌を振りまくアリスはまさしくアイドルで、最前列の

コールはもはやライブのそれ。さすがにそういうのに乗っかるのは厳しい年になった俺は一步引いたところで眺めてるけど、アリスが楽しそうに何よりだ。

アリスと俺との関わりは、まあなんだか言って結構深いと思う。

なにせ、エルくんとアデイちゃんの娘だ。それだけでも可愛がる理由としてはこの上ないし、何かと忙しいエルくんたちに代わって銀鳳騎士団の団員たちが面倒を見ることは多々あった。

そんな中、俺が故郷の村で培った赤ん坊のお世話テクを發揮するのは当然の成り行きで、アリスが泣くたびに呼ばれてはあやし、せがまれるたびにグランレオンやらガルダウイングやらカルデイヘッドやらに乘せてやるという生活を続けてきた。

おしめも替えたし離乳食も作って食べさせてやったことがある。手を繋いで散歩や買い物に出かけたことは数えきれないほどで、絵本の読み聞かせはいいとして幻晶騎士に関する書籍も聞かせて欲しいと言われたときはエルくんの濃過ぎる遺伝子に戦慄した。

なんだかんだと懐かれて、俺が抱っこしたときの方が寝付きがいいとアデイちゃんに嫉妬の目で見られたこともあったっけか。今ではどれも大切な思い出だ。

……そうやって断れない、甘いところを見せ続けた結果として今があることを、この時の俺は学習していなかった。

ところで。

アリスがアデイちゃんを呼ぶとき。

「お母様♡」

大体こんな感じだ。母娘揃って仲が良く、アデイちゃんはアリスのことをエルくんと同じくらい可愛がっている。大変よろしい事だと思う。

なお、アリスがエルくんを呼ぶとき。

「お父様♡♡」

遺伝子にまでガツチリ絡みつく、アデイちゃんのエルくん好き好きの宿命を感じる。女の子ながら幻晶騎士大好きなアリスは、幼いころからエルくんが暴走気味に話す幻晶騎士のイイところやら専門用語満載の技術的理論的な解説も目を輝かせて聞き入り、今や一端の騎操士を凌駕する知識と設計技能を有している。

設計上のミスやら強度計算の間違いを指摘してもらったことは、俺のみならず銀鳳騎士団で設計にかかわる人間はだれしも一度ならず経験があるだろう。

……そして、なぜかアリスが俺のことを呼ぶときは。

ての腕もいいし。

「お父様たちと同じように騎操士になるという夢の第一歩が叶いました。これからも精一杯頑張ります。……そして！ 今日、ここで！ もう一つの夢も叶えます！」

なんか本格的にアイドルのライブMCみたくなってきた。

でも可愛いから許す。アリスの笑顔を見ながら飲む酒は美味しいなあ、などとほろ酔い気分でグラスを傾け。

「お父様とお母様の許しも、すでにもらっています！ ——おじ様！ 私と結婚してください！！」

「ブフウウウウウウー……！？」

直後、口に含んだすべての酒が霧と化す。

……あ、虹がきれい。



「……」

「……」

「……………」

地獄の四者面談へようこそ。

アリスが爆弾をぶつ放したあのと。酒が喉の変なところに入ったらしく、めつちやせき込む俺の元へ真っ先にかけてアリスに背中さすってもらったりしていたら、なんか周りのみんなが微笑ましいものを見る目で拍手してきた。

えっ、嘘ちよつと待って今のアリスなの？ と絶望的な表情で顔を上げた俺の目の前には、照れくさそうにはにかむアリスの顔。可愛いなあ……今俺はこの笑顔に殺されかけたんだけどさ。

そして、片付けその他が終わり、一段落ついてエルくんの部屋こと団長室の応接セツトにて、エルくん、アデイちゃん、俺、アリスの4人が揃っていた。

正面にエルくとアデイちゃんがいるのはわかる。

だがなんでアリスは隣に座って俺の腕に抱き着いてくるんだ……。

でも今はそんなことを考えてる場合じゃない！ まずは説明……！ この状況に俺の意志は一片も介在していないことを伝えないと……！

「いやあ、アリスも大きくなったんですね。先輩と結ばれてくれるなら僕も安心です」

「うん、幸せになるのよ、アリス。私とエルくんみたいに」

「はい、もちろんです！」

「……うん？」

と思っていたのに、なんか親子間ですげえ和やかに話が進んでません？

「ちよつと待ってエルくんアデイちゃん。……あの、状況わかってる？」

「状況、ですか？ 先輩とアリスが結婚するってことですよね？」

「違うから！ 俺この件に関してまだ何も言えてないから！」

やべえストツプかけてよかった！

あのまま黙ってたら確実にアリスとの結婚が確定事項として扱われてたよ!?

「えっ、おじ様……アリスと結婚するの、いやなんですか？」

「そういう段階の話じゃなくてね？」

「でも先輩。私がエルくん取っちゃいましたし、アリスが先輩と結婚したいっていうなら許してあげないと……」

「取り合っていないから。俺は別にエルくんを取り合っていないから」

「それに、先輩は僕たちにずっと力を貸してくれていて今も独身ですし……」

「やめろエルくんその事実は俺に効く」

あつ、ごめんちよつと心折れそう。

銀鳳騎士団に引きずり込まれてから幾星霜、クシエペルカに行ったり大森海に行ったり浮遊大陸に行ったりその他諸々あつた結果、すっかり婚期を逃したという現実が重く重くのしかかつてきて膝が砕けそうです。

「心配ありません、おじ様。そのために私がいるんです。おじ様の大好きな農業は小さいころからたくさん手伝つてますし、ユシツダ村の人たちともきつと仲良くなれます。子供だつてたくさん産みますよ？」

そしてアリスのこの覚悟の決まりつぶり。

「子供は何人がいいですか？ 軽く10人？」と言いたげな目をしている辺りシヤレにならん。エルくんの欲望と執念、アデイちゃんの覚悟を併せ持つハイブリッドな子であるだけに、言い出したら聞かないのは小さいころからのこと。

「いやいやいやちよつと待とうよエルくん。俺、エルくんより年上だよ？ そんなおっさんがアリスと結婚していいの!？」

「つまり、先輩が僕の義理の息子になるということですよね。……いい」「アデイちゃん！ どうしてこんなになるまで放つておいたんだ！」

謎の妄想に囚われたのか、恍惚とした表情になるエルくん。ダメだこの親子、揃つて言うこと聞きやしねえ！

「そんなこと気にしないでください、おじ様。だつて私たち、ずっと前から結婚の約束し

てたじゃないですか」

「……………まさかと思うけど、小さいころに『大きくなったらおじさまのおよめさんになるー』て言ってたアレ？」

「はっ」

……………いかん、アリスの覚悟は10年物だ。確かにそういうこと、俺にしか言っていないーエルくんにはすら言わないなーと思っただけだも！

どうしよう……………なんだかんだでアリスのことは可愛がってたわけだし、彼氏を連れてきたらエルくんと一緒に幻晶騎士持ち出して立ちほだかつてやるかふはは、とか思ってたのに立ちはだかるべき相手が自分自身とかこれもうわけわからんね。

ロジックに仕組まれたバグに頭が痛い……………！

その後。

あまりにも味方がいない状況を打開するべく口八丁と勢いと謎理論をまくしたて、なんとか結論保留でその場を解散として、しばし。

「……………どうすっかなあ」

俺は一人、グランレオンのコックピットで物思いにふけていた。

いやだって、アリスだよ？ 嬉しいか嬉しくないかで言ったら……………うんまあコメント

は控えるとして、俺とてさすがにそろそろ割と真剣に婚活を考えてすら手遅れかもしれないと絶望的な気分になるお年頃。とはいえその相手が自分より年下なエルくんたちの娘つてのもさ。

いやいやでもさすがに崖っぷちだし手段を選んでる暇は……！

思考は巡り、しかし結論はまとまらず。

難解すぎる問題に直面して、唸る脳細胞と燃える知恵熱。グランレオンは何も答えてくれない。どうすりやいいんだこれ……と、考えに考えて、しばし。

おそらく、眠ったのではなく気絶したのだと思う。

寝床として快適とは言えないグランレオンのコックピットで、安らかならざる闇の中。

気配を感じた。

だが、全てが遅きに失していた。

「あ、起こしてしまいましたか、おじ様？」

「……………アリス」

虎口。

グランレオンのコックピットハッチを開いて顔をのぞかせたアリスを目にして、なぜ

かそんな言葉が脳裏に浮かんだ。

「すみません。突然で、驚かせてしまいましたね」

「ああ、うん……そうだね」

慣れたものだ。するりとコックピットに入ってきて、俺の膝の上に収まって背中を預けてくるこの一連の動き、何度繰り返したことだろう。

娘がいたらこんな風なのだろうかと思ったことは数知れず。しかし実のところかなり昔からガチ中のガチで嫁入り希望だったと知らされた今、「動きを封じられた」としか思えないのはなぜだろう。エルくとアデイちゃんの娘だからか。仕方ないね。

「……でも、本気です。私の、本当の気持ちなんです、おじ様」

「……………」

首を反らしてこちらを見あげてくるアリス。

さら、とエルくんより少し長い銀髪が頬を撫でる。昔はこうして座ると頭が首まで届かなかったというのに、本当に大きくなった。

こうしていても、脳裏に去来するのは生まれたばかりのころから見守ってきたアリスのことばかり。はじめて立った日、はじめてしゃべった言葉「いかるが」、畑仕事に興味を持つてくれた時の嬉しさ、ライヒアラ騎操士学園への入学を決意した日の眼差し。

本当にその全てが綺麗な思い出。

……あれ、これってもしかして走馬燈なんじゃね？　と思いはじめたころ。

「んしょんしょ」

「……………ねえアリス。なんで体の向きを変えてるのかな？　常にどつかしら俺の体を押さえつけるような体勢で」

ものつそい勢いで頭の中に警報が鳴り響いてるんですが!!　いまさら遅いよ!!!

「さつき、お母さまとヘルヴィさんが教えてくれたんです。『こういうときにどうすればいいか』って。……なんて言われたか、わかります、おじ様?」

「わかりたくないな……………」

ごく普通の口調でしゃべりながら、唐突に力いっぱい体を捻ることを試みるも、腰のあたりをがっつりとカニばさみされているので動けない。アリス、エルくんの娘だけあつて強化魔法も一級なんだよ……………。

結果、傍から見ればぶちぶちと服のボタンを外され、細い指が胸元をなぞるのに抵抗もせず身を任せているような状況になりました。マジか。

よりもよつてアデイちゃんとヘルヴィから聞いた、「結婚の意志を表明した後にする」と。イヤな予感しかしねえ!

夜の格納庫。月と星の薄明りと同じ色をした髪を持つアリスは、まるで空から降りてきた妖精のように美しく、幻晶騎士をキメたエルくんのように熱く、笑みの形に細めら

れた目で俺の目をまっすぐに射抜き。

ペロリ、と舐めた唇を耳元に寄せ。

「女の子には、『既成事実』っていう幻晶騎士よりも強い武器があるんですって」

……死。あるいは墓場。

俺の脳裏を埋め尽くした概念は、それだった。

「あと、お父さまからは『操縦席でやれば一発。火星でもそうです』とも教わりました」
「実体験伴ってそうなアドバイスがすげえイヤ」



翌朝。

「今日も夫婦そろって来るとは仲がいいわね、アディ。子供が出来る日も近いかしら」
「やだもーヘルヴィさんつたらまだ早いですよー！ あ、でも子供の名前はエルクンと一緒に考えてるんです。とりあえず女の子だったら『アリス』なんていいかなーって」

「……アグリ？ どうした妙な姿勢で固まって……ん？」
「息を………していない!？」

アデイちゃんとヘルヴィの世間話が耳に入ってきて、その内容のあまりの恐ろしさにうっかり心停止状態になってましたが、何とか生還しました。

……割と本気で婚活したほうがいいかもわからんね。デッドラインは、エルくとアデイちゃんの子供が生まれる日のような気がする。

番外編 アグリの悪夢三夜 最終夜 エルくん

「う、う〜ん……」

「先輩！ 気が付きましたか！」

意識の覚醒を促したのは、珍しく切羽詰まった様子なエルくんの声だった。

あの、いつも余裕綽々で邪魔するもの全てを巻き込んで暴れ倒すことに定評のあるエルくんの慌てた声なんて、そうそう聞いたことはない。さすがにびつくりしてすぐさま目を開けて。

「フフフ……どうやら役者がそろったようだな」

「時は来た。我らの悲願成就の時が！」

「むー！ むー！」

「すみません、先輩……！」

「……なにこれ」

自分が椅子に括りつけられていることを自覚するとともに、おそらくその下手人だろう、頭にすっぽりと袋のような何かを被った謎の一団と、縛り上げられた上に猿轡までかまされたアデイちゃん、そして体こそ自由であるらしい一方、俺とアデイちゃんとい

う人質によつてにっちもさっちもいなくなつてゐるらしいエルくん、という状況を理解した。

「フフフ……我らは秘密結社B.L.団！」

「お前たちの生殺与奪はいまや我らの手にある！ おとなしく言うことを聞いてもらおうか！」

「とりあえず、エルネスティ・エチエバルリア！ 貴様はそこに縛り上げたアグリ・ポトルとちゅーをするのだ！」

「君たちが相当頭おかしいつてことはよくわかつた」

そして、どうやら犯人たちが信じられないくらいバカであるらしい、ということも。

なに……なに？　ちゅー？　キス？　それを、エルくんが、動けない俺に？　はっはっは、何言つてるんだこいつらは。顔はもちろん見えないし、声もくぐもつた感じだから女性っぽいということくらいしかわからないけど、いくらエルくんとはいえ俺にキスなんてそんなこと……。

「——先輩」

「待てー！ エルくん待つてー！ 冷静になるんだ落ち着け！ テロリストと交渉なんてしちゃいけない！ 断固とした態度を取るんだっ！！」

すつと身を寄せて、俺が座らされている椅子の座面に膝を乗せ、あまつさえ頬に手を

這わせてくるに至っては冷静でなどいられない。さりげなく、かつ雰囲気を作りつつキスの流れに持つていくこの動き、既婚者だけあつて手練れすぎてよエルくん！ 多分そこらの女の子の一人や二人ならこのままちゅーしちやうやつだよエルくん！

やめて！ 顎クイしないで！

「すみません。魔法が使えれば何とかなつたんですが、杖も奪われて、アデイを人質に取られている今は言われた通りにするしかないんです。本当に……すみません」

「エルくん……」

苦悩と後悔がにじむ声。わが身の不甲斐なさを何より望む、エルくんにとつても決して本意とは言えない行動であること、それだけははつきりと分かった。

そんなエルくんに、やめろとか考えなおせとか、どうして言えるだろう。わが身を切り刻まれるより辛い思いをしているエルくんに、俺は口をつぐむことしかできず。

「でも……」

ごく近く、まっすぐに俺と目を合わせるエルくんの眼差しに宿る決意と覚悟。そして……本気と。

「——先輩とのキスなら、イヤじゃありませんから」

……なんか、逆に致命傷のような気がする一言が、ぶっ放された。だが同時に、そのシヨックが俺に気付かせた。

これ、夢だ。

わかってしまえば、どうということもない。ここ数日、妙に多い夢見の悪い日。今日も繰り返されたということなのだろう。女の子になったエルくんに襲われたり、エルくんが瓜二つな娘に襲われたりしてきたわけだけど、ついに男の子のままのエルくんに襲われるのかよはっはっは、と笑う余裕すら出てきた。

なあに夢なら心配はいらない。どんな悪夢もいずれは覚めるように、エルくんが徐々に顔を近づけて来ているけどいつものように肝心なときには目も覚めて。

「——んっ」

「……………んんっ？」

あ、やわらかい。

ところで、唇という器官は人体の中でも特に敏感な部分なわけで、それを重ね合わせ

るといふ行為の持つ意味はいまさら語るまでもなし。

エルくんとはなんだかんだで長い付き合いで、抱き着かれたり頭を撫でたりというスキャンシップはこれまでも多々あった。指の細さも髪の毛のさらさら具合も知っているわけなんだけど、「エルくんの唇は柔らかくてぷにぷにで温かくてつやつや」だなんて情報、知りたくなかった……!

とかいうかちよつと待て! これ夢だよね!? これまでこういう決定的なことになる前に目覚めてただけけど、どういうこと!?! まさか、まさか現実……いやいやまさかそんな! あるわけねえ!

「……はあっ」

唇を離してしばし見つめあう、なんてテクを繰り出されて俺はどうしたらいいの。キス的な技術はよく知らんけど、これ多分雰囲気だけで女の子がメロメロになるヤツだよ。

「……え、俺はどうかって? そんなこと聞かんでくださいな!

「さあ、言われた通りにしましたよ。これでいいでしょう」

「……………ハッ!」

おいこらアホの秘密結社。なに見とれてるんだよ覆面の下に手突っ込んだのよだれ拭くためだろふざけんじゃねえぞお前らただの腐女子じゃねえか!

「な、なにを言っているその程度の軽いちゅーで我々が満足すると思っているのか！」
「そうだそうだー！ 舌を入れろ！」

「もつとちゅばちゅばしろ！」

「体液交換もなしとか舐めてんのか！ むしろなめなめしろ！」

「てめえらしい加減にせえよ……！」

割と本気でムカつくなこの腐女子共！

あと、アディちゃん。『どうですかエルくんのちゅーは気持ちいいでしょう？ 私は

いっつもたくさんしてもらってますからー！』みたいな目で見てくるんじゃないやありません。

口塞がれてても考ええること大体わかるぞそのドヤ顔。ここは嫉妬するところじゃない

のかオイ。自慢してる場合じゃないぞ。

「くっ……！」

「あ、やっぱりまだ続くんだ」

そして、エルくんはエルくんですでに腹を括っているらしい。このままで終わらせるつもりだとは思っていないけど、とりあえずは言われた通りにして隙を伺うんだろう。決意を秘めた眼差しを向けられて、ちよつとトウUNKしたりとかないからね！ ……ないからね？ でも抵抗もできないし、ちよつと諦めの境地にはあるかもしれない。

しにたい。

「大丈夫です、先輩。全部僕がします。……ちゃんと、リードしますから」

「うん、冷静でいられないのはわかるけどちよつと顔赤くなつた状態でそういうこと言うのは勘弁してねエルくん？」

心なしか距離を詰めつつある気がする秘密結社のお歴々の前で、しかしエルくんは俺しか見ていない。うわーい嬉しくなーい。

だがそんな雑念で注意を逸らしている暇もそうそうない。ずい、と近づいてきたエルくんの顔しか見えなくなつて。

「——れろ」

「んんーっ!!」

唇を、舐められた。

肩に手を置き、甘える子猫のように舌を伸ばして俺の唇に触れてくる。

ぺろり、ぺろりと上下を。そのまま顔ごと動かすようにして左右の端から端まで。唇同士が触れ合うのとは違う、濡れた感触がどうにも背筋をゾクゾクさせてやまない。

咄嗟のことで口をキツく結びはしたものの、ダメだこれ……！ だんだん力が抜けてくる……！

「あ、ふあ……」

「隙ありです、先輩♡」

——にゆるん

唇で感じていた滑らかで柔らかくて温かくて妙に気持ちいいその感触が、ついに舌に触れて味まで分かってしまう。うっとりするほど、甘い。

そのときなぜか天井が見えて不思議だったのだが、あまりの気持ちよさと甘さに白目剥きかけるほどに視線が上を向いたからなのだと、後になって気が付いた。

エルくんは俺の肩に置いていた手を首に回して、さらに距離を詰めてくる。

体が触れ合い、もともと接していた唇に至っては口内に舌を入れられた分マイナスにまで重なってしまう。

動転して動けない俺の舌はエルくんの蹂躞を許すばかりで、これまでにエルくんがアデちゃん相手に鍛え上げてきただろうキス技の数々を味わう羽目になった。

「んっ、ふ……んあ」

決して焦らず、ゆっくりと俺の歯茎を舌先がなぞってくる。

上下の唇内側の粘膜もたつぷりと刺激しながら、隅から隅まで味わうぞ、と宣言してくるようだった。

「れあ……んちゅ、じゅぷ」

当然、舌も絡めとられる。きつとわざとだろう、大きな水音を立ててこちらの耳まで攻めてくる辺り、エルクンの持つ手数ของ多さを思い知らされる気分だった。

「ふー、んっ。ちゅ、ちゅっ、ちゅる」

ただひたすらに攻めるだけではない。時に舌を引つ込め、こちらの唇をついばむように何度も軽いキスを浴びせながら、こぼれ落ちる唾液を吸ってきたりも。

その間でさえ刺激そのものが途絶えないよう、柔らかい手つきで俺の頭を撫で、指先で髪をかき分け、耳の穴をござりと探るいたずらをして来る。緩急はあっても休む暇はない。

「はーっ、はーっ。……んっ！ ふむううう、れあ、んふううー！」

「ん、おお……あ」

そして、時に激しい。頬を掴むような勢いで俺の顔を固定し、深く深く舌を差し込んでくる。

顔の向きを変えながら、舌をエルクンの口の中に引き込んで、互いの舌の根元から溶け合わせるようなそれ。

酸素が足りない。でもそのせいで朦朧とすることさえ心地よく感じられるなんて、こ

れまでの人生で知る機会はなかったんですが。

「んむ……んぐんぐ、れええ〜」

「うあ……んっ、——ごっくっ」

激しくむさぼった後、唇を重ねたまましばし。

俺の口の中に、蜜が流し込まれた。

そう思ってしまうほどにとろりと甘い、エルくんの唾液。半ば反射で飲み込めば、どんなに強い酒よりも喉を焼く。

ああ、これがエルくんの味なんだ。

「はー……はー……せんぱい」

「エル、くん……」

さすがに呼吸が続かなくなって、離れたエルくんの舌と俺の舌を唾液の糸が繋ぐ。なんかとんでもないものを見せられている気しかしいけど、エルくんの名前を呼ぶのが精一杯です。

「……れっ」

一息ついて、エルくんが口を開き、舌を出した。

濡れた瞳、紅の頬。さつきまでとんでもなく深くつながっていたせいだろうか、言葉もないその行動だけで、エルくんが何を望んでいるのか、わかっってしまう。

従いたいわけではないんだけど、目の前に揺れるのは天上の果実よりも美しい紅。あまりにも美味しそうで、てらてらと輝きながら揺れるその誘惑に、人は抗えないようにできている。

「んあ……」

「はぷっ♡ちゅっ、じゅぶ、じゅるるるるる♡♡」

「おあ……んおっ」

伸ばした舌同士が絡み合い、すぐにエルくんの口に飲まれた。

たつぷりの唾液に濡れたエルくんの唇が俺の舌を甘噛みして、根元から先端へとしごいてくる。それは男の子がしちやダメな動きじゃないのかエルくん、などというツッコミを入れる余裕があらうはずもなく、ただただ全身から力が抜けていく。

エルくんの蕩けた瞳。

汗で額に張り付く前髪は輝き、口の端からこぼれる唾液の光さえもが芸術の粋を凝らしたが故に見える。

視界に映るのはエルくんだけ。俺は今この世で最も美しいものを見ているのだと、何の疑いもなく信じられた。

「きゃー……きゃー……」

「おおお……！　ま、まさかこれほど濃厚なちゅーを見られるとは……！」

「あつ、もうダメ……耐えられない、死ぬう……！」

「ちよつと、尊死してる場合じゃないわよ！　これからがいいところなんだから！」

なお、そんなエルくんの向こう側ではこの世で最も醜い光景が繰り広げられているっぽいという事実が俺の精神の均衡を保つてくれているということは全く嬉しくない。けどありがたい。人は矛盾を抱えた生き物なんです。

「——ぶはあつ！　はあ、はあ……！」

しかしさすがのエルくんも、半ば無呼吸に近いほどバラエティに富んだキスをいつまでも続けられるはずもなく、ついに顔を離れた。それは俺にとっても僥倖で、酸欠に悩まされた全身が酸素を求めて荒い息をつく。酸素美味しい……！

「どうです、望み通りにしましたよ……！」

「うん、すごかったです」

謎のアホ共が思わず素直に答えてしまうあたり、エルくんのガチちゅーのインパクトは相当なものだったらしい。よし、この勢いで終わりに……！

「さすがに、もう先輩もくらくらしてきたみたいです。大人しく先輩とアディを解放しなさい」

「なに、くらくらする?!」

あ、ダメだこれなんか変なところに火が付いたつばい。

「それは大変だ！ 胸元を開けて楽にした方がいい！」

「いや下も……全部だ！ 全部脱がせよう！」

「二人ともね！ そしてそのまま追加のちゅーを！」

覆面の小さな穴から覗く血走った目。縛られて動けない俺の体に伸びてくる無数の手。

いつの間にもやら俺の体の上から降りて、こつちをちらと見た後服を脱ぎだしたエルクンの背中中の肌色と仕草がやけに色っぽく見えて。

……すげえ、絶望って人が作り出すものなんだ。

服の胸元を引きちぎるような力任せで開かれ、ズボンに手がかかった辺りで、俺の意識はなんかもう諸々耐え切れず、闇へと落ちた。



あ、これベッドの中にエルクンいるわ、というのが目覚めかけの脳裏にキラリと閃く直感だった。

さつきまで見ていた夢があまりにもアレだったため寝起きは最悪で、全身をじつとり

と濡らす汗が超気持ち悪いけど、こういう時に限ってエルくんがベッド入ってきているというのはいくらまでの経験則から分かっているんだよ！

この布団の中の温かさ、石鹸のようないい匂いに交じる鉄と油の雰囲気。間違いない。

……目を開けなくてもエルくんと一緒に寝てたんだな、と分かっちゃおうわが身の慣れが怖い。

とはいえ、またしても寝起き直後のガチ恋距離エルくんを見て失神するなどという無様は晒さない。人は進歩する生き物なのだからして、ここはさばつと起きて何事もなかったかのようにエルくんをスルーしてみせることこそ大人の証……！

いざ、爽やかな目覚めを！

「——あつ、先輩。おはよう、ございます……えへへ」

と、瞼を開けたのはまさかのエルくんとほぼ同時。

きよとんと開いた目がしゅつと細められていく。毛布で口元を隠したその表情に宿る色は「照れ」。

そして、もう一つ。

夢の中で見たのと同じ色の、ナニカ。

「すみません、その……変な夢を見ていたせいで、ちよつと先輩の顔を見るのが照れくさ

く……て……！」

「アツハイ」

うん、気持ちわかるよ。俺もあんな夢見たあとだからめっちゃ恥ずかしいよ。

……で、なんでエルくんも俺と同じ反応してるのかな？

「夢とはいえ、先輩とあんな、あんな……うひゃあ」

やめて。

なぜかちらちらと俺の唇見て赤くなるのやめて。

エルくんがどんな夢見たのかめちやくちや気になっちゃうからやめて。指で唇なぞったりしないで。

寝ている間、自分の体に起きたことが夢に影響するというのは割とよくある話。

なんか苦しい、と思っていたら腹の上で猫が寝ていた、みたいな。

じゃあ、しこたま濃厚なちゅーをする夢を見た俺の身には、一体何が起きたんでしょ
うねえ……？

あと、口元が妙に濡れてる気がするのは寝てる間によだれとか垂れちゃったからですよね？ そうですよね!!

「エルくん、疲れたろう。俺も疲れたんだ。なんだかとても眠いんだ……エルくん……」

「先輩!? それ死ぬやつですよね先輩!?」

夢の中では闇に落ちた意識が、今度は柔らかな光の中に溶けていく気がする。

ああ、お空の上にも大地がある。そこでなら、きつとまた新しい作物とか育てられるんじゃないかなあ……。

なお、その後割と本気で死にかけていて、エルくんによる「蘇生措置」のおかげで助かったらしいです。

具体的にどんな措置だったかは、アデイちゃんが聞いても教えてくれなかったらしいけど。



「……じー」

「ちよつと、なにジロジロ見てるのよアグリ」

「いや、ちゃんとヘルヴィが美人に見えるよなつて確かめた。良かった……俺はまだ大丈夫だ……最近二の腕がちよつとぷにぷにるところとかかわいと思うぞ……」

「やーねー褒めても何も出ないわよー。でも、そういうこと言うと出るわよ……あんた

の中身がね!!」

「ぐえええええええええええええええ見た目的には気持ちよくなれそうなサバ折りが地獄の苦痛を!?!」

番外編 銀鳳騎士団の終焉 或いは人類種の天敵

その時期を、フレメヴィーラ王国の最盛期と讃えても大きな異論はないだろう。

幻晶騎士の戦力増強はオーヴィニエ山脈以東においても人類生存権の安定的確立に大きく寄与して、人々は繁栄への道を歩み出した。

汎用性に優れたカルディートル。

機動力と輸送力に秀でたツェンドリンブル。

空中戦力として完成度の高いトウエディアーンネ。

それらのもたらす力は魔獣災害と隣り合わせだったフレメヴィーラ王国をして人口と流通の安定した発展を生み、広大な未開拓の土地たるボキューズ大森海という拡張性も有していることから、さらなる飛躍は確実視されていた。

新たな幻晶騎士を生み出した功績大なる銀鳳騎士団、そしてその中心人物たるエルネステイ・エチエバルリア。

それらの名は国内外を問わず轟きまわり、大森海奥地での巨人族との邂逅、浮遊大陸における動乱の中で果たした大立ち回りとさらにその後のあれこれにおいて権威と名声、そして実力は不動のものとなり、歴史に次々と名を刻んでいった。

フレメヴィーラ王国は変わる。

巨人族たちとの将来的な地続きの交流を目指した大森海内の交易路開拓計画は既に開始され、それに適した開発用幻晶騎士、フレメヴィーラ王国本土と開拓前線を繋ぐ「鉄道」の敷設、線路の上を走る列車型幻晶騎士の開発も銀鳳騎士団内で変な幻晶騎士を作ること定評のあった団員主導で行われ、体制は盤石となった。

そして、ならばこそさらなる最適化のため、国王は大胆な改革に着手した。

国内は安定と繁栄の中にある。

優先事業たる大森海開拓のため、資材や人材、幻晶騎士の集中的運用を決め、増加した人口を注ぎ込み、それらをより推進させるため。

銀鳳騎士団の解散を、決断した。



愚かな選択では、決してなかった。

「解散」とはいえその実態は発展的解消に近い。

現状の、エルネステイ・エチエバルリアの身柄と開発成果の保護を主目的として設立

された銀鳳騎士団としての形を一度なくし、現状に即した組織形態へと作り変えようとした。

当然団員達の功績にも報いるところ大であり、団長たるエルネスティに対しても入念な説明と説得を行い、そして莫大な報酬と栄達を約束した。

既に傘下とはいえ半ば独立した騎士団となっていた白鷲、紅隼両騎士団の完全な独立と、強大な魔獣との戦いが日々繰り返される大森海開拓最前線への派遣。

幻晶騎士開発に多大な貢献を果たした鍛冶師隊は丸ごと国機研の一部署として所属し、より確かで権威ある立場となる。

エルネスティは貴族としての爵位、報奨金、勲章その他諸々が山と積まれ、個人としてはフレメヴィーラ王国建国以来初にして今後も比肩する者はないだろう程の榮譽を得ることが約束され、それは誠実に履行されるだろうことが誰の目にも明らかだった。

銀鳳騎士団はさらに国と人類の未来に貢献する存在となり、エルネスティの名は改めて歴史に大きく刻まれることとなり、団長エルネスティはもとより騎士団員たちにも余すところなく将来が約束され。

規格外の出力を有するエーテルリアクタを備えたイカルガは、解体されることとなった。



ボキューズ大森海の開拓は、鉄道の敷設を主としている。

巨人族の生活圏までの距離は遠く、複数の宿場町を建設して徐々に道を伸ばしていくという壮大な計画で、その町と町を繋ぐのが新たな輸送方法、鉄路だった。

街道も並ぶ形で整備が進められているが、新たに開発された列車型幻晶騎士の速度と輸送力はツェンドリンブル立ての馬車よりさらに優れていた。

ただし、当然のことながら必要とされるエーテルリアクタ出力は莫大。現状は数基のリアクタを搭載することで間に合わせているが、イカルガの持つ皇之心臓、女王之冠があればさらに高速、高性能な機体を開発することが可能だと予想された。

当然、それらもエルネステイの所有となる。開発の前線と本土を往復することにはなるが、すなわち活躍の機会も増えることになるわけで、エルネステイにとつても悪い話ではなかった。

なかった、はずだった。

エルネステイは、この提案を了承した。

常と変わらぬ笑顔で国王に従い、オルヴェシウス砦に戻って団員達に事の次第を説明。これまでの働きに対する感謝を述べ、特別報酬を振る舞い、団員達の後の所属と体制を整えるために尽力し、最後には宴を盛大に開いて惜しみつつも銀鳳騎士団の歴史に幕を下ろした。

これからまた、新たな時代が始まるのだと誰もが思った。

砦をあとにした元団員達は今日までの思い出を一つ一つ噛みしめながら、少しの寂しさとなんげか挑戦への期待を胸に去っていく。

そして夜が明け、銀鳳騎士団のない新たな歴史が始まった、その日。

エルネステイ・エチエバルリアは、フレメヴィーラ王国への反逆を表明した。



オルヴェシウス砦にたった一人で立てこもり、一切の要求をせず、しかしイカルガの引き渡し断固拒否を通達。あらゆる交渉、説得に対して門戸を閉ざしていた。

讓歩も恫喝も通じない、沈黙をもって答える砦の門はエルネステイの心情そのものとさえ思えた。

当然、王国側も手をこまねいていたわけではない。しびれを切らして力にものを言わせようとした。

だが、相手はエルネステイ。相手はイカルガ。

少数精鋭部隊が蹴散らされた。

大軍の突撃は全てが瓦礫と化した。

師団規模の作戦行動はたった一機の幻晶騎士を前に崩壊の憂き目にあつた。

さもありません。エルネステイはかつて師団級魔獣をほぼ一人で倒した猛者。それが当時よりさらに強力な幻晶騎士を手に行っているのだから、国中の総戦力を結集したとして勝てるかどうか。

エルネステイに対する騎操士たちの持つ畏怖もあり、どうあつてもまともな戦闘による勝利は見込めなかつた。

一ヶ月が経ち、二ヶ月が経ち、このままでは割と深刻に長期化するのでは、という不安が王国上層部に染み入り始めたのがこのころである。

搦め手も幾度となく試みられた。

藍鷹騎士団による暗殺、あるいは破壊工作の類は砦内各所に仕掛けられていた罠に

よって失敗に終わった。エルネステイにさえ知らされていなかった秘密通路にまで割とシヤレにならないデストラップがあることが発覚し、全てが見透かされているのではという恐怖に駆られた王国側が手を引いたのは賢明と言わざるを得ない。

長きにわたりつつある籠城を支える食料補充手段を断つべく、砦の周囲に広がる畑を焼く案も検討されたが、それは旧銀鳳騎士団員が真つ青になつて止めた。

曰く、エルネステイが籠城策を取っているのはまさに畑からの食糧供給があるからこそ。その手段を断たれば略奪に走ることになりかねない。砦という固定された居場所を捨てれば、イカルガの能力でフレメヴィーラ王国全土、いやそれどころか航続距離を延ばす装備とか使つて大陸内を飛翔することすら考えられる。被害がどれほど拡大するか、予想できない。

最悪、他国にまで略奪の手を伸ばし、それを理由としてフレメヴィーラ王国に宣戦布告する国すら出る可能性も。

言われてみればの事実には王国首脳部は即座に焦土作戦の破棄を選択。結果、エルネステイはいっそのどかとすら言える籠城生活に入ることとなった。

なお、旧銀鳳騎士団員が畑を焼くのを止めた理由は、「んなことしたらヤツまであつち側につく」からだだったが、言つても信じてもらえなさそうだから口にはしなかつたのだとか。

事ここに至って、解決の目はほぼ消えた。

銀鳳騎士団の解散とイカルガ解体命令の破棄すら譲歩案として出したが、もはやエルネステイは聞く耳を持たず。死者こそ出ていないが破壊された幻晶騎士の数は目を覆うばかりで、この事態は間違いなくフレメヴィーラ王国建国史上最大の被害をたたき出している。

オルヴェシウス砦は多数の部隊、無数の幻晶騎士によって遠巻きに包囲されているがもはや誰一人として近づこうとせず、国土の中にぼつかりと空いた無人地帯に青々とした畑だけが広がっている。

元より数多の活躍と実力から多数のあだ名が付けられていたエルネステイに、新たな呼び名が加わるのは必然だったろう。

決して勝てないその力を評して曰く「人類種の大敵」。

さすがに整備の手が回らないのか、防錆加工で黒く染まったイカルガの装甲を指して「黒い鳥」。

もはや、エルネステイを止める手段はないと思われた。

ただ一人、あの男の帰還を除いては。



「……久しぶり、エルくん」

「はい、とつても会いたかったです、先輩。先輩が大森海の開拓に向かつてからは時々しか会えなくて、もう半年ぶりくらいですか」

オルヴェシウス砦前。2機の幻晶騎士が対峙する。

いや、「幻晶騎士」と単純に評するにはどちらも異形に過ぎる。

鬼面六臂のイカルガ。コックピットから身を乗り出すエルネステイはいまもって往時の面影を色濃く残す幼げですらある顔立ちで、国家に刃向かう大逆人となったことに無自覚とさえ思える笑顔を浮かべている。

対する男が乗っている機体は巨大の一言。

通常の幻晶騎士に倍する巨体は明らかに人型のものではなく、太くたくましい脚部、短めながらも強靱な腕、長くしなやかな尾と鋭いキバがざろりと並ぶ口すら備えたその様は、どこか〈竜〉に近くもあつた。

大森海開拓の最前線に駆り出され、尋常ならざる巨木をなぎ倒し、地を均し、時折現れる師団級魔獣をすら屠る人類の切っ先を担う専用機。かつて巨人族と出会った大森

海探索の折りに入手した超巨大触媒結晶から作られたエーテルリアクタを有する、おそらくイカルガと互角に渡り合える唯一の存在だった。

その開発者にして操縦者、アグリ・ボトルが、帰ってきた。

「二応聞いておくよ。この騒動、収める気はない？ なんなら俺も一緒に全力で謝り倒すから。もしくは、いつそ大森海の奥の方で新しい国でも作るとか。銀鳳騎士団の人たちならついてきてくれるだろうし、一番穏便だよ？」

エルネスティの説得、あるいは……。アグリに下された指令はそれだった。

アグリ自身は殴り合いになった場合ヒドいことになる気しかしないので説得に全振りのつもりでいる。ここまで近づく間に攻撃されなかったことからして脈があるので。

は。

そう思っていた。

エルネスティの顔を見るまでは。

「——ふ、ふ、ふ」

「……………そうなるんじゃないかと、思っただけだよ」

返事は、コックピットに戻ることであった。

笑い声はししかかつてと同じく、心底嬉しそうなもの。

錯乱したのでもなければ狂ったのでもない、エルネスティはエルネスティのまま、こ

の選択をしたのだと思いい知るには十分だった。

『すみません、先輩。好きなように生きて、理不尽に死ぬ。それが僕のやり方なんです』
「知ってた」

飛び上がるイカルガ。アグリもまた機体に戻り、前傾して長い尾をカウンタウエイトとする疾走形態へとモードチェンジ。

オルヴェシウス砦は開けているが畑に囲まれている。戦闘には適さない。言葉を交わすまでもなく、二人は戦いにふさわしい舞台を求め移動を開始。

周辺を包囲していた幻晶騎士部隊は陸空問わず道を開けた。その行く手を阻もうなどという考えは、指揮官から一兵卒に至るまでひとかけらも湧かなかった。

ただ去り行く2機の幻晶騎士を見送り、呆けたのちに状況を思い出し、追いかける。

それはまるで、人類の中でたった二人の先駆者と、どうあがいてもそれに追いつけない他の全てを示すかのようなであった。



戦いが、始まった。

だがその詳細な記録は残っていない。

エルネステイとアグリが戦いの場を選んだのは周囲を森に囲まれた一角。大して開けた場所もないはずだが、圧倒的な破壊を振りまく2機にとつてそんなものは大した問題にはならず、遅ればせながら駆け付けて周囲を封鎖した騎士団の者たちは「森より高く跳ねあがる樹木」「雨が降ってきたのかと思つたら、粉々に砕かれた大岩の破片だった」「疲れのせいかふらふらする、と思つたら地面が揺れた。多分二人の戦いのせいで」などなど、森の木々越しに遠巻きにすることしかできなかつたため、実際なにか起きていたかは不明ながら、数々の影響と余波の証言が残っている。

戦いが一昼夜以上続いたことは間違いない。

時折飛んでくる根本からへし折れた大木、空に伸びる異常なほど強力な法撃、幻晶騎士たった2機が引き起こしているとは思えない地面と空気の振動。そして無数の爆発音、激突音。それらが間断なく響いてくるその場に突入しようなどという判断は誰一人下せず、結果ただ遠巻きに「何かが起きています」ことを見守るしかなかった。

日が沈み、夜が明け、厚い雲が空を覆い始めた。

大規模戦闘でもなければそうは見られないほどの強力な法撃が多数使われたせいだろうか。大気の状態すら乱れたらしく大粒の雨が降り出したのは、厚い雲のせいで正確な時間はわからないものの、夕刻前だろうと言われている。

夏の嵐のようだった。

大きく、重く、生ぬるい雨粒。ぼつぼつとまばらに降り注ぎ、土を耕すような勢いで、すぐに少し先さえ見通せないほどになったという。

直近の部隊員との意思疎通にすら難儀するような、天の底が割れたのではと思わせる大雨。

しかしだからこそ、エルネステイとアグリ戦闘による空気の震えは空中の雨粒を跳ね飛ばして可視化される。変わらず、いやむしろ増大した勢いで激しい戦闘音が轟く。

世界が、終わる。

どちらかこの戦いに勝利した側が生きて帰ってきたとして、それは人が御しうるものなのだろうかという絶望が脳裏をよぎってしまう。

この嵐は、フレメヴィーラ王国を襲ったたった一人の天敵は、まさに世界が何もかも変わり果てる前触れなのではないかという予感がして。

ある時を境に、沈黙が落ちた。

雨は降り続けている。雨音ははまだ激しい。

だが、戦闘音が、やんだ。

騎操士たちは顔を見合せた。

何かが起きたのか。何かが終わったのか。

確認に行くべきか。だが何が起きたのかわからない。戦闘に巻き込まれたら何が起きるか。

決死の覚悟で戦うことすら辞さないはずだった勇猛果敢な騎操士たちであるが、事ここに至っては「向こう側」の戦いを自分たちのそれと同じ次元にあるモノとは認識できていない。

まさしく神話の戦いがそこにある。

紛れもなく、彼らの胸中には確かな認識としてそうあった。

調査の強行も撤退もできない迷いの中。

——ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!!!!

光が、天へと突き刺さった。

誰もが振り向き、その瞳に一筋の極光を焼き付ける。

地から空へ、まっすぐに駆け上がる青白い光。

あれは法撃だ。それも、尋常ならざる威力を秘めた。

事実、地上から放たれながら豪雨を貫き雲へと突き刺さり、吹き荒れる爆風が厚い雨雲を蹴散らし、なんとその場に青空を顕現せしめたのだから。

長く続いた光の奔流が終わる。

雲に空いた穴からは太陽の光が降り注ぎ、空中に満ちる水滴が煌めいて神の降りくる道のように。

神話が終わったのだと、思い知らされた。



その後。

長く長く様子を伺い、しかし何の変化もなかった。

意を決したフレメヴィーラ王国の騎操士たちは戦場中心部の調査を決行。

踏み入った決戦地には「何もなかった」。

少なくとも、エルネスティとアグリの機体の破片らしきものは確認できたが、どう考えても両機の総量には足りていない。戦闘中に発生した損傷、それもごく軽微なものに由来するだろうと思われる程度。

当然、逃走を察知できないほど雑な包囲など敷いていないのだから、どちらか、あるいは両方が朽ちてこの地に残っているのだと推測されたが、どれほどくまなく搜索しても機体そのもの、あるいは操縦者たる二人の姿は発見できなかった。

他にも不思議なことはあった。

破壊の爪痕が生々しく残り、木々がへし折られ大穴が開いた決戦跡地に残されたいくつかのもの。

くまなく法撃にさらされただろう地上に似つかわしくないほど青々と草木の芽吹く土くれ。

恐ろしく分厚い地下の岩盤にぞつとするほど鋭く穿たれた穴から湧き上がる地下水。そして、どれだけ温めようと季節が廻ろうと決して解けない謎の水。

この地で繰り広げられた戦いがどれだけ激しく、また人知を超えていたかが察せられる異常だけが姿をさらす。

その後も、二人の行方は不明のままだった。

フレメヴィーラ王国は事件の情報を嚴重に管理し、詳細の公表は差し控えられた。

おそるおそるながら大森海開拓事業も再開され、エルネステイたちの活躍を見込んでいたころよりは進行速度を下方修正して継続。相応の成果を上げ、苦難と繁栄を繰り返しながら歴史は流れていった。

エルネステイとアグリの決戦の地はもともと開発の予定もない僻地であったため保

護の名の元に隔離され、人が立ち入ることはない。

徐々に草木が戻り、破壊の爪痕をうつつすらと残すだけの野原へと、姿を変えていく。その地に足を踏み入れる者はもはやいない。

近くの村に住む者たちは、そこを「神々の地」と呼んで静かに敬っている。だから、誰にも邪魔されることはなく。

ただ二つ、寄り添うように並ぶ無銘の石碑だけが、静かに最期の地を見守っている。いまも、これからも。

銀鳳騎士団。

その名は伝説の中のものとなり、世界中を駆け巡った英雄たるエルネステイ・エチエバルリアの名もまたしかり。

だが不思議と人々は彼のことをこう呼ぶようになった。

「黒い鳥」。

全てを黒く焼き尽くす、死を告げる鳥、と。



「みたいな最期って、憧れますよね!!!」

「憧れねえよエルくん」

日もとっぷり暮れて、ランプの炎がゆらゆらと照らすエルくんの顔は、自分の性癖を語ってりつりつりに輝いていました。

瞳の中が怪しい光でどろりと揺れているのは、炎のゆらめきのせいだと信じたい。

「えー。……でも、実際のところ僕ってそろそろ有名になってきたじゃないですか」

「その認識、5年くらい前に持つておこう?」

「だから、こうやって自由な終わり方はできそうもないかなって。……はあ、このままじゃイカルガのコックピットじゃなくてベッドの上で死ぬことになりそうです」

「普通はそれが理想だから。というか、現時点でイカルガに乗ってるエルくん倒せるのなんてそうそういないから」

エルくんの妄想独演会。

本日のお題は「理想の死に方」。

ベッドの上で大往生、などという常識的な発想をエルくんに求めていたわけじゃなかったけど、なんで俺が小惑星改造の宇宙基地落としを単騎で止めようとする因縁のパイロットみたいな枠になってるんですかねえ……。

「まあ確かに、それも残念なところの一つです。このままだと割と真剣に希望の花の繋

いだ絆だけが胸の中に残りそうですから」

「生まれエルくん。いろんな意味で」

いかん。最近色々忙しかったせいかエルくんのご機嫌が斜めらしく、妙に際どいところを抉ってる。仕方ない、近いうちにエルくんの興味を引きそうなおもちゃと^{新装備}か開発してあげよう。それで少しは収まればいいんだけど。

というか。さっきの話で気になることが一つ。

「それより、今の話にアデイちゃんが出てこなかったのはなんで？」

「いやですねー先輩。さすがにアデイがいるうちはあんなことできませんよ。……もし、僕がアデイと出会っていなかったらそういうこともあったかも、っていう空想のお話です」

「……………そう」

疑問は解決した。

そして、この世界の真理が一つ明らかになった。

この世界の平和は、ただ一人。

アデイちゃん存在にかかっているのだと。



「よし、できた……い！ エルクんの妄想に出てきた、山だろろうが城だろろうが畑に変える収束荷電エーテル砲、名付けて滅殺開墾ビ……」

「そこまでよ、アグリ。いますぐその設計図を捨てるか、この場で命を捨てるか選びなさい」

「……うん、ありがとうヘルヴィ落ち着いた。さすがにこれはヤバイよね。エルくんにあてられてちよつとトチ狂ってたわ」

「賢明な判断で助かるわ。……あと、あなたは最初から団長並みにトチ狂ってるから関係ないわ」

「ひどくない!?!」

番外編 特別訓練「絶対に笑ってはいけない銀鳳騎士団」

フレメヴィーラ王国に、世のしがらみとは無縁の騎士団がただ一つ存在する。

設立の経緯は貴族に拠らず王命のみを根拠とし、ただ一人の身柄の安全と、その者が作り出すものへのみ責を負う。

ゆえに重責もあり、苦勞も多い。

しかしその騎士団に所属する者たちは（一人を除いて）誇りを胸に日々の鍛錬探求に邁進する。

人類の革新。幻晶騎士の先鋭。セッテルンド大陸史上最大級のド変態のワクワクおもちゃ箱。

その名は、「銀鳳騎士団」という。



銀鳳騎士団の団員達に求められる水準は、高い。

鍛冶師隊はエルくんの荒唐無稽にして人跡未踏の新技术を実現するために試行錯誤

更地に還るヤツかもしれないから、止めなきやなんだろうなー。

畑の草むしりの手を止めて、首にかけた手拭いで汗をひと拭き。横で伏せるグランレオンを見上げて目を細める。

ああもう、今日もいい天気だなあ。

……とりあえず、お茶飲んでから行こうか。喉渇いたし。

少しでもエルくと戦うのを引き延ばそうとしてるわけじゃないよ。断じてないよ。



さて、そんな銀鳳騎士団の日常の中には、エルくんの非凡にして先進的なアイデアの発露がそこかしこに差し挿まれることとなる。

銀鳳騎士団の本領たる幻晶騎士関連技術や新設計、ソフト面での改良などは息をするように出てくるし、先に述べたような訓練への乱入も、稀によくあるテンションぶつ壊れ状態を含めて騎士団として高い戦力を求められることもある銀鳳騎士団関連組織としては割とよくある必須の話。

そのいずれもがほかの騎士団では決してお目にかかれないうなものばかりで、それ

らを支えるのはひとえにエルクンの自由にして奔放な発想によるところ大なわけで。

「というわけで、『絶対に笑ってはいけない銀鳳騎士団』の企画を用意しました」

「……帰る！ 俺ユシツダ村に帰るー！」

時々、なんかもう一言目の時点でヒドいことになること請け合いなネタがぶつ飛んでくることもあるんです。急激に成長した里心に、休職申請を出したくて仕方がない。

まあ、以前本当に出したら銀鳳騎士団よりさらに上の方で有耶無耶になつたらしくて握りつぶされたけど！ 銀鳳騎士団の上とか国王陛下しかいねえよバカ野郎！

「まずは、やはりその辺り『わかっている』僕と先輩とで協議とブレーストーミングの後に企画を本格始動させて検討と準備に入ろうと思います。なのでひとまず今日は僕の出した案を説明させてもらいますね？」

「エルくん純粹培養の企画とか既に頭痛いんだけど」

そして、エルくんはこういう時に限って俺の話を聞いてくれない。

これは俺に限った話ではなく、楽しいことを思いついたエルクンのよくある暴走だからいつものことっちゃことではあるんだけども。

こういう、『前提知識を共有した』打ち合わせのためにエルくんが俺一人を会議室に呼び出すことは普通にあるからと油断していたが、これはよくない。

……いやだつて、あの企画ってことは一から十までロクでもないことするに違いないから。

「待とう、エルくん。一応仮にも銀鳳騎士団の訓練ってことは、騎操士としての技量になにがしかの貢献をする必要があるってことだ。その企画で、一体何が鍛えられるのさ」
「それは無論、精神です。儀仗兵に限らず騎士たるもの儀礼や式典への参加は必須。そのときうつかり笑ってしまったたりしない、鉄の精神を鍛えるんです！」

「騎操士は幻晶騎士に乗って参加するから笑つてもバレないよね？」

「……そういう訓練の場合、某軍隊では愉快な人形を使って兵士の忍耐を鍛えたと言います。僕たちもそれに倣おう、というのが企画の趣旨ですね」

あ、都合の悪い指摘を無視し始めた。いかん、これなにがなんでもこの企画通すつもりだ。

こうなつてくると、正直俺の手には負えない。エルくんの持つ権力と立場、そしてプレゼン能力を以つてすれば100%趣味の思いつきに実利のガワを被せて通す、なんてことは普通にやってのけるだろうから。

「というわけで、ひとまず特別ゲストとして先王陛下をお呼びしようと思います」
「ねえエルくん、不敬罪って概念知ってる？」

「こちらが、先王陛下からのお返事です。超ノリノリでOKしてくれました」

「何考えてるんスカ先王陛下。てーかももう根回しまで済んでるし」

そして、俺がちよいちよい配達を頼まれる親書でよく見る紋が押された書類をぺらりと出すエルくん。確かに、その中には先王陛下が直々に訓練を視察にくる、とあった。

お分かりいただけるだろうか。これ絶対にその時まで訓練参加者に知らされず、しかも小芝居やらかして銀鳳騎士団員の表情筋と腹筋に極刑を言い渡すヤツである。

企画説明最初の段階からして絶対に笑ってはいけない（斬首級）銀鳳騎士団になりそうな状況に、戦慄を禁じ得ない。

「どうですか、先輩！ とっても楽しいことになりそうでしょうか？」

「……………ソウダネ」

大体この辺りで、俺は悟った。

この企画はもう止まらない。そして、この時点で企画を説明されているということ、俺は訓練の側には加わらない。

ならせめて、一人でも多くの団員が生還できるよう、この企画をまともなものに軌道修正する。

ただそれだけが、みんなのためにできることなのだと。

頑張ろう。多分、銀鳳騎士団の存続は今、俺の手にかかっているかもしれない。



「では、先輩はひとまず泥のプールを作っておいてください。3つくらい」
「ハイ」

……これはもうダメかもわからんね。

その後、本気で団員が腹筋崩壊太郎しそうな案だけは畑に賭けて阻止し、多くの団員には子細を漏らさず極秘裏に準備が進められた。進められてしまった。

すまん、団員諸君。一回やればエルくんも満足するかもしれないから、とりあえず生贄になってくれ。



その日は、抜けるような晴天だった。

空は青く、雲は白い。風は涼しく、草木はさよさよと揺れている。

思わず鍬の一つも持ってまた新しい畑を開くか井戸でも掘るか、と当てもなく土の音を聞きたくなるようなそんな日。

「——それでは、ただいまから騎操士として必要となる精神鍛錬を行います。ルールはただ一つ。『決して笑わない』こと。みなさんの奮闘を期待します」

それが、銀鳳騎士団員の命日確実みたいな訓練の行われる日となった。

若手を中心とした並み居る団員たちを前に、堂々と訓示を述べるエルくんの姿は小柄で美少女じみているながらもこれまで積み上げてきた歴戦の風格を確かに感じさせ、エルくん主催の極秘訓練への参加に名乗りを上げ、団員たちの間で繰り広げられた選抜を生き残った精鋭たちをして興奮させるもの。

あと、ついでに会場の隅っこで様子をうかがってたアデイちゃんの目がとろとろと潤んでいく。発情してるんじゃないやありません。

だが俺は、俺だけは知っている。

これから彼らに待ち受ける過酷という程度の言葉では言い表せない地獄のほどを。どうか生き残ってくれ。俺はただそれだけを、祈った。

そして、訓練が、始まった。

「まずは国境警備、あるいは検問時の訓練です。これからある人物がここを通ろうとし

ますので、皆さんはそれぞれの考える『適切な対処』をしてみてください」

エルくんでは、こつちじや誰も知らないからって大喜利みたいなこと言い出した。

鍛冶師隊が仕事の合間にはぱっと作った張りぼて検問所セットに配置される団員一同。

当たり前のように顔をそろえているエドガー、デイトリヒ、ヘルヴィの筆頭騎操士3人に加え、各騎士団から選りすぐられた新人や古参の団員達。エルくんが考えた訓練だから一筋縄でいくはずもない、という警戒もあらわに緊張感を漂わせ、さつそく物陰から姿を現した検問を通ろうとする旅商人役の人物を呼び止めた。

「止まれ。現在検問を実施中だ。ここを通るのならば荷物を検めさせてもらうことになる」

少し声が固くて居丈高かな、と思わなくもないけど、いつぞやクシエperl王国に行ったとき、ジャロウデク王国の兵士が国境警備してたときはこんなもんじゃ済まなかったしまあ許容範囲かなと思う。

その辺りで採点されることになるからしつかり勤め上げないと。

……そんな風に思っているんだろう。そこは罨でしかないのだけど、ね。

検問を訪れた旅商人はフードで顔を隠し、馬車に大きな木箱を1つ乗せている。

あの木箱の中身、与えられた役割的に考えて検めないという選択肢はないだろう。

「いえ、ですがこの荷物は、そのう……」

「むっ、悪いが我らも役儀がある。その中身、確認させてもらおうぞー!」

なお、この訓練のエキストラ役は藍鷹騎士団の皆様でお送りしておりますが、顔は印象に残らないのに演技に違和感は全くないあたり、正しく潜入と浸透を任務とするニンジャです。

ともあれ、そんな自然にして迫真の演技で躊躇う姿を見て何かあると察したエドガーは躊躇いなく荷台に乗り、木箱の蓋に手をかけた。

気心の知れた同期のデイトトリヒとヘルヴィが木箱を固定していた縄をほどき。

「……………えっ」

傍から見ていると固まるエドガー。

「む、眩しいではないか」

箱の中から聞こえてきた、なんとなく聞き覚えのある威厳に満ちた声。

「ふう、昼寝には向かんのう、この中は」

「えっ」

箱の中からのそりと現れたのは、虎か、獅子か。

「元氣そうだな、皆の者。アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラである」

いや、先王陛下である。

銀鳳騎士団員、絶句。

なお、当然のことながらこの状況で笑いだせる団員はおらず、エルくんは大層不満げにしてました。無茶振りが過ぎるぞエルくん。



……エルくんの発想は本当に恐ろしい。

そのことを改めて知らしめる訓練となった。

訓練を終えたあとはまさに死屍累々の有様だった。

あちこちで倒れ伏し、絶望に膝を屈した団員達のうめき声が地獄の交響曲となって地を汚し、風を腐らせる。

サプライズゲストである先王陛下の華麗な登場に始まり、その後もエルくんプレゼン

ツによる企画の波が繰り返し押し寄せ、団員たちはそのたびに打ちのめされた。

『エドガー、デイトトリヒ、アウトー』

「おい待て、今の声はアグリだな!？」

「やはり君も一枚噛んでいたのか! こつちへ来て君も参加を……あ痛あ!？」

「え、もしかしてアウトって言われたらお尻引つ叩かれるの……?」

最初の犠牲者はエドガーとデイトトリヒ。

覆面姿でどやどやと入ってきた藍鷹騎士団のみなさんに柔らかいんだけど叩かれると痛い棒で尻を張り飛ばされて、これから己が身に降りかかるだろう災厄を知って震えるヘルヴィたちその他団員の皆様。

ごめん、それはまだ序の口も序の口なんだ……。

「それでは、ここで銀鳳騎士団の皆様へ宛てられた手紙を読み上げさせていただきます。前日魔獣の襲撃から守った村の女の子から預かってきたものです」

ノーラさんによる、手紙の朗読。

これまでも何度となく笑いを引きずり出され、その度に尻を張り飛ばされて心が折れかけているみんなにとっては癒しの時間となる事だろう。

「——みなさんのおかげで、お父さんもお母さんも、私も元気です。本当に本当に、ありがとうございます」

落ち着いた声で読み上げられる、少女のものだという素直でまつすぐな感謝の気持ち。騎士として、銀鳳騎士団として数々の活躍を経験してもなおその喜びは変わらない。フレメヴィーラ王国において、騎士として人の営みを守る。その尊さを改めて噛みしめる事もまた、騎操士の有り様には不可欠なものハズで。

「そして最後に。——全員、タイキック」

「えっ」

そして、そんな心の動きを完璧に読み切ったうえで、幸せの絶頂から藍鷹騎士団の人たちが無駄に鍛え上げた体術による蹴りで地獄に叩き落すエルくんは悪魔だと思いません。



『ヘルヴィ、アウトー』

「ちよつ、待ちなさい！ 今のは違う、違うから……っきゃー!?」\スパーン!／

『ダーヴィド親方、バトソンくん、アウト』

「おい待ていつの間に俺らも組み込まれてぎやああああ!?」\スパーン!／

「やめてやめておいら関係な、ああああ!!」\スパーン!／

『ゴンゾースくん、アウト』

「うおおおおお!? これが銀鳳騎士団たるための試練というのならば、耐えて見せ

……ぬわーっ!」\スパーン!／

「エドガー、デイトトリヒ、ヘルヴィ、アウト』

『全員、アウト』



「いやー、みなさん実によく経験になったようですね、先輩!」

「……この地獄を作り上げてなお笑顔でいられるエルくんはどうか止めたほうがいいんじゃないかって、最近真剣に思うんだ」

これまで銀鳳騎士団として、俺はいくつかの戦場を渡り歩いてきた。

倒れた兵士、破壊された幻晶騎士、焼け落ちる砦。この世にあらわれた地獄のような光景も何度か目にしたが、今の状況はそれにも迫るのではなからうか。

エドガーたち元中隊長3人は息も絶え絶え。

その他団員たちは、尻を叩かれすぎて座れもおお向けになれもしないらしく、うつぶせになって尻を突き出し微動だにしない。

すまない、許してくれみんな。こうなることが分かっていたけど、止められなかった……！

たとえ相手がエルくんとはいえ、ここまで企画を通してしまったことは慙愧に堪えない。

だが、しこたま尻バットとタイキックをかましたことでエルくんも満足しただろう。これならしばらくは悲劇が繰り返されることはないはず。きみたちの尊い犠牲が、平和を生み出したのだ。そう思ってくれ頼むから。

エルくんの思いつきと行動力に巻き込まれるのは大災に遭ったのと同じだと思つて欲しい。

何も難しく考えることはない。雨が風が大地の揺れがどれだけ畑を潰そうとも復讐できるものでもないし、そんな感じなのだとな得を……。

「……待ちなさい、まだ一人、訓練受けるべき団員がいるわよねえ……！」

「ヘルヴィ!? まだ生きていたのか! つていうかなんで俺の足をがっしり掴むの?」

エドガーとディートリヒも無言でしがみついてくるの!?! ……ハッ! やめてください

いノーラさん! なんて俺の後ろに回り込むんです!?! ……まさか、謀つたなエルくん

!?! 最初から俺も巻き込むつもりで……! —アッ——!?! \スパーン! /

できるわけないよね、うん。



なお、この訓練はあまりにも危険という団員達満場一致の訴えにより、団長権限ですら覆せない永久封印措置をくもらいましたとき。残念ながら当然である。



「封印されてしまったのなら仕方ありませんね。次は騎操士としてのランク付けをする、銀鳳騎士団格付けチェックを……」

「次こそ本気で止めるよエルくん」

「では、騎操士の実力やその他教養などの才能査定ランキングで」

「アデイちゃん、エルくんと一緒に一週間くらい二人つきりでどこか遠くに旅行とか行ってくれない? そうしたら邪念も消えるだろうから」

「バツチこいです!!!!」

平和とはあまりにも得難いものであることを、俺はこの世界に来て改めて知りました。泣きてえ。

変態は惹かれあう。しかも浮遊大陸で

セツテルンド大陸の人類史を振り返る際、飛空船の誕生は幻晶騎士と並ぶ紙幅を割いて語る必要のある重要事項である。

オーヴィニエ山脈以西に人類の生存権を確立した幻晶騎士に対し、その幻晶騎士による防衛戦略に改革を余儀なくさせる航空戦力の登場は、海を山を越えていく探索範囲の圧倒的な向上を生み出し、人類に変化と革新を促した。

同時期に幻晶騎士もまたそれまでとは比較にならない速度での進歩を見せた結果、人類の持つ戦力は圧倒的に増大する。

その時代への狭間にはいくつもの物語が生まれた。

一夜にして滅びた大国。そして奇跡の復興。

大森伐遠征、再び。

そして、浮遊大陸の発見もまた、飛空船のもたらしたものの一つである。



「……………機関出力、通常に戻せ。ただし警戒は怠るなよ」
「アイサー、若旦那」

空に行く、最新にして最速を誇る飛空船、黄金の鬣号。ゴールドヘイズ

フレメヴィーラ王国由来のマグウスジェットスラスト搭載型であるこの船は、速い。

それはもう、かつて倒したはずの最強飛空船、飛竜戦艦の新型と遭遇してもなお逃げ切ることができるほど、である。

幸運もあつた。

ハルピユイア奪還のため、イレブンフラッグスと交戦状態にあつたこと。

イレブンフラッグスの船の方が数が多く、巨大で、足が遅かつたこと。

飛竜戦艦がかつて戦つたものよりも巨大で、それゆえに速度に劣つていただろうこと。

母艦として小型飛竜戦艦のような空を飛ぶ機体を大量に吐き出してきたうえにそれらもマグウスジェットスラストを搭載していたとはいえ、ほとんどの戦力がイレブンフラッグスを狙つたこと。

それらの結果として、エムリスたち一行は襲撃を振り切ることができた。

見渡す限りの空と浮遊大陸に、あの巨大な人造飛竜の姿は見えない。ひとまずは、安心だ。

「やれやれだ、イレブンフラッグスだけでも面倒だというのに、どこのものとも知れない飛竜まで出てくるとはな。思った以上に面白……大事になりそうぞ」

「若旦那、ひとまずどうします？ 行先は……」

「ふむ、それも決めないといかんなあ」

だが、あくまで一時的な安全に過ぎない。エムリスは宙を見ながら考え込む。

そもそもは、空飛ぶ大陸の噂を聞いて果て無き冒険スピリッツをちよつと抑えられなくなつて首を突っ込んだことが始まりだった。

そんな噂がエムリスの耳に入るということは、当然他国にもその情報が出回っているということ。別勢力との遭遇が起きることは予想していたが、まさかその別勢力が既に拠点を築いてなにがしか商売の算段まで付けていたというのは予想外と言うほかない。

しかもこの大陸に足を踏み入れた勢力は一つだけではなく、あの飛竜戦艦まで姿を見せた。

かつての大西域戦争で示した力に勝るとも劣らず、イレブンフラッグスの重装甲船を一撃で沈める様は思い出すに冷や汗が出る。

しかも、空中戦を本格的に想定していると思えない、小型飛竜戦艦ともいべき戦闘飛空船。

黄金の鬘号も船としてなら負けていないだろうが、なにせ相手は数が多い。まともに

当たればまず勝ち目はないだろう。

しかもこちらはシユメフリークとハルピユアの寄り合い所帯。黄金の蠶号だけなら最悪出くわしても逃げるといふ選択肢があるが、シユメフリークの飛空船にはそれも難しい。そもそも遭遇しない、あるいは遭遇しても戦闘にならないように立ち回る必要がある。

未開の大地の空を行く飛空船を乗り回していると海賊の長のようにはしか見えないが、それでもエムリスは紛れもなく王族。こういったときに高所大局から物を見る目は備わっている。一応。

「行くところが決まってないのなら、とりあえず僕たちの村に行く？ 助けたハルピユアのみんなも休ませたいし」

「なるほど、それはいい！ 腹も減ったし、そろそろ客人を休ませたいしな！」

ただ、エムリスはその辺を考えた上で、それでも自身の直感とその場の勢いに身を任せて行動してしまうだけなのだ。

こうして、エムリス率いる陣営は半ば以上成り行きからエージロ達の村へと身を寄せることになる。

キッドと、偶然から同道したシユメフリークをつなぎとしての交渉と情報交換がなさ

れ、ひとまずこの村を拠点とすべく人間の住処を地上に作り、となし崩し的に環境が整っていく。

キッドたちが持ち込んだ幻晶甲冑という建築にも使えるものがあつたのに加え、銀鳳騎士団出身者はフレメヴィーラ王国にいたときにとある農民から小屋くらいなら作れるように色々教わっていたので、速やかに人の村のようなものさえできていく。

なお、当の農民がこの場を見た場合、小屋の出来には合格点を出す一方、畑がないことに不満を示すだろう。とてもどうでもいいが。

「我らシユメフリークは、かつて空の大地と関わり、以来交易を行ってきました。飛空船の誕生によつて他の者たちも知ることになるだろうと危惧して駆け付けたのですが……遅かったようです」

「やれやれ、俺たちは冒険するつもりで来たわけだが、あいつらはなんなんだ？ 一国ではないどころか、あれほどの戦力を投入するのとて安くはできまい。下手したら破産するぞ」

「……若旦那、それは俺から」

そこでようやく腰を据えて改めての状況確認の中で判明する。

イレブンフラッグスという生粋の商人集団が飛空船の大船団を寄越す理由。

おそらく現時点でなお世界最強クラスの戦力である飛竜戦艦を投入するに値すると見なす根拠。

「この大陸には、信じられないくらいの量のエーテライトが埋まつてる。そこらに転がってる石がそうだし、地下にはどれだけあるか、わかったもんじやないくらい」

「……なるほど、そりゃあ血眼になるはずだ」

空は人の手が届くものになった。

逆に言えば、手を届かせていなければ戦の際に同じ舞台に立つことすらできない領域と化した、という意味でもある。かつて、飛空船が投入された初の戦役においてクシエペルカ王国が一夜で滅ぼされたことはセツテルンド大陸においてとてもとても記憶に新しい。

飛空船そのものの建造自体は船の技術の延長でもあるので、作るだけならなんとかする。

だが空に浮かべるためにはどうしても、大量のエーテライトが必須となる。

それが、無尽蔵に近い量を供給できる大地。黄金が空に浮いている、というのと何も変わらない。

「こうなると、いつそ国許の戦力も呼び寄せる必要もあるほどだな。……が、それを待つ時間すらない」

「……」

重苦しい沈黙が満ちる。

状況は絶望的の一言に尽きる。いま足をつけている大地は無数の大食漢にしばまれるパイと化し、切り分けるためのナイフには世界最強にして最大のもので持ち出されている。

元々この地に住むハルピユイアのことを、ただの魔獣の一種とみなしたまま。

当人として、友として、そして冒険者として、おそらく最小の勢力にできることは。

思い悩み、言葉が詰まり。

「——というわけで、俺たちは全力でやつらに嫌がらせをしようか!!」

「えっ」

それを笑い飛ばす勢いによって、奇しくも最善の行動に着手することとなるのであった。



フリーデグント・アライダ・パーヴェルツィークは、セツテルンド大陸西方の北域に覇を唱える大国、パーヴェルツィーク王国の第一王女である。

年の頃は少女と言って差し支えない若さであるが、沈着な立ち居振る舞い、明晰な思考、そして容貌の美しさは他国にも知れ渡る賢姫だった。

だが、それらの評でさえ彼女を語り表すには足りない。

なぜならフリーデグントは姫として讃えられる数々の他に、自ら外征へ赴く覇気すら備えているからだ。

「王女殿下にご報告申し上げます。イレブンフラッグスの築いた鉱床街がまた一つ我らの手に落ちましてございます」

「うむ、ごくろう」

いま、フリーデグントが座すのは豪華な城の玉座ではなく、飛竜戦艦二番艦ヘリンドヴルムンの艦橋である。

戦闘艦として無駄を削ぎ落されたこの船の中でも数少ない広く、贅を凝らした作りになっているのはフリーデグントの存在あればこそであり、こうして前線へとその身を置くことがただの気まぐれではなく、飛竜戦艦設計の段階からの固い意志であることがうかがえる。

「騎士たちの様子はどうか。けがなどないか？」

「はっ、ご心配には及びません。我が方の幻晶騎士、シユニアリーゼは損耗なくイレブンフラッグスの幻晶騎士を蹴散らしております。……むしろ、騎操士たちの慢心に注意が

必要なほどかと」

「ふふつ、そうか。まさかそのような危惧が生じるとはな。強大過ぎるといいうのも考え物だ」

そんなフリーデグントの表情も自然と綻ぶ。

飛竜戦艦という名は大西域戦争において伝説となった最強兵器。それを手に入れられる、という言葉はあまりにも甘美で、しかしやすやすと信じられることなく、乗るか否かは半ば以上賭けだった。

が、フリーデグントはその賭けに勝った。

だからこそ浮遊大陸の支配が順調に進んでいる。

埋蔵された潤沢どころか底が見えない量のエーテライトはいくらでも採掘され、祖国に持って帰れば多数の飛空船にも、他国に売却しての富にもなるだろうと夢を膨らませ。

「いやあ、そう簡単ではなさそうですねえ」

「……どういふことだ、コジャーソ卿？」

ぺつたらぺつたらという気の抜ける足音とともに現れた男の言葉に、思考を現実へと引き戻された。

ぼさぼさの髪、だらしなく着崩した衣装は飛竜戦艦建造の功により与えられたそれな

りの位階を示すものだが、そこに頓着する様子はない。世俗に興味を持たず、空と空を行く船に全能を吸われた奇人というフリーデグントの中の第一印象を裏切らず、こういう話の時しか姿を見せない男。

名をオラシオ・コジャーソ。

大西域戦争のしばらくあとにパーヴェルツイークに姿を見せた、飛竜戦艦の生みの親である。

「我らの戦いに不安があるか？　言っておくが、イレブンフラッグスのヘドニカナツクンなど、我らがシュニアリーゼの敵ではないぞ」

「ええええ、それはまさしく。……多いですよねえ、『黒騎士を凌駕する』とかいう触れ込みだけは立派なカカシ以下の幻晶騎士。こちらにお世話になる前にそこらをうろついている時分、あちこちで見ましたとも」

その見識は確かである。

人格にはとんでもない問題があるが、技術は破格。だからこそ、フリーデグントに率いられる天空騎士団竜騎士長、グスタフ・バルテルは常に警戒を緩めない。

利用価値は高く、しかし全く信用できない。裏切るとは思うわけではないが、忠義は全く期待できないという厄介な相手だった。

「では、何が問題なのだ？」

「イレブンフラッグスは船も幻晶騎士も程度が知れてますがねえ。……どうやら、それ以外にも『なにか』いるみたいじゃあないですか、この大陸には」

「……先の戦闘で確認された、イレブンフラッグス以外のものと思しき船か」

「ええ、『火を吐いて飛ぶ速い船』だったとか。まるで、ヴィーヴィルのようですねえ？」
そんな男がギリリと目を光らせる。それだけの何かが、そこにはあるとでもいうのか。

「まさか、コジャーソ卿の作ったものであると？」

「いいええ、それはありません。私の技術を買っていただけしたのは王女殿下ただ一人ですから。……ですがね。ヴィーヴィルにも竜闘騎にも使っているマギウスジェットスラスト。アレ、私ではない誰かが最初に作ったものを、見よう見まねで再現したんですよ」

「……何？」

その言葉、聞き捨てならない。

それが事実であるとするならば、オラシオに匹敵する技術を持つ者がほかにもいると
いうことになるのではないか。

「昔話になりますかね、『かの国』は大西域戦争の緒戦において連戦連勝、クシエペルカ王国すら滅ぼし、支配は時間の問題でありました。……が、そこで何者ががほとんど滅

んでいたクシエペルカ王国に力添えをしたんですよ。飛空船を落とす、後に飛竜戦艦とすら真正面から戦った……鬼神がねえ」

「……………」

確かに、大西域戦争はジャロウデク王国の敗北という形に終わった。

だからこそパーヴェルツィーク王国内にすらオラシオの技術に疑問を抱く者もいたが、リンドヴルムと竜闘騎の性能からしてその能力に嘘偽りがないことは証明された。

だが、それはつまり。

オラシオ・コジャーソの作り出す飛空船が、飛竜戦艦があつてなお勝てなかったという事。

ジャロウデク王国が無能でないことは序盤の勝利が証明している。

なら、それを上回る何かがある、あの戦の中で蠢いていたということに他ならず。

「……気を付けておこう。グスタフ、敵が何者か、しかと確かめよ」

「御意」

フリーデグントの命に、グスタフも逆らうことはなかった。

その言葉を鵜呑みにすることはできないが、荒唐無稽と切つて捨てるには、飛竜戦艦の強さに対する信頼と、それすら滅ぼした者がいるという事実が邪魔をする。

「それでは、私は竜闘騎の面倒を見に行くとしますかねえ。……ああ、それと」

そんな危惧を抱かせた当人はしかし飄々といつも通りに竜闘騎の整備に向かおうとし、しかし何かを思い出したように振り向いて。

「もしかしたら、火を吐いて飛ぶ『鳥』も出てくるかもしれません。そいつを見つけたら教えてください。——今度こそ、絶対ぶつ殺すので」

「う、うむ……う？」

なんか、今だかつて見たことないレベルの怨念を感じさせるオラシオであった。



浮遊大陸の空に二隻の飛空船が飛ぶ。

そのこと自体はいまの浮遊大陸においてさほど珍しくもない。

片方が典型的な輸送船であることなど、ますますありふれている。

だが、もう片方の船。船体から剣が突き出ているという趣味的なデザインな船はそう多くない。

〈剣角の鞘〉ソードホーン号と名付けられたその船のデザインにまでねじ込むほどの剣への偏愛。

それほど剣に入れ込む者は、セツテルンド大陸広しと言えども二人としない。

「隊長、輸送船へ積み荷の引き渡し、完了しました」
おかしら

「おう、せいじやあ次行くかあ」

「収獲」の回収と交換で受け取る補給物資の詳細について、この隊を預かる男は興味を示さない。

飛空船に剣をつけるというその偏執はアクセサリーのようにじやらじやらと身に着けた多数の剣からも明らかである。

この男の名はヘグスターボ・マルドネス。

ジャロウデク王国、最強の騎操士と呼んで異論はあるまい。

クシエペルカ王国侵攻にも名を連ね、激戦を生き残り、その後の各国によるジャロウデク王国への侵略を食い止める激戦を渡り歩き、今はこうして浮遊大陸でイレブンフレッジスやパーヴェルツィーク領からふんだくったエーテライトで敗戦にあえぐ祖国に富をもたらす尽忠報国の士。

……というのはあくまで傍から見た場合の話。当人は徹頭徹尾戦闘狂であり、浮遊大陸におけるエーテライト入手も、自ら採掘することは一切なく、他国の鉱床街に乗り込んで奪って逃げるという通り魔同然の方法で得た物だった。

「しかし、さすがにそろそろ狙いやすいところが減ってきましたな。どこも警備が厳重になりつつあります」

「んとなあ。パーヴェルツイークのやつら、例の飛竜ですつ飛んでくるようになりやがった。劍の届かない相手はやりづれえつたら」

そんなグスターボの戦い以外にはほとんど割かれることのない思考を悩ませるのが、浮遊大陸最強戦力たる飛竜戦艦だった。

さすがの狂剣とはいえ、劍が届かなければ力を発揮できない。

だが、あれが「飛竜戦艦」である以上無視もできない。まず間違いなくあの中には自身、そして亡き義父の顔見知りがいるはずだ。

とはいえ、まさか真正面から乗り込んでいくわけにもいかない。どうしたものかと戦場以外では回らない頭をひねり。

「……ん？」

艦橋に座すグスターボの視界がわずかにかげろ。

おかしなことではない。飛空船より高くに雲が流れることなど日常的にあることだ。だが。

上げた視線のその先に見えたのは、雲にしてはやけに鋭い切っ先と速すぎる動き。

つまり、船。

そして大西域戦争当時に検討された飛空船の戦訓において上を取られることは避けるべきとされた死角であり。

その船から投下されたと思しき別の影が、落ちて、近づき、さらにマジウスジェットスラストのものと思しき火を噴いたとなれば。

「敵だ！ 出るぜ!!」

「は、はい!？」

もはや、一瞬の遅滞も許されない。席を飛び出し、船内を駆け、幻晶騎士を叩き起こしたところで船に振動が走る。やはり、敵だ。

「どこだ！ どこにいやがんだ!？」

甲板上に飛び出し、敵の姿を探す。

油断できる余地は一つもない。

なぜならここは空の上。飛空船である。

飛空船が戦いを挑んでくるのならわからなくもないが、あの時見た影は幻晶騎士のものであった。グスターボがそれを見間違えるはずはない。

飛空船に戦いを挑む幻晶騎士。

大西域戦争を戦ったジャロウデク王国の騎操士にとって、その響きには嫌な覚えしかなかった。

甲板に出はしたが、敵の姿は見えない。

そんなバカな。さきほど船に響いた振動は間違はなく敵の幻晶騎士が降りたつたことによるもので、幻晶騎士が立てる場所など剣角の鞘号には甲板しかない。

間抜けにも滑り落ちたなどという可能性はなくてもないが、まさかそんなことが横に影。

「じゃあああ!!」

剣、一閃。グスターボにとってそれは呼吸と変わらない。幻晶騎士においても同様に、一瞬の遅滞もなく振りぬかれた剣の軌跡に朱が散った。

まさか血ではなく、それは火。魔法による攻撃だろうと判断。剣で裂けた。被害はない。

その炎の向こうに影がゆらぐ。

どう見ても足場のない甲板の向こうをふわりと滑るように横切り、甲板上に着地する。

構えた剣越しに睨む、敵。

色は蒼。典型的なウオーリアタイプではあるが、グスターボの記憶にあるどの機体にも当てはまらない。巨大な肩の装甲と平たい頭部は、たった一手のやり取りだけで二度と忘れられなくなるだろうという予感がある。

武器は持たず、無手のままに剣角隊の船に降り立ちながら泰然としたその立ち姿か

ら、グスターボは言いようのない圧を感じる。
そしてついでに。

そんな蒼い幻晶騎士の向こうを飛ぶ、鳥。

アレには見覚えがある。

ということは、つまり。

どうやら懐かしい相手との、したくもない再会になるようだ。

「おいおいおい、挨拶もなしに俺つちの船に来るとはずいぶん気合入ってるじゃねえか
おい!？」

『ああ、確かに少々失礼でしたね。……こほん。ドーム、黒の狂剣Ⅱサン』

『求められてるのはそういう挨拶じゃねーから』

とぼけた物言いは、幻晶騎士からも周囲を旋回している鳥からも聞こえてきた。

つまり、二対一。

相手の数が多い程度のことでは怯むようなグスターボではないが、どういうわけかこの
2機を相手にするととなると勝ち筋が見えない。

勝てる気がしない、負ける未来が思い浮かぶ、というのではない。なんかもう本当に
訳が分からな過ぎて、どんな戦いになるのか全く想像がつかないというのが正しい。

いずれにせよ、とても楽しくなりそうだった。

「へっ、まあ名乗れよ。俺っちはグスターボ・マルドネス。この幻晶騎士は〈ブローケンソード〉。言っておくが、俺っちが『剣』の使い手以外に名を聞くなんてのは珍しいんだぜ？」

『それは光栄ですね。僕の名前はエルネスティ・エチエバルリア。乗機は〈トイボックスマーク2〉。そしてあちらは僕の前輩のアグリ・ボトル先輩と〈ガルダウイング〉です。……まあ、さすがの僕でも〈剣〉は使えませんね、正式名称はリヴァイヴァスライバル水撃スーブジャイアントロコ金剛カイザーブラスター陽子ロケ』

『それはそもそも剣じゃないよ』
あと、既にしてこの2機の幻晶騎士の騎操士の関係性とかなんかがわかった気がする。

鳥に乗っている方、既に声がげっそりしてるし。

『ともあれ。浮遊大陸に遊びに来たはいいのですが迷ってしまいました。道を教えていただきたいなと』

「……は、ははははは！ いいぜ、教えてやるよ。……生きてたらなあ！」

『それは怖い』

それでもグスターボのすることは変わらない。

これまでの人生において知りたいことは剣で問い、進むべき道は剣で切り開いてき

た。

だからたとえ相手が何であろうとも、この剣を振るつた先にこそ、答えと未来があるはずだ。



浮遊大陸に到着してしばし。

拠点としている船、クシエペルカ王国にて銀鳳騎士団由来の技術も駆使して建造された銀の鯨ジルバヴェール二世号は、エルくんの手も加わって最新最速重武装という恐ろしい船となっているため生活と探索に支障はない。

とはいえ浮遊大陸は思いのほか広く、どこかにいるはずのエムリス殿下たちを探すにしても、情報なしのしらみつぶしというのはさすがに難しそうだ、と分かってきたのがここ数日。

そんなわけでなんとかいい手はないものか、と考えていたところで見つけたのが、俺たちよろしくほぼ単独で飛んでいる見慣れない形の飛空船だった。

どう考えても他国の船で、なおかつ船体から剣が生えているというデザイン。あの船に乗っているのはエルくん並みに頭のおかしい手合いに違いないと気付いた俺は是非

とも避けたかったのだが、変態は惹かれあうという法則にしたがい、エルくんが直接乗り込んでの「お話」をすると言い出した。

そうになると、一応の護衛というか万が一に備えてついていくのは、ガルダウィングを持つてこさせられた俺の役目となり、こうして殴り込みに来ることに相成るわけだった。

『さあ行きますよ……〈烈炎之拳〉！』

「烈炎之拳バーニングファイトって名前じゃなかったつけそれ」

初手を取ったのはエルくん。

相手の武器が剣と見て、その射程外から手始めに法撃をぶつ放した。

ただし法撃は拳から出るんだけど。

トイボックスマーク2、特徴は一切の武装らしき武装を持たず、内蔵された魔法を主として戦うことだ。

イカルガを持ち込めず、カルデイトーレベースの改造機なのでエーテルリアクタも通常仕様のもので1機しか積んでいないため、装備にまで強化魔法を回すのは効率が悪く、ならば幻晶騎士自身が武器になればいいというエルくん理論が炸裂した機体なのでありましたとさ。

実際、その異常さはとびきりの初見殺しとして機能する。

相手が黒の狂剣と呼ばれる、エドガーでも苦戦したあの騎操士でなければ多分既に立ってはいられなかっただろう。

さすがの腕と勘が働いたらしくトイボックスの放った炎を切り払って迫る、黒い剣だらけの幻晶騎士。正直、エルくんにアレだけ近づくとできるというだけでも十分すぎるくらいに驚きだった。

そこからの戦いは脅威的の一言に尽きた。

まず土俵となつているのが高空の風吹きすさび、時には揺れる飛空船の甲板上。

エルくんのトイボックスはまだしも、狂剣さんの方は一步踏み外せば落ちるというのに踏み込みは一切の躊躇いがない。

通常の機体ならバックウエポンとして法撃用の杖を装備するところにさえ剣を携えている以上、戦闘距離は近接オンリー。

マジウスジェットスラストも駆使して空中すら飛び回るエルくんを相手にしているとは思えないほどの立ち回りと互角の戦いを見せている。

しかも何より恐ろしいのは、そうしてエルくんと戦っている中で俺の方へ意識を向ける気配が全くないこと。

そんな余裕がないというのもあるだろうけど、アレは違う。エルくんとの付き合いの中で育まれた俺の中の変態センサーがそうではないと言っている。

「エルくんほどの相手なら、数の有利に任せて勝利を拾うなんて無粋なことをするはずがない」という変態シンパシーにより、目の前の戦いを楽しんでいただけだ。

エルくんが繰り出す執月之手によるオールレンジ攻撃、そうして引き込んだ至近距離から放つ高威力衝撃波（プラストリバーサ）。その全てをギリギリながら回避しきるなんてこと、卓越した戦闘技能に加えて天性の勝負勘がなければ不可能なことだ。

イカルガを駆使する本気のエルくんなら、通常の幻晶騎士の3倍以上の手数を誇る。

トイボックスマーク2は機体とエーテルリアクタの制限からそこまでの力は発揮しきれないが、それでも凡百の騎操士なら束になったところで敵う相手ではない。

そんなエルくんと、互角。

殺意が鋭く一撃一撃が重いはいえ、剣のみを使う狂剣さんと、初見殺しの数々を見切られているエルくん。あるいは戦いが長引けば、エルくんの手が尽きるほうが早いかもしれないとさえ思える、恐ろしすぎる戦いだっただ。

……巻き込まれないでよかったー。あんなところに放り込まれたら、俺は間違いなく死んでるね、うん。

『……おい、エルネステイつつたな？ そろそろやめにすんぞ』

『おや、つまり降伏していただけると？』

そんな風に意味が分からず、でも当人たちはどこか通じ合うものがありそうな戦いだったせいか、終わりは唐突だった。

てーか、まさか普通にひと段落ついたときを見計らって飽きたとばかりに剣を下ろすとか想定外なんですけど！

『ンなわけねえだろ！ でもな、場所も悪いし俺っちにも立場つてもんがあるんだよ。めんどくさくてしようがねえけどな。……オラ、その鳥も降りてこい。話をしてやんよ。——お前らが知りたがってる話をな』

だが、思った以上に強かな人らしい。

笑いを含んだ声からうかがえるのは、決してハツタリではなくこちらの求める情報を握っている、と思わせるもの。

そのまま操縦席を開いて顔を出すというあの行動、騎操士にとつては戦闘の意志がないことを何より雄弁に示すもの。少なくとも、戦いを終えるという言葉には嘘がない。

『……わかりました。とりあえずお話を聞いてから判断しましょうか。先輩も来てくれますか？』

「……………はい」

うわーこわーい。

エルくんはさっそく操縦席から出て行ってるけど、そこ敵地同然だからね？ 幻晶騎

土壤さなかつたからセーフとか、それエルくんの中でしか通じないローカルルールだからね!？」

とは思っても団長様には逆らえないし、逃げようとしたらそれこそ狂剣さんに殺される気がする。

仕方なしに飛空船の軌道と速度に合わせて着艦して、俺も船の上へと降り立つ。

エルくんは既に狂剣さんとの対面をしている。

呆れるほどの身長差。風に吹かれる銀髪を押さえるエルくんと、全身をコーディネートする無数の剣をちやりちやり言わせている黒装束の狂剣さん。シユールな絵面だ。

「かーっ！ なんだよこのちんちくりん！ 俺っちはこんなのとあんな戦いしてたつてのかよ!？」

「む、失礼な。騎操士と馬の騎手は小柄な方がいいんですよ」

「それ幻晶騎士ちやう、レイバーや」

そしてエルくんはさっそくボケ倒している。

だからそういう通じない系のネタはやめなさいと普段から言つとるでしょーが。

「おっ、おめーが鳥の方の騎操士か。……ふーん、まあまあやるみたいじゃねえか」

「いや、そんなことはないと思いますよ？ 普通です普通。農業以外は」

「お、おう……?？」



「ま、茶でも飲みながら話そうや。くれてやる情報は2つ。最初はこの島。エーテライトの塊みたいなものだぜ。少し掘ればざくざく湧いて出やがる。そりやあ業突く張り共が集るつてもんよ。……あともう一つは、クシエベルガ案山子野郎どもの居場所だ」

増援に来たグスターボさんの部下の人たちは、戦いは終わったのだからと叱りつけられてお茶の準備をさせられていた。

甲板上にテーブルと椅子が用意され、茶器が並べられ、空の上のティータイムである。参加者は男3人。俺と、エルくんと、グスターボさん。なんだこの状況。

「それは興味深くかつ助かるお話ですね。交渉成立です」

素早いので適当に見えるが、割と丁寧な手つきで入れられたお茶を、グスターボさんがまず啣る。

そして情報が取引に値するものだと認めたエルくんも続いて口をつけ、こくんと飲む。

エルくんは団長なんだから、こういうときはせめて俺に先に毒見させて欲しいなあと思いつつ俺も続く。うん、割とおいしい。

「お前ら……先に俺つちが口付けたとはいえ、躊躇いつてものがねえのかよ」

「あなたは他ならぬ狂剣の方ですから。まさか毒の方が得意なんてことはないでしょう？」

「はっ、ありえねー。俺つちの前でそんなことするヤツがいたら斬るな。そつちのお前は。上司の付き合いか？」

「まあそれもありますけど、農民生活で鍛えた胃には生半可な毒なんて効きませんので」「いや、その理屈はおかしいだろ」

「そんなー。」

いやまあ確かに、ユシツダ村で珍味とされていた魔獣の卵巣のヌカ漬けの材料になってた魔獣、ライヒアラにいたときは全身毒だから絶対に食べちゃダメって言われてたけど。

村でも1年半塩漬けにしてその後さらに1年半ヌカ漬けにし終わるまで食べちゃダメって言われてたけど。

ちなみに余談だが「ヌカ漬け」とは米ぬかから作るぬか床につけた物ではなく、「ヌカ」と呼ばれるペースト状のナニカだ。俺はまだ製法を教えてもらっていない。夜中に見ると青白く光つてることがあったけど、イッタインナンダロウネー。

「つたくよー、おめーらのせいでうちの国はド貧乏してんの。ダルボーザだつて安つち

いのなんの」

「なるほど、だからお宝を求めて浮遊大陸に、と。大変ですねえ」

「んつとになー。まあ、俺らは人手も足りねえから他の奴らが掘ったエーテライトを頂戴してるんだがよ」

「掘り甲斐のありそうな土地ではありませんけどね。エーテル濃度が濃いいとはいえ、植物が根付いてることは、地上の作物は無理でも一から研究すれば農地を作れそうな気はするんですけど……」

「……え、おめーらそういう目的なのかよ？ 掘っても掘ってもエーテライトしか出ないらしいぜ？」

「それは残念です。もっと面白いものが埋まっていたらいいんですけど」

「そんな風に思ってるのはおめーくらいだろうよ。じゃあ、何が埋まったらおもしろーんだ？」

「幻晶騎士ですね。文明成立以前の、失われた機体とかあってくれと嬉しいんですけど！ それを普及させれば文明が荒廃したりそのあとを傭兵たちが闊歩するようになっても平気ですよ！」

「お、おう……？」

「落ち着けエルくん。大陸のどこ見てもタワー生えてないからそういうのは出てこない

よ

「ちえー」

ともあれ、エムリス殿下たちがいるだろう方角へ連れて行ってもらいながら、グスターボさんの船の上でお茶を飲みながら雑談に興じる俺たちでありましたとき。

さて、浮遊大陸まで来た目的の達成まではあとちよつと。

このまま割と平和に済んでくれるといいんだけど。



この時代は大陸全土を巻き込んだ動乱の渦中にある。

そのため後の世に語られる事件、活躍、出来事が数限りなく起きていた。

この日、浮遊大陸の上で行われたエルネステイ・エチエバルリア、アグリ・ボトル、グスターボ・マルドネスという種の人材たちの会談もまたその一つである。

戦いを経て、しかし終始和やかに繰り広げられたという茶会。

これこそ、後の世に「狂人、狂剣、農狂による三狂会談」として知られるエピソードであることを、当人たちは知る由もないのであったとき。

若旦那！ 空からエルくんが降ってきた！ だから敵さん逃げて!!!

空の上のお茶会は、男三人というむさくるしさと礼儀無用の気楽さで、おそらくエムリス殿下たちがいるだろう方角へ向かいながら呑気にお茶の香りを楽しむ時間となった。

「——新参の傭兵が、あのマザーウイルを？」

「そういうお茶会じゃねえよエルくん」

「わりい、おめーらの言ってることが何一つわかんねーぜ」

エルくんが唐突にこんなことを言い出したりするくらいには、ちよつと楽しいひと時。

なんだかんだで和やかにしていられたのだが……長くは続かなかつた。

「おや、見覚えのある船が。お仲間ですか？」

「それはこの前のやつでな、アレはちげーんだわ。……おめーらも逃げろ。容赦ねーぜ、あいつら」

「あらら、それは大変。エルくん、もうお暇しないと」

空の彼方、姿を見せた異様な飛空船。

もはや懐かしい気さえするけど、アレとひと悶着あったのはほんの2年くらい前なんだよな、と思いつつ自機へと走る俺とエルくん。

飛空船にしては巨大で、近づくにつれ明らかになる無駄に長い首と竜を模した頭。ヴィーヴィルじゃないですかやだー。

「エルネスティ! クシエペルカのやつらは向こうにいやがる。あとはためーらで探しな!」

「はい、ご丁寧にどうも。そちらもお気をつけて。できれば二度と会いたくないですが」「そいつあどうだかなあ。おめーらがこの島で暴れてたら、また出くわすかもしんねーぜ?」

最後に交わした言葉もこんな感じ。至極あっさりとしたものなのは、俺たち全員がそういう人の世の事情に対してさっぱりしすぎているからか。

いかにも狂剣の人らしいなあと思いつつ、俺とエルくんは船から離陸する。上空のジルバヴェールまではさして距離もない。すぐに着艦し、情報を伝えて、この空域を離脱しないと。

巨体の割に普通の飛空船以上の速度で近づいてくる新型ヴィーヴィルと、なんかその横腹から続々出てくる小型機の様子からして、一筋縄じゃいかないんだろうなあとは思

うけども。

「へえ。マザーウィルではなくカブラカンの方でしたか。うーん、ああいうのが相手だとさすがに逃げづらそうですね。……なので先輩、ちよつと蹴散らしてきてくださいー」

「えっ」

なお、特に一筋縄じゃない厄介ごとを持ち込んでくるのがエルくんなのは言うまでもありません。



「なんだ、あの飛空船は……!? イレブンフラッグスのものではないぞー!」

「狂剣とともにいたから只者ではなからうと思っていたが……なんなのだ一体!」

パーヴェルツイークは、浮遊大陸を騒がす黒の狂剣を明確な敵とみなしている。

故に、狙うならば最優先が剣が生えた奇妙な船。足の速さは知れ渡っているので、竜闘騎にて追いたてる。

そして、なぜか近くにいた船もまた狂剣の一味としてとりあえず討つべき相手であ

る。

これまた普通の飛空船とは異なるシルエットをしてはいるが、傍らにいたのは剣が生えた変態。それと比べれば十分過ぎるほどに標準的。

そう思ってしまったことが、パーヴェルツィークの騎操士たちの不幸である。変態の世界においても、上には上がいるのだ。

狂剣の傍らにいた船は、まず何よりも速かった。

推進力を帆と風に頼らずマジウスジェットスラストによって進むという、飛竜戦艦や竜闘騎と同じ方式を採用し、艦の防衛を担うウイザードスタイルの幻晶騎士の火力、各砲座をカバーする配置も絶妙で、全方位に隙が無いことに驚愕を禁じ得ない。

とはいえ、その程度で怯むようなパーヴェルツィーク騎操士ではない。

速い、とはいえあくまで飛空船としてのもの。最高速でいえば竜闘騎の方が間違いなく勝る。決して逃がさず、足止めをしておけばあとは飛竜戦艦の餌食となる。むしろ有利は我らにあり。

そう信じて疑っていなかった。

「なんだ、影……うん」

一機の竜闘騎が、不自然な視界の陰りに気付くまでは。

雲でもかかったのだろう、と注意をしなかった。

敵前で意識を逸らすなどという愚行はあり得ない。

それが対飛空船戦闘における基本中の基本であり。

『うーん、上ががら空き』

「なっ……、うおおお!!」

突如上空から飛来した法撃によって機体をズタズタにされるなどという、本来想定する必要のない脅威に襲われることとなる。

竜闘騎隊に広がるざわめき。

突如味方の一機が上から撃たれ、その直後に法撃を追うようにして落ちてくる何かがあった。

そう見えたのは一瞬。思わず目で追ったその「何か」が翼を翻しすぐにまた高度を上げたのを見るに至り、それが敵なのだという事実を驚愕とともに受け止めた。

「バカな……エーテリックレビテータであればどの高度変化を!」

「鳥……いや、あれも幻晶騎士だ! 魔獣ではないぞ!」

竜闘騎たちは飛空船への攻撃を中止し、即座に散開。敵の数は一機と見て、包囲しての攻撃へと即座に切り替えた。

その迅速さたるや正しく精鋭と呼ぶにふさわしく、相手がただの飛空船であればひと

たまりもなく撃破されていただろう。

だが悲しいかな、相手は世界最強の騎操士に空中戦でも追い回されることのある農民であり。

「なっ、また高度を変え……!? うわあああ!」

「いつのまに後ろに!? ……振り切れない! 被弾した! 被弾した!」

「なんだこいつ、こちらの動きを全て把握しているとでもいうのか!」

それに比べれば、上下方向の移動が制限される竜闘騎を相手に攪乱して時間を稼ぐ程度であればなんとかなるのだから性質が悪かった。

「やっべー、この人ら精鋭すぎる。銀鳳騎士団の飛翔騎士たちと訓練してなかったら即死だった……」

なお、当人は割と死にそうだった模様。

「あ、ああー! 鳥っ、鳥イ! ここで会ったが百年目! ぶっ殺しますよ今度こそ!!」
ついでに、こんなことを叫ぶ天才が飛竜戦艦の中にもいたのだが、その無駄に暑苦しい思いは届かないのであったとき。

結論から言って、パーヴェルツィークはこの奇妙な船を落とすことができなかった。

飛竜戦艦による大威力法撃、インシニレイトフレイム 竜炎撃咆による必殺を期したが、ヘクシエペルカの魔槍と恐れられる飛ぶ槍を目くらましに、マジウスジェットスラストを用いた予想外の速度にて逃げ切りを許すこととなる。

「……申し訳ありません、王女殿下。狂剣と、もう一隻。いずれも航続距離の問題で追いつけることができず、逃がす結果となりました。ごさいます」

この一戦が終わった後、グスタフは屈辱に苛まれながらフリーデグントへと報告した。

浮遊大陸に来てより最強を自負していたリンドヴルムと竜騎士隊を投入してなお目的を果たせない。「完敗」の二字が重く重くのしかかる。

王女の座す飛竜戦艦には、許されざる失態であった。

「よい、グスタフ。……むしろ奇貨と見るべきだろう。我らとて、飛竜とて決して無敵ではない。このまま勝利を重ね、慢心を肥大させていけばいずれ首すら落とされていたやもしれぬ」

「殿下……」

その敗北を誰より深く理解していたのが、他ならぬフリーデグントであった。

飛竜戦艦にて勝利しか見てこなかったからこそ、それを当たり前だと思い込みかけて

いたことを自覚する。

だが決してそうではない。それを知ったからには、考え、変わらなければならない。戦い方を、進み方を。

何を敵とし、また味方とするか。

最大の力とは最強の戦力ではなく、いかにして勝負の舞台を整えるかということ、武人ではなく王族ならばこそ、フリーデグントは知っている。

「ハルピユイア、と言ったか。浮遊大陸に住む話の分かる者たちと会談の場を設けよ。……まずは、知らねばな」

この時をもって、浮遊大陸最大戦力を誇るパーヴェルツィーク王国は戦略を転換する。

エルネステイを受け入れ、情報を与え、浮遊大陸の騒乱をこそ望んだグスターボの願ったままに。



住めば都、という言葉がある。

人という生き物は繊細なようできてなかなかしぶとく、どのようなところでもなんだかんだと生きていけるものだ。

それが、たとえ魔獣ひしめく浮遊大陸の中、森を切り開き自ら住居を建てなければならぬような場所であったとしても。

シユメフリーク王国、ハルピユイア、そしてクシエペルカ王国と見せかけたフレメヴィーラの各陣営の者たちによる寄り合い所帯。

木の上には元からのハルピユイアの住居が、そして地上には新たに建てられた人間用の家々。

成り行きによるものとはいえ作り上げられたこの集落は徐々に形を成し、機能を始めていく。

空にはグリフォンとハルピユイアと飛空船が飛び交い、地上には人が生活を営み、ハルピユイアともじわじわと交流が生まれつつある。

「あーっ、キッドみつけたー！」

なお、その交流の最先端を行くのはアーキッド・オルターである。

今日も突如空から飛来したエージロに抱き着かれ、肩車の体勢になっている。

これはここ最近よくある事なので、誰もが生暖かく見守り助けようとしなない。

ついでにクシエペルカ系の人々はその視線に少々複雑な感情が混じつてもいるのだ

が、どうせ困ることになるのはキッドだし、かわいい子たちを侍らせやがってという感情も根強くあるのでやっぱり助けは入らなかつた。

「……エージロ、そういうのは控えるように言つたでしょう」

「えー、なんでー? あ、ホーガラも乗る? キッドなら二人くらい平気だよ?」

「平気じゃねーよそしてそういう話じゃねーよ」

エージロがかわいい系だとするならきれいな系なホーガラも交えたこのようなやり取りは、既にして名物扱いをされつつある。

ハルピユイアの村は平和である。

今日この日、空からの脅威が来るまでは。

「船影確認! 数は……一!」

「航行予定にない船だな……警戒を続ける。発光信号! 地上に伝えろ!」

最初に気付いたのは周辺警戒に当たっていたシユメフリークの哨戒船。その行動にはよどみなく、速やかに地上と周辺の船へと情報が伝えられる。

この時この場には黄金の鬘号も、そこに搭載されている幻晶騎士もいる。彼らのその行動は発見された船が敵のものであつたとしても十分迎撃しうるものだった。

「なつ、速い!!? もう接近してきたぞ! 所属不明! 繰り返し! 所属不明船が高速

で接近！」

だが何事も例外は存在する。

帆を広げていないのに速い船など黄金の鬣号のような例外程度しかないと思っていたシユメフリーク軍に、まさしくその例外がさらにあると予想するのは難しいことであり。

「いかん、陣形が間に合わん……突破されるぞ！」

全ては遅きに失した。

空に響く爆炎の音が村に響き、誰もが弾かれたように空を見上げる。

長く炎を従えながら空を裂く一隻の飛空船。それはこれまで構築した防衛のための試みの全てが動く暇すら与えられなかったということ、誰もが呆気にとられることしかできない。

件の船は村の上空を横切りこしたもののそれだけで、攻撃の類すらなく姿を消し。

しかしその通り過ぎた後に、なぜか残る黒点が2つ。

だんだんと大きくなる。

「……何か残ってる！ 降りてくるぞ！」

「え、ええ?！」

反応が一番速かったのはキッドだった。

エージロを肩に乗せたまま黄金の鬣号へ向かって走る。

何がどう転ぶにせよ、幻晶騎士は必要だと。

もしあれが敵だとしたらすぐにも動かなければならないと。

キツドの中ですら懐かしい勘が叫ぶ。

ああいう無茶苦茶なものは、大概とんでもなくヤバイ。

2つの影は近づくにつれ形が判別できるようになってくる。

一つは大きく、「四肢」を広げ。

もう片方は十字に似た影の形で、円を描くように軌道を変えた。

そしてどちらにもマジウスジェットスラスターの炎を吐いて片方は減速し、片方は弧を描いて滑らかに着陸をし。

「若旦那! 空から幻晶騎士が落ちてきた!」

「……いかん、ものすごくイヤな予感がしてきたぞ」

そういうことをするのに心当たりあるなあ、と思いつつ見慣れない幻晶騎士と、見慣れた幻晶騎士ではありえない鳥を背負った獅子を見て、エムリスを筆頭にフレメヴィーラ王国出身者は冷や汗を垂らした。

『突然ですがお邪魔します! そちらの船はクシエペルカ王室所有の〈黄金の鬣〉号というのでよろしいでしょうか!』

『すみませんいきなりすみません敵意はないんです本当なんです信じてください!』

「エルネスティ!? あと先輩も!」



「いやあ、若旦那がお元気そうで何よりです」

「そういうお前は相変わらず無茶苦茶だな、銀の長。……なんだあの巨人は?」

「ボキューズ大森海の奥へ3ヶ月ほど飛んで行った先で会った巨人族です。あと、現地には他に人間もいましたよ。大森伐遠征軍の生き残りの末裔ですね」

「……アレだな、全部終わってから聞くことにしよう。すさまじい頭痛に襲われる気がする」

マジで違うんですよ。村のど真ん中に強行着陸する気なんかなくて、〈黄金の鬘〉号がいるってことはエムリス殿下たちがいるよねということに近いことを見てみたならなかそれ以外の船やらキッドくんたち曰くハルピユイアの人たちもいて、いまさら止まるのも危ないからと防衛線をつ突つ切つてとにかく最速で俺たちだということをお伝えしようとしただけなんです。

……エルくんは、迎撃されたらそれはそれで楽しそうとか思ってた気がしないでもないけど。

「キッドくんも元気そうだね。……元気そうだねえ」

「待ってくれ先輩、なんでエージロとホーガラを見てそんな生暖かい目になるんだ。……違うからな!?!」

「ふっふっふ、大丈夫よキッド。ヘレナちゃんにはキッドが『元気だった』ってちゃーんと伝えておいてあげるからうふふふふふ」

「アデイ!? 何を伝えるつもりだアデイ!? お、俺はなにもやましいことなんてないからな!」

「キッドくん……それエレオノーラ様の前でも同じこと言えんの?」

ともあれ、多少強引ながら会話が成立するようになったのは僥倖だった。

エムリス殿下もキッドくんも元気で、この浮遊大陸に拠点を築くまでになって、浮遊大陸の人というより巨人族みたいな意思疎通可能な魔獣であるハルピュイアの人たち、そしてなんか西方にある国の一つ、シユメフリーク王国の人たちと連合を組んでいるっぽい。

……: どういう寄り合い所帯なんだろう。いやまあ、銀鳳騎士団がそもそも似たようなもんだけど。

さて、そんなこんなで情報交換。

俺たちもそもそもエムリス殿下たちをクシエペルカ王国へ連れ帰るために来たわけであるが、ここへの道中で見かけた狂剣ことグスターボさんと飛竜戦艦、そしてそれ以外にも勢力がいるらしいという話。

今すぐエムリス殿下をクシエペルカ王国並びにその先のフレメヴィーラ王国へ連れて帰れば万事解決、とは行かない状態っぽい。

「……地の趾というのは、なんだ。みな『ああ』なのか？」

「すみません、アレってあなたたちが地の趾って呼ぶ俺たち人間の中でも多分トップクラスにアレな子なんです」

キリツとしていて、その実地味にキッドくんのそばを離れないホーガラさんというハルピユイアの人が、ニコニコしたままエムリス殿下を逃がさないよう小さい手でしかしがつつり掴んで離さないエルくんを見て困惑している。

その気持ち、わかります。多分エルくんを見た全人類がそう思ってるでしょうから。

「……まあ、こんなところか。まさか空飛ぶ大地のほとんど全てがエーテライトとはな。時代が時代だ。どんな財宝にも勝る、空飛ぶ火種となりかねん」

「それを求めて複数の国が進出してきて、既に鉱床街を作って取り合っている、と。しかも新型の飛竜戦艦まで。……面白いことになってきましたね!」

「エルくん、少しは本音を隠す努力をして」

シユメフリーク軍のまとめ役だというグラシアノ・エリスゴさんと、ハルピユイアの中でも指導者的立場らしい〈風切〉のスオージロさん同席のもと、浮遊大陸についての話を聞かせてもらう。

グスターボさんから聞いた話やここまで俺たちが見てきたものも合わせて考えると、この浮遊大陸はとんでもなく熱いことになっているらしい。

領土争いどころじゃない。仮に浮遊大陸を独占する国が出た場合、今後のエーテライト市場にとんでもないシェアを確保することになるだろうし、飛空船の研究開発運用、あらゆる面で他国に対して絶対的な優位に立てる。

下手すると、この浮遊大陸を狙って今度こそ西方諸国全てがぶつかり合う世界大戦が勃発なんてことすらあり得る。それだけの価値を、秘めている。

控えめに言って、ヤバイ。

……何がヤバいって、そんな戦場にエルくんが迷い込んでるんですよ。とんでもないことになるわー。

ともあれ、これにて状況は大体わかった。

あとはどういう判断をし、行動するかだ。

「さて、どうしたものでしょう。僕たちがここへ来た理由は、エムリス殿下をクシエペルカ王国まで連れ帰るためなのですが」

「ギクツ!? ま、まあ待て銀鳳の。お前の言うこともわからんではないが、今ここを放つておくわけにもいかんだろう? ……事情が事情だ、国許へ窺いを立ててみるのがいいだろう。その間は、こちらで適宜動くとかそういう、な?」

「……なるほど、確かにそれも良いですね。エムリス殿下もしっかりと確保しておけばいいでしょうし」

「だろう? はっはっはっはっは」

「そうですねえ。ふふふふふふ」

……まあ、エルくんがエルくんである以上、程度や相手を誰にするかという問題はあれ「暴れる」という点は変わらないんですけどね!

「ねー、キッド。なにあれ」

「……悪だくみ、かな」

さて、ここらで話を整理しよう。

前提として、浮遊大陸はエーテライトの塊であり、飛空船の建造ラツシュにあるセツ

テラント大陸の諸国においてその重要性は計り知れない。

既にして複数国家が鉱床を押さええて採掘を始めていて、武力による鉱床の取り合いも始まった。

それだけならまだしも、この地にはボキユーズ大森海の巨人族のように意思疎通可能な人型っぽい魔獣、ハルピユイアの人たちが暮らしている。

知能が高く、コミュニケーションが可能で、グリフォンと合わさったときの戦闘能力は十分に高い。

そして、キッドくんたちと既に交流を持つてもいるわけで無碍にしたいくはない。

さあどうしよう。

「どうしようもないですね。人間側の各勢力と交渉しようにも、チャンネルもなければ手札もありません。ひとまず、できることをできるだけやっていくしかないのでは」

「そうなるな。当座はイレブンフラッグスとパーヴェルツィークへの嫌がらせとハルピユイアの里への顔つなぎか」

まあ、結局のところ行き当たりばったりですよね!

相手は話の通じる人間ではあるものの、先立つものがなければそもそも相手にされないことは疑いの余地がない。

そんなわけで、まずは先立つものを手に入れる。地道にやっっていくしかないですね。

「では、ノーラさん。ジルバヴェール2世を預けますので情報収集をお願いできますか？」

「お任せください。この地の勢力図を描いてごらんに入れます」

「あ、じゃあ俺の機体も持っていけます？ グランレオンもガルダウイングもカルディヘッドも全部使ってくれていいですよ！」

「いえ、自前のものがありますので。アグリさんはエルネスティ閣下のお力になってさしあげてくださいいね」

ちくしょう、ここらで幻晶騎士沙汰は人任せにしようと思ったのに！

ノーラさん、その辺大体わかってますよとばかりにっこりと笑ってますよー！

「それでは、よろしく頼むぞ地の趾、そして巨大なる者よ」

「うむ、ハルピユイアのこともしかかと百眼のお目にかけるため、互いのことを知りあいたく思う」

パールちゃんとハルピユイアの風切さんもなんか普通に仲良くなってるし！

味方がいねえなあおい！



浮遊大陸は、広い。

飛空船からなる船団をもってしてもいまだその全容を把握しきれないだけの広さと起伏を有する。イレブンフラッグスとパーヴェルツイークが擁する鉱床街も、第一に目指すのはエーテライトの採掘であるため各地に点在する拠点でしかなく、面としての制圧はできていない。

結果、まだ見ぬ景色が多数存在する。

延々と広がる森、エーテライトの輝く樹木、雲に覆われた峻嶮な山。

しかしいざ覚悟を決めればそれらを飛び越えていけるのもまた飛空船の力。

竜騎士長より命を受けた右^{リヒティゲライエンフオルゲ}近衛は右近衛長「エイグナーツ・アウエンミュラー」を筆頭に、旗艦たる「^{グランツェンダーゾルク}輝ける勝利号」にて空を行き、森を越え、山をも眼下に飛び。

「……バカな、ありえるのか、あんなものが!?!」

そこで、見た。

山に囲まれた盆地。大まかに把握している浮遊大陸の形からして、まさにその中央たるこの場。

そこに、不自然なほど高く、地面から生える巨大な柱のようなもの。

人工物のわけがない。ならば巨大な岩かといえば、それもまた異なる。

風が吹いた。

山をうつすらと隠していた雲が最後の一片まで散らされる。

全貌が明らかになったそれは天へと尖る巨大さで、うつすらと「虹色の光を纏う」もの。

その全てが、巨大なエーテライトの結晶であること、疑いの余地がない。

「閣下……こゝ、これは……」

「ああ、わかっている。遙か海の果ての空に浮かぶ島まで来た意味があったというものだな。アレだけの量のエーテライト、飛竜戦艦を100隻、1000隻飛ばしてなお余るだろうよ」

騎士たちの声も震える。

それもそうだろう。エーテライトはいま、セツテルンド大陸において最重要戦略資源。

その保有量はそのまま運用可能な飛空船の数に直結し、飛空船の数の差はそのまま戦力の差になること、大西域戦争以来の常識だ。

そこに来て、この巨大なエーテライト塊。

ならばこの地を制する者は世界を制すると言っても過言ではないだろう。

そう、正しくここは世界の中心、霸王の玉座。

ハルピユイアとの融和政策に方針転換したパーヴェルツィークが、庇護下に置いたハルピユイアから聞いた「禁じの地」。

その情報を元に辿り着いたこの地が、ただ来る者を待つだけの場であるなどということはありません。

「——敵襲! 地上から魔獣接近!」

「ふつ、やはり一筋縄ではいかんか。竜騎士たちよ、勝ち取るぞ!」

「御意!」

パーヴェルツィーク軍は、この地で異形と相對することとなる。

複数の生物の特徴を掛け合わせた混成獣^{キユマイラ}。

異常な姿と尋常ならざる頑健さをもって精鋭たる右近衛をすら苦戦させる強力な魔獣であり、生命を冒瀆してすらいえるようなそれらを従える者がいる。

『——去れ、人よ。我は〈竜の王〉。この大地の支配者なり』

浮遊大陸をめぐる戦いには、参戦する者が多くいる。

元より住まうハルピユイア。

新たに進出してきたイレブンフラッグス、パーヴェルツィーク。

それらの狭間で利を狙う狂剣。

ハルピユイアたちと共存の道を目指すシユメフリークと、ほぼほぼエムリスの独断で動いているクシエペルカ・フレメヴィーラ陣営。

そして、もう一つ。

魔獣を従え、覇を唱える者。

異形にして巨大、強力にして無慈悲。

竜の王もまた、盤の上に姿を現した。

雲の流れに覆われて隔絶された浮遊大陸は、いままさに嵐のごとき騒乱に見舞われようとしている。



「さて、近隣のハルピユイアの集落にご挨拶に行くことになったわけですから、お土産が必要ですよ。幻晶騎士でいいでしょうか。こう、リボンで飾って」

「ハルピユイアの人たちだと操縦できないから別のにしようね、エルくん。……浮遊大陸でも普通に野菜が育つなら、苗とかおみやげにできたのになあ」

「それが嬉しいお土産になるのはエルくらいだろ。先輩も、その辺ちゃんとかわかってる

よな……? てーか先輩も相変わらずだなオイ」

なお、その嵐のド真ん中にいるのがエルネステイ・エチエバルリアなのは大体いつものことであり、エルにいつも引き回される農民もまた自動的に中心になるのもまた規定路線であったとき。

王女様は大体しつかりしてて、男の王族はフリーダムな気がします

「ある程度情報が入ってきました。当初はイレブンフラッグスが多くの鉱床を確保していたものの、その後にはやってきたパーヴェルツィークが飛竜戦艦にものを言わせてそれを奪っていったのだと。さらに現在、黒の狂剣が突然強強しに行ったり、パーヴェルツィークもハルピユアと交渉する方針に展開したりで状況は混沌としているようです」

先だつての決定通り、ご近所にあるハルピユアの集落へとご挨拶へ向かう黄金の蠶号での道すがら、藍鷹騎士団からの報告によって判明した情報を共有する。

それによると、どうやら最初期も最初期の混乱と勢い任せの拡大はひと段落して、現在の浮遊大陸における最強戦力であるパーヴェルツィークが腰を据えた戦略にシフトしたらしいということが明らかになった。

……腰を据えたタイミング的に、エルくんとグスターボさんとの会談のあと辺りからそうなったんじゃないかなーという気がしなくもないんだけど、なんか藪蛇になる気しかないので口には出さない。

俺は自分の立ち位置というものをわきまえた男なんです。

「色々気になるところは多いが、ひとまずその勢力がどの程度まで広がっているのが重要か」

「ええ、若旦那。それを図る意味でも、ご近所さんへのご挨拶は有効かと」というわけで、現在に至ると。

何かあつたときに一番逃げ足の速い黄金の鬘号にて、俺たちフレメヴィーラ王国組を中心としたメンバーで。

そうなると当然パールちゃんとナブくんの二人もこつちに来てもらった方が色々安心だし、ハルピユイアとの話し合いをするにあたって人間だけだと警戒されるかもしれないからキッドくんについてきたホーガラさんとエージロさんもいる。

……うん、人種の坩堝だな。

「驚頭獣、か。……ハルピユイアとともに強く空を駆ける美しき翼。実に素晴らしい。百眼のお目にも必ずや適うだろう」

「ああ、いつかその力を問いたいなあ」

「ヒエツ」

パールちゃんたちは特に驚頭獣がお気に入りらしい。

エージロさんが来るということで一緒にいるワトーという驚頭獣に対して、エルくん

が幻晶騎士を見るときみみたいな目を向けている。エージロさんが思わず悲鳴を上げるくらいに。

うん、ワトー逃げて。

「おい、あの巨人たちは、その……大丈夫なのか？」

「うーん、エルが連れてきたから俺もよくわからないんだよなあ。その辺どうなんだ？」
割と冷静らしいホーガラさんまでも不安そうな顔でキッドくんに聞いている。

まあ、もし野生の驚頭獣がいた場合にどうなるかは大体予想がついちやうよね。

「平気ですよ。大丈夫じゃなかったら僕が止めるので」

「いや、止めなきゃいけないってことはダメじゃねーのか？」

「そんなことはないよキッドくん。止めれば止められるから。……エルくと違って」

「それもそうか」

「いや、その理屈はおかしい」

ホーガラさん、真顔のツツコミ。

そんなー。俺もキッドくんも、そして船長席のエムリス殿下もうんうん頷いてるのに。

この話でおかしいところなんて、そもそもエルくんの存在がバグじみてるってところくらいのはずだけど。

「と、とりあえずもう村が近いんだよね!?　じゃ、じゃあ私がワトーと一緒に声かけてくるから!　今すぐ!　今すぐ!!」

「待ちなさいエージロ。私も行くから落ち着いて」

かくして、エージロさんとワトーがすごい勢いで飛び出していくのでありましたとさ。

気持ちはわかるぞ。俺もエルくんに見られると大体そんな感じだからね!



半ば逃避の体を成しつつ、ハルピユイアの集落へと飛んで行ったホーガラさんとエージロさんとワトー。

俺たちは訪問先のハルピユイアの人たちを無駄に刺激しないようそこそこ距離を取ったところで様子を伺い、挨拶していいよという合図が来たら改めてのっそりと近づいていく手はずになっている。

のだが。

「……とかやつてる場合じゃないかもだねエルくん」

「おやおや」

そう悠長なことも言っていられないようだ。

俺の鍛えられた農業アイは飛空船乗りと比べても遜色ないほどの視力を誇る。

それによると、ホーガラさんたちのちょうど向こう、ハルピユアの村があると聞いていた辺りに飛空船らしき影が見える。

……アレ、多分イレブンフラッグスとパーヴェルツィークだ。ちよいちよい光って見えるのは法撃だろうから、間違いなく殴り合ってる。

しかも、こつちに。「ホーガラさんたちのいる方向に向かってきなながら」だ。

「出撃します。先輩もお願いします！」

「了解。……キッドくん、カルデイヘッドのことはよろしくね」

「おう！……えっ？」

ホーガラさんたちとイレブンフラッグスとの距離はそう遠くない。しかも、ホーガラさんたちは対応に迷っているのか動きが鈍い。となると、巻き込まれるとみるべきだろう。フォローは必須。俺とエルくんは飛空船の中を格納庫へ向かって駆けだした。

「で、間一髪墜落前に助けられたわけだけど……」

「ワトー！　ワトーしっかりして！」

「……命に別状はない。怪我が癒えればまた飛ぶことも叶うだろうが、今は無理だ」

「しかも、訪問予定だったハルピユアの村がどうなっているのかもわかりませんね。最悪、敵と見なされて追撃が来るかもしれません」

可能な限り最速で飛び出したのは、エルくんのトイボックスはもちらんとして、俺の方はグランレオンガルダウイングつきだ。浮遊大陸に来てからこの合体形態を使う機会がかなり増えた。

グランレオンとガルダウイング。この2機が揃うと重量もそこそこだが、その代わりエーテルリアクタが3機になる。そこそこ余裕のあるエーテル出力は限定的ながら開放型のエーテリックレビテータを作ることすら可能となるので、ガルダウイングの翼が生む揚力も合わせればそこそ自由な飛べるようになるということが最近判明した。

それを生かして何とか駆け付けたわけなのだけでも、鷲頭獣のワトーが被弾するのは止められなかった。

しかし参った。

こうなるとまずはワトーを黄金の鬘号へ連れて帰ってあげないといけなわけなんだけど、それも中々に難しい。

なにせワトーは決闘級魔獣。デカくて重くて怪我までしてるとなれば、自力で飛んで戻るなんてことはできない。

大人しくグランレオンに背負われてくれれば走って村まで帰ることはできなくもないけど、怪我にはよくないだろう。

黄金の蠶号に降りてきてもらおうという手もあるが……どうやらそれも無理そうだ。

耳を澄ましてみると、かすかにだがエルくん式のものとは響きが異なるマジウスジェットストラスタの音がする。あれはおそらくパーヴェルツィークの小型飛竜のものだろう。

まだ近くにいます。黄金の蠶号を着陸させている余裕はない。

……つてことはだよ。

「いやー、こうなったら仕方ありませんね！ とりあえずパーヴェルツィークを黙らせてからワトローを運びましょう。仕方ありませんねーもー！」

「……………そうだね」

いそいそとトイボックスに戻るエルくん好みの展開になってきたってことなんだよねー。

まあ確かに、ワトローを安全に黄金の蠶号に戻す方法はないわけではない。

パーヴェルツィークが邪魔なら、彼らにちよつといなくなってもらえばいいわけで。

『イレブンフラッグスの飛空船は落ちたようですね。パーヴェルツィークの2機だけのようです。じゃあ、先輩と僕で1機ずつということだ』

「うん、わかった。……でもヤバくなったら手伝ってね？ こっちはエルくと違って空中戦は向いてないんだからね？ これはフリじやないよ？」

そんなわけで、トイボックスとグランレオンはそれぞれ、エーテルリアクタに全力吸気しつつ森の中をこっそり移動して、空を見上げて。



「やれやれ、イレブンフラッグスのやつらも懲りないな。我らに敵わないことはもうわかっているだろうに」

「それでも引けないのだろう。騎士に誇りがあるように、商人にも事情があるということか」

イレブンフラッグスの飛空船を片付けた2機の竜闘騎は勝利を誇る。

王女殿下の騎士として、飛竜戦艦とともに未知の浮遊大陸へ。これほどの名誉はない。

最近は戦略が変化したようで、イレブンフラッグスの領地を奪取する攻勢からハルピュイアに庇護を与える守勢に変わったため武勲を上げる機会は減ったが、今日こうしてイレブンフラッグスの船を落としたことは高く評価されるだろう。

それが騎操士、それがパーヴェルツイークという国だ。

戦闘によって少々ハルピユアの村に被害は出たが、戦果の評価の方が高くなる。コラテラルダメージというもの。

悠々と翼を翻して輸送船へ帰ろうとする竜闘騎2機。

あとはゆつくり仲間たちへこの武勲を自慢でもすればいい。

見渡す限り敵影のない穏やかな空を見まわして晴れやかな気分を抱く。
最高に清々しい気分だった。

彼らは知らない。

世界には変態と呼ばれる者がいることを。

それが、なぜかこの時期の浮遊大陸に引き寄せられるように多数集まっていること。

そして、変態とは「上に落ちる」ものだということ。

『わっせーい!』

「な、なん……うおおおおお!」

空に行くに際し、上下は死角に近い。

まして、「眼下の森の中から幻晶騎士が飛びあがって蹴りをかましてくる」などという想定は、する方が愚かと言うほかはなく。

そんなことを実際にやってのける変態の存在など想像の余地もなく、1機の竜闘騎は下から蒼い幻晶騎士の突き刺さった奇怪なオブジェとなり果てた。

だが、パーヴェルツイークの騎操士は有能にして精鋭。

なんだかよくわからない物が現れたとはいえ、敵。残る1機はこの場に留まることは危険と判断し、即座にスロットルを全開にしてその場を離れる。

その判断は正解だった。

直後、竜闘騎の背後で下から上へと舞い上がる影。もしあと一瞬呆然としていたら自分も餌食になっていた、と寒気がする。

だが初撃はかわした。ならば次は反撃に転じるまでのこと。数は不利とはいえそれは今この時だけのこと。仲間他にもいる。ほんの少しの時を稼げば増援が押し寄せて数をもって叩き潰すことが可能で。

『あらよつと』

「……………え？ う、うわあああああああああ!？」

残念ながら、彼はその増援を見届けることはできない。

気配を感じて見上げた空に、鋭い爪と牙を向けてくる鋼の魔獣の姿。

翼を翻して当たり前のように落ちてきた敵から逃れることはかなわず。

それを最期の光景として魂に焼き付けて、仲間と同じ道をたどることとなるのだっ

た。



『やりましたね先輩！ エーテリックレビテータ2機確保ですよ！ あと、この小型飛竜もずっと気になってたんで今すぐバラして構造調べたいです！』

「あとにしようね、エルくん。ワトーを回収するって目的忘れちゃダメだよ」

エルくんのトイボックスマーク2と、俺のガルダウイングつきグランレオン。それぞれしびき倒した小型飛竜の上に乗って制御機構を破壊しつつ、空中をふわふわと漂っている。

新しく手に入れた幻晶騎士つぼくもあるモノに対してエルくんは興味津々で興奮しているが、今の目的はそれじゃないからね。

とりあえず降下してワトーをこのエーテリックレビテータでなんとか浮かせないと思っただけでも。

『おや、パーヴェルツイークの飛空船ですよ先輩。……おかわりがいっぱいですね！』
「……エルくんにとっては敵の増援が経験値の替え玉扱いなんだよなあ」

姿を見せたのは、ここら一带の小型飛竜の母艦らしき飛空船。それなりの大きさだ

し、飛竜がばらばらと出てきているのが見える。何かがあった、敵襲があったと察して出てきたのだろうか動きが早い。こっちは地上から急上昇しての一撃でマナプールも大分減っているし、このままだと真正面から戦うのは避けた方がいいかもしれない。

『仕方ないですねえ。ワトーたちにはもうしばらく待つていてもらうとして、あちらも片付けないとですね。下から行きましょう、先輩』

「了解。全部相手にするのも大変だし、母船を人質に取ろうか」

『いいですね。そうすれば小型飛竜も無傷で手に入りそうですし！』

「……クシエペルカのころからそうだったけど、敵からの略奪に躊躇がないなあ」

なお、いまこの浮遊大陸でもっとも避けなければならぬのは「エルくと敵対すること」であり、そのことにパーヴェルツィークが気付くのはもう少しあとになってからだろう。



パーヴェルツィーク王国の騎操士にとって、その戦いは地獄だった。

飛竜とともに空を行く天空騎士団に敵はなく、他国に会えば他国を燃やし、魔獣に会えば魔獣を撃ってきた。

無論、絶対の無敵などということはありません。魔獣も数が揃えば脅威になるとういう警戒は当然あり、最強たるためにこそ細心の注意を払っていた。

2機。

たったの2機。

まさかそれだけの相手に輸送船とそれが擁する竜闘騎を中核とする戦力が無力化されるなど、どうして考えられようか。

『空から当てずっぽうで森に法撃を打ち込んでも当たりませんよ。いつそ焼き払うくらいでなくては』

「やめてエルくんフラグになるから。……まあ、そこまでの無茶はそうそうしないだろうけどね」

イレブンフラッグスの飛空船を落とした竜闘騎2機がやられた。

それも、遠目に見た限りでは通常の幻晶騎士らしき機体と、幻晶騎士には見えないが明らかに飛空船でもない何かによって。

この地域の警備と防衛を担当していた天空騎士団第二十七飛空船団は、この時点で警戒レベルを最大にまで引き上げた。飛空船を進出させ、竜闘騎は全機発進。

見渡す限りの空に他の敵影はなく、必殺を期した十分な戦力にて排除する。十分理性的で的確な判断だった。

竜闘騎の残骸に取りついていていた敵機がどちらも離れ、地上の森の中に姿を消してなお追撃をやめず、炙り出すために森へと法撃を多数叩き込んだのも筋の通った対応と言える。

敵がその場でやり過ぎそうとするにせよ逃げようとするにせよ望む通りにさせるつもりなど全くなく。

『乗せてくーださーいなつと』

「運賃はあなたたちの命の保証ということの一つ」

まさか、本丸である飛空船に向かい、あまつさえ森の中から飛びあがって乗り込むなど予想できることではない。

取りついた幻晶騎士は、人型が1機と魔獣かと疑う翼というか鳥を背負った獣のようなものが1機。速やかにウィザードスタイルの砲座を潰す様は飛空船の構造を熟知していると思えず、パーヴェルツィークの騎操士であったとしてもそこまで迅速にできるかどうかという素早さだ。

いやまあ、パーヴェルツィークには地上から飛空船に飛びつこうなどというトチ狂ったことを考える騎操士はいないのだが。

いずれにせよ、こうなってしまうばもはや打つ手はない。

飛空船は空を行くもの。まさか敵の幻晶騎士に乗り込まれるなどという状況は想定

しておらず、ウィザードスタイルも沈黙させられればあとは沈められるのは待つばかり。

『お、突っ込んできましたね。捨て身の一撃、正しい判断ですし嫌いじゃないですよ。……先輩！一緒に斬りましょうザクつと！ライジユウかアリゲラみたいに！』

「中に人が入ってるのに容赦ないねエルくん」

それを阻止すべく、1機の竜闘騎が決死の覚悟を決めた。

マジウスジェットスラストを最大出力に、回避など考えない直撃コース。

竜闘騎は飛空船に近い性質上、幻晶騎士よりも機体が大きい。相手が2機とはいえ狭い飛空船の上にいるのならまとめて体当たりすることも十分に可能という算段で。

迫る飛空船。艦橋の船員たちが恐慌する顔すら見える距離まで瞬く間に近づくフルスロットル。

飛空船上の敵は足場が狭いせいも動きも見せず、このままなら排除は可能という確信と、巻き込んでしまう飛空船の乗組員に対する謝罪の念を共に抱き。

『断刃装甲展開！』
アーマーエッジ

「え、武装の名前言う系？……いやまあ、俺は別に武装名とかつけてないよ。品種改良した作物にはカッコいい名前考えるけど！」

竜闘騎の騎操士は失念していた。

こいつらはもともと地上から飛空船へと自力で飛びあがってくる程度には飛行能力があり、「可能なこと」と「実際にやろうと思うこと」の間にある壁をしれつと乗り越える変態共であることを。

ふわり、と2機が飛空船から離れた。多少足を離れたとしても、再び戻る程度の飛行能力は2機とも有しているが故のこと。

人型の幻晶騎士は肩に備えた翼のような装甲板を伸ばす。それはまさに可動式の装甲としても使える補助腕であり、同時に大剣としても使えるよう縁を研ぎあげた優れもの。

と、本人は思っている。本人以外まともに使えないが。

一方の獣は背に備えたサブアームが持つ剣を伸ばす。ごく普通の、幻晶騎士が持つような剣。だが、実は3機のエーテルリアクタを備えたこのキメラ、マナ容量は多く、強化魔法の出力は強く、迫る竜闘騎が十分な速度を持つているとあらばその斬撃は並ならぬ威力を持ち。

ぞん。ざん。

世にも珍しい光景が現れた。

2度の斬撃によってX字に切り裂かれる竜闘騎など、歴史に二度と現れまい。

これにて勝負はほぼついた。

この後、竜闘騎たちは後方から現れた飛空船を襲撃したりもしたのだが、パーヴェルツィークの飛空船以上に洗練されたウィザードスタイルの配置などに苦戦したうえ、無数に放たれたミッシレジャベリン、そしてなんか甲板上に出てきた見たこともない荷車から上半身が生えたような幻晶騎士から放たれるアホほどの火力に1機残らず叩き潰され終わるのだった。

「ジャベリン、いっぱいもってけー！」

「うっわカルデイヘッド火力すっげ。先輩、よくこんなの走り回りながら使えるな……！」



「……という感じで、全部しばき倒してきました。お待ちせしてしまいましたが、あとはもうゆつくりワトーを助けられますよ」

「……う、うむ」

そんなわけで空を制したエルくん。

首とか爪とか落とした小型飛竜の残骸を抱えたトイボックスが戻ってきて思わずド

ン引きのホーガラさんたちである。

まあ気持ちにはわかる。ワトーを助けるのはいいとして、そのためにパーヴェルツィークの戦闘団が一つ壊滅させられたわけだし。

しかも、ここからはエルくんのお楽しみのお時間だ。

「さて、それではまずエーテリックレビテータを取り出しましょう。先輩も手伝ってください」

「グランレオンはあんまり細かいことできないから、とりあえず外側ゴリゴリ削つていくねー」

「ええ……」

「我らが苦戦した地の趾の船を沈めた飛竜が捌かれていく……」

負傷したワトーを飛空船へ連れ帰るため、という目的をエルくんが忘れないように注意しつつ、小型飛竜の装甲とフレームをバリバリと剥がしていく。

戦闘用とはいえ、基本的には飛空船。その構造はエルくと俺は大体わかっているし、トイボックスとグランレオンのパワーなら強化魔法の切れた飛空船をバラすのは狩りの獲物を捌くのと大差ない。

大体の予想通りの場所にエーテリックレビテータを発見。これはなかなかデリケートな部品なのでそつと取り出してもらい、これにて必要なものは大体揃った。あと

は少々工作をしなきゃならん。

「さて、それじゃあまずはエーテリックレビテータを適当な高さに吊り上げて、と。トイボックスとの位置を調整しないと」

「じゃあ俺はあつちの残骸から固定に使えそうな資材を集めておくよ」

エルくんは執月之手とそこらの木をクレーンのように使ってエーテリックレビテータを吊り上げ、トイボックスをその下のちょうどいい感じの位置に置く。

一方俺の方では小型飛竜の残骸をさらにバラして、装甲やらフレームやらの構造材を取り出していく。

で、あとは魔法で身体能力を強化したエルくんと、ガルダウィング側のコックピットとほぼ同義な魔導甲冑で構造材を無理矢理ひん曲げたりしてトイボックスにエーテリックレビテータを固定してつと。

「やつぱり、こういう工作は先輩と一緒にだと早いですねえ。とてもお上手です」

「俺の村だと、こうやって何かしら作るのは日常茶飯事だったから。……ああ、思い出すなあ。ついでにこの辺一体畑にしてくれようか。開拓……開墾……農業……農業……！」

「どうしようホーガラ、割とまともだと思ってたあつちの地の趾もヤバいみたい」

「地の趾とは、いったい……」

これにて、不格好ながらトイボックスでレビテートフィールドを形成して、ワトーごと浮遊させることができるようになるわけだ。

エルくんのせいで人間に対する風評被害が広がっている感がなくもないけど、気にしない気にしない。

「まあ、足りない強度を補う強化魔法の調整と、レビテートフィールド制御用の術式を用意する必要もあるけど……エルくん」

「早速やってしましましょうか。——キャリブレーション取りつつ、ゼロ・モーメント・ポイントおよびCPG再設定……ちつ。なら疑似皮質の分子イオンポンプに制御モジュール直結。ニュートラルリンケージ・ネットワーク、再構築。メタ運動野パラメータ更新、フィードフォワード制御再起動、伝達関数、コリオリ偏差修正、運動ルーチン接続、システムオンライン。ブートストラップ起動……」

「ね、ねえホーガラ。あれ、なにしてるの……?」

「何かすさまじい勢いでしていることはわかる。何をしているのかは全くわからんが」

「ちなみに、エルくんが言ってる内容とやってることは全く関係ないです」

「ならばなぜ!?!」

ハルピユイアの二人が、マジでわけのわからないものを見るような真顔になっているが無理もない。

「戦場でOSを書き換える」的なシチュエーションにテンションが上がったエルくんなんて、この世で一番やつかいなものだろうからねえ。

なお、そんなこんなで作った急造のエアトリックレビテータはちゃんと仕事をしてくれて、ワトーは無事に黄金の鬣号へと戻ることができました。

ハルピユイアの二人とワトーは、揃って「何が起こったのか全く分からない」という驚いた猫みたいな顔してたけど。



その後、ふわっと浮かんだトイボックスマーク2に巻き込まれる形でワトーは黄金の鬣号へと無事収容。

同じくひっ捕らえられていたパーヴェルツイークの捕虜の人たちにお話しも聞いて、更に浮遊大陸の情勢が分かってきた。

「竜闘騎、というんですねあの小型飛竜。バラしてみたところ設計思想に飛竜戦艦の面影がありますし、本物もいるわけですから……いますね、設計者」

「……待て、バラしただと!? 竜闘騎を!」

「すみません、もう1騎も残ってないんですよ。うちの団長が全部バラして構造調べちゃったので」

「な、……なっ!？」

俺たちとしては、捕虜を抱えておく理由もなければ鉾床街を掌握するメリットも、パーヴェルツィークが傘下に置いていたハルピユアの村に対するスタンスを継承するつもりもない。

となると、この人たちは窓口とするべきだろう。捕虜返還をきっかけとした情報交換となんなら交渉を持つ。これまでなかった直接対話のチャンネルを作る、絶好の機会だ。

「とはいえ、シユメフリークに連絡もせんといかん。一旦拠点に戻って出直しだな」

「そうですね、若旦那。……その間に僕はより詳しく竜闘騎の構造調査を」

「じゃあ、俺は捕虜の人たち自身に生活の場を作ってもらうために農業を」

「待て貴様ら」



浮遊大陸の動乱は、また新たな局面を迎えつつある。

銀鳳商会並びにシユメフリーク、ハルピユイアの連合が本格的に盤に上らんとしている。

その一方で。

「……所詮は地の趾か。森の上で迷わず炎の嘴を使うなど、同じ風に乗れるものではない」

「戦いとなれば、また同じように舞うだろう。その時我らの巢かただの森か、区別をつけるとは思えぬ」

パーヴェルツィークの戦いぶりは、その庇護下にあるハルピユイアたちの目にも映るものとなった。

そしてそれが、人とハルピユイアという種族の違いを際立たせていたことを、人間たちの側だけは知らない。

森に生き、風と共に飛ぶハルピユイアにとって空と木々は決して蔑ろにできないもので、人間たちがその価値観を共有しているとは、どうしても思えなかった。

ならば、どうする。

庇護は信頼できない。

かといって、戦えば勝てない。

ならば、いかにして。

「知れたこと。我らもまた、大きな群れとならねばならぬ」

「何者だ!? ……なつ、混成獣^{キユマイラ}!?」

その答えは、空から現れた。

声の主は、ハルピユイア。しかし顔を隠す仮面をつけ、何者なのかは判然としない。

だがそれ以上の驚きは、従えていた獣。

ハルピユイアにとつてともに飛ぶ友とはすなわち驚頭獣^{グリフオン}のことで、獣とともにあるこ

と自体は驚くに値しない。

だがその獣が、混成獣となれば話は別だ。

獅子と山羊と鷲の頭を持つ獣。強靱な体躯に狂える精神を備えたそれは、目に付くあ

らゆるものを滅ぼさんと暴れ回る狂獣。そのはずだった。

しかし今目の前にいる混成獣は、瞳に理性の光こそないもののハルピユイアの指示に

従い静かに佇んでいる。

「なにか」があったのだ。浮遊大陸の住人たるハルピユイアは、目の前の現実からその

ことを何より雄弁に感じた。

人に、飛竜戦艦に支配されつつあった空の模様がまた、変わる。

「集え、同胞たちよ。我らは巨大な群れとなり、地の趾の爪を振り払う。集え、同胞たち

よ。ハルピユイアを導くわれらが王。『竜の王』の元にて羽ばたき舞え」



パーヴェルツィークとの捕虜交換交渉の実施は特に問題なく決まった。

支配領域内まで入ってこい、という要求はさすがに受け入れるのは怖いのでパーヴェルツィーク領手前を指定して、それが了承された。

俺たちが場所を用意して、そこにパーヴェルツィーク側の交渉団がやってくる。てなわけで、主に俺が中心となって会見場を設営する。

木を切り開き、切り株を掘り出し、地面をならし、建材を使ってテーブルと椅子と衝立くらいは作って、と。

グランレオンにカルデイヘッド、さらに魔導甲冑と人手があればこのくらいはちよちよいのぶーよ。

「何してるんですか、先輩？」

「え、だから会見場の用意を……」

「その辺りの地面、やけに柔らかく掘り返してるみたいですけど……畑ですか？」

「ん〜!? なんのことかなフフフ……」

「みんなー、ちよつとそこ埋め戻しといてー」

「アデイちゃんの鬼！ 悪魔！ エルくんの嫁！ ヘルヴィー！」

アデイちゃんに致命的な妨害をされたりもしたけど、まあ仕事は順調に進んで会見の時までに準備は済んだ。

さて、あとは交渉をするだけだ。

「ほう、飛竜戦艦で来るわけではないのか」

「あれは巨大すぎて話し合いの場には戦力過剰ですからね。それに、飛竜戦艦も竜闘騎もマギウスジェットストラスタを搭載しています。いざとなったらすぐ駆け付けられるというアピールでもあるかと」

空から姿を見せたのは、パーヴェルツィークの旗を掲げた飛空船。

そこから降り立つ白い幻晶騎士たち。噂によると名前は〈ヘシユニアリーゼ〉。大西域戦争後に西方諸国に吹き荒れた幻晶騎士新造の波の例に漏れず新規設計で開発された、網型結晶筋肉とバックウエポンを備えたエルくん方式の機体だ。

飛竜戦艦、竜闘騎、そして見た感じ完成度が高そうな新式幻晶騎士。

北の大国と呼ばれるだけあってなかなかの国力らしい。

……あと、国土の大半が寒冷地や山岳地帯で「試される大地」とも言われているらし

いので、かの国での農業にも大変興味があります。

ともあれ、捕虜変換交渉の始まりだ。

こちらはエムリス殿下とシユメフリーク王国のグラシアノさんが主に交渉を担当。俺とエルくんは護衛枠で、さらに同陣営ということで同席しているハルピユアの風切さん。

対するパーヴェルツィーク王国の交渉担当は……おや、女の子。

「出迎えご苦労。私はパーヴェルツィーク王国第一王女、フリーデグント。この地においては陛下の名代として天空騎士団を率いている」

「これはこれは、王女殿下自らのお出ましとは光栄の至り。ささやかながらこちらに席を用意した。どうぞこちらへ」

と、思ったらなんと第一王女殿下でありましたとき。

おそらく相手側は王族が直接出てくることでプレッシャーをかけて交渉を有利に進めるつもりなのだろう。

……まあ、こつちにもガチ王族いるんですけどね！ 王女殿下の目の前の、見た目は完全に山賊の親方みたいなその方なんですけどね！

「……なるほど、貴公らはハルピユアと組み、その関係で我が方と戦闘に陥って捕虜を

取ることになった、と」

「そういうことになるな。そちらの目的はエーテライトか。飛竜戦艦を浮かべるくらいだ、しこたま必要にもなるだろうなあ」

かなり年若く、エルくんたちと同年代くらいに見えながらも貫禄たっぷり言葉を並べる王女殿下。

対するエムリス殿下は全く意に介していないらしい自然体。まあ、この人もこう見えて普通に王族ですからね……。

ちなみに内容としては、イマイチ妥協点を見出しづらい気がする。

パーヴェルツィーク王国側としては、あくまで浮遊大陸は新たに発見された資源の埋蔵地。

ハルピユイアはそこに住まう野生の獣程度の認識らしい態度が透けて見えるし、飛竜戦艦という武力を背景とした国力差もあってシユメフリークの人たちとも積極的に交渉しようという意思が感じられない。

「アレに詳しいような物言いだな？」

「俺はそう詳しいわけでもないが、以前アレを墮とすところに居合わせたのでな」

そんなパーヴェルツィークでも無視できないのは、やはり飛竜戦艦らしい。

目付きが鋭くなった王女殿下はエムリス殿下の言うことをそのまま信じているわけ

ではないようだが、元はジャロウデク王国にて開発された飛竜戦艦がクシエペルカ王国との戦闘で撃破されたという事実は動かない。おそらく、そうなったからこそ飛竜戦艦の開発者を引き込めたのだろうし、だからこそエムリス殿下の言葉にも一定の警戒はしているということだろうか。

「さすが、クシエペルカ王国ほどの大国ともなると言うことが違う。だがかつての飛竜と同じと思ってもらっては困るな、グスタフ？」

「はっ、その通りでございます。より強大な飛竜と、我ら天空騎士団。同じ轍は踏みませぬ」

王女殿下の脇に控える、おそらく浮遊大陸遠征軍の指揮官らしき人が力強く宣言する。

まあ確かに、あの新しい飛竜戦艦。どうやら竜闘騎と合わせて運用することを前提として設計されているフシがある。かつての敗北から学んでいるということか。

……まあ、「飛竜戦艦並のMana出力を誇る空飛ぶ幻晶騎士との戦闘」から学んじやつていいのかという疑問はあるけど。

「だ、そうだエルネステイ。どうだ、また墮とせそうか？」

「そうですねえ」

えっ。

とばかりに、エムリス殿下の言葉を受けて声は出ない物のパーヴェルツィーク側の人たちが一斉に目を剥いた。

その視線の先には、エムリス殿下の横にちよこんと立っているエルくん。椅子に座っているエムリス殿下と頭の位置がほぼほぼ変わらない小柄で、いまだに薄目で見たりすると美少女に見えるときもある、エルくん。

交渉の席でのハツタリを警戒して頭から信じてはいないようだが、それでもマジでこの子が、という驚愕は確かにパーヴェルツィークに走ったようだった。

「巨大な母艦から多数の小型兵器が出てくる、と。となるとまずは足を潰してから小型兵器を片っ端から潰していきたいですね。そうやって手も足も出ないデク人形にしてしましましょう。カブラカンのように。今度も手伝ってくださいね、先輩！」

「俺がアレをもう一回とか今度こそ死ぬよ」

え、お前もかよ。

そんな声なき声が聞こえる目線が、エルくんから俺に向かってずあつと流れてきた。

やめて！ 俺はただの農民だから、そういう目線に弱いんです！ そんなに見るなら見物料取るぞ！ パーヴェルツィーク農業について教えてくれるだけでいいですから！

そんなこんな的一幕もありつつ、なにより重要な言葉を交わすという目的は果たされていく。

「——つまり、どこまでもハルピュイアの側につくと。貴公らと我らなら、この浮遊大陸すら分かち合えると思つたのだが」

「そうだな。俺も残念だ」

たとえその結果が、「交渉決裂」というものだったとしても。

総合的に考えて、フリーデグント殿下はそれなりに譲歩しようとしてくれていたらしい。

黄金の蠶号の装備や背後に見え隠れするクシエペルカ王国の気配を警戒してのものだったのかもしれないが、浮遊大陸の共同統治を持ちかけてくるくらいには覇権への渴望と理性的な判断が同居していたと見える。

……ぶつちやけ、勢いに任せて未知の新天地に冒険かます某王族よりも頼もしいとか思わないでもない。まあ、エムリス殿下は王位継承権は2番目なので、その辺いろいろ違うんだろうけど。

だが、ハルピュイアに対するスタンスだけは相いれないようだった。

……決して、決して。

「エムリス殿下的に、無断で浮遊大陸へ冒険しに来た挙句に重大な外交案件持ち込ん

だら叱られるだけじゃすまないから無理」という理由はない。ないっただけだ。はずだ。

交渉は終わった。

緊張感に溢れた序盤、エルくんの存在に困惑していた中盤を経て、気温が下がった気さえする今。

次に会うときは戦場かもしれないという諦観だけは共有し、捕虜変換の条件だけを詰め、この会合は終了する。

そう、「会合は」終わる。

だがそれが、戦いの始まりだった。

バサリ、と羽音が頭上から降る。

これが重要な会談の場だということはハルピユイアの人たちも理解してくれているから、突如飛び込んでくるなどと言うことはあり得ない。

それが、俺たちと友好的な関係にあるハルピユイアの人たちならばの話だが。

会談場にかかる影。

見上げた先には、太陽の光を背負った鷲頭獣とそれを駆るハルピユイアの姿……では

ない。

「炎を吐く石の竜よ。汝は我らが主たるに能わず。我らの真なる王、『竜の王』の威にひれ伏すがいい」

仮面をつけたハルピユイアが乗るのは、3頭の鷲頭獣ではなく、獅子と山羊と鷲の頭を持つ異形。

……異常だ。アレは、鷲頭獣のような知性を持つ、他の生物と共存できる類のものではおそらくない。本能と衝動のみによって生きるだけのものにしか見えない。

だがそれでも、ハルピユイアに従っているということは……何か、カラクリがあるな、これは。

——ギャオゴアキュオオオアアア!!

3種の頭がそれぞれに吼え、耳障りな不協和音となって場を満たす。

まさかこれが友好的なものであるうはずもなく、ハルピユイアに対する扱いへの不満が最悪の形で噴出したことは確実で。

耳を抑えてうづくまる王女殿下。

戸惑いつつも動き出すシュニアリーゼ。

そしてこういう時は反射的に動き出す俺たちフレメヴィーラ勢。

交渉は終わり、戦いが始まった。

ただ今度の戦いは、ひよつとすると種族の尊厳を賭けるような、戦いになるかもしれないなあ。

隠しておいたガルダウイングとグランレオンの元へと突っ走る。

おそらくとんでもない戦いになるだろうなという半ば予知に近い確信と。

「……エルくんが喜びそうだなあ」

こういうシチュエーション大好きなエルくんがより一層とんでもないことになるんだろーなーという確定事項に、今から頭が痛かった。

知り合いとの再会（ただしお互い二度と会いたくないと思つていたものとする）

混成獣^{キユマイラ}。

獅子と山羊と鷲の頭を一つの胴体に持つ巨躯の魔獣。

それぞれの頭がそれぞれに異なる魔法を駆使し、生命力も極めて高い。

総合的な戦闘能力は決闘級魔獣の枠内に収まらないほど高く、西方諸国の幻晶騎士の中でも高い完成度を誇るパーヴェルツィーク王国のシュニアリーゼであつても苦戦は免れ得ない。

——キユオオオオアアアギョオオオオオオオ！

高く頭を掲げ、それぞれ勝手に吼えながら翼を羽ばたかせ強風を起こす。

シュニアリーゼは十分な安定性を持つているとはいえ吹き荒れる防風にバランスを崩すことは避けられず、まともに近づくことすら困難だ。

これは、人型である幻晶騎士の抱える難点。背が高く大半の魔獣に対して上から打ち下ろすことが可能な幻晶騎士のサイズであるが、その分重心が高い。

そのため強風によってバランスを崩すのは仕方のないことで。

れに魔法を蓄え狙ってくる。まっすぐ突っ込んできた直後だから、慣性も残っていて回避のしようもない。死なば諸共の精神、見事なものだ。

が、生憎グランレオンの手札は一つじゃない。

背部に備えたサブアームのうち、2本の杖を伸ばす。左右の首にそれぞれ杖先をねじ込み、そのまま火炎魔法を発動。魔獣のそれより、エルくんからのアドバイスもあつて練り上げた術式の方が圧倒的に早く起動する。

結果、グランレオンの放つ魔法と混成獣の魔法が双方まとめて炸裂した首は、きれいな爆炎と雷光の花と化した。

「……よし、一匹撃破。普通の魔獣の3倍くらい面倒だな」

『ええ……』

『ま、魔獣との戦いとはあそこまで慈悲なくする必要があるのか……？』

崩れ落ちる混成獣の胴体を背に、周囲の状況を確認する。

なんかパーヴェルツイーク側からドン引きされてる気がしなくもないけど、一応幻晶騎士的なものだということは伝わっているらしく、魔獣扱いして襲ってこないだけよしとしよう。

竜の王なる存在を主と仰ぐというハルピユイアたちの乱入からしばらく。

パーヴェルツイーク王国との会谈場は乱戦の只中と化していた。

空から襲来した何頭もの混成獣は、ただでさえ頑丈で複数の魔法を扱う厄介な奴なのに、ハルピユイアを乗せていることでその動きに賢さと統制までもが追加されている。

背中にガルダウイングを乗せたグランレオン、というんだかよくわからないものになっっている俺の機体は見た目からして意表を衝けてはいるけど、それもいつまでもつや
ら。

『背中にガルダウイングを乗せたグランレオン、というのは呼び名としてちよつと長い
と思うんです。やはりここはふさわしい名前が必要でしょう。——獅子に翼を得たる
ごとし。獣王合体ガルダレオン！ とかどうでしょう』

「出てくるなり何言ってるのエルくん」

『いいじゃねーの、先輩。エルの好きなようにさせてやれば』

甘いよキッドくん。

これ、合体するたびにそのセリフ言わされるヤツだよ。

次に狙おうか、と向き合った混成獣が、どこからともなく飛んできた蒼い幻晶騎士の
延髄斬りに首をへし折られ、直後に突っ込んできたツェンドリンブルの槍が胴体を串刺
しにする。かわいそうになるくらいのコンピネーションによって血祭に挙げられてい
る。

が、ともあれエルくとキッドくと合流できた。

混戦の状況は刻一刻と変化している。いつの間にか周囲にいたはずのシュニアリーゼはどこかへ行ってしまったし、この場にいるのはフレメヴィーラ組の3機。けつたいな状況ではあるが、面子が面子なのでとても頼りがいがある。

『あれほどの数のハルピュイアが、混成獣と。鷲頭獣を、失ったのか……』
『くっ、シュニアリーゼがいない……完全にはぐれてしまったな』

と、思っていたらキッドくんのツェンドリンブルから聞こえてくるかわいらしい女性の声が2人分。

「……とりあえずエレオノーラ様にはしつかり報告しておくね、キッドくん」

『待て先輩待ってくれ、何を報告するつもりだ!?!』

「それはもう、真実を」

なんか、キッドくんが相変わらずラブコメ主人公体質を發揮しているらしい。何をどうしたらホーガラさんとフリーデグント王女と3人でツェンドリンブルに乗るの……?

『さて、少し困りましたね。黄金の鬘号は危険を避けるために下がっているようですし、現在僕たちは孤立しています』

「さすがに混成獣全滅させるのは難しいだろうし、どうしようか」

『……なぜ、混成獣の方が圧倒的に多いこの状況で圧勝することを選択肢の一つとして挙げられるのだ？』

『すんません王女様。あの二人、うちの国でも特にヤバい二人なんです』

『そうか、地の趾は全てがああとというわけではないのだな……よかった……』

いずれにせよ、根本的な状況はいまだ悪い。

会談どころではなくなった以上、何はともあれこの場から逃げのびなければならぬ。
い。

あと、エルくんが途中で保護したというフリーデグント王女も早いうちにパーヴェルツィークに返さないと、それこそ国際問題一直線だ。

それを、空に混成獣飛び交うこの状況で出来るかどうか。

パーヴェルツィークの幻晶騎士は姿が見えないし、仮に見つけて王女殿下を引き渡したとしてもその幻晶騎士ごと混成獣にやられる、なんて可能性が普通にある。

となると、やっぱり俺たちが責任もって届けるしかない……か……いや待て。
なんだあれ。

『先輩？ どうしまし……』

『二人とも、そつちに一体何が……』

『……部下たちからの報告にあった。ハルピユイアたちが「禁じの地」と呼ぶ場所に、飛

竜戦艦にも匹敵する巨大な魔獣、曰く「竜の王」がいたと。おそらく、あのハルピユイアたちを従えているのが、アレなのだろう』

フリーデグント王女の言葉を呆然と聞きながら、空を見上げる。

混成獣を引き連れた黒雲、と一瞬脳が誤解する巨大。

それは翼を持ち、牙を生やし、空を覆うような異形の怪物。

クシエペルカ王国で最初に飛竜戦艦に出くわしたときのことを嫌な懐かしさとともに思い出すそれは間違いなく魔獣であり、先のハルピユイアが言うところの「竜の王」だろうと思われる。

それは魔獣というにはあまりに大きすぎた。

大きく、異形で、不気味で。そして有名過ぎた。

それはまさに竜ドレイクだった。



——聞け、愚かな人間どもよ。我は竜の王。翼を持つ者と獣たちの王なり。

『げえっ?! なんだこれ頭いてえ! ってーかあの魔獣、しゃべるのか!』

『竜の王の言葉には不快感が伴うと部下から聞いてはいたが、これほどは……一体な

んなんだ、あれは！』

『人の言葉を使うという点ではキッドの言う通りですが、いわゆる声ではありませんね。人の持つマジウスサーキットに遠隔で無理矢理干渉して、言葉や意思のように感じ取れる反応を引き出しているものですね。……ラジオに近い原理でしょうか』

エルくんの最後の言葉は、おそらく俺にだけ聞かせたもの。周りのみんなは頭痛でそれどころじゃないし。いやまあ俺も大分頭痛いんだけど。二重の意味で。

……この頭の痛み、前にも味わったことある気がするんだよねー。

その時も、こんな風に冗談みたいに巨大な魔獣と、そいつの操る厄介なたくさん魔獣を相手にして戦ったよーな。

『どう思います、先輩？ アレか、アレではないか』

「アレだったらヤだけど、アレと同じことできるのが他にもいるって可能性の方がいやかなあ」

二度と出くわしたくない反面、アレと同じことができてなおかつこんなことをするよ
うなのがほかにもいる、というのもそれはそれで恐ろしい話だ。

……まあ、かなりしぶとい魔獣ひしめく戦場で孤立してるといのがそもそも絶望的
という説もあるが。

『助けられた身として助言しよう。もしハルピユイアとの対話と平和的解決を望むのな

ら、急いだほうがいい』

『と、おつしやいますと?』

『私が今、ここにいる。である以上、我が騎士団は全力で私を捜索するだろう』

「……ヤバいよエルくん。下手すると飛竜戦艦が出てくる」

『ええ、つまり怪獣大決戦。とても楽しみですね』

しかも、戦況は激化の一途を辿ることが確実ときたもんだ。

言ってるそばから、俺たちの頭上を小隊編成で飛び過ぎていく小型飛竜。

すぐにドンパチ聞こえてきたことからして、さっそく混成獣との戦闘に入ったのだろう。

あと、このまま放置しておくど竜の王を排除するために飛竜戦艦まで突っ込んでくるし、なによりエルくんがウキウキし始めている。こうなつたエルくんがなにやらかすかなんて、魔獣よりハルピユアより竜の王よりわかつたもんじゃない。

早急に状況を改善しないとこの場で一大決戦が繰り広げられることになりそうだ。

『……致し方ない、か。命の恩人たるそなたらに重ねてのことになるが、頼みがある』

『な、なんでございましょうか、王女殿下?』

その状況を察しているのだろう。フリーデグント王女の声に確かな決意の気配が宿り、キッドくんがそれに気圧されている。うーん、このあたりさすがの王族。

『私がこの場にいる限り、我が騎士たちに撤退の選択肢はない。そしていかに飛竜戦艦と竜闘騎があるとはいえ、竜の王を相手としては損害も少なくあるまい。そんな状況に彼らを追いやることは、私にはできない』

『そのために、王女殿下をパーヴェルツィーク陣営に送り届けよ、と。あの戦闘の只中へ』

『……無論、対価なくとは言わない。今回相いれなかった貴国との関係について見直し、再び話し合いの席を設ける。これはパーヴェルツィーク王国第一王女として誓おう』

エルくんの皮肉じみた言葉にも、詰まるのはわずか一瞬。

ちなみに、エルくんがちよつと笑いながら言ったのは煽るためではなく、それはそれで楽しそうだなーと思つてたからなんで心配いらなそうですよ王女殿下。

……いや、心配したほうがいいな。最悪、二度と幻晶騎士に乗れないくらいのトラウマ植え付けられることになりかねないし。

『エル、このままじゃ状況は悪くなる一方だ。頼み、叶えてやろうぜ』

『ええ、それがいいですね。僕たちにとつても、ここで全面戦争になるのは望ましくありませんから』

『でも王女殿下。もう一つだけ約束してくれ。その話し合いの席では、ハルピユイアとも話し合うつて』

『ハルピユイアと……?』

『少なくとも言葉が通じるんだ。このまま終わりになんてしたくない』

「あ、ついでにパーヴェルツィークの農業教えてください。噂の寒冷地でどういう農業してるのか、興味があります!」

『う、うむ……? まあ、別に構わんが……』

キッドくんは本当にまつすぐだなあ。

知り合った人たちのことを大切に思って、そのために行動することをためらわない。

……もし問題があるとすれば、その行動してみせる相手が大体女の子であり、しかもなぜか西方諸国の中でも特に大きな国のお姫様というケースが続いていることだろうか。

『……わかった。それも含めて約束しよう。だから、頼む。私をパーヴェルツィークの元へ連れ戻してくれ』

『はい、キッドもあ言っていますし、お引き受けしましょう。……それにあたつてなのですが、殿下。どの程度の手段まで、許容していただけますか?』

なお、そのお姫様のうちの一人はたった今、悪魔と契約しました。

『……頼み事ばかりで本当に申し訳なく思っているが、どうか我が騎士たちに危険が及ぶことだけはどうか……!』

『はい、承知しました。つまり「死ななきや安い」ということですね?』

『おい!』

「すいませんその子の場合最大限穏便でそれなんですよ。多分パーヴェルツイーク側の死人は出さないんで、許してあげてください」

まあとにかく、これでエルくんは混成獣と竜闘騎の暴れまわる乱戦の中に突っ込んでいくことが確定した。

乗機がイカルガではなくトイボックスなので性能が落ちるとはいえ、それでも騎操士はエルくん。心配しないわけではないけど、「エルくんの身に何かが起こる」ことよりも「エルくんが何かやらかす」ことの方が心配だ。

『じゃあ、とりあえず飛んでいきましょう。先輩も来てくださーい! 合体しましーう!』

「エルくん、とりあえず合体したいだけじゃない?」

『……なんと?』

『そんなわけないじゃないですか! ただのトイボックスじゃ空中戦は分が悪すぎるでしょう? だからガルダウィングの力を借りて少しでも空の地形適応を上げようという! そういう!!』

……ほらね！ さっそく無茶振りだよ！！



空に、激戦が花開く。

混成獣と竜闘騎。無数の飛行戦力が入り乱れる空中戦が勃発した。

陣形を組んで整然と突撃を繰り出す竜闘騎と、その攻撃を受けてなお怯まず反撃する混成獣。

数と戦術においては竜闘騎が、個の戦力では混成獣に利がある。

既にして双方撃墜は複数。戦いが終わらない限り被害が収まる気配はない。

「くそっ、獣の分際で……！！」

「避ける！ 後ろに付かれたぞ！」

「まだ落ちないだど!? 何発法撃を叩き込んだと思っっている！」

「振り切れない！ 被弾した！ 被弾した!!」

マジウスジェットスラストが引く噴射炎と白い雲は複雑な文様を描き、それを混成獣の翼が起こす暴風が吹き散らす。

魔法の炎と雷がいくつもの光となって空を照らし、時折地に落ちていくのは燃え盛る

竜闘騎と混成獣。

破壊と死こそが吹き荒れる、死神の狩場。

どうすればこの戦いに終わりが来るのか、それすら見通せない乱戦のその最中。

ひとときわ甲高いマジウスジェットスラストの音が、響く。

下から。

『毎度どうもー！ お届け物でー！ーす!!』

眼下から空へ。

死神も背を向けてトンズラかます狂人が、エントリーした。

この戦場にふさわしく、それは幻晶騎士だった。

ただ、空の只中だというのに人形で、しかもなぜか背中に羽というか鳥を背負っているのだが。

その幻晶騎士は空中でくると身を翻し、なんかこう、ビシリとカツコいいポーズを決めた。特にその必要性はないと思うのだが、とても満足しているらしい空気が伝わってくる。なんだアレ。竜闘騎の騎操士たちの心が一つになる。

突然の闖入者に竜闘騎も混成獣を操るハルピユイアも虚を突かれて一時意識と行動の空白が生まれ。

『お、足場にちょうどいいですねその混成獣。ちよつと借りますよー』

「う、うおおおお!?!」

迫る幻晶騎士の巨大な足裏には、さすがのハルピユイアも冷静ではいられない。

乗騎を捨てて空に身を投げ出し、その直後に幻晶騎士が混成獣の上に着地する。

ぐぎよおえぎやああおおお。滅茶苦茶痛そうな悲鳴が混成獣から上がり、竜闘騎に乗るパーヴェルツィーク騎操士ですらドン引き不可避。

そんな状況を作れる者は、セッテルンド大陸広しといえど一人しかいない。

『こんにちは! フリーデグント王女殿下をお届けに参りました!』

『すんませんマジなんです。パーヴェルツィークの人たち撃たないで!』

「アグリを連れまわすエルネスティ」。

地上最強の別名である。



「……もう一度報告を頼む。戦場の音が大きくなってきたせいか、よく聞き取れなかつ

たようだ」

フリーデグントと引き離されこそのものの、飛竜戦艦への帰還に成功した竜騎士長グスタフは部隊の指揮を執っていた。

王女とはぐれてしまったからには、必ず探し出して合流しなければならない。迫りくる混成獣には竜闘騎を当て、その向こうに姿を見せた竜の王は飛竜戦艦そのもので牽制する。いずれ直接の対決は避けられないだろうが、そのタイミングは戦局を左右するだろう。

そんな緊張を強いられる最中でも、次々と報告は上げられる。

それらをしっかりと聞き届け判断を下すことこそ、騎士団長としての責務。最終的に優先順位が低いものと判断することはあれ、聞き流すことなど許されない。

だからこそ、最初その報告を理解できなかったとき、グスタフは鳴り響く轟音によって己の耳がイカれたのだと疑った。

「はっ！……王女殿下の所在が判明しました。混成獣と竜闘騎の戦場最前線にて、蒼いウォーリアスタイルの幻晶騎士に同乗しているとのことですよ！」

自身の耳の次は、頭がおかしくなったことを疑った。

部下の報告がトチ狂っている可能性もなくはないのだが、騎士団長としてそれはあまり疑いたくない。

そしてもし自分もまた正常であるならば、間違いない。

最も激しい戦場に、殿下が、いる。

何が起きたのかはわからない。

だが状況が最悪の半歩手前であることだけは、疑いの余地がない。

グスタフ、深めの呼吸を一つ。

「イグナーツ！ ユストウス！ 両近衛艦隊、全力出撃！！ 殿下をお迎えに上がれ！！

最速で!!!」

「御意っ！」

直後、右近衛と左近衛双方の隊長に命じ、パーヴェルツィークの全軍を投入する。せざるを得ない。

命を受け、二人の近衛隊長が自身の飛空船へと駆け、右近衛旗艦、グランツエンダージーク〈輝ける勝利号〉、左近衛旗艦グリープシユラックフェルト〈愛おしき戦場号〉が出撃する。

飛竜戦艦からそれぞれの飛空船が分離し、前線へ向かってマギウスジェットスラスターの炎も赤々と突き進む。

それを頼もしく、しかし状況が状況なので一抹の不安を抑えきれずに見送るグスタフ。

それに一杯一杯で、気付けなかった。

空中戦が繰り広げられている只中に、なぜ「ウォーリアスタイル」の幻晶騎士で飛び込んでいるのか、と。

そんなことをするほどの変態と共にいると、王女がどんな目に遭うのか。

有能なれど変態ならざるグスタフに、それを予想しろと言うのは無理な話というものだった。



戦闘の質が変わった。

多数が入り乱れての空中戦から、徐々に正面から近づいていく竜の王と飛竜戦艦。

激突の時間が間近に迫り、竜闘騎にも混成獣にも巻き込まれないようにという引き気味の気配がある。

『そうなつてくると、足場が少なくなるんですよねえ。いよいよ竜闘騎も使うしかないでしょうか』

『頼む……頼むから部下だけは助けてくれ……』

結果、トイボックスマーク2の足場になりうる混成獣も近場にいなくなり始めている。

これまで、ウォーリアスタイルながら混成獣を足場に使い、力尽きそうになるとキツチリトドメを刺してからまた別の混成獣の上に飛び乗り、というちよつとヒドいことをしながらここまでやってきたエルくん。さすがにそろそろドン引きされて、足場になりそうな混成獣もいなくなりつつあった。

ちなみに今、俺はガルダウイングに乗ってトイボックスマーク2の背中にしがみついています。

クシエペルカ動乱終盤でイカルガと合体した時のアレだ。エルくん、当然のようにトイボックスマーク2もガルダウイングとの合体運用を想定して作っているから困る。

ガルダレオンモードの状態で戦場から少し離れ、グランレオンをいい感じに隠してガルダウイングで合流。合体して空へ飛びあがって今に至る。

そうでもしないとやってられない、という面もある。

トイボックスマーク2も十分に機動力はあるが、エーテルリアクター機だけの省エネ機。

そこそこ飛行能力が要求されるような状況ではさすがにガルダウイングのエーテルリアクターとマジウスジェットスラストもあつた方がいいだろう、というのはエルくん自身が合体の理由として叫んだ通り。

エルくんは基本的に欲望任せで生きているが、その欲望を通すための理屈付けがこの

上なく上手いから困る。

ともあれそんな状態でメインの操縦はエルくん任せで、こっちはこっちで周辺の警戒とサブウエポンでの牽制などを対応しているわけだ。

「エルくん。混成獣が7時方向から接近中。狙いづらからちよつと左向いてくれる？」

『了解しました！』

「ありがとー」

で、操作を受け持っているトイボックスマーク2の両手を突っ込んでくる混成獣に向け、執月之手を射出。3つの頭の左右両側を掴んで、爆炎魔法を発動。

目玉が茹で卵を通り越して炭になるような熱量をもつて一瞬で焦がし、そんなことがすぐ横で起きたことを理解してないらしき中央のライオン頭には、ガルダウイングが備えた杖から法撃をズドン。

運悪く咆哮していた口の中に火炎が飛び込み、多分ものすげえ熱さで喉を焼かれながら落ちて行っった。

そして巻き上げた執月之手が再びトイボックスマーク2の元へ戻る頃になると、もはや敵も味方もドン引きしているのか、割と遠巻きにされているだけで足場になりそうな

混成獣も竜闘騎もいなくなっていた。

まったくもー、エルくんがまたアレなことするからー。

『殿下あー！ 右近衛隊長イグナーツ、お迎えに上がりましょうおおおおお!?』

『ちようどいいところに大型のが来てくれましたね！ 使いましょう先輩！ 執月之手の制御もらいます!』

「お手柔らかにしてあげようよエルくん。執月之手まで使って乗り込むって、相手からしたらめっちゃ怖いよ?」

そんなこんなしてるうちにやってきた、パーヴェルツイークの隊長機らしき大型の竜闘騎。

それに対し、エルくんはちようどいいとばかりに情け容赦なく取りついた。

執月之手まで使って逃がさないとばかりに迫ってくるの、模擬戦で何度かやられたことがある。逃げられないしこえーんだアレ。

『イグナーツ！ 私だイグナーツ！ 聞こえるか!?!』

『そつ、その声はフリーデグント殿下！ ご無事でするか!?!』

『ああ、私は無事……うん、まあ、無事だな。今は。今だけは』

『殿下ー!?!』

さすがと言うべきだろうか、フリーデグント王女殿下。

エルくんに関わってまともで済むと思っちゃいけない、ということを経験しておられる。

まあ、ここに至るまで既に重力に逆らう直上方向への気持ち悪いくらいの加速とか、そこからの自由落下で混成獣に乗る衝撃とか、他の混成獣に乗り移るときの跳躍やらなにやら味わっているのもそうもなるだろう。

『と、とにかく飛竜戦艦リンドヴルムへ向かう！ 行けるか、イグナーツ』

『はっ、お任せください！』

『よろしくお願いしますねー』

『なんだ貴様は!? 王女殿下の乗っている幻晶騎士……幻晶騎士？ の騎操士か!?』

『申し遅れました。フレメヴィーラ王国銀鳳騎士団長、エルネスティ・エチエバルリアと申します。今はクシエペルカ王国の女王陛下よりの命を受けたのもあり、浮遊大陸へ新婚旅行兼おつかいに来ています。そして背中中の鳥型幻晶騎士に乗っているのはアグリ・ボトル先輩です』

「嘘ではないけどさあ、エルくん……」

度肝を抜かれたらしき王女殿下たちの沈黙が、重い。

ともあれ、王女殿下を飛竜戦艦へ連れ帰ることができれば大分楽になる。

パーヴェルツィーク王国も強硬な戦闘態勢を解除できるし、王女殿下はこちら側陣営ともハルピユイアとも交渉をすると約束してくれている。

この調子なら一旦引いて態勢を立て直し、もし竜の王との対決が不可避のものだとしても人類とハルピユイアの連合を組んで挑むことすら可能になるかもしれない。

はずだったのだが。

「……エルくん、アレ見て」

『ええ、見えています。——確定、と考えて動くべきでしょうね』

状況は既に、飛竜戦艦と竜の王が直接戦いを繰り広げるまでになっていた。

竜の王が放つ炎のブレスと、それを防ぐ飛竜戦艦の防御雷撃。

直接の体当たりは周囲に衝撃波をぶちまける威力ながら互角で双方一步も引かず、全身をひねった飛竜戦艦の脚部が竜の王の顔面を殴りつけた分だけ飛竜戦艦の方が優勢か。

そう思っていたのは、竜の王が次に吐き出したものを見るまでの間。

さきほど炎を吐いた巨大な口から魔法によって引き起こされた風に乗って伸びたのは白い煙。

目くらましの煙幕か、と思った者もパーヴェルツィークには少なからずいただろう。

だが飛竜戦艦の艦長は全速の退避を選択し、その対応が正しかったと直後に証明される。

白煙の向かう先、避けた飛竜戦艦の向こうにいた飛空船が白煙に直撃し、グズグズとなすすべなく溶け落ちて消滅することで。

事ここに至って、否定の余地はない。

俺とエルくんは、アレを知っている。

かつてイカルガを墮とし、巨人族を壊滅の危機に陥れた、大森海の向こうの悪夢。〈魔王〉の系譜に連なるものであろうことは、確実だった。

飛竜戦艦の指揮官はさすがに優秀らしい。

竜の王が放った腐食のプレスを見て、即座に接近戦を選択。味方の被害を抑えるためだろう。巨大な竜型同士の殴り合いは遠目に見ているだけでも恐ろしい迫力なんだが……。

『王女殿下、あのプレスは危険です。合流は一旦取りやめた方がよろしいかと』

『仕方ないな。しばし後方に下がって……』

『イグナーツさんと言いましたか。今すぐ突入してください』

そう呑気なことも言っていられないのが、厄介なところだ。

『貴様?!』 王女殿下をあゝの戦場の只中に飛びこませると!』

『はい、申し訳ありませんが。あなたたちの騎士団と、そして人類の生存圏を守るため、あの竜は今すぐ倒さねばなりません』

「すみませんが、これは事実です。あのブレスの威力はご覧の通り。……それにあの巨体、セツテルンド大陸まで飛翔できると考えられませんか?」

『……っ!』

なにせ、そもそも大陸からこっちへ渡ってきた可能性が高いわけだしねえ。

言葉に詰まった王女殿下が、考えこむように沈黙を保つ。

確かにこの場合は時を追うごとにどんどん危険地帯と化しているが、さらに状況が悪化しうることに気付いたのだろう。

王女殿下は知らないことだが、文明の利器たる幻晶騎士や飛空船を一息で腐食させるあのブレス、竜の王固有の能力ではなく穢れの獣と呼ばれていた種の魔獣が使うものだった。

竜の王が西方諸国に辿り着いたら。あまつさえ繁殖されたら。

ボキューズ大森海の奥で俺たちが出くわした絶望の可能性が、再び現実のものになり

かけている。

この場にいる全員、俺たちも飛竜戦艦の乗組員もひつくるめて、覚悟が必要だ。

あのやたらしつっこかったあいつを、ここで倒しきるような、覚悟が。

『……行くぞ、イグナーツ。いかな竜の王とて、飛竜戦艦の竜炎撃インフレイム咆哮ならば倒しうる。

我らが隙さえ作れば、十分に勝機はあるだろう』

『……御意。必ずお守りいたします！』

王女殿下の覚悟は決まり、そうなれば必然的に仕える騎士もまた覚悟を決める。

戦いの参加者は、揃った。

『じゃ、進行方向はこちらで指示しますのでその通り進んでください。先輩の方でもマギウスジェットストラスタ使いますので、合わせてくださいねー』

『貴様が！ 仕切るな!!』

なお、エルくんは当然のごとく通常運転だった模様。

イグナーツさんとやら、既にしてツツコミとしてのスタンスが完成されつつある気がしてならない。

そして、人類の文明に壊滅的な打撃を与えうる破滅のプレスを有する竜の王に、竜騎士と鳥を背負った幻晶騎士が、騎操士と、女の子に見えることもある騎操士と、王女を

乗せて挑む。

……要素盛りすぎじゃね？ 吟遊詩人でももうちよつと遠慮するぞ！



一方そのころ、混成獣から的にされることを避けるため戦闘空域から離脱した黄金の鬣号では。

『若旦那あ……。なんでエルくん置いていったんですかあ……。？』

「……落ち着け、アデルトルート。置いていったというかあいつが飛んで行ったというのが正しい。お前ならわかるだろう？」

『ダメです。……だって、エルくんが飛んで行ったことはどうせ先輩も一緒なんですよ!? また二人の共同作業しちゃうじゃないですか！ 私を差し置いて！ 私を差し置いて！』

「いや別にそれは気にせんでも……」

『どうしよう……。先輩が私より先にエルくんの子を産んじゃったら！』

「お前は何を言っているんだ」

『もしくは、私がエルくんの子を産むより先にエルくんが先輩の子を産んじゃったら！』

「おい、誰か止めてやれ」

アデイによるアグリへのヘイトが無駄に高まっていたらしいが、いつものことなのでフレメヴィーラ出身者はあんまり気にすることなく、ただただ黙ってアグリの冥福を祈っていた。

ついでにエムリスの命令には揃いもそろって「処置なし」と首を振ったという。

決まり手は「ラストシユーンディング」と「自爆」

竜の王と飛竜戦艦との戦いは、至近距離での殴り合いの様相を呈していた。

それは主に腐食のブレスを味方に向けさせたくない飛竜戦艦側の願いによるもので、激しい猛攻は主に飛竜戦艦から吐き出されている。

とはいえ、互いに巨大な竜同士。どちらも必殺の一撃を叩き込みづらい状況では勝負がつかない。

——ならば、この手はどうだ？

そんな状況を変えるために、だろう。竜の王から発せられるテレパシーじみた波動が届くとともに、混成獣の動きが変化した。

背に乗っていたハルピユイアが離れ、飛竜戦艦へと突撃する。

一斉に、全方位から。

あかん、あれ特攻だ。

『……マズいですね。大型艦にとって小型で多数の敵の特攻は一番対処し辛い方法です』

「エルくんは小型の単騎で殴り倒したけどね。……あ、マギウスジェットスラストに魔

獣ストライクした」

そうなることが、竜の王の狙いだっただろう。

混成獣はほとんどが飛竜戦艦の近接防御法撃によって撃墜されたが、わずかに生き残った一体が飛竜戦艦の左舷マジウスジェットスラストに飛び込んでいた。

ボンっ、と噴き出る黒煙。間違はなく、多大なダメージを受けている。

ああなつてしまえば、まともに出力を発揮できない。巨体を支える機動力は片肺で事足りるようなものではないだろうし、しかもそれが戦闘真つ只中では致命傷としか言いようがない。

竜の王は、この時を待っていたとばかりに口腔に腐食の霧を生成し。

風の魔法に乗ってまっすぐに飛竜戦艦へと向かつて吹き抜けて。

飛竜戦艦は苦し紛れに格闘用らしき脚部を身代わりとして船体の崩壊を防ぎ。

しかしてもはや満身創痍。

この空の上にて最強なのは自身のみ、と竜の王は確信を抱き。

『今です!!』

『おおおおおおお!!』 行けえ、蒼騎士イ!!』

「ウイング展開。マジウスジェットスラスト、出力最大」

いかに巨体、頑丈とはいえ眼球までも鋼鉄製とはさすがにいかなかったらしい。

幻晶騎士の足が眼球にめり込むのは滅茶苦茶に痛かろう。

腐食の霧も止まり、幻晶騎士の1機や2機は飲み込めそうな大口を開けて悲鳴を轟かせる。

それに合わせて、ガルダウイングをトイボックスマーク2から分離させる。

暴れられたとき、翼を広げたガルダウイングは空気抵抗が大きすぎて邪魔になるし……やるべきこともあるからねえ。

『やったか!』

『いえいええ、これだけの巨体ですからもう一撃、いや二撃くらいは必要ですよ!』

『それはお前の趣味だな!』 そうなんだな!』 欲張らずあと一撃だけにしておけ!!』

そしてエルくんは目玉の一つだけで終わらせるほど甘くはなく。

巻き込まれている王女殿下には申し訳ないけれど、巨大な敵を相手にテンションの上があったエルくんは暴れる竜の王の首へ執月之手を伸ばしてワイヤーを巻き取り。無理矢理に飛びつきさらなる一手。

『ブラストオ……リバーサ!』

全マギウスジェットスラストを推進力ではなく爆風による攻撃へと変えるトイボックスマーク2最大の攻撃力。

幻晶騎士ならバラバラになって吹き飛ぶことすらありえる一撃を叩き込む。めきり、と頭部の皮膚がきしむ音。砕け散るのは鱗か何かか。

いかに巨大とはいえ生命の中枢に近い頭部に大きなダメージを受けて。

トイボックスマーク2は反動で投げ出されるのに逆らわず、空中に飛び出した。

『せんぱーい、助けてくださーい』

『待て、この機体は飛べるのではなかったのか!？』

『ええ、普段なら。ですが今は全力でマギウスジェットスラストを使った直後なので、マナプールの枯渇とスラストの休息が必要なんです』

『……イグナーツ！ もしくは鳥の騎操士！ 救援を求む！ 頼むう！』

エルくん、西方諸国北の大国の王女殿下に泣き言を言わせる。

伝説にまた新たな一ページが刻まれておるわ。

『これなら少しは隙ができたでしょう。イグナーツさん、飛竜戦艦に連絡を』

『貴様……殿下を連れて敵大将に突撃をするとは……！ ええい、気付いてくれ、リンド

ヴルム！』

なお、トイボックスマーク2はなんとかガルダウイングで合体して体勢を立て直し、イグナーツさんの竜頭騎士に拾われてなとなかった。

そして発光信号で飛竜戦艦へと状況の連絡。

それは正しく伝わったのだろう。ズタボロながら機首を翻す飛竜戦艦。口腔内に見える魔法現象の光は最初に遭遇した時にも見た大威力法撃の予兆で間違いない。

決着のための一撃の準備は素早く、竜の王は巨体が災いしてか一度崩した体勢を立て直す暇がなく。

『インシニレイトフレイム 竜炎撃 咆哮モードへ移行！』

『マナライン、全段直結！』

『強化魔法、アイゼン、ロック！』

『あぎと 顎門内、正常加圧中！』

『制御魔法陣、回転開始！』

『——撃てます！』

『みたいなやり取りしてるんでしょねー。僕も今度飛空船作るときはああいうの搭載しましょうか』

『なぜ我が国でも最強クラスの兵器が明日の夕食のメニューを思いついたような言い方されているのだ……』

「すみません、そちらの国でもめっちゃ使ってるマジウスジェットスラスト、この子が作ったんですよ。だからその気になれば作れるかなって」

目の前で空を焼く火炎が竜の王にぶちまけられ、羽が、足が、そして首までもが消し炭になって焼け落ちていく中、いよいよもってイグナーツさんの心が折れかけている。

あと、王女殿下の声が出てこないのはいい加減気絶しているからかもしれない。むしろ良く我慢したほうだと思います。

かくして、竜の王は落ちた。

全身燃えカスになり、残っているものといえば体内にあったエーテリックレビテータらしき浮遊物のみ。

飛竜戦艦はメインとなるマジウスジェットスラストを半分失い、大規模修理必須の有様ながらいまだ空に健在。

勝者は人類の側、ということになるだろう。

とはいえ飛竜戦艦は少なくとも本格的な工廠でしつかり直さない限りまともに飛べないだろうから、移動するにしても他の飛空船による曳航が必要になる。全て終わって万事元通りとは言えない形であり。

『……………どうやらまだ終わっていないようですよ、先輩』

「し、しづとすぎる……そりゃあこんなところまで流れてくるはずだよ」

最後に残った竜の王の塊が、割れた。

しかしそれは終幕ではなく、むしろ始まり。

ヒビを割って、半透明の羽が伸びる。

虫の羽化を思わせるその挙動はまさしくそれそのもので、ずりりと現れたのは六本足に羽を備えた姿ながら、どこか人のようなシルエツトでもある異形。

——ああもう、鬱陶しいなあ「西方人」は。……今度こそ、「魔王」の手で誅を下してやろうかあ！

今度も響いてきたのは例の声ならぬ声。

が、その声にちよつと聞き覚えがある気がするなあ。



『ははは。はあははははははは！ その蒼！ 忘れもしないよその色だけは！ キミか

！ キミなんだねえ、エルネスティくうん!!』

『ええ、久しぶりですね小^{オスロ}王。その声、二度と聞きたくなかったですよ』

『私も同じ気持ちだよ！ どうしてこうも私の前に立ちはだかるんだらうねえ、キミは

!!
』

そして、当然のように始まる殴り合い。

しかも俺の入ったガルダウイングをくつつけ、王女殿下を乗せた上で。

普通に考えてリスクがヤバイ。

あと、小王のテンションもヤバイ。絶対にエルくんぶつ殺すという強い意志を感じる。

相手は竜の王だった時と比べて小さくなったとはいえ、その分軽くなって機動力が上がり、腐食の霧は量こそ減っているものの幻晶騎士くらい楽に消滅させられる規模はある。

というか、実際にそうやって既に竜闘騎を数機落としている。一撃死の危険がデカ過ぎる相手だ。

ちなみに、イグナーツさんは既に戦線離脱しました。

進路上にいやらしく配置される腐食の霧に対して、ガルダウイング側で風の防壁を張って防いだりしたもの、さすがに完全に防ぐことはできずマジウスジェットスラストがオシヤカになって戦線を離脱した。

これ、長引くと俺も同じことになるヤツだ。

……何をしている小王！ もっと本気でかかってこいよ！

別に、イグナーツさんと同じ理屈で戦線離脱しようってわけじゃないんだからねっ！

『おいおい、戦場の様子が変わったから戻ってきてみてれば、エルネステイが苦戦しているぞ。すさまじく珍しい光景だな！』

『エルが戦ってるってことはあれが敵……だよな？　ちよつと戦い足りないから適当な相手にちよつかい出したとか、さすがにないよな？』

しかも、そんなことをやってるうちにどうやら黄金の鬘号が戻ってきたらしい。

小王の操る魔獣っぽいなにかこと魔王の攻撃を避けた先に、ちよつと出てきたので思わず甲板に激突するような勢いで着地してはじめて気が付いた。

若旦那の驚く言葉も無理はない。

なにせ、降ってきたトイボックスマーク2は隻腕と化している。

魔王と真正面から殴り合い、左腕を肩のマギウスジェットスラストまでえぐり取られた。

エルくんの身に降りかかったとはにわかには信じられないほどの損傷を負っている。

『エルくん！　助けに来たよ！……そつちの虫みたいなのも、先輩も！　エルくと私のラブラブ生活を邪魔するやつは、みんな死ねばいい！』

「俺は邪魔してないよアディちゃん!？」

そして、おそらく内部で動力役として艦の制御を担っていたらしきアディちゃんが、黄金の蠶号に搭載されていたミッシレジャベリンをぶっ放す。

同時に飛び出た言葉からすると俺も標的に入ってた感があるけど、さすがに狙いは魔王のみだった。

……ガルダウィングがまだトイボックスと合体してたからかもしれないけど。分離してたら、ついうっかりで俺の方も狙われてたかもしれないね、うん。

『邪魔だねえ、それは！　そしてこの船も！　腐れ落ちろオ！』

しかし、飛空船に対しては無類の強さを誇るミッシレジャベリンであろうとも、腐食の雲には弱い。

面、というか空間に対して影響を及ぼす霧は、殺到する無数のミッシレジャベリンでさえも着弾の前に腐食させる。

結果、一本たりとて魔王に辿り着くことはなく空に散り、さらには思い切りのいいエムリス殿下の指示だろう黄金の蠶号によるひき逃げアタックを食らっても、魔王はなおしぶとく船にへばりつき、直接船体を腐食させようとしている。

……すげー怨念。あれ、絶対エルくんへの恨みだけで動いてる。

まあ、大森海の奥でポコポコにされ、あまつさえこの浮遊大陸でも少くない部分をエルくんの影響によって竜の王を失う羽目になっているんだからそうもなろうけども。

『いけませんね、これは。殿下、申し訳ありませんがちよつと無茶をさせていただきませす。——お覚悟は、よろしいですか?』

『……………よくはないが、卿がそこまで言うからには必要なことなのだと思じる。その代わり止めるよ!? 絶対にあの魔王を止めるのだぞ!?!』

『お任せください』

そして、エルくんが駆ける。

空を飛ぶ黄金の蠶号の甲板上を、魔王に向かって真つすぐに。

小王としては、実のところ既に勝利していると言つていい状況だ。

あのまま船の腐食を続ければ、トイボックスは空を飛んで無事だとしても、飛空船が落ちて大損害が出る。それだけで、勝利そのものは叶う。

だからこそ、小王はその選択肢を選べない。

大森伐遠征軍の失敗によってボキューズ大森海の最果てに取り残されながらも生き残り、同じ境遇の人間たちをまとめ上げて魔獣ひしめく森の奥で国を作り、巨人族に取り入りつつ雪辱の機会を待った。

その野心がエルくんとの戦いで敗れてなお生き残り、はるか遠く浮遊大陸に辿り着き、わずかな時間で竜の王という形を作り上げ、混成獣を従え、ハルピユイアを組み込

んだ大勢力を作り上げる。

— それほどのことを成し遂げるだけのド根性を備えた小王が、目の前に向かってくる怨敵を前にして直接雌雄を決することなくクレバーに勝利だけを掴む、などという選択ができるか。

できない。できないからこそその小王であり、この再起。

エルくんの首をその手で引きちぎらなければ、決して収まらない激情こそが小王を今この場に辿り着かせた力の源に違いない。

『エルネスティ……エエルネスティイイイ!!』

人……ではないっぽいけど、人っぽい生き物があれほどの怨嗟をその身に宿すことができるのか。

そう驚くほどの歪んだ声で、魔王もまた向かってくる。

距離など既がない。腐食の霧も使わない。

目の前の相手だけは、直接臓腑を抉らなければ気が済まない。そんな意思が魔法すらなくとも伝わるようだ。

最後の一步。互いの間合い。

振りかぶった鉤爪は強く強く握られた拳となり、魔法によって炎をこぼしながら、まっすぐにトイボックスマーク2の頭に向かう。

ぐしゃり。

その音の源は、トイボックス。

頭部は眼球水晶共々砕け散り、首無しの片腕となり果てた。

こうなると、外の様子もわからない。いくらエルくんであっても、そうなってしまうば戦いようがない。

だから、エルくんの勝利はそうなる前に決していたということになる。

『……捕まえた』

『なにっ!?!』

頭を殴り飛ばされたのは、そこが機体の動きそのものには影響が出ない部位だから。エルくんはそれを許容した。

最後の瞬間わずかに身をかがめ、頭部を犠牲に懐に踏み込み、その体当たりを決めるため。

組みついてしまえば、見えるも見えないもない。

『先輩！ 最大出力お願います！ そのあとは離れて！』

「はいよー」

エルくんがそう来ることはわかっていた。

魔王を抱えたまま体を反らせ、スープレックス気味に投げ飛ばす、その瞬間にマジウスジェットスラストの出力を最大に。

その勢いで魔王諸共甲板から飛び出して、すぐさま俺はトイボックスマーク2との接続を解除。

急に軽くなった機体は荒れ狂う風にふわりと浮いて、魔王に組み付いたまま落ちていくトイボックスを、ただただ眼下に見送った。



フリーデグント・アライダ・パーヴェルツィークはセツテルンド大陸西方の北域に覇を唱える大国、パーヴェルツィーク王国の第一王女である。

美貌、聡明、覇気、決断力。王族に求められる全てを備えた彼女はいま、それら王者の証が何ら役に立たない場、戦場の只中にいた。

それも、相手は飛竜戦艦すら落としかけた竜の王の中枢たる、魔王。

そして彼女の居場所は空の上、幻晶騎士の中。本来ならある程度の飛行は可能なこの幻晶騎士だが、いまや戦いの中でその機能は失われたと言っている。というか、魔王にしがみついて落下している。

なにがどうしてこうなった、という思いがなくなかない。

捕虜返還のための交渉に來たはずが、混成獣に乗ったハルピユアの襲撃で戦場に取り残され、クシエペルカ王国の関係者らしき小柄で、可憐とすら言える騎操士に一応助けられ、飛竜戦艦へと戻るため彼の幻晶騎士に同乗することになり、その後なぜか竜の王との殴り合いに付き合う羽目になった。

冷静に考えて、何が起きているのかわからない。国許に帰って国王に報告するとき、信じてもらえる自信がまるでなかった。

空飛ぶ幻晶騎士を操り、飛竜戦艦に匹敵する竜の王を相手にすら嬉々として挑む、見た目だけなら可憐だが中身はちよつとどころではなくヤバい騎操士、エルネスティ。

そしてそんなエルネスティに付き従う、どこか竜闘騎にも似た鳥型の幻晶騎士に乗っている「先輩」と呼ばれているアグリ・ボトル。

この二人が特に尋常ではない。アグリ・ボトルの方はエルネスティに付き合わされているだけ、という雰囲気を漂わせているがそもそも付いてこれるだけでも並外れている。あと、よくよく思い返せばエルネスティがかつて飛竜戦艦を落としたという話だったが、そのとき共にいたようなことも言っていた。

あからさまに人並外れたエルネスティと、一般人面しているがしれつとエルネスティに付いていくアグリ。

変態に挟まれている、という状況に気付いてしまったフリーデグントはますます恐れを抱く。

王女として広く学んできたつもりではいたが、世界にはまだまだ自分の知らない領域があるのだと、魂で理解した。

だがその理解を生かすことができるかは怪しい。

いま、フリーデグントは、そして彼女の乗る幻晶騎士は空から落ちている。

魔王にしがみつき、諸共に浮遊大陸の地面へ向かつて。

このまま落ちれば、いかな魔王であれ幻晶騎士であれ、搭乗者ごとバラバラに砕け散るだろう。

王族として生きるということは、王族として死ぬということ。

飛竜戦艦と竜騎士たちを従えているとはいえ、未知の浮遊大陸へ来ると決めたときから、あるいは命を落とすこともあるかもしれないと思っていた。さすがに、魔王と初対面の騎操士と運命を共にする、とまでは思っていなかったが。

ここに至るまでになんかもう色々と常識や諸々の概念を根底から覆され続けてきたので一周回って冷静になったフリーデグントは、どこか呑気にそんなことを考えていた。

『ははははは！　これで私を仕留めたつもりかい、エルネスティ！　キミの機体が手負

いでなければそうもなつたんだろうがねえ!」

しかし、相手はまだまだ力を残していた。

人型のトイボックスマーク2に対し、魔王は虫型魔獣に由来するらしく六肢を有する。この状況でもまだできることがあると、自分だけは生き残ることができるという自負が言葉からもうかがえる。

一方、トイボックスマーク2はもはやまともに戦える状態ではない。

マジウスジェットスラストも一部が失われ、あまつさえこれまでの戦いで左腕と頭部を失った。

「左腕と頭部を失った幻晶騎士」となり。

「ええ、そうですね。……つまり」

「……ん?」

ところで。

幻晶騎士は人と比べて巨大とはいえ、その巨体と力を維持・発揮するためには内蔵するべきものが多々あり、操縦席は狭い。

エルネステイがいかに小柄で、フリーデグントも少女であるとはいえ、操縦席の中では密着を余儀なくされる。

それでもこれまで大過なく操縦を続けてきたエルネスティの技量には驚愕を禁じ得ないところではあるのだが、いずれにせよ必然的にエルネスティとフリーデグントの体は接している状態にあり。

フリーデグントはその時、確かに感じた。

触れているエルネスティの体に走る、震え。じわりと燃えるような熱。

トチ狂っているとしか思えないほどにとんでもないことをやらかすエルネスティがこの期に及んで恐怖に駆られたなどは考え難く、また聞こえてくる声音と、フリーデグントが持つ王族としての人を見る目がその正体を伝えてくる。

エルネスティの背筋を走るぞくぞくとしたさざ波。

声に交じるわずかな熱。

魔性さえ感じられる、色気すら乗せたその唇から吐き出されているのは。

「——つまり、ラストシューティング」

『装備的に考えると、トイボックスはラストシューティング食らう側だけどね』

間違いなく「悦び」であった、と。

あと、ちよつと離れたところにいる鳥の騎操士は色々諦めたようになんか言ってい

た。

その瞬間、フリーデグントは心の底まで思い知った。

今この空で一番恐ろしいのは飛竜戦艦でも竜の王でもなく、フリーデグントの両手ですっぽりと包み込めそうな体躯のこの騎操士なのだということを。

『……ッ！』

「無駄です！ トイボックスマーク2の自重を支えられる特殊鋼のワイヤーです。ちよつとやそつとじゃ切れませんよお！」

なんか無駄にテンションが上がっている。

それに比例してフリーデグントはドン引きしているのだが、操縦席が狭すぎて距離を取れない。怖い。

いつの間にやら射出された執月の手が、魔王とトイボックスマーク2に絡みついて離さない。どちらもこのまま落ちる未来は確定している。

『だが……っ！ その機体では私は倒せないよ！ もう武器もないだろお!』

「ところで、トイボックスマーク2も当座の間に合わせで作った機体とはいえ、つぎ込んだ技術自体は最新のもののなので他国の手に渡らないように、と言われてしまいました」

うわあ会話する気が全くなってなんか言ってる、とフリーデグントはさらに恐れおののいた。

唐突に変なことを言い出したということは、絶対にまたロクでもないことをする。それはもはや予想ではなく確定された事実だ。

「まあそれはつまり、僕の手を離れたときに跡形もなくなっていればいいのです。では王女殿下、失礼します」

「えっ」

ほら見ろ、やつぱりだ。

フリーデグントは頭の片隅の冷静な部分でそう思った。

なお、残りの大部分はいきなり胴体抱えられてコックピットから飛び出て空に投げ出された恐怖による絶叫に使われていた模様。

「さあ、僕のトイボックスマーク2。最期は華々しく散って魅せましょう。命令コード死ジャックインザボックスぬほど痛いぞ』発動！」

フリーデグントを抱えているのとは逆の手にきらりと光るのは銀線神経。

それを使って伝えるのは、トイボックスマーク2に下す最後の命令。

その内容自体は、「爆炎系の魔法を使え」というごく普通のもの。

ただし、セーフティの類は一切なく、残存manaを全て使い尽くすよう設定されたものであり。

『ばっ、バカなああああああああああ!?!』

逃げようのない状況で炸裂した幻晶騎士の自爆に巻き込まれ、小王の叫びは炎の中にかき消えた。

「あはははははははははは!! 自爆! 自爆ですよこれが! やっぱりロボと言えば自爆ですよねぇ!!」

「(っわい)」

そしてフリーデグントの声はかすれて小さく、風の中にかき消えた。



近づくのは色々と危険に過ぎると分かってはいたが、放置の方がさらに危ないと急降下からの機首上げでエルくんたちと自爆したトイボックスの間に割り込む俺。

翼に受ける爆風によって機体が浮き上がってエルくんたちに激突しかねないところではあったけど、強烈な風と熱に晒されるよりはマシだろう。エルくんなら魔法でなんとかしてくれるだろうし。

「おっと。助かりました、先輩。……見ましたか! 見てくれましたか先輩! 自爆で

すよ自爆！ 綺麗に決まりましたよ！」

「うんわかった。わかったからハッチをバシバシ叩かないで」

やっぱり大丈夫でした。さっそく元気にウツキウキだよ。

『せえんばあい……』

「ヒエツ。な、何この声……アデイちゃん!? どこから!？」

「ミッシレジャベリンからですよ先輩。銀線神経で音声を伝達しているようです。ア

デイは器用ですねえ」

『えへへ、すごいでしょ! ……で、先輩? 私がエルくんを助けようとしたのになん

で先に助けちゃうんですかあ……?』

「タイミング! タイミングの問題だから! 俺の方が近かっただけだし! それよ

り、ガルダウイングだとエルくんたち收容するの大変だからそっちで回収してあげて欲

しいなあ!」

『………よしとします』

そして、ミッシレジャベリン飛ばして音声届けてくるアデイちゃん。槍の軌道がちよ
いちよいガルダウイングを刺しそうになるのが超怖いです。

ともあれ、これで今回の戦いの決着はついた。

パーヴェルツィークの戦力は飛竜戦艦を筆頭にかんりの損害を受け、ハルピユイアも一枚岩ではなく戦いを辞さない覚悟を持った一派もいるということが人類側に知れ渡った。

フリーデグント王女殿下はなんやかんやの末に黄金の蠶号に合流することになるし、エルくんのトイボックスマーク2は喪失。こっち側の受けた被害と抱え込んだ面倒もちよつとシヤレにならない。

そして、小王。

ただでさえ大森海での激戦を生き延びて浮遊大陸まで落ちのびるほどのド根性と悪運を持ったヤツがこれで大人しくくたばるかといえば、微妙なところ。

戦いは終わったが、浮遊大陸をめぐるアレコレはまだ終わっていない。

おそらくここからが次の、また新しいステージになっていくことだろう。

……「幻晶騎士を失ったエルくん」という、世界で一番何をやらかわからない爆弾を抱えたまま。

ボキューズ大森海で、カササギを作ったことが思い出される。

俺しか乗らなくて余ってるグランレオンとかカルデイヘッドで我慢してくれないじゃろうか。

「これ、一番先が見えない陣営って間違いないうちだよな……」

アデイちゃんに回収されていったエルくんを追い、黄金の鬘号との合流に向かいながらボヤクしかない俺でした。

また新しい幻晶騎士が欲しくなるかもしれないエルくん。

多分まだ悪あがきをするだろう小王。

それぞれの思惑を抱えるパーヴェルツイーク、イレブンフラッグス、ハルピユイアその他。

そして多分、今頃浮遊大陸へ向かってきているだろう銀鳳騎士団本隊。

浮遊大陸は、まだまだ荒れそうだ。



「しっ……しっ……しっ……」

「エドガー、あれはなんだ」

「『どうせ何かしらやらかしているだろうアグリにぶちかますための新技、腕タツクル』だそうだ。近づくなよ、練習台にされるぞ」

「アグリに対するある種の信頼が強いな。……お、迂闊に近づいた整備班が犠牲になっ

た。首の辺りを腕で殴り飛ばされて空中で一回転しているではないか。恐ろしいにもほどがあるぞ」

「その後流れるように移行する締め技極め技目当てに敢えて近づいている者もいるらしい」

「嫉妬してやらなくていいのか、エドガー。それとも、既に二人の関係にそんな心配は無用かな？」

「……黙秘しよう」

「ウイ——
!!!」

なお、ヘルヴィの道場と化している飛空船内の一角には柔らかいマットが敷き詰められて安全には配慮されているらしい。

加えてヘルヴィ、アグリ相手に実践する際は床の材質を一切考慮しないつもりである。

番外編 30話目なら、そりやあスパロボ30に参戦も
しますよね！

執筆者、アグリ・ボトル。

銀鳳騎士団としてはよくあること、と言ってしまえばその通り。

しかしながら、今回遭遇した出来事は常と比較しても常軌を逸しているため、後に正式な報告とするときに備えて、この身で経験した諸々が衝撃のあまり記憶から抹消されても支障がないよう記録に残すこととする。

諦めろ、俺。これは現実だ。



始まりは、異世界への転移だった。

セフィーロ——セツテルンド大陸西方とかその辺にある国とかかなんとか、らしい——の付近を偵察してセフィーロ伝説の魔法騎士マジックナイトに出会ったときだったかもしれないが、その後なんやかんやの末に異世界への門をくぐってしまったことがそもそもの

こうなつてくると寄らば大樹ということで、信頼できる誰かなり組織なりの元に身を寄せるのが筋というもので。

「ということで、僕たちもこのドライクロイツに参加させてください！」

「……いきなりですみませんけど、本当にお願ひします。一緒に戦えないならいつそ敵として戦おうとか考えかねないので」

「ええ……それは一体どういふ……？」

「どういう理屈か、わかる人間はあんまりいませんよ……。ほら見てください、さつそく『その手があったか』と言いたげに目を輝かせてます」

「……ドライクロイツに採用で」

「艦長!？」

「……………仲間であるうちは敵対しないようですし」

巨大戦艦、ドライストレーガーの艦長であるミツバ・グレイヴァレー特務中佐さんには最初から最後までとんでもなくお世話をかけたなあと、心から思つてます。



そこからは、地球圏すら飛び出して木星辺りまでを股にかける壮大な冒険と戦いの

日々だった。

ドライクロイツの指揮官であるミツバ艦長が定めた行動指針は「地球圏の統一」。平和を目的とし、それを乱すものたちには敢然と立ち向かう。

そのためのドライストレীগー。そのためのドライクロイツ。そのためのスーパーロボット軍団。

集った面々の意思を尊重するというスタンスではあったが、志を同じくするメンバーたちは数々の戦いに挑んでいった。

複雑怪奇な歴史をたどり、数々の苦難に襲われてきたこの世界の地球に敵は多い。人類の中から生まれたネオジオンやザンスカル帝国。

その顔色で人類は無理でしょ感のあるDr. ヘルが率いる機械獣軍団。宇宙人、あるいは別次元から来ている感のあるウルガルやポセイダル軍、覇界王。

俺たちと同じく異世界から侵略に来たんだか迷い込んできたんだかのジャロウデク王国やセフィーロの陣営。

ツツジ台というよくわからない町に出現する怪獣たち。

数多のロボットやロボット以外と対峙することは不可避であり。

それすなわち。

「おおっといいですねえその機体！ 是非とも構造を知りたいので……撃破してから解

体させていただきますね!!!!

エルくんが大歓喜する、ということに他ならない。

ドライクロイツには強力な、そして数多くの戦力が集っている。

ちなみにここでいう「数多くの」というのは機体の「数」ではなく「種類」が多いことを意味する。

それも、設計が違うどころの話ではなくサイズや重量、構造や動力源すら全く異なるというのだからとんでもない。

……そして、そういうロボに遭遇するたびに歓喜の叫びを上げる生態を持つのがエルくんという子であるので、その辺まとめて記録しておこうと思う。



こちらの世界、有名なロボットというものは数多いがその中でも特に知名度が高そうな機体を挙げるとすれば、連邦政府という巨大組織に所属していたということも手伝つて「ガンダム」が筆頭だろう。

かつて、最初のガンダムRX78-2がパイロットであるアムロ・レイ大尉とともに

多大な戦果を挙げ、戦争の行方すら左右するような存在だったということがいろんな人たちの口ぶりからひしひしと感じられる。

それを受けて、連邦政府はガンダムに対してある種の信仰のようなものが生まれ、後の時代にもガンダムの後継機や、特に開発元やら技術的な関係はあんまりないけどガンダムを名乗る機体、さらには「なんとなく見た目がガンダムっぽい」ロボットもたくさん作られたのだから大変だ。

まあつまり、そういう伝説的な奴はエルくんが大好きな奴ってことなわけ。

「あ、あれがファーストガンダム……！ 海辺に佇むあの姿と同じサイズ感……！ しかも動いてますよ先輩！」

「落ち着いてエルくん揺らさないでー」

「では、この感動を僕たちの合体技で示しましょう！ 先輩、銃装剣を支えてください！」

僕たち二人の輝きを放つんです！」

「アレ、盾の上に銃身乗せてるように見えるだけだよ」

「……君が、あのイカルガを作ったのだったか。私もモビルスーツの開発には少し覚えがあつてね」

「ぜひ詳しいお話を聞きたいです！ さき、そこに座つてご飯でも食べながら！」

「どうぞ、クワトロ大尉。俺が作ったものですので、口に合うといいんですけど」
「ほう、中々と見える。器用なのだな、君も」

「銀鳳騎士団って、いろいろできなきややっていけないところがありました。なのでまあ、大尉もお気になさらず。俺たちからすれば大尉の過去も、言い方は悪いですが他人事なので」

「……感謝する」

「ところでウツソくん、先日木星じいさんという人のところからもらってきたという光の翼未搭載の青い試作型V2ガンダム……一度でいいので使わせてくれませんか!？」

「乗り換えの範囲外でしょ、エルくん」

「それでもありますが! でもヴィクトリータイプならイける気がするんです!!」

「た、確かに、僕もエルさんとは他人のような気がしませんが……」

「リタは、生まれ変わったら鳥になりたいと言っていた。……生まれ変わりなんて、あるかどうかともわからないのにな」

「……そうですね!」

「……わからないですよね!」

「エルにアグリ、なんで顔を背けているの?」

「すみません、アストナージさん。ちよつとサイコフレームの端材をもらえないでしょうか。それを使えば、イカルガの執月之手を無線式に……!」

「いや、サイコミュとかニュータイプとかいろいろ必要なんだけど……君ならできそう
な気がするな」

ロボットの歴史、戦いの歴史は長く、多岐に渡る。

結果、ガンダムが世に出た10年前よりもさらに昔から活躍していたロボも存在していた。

他にも別系統の開発されたナイトメアフレームとか、さらには別の世界というか別の宇宙というかから来た人たちもいる。俺たちみたいな異世界組も肩身が狭くなくていいね。

「おお、あれが噂に名高い歴戦の勇士、エルドラVの改造版、エルドラソウル! ……合体機構が失われてしまったのはとても残念ですが、正しく勇者の威容ですね。そこはかとなくガオガイガーと似ている気が……」

「エルくん、それ以上いけない」

「サウダーデ・オブ・サンデー……！ まさか、ヨロイでありながら自由フリーダムに空を飛ぶとは驚きですね！」

「ギリギリを攻めるのやめて！」

「ダバさんのエルガイムは追々量産することを視野に入れてるんですね」

「というより、最初からそれを想定して設計されているらしい。ペンタゴナワールドに戻ってからはそういった形で戦力を整えることも必要になるだろうな……」

「なるほど」

「イカルガは量産できる要素一つもないことは理解してるよねエルくん？」

「ええまあ。傑作量産機という言葉も魅力的ですが、ワンオフ機というのもそれに負けず劣らずでしー！」

「ほほう、月光影は開発がギリギリだったようですね。あと少しタイミングがズレていれば足がない状態で実戦投入されていた可能性もある、と」

「ああ、そうなる運用に制限が出ていた可能性もある。開発陣の健闘にはとても感謝している」

「足がないのもそれはそれで素敵だと思いますけど。浮遊できるなら足など飾りです!

えらい人にはそれがわからないんです!・ねえクワトロ大尉!」

「……………きみは、時が見えているのではないかと思うことがあるな」

そして、純然たるこの世界産のロボットなんだけど、なんか動力とかよくわからないものを使っている例もあるらしい。

「出ましたね……………真ゲッタードラゴン!」

「この場でドワオって終わっちゃいそうだからやめようねエルくん」

「大丈夫ですよ、先輩。ゲッターとマジンガーは無から生えてくるもの。もしこれでドワオったとしても、どこからともなくゲッター天ワシとかブラック真ゲッターとか出てきますから」

「それはそれでヒドいことになるからやめてというに」

「とりあえず、イチナナ式をゲッターの近くに置いておいたら進化しませんかね?」

「ただでさえ格納庫で近くに置かれがちなんだから怖いこと言わないで!」

「コンバトラーVの合体システムは完成しています。なので強化案としては追加の外装型がいいと思うんです。要するに、MSのフルアーマー形式に近いですね。アーマード

コンバインしてコンバトラーV6というのを小介さんと考案しました！　いかがでしょうか！」

「変なところから引つ張ってきたねエルくん？　他にも色々混じってきそうだからやめなさい」

「開発のリソースと時間に余裕があれば9機合体してもらいたかったんですが……」
「それは開発段階にポツになったって聞いたでしょ」

「困ります！　困ります！　ギヤレオンさん！　困ります！　あーっ！　困ります！

……うちのグランレオンはお仲間じゃないですから！　頭の中空つぼのMSみたいなヤツですから！」

「……ギヤレオンがすまない。ドライクロイツの中でも完全なライオン型のロボットは珍しいので仲間と思っっているらしい」

「くう、こうなったら……！　助けてください甲児さん！」
「え、なんで俺が!?!」

「いえ、噂によるとその昔、『マジンガーZの』彼女とデートしたらしいですし？」
「いやミネルバXは……うんまあ似たような状況と言えなくもないけど」

そして、意思疎通できる勢。

超AI搭載型ならまだしも、そういう理由が特になく意思を持つヒーローとか魔神とかもいる。魔法で動く幻晶騎士なんてかわいいもんだと思えてくるね。

「グリッドマンの強化案を考えてきました! なんかこう、プログラムが実体化するっぽい感じなので、恐竜型のプラズマ火炎砲と大型支援戦闘機と、その2つが合体した超大型戦闘機兼ドラゴン(?) 型支援メカです!」

「えっ、プログラムって……まさか、エルくんがプログラムを組むの? こっちの世界の……?」

「はい! がんばります!」

「すみません。エルくん、幻晶騎士のシステムも構築してるんですよ」

「ああああもおおお! なによあのグリッドマンとかその他たくさん! 色々いるけど、特にMJPとかいうの! 青っぽい声してるのに赤いのか、赤っぽい声してるのに青いのか、銀色っぽい声してるのに金色のとかわかりづらい! ムカつく!」

「まあまあ、落ち着いてアカネくん」

「気持ちにはわからなくてもありませんが、よくある事ですから気にしてはいけませんよ。青だったりケニアだったり宇宙刑事だったりというのは古来よくあることですから」

「誰この子!？」

「セフィーロの魔神もいいものですね。甲冑のような生物のような、そういう姿もとてもよいです。……融合ではなく分離変形合体をしてくれたらなおよかったのですが」

「ご、ごめんね……?」

「謝らなくていいわよ、光」

「エルさんはロボットに対する情熱がすさまじいですから……」

「もしもしブレイブポリスメン? おたくのボスが悪い艦長に女装沼に沈められそうになっってますよ」

「待つてくださいい! これには作戦上避けて通れない理由が!」

「そうですよ先輩。僕とルルーシユさんも一緒に行くから大丈夫です」

「大丈夫じゃねえよなんでみんな揃って女装するんだよ。……ミツバ艦長、一つだけ質問するので正直に答えてください。——趣味ですか?」

「ちっ、違うんです!!」

……え、この世界の事情にそんなに詳しくて大丈夫かって?」

平気平気。俺もエルくんも、この世界のことに興味があつて本やらネットやらで勉強してますって言っておけば大体通るから。

「ザンスカールの今後の戦略、ですか。そういえば先日、この世界のことを勉強する一環でネットを巡っていたら『エンジェル・ハイロウ』なる兵器の話がありましたね」

「……たびたびザンスカールの会話に出てくる『天使の輪』と符合しますね。どのようなものですか?」

「俺もエルくんと一緒に見てたんですけど、サイキッカーの力を増幅して女王マリアの意思を全人類に及ぼせる地球規模のオギヤらせ装置らしいです」

「お、オギヤ……?」

「まあ、そのページも既に消えてしまったのですが。黒歴史として抹消されたのか、あるいは事実^{……}に近すぎたのか……」

「話の内容は確かに少々荒唐無稽ですが、マリア主義との親和性が高い上にバイク戦艦の存在を考えるとあながち否定できませんね……」

「惜しいサイトをなくしました……。GPシリーズや HALF Z、クロスボーンガンダムなどなど歴史の闇に埋もれたガンダムの情報を網羅している素晴らしいサイトだったのですが」

「……………信憑性が一気に下がりましたね」



そういう、数えきれないくらい諸々のアレコレの果て、いくつかの勢力との戦いに決着がつき、いままた一つの戦いが終わろうとしている。

相手は、ザンスカール帝国。地球上空に現れたエンジェル・ハイロウを撃破する、ウツソクんとヨナ中尉を中心とした決戦だ。

……ドライクロイツの作戦会議は難航したなあ。

「グリッドマンにエンジェル・ハイロウの中心部まで行ってもらって、ローリングツインバスターラ」

「グリッドビーム、ね」

「……失礼、ローリングツインバスターグリッドビームで中枢に大ダメージを与えるといいと思うんです！ 僕がエスコートしますから！」

そんなことを主張する子が約1名おりました。

まあ結局そういう策は却下され、順当に機動力の高いV2ガンダムとフェネクスに突撃してもらったことになったんだけど。

今は、その出撃待機中。もうすぐ戦場に辿り着き、戦闘が始まる。

なので俺は食堂で軽食を用意していた。

補給に戻ってきたパイロットが軽くつまめるようにサンドイッチとかおにぎりとか、おかずとしてウインナーを焼いたり卵焼きを作ったり。

ドライクロイツ、旗艦が全長2kmのドライストレーガーだし色んなロボットとそのパイロットやサポーターの人たちが続々増えているし大部分が自動化されているが、それでもこの規模の戦艦を運用するには人手が足りず、とりあえず「できる人ができることをやる」というスタイルになっている。

なので、シャクティちゃんとうっソくんが洗濯をしていたり、グリッドマン同盟の子たちが掃除していたり、アムロ大尉が工具箱担いで艦内をうろうろしているのをよく見かける。

その一環として俺が食堂で料理番をすることも割と多く、出撃前でもこうしているわけだ。

「先輩!」

「おや、エルくん」

そんなところにひよっこり現れたのが、エルくんだった。

これもよくあることだ。幸いにしてドライクロイツでも好評を博している俺の料理はフレメヴィーラ時代からエルくんも喜んでくれているし、「こっちの料理」は特に受け

がいい。

だが今日のエルくん、なんだか妙に嬉しそうだ。作戦も決まった出撃直前のこのタイミングで新兵器を作ったわけでもないだろうに、あの喜びよう。一体何があったのやら。

「ふっふっふ。実はつい先ほど作戦前の哨戒に行ってきたよ。……そこで、見つけたんです！」

「その、背負ってるやたら大きな袋の中身を、かな？」

その様は、サンタクロースかさもなくば泥棒。エルくんの背丈がドライクロイツのパイロット平均でも低い方なせいもあるだろうが、妙にデカイ袋がばんばんに膨らんでいる。

「これから皆さんに配るんですが、せつかなので最初は先輩と一緒に食べたいと思いますよ。……これです！」

「それは……パンだね？」

どう見てもパンだった。

何の変哲もない楕円形。ふっくらとしておいしそうではあるけども、普通にパンだ。

……パンだなあ。

エンジェル・ハイロウ攻防戦の直前に、ここ北米大陸で哨戒に出たエルくんが見つけた、パン。

「ええ、そうなんですよふふふふ……!」

「まあ、とりあえずいただこうか」

たくさんあるみたいだからサンドイッチにしたりもするかもしれないけど、とりあえずこのまま食べてみるとしようか。

エルくんと二人して大口開けて、むしゃり。

「もぐもぐ。おいしいですね」

「うん。『命が入ってくる味』、かな?」

「——ええ、本当に」

おいしいパンだった。

パリッとふわっと、基本に忠実。パン作りの才能があるかはわからないが、毎日人の口に入るものを、毎日真面目に作ってきた味がする。そういう人生を積み上げてきた、という味がする。

こんな世界、こんな時代に、だ。

下手をするとパンを焼くための小麦を手に入れるのにすら難儀するだろうこのご時世に、だ。

「……みんなにも食べてもらおうか。きつと喜んでもらえるだろうから。俺にも少しも
らえるかな。そのパンでもサンドイッチを作りたいし」

「是非お願いします。特にアムロさんたちに食べてもらいたいですね。……いやあ、小
麦粉を100kgくらい持つて行った甲斐がありました！ そのおかげで喜んでパン
を売ってもらえましたし！」

「そんなことしてたのエルくん」

きつと人生でいろんなことを経験したからこそその境地なのだ、俺は思う。

そんな人が、今もこの地球で生きている。そのことをどんな言葉よりも雄弁に示すこ
のパンの味は、ドライクロイツとして戦うみんなの力になつてくれるだろう。

……そして、こうしてこのパンを食べられるということは、俺たちとは別の所で別の
戦いもあるという証なのかもしれない。

世界の危機はドライクロイツの前以外にもあり、しかしそれを止めようとする人たち
もまた他にいるだろうから。



「いやー、やはりネットというのは便利ですね。真偽は不明ながらいろいろな情報が舞

い込んできます。この噂見ましたか、先輩。どこかの資源採掘コロニーで、『正義の怒りに燃え上がるガンダム』が出たら嬉しいですよ」

「ギリギリな表現はやめようねエルくん。……というか、それ本当にガンダムなの？」

目が2つあってアンテナが生えてればなんでもガンダム扱いされるらしいけど」

「さすがに詳しいところまでは。……いえ待つてください。その理論に基づいて考える
と、僕のイカルガも……ガンダムということに……?」

「エネルギー源もシステムも何もかも違うでしょ」

「僕がガンダムですか……!?!」

「エルくんはガンダムじゃないよ」

エルくんにも目をつけられたモノがどうなるか、俺は身に染みて知っている

飛空船、ゴールドンメイ黄金の鬣号にエルくんたちが回収され、続いてガルダウイングも收容されてようやく一息つけた。

後ろには満身創痍の飛竜戦艦がよたよたついて来るといふある意味恐ろしい状況ではあるが、竜の王という共通の敵が現れた今、あまり心配はいらないだろう。こう言っ
てはなんだけど、パーヴェルツィーク王国のフリーデグント王女殿下も、エルくんと一緒にゴールドンメイ号に乗ってるわけだし。

……まさか、飛竜戦艦と肩を並べることになるうとは。クシエペルカでジャロウデクと戦つてたころは考えられなかったなあ。

状況の確認と報告の為に艦橋へあがつてエムリス殿下と話をしよう申し付けられてのそのそ向かうと、そこに待っていたのはいつも通り堂々と艦長席に座るエムリス殿下。
下。

そしてついさつき竜の王とその中にいた魔王をボコボコにしたとは思えないほどい

つも通りのエルくんが、アデイちゃんに絡みつかれていた。

うん、平常運転だ。

会談のときは隙なくきつちりしていたフリーデグント王女殿下が、なんかちよつと萎れた感じで艦橋にいるのをどういう目で見ればいいのかという気にならなくもないけど、まあエルくんに関わってしまったのならさもありなん。気にしないのが吉だろう。

とか思ってたなら、アデイちゃんに取り憑かれているエルくんを不思議そうな目で見ていたフリーデグント王女に何かを感じたのか、アデイちゃんが威嚇しとる。

……なぜだろう、声を出していないのに「あげません!!!」という叫びが聞こえてきそうだ。

あと、こつちに気付いたエルくんがひらひらと軽く手を振ると、それに気付いたアデイちゃんが俺にも同じ顔を向けてきた。

いらぬから安心してくれ。

「……ともあれ、会談の仕切り直しとなるだろう」

「ほう、いいのか？ 今回の戦いにおいてこちらは大した被害もない。パーヴェル

ツイークにとって、先の会談と同じようには行かんだろうに」

「それはそちらにとつても同じだろう。……あの『魔王』とやら。何よりそちらのエルネステイ卿をこそ敵視しているようだったか?」

「む。……というか、アレはなんなのだエルネステイ? ちょうどフリーデグント王女もいることだし、ここらで説明を求めたいのだが」

そして、エムリス殿下とフリーデグント王女の目がエルくんに向く。

〈竜の王〉に、〈魔王〉。それを操る者。

明らかに尋常ではない力を持ち、それに匹敵する憎悪をエルくんに向けていた謎の力の持ち主にして、ハルピユイアの一派を束ね、混成獣キユマイラの手綱まで授けたらしき存在。こうしてひと段落ついたからにはよくわからないまま放置しておけない情報だろう。

「はい! 魔王の中の人である小王オベロンはボキューズ大森海の奥地に取り残された第一次大森伐遠征軍の生き残りの人間たちを治めていた人で、なんやかんやで敵対することになって街一つ乗せられるくらい巨大な当時の『魔王』を倒して以来の因縁ですね」

「しかも、最終的にエルくんが魔王の中に突っ込んで直接引導渡しました」
まあ、説明されても情報量の多さに頭抱えることになるんだろうけどね!

トイボックスマーク2の自爆をモロに受けた魔王とその中にいたらしき小王。

あれで倒せているといいのだけれど、その程度で死ぬくらい諦めがいいのならボキューズ大森海で魔王と運命を共にしていただろう。

……たぶん、浮遊大陸における騒動はまだ終わっていない。

エムリス殿下もフリーデグント王女もそう思っているだろうし、俺もそこは同感だ。

だって、トイボックスを失ってなお、エルくんがあんなにもニコニコワクワクと笑顔でいるのだから。



パーヴェルツィークとの会談再び、というのは既定路線としてもその前からすでに丁々発止の化かし合いは始まっている。

エムリス殿下とフリーデグント王女はエルくんから小王に関する情報を聞いて今後のスタンスやハルピユアの扱いなど話し合っているが、エルくんはひとまず自分の出番はなくなつたと察して艦橋を後にした。

エムリス殿下たちがそれを止めなかつたのは、聞くべきことは聞いたという状態もさることながら、エルくんを傍に置いておくとさらにヤバい情報まで聞く羽目になりそう

だという危機感がうつすら漂っていたからのような。気持ちにはわかります。

ともあれ、そうなれば俺もまた用はなくなるわけで。さすがに竜の王の相手なんてして疲れたし少し休みたい。そう思いながら艦内をぶらついて、どこか腰を下ろせるところないかなーと彷徨って。

——大地がおかしい。

飛空船の中、地上からはるかに離れているはずなのに、農民として長年土に触れてきた俺の感覚がそうざわめいた。

「うわっ、なんだこの音……?」

「見ろ！ 鳥が一齐に飛び立ってる！」

地鳴り、だろう。飛空船の中らしく色々と駆動音や風の音が常に響く中、それを貫く別の異音が耳に入る。

加えて、ギャアギャアと驚き惑う鳥の声。地上……というか浮遊大陸に何らかの異常が起きた、と考えるべきだろう。

地面から離れて空に浮かぶ大地だというのに、だ。

「先輩、大変です！ 見てくださいあの……光の柱を！」

地震のような音がするのに、飛空船の中だから足元は影響を受けない。その違和感にくらくらしているところにすっ飛んできたのがエルくんとアデイちゃんの二人。やって来た方向からして、二人で甲板にでも出ていたらしい。

だから、誰より早く気付けたのだろう。

この浮遊大陸で起きた数々の事件の中でも最大のもの。

その始まりと終わりを告げる象徴。

大地から吹きあがり、天の高みへ突き抜けていく、あまりにも大きな光の柱。

うっすらと虹色に明滅し、「何か」の蠢く影を秘めたそれこそが、この浮遊大陸の運命を決めるのだろうと、そういう確信があった。

「なぜでしょう、最近ああいうのを5本くらい見たような気がするのですが」「それ、たぶん存在しない記憶だから気にしない方がいいと思うよエルくん」



会談の際中に竜の王についたハルピユイアたちの襲撃に会い、その後なんやかんやで身柄を預かっていたフリーデグント王女。

とりあえず落ち着いたら身柄を返さなきゃね、というのは自然な流れ。

ただ、あの光の柱が現れたとなると、それだけでは済まないわけで。

「よくぞお戻りになりました。ご無事でなによりでございます」

「ああ、苦勞をかけたな、グスタフ」

先の会談の時もフリーデグント王女と一緒にいた、おそらく騎士団長クラスの人が恭しく王女を迎える。心勞がガツツリと見て取れるが、残念ながら王女を迎えてハッピーエンド、とはならない。

状況は既に、それを許さないものになり果てている。

「どうやらそちらの面子も揃っているようだな。話があるのでこちらへ来てもらいたい」

「失礼ながら、まず王女殿下を飛竜戦艦へとお連れせねばならない。話はまたの機会に

……」

「心配するな、王女殿下も話し合いに参加してもらわねばならんからな！」

あ、グスタフって呼ばれた騎士団長さんの額に青筋が！

エムリス殿下のどんな時でも明るく快活なところはこういう独立した集団でトップと仰ぐのには頼もしいことこの上ないけど、相手にとってはおめちやくちや腹立つんだらうな……。」

「若旦那、ちよつと様子を見たいので通していただけますか？」

「おつと、すまんなエルネスティ」

そして、そんなエムリス殿下すら優しい方なのだと、パーヴェルツィークの人たちは思い知るだろう。

「ふむふむ、飛竜戦艦はやはりマギウスジェットスラストが片方大破している、と」

ガタイのいいエムリス殿下の脇からひよつこりと姿を見せたエルくん。会談の場にしたことをパーヴェルツィークのみなさんは覚えていようからその姿に驚きこそしなかったものの、残念ながらエルくんは唐突な爆弾発言に定評があるわけで。

「パーヴェルツィークのみなさん。こちらには飛竜戦艦を修理する手立てがあるので、いかがでしょう？」

エルくんは、基本的にいつも相手の望む物を差し出す。

ただ、代わりにエルくんの望む物を持って行かれることになるのだけだ。



再びの会談。参加者の顔ぶれだけはほとんど変わらず、竜の王の襲来によって中断された前回の続きという趣だった。

こちら陣営としてはエムリス殿下を主として補佐にエルくん、シユメフリーク王国からグラシアノさん、ハルピユイア代表として風切のスオージロさん。このメンバーの中になんで俺まで参列を許されているのかはさっぱりわからないけど、まあどうせ発言権もないし置物になっていよう。

相手側であるフリーデグント王女と騎士団長のグスタフさん、その他護衛の方々もそこそこいるし、人数合わせとかそんな感じに違いない。

ともあれ、話す内容はガラリと変わる。状況が先ほどとは大きく変わっているために。

「本来ならじつくり腰を据えて話したいところなのだがな。急ぎ次の方針を決めねばならんので、休む間もなく集まってもらった」

「確かに急であるな。内容は？」

「無論、見てわかる通り、アレについてだ」

会議は黄金の鬘号近くの屋外で行われている。敢えてここを選んだ理由はこのため

にこそあると、一目でわかる。

先ほど出現した、どう見ても浮遊大陸の大地から空へと伸びている、光の柱だ。

「……方角と距離から察するに、おそらくあれはこの大地の中心だろう。ハルピユイアが『禁じの地』と呼ぶ、巨大なエーテライト塊が突き立ち、竜の王とやらが根城としていた地、だろうな」

「殿下!？」

制止こそしないものの驚いた様子のグスタフさん。フリーデグント王女の言葉が事実であり、そこそこ重要な情報として扱われていた、ということだろうか。

「ところで、スオージロさん。どうやら大地の揺れが断続的に続いているようですが、これはよくあることなのでしょうか」

「否。雖のところより一度として大地が震えたことはなかった。嵐の時でさえ盤石なるものこそ、大地である」

そして、エルくんがこの事態の異常さをスオージロさんの証言で裏付ける。

いやまあ、俺たち人間の立場からすれば浮遊大陸の存在自体が既に異常極まりないものではあるんだけど、そこで長年生きてきたハルピユイアの証言は、相応に重い。

何かが、起きている。そう確信を抱くには十分すぎるだけの証拠が、続々と積みあがっていた。

だが、それでもパーヴェルツィークの方針は変わらない。

元々ハルピユアに対してあまり友好的ではなかったところに、竜の王と徒党を組んでの襲撃。フリーデグント王女はキッドくんとの約束で比較的中立に近い立ち位置だけど、王女だからこそ我を通すわけにもいかないのだろう。

……まあ、ここにあらゆる理屈と口八丁を駆使して我を通す子がいるんだけども。

「ご意見はわかりました。ですが、竜の王は倒したとはいえおそらく『魔王』はいまだ健在。飛竜戦艦なしで戦えますか？」

「舐めないでもらおうか！ 我らが騎士団は健在！ 飛竜戦艦を修復し、必ず報いを受けさせる！」

「いま、ここでは無理でしょう。装甲や他の装備の喪失ならいざ知らず、あの規模のマジウスジェットスラストの大破は補えるものではありません」

ニコニコと人当りよく、しかし同時に淡々とひたすらに事実を並べていくエルくん。

積み重ねた年輪の威圧感を余すところなく叩きつけてくるパーヴェルツィークのグスタフ騎士団長に対し、全く怯まないその姿は対照的ながら、決して負けることはないという確信が圧としてにじみ出ていた。

「我が国の鍛冶師は優秀だ。いかなる傷をも直して見せる！」

「だ、そうだが。銀の長、お前だったらどうする?」

「ただちに国許へ帰還。それしかありませんね。竜闘騎のマグウスジェットスラストタがあるだけかき集めて繋げたとしても、今度はその同期と出力制御が極めて複雑になります。まともに動くようにするだけでも一苦勞で、動かせたとしても戦闘に耐えるものではありません」

返事がなかったのは、きつと凶星だったから。

あれだけ大きなマグウスジェットスラストタなら製造も制御も特注でやってるわけで、量産前提の竜闘騎のものでは文字通り束にしたって及ぶかどうか。しかもここは、整備の施設がほぼない浮遊大陸。これだけ条件が揃わない中で修理ができるかどうかというの、もはや鍛冶師の腕以前の問題だろう。

そして、その状況を徹底的に利用しつくすことこそ、エルくんの得意とするところ。

「ですが、ご安心ください。裏を返せば同等のマグウスジェットスラストタさえあれば飛竜戦艦はすぐにも甦るといふこと。僕たちにはその手段があります」

「……まさか、その船か!?!」

エルくんが優雅に伸ばした手の先は、俺たちの背後に停泊している黄金の蠶号を示している。

おそらく現在世界最大級だろう飛竜戦艦のマグウスジェットスラストタ。

その着想の元になったエルくん印の最新式を搭載した、クシエペルカ王国所有のハイエンド。以前飛竜戦艦と遭遇したときに逃げ延びたこともあるという、実力のお墨付きだ。

「……条件を聞こう」

「殿下!？」

決断は、フリーデグント王女がした。交渉に乗る、というのは半ば自分たちの置かれた苦境を認めたようなもの。やはりというべきか、さすがに厳しい状況だったんですね。

……なんとなく、王女の顔色に諦めの色が濃い。エルくんに目を付けられると逃げられないということを知ったような顔色してますよ王女殿下。俺もときどきそういう顔色してる自覚があるからわかりますよ王女殿下。

「黄金の鬘号を用いて飛竜戦艦の失われた片肺を補います。その代わりに、飛竜戦艦を操る権利の半分を分けていただけたいのです。ハムエッグみたいに半分ですね!」

「それ、分けられないときに言うヤツだよエルくん」

思わず小声で言っちゃったけど許してくださいね皆さん! これ多分、想像以上にヤバイこと考えてるヤツですので!!

「なっ、なっ……!! 飛竜の半分をよこせだど!!」

「いいえ、違います。『操る権利の半分』です。ことが終わったあとは船体諸共お返しします。さすがに傷一つつけないという約束はできませんが、このまま曳航するしかないお荷物になるよりは良い提案だと自負しています」

ほらね、怒られた!

エルくんつていつもそうですよね! 振り回される方を何だと思ってるんですか!

「……なぜ、それを必要とする?」

そして、振り回されず思考を巡らせ、真意を測ろうとする人はとても貴重だ。

周囲の注目が集まるまでの一拍の間。自分の言葉を周囲に最も強く伝えるそれを自然と引き出すあたり、王族の血のなせる技なのだろう。

エムリス殿下も飲み会とかで意識してか無意識か、よく使う技なので知ってます。あの人、そういうところでしょうかこういう手管使わないんだよね……。

「たしかに、エチエバルリア卿の言う通りあの船があれば飛竜戦艦は息を吹き返すだろう。だがそれは、同時にそちらの船の使用が著しく制限されるということでもある。そ

こまでして得るのは飛竜戦艦の操縦権の半分。決して割のいい取引とは思えん。……聞かせてもらいたい。何をするつもりだ？」

フリーデグント王女の発言のあと、エルくんが答えるまでの間。誰も口を開こうとしないわずかな沈黙。

その心地を噛みしめるように、エルくんがじんわりと笑う。

話の通じやすい人は好きですよ、と。

……時々俺が向けられる顔なんだよなあ、それ！

「理由は簡単です。可及的速やかに解決すべき問題が目の前にある。そしてそのため最大の効果を発揮しうるものを用意しておく方がいいだろう、ということでした」

「問題だと？ ……まさかっ!？」

グスタフ騎士団長が振り返った先には、遙かな距離を隔ててなお輝きを届ける光の柱。明らかな異常であり、対処が必要というのもわかる話だ。

「ちなみに、ご注目いただきたいのはあの柱の『色』です。見覚えがおりか？」

「虹色の光……エーテリックレビテータ……!」

エーテリックレビテータ
源素浮揚器は、高濃度エーテルの作用を利用している。必ずしも密閉する必要はないが、あの柱はどう考えても「栓が抜けている」とみるべきだろう。

今この瞬間も、膨大な量のエーテルが浮遊大陸の内部から流出していることは間違いない

ない。

浮遊大陸の三次元的な地形がある程度以上の正確さでわかれば浮遊のために必要なエーテル量を概算することはできるかもしれないが、広い上に勢力の分布がバラバラ。完全な地図はないし、そもそもどれくらいのエーテルが大陸内に蓄積されていたかの初期状態が全くの不明。

ぶつちやけてしまえば、今この瞬間に大陸が落ちても不思議はない。

「この大地が、落ちると?」

「その可能性を否定できる要素がありません。そうであれば、他のあらゆる事象は後回しにしなければなりません。最大の戦力を持って、あらゆる対立を脇に置いて」

「そのためには、魔王とも拮抗しうる説得力が必要ということか……」

にっこり。エルくんの笑顔が何より雄弁な肯定だった。

パーヴェルツイークとしては、飛竜戦艦の中破からこっち少なくとも一度撤退したいくらいのこととは思っているだろう。だが浮遊大陸、というかエーテライトの塊が沈むことまで許容できるか、となると話は別だ。飛竜戦艦なんてものもまで作ってしまった以上、その力を十分に発揮するためには莫大な量のエーテライトを必要とする。その供給源がなくなることを見過ごせるどうか、微妙なラインだろう。

そう、それだけでは天秤がどちらにも傾かない。とても悩ましい所だろう。進むか、

引くか。

「しつれいします！ きんきゆうほーこくがまりました!!」

その停滞まで、おそらくエルくんは読んでいた。

読んでいたからこそ、この会談前に得ていた情報を、この瞬間にアデイちゃんから受け取ったという小芝居付きで開示することにしたのだろう。

迷っていてこそ、最後の一突きは最大の効果を発揮する。

「……お喜びください、みなさん。たつたいま、とても良い報せが舞い込んできました」
「誰にとつて、の良い報せなのかを聞きたいところだな」

それはもう、この場の皆さん全てにとつて。

とても言いたげな笑顔を一層深めて。

「我が国より、騎士団の主力が浮遊大陸外縁部まで到達しました。先導役は既に接触しておりますので、ほどなく合流するでしょう」

「エチエバルリア卿の、国の、しゆりよく……」

王女殿下！ お気を確かに！ なんか目にハイライトなくなってます！ あと、言葉の発音がひらがなになつてる気が！

「エルくんみたいなのがたくさんいる……？」とか考えてるのはわかりますけど、さすがにそれはないですから！

ともあれ、エルくんの操るトイボックスに乗って魔王と戦うという地獄のような経験をしてなお廃人にならない強靱な精神力を有する王女殿下の心も次元の彼方へと旅立ちかけている。

無理もない。ハードな状況でハードな交渉にエルくんを交えて胃と頭を痛くして、神経すり減らしながらジエンガのように積み上げたこれまでの条件その他を蹴り崩すような所業だし。

この場のミリタリーバランスは既に崩れた。

フリーデグント王女の頭の中における増援の姿はおそらく地獄の黙示録と言っている有様で、下手を打つと飛竜戦艦の操縦権の半分じゃ済まないという予想はしているだろう。

何を得るために、何を差し出すか。

その決断は王にしかできず、ゆえにこそ葛藤は深いようだった。

「むむむ……」

「ぐうう……」

「なんでエムリス殿下まで悩んでおられるのでしょうかね」

「そりゃあ、身一つのちよつとした冒険じゃすまなくなっちゃったからねえ。帰ったら

お叱り不可避でしょ」

約一名、別の理由で悩んでる人がいる気もするけど。しかもその人が俺らのトップなだけでど。



——時は少し遡り。フリーデグント王女を返す前に、エルくんから相談を持ち掛けられた。

「最終的にこの浮遊大陸、どうなると思いますか？」

黄金の鬘号の船室の一つ。周りには聞かせたくない話ということ二人だけで籠り、窓から見える光の柱を見ながらの開口一番。いきなりぶっこんでくるなあ、エルくん。

「……前提として、あの光の柱は色からしてエーテルが噴出してるとんだろうね。ということは浮遊大陸が空を飛んでいるのはエーテルックレビテータの原理によるもののはず。栓が抜ければ『落ちる』しかないね」

「そっでしようねえ。上に乗っている全て諸共に」

ぞつとしない話だった。

飛空船が落ちるのはわけが違う。

この際土地やら埋蔵されたエーテライトの価値は脇に置くとしても、魔獣や動物のみならずこの地にはハルピユイアが住んでいる。しかもさらに悪いことに、魔王にまとめられ、力を与えられた群も含めて、だ。

浮遊大陸の下は海。このまま何もかもまっすぐ海底へ沈んでくれるのなら悲劇で済むが、もし万が一ハルピユイアたちが生存を賭けてセツテルンド大陸に新天地を求めたら待っているのは地獄だろう。

イレブンフラッグスがハルピユイアたち相手に割と好き勝手出来ていたことを考えると人類が絶滅させられるようなことはないだろうが、妥協の余地のない最悪の展開が待ち受けている、かも。

エルくんもおそらくそのことはわかっているだろう。ですよねー、とばかりに全く驚いてないし。

「どうにかしたいところですが、何をどの程度すればいいのか不明。そういう状況では、やはり最強の手札を用意する必要があると思いませんか？」

「エルくんはいつでもジョーカーだよ」

そんな、照れます。そう言うてはにかむエルくん。

……そうだね、エルくんは切り札的な意味でのジョーカーだよ。ピエロみたいな化粧して愉快犯じみた凶悪事件起こすタイプのジョーカーじゃないよね。エルくんを敵

に回す陣営から見たらガチのそれな気がしなくもないけども。

そして、エルくんは窓から視界を外す。

目を向けたのは船室の方。後方の側。

おそらく、飛竜戦艦がついてきている方角。

「……全く、ロボットこそがこの地上で最高なのだとい前教えてあげたはずなのですが。

これだから人類はいけません。どうしましょうね、先輩？」

あつ、やべえエルくんがキレてる。

かつて、飛竜戦艦と戦ったのはクシエペルカの救済に必要不可欠だったから。

というのはあくまで表向きで、エルくん自身にとっては幻晶騎士の地位を脅か

すからという純粋な私怨によるものだった。

飛空船はまだいい。幻晶騎士の母艦にもなりうる。だが戦闘目的の飛空船である飛

竜戦艦はいけない。

ああいうタイプのものが蔓延り、幻晶騎士が駆逐される世界はエルくんにとって絶対

に許容できないもの。

そうなったら、エルくんは世界を滅ぼすかもしれない。

少なくとも俺は、割と真剣にそう信じている。

「……敵を知り、己を知ればつてね。幸い、今回は飛竜戦艦と敵対したわけじゃない。協力して、その実情をより詳しく知ってみるといいんじゃないかな？」

話ながら、しかしとても慎重に言葉を選んだ。

エルくんと飛竜戦艦を対立させてはいけない。どんな手段を取つても協調路線を歩ませないと、将来的な禍根を残すことになりかねない。

これでいい感じに認識を改めて使い道とか見つけてくれたら、なあ！

「なるほど。……その手がありましたね！　ついうっかり最終的に沈めることばかり考えてましたが、今回は交渉次第で構造を調べたり操縦させてもらったりできるかもしれない！　おあつらえ向きに中破しますし、そこを突けばいいですね！　ありがとうございます先輩！」

「アツハイ」

誓つて、俺は世界を救うためにエルくんを説得した。

ただ、ちよつと結果としてエルくんの変なところを押してしまっただけなんだ。

だから俺は悪くねえ！　俺は悪くねえ！

たぶん、飛竜戦艦は無事にこの大陸を出られないけどね！



「浮遊大陸を覆っている嵐が消える、とはな。ひとまず偵察を出そう。あのやたら目立つ光の柱、あれが騒動の中心だろう。エルネスティもいるに違いない」

「トウエディアーネ隊は地上も気にしておいて。森が切り開かれて畑になってたら確実にアグリがいるわ。見つけたら真っ先に教えてね……フル装備で行くから、私が」

「今回に関しては、若旦那とエルネスティ以外特に悪さをしているという情報はないのだがねえ」

「ヘルヴィにはその辺関係ないんだろう。まあ、アグリの子なら開拓の一つや二つしてても不思議じゃねえってのはわかる話だしな」

飛竜戦艦、復活（ただし、エルくんに首輪をつけられて）

オラシオ・コジャーソは、極めて優秀な人間である。

飛空船、飛竜戦艦を作り上げた技師としての腕前はもちろん、ほぼ身一つでコネクションもない状態から自身の能力を認めさせ、責任ある地位に上り詰め、国家の軍略に多大な影響を及ぼすに至ることを、これまでに2度行つた。

己の欲望に極めて忠実。欲望達成のために手段を選ばず、人目を気にせず傍若無人ではあるが、世界を変え、時代を塗り替えた傑物であることは紛れもない事実である。

「とは言われましてもねえ、飛竜戦艦はもうどうしようもないんですけど」
それでも、できないことはあつた。

たとえば、マジウスジェットスラストが大破した飛竜戦艦を修理すること、である。方法自体はなくてもないが、いつでもどこでもできるわけでは決してない。現在の雇い主であるパーヴェルツィーク王国に対してその辺りしつかりと説明はしたのだが、まともに通じているかどうか。

話は理解しているだろうが、はいそうですかと受け入れられる状況ではないようだ。もつとも、オラシオからすれば知つたことではない。

飛空船にせよ飛竜戦艦にせよ、あくまでオラシオの目的のための通過点。その先にこそ用があり、ここに拘泥する必要はない。無理難題ばかりを押し付けてくる雇い主なら切り捨てることも選択肢のうちだ。

とはいえ、オラシオの能力を正しく評価してそれにふさわしい地位に据える度量を持った相手が貴重というのもまた事実。面倒は多いが、それなりの信用もできる、中々どうして判断の難しい局面であった。

「ゴジャーソ卿！ まもなく殿下がいらつしやいますので、お迎えのご準備をお願いします
ます」

「殿下が？ また激励の類ですかあ？ お言葉は一応ありがとうございますですが、それで仕事が早まるわけじゃないんですけどねえ」

この、王女からの期待とも督促とも取れるお目見えもどうしたものか。

オラシオとしては全く必要のない時間の無駄ではあるが、権力者との縁があること、それを周囲に知らしめることはそれなりに効果がある。その辺りの匙加減に悩むヒマなどないというのに。

「……いや、どうやら今回はそうではないらしい。詳しくは殿下から直接聞いてくれ」
「へえ？」

しかも、わけのわからない話が来る予感がするのだから、なおのこと。



しばし待ったオラシオの前に現れたのは、フリーデグント王女とさらに3人。いずれも見覚えのない顔だった。

人の顔などあまり気にする性質ではないが、飛竜戦艦に関係のある技師や要人の類ではないことくらいはわかる。だが、だとしたら一体何者で何をしに来たのか。

その答えは、すぐに出た。

「ゴジャーソ卿、飛竜戦艦の運用権限をエチエバルリア卿の国と分け合い、そのための修復も共同で当たることとなった。ついてはここからの修復作業はこの者たちと力を合わせて臨んでもらいたい」

「……はあ!？」

いくつかの予想を、全て裏切る形にて。

「いや、お待ちいただけませんかねえ殿下。飛竜戦艦ですよ？ その修復に他国の人間を……? いやさ、そもそも何ができるといいうんですかねえ？」

「……以前、クシエペルカの魔槍を放って見せた高速船。アレを、飛竜戦艦の失われたマギウスジェットスラスターの代わりとする」

「!？」

そこか、と唸る。

パーヴェルツィーク王国最大の強みたる飛竜戦艦。現在その最大の弱みとなつてい
る、マジウスジェットスラストの喪失。それを埋められる、と言われれば拒否すること
はそうそうできない。

高速船については、オラシオも少しだけ見た。一緒にいた「鳥」に気を取られてあま
り記憶に残つてはいなかったが、飛空船でありながら竜闘騎の追跡を振り切った出力は
十分に飛竜戦艦のマジウスジェットスラストの代替たりうるだろう。

なるほど、逃げられない。どうやら、向こうには相当の交渉上手がいる。どれだけ主
導権を握られてこの結論に至ったのか、想像するだに恐ろしい。

だが、そう悲観したものではない。ここは現場であり、すなわちオラシオの領域だ。

飛竜戦艦設計者にして総責任者の権限をフルに利用して、派遣される他国の技師に適
当な難癖をつけてマジウスジェットスラストを取り上げてしまえばいいだろう。

なにせオラシオ・コジャーソは自他ともに認める程度には傍若無人。話した相手をう
んざりさせることにかけては人後に落ちない自負がある。

オラシオ・コジャーソはそう思っていた。

極めて不名誉ながら正しい自己認識である。

ただ、足りない。

我を貫き通すという点において、オラシオすら超える変態がいるという可能性を、想像できていなかった。



「こちらがエチエバルリア卿……あー、エルネスティとアデルトルト。そしてアグリ・ポトルだ」

「よろしくお願いします。国元では騎士団長と幻晶騎士の設計・建造をちよつとしていましたし、飛空船も少し関わっていましたのでお役に立てればと思います」

「エルくんのお嫁さんのアデルトルトです！ よろしく！」

「どうも、農民です」

「……んん？」

飛竜戦艦のそばに用意された、技師の人たちのスペースに連れて来られた俺たち。

紹介された責任者のオラシオさんは身なりがちよつとだらつとした、浮世離れしているというか技師としての腕以外は放り投げているような雰囲気の人だった。

「デキる人だと思う。能力以外の全てを無駄と断じてしまっているような気がするけど。」

「飛竜戦艦と竜闘騎はサイズと運用こそ異なりますが本質的には似たものですよね？
任せてください。既に何機かバラして構造は把握してありますから」

「エルネステイ、目的を忘れ始めていないか？」

「ご安心ください、飛竜戦艦の修復は我が国とパーヴェルツィーク双方にとって現在の至上命題。もちろん忘れていませんよ。ですが、そのためにはしっかりと構造とシステムと性能を把握しなければいけませんから！ それだけですから！」

「……ということだ、コジャーソ卿。エルネステイは見ての通りだが、お前ならば必ずや御すこともできるはず……！」

「いえ、『ということ』ではなくですね？」

あ、王女殿下がぶん投げた。

エルくんの相手なんてやってらんねーぜ感がうつすら漂ってませんか。

「化け物には化け物ぶつけんだよ」みたいな目をしてる気がするんですけど。でも、その化け物は他の化け物にぶついたら変な合体してもっとヒドいことになると思いますよ。」

「それでは、ひとまず飛竜戦艦の構造を見学させてもらってもよろしいでしょうか！」

バラしたりはしませんので！ 中に潜りこんで調べるだけです！ 先っちょだけでいいですから！」

「え、ええまあそのくらいなら……。とはいえ、修復作業は現在も進んでますからねえ。その邪魔だけはしないでくださいよお？」

「はいもちろん！ では、僕はちよつと中から調べてくるので先輩は外の確認をお願いします」

「わかった。損傷個所を見ておくよ」

お願いします！ の声とともに、アディちゃんの腕から解き放たれたエルくんは魔法ですつ飛び、飛竜戦艦の装甲の隙間に潜り込む。虫みたいでちよつと気持ち悪い、とか思っただけよ？

「……殿下、アレが本当に役に立つんですか？」

「役には、立つだろう。立ちは、するだろうな……」

王女殿下がげっそりしている。さもありません、二人がどの程度正しく認識しているかはわからないが、エルくんがフリーハンドで解き放たれてしまった以上、飛竜戦艦のハード、ソフト両面で構造を把握することは確定事項だ。

ぶつちやけた話、下手するとエルくん式の飛竜戦艦が作られかねない。もちろん、その飛竜戦艦は人型への変形機能くらいつくことになるだろうけど。

ともあれ、こうなったからには飛竜戦艦の修復は確実なものとなるだろう。その果てにどうなるかは不明なだけだね。情勢と、そしてエルくんの匙加減次第。いよいよもってこの浮遊大陸の未来が不安で仕方ない。

だからこそ、俺は俺でやることやっておこうか。エルくんが内部構造を把握してくれるから、外から見た方が分かりやすい損傷状況の確認と、それに基づく修復プランの大枠でも考えておくかなー。

というわけで、メモ片手に飛竜戦艦の周りをひとまわると見てこよう。

……なんか、あんまりこの場にとどまっちゃいけないような気がするんだよね、なぜか。

オルヴェシウス砦で普通に仕事をしているとき、何か面白いことを思いついたエルくんが格納庫の方からすっ飛んでくるときのような変態の波動を感じるんだよ。

「……それはそれとして王女殿下、あちらの農民という人はなぜいるのです？」

「エルネステイがどうしても必要な人材、として名を挙げた。きつと相応の技量を持っているのだろう。……あと、エルネステイよりは常人寄りのハズだ。たぶん」

「そうなんですねぇ。……あの人を見てみると、不思議と心がザワつくというか妙な胸騒ぎに襲われるのですが」

その波動の出元は、たぶんオラシオさん。さつきからじーじーと俺のことを見て
いるっぽい。目が合うの怖いから振り向けない……！

ともあれ仕事は仕事だ。

内部構造とシステム回りはエルくんが見てきてくれるから、俺は周囲をぐるりと回っ
て外観や寸法、損傷状況を把握しておく。

事前に設計図の写しは簡単に見させてもらっていたので大体は頭に入っているが、あ
くまで開発時の情報。

損傷によって穴が開いたり部品が曲がったり外れてなくなっていたりといった情報
はこの目で見て行かないとならない。

近くにいたパーヴェルツィーク側の技師の人たちにも話を聞かせてもらったりして、
情報を集めていく。

「すみませーん、あっちのブローエンジンと翼についてちょっと教えて欲しいんですが」
「ああ、なんだい？」

「主翼の角度についてなんですが……」

「それなら、多少ぐらついているが今は……」

飛竜戦艦は現状最強クラスの兵器だが、ベースはマジウスジェットスラスターで機動力

を強化した飛空船だ。その辺り、俺もエルくんの周りでちよいちよい関わってきたし、ガルダウィングの知見もある。

パーヴェルツィークの人たちとの情報交換もサクサク進み、やはり左舷側のマグウスジェットスラストは本当にどうしようもないということがはつきりしてきた。

これ、もう根元の辺りからばっさり切り落として黄金の蠶号をくつつけるしかないな。解つちやいたけど、本当に修理のしようが全くない。

……ということをしている俺の後ろを、なぜかオラシオさんがずつとついてきている。

振り向かず、横を向いたついでにちらつと目だけで様子をうかがうと、相変わらずつかず離れずの距離で俺を見ている。

特に口をはさむわけではなく、しかしずっと近くにいます。

おかしい。どうしてそんなに俺のことを気にするんだ……？

オラシオ・コジャーソ。

それは忘れられない名前の一つだ。

もう数年前になる、クシエペルカ王国の救援。侵略してきたジャロウデク王国がクシエペルカに対して圧倒的優位に立てた理由の一つである飛空船。その開発者の名前

として、ノーラさんたち藍鷹騎士団の調査した資料に記載されていたことを覚えてい
る。

当時俺が知りえたのは名前くらいで、技術力のほどは飛空船の解析結果なんかから推
測するしかなかった。だから人となりについては今日初めて知ったようなものなんだ
けど、どうやらエルくん並みに一筋縄ではいかない人らしい。

「そのあなた。えーとお、アグリさんでしたっけえ？」

「アツハイ」

そんな人から声をかけられたこの瞬間。

かつてライヒアラ騎操士学園で学生やったころ、図書室で初めてエルくんに声かけ
られたときのことが脳裏を過つたのはなぜなんだろう。

「なかなかいい目の付け所をしていますねえ。飛空船のことをわかっている。騎操士とい
う話でしたが設計もできるんですか？」

「ええ、多少は。エルく……団長ほどではないですがいくつか幻晶騎士を設計したこと
もありますよ」

「……幻晶騎士お？ それにしては飛空船のことに詳しいですね？ てつきり飛空船技
師かと思ったのですが」

……まあ、オラシオさんは普通に技術屋一筋の人らしくて大したことない動きだったから避けて終わりだったんだけど。これでも俺、農民としてついでに騎操士として普段から体張ってますんで。

「忘れもしませんよ、初めてあの鳥を見た日のことを！ 私の作った飛空船よりも高く！ 速く！ 飛ぶなどと！」

「ええ……そんな理由……？」

顔面から地面に突き刺さり、泥も落とさないままこつちを睨んでくる目の血走ってることよ。

そうか……この人はこういうタイプなのね。

自分の技術命、飛空船命の職人肌。自分こそが一番であるという強烈な自負があり、それを傷つけられれば許さない。

俺が上だ、俺が一番だ。そういう矜持が人の形をした生き物。

たぶん、エルくんと同じタイプの人なのだろう。

……俺からすれば面倒極まりない八つ当たりでしかないけどさ！

「わかりますか、あの鳥を見たときの私の怒り……！ まあ、積載量とか航続距離とかどう考えても私の作った飛空船の方が上ですが！ 上ですが!!」

「あー、はい。そうですね？ それに飛竜戦艦なんてのもありますし！ すごいですよ

オラシオさん！ いよつ、空の第一人者！」

「……………ふむ、道理というものがわかつているようですね？ これで勝ち誇ったようなこと言うのならここで雌雄を決しなければいけないところでしたか」

そしてヨイシヨがちよつと効いた！ セーフ！

オラシオさんは直前まで全く気にしていなかった顔やら服やらの泥をパタパタと落とし、満足そうな表情を浮かべ始めた。ものすごく切り替え速いなこの人。

その後、オラシオさんを宥めすかしながら飛竜戦艦の情報を聞いたりなんかもしてみた。

かつて、ジャロウデク王国でも建造した飛竜戦艦^{ヴァイヴァイル}。その技術蓄積と戦訓を元に開発されたこの飛竜戦艦^{リンドヴルム}は飛空船と竜闘騎との連携を前提として建造されている。

艦体の構造はますます効率化され、積載量の増加、独立可能な艦との連結機能も備えた多機能さと、それを複雑すぎない運用を可能にするシステム面。それらを実現しているのける辺り、なんだかんだでこの人もエルくんには負けないくらいの技術力を持っているようだ。

「……………だからこそ、修理するなら私の手で直したかったですかねえ。政治が関わると面倒でいけません。やれやれ、こんなところで立ち止まっている暇はないというのに、上手くないかないものです」

そのうえ、忠誠心というものがまるでなく、自分自身の目的というものが別にあるらしい。

かつてこの人がジャロウデク王国に飛空船をもたらしたことは、エルくん印の幻晶騎士技術が盗み取られたこと以上に大西域戦争を引き起こす原動力になったと思う。

クシエペルカ侵攻に同行していたらしいというのは、当時藍鷹騎士団のくれた資料で読んだ記憶がある。飛竜戦艦が出てきたことも考えるに、それは事実なのだと思う。

それでありながら、クシエペルカでジャロウデクが敗北したあと忽然と姿を消し、身柄を確保することができなかつた。

今こうしてパーヴェルツィークの技術者として収まっているところを合わせて考えると、敗戦濃厚と見るやなんの未練もなく逃げ、持ち前の技術と実績をパーヴェルツィークに売り込んで今の地位に納まったのだろう。

つまり、「もしパーヴェルツィークに居づらくなれば、ためらうことなく飛び出して別の所でまた飛竜戦艦を作る」可能性を示している。

……仲良くなりたくはないけど、かといって全く伝手がないう状態で放り出すのも心底怖い。

魔王と遭遇した時も思ってたけど、この大陸は本当にヤバい人ばかりいるなあ。

……まあ、その筆頭はうちのエルくんなんだけどね！

直接的間接的に、オラシオさんにも小王にも勝ってるし！
敵じゃなくてマジでよかつたと思います。

「あの鳥は許せないと思つていたんですが、こうして一時的にでも協力関係になったのならいい機会です。あなたの鳥についても教えていただきませうよ……いろいろと、ねえ？」

「お、お手柔らかにお願いしますね……？」

ついでにもう一つ。

オラシオさんは、ガルダウイングが自分の飛空船を越えるものと見なして強く執着していたのだという。

それはもう、いつか必ず叩き落してやるとばかりに。かつて最初の飛竜戦艦と戦った時に風の法撃で吹き飛ばされたことがあつたけど、あれはまさしく対ガルダウイング専用を作り、装備したものだつたのだと。

それだけの怒りと敵愾心を、自分の上を行くとみなしたものに抱いたという事実。

……少しだけ、考える。

もし、将来。なにかがまかり間違つて。

俺がまた新しい幻晶騎士を作つたとして。

それを見たエルくんが、「負けた」と思ってしまったら。

どんなことが起きるのかを見せられたような気がして、少しだけ恐ろしかった。

「……むっ！　なんだか先輩が誰かにたぶらかされている気配が!？」

「突然出てきてどうしたのエルくん……ていうか油で真っ黒だよ!？」

同じころ、飛竜戦艦のちようど反対側でエルくんとアデイちゃんがそんな会話をしていたと後で聞きました。

そんなニュータイプじみたエルくんを俺が超えるなんて無理だろうから、気にしなくていいとも思うんだけどね！

その後、飛竜戦艦の中身を堪能して機械油でべつとべとの真っ黒になっていたエルくんは、まず風呂で体を洗わねばということでアデイちゃんに連れ去られて行った。

こうなるともうお開きにするしかないということで、各自今日得た情報を持ち帰って検討することになった。

現場仕事の突貫作業で、飛竜戦艦のマグウスジェットスラストを乗せ換えるという大仕事、急ぎとはいえ解析と設計の一つもしないといけないものじゃない。

本来ならその辺りも相応の時間がかかることになるが、エルくんならまあ大丈夫だろう。



「というところでオラシオさん！ 図面引いてきました！」

「……昨日の今日ですかあ？」

ほらね。エルくんが一晩でやってくれました。俺も手伝いましたけども。

ちなみに今日は黄金の蠶号とそこに搭載されている幻晶騎士ももりもりと連れてきている。エルくんには既に作業を進める気味であるからだ。まあ、急ぐに越したことからいからできることは強行するくらいの勢いで進めた方がいいのだけど。

「……おかしいですねえ？ マグウスジェットスラストを乗せ換えるだけの作業のハズなのに、なぜこの図面では飛竜戦艦にあの飛空船がくつついているんですかあ？」

「王女殿下も仰っていました、最終的な目的は飛竜戦艦の運用そのものの分割です。

そのためには、黄金の蠶号の航行能力を喪失させるわけにはいきません」

「……………」

オラシオさんは心底イヤそうな顔をして黙り、設計図に目を落とす。

これやベーな政治の匂いがする、という顔。気持ちはとてもよくわかります。ちなみにその話を持ち出したのはエルくんですからどうしようもないと思います！

だが、そこで沈黙を選べる辺りオラシオさんもやはり只者ではない。技術者としての能力以外に、政治を理解する、利用する術も身に着けているようだ。……エルくんが二人いるみたいで怖いなあ！

「それはまあ、よしとしましょう。ですが開発経緯の全く異なる2隻の船を、それぞれ独立させたまま動かすとなると操縦系はどうするんです？ 言っておきますが、こちら側にはこの場で制御術式を構築できるような人材はいませんよお？」

「そこはもう、僕自身が。実は少々得意ですから！」

ワタシハスクリプトチョットデキル、みたいなことを言いながらもエルくんはあつという間に了承を取り付けて飛竜戦艦へと飛び乗った。装甲に穴が空いている辺りに降り立ち、中から銀線神経を引きずりだして掴めば、それすなわちエルくんがシステムを掌握したという証。

既に昨日のうちにある程度システムに潜って内容を把握していたのもあって、俺としては飛竜戦艦の命運終わったな感しなく。

「それでは、まずは大破したマジウスジェットスラストを外しましょう。ということ、アデイー！ 先輩！」

「はい」

「場所は教えてねー」

アデイちゃんが乗ったカルデイトーレがバカでかい剣を担ぎ、ついでに俺の乗ったカルデイヘッドがこれまたデカイ腕を見せつけたせいだろうか。

「……待て待て待っててくださいよなにをするつもりですか!? その、あからさまに工具ではない物を何に使うつもりですかあ!？」

「マジウスジェットスラスト周りの強化魔法を解除して、切り落とします。こうなるともう邪魔ですから」

「はあああああ!？」

オラシオさんの絶叫は、飛竜戦艦の断末魔にも似て。

竜の王との戦いでも傷こそ負ったものの腐食の霧以外では致命傷には至らなかつた装甲の一部、左側推進器の根元が剣の一閃に抵抗の余地なく断ち切られ、そのまま地面に落ちて再起不能なレベルで砕けた。

「な、な……っ!？」

「さて、すつきりしましたね。それでは先の作業を進めましょうか」

「私はカルデイトーレ片付けてくるねー」

「エルくんはマギウスエンジンの方をよろしく。俺はこの辺片付けがてら使える資材より分けて接続部分を用意しておくから」

この一件を境に、オラシオさんからエルくんの行動に口を出そうという気配がなくなった。

呆れた、諦めた、黙っている、というわけではない。進捗は確認するし、質問されれば答えてもくれる。だが自分で何かしよう、手を出そうという風ではなくお手並み拝見とばかりに観察している。

エルくんがいつも通りやらかした結果心が折れた……のかと最初は思ったがそういうわけでもなさそうだ。

冷静に、真剣に、見定めている。そんな目をしているように見える。

そんなオラシオさんからの有形無形のサポートがあった、ということだろうか。

パーヴェルツィーク側からの協力を受けられ、意見交換の際の熱いやり取りやエルくんの無駄な熱量にドン引きされるなどはあったものの、特に大きな問題なく作業は進む。

結果、ほどなくして黄金の蠶号接続の作業は大詰めを迎えた。

オラシオさんの意見も採用して、連結機構は強化魔法を使う前の構造的強度も十分に

持たせた形に。

あとはエルくんの側で魔法術式スクリプトを組めばおおむね完了となる。ハードとソフト両面ともに実装後の調整は必要だが、完成は間近になってきた。

その余裕を見て取ったからだろうか。

オラシオさんが話を持ち掛けてきたのは。

「……なるほど、あなたの目的は空の『果て』、純エーテルの満ちる真空であると」

エーテルとは何か。

それを研究していた一族の出身であるオラシオさんは、研究成果の一つとして得られた浮揚力場レビテートフィールドをもつて飛空船を開発。それを世界に売り込み、得られた地位と権力、技術を持つてさらに高い空の彼方を目指しているのだと。

エルくんはそこで、俺に一瞬目配せをする。

エーテルと魔法のあるこの世界はかつての常識が通じない部分もあるが、あくまで「そういう物質、現象がある」というだけで物理法則が異なっているわけではない。

オラシオさんが見たいと望むその行先にあるものは、大体予想がつく。

「真空、真なる空。……いい。良いですねえ、その言葉の響き。とても気に入りましたよお！」

そう、まさに私の望みはそれ！ この空の果て、エーテルの深きを越えた先！

そこにある景色を！ 私はこの目に焼き付けたいイイイ！！！！」

……たぶん、この世界には幻晶騎士というロボットがあることを初めて知ったエルくんはこんな感じだったんだろうなあ。そう思わせるのに十分な狂気が、オラシオさんにはあつた。

こういう人に付き合うとろくなことにならないんだよねえ！

「……ふう。失礼、興奮しました。ですが、まだ足りません。飛空船をどれだけ高性能にしても『果て』には届かない。他にもまだ手を講じる必要があります。……エルネスティ。そしてアグリ。あなたたちとなら、それを得られる。『果て』を目指しましょう！ 私と、共に！！」

アデイちゃんにブロックされながら、それでも燃える瞳で手を差し出した。

オラシオさんはこう見えて天才だ。エルくんの知識と技術が合わされば、宇宙空間への到達も不可能ではないかもしれない。それはそれでの一つの行き先では、あり。

「お断りします」

「ついでに俺も」

エルくんはニッコリ笑顔で、断つた。

そして、俺もまた。



「ハア？ 幻晶騎士お？ 農業お？ そんな小さいものにこだわっているんですかあ？

それよりも果てに至ることの方がはるかに価値が高いでしょうにいいいい！」

「……へえ」

「……………そうですか」

「あつ」

言葉を交わすということは、互いの距離が近づくことを保証するものではない。

オラシオさんの望むところは「果て」、すなわち宇宙への到達。そのためならば全てを切り捨てて顧みない。ただそのためだけの機構を作り上げる。

そこには人型ロボットも、母なる大地にて農業をするという崇高な使命も無駄と断じられるわけで。

「はあ。仕方ないですねえ、見込み違いです。とりあえず、飛竜戦艦の修復だけはしっかりとやってくださいよお？」

「ええ、それは一切の手抜きなく」

「エルくんの笑顔が怖い」

アデイちゃんは徹頭徹尾エルくんを抱え込んだまま、しかしさつきからドン引き気味だ。

さもありなん、オラシオさんはさつきからエルくんといいでに俺の地雷を秒間16連打している。アデイちゃんとしては、そんなオラシオさんがこの場を生きて帰れるか心配になつてるのだろう。

……でも、どうして俺にも同じような目を向けてるんだらうね？

いやだなあ、俺はキレてないよ。俺をキレさせたら大したもんだ。

まあ、今日までパーヴェルツィークの人たちにお世話になつてるお礼代わりに料理持つてきて喜んでもらえてたけど、最近さすがに節約が必要になつてきたんで明日からはパーヴェルツィークの人たちへの差し入れ料理は持つてこないことにたつた今なつたけど。

「じゃあ、そういうコトで。やれやれ、2人揃つて見込み違いとは面倒ですねえ」

一方、話題の中心であるオラシオさんは既に俺たちへの興味を失つたらしい。拍子抜けとばかりの顔でべつたらべつたら足音を鳴らして去つて行く。

あとに残されたのはエルくんとアデイちゃんと俺。言葉はなく、それぞれの作業に戻り。

「……エルくんも先輩も、アレでいいの？」

「ええ、何一つ問題はありません。……幻晶騎士を舐めたことはいずれ必ず後悔してもらいますが」

「人は畑から離れては生きていけないってことを明日から思い知ってもらおうかなって」

「あの人、絶対敵に回しちゃいけない人を怒らせたことに気付いてないんだろうな」
俺とエルくんの心は珍しく一つとなった。

おそらく、この世界の人類は俺たちの生きている間くらいには宇宙に到達することになるだろう。

そのときオラシオさんが狂喜乱舞しているか悔しさで憤死するかは、まだわからないけれど。



後の時代における面倒の種は確実に蒔かれたものの、飛竜戦艦の修復は順調に進んだ。

廃材利用も込みで黄金の鬘号との接続機構が完成し、エルくんの側で制御術式もほぼ

完成。残りは実際に連結させてテストしながらの調整という段階だ。

その旨は既に。パーヴェルツィークにも通達されているから、詳細の説明と実地での調整を飛竜戦艦側の艦橋でやることになっている。

「エチエバルリア卿、修復の状況は？」

「万全でございます。とはいえ少々変わった部分もありますので、ご説明させていただきますければと」

「うむ。では、グスタフ」

「はっ、飛竜戦艦起動準備！」

フリーデグント王女殿下の言葉を受けて、艦橋の人たち、そしておそらく飛竜戦艦内各所で慌ただしくも淀みなく動き出す。なかなかの練度を感じる、素晴らしい乗組員たちだ。

このまま、生まれ変わった飛竜戦艦への慣れは必要ながらすぐにも飛び立ち、再び空に翼を翻す。

……と、思っていたのだろうか。

艦橋が驚愕と不安のざわめきに満ちた。

「駄目です！ 魔力^エ転換炉出力上がらず！ その他各機能も応答なし！ 飛竜戦艦、浮

上できません！」

「な、なにい!？」

今回の改修はあくまで失われた機能を補うためのもの。起動手順、操作方法などは変わらないようにすると決められていて、しかし動かないのならば、それは。

「どういうことだ! 直すどころか壊れているではないか!!」

「ところで、貴国との取り決めは『飛竜戦艦の操縦権の分割』でしたな?」

「話を聞けえ!!」

こちらの仕事に間違いがあつたと考えるのはわからないでもない話。

だが、エルくんに限ってそんなことはあり得ない。

もつと厄介なことが起きるといふことを、念頭に置いておくべきだった。

グスタフさんの怒りをさらりと流し、笑顔のエルくんは船長席に座して「あー、またなんかやかしたんだなこいつ……」みたいな目をエルくんに向けていたフリーデグント王女の前へと進み出る。

恭しく跪き、懐から取り出したのは一振りの短剣。

素材は銀。彫刻の施された、実用には向かない儀礼用のもの。

特に理由もなく刀身から柄にかけて竜が絡みついていてデザインに俺としてはとて

も見覚えがあるのだが、まあエルくんの趣味なら仕方ないよね！ ああいうの作つてくれと言われたパーヴェルツィークの鍛冶師さんは災難だったろう。1日かからず作る辺りさすがのドワーフだったけども。

「こちら、我が国の幻晶騎士には標準装備されております機能、パターンアイデンティファイカー紋章式認証機構の鍵でございます。これをそちらの溝に差し込むことで初めて魔導演算機が動きます」

「……なるほど、鍵か」

得心がいった、という王女殿下の表情に、グスタフさんはひとまず叫ぶのをやめた。

鍵で動くようにした、それなら問題もなからう、と。

「ええ。これと同じものが黄金の鬘号にもありまして、両方の鍵が差し込まれている状態であればあらゆる機能が動きません」

「……ッ！ 『飛竜戦艦の操縦権の分割』。そういう意味か……！」

閉じた口があんぐり開き、しかし声も出ないままになるまで、そう時間はかからなかったけど。

一蓮托生の運命共同体。これが一致団結の二人三脚になるか、互いの喉元に刃を突きつけ合ったせめぎ合いになるかは、乗り込む人間たちの心次第と言われて、安心できるほどの信頼関係があるか、否か。

銀剣に侍る竜の目が問いかける難題に、艦橋に揃ったパーヴェルツィークの人たちの

表情が曇る。

「これでしつかり半分こですわね！」

その中心で、ただ一人。

エルくんだけはいいい頓智を決めましたとでも言いたげに笑っていたのだけでも。



青い空には白い雲。

高空を埋め尽くす雲海は穏やかで、そこにぼつりと一つの黒い点が姿を見せても小さなこととばかりにあるがまま。

「ぬおおおおおお!? エチエバルリア卿! 少しは抑えんか!」

「王女殿下、しつかりお掴まりくださいいいいい!」

ただし、黒い点こと飛竜戦艦にしてみると、機体性能の限界近い加速と急上昇からの水平飛行への移行をしたので中の人たちはしつちやかめつちやかなのですが。

ふわつと内臓が持ち上がるような気持ちの悪い浮遊感は、上昇加速の慣性が消えたことによる一瞬の無重力。

飛竜戦艦の中にいると忘れそうになるがここは空の上なのだ、地に足のつかない人

跡未踏の領域なのだと思ひ知らせる現象の一つを味わい、飛竜戦艦の艦内いたるところで身も世もない悲鳴が上がる。

「フフフフフフフフフフン♪」

「まわせー」

なお、その下手人たるエルくんはツーカキに海賊っぽい鼻歌など歌いながら操舵輪をぶん回しているのだが。

思わず合いの手入れちゃったよもー。

エルくんの操縦は、見た目は操舵輪を回しているだけだが体を固定するために打ち込んだワイヤーからの直接制御もしていると思われる。

たった一人の操縦で、飛竜戦艦が急上昇と急降下、加速に減速、ついでにバレルロールや宙返りもしてのけたし。

刻一刻と床が傾き天地がひっくり返り、固定していなかった荷物があつたのかどんがらがっしやんとあちこちから聞こえてくる艦橋の中はしっちゃかめっちゃか阿鼻叫喚の様相を呈していた。

「……………ふう。満足しました。操縦感覚も大体わかりましたし、お返ししますね」

「きつ、貴様……………」

なお、こうまで飛竜戦艦のことを掌握したということは、エルくんは以後どこからで

も直接制御術式に潜り込んで同じ操縦をできるといふ意味でもあるのだが、多分パーヴェルツィークの人たちは気付いていないだろう。知らないって幸せだよね。

「エムリス船長ツ！ 今の操縦はなんだ！ 修理が終わって早々に飛竜戦艦を壊すつもりか!？」

『質問の意味がわからんな。エルネステイならば性能を把握したうえで出来る範囲の無茶しかしない。緊急事態となったとき、可能なことは全てするのは当然だろう。そのための確認に過ぎんぞ』

「……貴国にとって、あの操縦は十分耐えうる想定範囲内だった、と？」

『んあー………想定内、とは言えんな。エルネステイの行動が想像の範疇に収まった試しはない。が、どうということはあるまい。俺とて騎操士の端くれであるしな。………というか、そちらにいるアグリを見て見ろ。どうせピンピンしているだろう』

伝声管を通してエムリス殿下とやりとりしていたグスタフさんが、「え、マジかよお前」みたいな目で俺を見てくる。

やめてっ！ そんな顔しないで！ 俺はただの農民ですから！ ただ、ちよつとエルクンのやり方に巻き込まれ慣れてるだけで！

ちなみに、話題の中心であるエルくんは声をかけられないのをいいことに、なんか遊んでる。

さすがに音は出さないけど口笛吹いてるような顔で右へ、左へ操舵輪をぐるんぐるん回しながらつま先でとんとんとリズムを取っている。見ているだけで世界が崩壊しそうなヤバさを感じるからやめて！

「ともあれ、これにて飛竜戦艦は完全復活です。……では、参りましょうか。あの光の柱の元へ」

機動が落ち着いた飛竜戦艦の近くへパーヴェルツィークの飛空船と竜闘騎が寄ってくるのを確認し、エルくんがいよいよ本題に入った。

飛竜戦艦は、エルくんが玩具にするために復活したわけでは決してない。ない。はずだ。

本来の目的は、浮遊大陸上の人類戦力を結集してあの光の柱について調査・対応すること。

鬼が出るか蛇が出るか、魔王が出るか師団級魔獣が出るか。
穏やかに終わる事だけはないだろう。

この青い空も、しばらく見納めになるかもしれない。
そう思うのも仕方ないくらいの胸騒ぎは、既に渦巻いていた。



「あーもう！　なんで俺がハルピユイアの村への伝令係なのかなー！」

「私との使命はイヤだというのか!？」

「そういうんじゃないくて！　……まあ、飛竜戦艦はしばらくエルのおもちやになるだろうから、そっちに連れていかれた先輩よりはマシか」

「そうなのか？　センパイ、というあの地の趾はエルネステイに負けず劣らずだと思うが」

「それはある。でも先輩も大変なんだぞ？　なにせエルに入られてるからなあ

……。あと、本隊との合流ももうすぐだ。ヘルヴィさんに見つかったら、どうなるか

……」

「……エルネステイとともに小さい飛竜や船を下したあの男を上回る者までいるのか、お前たちの巢には!？」

純エーテル代謝生物〈宇宙怪獣〉……ってコト!?

「紅隼騎士団、出撃準備！ トウエディアーネを起動しろ！」

「上部甲板準備よし！ 順次出撃して空中で隊列を整える！」

飛翼母艦「イズモ」。

エルネスティの要請を受け、フレメヴィーラ王国から浮遊大陸までやって来た銀鳳騎士団の母艦がいま、ここまでの旅路の中で最大の喧騒に揺れていた。

出撃直前のあわただしさは全乗員に共通で、上部甲板へと次々上げられていったトウエディアーネがマグウスジェットスラスターの爆音を響かせ出撃していく。

浮遊大陸を覆う嵐が消え去り、藍鷹騎士団と合流を果たした銀鳳騎士団本隊。

誘導に従って当座の拠点というところまであと少しというところで目撃されたのが、この地に住まう人に近い種族、ハルピユイアの大群だった。

ただならぬその雰囲気は遠くからでも戦闘中だとわかるもので、ひとまず事態の収束、味方陣営の救援に向かわなければならぬ。

……ということをお実として、ここまでがんばって大人しくしていたディートリヒが暴れたがった。

彼の率いる紅隼騎士団もまた、定期的に血の気を発散しなければ体がはちきれて爆発四散するタイプの猛者揃い。どう考えても穏便に収まりそうな事態でもないしちようどいいか、というのはエドガー、ヘルヴィ、ダーヴィドたちエルネステイを除く銀鳳騎士団首脳陣にも共通の思考でもある。

その結論が下った結果、晴れて出撃の許可が下りて慌ただしい出撃の時間と相成った。

作戦目的はイズモの護衛、状況の確認、味方陣営のハルピユアの救援。

課題は多い、ように見えてその実やることは「やりすぎない程度に殴る」に尽きる。実に紅隼騎士団向きの任務である。

少なくとも、ディートリヒはそう思うことにした。

そのくらいの胆力が無ければ銀鳳騎士団の中でやっていけないし、もはや懐かしきすら覚える銀鳳騎士団第二中隊時代からの部下たちを率いていけないのだから仕方ないのだ。

それに、今日はお楽しみもある。

『『エスクワイア・ファルコン』、出ます！』

すなわち、新兵器。

エルネステイ大興奮請け合いのシチュエーション、というやつだった。

航行中のイズモの上部甲板にて、空中戦が予想される状況だというのにティートリヒは近接戦仕様機であるグウエラリンデに搭乗している。

強く風が吹きつけてくるこの場、マギウスジェットスラストを搭載しているとはいえ用途が限定的であるグウエラリンデの戦場にはふさわしくない……というのが、これまでの常識だ。

だがエルネステイは、銀鳳騎士団は、いつも常識を塗り替える。

その証明こそが、グウエラリンデのさらに後方のハッチから姿を現したもう1機の幻晶騎士である。

いや、正しくは「1機」とは言い難いだろう。

なにせそれは「上半身だけの幻晶騎士」なのだから。

「連結用補助腕展開！ サブアーム 魔導演算機制御権移譲！ マギウスエンジン 操作お願いします！」
「了解した。……よし、同期完了。強化魔法範囲変更。——合体完了だ」

エーテルリックレビテータ
源素浮揚器の技術を手に入れたエルネステイは、飛翔騎士を作り上げた。

さらにボキューズ大森海での出来事で開放型源素浮揚器を開発するに至り、新しい目標を見出した。

すなわち、「近接戦仕様機そのものを飛ばす」という課題だ。

しかも、イカルガのように膨大なマナ出力にものを言わせた強引かつ代替不能な方法ではなく、という条件付きで。

その検討の果てにたどり着いた結論が、このへエスクワイア〜だった。ベースとなっているのは、カササギ。

無人の幻晶騎士型追加装備とでもいうべきもので、独立したエーテルリアクタとエーテリックレビテータを持つ、飛行能力を持たせることを目的としている機体だ。

本体である幻晶騎士と合わせれば余裕のあるマナ出力によってマジウスジェットスラストも駆使すれば、人型にして飛翔騎士に比肩する飛行能力を有するに至っている。

無論、問題もある。

新技術もふんだんに搭載されていることにより幻晶騎士1機を新たに建造するのに近い製造コストがかかり、複雑化する操作系統、運用に必要とされる母艦の容積と整備人員が増える点。

それだけのコストをかけるにふさわしい戦果を期待できる騎士団長クラスにのみ配備されているのが現状で、今後の発展は未知数ながら幻晶騎士に一つの可能性を示すものであることに違いはない。

そんなエスクワイアを託される誇りを胸に、この装備を伴う初陣の空を前にディートリヒは胸を張る。

「さて、エルネステイたちの期待に応えるのでしょうか！」

なお、余談であるが。

エスクワイアの技術的な前身がカササギであるのは見た目からも明らかであるが、「幻晶騎士の背にドッキングして飛行をサポートする」という思想そのものはアグリのガルダウイングのころから想定されていたものであり、エスクワイアの持つ翼や接続機構にもその知見が生かされていて。

そのことを悟ったアデイが「エルくんと先輩の子供みたいでムカつく」と言ってアグリを射殺しそうな目で睨むという一幕もあつたりしたが割とどうでもいいので割愛とさせていただきます。

カタパルトから飛び出したグウエラリンデは、翼としての役割と形を与えられた可動式追加装甲で姿勢を安定させつつ加速する。

エスクワイアの感触は、飛翔騎士の操縦も心得があるデイトリヒとしても満足のいく反応が返ってきた。

そのことに口の端を上げるころには、既に紅隼騎士団の飛翔騎士が隊列を組んで並んでいる。準備は、できた。

「ようし、いくぞ君たち！ 今回の目的は状況の確認だ、いきなり殴りかかるなよ！
殴つていい相手を見極めてからだからな！」

「ヒヤツハー！」

ちやんとわかっているのかなあ、という不安を抱かないでもなかったが、根は悪い子たちじゃない大丈夫、と思うことにしながらマギウスジェットスラストの出力を上げ、さらに加速する。

隊列を崩すことなく追従してくる部下たちの腕前に対しての信頼と、精神に対する微妙な不安。騎士団長は辛いなあと思いつつも、戦いの空へと翔けていく。



「——なに、キッドが？ ……本当にいるじゃないか。何をしているんだ一体」

飛翔からしばらく、進行方向上に同じく村へ向かっているともしき魔獣、三頭セブルグリフオン魔獣が見える。そのこと自体に不思議はない。ハルピユイアはそういう魔獣と行動を共にする、と事前にノーラから聞かされていた。

だが、その背に乗っている二人分の人影のうちの一つが今はクシエペルカ王国に出張している銀鳳騎士団の同僚、アーキッド・オルターのものとなれば話は別だ。

とりあえず部下は遠巻きにさせつつ先行して合流することにした。

この場に揃っている飛翔騎士や新装備はキッドが銀鳳騎士団を離れてから完成したもののばかり。最悪の場合敵とみなされて攻撃される可能性があり、そうなたら紅隼騎士団は嬉々として反撃をしかねない。命のやり取りにはならないだろうが、その手前くらいまでならやらしかねないという信頼が辛い。

ともあれ近づいてみれば、驚愕の顔を浮かべている騎手は確かにキッドのものだった。

しかしもう一人、協力関係にあるというハルピユイアと思しき少女の目付きは険しい。初対面となる所属不明の幻晶騎士相手なのだからさもありなんだ。

となれば、ひとまず声をかけて安心させてやらなければならない。

「やはりキッドか！ 調子は良さそうだね？」

「ディーさん！ なんでグウエラリンデが飛んでるんだ！ 背中に先輩のガルダウイングみたいなのついてるけど！」

「気にするな、いつも通りエルネステイが張りきって、アグリがそれに付き合わされただけだ！」

「ああ、やっぱり」

「それで納得するのか!? あれだけの空を飛ぶ地の趾を!？」

キッドとの銀鳳騎士団会話に置いて行かれたハルピユアの反応に新鮮さを感じつつも、デイトトリヒは必要な情報を集めていく。旧交を温めるのは「仕事」を終えてから。それが銀鳳騎士団のスタイルなれば。

「で、キッド。我々は、誰を斬ればいい?」

「下にいる幻晶騎士と、共闘してるハルピユアはこっちの味方! 敵は……へ魔王」だ

魔王。

エルとアデイ、そしてアグリを助けに向かったボキューズ大森海で出くわした巨大な異形。

強大なあの力の持ち主と同じ名前に、デイトトリヒの勘が警戒しろと囁いてくる。

油断ならない強敵であったことはもちろんのこと、小鬼族ゴブリンと呼ばれていた大森伐遠征

軍の末裔を統率し、巨人族の傘下で虎視眈々と牙を研ぎ続けたその意思。

あの執念深さを考えれば、生き残り浮遊大陸まで流れ着いて再起のための力を蓄えていたという話であろうとも、ありえないと断じるには根性がありすぎた。

ともあれ、状況は大体わかった。少なくとも、紅隼騎士団にとっては十分だ。

「わかった。……紅隼騎士団! 最優先目標は小魔導師バルグスマカたち味方陣営との合流! それと並行して魔王の搜索と対応をするぞ! それから、1騎は本陣へ『敵は魔王軍』と伝えに行ってくれ」

「ディーさんが突撃しない……だと!? ていうか紅隼騎士団て!」

「キッド、君ね……。私も色々あつたんだよ。いまや、銀鳳騎士団の第二中隊を母体とした騎士団を預かる身なのさ、私も。だが、積もる話はあとにしよう!」

「くつ、めちやくちや気になるけど仕方ない……。! そういえば色々あつてエルたちにも聞けてなかつたしなあ!」

キッドが戸惑っているが、戦闘は刻一刻と激しさを増している気配がある。

とにかく状況の確認と制圧が必要だ。

エスクワイアの推力を上げ、飛翔騎士たちと陣形を組んで戦端の開かれているハルピュイアたちの巢上空へと飛び込んで行った。



「なるほどなあ……。そう来やがったかあ……」

『魔王』とはな。まさか人生の内でのその名を二度聞くとは思わなんだ」

「エルネスティの行くところだから想像の一つや二つ超えてくるとは思ってたけど、いきなりすごいのきたわね」

魔王と交戦中。

紅隼騎士団からさっそく届けられた情報を受けて、イズモに残っていたダーヴィドたち首脳陣3人はさっそく頭痛に苛まれた。

浮遊大陸と聞いて、エムリスがさっそく冒険に飛び込んだ。それはいい。人となりを知っていれば納得できる。

そんなエムリスと、ついでに連れていかれたキットを追ってクシエペルカ王国へ新婚旅行中だったエルネステイが探しに行った。これもいい。エルネステイならそのくらいのことはずる。

それらの報を受け、「あ、これ絶対銀鳳騎士団の全戦力が必要になるヤツだ」と察してイズモを持ち出した自身らの慧眼を誇らずにいられない。

とはいえ、どうしたものか。

確かに銀鳳騎士団全戦力の用意があり、必要とあらばどんな相手との交戦も辞さない覚悟はある。

だが、相手は魔王。かつてボキューズ大森海の奥地では誇張なく山のように巨大な魔獣を使役していた人物であれば、本格的に事を構えるのはエルネステイと合流してからの方がいいかもしれない。一番面白いところでのけ者にされた、とエルネステイが拗ねるかもしれないし。

「本格的な攻撃はお待ちください。私にいい考えがあります」

そんな悩める3人に救いの手を差し伸べたのは、意外なことにノーラだった。

藍鷹騎士団の団員として情報収集と工作に長けた逸材。銀鳳騎士団、ひいてはフレメヴィーラ王国にとつてなくてはならない人物ではあるが、こうして作戦行動の内容に口を出すのは珍しい。

「何か勝算……いや、情報があるのか?」

「はい。敵は大森海で小^{オペロン}王として振る舞っていたのに加え、浮遊大陸で魔王としてハルピユイアの一派を率いているという情報を得ております。——そこに、私たちが得た新たな情報を合わせると、交渉の余地が生まれるかもしれません」

中々に驚くべき話だ。

強大な力と私の強さ、そしてかつてエルネステイにボコボコにされたという因縁。それらを合わせて考えてなおこちらへの敵対行動を翻させられる可能性がある、と。

それはそれで空恐ろしく、「新たな情報」とやらはあんまり聞きたくないなああとダーヴィド、エドガー、ヘルヴィの3人は思わずにいられなかった。



「……小魔導師。あの、魔王の手に捕まっている彼女が協力者かい?」

「……ああ、ハルピユエアのエージロ。友である」
「なるほどな」

キッドと分かれ、戦場に突入した紅隼騎士団。

飛翔騎士を操る団員たちは混成獣相手に奮戦して味方陣営を守り、さらに奥へと踏み込んだデイトリヒはそこに敵の首魁と思しき異形、穢れの獣を思わせる魔獣を見つけた。

この状況に置いてそんなものが無関係にうろついているとは思えない。どうあれ斬るべきと判断したデイトリヒは、いまのグウエラリンデが持ち得る最大武装であるエンチャントソード
魔導 剣を迷わず抜いた。

直撃すれば相手が魔王といえど十分に倒しうるだろう威力を秘めるその剣と、やけに気の抜けた様子の際をつけたこと。勝利は十分にあり得た。

斬撃の直前、グウエラリンデの前に小魔導師が割り込まなければ。

グウエラリンデの機体そのものを振り回すようにして攻撃を中断し、小魔導師を回避。

体勢を立て直したところには既に魔王に気付かれ、不意打ちはできない状況になっていた。

敵に利するような小魔導師ではない。

そう思いながら改めて魔王の様子を窺えば、幻晶騎士と同等の巨大さを誇る魔獣の手のような部分に捕まれた人影が。

一見人のようでありつつも、装飾なのか生えているのか羽毛が体のところどころを覆っていることを考えれば、この地に住むというハルピユアという可能性は十分にあり得た。

そこまで分かれれば、状況の推測は難しくない。

魔王が、人質を取っている。

結果、今の状況に至る。

小魔導師を隣に、魔王と対峙するグウエラリンデ。

振るわれることこそなかったものの、かついだままの魔導剣は発動直前まで集めた大気の層に揺らめき、解放の時を待っている。

魔王は無造作に片手を突き出し、その気になればいつでもハルピユアの少女を握りつぶせると示している。

「しかし、『魔王』が随分小さくなったものだね？」

「ほお？ かつての魔王を知っているということはあの戦いの場にもいたか。やれやれ、エルネステイ君は忠犬を飼っているようだね」

「ははは、それは光栄だ。では、忠犬らしく敵を食いちぎろうか？」

「やってみたまえ。そのとき、この風切の雛がどうなっているかは保証しないがね」
手に力を入れたのだろう。うめき声をあげるハルピユアのエージロ。

ディートリヒも紅隼騎士団の団長として相応の腕前を誇り、乗騎グウエラリンデはマギウスジェットスラストを搭載しているし、いまはエスクワイアとも合体している。瞬発力は幻晶騎士の中でもかなりの上位に位置するが、それでも彼我の距離と人質の状況と魔王の持つ能力を考慮すると、いかなる手段を用いても人質の救出はできそうにない。

「私はいまこのお嬢さんと話し合いの最中なんだ。きみは邪魔だから、とつとと武器を下ろしてどこぞへ失せたまえ」

ならば。

「いや、それはできない」

魔導剣を構え、マギウスジェットスラストに火を入れながらグウエラリンデを踏ん張らせてその場にとどまる。

今この瞬間にも、最大速度、最大火力を叩き込む。そういう姿勢を、崩さない。

「なっ……!!」 話を聞いていなかったのか!! お前が下がないならこのハルピユア

を殺……」

「殺したならば、その次の瞬間お前を斬ろう」

必殺。

その意思が幻晶騎士の構えと剣からわずかににじみ出る。溢れはしない。殺意は全て、身の内に貯めてある。

小王は魔王の中でたじろいだ。交渉が、通じない。

いや、通じはするのだろうが、その土俵に乗ってくる気がないのだ。

一応、小王としてはこのハルピユイアを殺すつもりはあまりない。

要求を吞ませたうえで解放し、この村のハルピユイア諸共傘下に収めることこそ最良と思っている。

とはいえただのハツタリだと思われな程度程度の振る舞いはするつもりでいるが、目の前の相手はその時点でアウトと断じて斬りかかってくる気しかない。

小王のような脅しではなく、本気の本気で。そう思わせるだけのスゴみがある。

竜王体を失ったとはいえ、小王が操るのは魔王。幻晶騎士の1騎ごときに後れを取るなどありえない。

だが、互いに一步で間合いに入る距離で向かい合った状態では。

人質を突きつけた魔王と、剣を構えてマジウスジェットスラストもスタンバイ状態で

轟音を響かせているグウエラリンデ。

一手、後れを取ることは避けられない。

ハルピユイアを握りつぶすことはできるだろう。あの幻晶騎士を腐食の霧で溶かし潰すことも可能はずだ。

だが、あの覚悟。負けたとしても、死んだとしても、魔王を両断せしめるだろうという確信が、剣より鋭く小王の胸を貫いた。

「エージロ、と言ったか。突然こんなことになってしまつてすまない。もしもの時はすぐ、この命に代えても仇を討つので許してほしい」

「ううん、大丈夫。小魔導師、そうなつたら私の羽をホーガラに渡してあげて」

「……任せろ。百眼にかけて誓おう」

「待て待て待て！ なにを勝手に覚悟を決めているんだ君たちは!? ここは多少信用できなくとも人質の命を守るために武器を捨てるところだろう!? そりやあ君たちとは敵対したが、こうまで発言を疑われるようなことまでしてはいなかったと思うぞ!」

小王の強みは魔王の戦力。

腐食の霧を含めた絶大な魔力によつて繰り出す法撃は並みの幻晶騎士を寄せ付けない。

そして同時に小さからぬ弱みも持っている。

すなわち、「小王自身の命が何より優先される」という点だ。

最悪の場合自身が死んでも仲間が、エルネスティが目的を遂げるだろうと信じればその身を投げ出せるディートリヒに対し、小王はその選択肢を死んでも選べない。選べるとしたら、せめてエルネスティを血祭りにあげた後だ。

そこを補うのが人質だったはずなのだが、なんかハルピユアの死生観が思った以上にガンギマっていた。これはまずい。人質を抱えている限りあの狂犬に狙われる。むしろ不利になったまでであった。

おのれエルネスティ。半分八つ当たりの怒りが小王の胸で新たに燃える。

あらゆる手札を検討したうえで腹をくくったディートリヒに代わり、今度は小王が状況打開の策を全力で考えなければならぬ有様だった。

そのとき。

「……………む？　おい、なんだあの船は！　そちらの仲間だろう!？」

ジルバヴエール
「銀の鯨二世？　ノーラが来たということか……………?」

雲よりも濃く、素早く太陽を遮る影があった。

見上げればそこには飛空船。銀鳳騎士団の旗艦であるイズモと行動を共にしていたはずの、エルネスティが乗ってきた銀の鯨二世号だった。

いまあの船を動かしているのは、エルネスティの命を受けた藍鷹騎士団。つまり、

ノーラが何かをしに来たということだろうとディートリヒは悟る。

加勢の可能性は低い。ノーラは頼りになる仲間だが、正面切つての戦闘よりも隠密行動と奇襲を得意とする。

それがああも目立つ形で姿を見せた。しかも、銀の鯨二世号から飛び降りてきた幻晶甲冑も一騎いる。つまり、何か別の狙いがあるのだろう。

「お初にお目にかかります、魔王……あるいは小王。フレメヴィーラ王国藍鷹騎士団所属、ノーラ・フリユクバリと申します」

「ほお……つまり、またエルネステイ君のお仲間か。やれやれ、次から次へと」
その幻晶甲冑の腕は翼のような形をして、滑空が可能だった。

魔王の前、グウエラリンデとの中間にふわりと着地して恭しく名乗り、小王との交渉の場へ乗り込んできた形になる。

「我々はエルネステイ様よりこの地の情報を集めるよう仰せつかつております。……そうして得られた欠片の一つ、知らねばあなたは後悔することになると思ひ馳せ参じた次第です」

「……………かつてないほどに聞きたくないねえ」

エルネステイの部下という、それだけで絞め殺したくなるような身分。

知らねば後悔するという、この浮遊大陸に関する情報。

人質を取っていないながら激突寸前のド真ん中へ飛び降りてくるに足るといふ自信、確信。

この話を聞いたとき、きつと自分は死ぬほどイヤな思いをするだろう。

小王がノーラのうつつすらとした笑みを見て抱いた予知に近い直感は、ほどなく現実のものとなる宿命だった。



「……いやはや、想像以上ですね。エーテルの専門家としての意見を聞かせてもらえませんか、オラシオさん」

エルくんその言葉が、沈黙に満ちた飛竜戦艦の環境に久々に響いた声だった。

修理の成った飛竜戦艦でたどり着いた、光の柱の近く。

地から溢れ、天へと逆巻く虹色に揺らめくエーテル光。

飛空船の実用化からこつち、俄かに注目され研究も進みつつあるエーテルだが、こんな現象は見たことも聞いたこともない。

目で見てわかるくらい高濃度のエーテルが、飛竜戦艦を飲み込みそうな太さで地中から流れ出し続けているなんて。

「最悪、の一言ですnee。ああして流れ出しているのは見ての通りエーテルですし、すさまじい量で絶えず溢れ続けているとなると、これまでどれだけ出たのか、このあとどれだけ出続けるのかわかったものじゃありません。この大陸がレビテートフィールドで浮いていることはこれで証明されたわけですが……あと何時間ですかあ？」

「元の量次第ですね」

「ですよねえ」

「卿ら、我らにもわかるように話せ」

光の柱から目をそらさず、早口でまくし立てるオラシオさんと普通に返事するエルくん。

それに痺れをきらした王女殿下がいよいよ頭を押さえつつ問いかけるが、オラシオさんは今もブツブツとつぶやきながら思案中。エルくんも窓にへばりついて観察を続けている。あれー、これつてもしかして王女殿下が放置されるヤツ？

「失礼、私から。この浮遊大陸は今、エーテリックレビテータに穴が開いた飛空船と同じということですよ。このままあの光の柱からエーテルが流失し続けられ……」

「……落ちる。しかも、いつまで浮いていられるかわからない、と」

パーヴェルツィークの人たちが息を飲む。

「戦略物資ドバドバの新天地を飛竜戦艦でほぼほぼ支配したと思ったら、全部消えて

「なくなりそうです」と言われたのだからそうもなろう。

これまで費やした資源と費用、その他諸々のつり合いが取れるかどうか、かなり怪しいことになっていると見える。

「とりあえず、もう少し近づいてみましょう。できればエーテルの噴出を止めたいところですが、根元を見ないことには何とも言えませんね」

「案の定、ハルピユイアの言うところの『禁じの地』だな、ここは。イグナーツ、以前この地を調べたときは何があつた?」

「はっ、巨大なエーテライト塊です。地面から生えるようにして、見える部分だけでも飛竜戦艦を収められるような大きさでした」

「つまり、それが何らかの理由でなくなった、と。元々それだけのものが露出していたというのなら溶けて消えたわけでもないでしょう。意外と近くに落ちてるんじゃないですかねえ?」

「なるほど、じゃあそれをあの穴に突っ込んで蓋してみましようか!」

エルくんなら飛竜戦艦でそういうこともできそうな気がするけど今すぐやるのはやめてくれ、という王女殿下の意見もあり、まずは普通に調査することになった。

浮遊大陸の落下はこのままだと確実だが、いつになるかはわからず、防ぐ方法もわからない。とにかく調べなければ何一つ進まない、まだそういう状況だった。

そう、この現象は初めて遭遇するもので。

「……ん？　今、光の中に何か……!?」

人類は今日、未知に出会う。

「操縦権、いただきます！　全力で回避するので、皆さん掴まって！」

飛竜戦艦の艦橋において、持ち場がなく窓際で外の様子をうかがっていたのは、主にエルくとオラシオさんと俺の3人。

だから、異変に真っ先に気付いたのも行動に出たのもエルくんだった。

光の柱はエーテル特有の虹色に揺らめく不思議な見た目をしていたが、その一部に極端な色の偏りが起き、こちらへ向かって触手のように伸びてきた。

それがただの現象ではなく、なんらかの意思による行動に見えたのはフレメヴィーラ王国で普段から魔獣相手に切った張ったをしているからか。半ば本能的に敵の襲撃だと悟ったエルくんは舵に飛びつき、俺は窓際にしがみついて観察を続けた。

直後、飛竜戦艦はエルくんの発した命に従いマジウスジェットスラストを最大噴射。

半ば空中に浮いているだけだった状態からの急加速で、こちらへのびてくる得体のしれない触手を躲す。

ちなみに、艦橋にいた人たちと多分他の場所で働いていた人たちは軒並み慣性に襲われて壁にぶち当たったりとかしてたことだろう。

飛竜戦艦をかすめた光の触手。だがそれは一本ではなく、柱の中から次々と伸びてきた。

光の柱へ向かっている状態で加速せざるを得なかった飛竜戦艦にとつては死地に飛び込むのと同じだ。

「エルくん！ 右側の包囲が薄い！ ロールしつつ突っ込んで、速度このまま！」
「了解です！」

だから、せめて少しでも安全そうなルートを選び、伝える。
エルくんの操縦技量は飛竜戦艦に対しても十全に発揮される。

飛竜戦艦の機体をしならせながら的確に触手の少ないコースを取り、柱から漏れるエーテルの光を浴びつつ離脱コースを取る。

だが、触手は思った以上に良く伸びる。意外なほどの執念深さを発揮して、増えた触手の全てがさらに追ってきた。

「鬱陶しいですね……！ 少し痛い目を見なければわかりませんか！」

そして、そういう敵対者に対してエルくんはいつも怒涛熱烈な歓迎の反撃をするものだ。

飛竜戦艦各部に接続された法撃戦仕様機が遠隔で操作され、完全に同期した動きで後方に照準を向け、火炎魔法がぶちまけられる。

エーテルの虹色を塗り替える炎の赤。見ているだけで火傷しそうな業火は全て触手に直撃して。

「……だめだ、触手に効果なし。無傷だよ」

「そうなるんじゃないかとは思っていましたが、まさか本当に効かないとは……」

全くの無駄に終わったとわかる頃には、しかし飛竜戦艦は光の柱から十分な距離を取っていたようだ。

触手にもさすがに射程距離の限界があるらしく、追撃をやめて柱の中へと戻っていく。ひとまず、窮地は脱したと言っているらしいだろう。

「エチエバルリア卿！ ……いや、エチエバルリア卿は何を言っているからわからないからアグリ・ボトル、説明しろ！ ……なんだあれは?！」

「えっ、俺?! ……あー、いや、失礼しました。詳細は不明ですが、高濃度エーテルの中で生きる、我々とは体系の異なる生き物。魔獣の一種かと思われます」

「加えて言うならば、あの魔獣の存在と光の柱は無関係ではないでしょう」

「……つまり、あれを始末すればエーテルの噴出を止められるってことですかねえ?！」

そうなれば、次は分析と対策だ。

光の柱の中に住む、正体不明の魔獣。今回の一件と関係がない、とはどう考えても思えない。

しかも、あの魔獣の活動にエーテルが反応しているように見えた。ということは、なんらかの相互作用があると見て良い。

排除できるなら排除しておくに越したことがないだろう。

「王女殿下、そうとなれば遠距離から最大火力をもって挑むべきです。竜炎撃咆使用

の承認をお願いいたします」

「……乱発が効くものではないのだがな。通常の法撃が通じないのならば仕方ないか。

……許す、投射準備」

「はっ！ 竜炎撃咆、用意！」

そして話が決めれば、船員たちが定められた通りに動き始める。

「インシニライトフレイム竜炎撃咆モードへ移行！」

「マナライン、全段直結！」

「強化魔法、アイゼン、ロック！」

「あきと顎門内、正常加圧中！」

「制御魔法陣、回転開始！」

「ふふふふ……撃たれるのも楽しかったですが、この手で撃つというのもワクワクしますねえ」

「てーか、本当にこういう点呼しながら準備してたんだ」

「——撃てます！」

「了解しました。では僭越ながら……総員、対ショック対閃光防御！」

「なにを言っているのだエチエバルリア卿」

「そういう兵器じゃねえからこれ」

とまあエルくんが大変興奮し、無駄に銃杖で照準をつけつつぶつ放した飛竜戦艦最大の魔法攻撃は、回避などしようもない固定目標である光の柱へ向けて極大火炎となって浴びせられ。

「……ねえエルくん。あの光の柱って確か高濃度のエーテル、だよな？」

「……言われてみれば、そのはずですね。濃度や総量は不明ですが、あれだけの規模です。単純に考えて、噴出量が飛竜戦艦のエーテルリアクタ出力を下回ることはないでしょうね」

「つてことは、撃つても無駄ってことじゃないですかねえ!? 中止中止！ 投射中止ですよお！」

それすらなんの効果もないという現実を目の当たりにするに至り、根本的な認識を改めざるを得なかった。

俺たちが来た場所は、対峙している相手は、これまでの常識の一切が通じない未知の存在なのだ。



「……状況を報告してくれ、エチエバルリア卿、アグリ・ボトル」

「まとめましょう。あのエーテルの柱の中には、魔獣がいます。おそらく尋常ならざる高濃度エーテル環境下に生息する、既存の魔獣とは生命の根本からして異なるものです。柱の中にいるのが本体で、青白い糸のような分体あるいは一部を飛ばしてきて魔法術式の中に潜りこみ、制御を奪います。近づかれれば、触られれば終わりと思っただくべきかと」

「数も多いようですね。限りがないかもしれません。魔獣そのものは柱を離れられないようですが、魔王軍の混成獣の中に潜りこんだ場合はその限りでもないようです」

「どうやら、エーテルあるいはマナにこそ近い存在のようですねえ。私たちからすると、そもそも触れる手段すらないようなものですよお、あれは」

人類と、件のエーテル内に潜む魔獣との接触からわずか数分。恐ろしいほどの情報量が浴びせかけられた。

飛竜戦艦の艦橋の中は疲労と困惑で半ば機能不全に陥り、こんな状況でもめげないエルクくんがいなければどうなっていたことやら。

インシニレイトフレーム投射後、柱から飛び出てきた小型の魔獣に対して法撃以外の手段ということでエルクくんが格闘用竜脚を叩きつけてみたはいいが、ロクに効果がなく飛竜戦艦の中に潜りこまれる、などということをされた。

そういう性質を持つということを知るための代償は竜脚一本の喪失。命あるだけマシ、とも思っておくべきだろうか。

しかも、小型の魔獣は「潜り込む」。その対象は飛竜戦艦のみに限った話ではなく、生物に対しても有効らしい。

光の柱は魔王軍の元本拠地から生えている。ということとは、魔王軍の主戦力である混成獣の残りも近くにいるわけで、小型魔獣は混成獣の体に潜り込んで乗っ取り、ぴろぴろと青白い光の尾みたいにはみ出ながら向かってきた。ちよつと近づいただけなのに殺意高すぎない!?

これらの積み重なった情報から明らかになったのは「近づくだけでもアウト」という絶望的な事実であって、現状のままだとエーテルの噴出をどうにかする、という当初の

目的達成の目途が消えてなくなつた。

誰も口にはしなかつたが、「人間も乗っ取られる」という可能性も十分にある。戦う、どころか近づく時点でアウトになりかねない、尋常ならざる脅威だ。

「というわけで王女殿下、撤退を進言します!」

「貴様ツ!! 我らが飛竜戦艦を好き放題扱つた挙句、おめおめと逃げ帰れだ!!」

「……………言葉が足りんで、エチエバルリア卿。アグリ・ボトル、意味を説明してくれ」「アツハイ」

またしてもエルクンの言うことの通訳をしろ、みたいなことを言われたんですが。

驚く俺と、なに当たり前のことでびっくりしてるんだはよ喋れ、とばかりの目を向けてくるパーヴェルツイークのみなさん。

なんか、本格的にエルくと他の人との間に立つ通訳にされたような気がする! 銀鳳騎士団でも大体そんな感じの立ち位置なんだけど、なぜ他国の人たちとの間でも同じようなことに!?

「あー、えー。簡単に説明いたしますと、相性の問題です。あの魔獣に対して、現在我々が有する手段では有効な干渉ができません。鋭い鎌は麦を収穫するのには向いていますが、芋を掘るのには適さないのと同じことです」

「なるほど。たとえばよくわからぬが、飛竜戦艦があれば万事解決というわけではない

ことは理解した。……ならば、改めて対抗策を講じなければならぬか」

混成獣は例の魔物が生えているせいで法撃こそ効かないが、実体はある。

正面をふさぎようとしていた一団は黄金の鬘号のミッシレジャベリンという物理攻撃を叩きつけることで道を切り開くことができたが、事態は進んだようできて振り出しに戻っている。

いや、むしろなんとかして振り出しに戻らなければならぬ状況だ。このまま無限に追いかけられるようなことになれば、対策の検討も準備もしようがない。

しかし、こうなってくると少々分が悪い。飛竜戦艦のメインウェポンは、この巨体が有する莫大なマナ出力にものを言わせた法撃だ。

物理的な攻撃を、それも接触時に乗っ取られないほどの速度で繰り出す必要があるが、その手段に乏しい。竜闘騎を出せばできないことはないかもしれないが、小回りが利くとはいえ小型の飛竜戦艦のようなもの。分が悪いし、万が一乗っ取られたら下手な魔獣よりも脅威になる。

割と真剣に手詰まりじゃね？

「ぜつ、前方！ 巨大飛空船接近中！」

「なにっ!? 所属は！」

「あ、僕のところの『イズモ』ですね。本隊とようやく合流できました」
「貴様のかあ!」

騎士団長のグスタフさんがまたキレている。

この状況での増援は嬉しいところなのだが、目の前に突如現れた飛竜戦艦より少しだけ小さいくらいの飛空船までエルくんのものだと言われればそうもなろう。こうしてみると本当にデカイな、イズモ……。

「とはいえ、ちょうどいいですね。あちらには僕の機体もありますので、それであの魔獣をなんとかしましょう」

「待て、エチエバルリア卿の機体は魔王との戦いで吹き飛んだはずだろう」

「すみません、王女殿下。あれはあくまでうちの団長が故あって作った臨時の間に合わせで、もつと強い本当の専用機があるんですよ」

「アレより、強いのか……?」

おそらく、竜の王を相手に直接殴りかかったその場に居合わせた記憶がフラッシュバックしているのだろう。呆然とした表情で玉座にずぶずぶと埋もれていくフリーデグント王女の姿がいたわしい。

だが、これは好機だ。柱の中から出てきた魔獣の詳しい性質はいまだ不明のままだが、飛竜戦艦が有する装備では相性が悪いというのは既に思い知らされたこと。

その点、イズモと銀鳳騎士団本隊の戦力なら他の選択肢もいろいろと使えるようになる。あるいは、その中に有効打があるかもしれないし……なにより、イカルガがいる。

「さーて、発光信号で連絡もしましたし、さっそくイズモと連結しましょうか!」
「イズモがめっちゃ動揺してるっぽいからお手柔らかにしてあげてね?」

そして何より、エルくんがもう我慢の限界だ。イカルガと離れすぎて禁断症状とか出てるのかもしれない。

そのせいか、エルくんはなんと飛竜戦艦によるイズモへの直接着艦を選択。多分これが一番早いと思います。

サイズ的にはむしろ飛竜戦艦の方が大きいかもしれないんだけど、その程度のことを気にするようなエルくんではない。

流れるように進行方向と相対速度を合わせ、格闘用竜脚を器用に使ってイズモの船体を掴んだ。

艦橋内で本日何度目になるかわからない「マジかよこいつ……」みたいな目を向けられているが、エルくんはそれを気にする様子はない。

だが仕方ない。そうもなるだろう。

良い機体だったとはいえ、トイボックスにはマナ容量その他諸々制限も多かった。その全てから解き放たれるに等しい、愛機イカルガとの再会。興奮に上気するエルくんの

顔を見ているだけで、こっちもドキドキと心臓が高鳴ってくる。

……だって、どう考えてもこれまで以上にヤバいことになるからね!



飛竜戦艦の舵をパーヴェルツイークの人たちに任せ、飛竜戦艦を飛び出していったエルくん。

この状況で一人艦橋にいるのは怖いので、俺もしれつと飛竜戦艦を出て黄金の鬘号まで戻ってきた。

格納庫には、主に俺が運用しているグランレオン、ガルダウイング、カルデイヘッドの3機が出撃可能な状態で準備されている。さすが若旦那、準備がいい。

ここへ来るまでアデイちゃんの姿を見なかったところから察するに、やはりエルくんについていったということか。

ならばきつと、エルくんはさつそくマガツイカルガで出るだろう。文句なしの全力出撃だ。たしかに、それが必要な状況であることに異論はない。

「……ということは、アレも使うことになるのかもしれない」

目の前の3機を順番に眺めながら、これからのことを考える。

とりあえず、直近のところでは俺も出撃して様子見と可能ならば援護をするとして。その先。

何が起こるかわからないのなら、何か起きたときになんとかできそうな手段が必要になる。

そして俺は、俺の機体には、その「手段」の心当たりが、なくもない。

これまで一度として使うことのなかったその手段。使う必要が出たなら躊躇うつもりは全くないが、使うとなったらそれなりの覚悟を決める必要があるんだよなあ……。

「狙われないといいなあ………エルくんに」

そしてその覚悟、俺の場合は大体のケースにおいてエルくん関連で必要とされるんだから、困ったものだ。

可能な限り使わなくていい未来を願いつつ、でもうつすらと覚悟を決めて。

俺は、とりあえずグランレオンとガルダウィングの合体形態で行くべく機体に乗り込んだ。



「坊主のやつ、まさか今度は飛竜戦艦まで乗り回しやがるとはな……」

「いずれ飛竜戦艦のようなものを作るのではと思っていたが、まさか他国のものを乗り回すとは思わなかった」

「そして、そこにエルネステイがいるってことはアグリもいるってことね。……どうやら畑は作ってないようだから、今回はまあ許してあげるわ」

「……よかったな、アグリ。どうやら君は命拾いしたようだぞ」

頭上を飛竜戦艦に覆われてうつつすら薄暗くなったイズモの艦橋に揃った銀鳳騎士団首脳部4人は、思わず天井を見上げながら呟く。

エムリスが浮遊大陸に向けて飛び出したので捕まえに行く。出動の理由として知らされたその話だけで既にロクなことにならないだろうと分かっていたが、そもそもエルネステイと合流する前に意外な再会が多すぎた。

この様子だと、また何か新しいものを作り、新しいことをやらかしかねない。その確信がいつもの通り膨れ上がって行くのを胸中で感じるダーヴィドたちだった。

浮遊大陸って聞いたときから、最終的に落ちそうな気はしてました

「この世界の宇宙はエーテルの海です。……ということですよ、先輩！」

「エーテルはマナを生む源。それが高濃度どころか純粋なエーテルとしてあるってことは、無尽蔵に等しいエネルギーがある、ってことだね」

テーブルの上にはワインとつまみ。

グラスを満たした紅い酒を景気よく半分ほど流し込み、酒気を香らせながらエルくんが管を巻く。

夜、俺の部屋。

エルくんが酒を持ってくるといふことは、二人だけでしようもない話がしたい、という意味だ。

今日の話のネタは、この世界における宇宙について。

これまで確認されたいくつかの事象から、この世界の宇宙空間がエーテルに満ち満ちているという仮説はそれなりの説得力を有している。

そして、この星にはエーテルリアクタがあり、エーテルからマナというエネルギーを取り出す方法がある。

地上で使っているものをそのまま持ち込むことはできないだろうが、やりようによってはエネルギー問題という概念が消えてなくなる可能性があった。

『生命』とはすなわちエネルギーを使うということです。そして陸皇亀ベヘモスのような魔獣の例からもわかる通り、エーテルのエネルギーを前提とした生命もこの世界には存在し「す」

「……ということは、そもそも生命維持に必要な基礎代謝の段階から食料の摂取ではなくエーテルに依存している生物がいても不思議じゃない、か」

「はい。それはおそらく宇宙空間のような高濃度エーテル環境で生きる純エーテル代謝生物、〈宇宙怪獣〉とでも呼ぶべきでしょうか」

グラスを傾けることで返事の代わりにする。

純粋なエーテルの中で生まれ、息をするようにそのエネルギーを使う生命体。

霞を食べて生きる仙人でもあるまいに、存在したとすればどれだけ強大な力を振るうのか、アルコールの回った頭では想像するだに恐ろしく。

エルくんならば、幻晶騎士をもってそれに対することを一切躊躇わないだろう。

こうして、ロクに根拠もない半ば妄想でしかない話を肴にエルくと酒を飲む夜も何度目になるか。

時に笑い、時に肝が冷える話を酒のせいと受け流しながら、夜が更けていく。



いつか交わしたそんな妄想話。

半ば現実のものとして対峙する日が来るなんて、想像したくもなかったなあ。



「さあ、見せてもらいましようか、あなたたちの生態と力を！」

空の青に、イカルガの蒼が翔ける。

イズモを飛び出し、飛竜戦艦よりも前へ前へと敵に向かって怯みもせず。

シルファイアーネ・カササギ三世と合体したマガツイカルガニシキ形態で。

シルファイアーネに搭載されたエーテルリアクタは標準型ながら、そもそもイカルガの
 マナ出力が有り余っている上に、エルくんに加えてアデイちゃんが搭乗しているという

ことが強さの理由だ。

フレメヴィーラ王国の優秀な騎操士を上から2人乗せましたみたいなその構成は、理論上現行の幻晶騎士に可能な全てのことが可能と言つていい。

「轟炎の槍は……効きませんか。では、アデイー！」

「はい。『機動法撃端末』ちゃん、出番ですよー」

たとえば、ミッシレジャベリンのさらなる進化形とか。

翼のように見えていた可動式追加装甲の一部がざわめき、外れ、変形するとともにマギウスジェットスラストの炎を吐いて独自に飛ぶ。

イカルガ本体の操縦をエルくんが担い、手の空いたアデイちゃんによる同時複数制御で操られるそれは、銀線神経を引いて敵へと迫る。

向かう先は、エルくんがいままさに対峙している混成獣。体のところどころから光の尾となった例の魔獣が綻ぶように飛び出て法撃を無力化するそれに対して、すぐさま死角へ回り込み。

「行きなさい……インコム！」

「そういう名前じゃないでしょ、それ」

そして、こういう類の奴だと絶対言うだろうなと思つていた名前を叫びながら、側面、背面、上と下へと混成獣を取り囲んだ複数機のカササギから法撃が襲う。

混成獣に憑りついている魔獣はどういう理屈でか法撃をかき消すとはいえ、範囲と数に限度はあったらしい。

殺到する法撃のうちいくつかをかき消し、いくつかが着弾し、均衡を失ってしまえばあとはもう総崩れ。イカルガ本体から放たれた轟炎の槍に全身くまなく焼き尽くされ、消し炭になった混成獣だけが残り、そこから飛び出たエーテルの柱産の魔獣はほうほうの体で柱へ向かって逃げて行つた。

一応様子見がてらガルダウイングつきのグランレオンでついできた俺の出る幕はどうやらなさそうだ。

エルくんたちに敵が集中しないよう、こつちを狙ってきた混成獣を適度に引きつけつつ近づきすぎない程度に装備されている法撃をいくつか試してみたがロクに効く物はなく、いい感じに追いかけれつつあいらいつつエルくとアディちゃんが倒してもらうのを待つばかりだった。

そのせいかな、そこはかとなくシルフィアーネの中からアディちゃんがドヤ顔している気配を感じる。

エルくんと一緒に戦えてご満悦なんだねヤッター。そうやってご機嫌でいてくれると、俺に対する当たりがキツくならないからすごく助かるんだよね。

そう思いながら、グランレオンの足に食らいつこうとしてきた混成獣を避けるために高度を上げる。

機首を上げつつマジウスジェットスラストの推力も上昇。ついでに開放型源素浮揚器も少し出力を上げ。

「ん？」

「おや」

混成獣はもう役に立たないと仲間たちの様子から学習したのか、一足早く青白い魔獣が飛び出してきた。

このまま機体に辿り着かれると乗っ取られる危険がある。

そう悟った俺は開放型源素浮揚器の出力をさらに上げ、エルくんが急いで駆け付けてくれて。

青白い魔獣が妙な動きをした。

苦手な匂いを突きつけられた犬や猫のような反応。

蛇のように細長い体を突如折れんばかりに曲げ、慌てたように飛び去って行った。

「いまの反応は……？」

「ひとまず覚えておきましょう、先輩。ですがいまはあちらです。僕たちは光の柱に近

づいてみます」

「俺はこれ以上近づくとヤバそうだから、周りの様子を見ておくよ。……気を付けて」

「——先輩？」

「二人とも！ エルくんとアデイちゃんの二人とも気を付けてねって意味だから!!」

そういう動きの検証は後に回すとして、本命の光の柱をより詳しく調べる必要がある。

イカルガならマナ出力にも余裕がある上にアデイちゃんと二人乗りになっているから色々と策を講じる余地があるのに対し、俺の方はマナも手も足りない。

ならば無理せず後方から状況を把握するのに務めた方がいいだろう。

……それだけだよアデイちゃん！ いつの間にかカササギで俺を取り囲むのはやめてくれアデイちゃん！

なんとか説得が通じてカササギを引っ込めてくれたアデイちゃんがエルくと共に光の柱へ近づいていく。

そこそこ距離を置いているから詳しいことはわからないが、慎重に近づいて行きたいカルガはゆつくりと光の柱を横目に旋回しながら距離を詰めていく。

すると、変化が起きた。

柱を構成するエーテルの光は常に七色。一秒ごとに変化して違う様相を呈し続けて

いるそれが、うねり、巨大な触手となって伸びてきた。

それだけならば、さきほど飛竜戦艦で近づいたときにも起きたこと。

それだけで済んでくれたなら、よかったのだが。

「——エルくん！ 逃げろ!!」

『!?!』

柱が、裂けた。

元々光の糸を束ねてできた柱だった、とでもいうかのように柱がほどけ、どこまでも伸びていたはずの頂点が垂れてくる。

それは実った麦穂のようでもあり、同時にイカルガを捕らえる檻にも見える。

俺たちは勘違いしていた。

あれなる光の柱はエーテルの塊。そしてその中に魔獣が潜んでいるのだと。

だが実際は、あのエーテルこそ、魔獣そのものだったんだ。

垂れ下がるエーテルの触腕は枝や草の類とは違う、明確な意思を感じさせる動きでイカルガに迫る。しかも、図太く飛竜戦艦を締め上げられそうな規模。いかにイカルガとはいえ、幻晶騎士のスケールで絡みつかればタダでは済まない。

せめてこちらにも注意を引ければ、と法撃を放ってはみるが案の定接触寸前にかき消されてしまい見向きもされず。

——オオオオオオオオオオオオ!!

それは、きつと声ではなく意思の圧。

人の知る生命とは根本が異なるものの発する何か空を駆けぬけ、風になり。

「いや違う。本当に風が吹いて……る……る……風?」

あの魔獣が引き起こした魔法によって変わった空気と風を受け、俺の農民としての勘は「嵐が来る」と叫んだ。

普通、そんなことはあり得ない。風の魔法はデイトリヒのグウエラリンデに魔導兵装として採用されているが、効果範囲が狭くあまり使いやすくない。風の魔法ならではの利点はあるが、かなりの空気を圧縮する必要がある上に射程も短くなることは避けられず、有効な場面というのは限られることになる。

魔獣が使ったのは、ただそれだけの魔法のはずだ。

なのに、嵐が来ると俺は感じる。

幻晶騎士の中にいるから風の匂いも温度も感じられないが、翼に受ける風の強さと重さ、空の色と雲の流れは農民たる俺の目と感覚にはつきりと嵐の気配を伝えてくる。

……待てよ、「嵐」?

「ね、ねえエルくん。この風……どこまで吹くの?」

最初に気付いたのはアデイちゃんだった。

この大気操作の範囲がどこまでか。

幻晶騎士を使ってさえ、人間が行使できる魔法の効果範囲はせいぜいが見える範囲まで。

だが相手はエーテルそのものともいえるべき巨大な光の柱であれば、おそらく魔法現象に対する影響力は決闘級魔獣と虫の差と等しく。

急に、周囲が暗くなる。

上昇気流と気圧の低下、コックピットにも伝わる気がするうすら寒さと水気の迫る圧迫感。

きつと、ある程度離れた位置からは冗談のような早さで入道雲が伸びあがって行く様が見えていただろう。

ばら、ばたばた。

やたらと粒の大きい雨が降り始める。

ゴロゴロと不吉な轟きが頭上から聞こえ始めた。

「これは……明らかに僕たち人類の魔法とは桁が違いますね。『天候操作級魔法・ハザード・スベル颯風招来』コリンダインとでも呼びましようか」

「名前は置いといて！ 帰るよエルくん！ こうなつてくると、俺たちよりもむしろ飛

空船が危ない！」



ひどい目に会った。

おそらくそれが、国も生まれも関係なくこの場にいる人全てに共通する感想だったろう。

突如生じた、おそらく例の魔獣が引き起こしたと思しき大嵐。

万全の戦力を整え飛空船を揃えられるだけ揃えたのが仇となり、流され、ぶつかり、沈んだものもいくつもあった。

幸か不幸かイズモと飛竜戦艦は戻ってきたエルくんの直接制御によって強引に嵐の範囲を脱したが、他の飛空船は軒並み結構な損傷を負っている。

ひとまずの調査、というつもりだったのにとんでもないことになった。それに加えて。

「ンツン~~~~、いいザマだねえエルネスティくん！ 君が無様を晒している姿を見ると、最高にいい気分だよフウハハハハハハハアアア！」

「小王？ こんなところでなにしてるんです？」

なんか、小王まで現れた。

とはいえエルくんを前にしているというのに殺意はなく、命からがら逃げのびてきた事実にご満悦の様子で。

魔王もそこはかとなくテンション高そうに、中にいる小王の喜びを反映してかわきわきと動いている。何かいいことでもあったのかね？

……あるいは、テンション上げずには耐えられないくらいとんでもないことでも起きているのか。



調査の結果、得られた結論は。

状況がさっぱりわからない。これに尽きる。

となれば、必要なのは試行と検証、整理と推測だった。

元々浮遊大陸についての情報収集を頼まれていたノーラさんとの合流に加え、さらにはエドガーたちの幻晶騎士とついでに飛空船も使って魔獣の反応の確認。

得られた情報をまとめて、浮遊大陸の置かれている状況並びに魔獣の生態についてをある程度把握して。

「先輩、浮遊大陸は落ちます」

「だろうねえ」

「しかも、セツテルンド大陸に向かって」

「……………マジ？」

「マジです」

情報収集が一段落したエルくんから呼び出され、聞かされた話には正直眩暈がした。

浮遊大陸の落着自体は光の柱がエーテルだと予想された時点でほぼ確信できていたことだが、ノーラさんの調査によってそれ以上のこともわかったらしい。

大陸の形か重心の位置か、風のせいかはたまたエーテルの性質か。いずれにせよ、浮遊大陸のセツテルンド大陸落着という、およそ想像しうる中で最悪の未来へ向かっていくようだ。

この大陸は、言ってしまうえばその容積より一回りか二回り小さいくらいのエーテライトまたはそれに準じる高濃度エーテルの塊である可能性がそれなりに高い。

それが、飛空船の登場でエーテライトの需要激増中のセツテルンド大陸にやってくる。

大陸に近い海上へ落ちてくるならまだマシな方。もし、陸地まで届いてしまったら。

浮遊大陸は「大陸」というだけあって相当に広い。一つや二つの国を丸ごと押しつぶす、なんて災害になりかねない上に、その後の所有や領有をめぐる地獄の戦争が繰り広げられること、想像に難くない。

しかも、ハルピユイアと魔王とセツテルンド大陸西方には長らく絶滅状態だった魔獣もトツピングされている。挙句、光の柱の中にいるというか柱そのもののような気配もする魔獣までもがセットになって。

「地獄じゃん」

「控えめに言っただけです。なので、なんとかしましょう。僕はひとまずこの情報をもとに各国の協力を取り付けてきます。先輩はエドガーさんや親方たちと一緒にあの『魔法生物』の攻略法を見つけてください」

「それしかないか……。小王は浮遊大陸が落ちるのなんて願ひ下げだろうし、パーヴェルツィークもその話を聞いたなら今更撤退なんて言っただけだろうね」

「ええ、そちらはそれなりに勝算があります。魔法生物への対抗策については……」

「……とりあえず、エーテル関連のアプローチを試してみるよ。普通の魔法や接近戦は効かないことはわかってるし、さっき魔法生物が見せた反応も気になるし」

「僕も同じことを考えていました。ダーヴィド親方とエドガーさんに話を通してありますので、試作品の開発と試験をお願いします」

という感じに、話がサクサク進んでいく。悩んでいる暇もなければネタに走る余裕もない。

そのくらいに切羽詰まっていて、その度合いに比例してエルクンのやる気が沸き立っている。

きつとこれから待ち受けているのは世界の命運をかけた戦いで、大陸一つを相手取るには飛龍戦艦と魔王と銀鳳騎士団がいても足りるかどうか。

だからこそ、やる価値がある。何より雄弁にエルクンの目の輝きがそう語っていた。やれやれ、これは相当厳しいことになりそうだ。

ともあれ急がなければ。早足気味にまずはダーヴィド親方に相談しに行こうとして。

「——先輩」

「……エルくん？」

袖をつままれ、足を止める。

エルくんとはなんだかんだで長い付き合いだが、身長差は初めて会ったところから縮まる様子がない。二人とも立っていると、エルくんは俺を見上げるようになる。

そのせいだろうか。上目遣い気味なその目が少し、不安げに見えたのは。

「敵は未知の存在です。気を付けて、くださいね？」

「それはもちろん。畑もないところで死ねないよ」

「……ボキューズ大森海でのこと、忘れたとは言わせませんよ」

「うっ」

その直感は、あながち間違っていなかったらしい。

そういうえばエルくん、大森海で穢れの獣相手に俺が撃墜されたことを大分気にしてたしなあ。再会してしばらくはなかなか離れてくれなかったし、そのせいでアデイちゃんに射殺すような目で見られたし。

……あれ、もしかして新婚旅行についてこいって言われたのもそのせい？ 目を離すと何するかわからないとか思われてる？

くそう、ただでさえヘルヴィの目が厳しいってのに！

「忘れてはいないよ。でもやることはやらなきゃならない。……エルくんだって、そうだろう？」

「……」

俺は現地になかったから噂で聞いただけである陸皇亀ベヘモスにほぼ単騎でケンカ売った話に始まり、飛竜戦艦相手の戦争やボキューズ大森海での魔王戦。死線を笑って踏み越えることに定評のあるエルくんだけに、あまり強く言えないという自覚はあるようだ。「なるようになるさ。どう転ぶかはわからないけど、やらなきゃいけないことは決まってる。……だろう？」

「……はい！」

そう、覚悟はもう決まっている。俺もエルくんも、こんなところで終わっていられない。

エルくんはもつともつと幻晶騎士を作りたいたろうし、俺だってまだまだ畑仕事をやり足りない。

浮遊大陸がセツテルンド大陸に到着すれば、潰れる国と土地と畑がどれだけになるか、想像の及ばない規模になるだろう。

なら、事態を解決する以外に、俺たちの取れる道など初めからありはしないんだ。

「というわけで、親方。とりあえず対魔法生物兵器『エーテリックアームズ源素化兵装』の試作品を作るんで協力よろしく。まずは本当にエーテルに効果があるかを調べるためのものだから、とりあえず形になってれば大丈夫なんでさくつと作っちゃおう」

「さくつとなんて、そう簡単に作れるはずが……あるんだよなあ、お前と銀色坊主が本気出したら。俺らドワーフならすぐに作れるレベルの設計図付きで話を持ってきやがる。制御術式はもうできてるし、仮とはいえ構造がおつそろしくシンプルじゃねえか」

「エルくん印だからねえ。……大丈夫だよ、親方。どうせこの試作品の結果をもとに信じられないくらいスゴい兵装作ることになるだろうから」

「間違いないくそうなる、つてえ確信があるのが嫌で仕方ねえな……」

銀鳳騎士団鍛冶師隊にお通夜じみた空気が一瞬で満ちる。

たぶん、そのうち死ぬほど難しくてめんどくさい仕事で徹夜がデフォになるんだろーな、という未来がくつきり見える気がした。過去の経験と浮遊大陸で起きている事態からすると、これは確信を通り越して予知に近い。

「と、とりあえず作るだけ作って、実際に試すのはデイトリヒ辺りにお願いしようか！ たぶん、紅隼騎士団もそろそろ暴れたくて仕方なくなってくる頃だろうし！」

「そうだな。一人でも多く巻き込もう」

銀鳳騎士団は大変だ。

立ち向かうのはあらゆる難題と、人知を超えた強敵。

そしてなにより団長がそういう全てと比べても特にヤバいというこの事実。時々意識しては気が遠くなるんだよね！



「あとついでに、せっかくだからグランレオンにも似たような機能を付けておくんでよろしく。こっちは制御術式書き換えるだけで済むと思うから俺がやっておくよ。」

……ほんと、マジそれだけっすから。変な農業機能をつけようとかそういうんじゃないんで、睨むのやめてくださいよヘルヴィさん」

「ふーん。なら安心しなさい。私は見るだけだから気にせず作業していいのよ？
ほら。さあ。早く」

「……エドガー！ どうしてこんなになるまでヘルヴィのことを放っておいたんだー！
「放っておいたわけではないのだが。まあ、アレだ。ヘルヴィもしばらくアグリと話を
できずに寂しかったらしい。付き合っやってくれ」

「この男は……。今日ばかりは同情するぞ、アグリ。手の施しようがないので助けはし
ないがね」

「ディートリヒ、お前もか……。ヘルヴィがさつきからこれ見よがしに見たこともな
い関節技の素振りみたいな動きしてて怖いんだけど!？」

「私の言うことを復唱できたらやめてあげるわ。『魔法生物が嵐を起こしたのを見て、天
気を好きに操れたら農業に便利だななんて全く考えていません』。さんはい」

「……………」

「言ってみなさいよオラア!!」

「ギャー！ 言うから！ 言うから許して！ 思わなかったからそんなこと！ ……」

856 浮遊大陸って聞いたときから、最終的に落ちそうな気はしてました

ち
よ
つ
と
し
か
!」

グランレオンで使ったら、絶対エルくんに目を付けられ
そんな技がある

カーンカーンカーン

「おう、できたぜ」

「さすが親方、仕事が早い」

そんな感じで、サクツと試作品が完成した。

第一弾として作ったのは、スプレー状にエーテルを吹き付ける魔導兵装と、棒の先にエーテライトを括り付けた槍という原始的極まりないもの。

とはいえ、これでもエーテルによる魔法生物への干渉についての可能性は十分に確認できるだろう。

さつそくこれをディートリヒとついでにパーヴェルツィークの人たちに試してもらったところ、小さい方の魔法生物に対して十分な効果が確認された。

なんか、臭いもの突きつけられた犬みたいにビビったり、スパッと切れたりしたらしい。

だがその事実が同時に示すのは、本体である光の柱をなんとかするためにはその規模

相応のエネルギー量が必要になるということだった。

「でもそれだけのエネルギー、集めるとエーテリックレビテータになってしまおうですよ」
「その解決策として私に意見を聞きたいと？ そんなものは専門外なだけどねえ」

その辺の事情をまとめて報告したら、その足でオラシオさんと小王の集まる技術的首脳会議へ親方と一緒に引きずり込まれたんだよなあ！

「あの魔法生物本体を打倒するのにどれだけのエネルギー量が必要かはわかりませんが、とりあえず量的な確保の用途は立っています。飛竜戦艦を高高度まで上げることができれば、そこには無尽蔵に近いエネルギーが満ちているわけですしねえ」

「それならほら、アレだ。元々あったエーテライトの塊を見つけて、それをぶつけられればいいんじゃないかい？」

「目下捜索中ですが、どうやら穴が拡大しているようです。砕けて多少なりと小さくなったエーテライト塊だけでは足りないでしょう。源素化兵装も必須ですね」

滅茶苦茶イライラした様子の小王と、滅茶苦茶めんどくさそうなオラシオさん。

よくよく考えてみると、かつてエルくんが一番の自信作を叩き潰された二人が揃って同じ目的のために頭をひねってるんだよね。人間関係がごちゃごちゃしとる。

なお、この状況を作ったのは、昨日の敵は今日の友好的なエルくんの人望と人徳……ではなく、理と利で人を会議の椅子に縛り付けるエルくんの話術と利害調整力の賜物だ。

少しでも歯車が食い違えばすぐにも喉笛に噛みついてきそうな人たちを、そのまま協力させる綱渡り感がめちやくちや怖い。

オラシオさんと小王は真剣に考えているようだが、エルくんが視界に入る度に「詐欺じゃねえかこいつ」みたいな色が目に宿る辺り、内心複雑なんだろうなーと思う。

「エーテル量の確保はまあなんとかなります。ただ、それを十分な威力で叩きつけようとするとなーエーテリックレビテータ化してしまいますから、下方の魔法生物にぶつけようがない、という問題がありますね……」

「飛竜戦艦の無事についてはこの際もういいんですよ。ですがねえ、そこまでするのに有効な手段がないなんてのはさすがに受け入れられませんよお？」

そして、会議は行き詰まる。

高高度まで飛竜戦艦を持ち上げて、そこにある大量のエーテルを取り込む。そうすると、今度は高出力のエーテリックレビテータが発生して魔法生物の所まで降りられなくなるという矛盾がある。

手段の方向性は見えているものの、あと一歩何か足りない気がして会議の参加者が軒並み沈黙の中で思考に耽り。

「……そういえば、エーテライトは浮かかないね？」

答えは、小王のふと思いついたとばかりの言葉からもたらされた。

「——いま、なんと?」

「君たちがエーテライトと呼ぶあの石は、ようするにエーテルが固まったものなのだろう? その割に、浮かばないじゃあないか」

エルくんの髪の毛がふわりと逆立った、ような気がした。

口角は吊り上がり、目は見開かれ、体はぶるぶると小刻みに震えだす。

何が起こったんだ、とビビり半分のオラシオさんと小王。

一方俺とダーヴィド親方は顔を見合わせ、肩をすくめる。

ああなったエルくんは、もう止まらない。

「先輩! 源素化兵装の状況の説明を!」

「エーテルを吹き付けるスプレーも、エーテライトを穂先に使った槍も魔法生物について想定通りの効果を発揮したね。ただエーテライトは脆いから、槍は1、2度切りつけただけですぐにエーテライトそのものが崩壊したという報告が多数上がってる。……魔法生物本体をどうにかするなら、相当の質量と速度が不可欠だね」

突然立ち上がり、部屋を歩き回りながら俺の報告を聞くエルくん。

話はすっかり耳に入っているだろうが、それと同時にすさまじい速度で思考が回転し

ているのが見るだけでもわかる。

「おそらく、巨大エーテライト塊を発見できたとしてもそれだけでは威力が足りないでしょう。それを解消するためにも、そしてエーテリックレビテータの発生を防ぐためにもエーテルの結晶化は不可欠！ 今回の作戦、勝利の鍵は『エーテライトの人工生成』ですぬ!!」

そして、答えは出た。

「いや、ちよつと待つてくださいいよお!? そんなことをしたら、飛空船のエーテライト需要が……!」

「オラシオさん! もしもエーテライトが人工的に生成できるとしたら! 飛空船の建造数や航行力を制限する枷の一つがなくなると思いませんか!」

「それは……! ……そうですね? 言う通りじゃあないですか。………いいですねえ! ぜひやっちゃってくださいいよお!」

オラシオさん、さつそく陥落。

夢見る瞳で天井を見上げる脳内では、エーテライト供給量という制限から解き放たれた飛空船のさらなる性能向上策に羽ばたいている模様。

「小王! 西方人がこの地を狙う理由がエーテライトにあることはおわかりですね?」

「作り出すことができるようになれば、わざわざ空を越えて掘りに来る必要がなくなる、

と?」

「コストの概念というのは重要ですね」

それはそれで望ましいけど、エルくんの言う通りになるのは癪だなあ、という顔の小
王。

だが自分の領地が踏み荒らされなくなるという可能性は魅力的で、だからこそイヤそ
うにするだけで否定の言葉は挟まなかった。

「いいですねえ! 早速かかりましょうか!」

「ええ、ではまずエーテルを結晶化させる条件に付いて……」

そして、状況は動き始める。

会議室の中でも、「大陸の中」でも。

——ズズン!!

「振動!?!」

「このタイミングで、ということとは……!」

激震、と言つていい揺れが地表に係留されている飛竜戦艦を襲う。

いまこの浮遊大陸でこんな異常事態を引き起こす原因など、一つしか心当たりがな

い。

会議室に詰めていた俺たちは揃って外に飛び出し、目を向けるのは大陸中枢の方角、光の柱。

そこには確かに光の柱があった。

だが、俄かに湧き上がる黒雲に覆われ、枝分かれして垂れ下がる触腕へと変化した姿で、だが。

「……どうやらタイムリミットみたいだね、エルくん」

「はい。作戦の準備をこれまで以上に急がないと、取り返しのつかないことになりそうです」

雲間に光る雷鳴からゴロゴロという音が聞こえるまで数秒。そのころには明らかに雲の量が増し、光の柱を覆い隠していく。

明らかに、魔法生物による天候操作級魔法が発動している。

これまででも、反応を調べるために敢えてちよつかいを出して嵐を引き起こさせたりはしたものの、今日はその予定がなかったし、明らかにこれまでの嵐と様子が違う。

空気が湿り、雨と土が風に匂う。

ちよつとやそつとじゃない嵐が、浮遊大陸の運命諸共に巻き起ころうとしていた。



幸か不幸か、方針は決まった。決まってしまった。

となればあとはもう走るだけ。止まる、という選択肢はエルくんの中にない。

そのために、いくつかのことが平行して進められた。

まず、飛竜戦艦の決戦仕様改造。親方たち鍛冶師隊総出に加え、パーヴェルツィークの鍛冶師も巻き込んだの大突貫。昼夜を徹しての改造という、銀鳳騎士団では時々ある無茶に巻き込まれたパーヴェルツィークの人たちはご愁傷様と言う他ない。

続いて、エムリス殿下やフリーデグント王女たち責任者組への説明と説得。こちらはエルくんが直々に、ババッと作り上げたプレゼン資料を元にする予定だ。俺も資料作りには協力したけど、見れば見るほど頭が痛くなるようなことが書いてあるので王女殿下辺りは吐くかもしれない。

……まあ、俺たちはこれからそこに書かれたことを実行することになるわけだからなお辛いんだけども。

さらに、巨大エーテライト塊の回収。

元々光の柱のところにあつたものを、ノーラさんたち藍鷹騎士団が見つけてきてくれたらしい。

実は思ったほど遠くに飛ばされたわけではなく、折れて転がって少し下ったところに横たわっていたのだという。それはつまり、生物にとつて危険なほどエーテル濃度が高く、魔法生物の迎撃に晒される可能性のある場所ということ。最終的に飛竜戦艦へ搭載するのだが、その前に幻晶騎士で引きずってこない回収できない。

そして最後に、これが一番の大問題であるエーテライト生成方法の確立。

今回の作戦に絶対必要であり、エーテライトからエーテルへの自然な変化は確認できているもののその逆はどうやればいいのか、そもそも可能なのかという理論的な裏付けが一切ない。

これはもう、エルくんの魔法能力と創意工夫に頼るしかない。イカルガなら小回りも効くし高高度のエーテル濃度が高い場所での活動も可能。そこでなんとかかエーテライト生成できるようになってくれることが、今回の作戦最大の鍵だ。

これらを、全て同時並行で行う。

魔法生物の孵化か羽化が始まったと思いき荒ぶる嵐の降る中で。

「親方はさっそく工房を掌握してくれています。巨大エーテライト塊はデイトリヒさんの紅隼騎士団が回収役を名乗り出てくれました。……なので先輩は、各セクションのフォローと不測の事態が発生した時の対応をお願いします」

「何事もなく準備が進む……とは思えないよねえ。俺が対応できる範囲だといいいんだけ

「ど」

上司陣への説得は、割とあっさり終わったらしい。

エムリス殿下は半ばエルくんの意思に逆らえない立場だからまあいいとして、フリーデグント王女が全面的な協力を確約してくれた、というのは少し驚くべき話だった。

それはすなわち、状況を正しく把握できているということなのだろう。

止まない雨と風。異様な姿を晒す光の柱。そして、とんでもない提案を嬉々として持ち出してくるエルくん。

きつとその会議の場において、アドバイザーとして参加していたであろうオラシオさんが叫び、小王が発狂していたに違いない。目に見えるようだ。

だがそうなれば、もうやるしかない。

不測の事態が起きないように、などというのは無理な話。そもそも浮遊大陸という不測の事態そのものの上に立っているようなものなのだから、腹を据えてかかる以外に手段はなかった。

……なあに、俺たちはエルくんの無茶振りで慣れてるぜ！ 慣れたくなかったなああ

「イ！」

「じゃあ、エーテライトの生成をよろしくね、エルくん。俺は俺で、なんとかやっておくよ」

「はい、よろしくお願ひします！」

そんな会話を経て別れ、ひとまず親方たちの様子を見に行こうかと思つた、その矢先。

——ぎやぎよおおおおおえええええええ

浮遊大陸で何度か聞いた、3つくらいの獣の鳴き声が濁り混じつたような耳障りな叫びが轟いて。

「……なんとかやつておくよ」

「……………よろしくお願ひします」

俄かに騒がしくなる外の気配と、ますます勢いを増した気がする嵐。

始まる前からトラブルに見舞われている仕事つてやだなあと思いつつ、俺とエルくんはそれぞれの持ち場に向かつて全力で走りだした。



「恐れるな、パーヴェルツイークの騎操士たちよ！ 味方はいるぞ！ ……幻晶騎士な

のに空飛んでたりするが!!」

こちらの存在を正しく認識しているかすら疑問だった、魔法生物。

それがいよいよ人間のことを自分の邪魔をするものと認識したのか否か、いずれにせ

よ人類側の拠点に対して刺客が差し向けられ、戦闘が勃発した。

パーヴェルツィークの騎操士たちは、王女殿下が未知の浮遊大陸へ遠征するにあつての供回りを許された精鋭たち。西方諸国だけで生きるのならば生涯目にする事もないような魔獣を相手にさえ勇敢に戦って見せた。

だが、新たに現れた獣は、違う。

初めて目にしたときは、魔王が従えていた3つの頭を備えた異形、混成獣かと思われた。

しかし今度の相手は、3つの頭に加えて「幻晶騎士の上半身」をも、備えていた。

異形にねじ込まれて歪んでいるせいもあって気付く者は少なかったが、かつてイレブンフラッグスの制式量産機としてパーヴェルツィークとも戦った「ドニカナツク」のもの。

魔獣と幻晶騎士が、融合している。

魔法生物が魔獣や幻晶騎士に潜り込んで操る能力があることは知れていた。だが、その上さらに融合までさせるとは。

その生理的嫌悪を催さずにいられない悍ましさに震え上がりながらも勇気を振り絞る。パーヴェルツィーク騎操士たちは、この戦いの敗北が何を意味するかを悟らざるを得なかった。

「白鷺騎士団！ 前に出るぞ！ ただし、必ず源素化兵装持ちと歩調を合わせて行動しろ！」

そんな中、冷静に対抗するのが銀鳳騎士団の強さ。

白鷺騎士団はエドガールの指揮のもと、嵐の中でも揺らぐことなく整然と隊列を組んで異形中の異形たる「幻魔獣」^{マニティコウ}に挑んでいく。

魔獣と幻晶騎士を魔法生物がつなぎ合わせている幻魔獣は、魔法生物の作用によって法撃を無力化する。挙句、近づき過ぎれば魔法生物に機体に乗っ取られる危険性があり、通常の幻晶騎士では近づくことも遠くから挑むこともできない。

エドガールたちは、そこを作られたばかりの源素化兵装で補った。

エーテルスプレーで怯ませた隙に本体を叩き、魔法生物が触手を伸ばせばエーテライトを穂先に使った槍で切る。長いとは言えない時間で蓄積した知見を駆使し、有利に防衛を進めていく。

「……いかん。我々はなんとかなりそうだが、パーヴェルツィークが押されているか」
だがそれはあくまで局地的なもの。

人類史上で見ても初めて遭遇するような相手と戦うことに定評のある銀鳳騎士団と異なり、西方諸国出身であるパーヴェルツィークの騎操士たちはいかに精鋭が機体性能に優れた幻晶騎士を使っているとはいえ、戸惑いが小さくない。

相手のビジュアル的なアレさを完全に無視して常に的確に殴る、ということは銀鳳騎士団以外の全人類にも要求していい内容とは決して言えない。

無論、幻魔獣に対して勝利することを目的としているわけではなく、ただ時間を稼げればそれでいい。

しかし、それはつまり大胆な攻勢に出て後方に控える拠点への奇襲を警戒しなければいけないということと同義でもあり、戦術的な選択肢は限られる。

敵に先手を取られたこの状況でこれは痛い。押されている状況を一旦無理矢理にでも押し返し、少しでも心理的な余裕を取り戻すことさえできれば状況は変わるのだろうか、手が足りない。

いま、エドガーが把握している戦力の中には。

「——くらえ、頭突き！」

——しやぎやー!?

「グランレオン!? アグリか!?!」

「ちよつと、頭突きって大丈夫なの!?!」

そして、こういう時に盤面をひっくり返すのはエドガーの知る限り大体二人。

今回はイカルガに乗ったエルではなく、どっちが魔獣かわからないことに定評のある

幻晶獣機を駆るアグリだった。

四足特有の俊敏性は、暴風吹きすさぶ嵐の中でも健在。

幻晶騎士ひしめく隊列の間隙を縫って機械仕掛けの獅子が走る。

一気に最前線へと出るや、なんと対魔法生物には禁じ手とされる接近戦を仕掛けた。

ツェンドリンブルに準じるエーテルリアクタニ基搭載機であるグランレオンの質量と、マジウスジェットスラストをも駆使する速度から繰り出される体当たりの威力は防衛に優れた重量機であるアルデイレッドカンバーすら怯ませるもの。

それを真正面から受けた幻晶獣は、為す術もなく吹き飛ばされてゴロゴロとどこまでも転がって行く。

直撃した幻晶獣が生きていないのはいいとして、接触の瞬間にグランレオンが乗っ取られていないか、それこそが何より恐ろしく。

「……よし、大丈夫だったか」

「アグリ、グランレオンは無事……なのか？」

「ああ、うん。なんとかね。一応対策は講じてたから、なんとかならしい」

「対策？　じゃあ、それを使えば他の幻晶騎士も……！」

「ヘルヴィの期待を裏切るようだけど、どうかなあ。開放型源素浮揚器みたいなもんだし」

あつけらかなと、イカルガ級の機体にしか搭載されていない方法を一部のみとはいえ使った、と言いつ出した。

アグリに曰く、魔法生物が高濃度エーテルを嫌う性質を利用したのだという。

グランレオンの胴体部分は、かつてツェンドルグの胴体だったものを流用して作られている。

そのため今もマナ出力は当時と変わらず潤沢で、その一部を使って開放型源素浮揚器と同様の理屈で機体前面にエーテル濃度の高い「壁」を形成した。

当然、その壁に物理的な干渉力はないに等しい。幻晶騎士や通常の魔獣であれば、気にせず突破できる程度の風力で構成されている。

だが、魔法生物ならば。

高濃度エーテルの壁に触れて一瞬ながら麻痺を強いられ、体勢を立て直す前に迫りくるグランレオンの質量を乗せた体当たりが叩き込まれることになる。

「……アグリ。あなたってやっぱりエルネスティ側よね」

「それを喜ばばいいのか絶望すればいいのかどっちだろう……」

「言っている場合ではないぞ、二人とも！ 次が来る！ ……アグリ、悪いが地上は任せた。私はヘルヴィと共に上空の敵の相手をしてくる！」

「えっ」

その様を見て、エドガーはアグリになら地上のことを任せられると判断した。

任せられた方はマジかよと言いたげな様子ではあったが、事実として実力は相応に備えているのだから仕方がない。

アルディラッドカンバーはエスクワイアを使って飛び上がり、ヘルヴィの操るトウエ
ディアーネに乗り込んで突撃していった。

地上のみならず空にも敵はいる。

前線で、そして決戦仕様の改造を続ける後方で、戦いは激しさを増す一方だった。



「仕方ない、やるかあ……」

敵の数は多く、襲撃はひっきりなし。

魔法生物の本体をどうにかするにしても、まずこの状況をどうにかしないことには作戦どころじゃない。

各地で味方の戦線は押され気味だし、できる限りのことをやって行くだけだ。

「じゃあ、次はこの手を試してみるか」

そう覚悟を決めて、とりあえず次に迫ってきた幻魔獣に狙いを定める。

魔法生物を体の各所で伸ばしながら、変な融合をしたせいで既知のいかなる魔獣とも幻晶騎士とも違う這いずるような動きで走ってくる。アレで意外と速いんだよなあ、あいつら。

なので、グランレオンをそつちに向かつて突っ込ませる。彼我の距離はそこそこ。助走は十分につけられる。

幻魔獣はためらう様子を見せない。そもそもそんな機能を持ち合わせていないのか、自分の能力に自信があるのか。魔法による牽制すらなく、真正面からぶつかろうとしているらしい。

だが、こつちにも策はある。

今度はエーテルの壁を作ることなく、体当たりよりも3歩は早く踏み切って、宙に飛ぶ。

色々寄せ集めたせいで幻晶騎士と比較してすら大きな体躯よりさらに高く飛び上がり、頭上を取る。

しかし、奇襲にはならない。相手は濁った眼で着実にグランレオンの動きをとらえている。

マジウスジェットスラストがあるとはいえ、空中からではもはや逃げ道もない。ならば、勝つだけだ。

「獣型の幻晶騎士!? 待て、危険だ!」

「大丈夫です!」

まさしく獲物に襲い掛かる獣のごとく、敵の頭上から爪を備えた腕を振りかぶり、やることは単純だ。ただ、そのまま腕を振り下ろし、爪の鋭さで切り裂くだけ。

普通ならば、魔法生物が潜む幻魔獣にはロクに効かない。近くで俺の動きに気付いたパーヴェルツィークの騎操士が制止の声をかけたのも当然のこと。

幻魔獣の巨体と強靱な肉体は多少なりと耐えて見せ、その隙に魔法生物がこちらを乗っ取ってしまうだろう。

しかしそこまで分かっていたら対策は取れるのさ。グランレオンは、いろいろと扱いやすいように機能拡張の余地を残してあるんでね。

「——でやあ!!」

——ぎやおおおおおお!!

「なっ……効いている!?!」

グランレオンの質量と速度を全て載せた爪撃。それが、魔法生物を切り裂いて幻魔獣の肉体に突き刺さり、途中に混じった幻晶騎士の部品ごと抉り取った。

「いよし、行ける……!」

「待て待て待ってくれ! 今、何をしたのだ!? 魔法生物に接近戦はできないはず!」

何か言われているが、ひとまずグランレオンのシステムチェックを実行する。

魔法生物への接近は確かに禁忌。それなりの確信はあったけど、ぶつつけ本番に近い方法には不安も残る……が、無事だったらしい。グランレオンは、多少動きが鈍い気もするが戦闘中に起こる不調の許容範囲。全て俺の意のままに動くようだ。ほっ。

そこまで確認して、ようやく返事をする余裕ができる。

「大したことじゃないです。やつてることは源素化兵装と同じですよ。ちよつと、爪のところからエーテルが噴き出るようにしただけで」

「ええ……」

パーヴェルツィークの人には軽く引かれているが、実際大したことはしていない。グランレオンの爪の部分に、源素化兵装にも使われている術式を組み込んでマナをエーテルに変えて吹き付けているだけだ。

ただし、少しだけ設定を変えてそれなりの濃度と圧力で噴き出るようにしてある。

細く、速く飛び出る気流状の高濃度エーテル。ぶつちやけ幻晶騎士には何の効果もなく、魔獣相手でも少し具合悪くするのが関の山だろう。

しかし相手が魔法生物となると話は違う。

ついさつきエーテルをシールドとした時と同じように怯ませる、のみならず水圧カッターと同じ原理で魔法生物の体を傷つける武器にもなりえる。

欠点があるとすれば、ついさつき思いついたばかりで他の源素化兵装には採用されないことくらいだろうか。

『さすがです、先輩！ ついにグランレオンがE^{エーテル}シールドとストライクエーテルクロウを使えるようになったんですね！』

「物理的な干渉力はないからね？」

そして、そんなものを使えばこうしてエルくんが飛んでくるだろうことは予想ができていた。

加えていま、エルくんは飛竜戦艦で最後の調整に入っていることを考慮に入れば。

「うわー!? 飛竜戦艦が、飛竜戦艦があんな低高度で!？」

パーヴェルツイークの人たちがビビるくらい、地面を舐めるような低高度で飛竜戦艦が飛んでくるのも仕方ないことだ。

……いやしかし怖いなこれ。幻晶騎士と比べてもアホほどデカイ飛竜戦艦が、手の届きそうなどころにいるって圧迫感がすさまじい。

『それはそれとして、先輩。準備が整いました。一緒に来てくださいー!』

「……えっ!? 俺も行くの!? なんで!？」

『実は、決戦術式の用意をしていたのですが時間が足りなくて……。エーテル流制御の部分の先輩に担って欲しいんです。……できる、でしょう?』

「……………エルくんの期待が重いなあ」

『ガルダウイングとカルディヘッドも飛竜戦艦に乗せ換えてあります。このままディートリヒさんが回収しに行つてくれているエーテライト塊を受け取つて作戦開始です。力を、貸してください』

そんな圧力もかけられつつ、浮遊大陸を、そして世界を救うための一手となることを求められている。

ぶつちやけ、自信はない。これから行われる作戦は、エルくんとアディちゃんに加えてオラシオさんと小王をこのために改造した飛竜戦艦に乗せている。

そんなところに俺が乗り込んでいくというのはそれだけで胃が痛くなるんだけどなあ！

……………でも、やらなきゃいけないことは、決まつてる。

「……………わかった、行くよ。大陸が落ちて農業できなくなるのはヤだし。くそう、せめて魔法生物の天候操作魔法くらい持って帰りたいんだけどなあ！　いくぞエルくん!!」

『先輩ならそう言つてくれると思つていました！　……………それでは、これより魔法生物鎮静化を目的とする、高高度で収集・生成したエーテライトによる落下突撃作戦、

オパレシヨムメテ
『流星作……………』

オパレシヨムメテ
『流星槍作戦、ね。それじゃあがんばろー』

とりあえず、エルくんのテンションがとんでもなく上がっているので、せめてその辺を作戦実行可能なレベルにまで抑えていかないかね？

ほら、アデイちゃんはその辺加速させちゃうタイプだし。



「ぬおおおおおおお！ 気合で走れ、我がツェンドリンブルツ！ キッド殿と並び走るは望外の榮譽ッ！ 今こそ技を学び高める時ぞツツ!!」

「あー……ゴンゾース、だっけ？ そんなに気負わなくてもいいと思うぞ、結構うまいし」

「はっ！ 最初の人馬騎士乗りたるキッド殿にお褒めいただけで光栄です！ 私めも普段からアグリ殿に稽古をつけていただいておりますので、無様は晒せませぬ！」

「他のツェンドリンブル乗りと一緒に、ヘルヴィに連れられてよくアグリを追い回しているんだよ、キッド。それでかなり技量が上がっているね。……アグリはよく泣き叫んでいるが」

「先輩、相変わらずだなあ……」

「あと、たまにエルネステイが混じって全部まとめてなぎ倒したりもしている」

「エルも変わらないなあ。なんか懐かしいって気さえするよ」
「さすが団長殿！ 銀鳳騎士団の始まりより今に至るまで最強であらせられるのですな
！」

エルくんの大好き物、やつちやつた

「ところで、エルくん」

「はい、なんですか先輩？」

『『グランレオンにエーテライト塊くくりつけて竜炎撃砲でぶっ飛ばせば魔法生物の土手っ腹ブチ抜けるかな』とか考えてないよね？』

「……………そんなこと考えるわけないじゃないですか。

ブレードで強化できるタイプのシールドでもないですし」

「沈黙の長さと不安のデカさが比例するんだよなあ！」



エーテライト塊回収に出ていたデイトリヒたちは無事に成功していたようで、作戦開始地点へ向かう道すがらそれを受け取っていいよいよ始まる。

この世界を救うための、たった5人の戦いが。

「もう二人いたら鋼鉄の7人作戦と名付けたのですが」

「そういうのいいから」

「はい、これはこれでワクワクしますしね。では、小王さん！ 魔王さん！ 魔法の力、お借りします！」

「ぐ、ぐくくう……！」 致し方ない、業腹だが、やりたまえ！」

飛竜戦艦の改造は、構造的な部分のみならず内部の魔法制御的な部分にも及んでいる。

たとえばそれは、この作戦のため飛竜戦艦に組み込まれた魔王の能力行使をエルくんの側でできるようにすること、とか。

魔王には、他の幻晶騎士や魔獣にはない特別な能力がある。

詳しい原理は知らないが、竜の王として俺たちの脳に直接声を届けたときのような、遠隔での制御を可能にする魔法だ。

魔王はこの力を利用して、凶暴でまともな意思を持っているか怪しい混成獣をハルピユイアの乗騎とすることを可能としていた。

エルくんは魔王との間にある種のコンバータを介して、その能力を操れるようにしている。

「さあ、起きなさい……竜闘騎！ トウエディアーネ！」

銀線神経すら繋がらない、完全無線の無人幻晶騎士操作。それも、エルくんの演算能力

を駆使した同時多数制御。

ほとんどぶつつけ本番でそれを駆使して、地表近くで幻魔獣との戦いを担当してくれている以外の全機体がこの作戦のために駆り出されている。

隊列を組んで飛竜戦艦に追従してきた竜闘騎とトウエディアーネがそれぞれ竜脚や腕で飛竜戦艦に取りつき、強化魔法で一体と化した。

作戦は、浮遊大陸の外から始まる。

大陸中央の魔法生物から十分な距離を取り、巻き起こされる嵐の範囲からも脱した穏やかな空。

ここから人跡未踏の領域へと、飛ぶ。

黄金の鬘号を接続した、応急修理の飛竜戦艦。

巨大なエーテライト塊を船体下部に抱え、イカルガ、魔王、ついでに俺の機体を乗せ、さらには多数の竜闘騎とトウエディアーネまでしがみついた、控えめに言つて乗せられる戦力全部乗せな割と頭の悪い最強兵器。

「名付けて決戦騎『魔^{ウルトラキング}竜^{グレート}鬼神』！ 全速前進です!!」

「エルくんは最初『大空魔竜鬼神』^{ウルトラガイキング}って名付けようとしてたのをなんとか止めました」

「あなたも相当苦労してますねえ」

「まあ、エルネステイ君だからな」

オラシオさんと小王の同情が身に沁みるぜ……。



作戦は、6段階で構成されている。

「行きます！ 全源素浮揚器、出力最大！」

「りよーかーい。ありったけのエーテル流し込むよー！」

第一歩として、魔竜鬼神に接続する全機体のエーテリックレビテータを最大限に活用する。

エーテル濃度を最高に設定されたエーテライトがふわりと浮遊感に包まれ、高度を上げ始める。

水中の木片が浮かび上がるような勢いのつき方だったが、次第にその勢いも下がって行く。徐々に上昇速度が落ち着き始めるのはエーテル濃度によつて最高高度が決まるエーテリックレビテータの原理上の必然だ。

「第一目標高度……到達しましたよお。レビテートフィールド減衰を確認。ここが限界ですなえ」

「エーテリックレビテータでは、ですね。それでは作戦第二段階に移行しましょう。み

なさん、体の固定はしつかりとお願いします！」

ここからは、マジクスジェットスラストの出番だ。

飛竜戦艦本体は温存し、無理矢理合体した竜闘騎とトウエディアーネが火を吹いた。上向いた機首がぐんぐんと突き進んでいく。慣性と重力でシートに体が押し付けられるが、まだ終わらない。

竜闘騎には源素過給機エーテルチャージャーという装置が搭載されている。

かつてテイランターに搭載されていたものを改良した、エーテルリアクタに流入するエーテル量を増加させる装置。当然炉の劣化は進むが、今は後先を考える必要のない状況。

リミッターを解除して、全力を越えた出力を生み出して飛竜戦艦を押し上げる。

「たかが飛竜戦艦一つ！ 竜闘騎とトウエディアーネで押し上げてやります！」

「人の作品をたかごとか言わないで欲しいですねぇ!？」

「すみません、あれただの慣用句なんで見逃してあげてください！」

当然、長くは続かない。

ほどなく竜闘騎そのものが赤く輝きだし、その寿命が尽きようとしていることが一目でわかる。

「……竜闘騎、分離！」

エルくんは、決して嬉しそうではなかった。

しかしはつきりと言葉にして、竜闘騎たちを飛竜戦艦から引き離す。

役目を終えた竜闘騎は、重力と空気抵抗に絡めとられて瞬く間に離れていく。

遠隔での操縦もすでに効かない。

無数の竜闘騎がそれぞれにバランスを崩し、そのまま爆炎に飲まれていった。

第三段階。次はトウエディアーネの番だ。

既に何層の雲を抜けたか、竜闘騎と同じく限界を超えたトウエディアーネの出力がさらに高度を上げる。

だんだんと、空の色が濃くなっていく。青から紫の間くらいの色合いで、夜とはまた違った色に見える。

「うう、飛翔騎士のみんな……」

「悔いてはいけません、アディ。役目を果たしてくれた機体には涙ではなく敬意を捧げるべきです」

トウエディアーネたちは、この空の色を見ることができたのだろうか。

背後で轟く爆発音を耳にしながら、そんなことを思った。

「さあ、これで最後です。殺人的な加速、気を付けてくださいいね！」

そして、第四段階。

飛竜戦艦と黄金の鬘号、現状人類が有する最大規模のマジウスジェットスラスタがついにその全力を解放する。

先ほどまでに倍する速度でさらに空を駆けあがる。

機体のあちこちからギシギシベキリと不安な音が響いてくるが、今更気にしたところではない。エーテルは潤沢にあるのだから、強化魔法が支えてくれると信じるだけだ。

「最終、目標高度……到達を確認ン！ 来ましたよ、ここはもうエーテルの空です!!」
そして、辿り着く。

人跡未踏のエーテルの只中。

青く霞む眼下の大地と海と、全てを包むダークブルーの空。

「マジウスジェットスラスタを通常モードに移行、位置を調整します!」

「ああ……これが、空……真の空、エーテルの海イ……!」

なんか、オラシオさんが感極まってイっちゃってる気がしなくもないけど、気にしないことにしよう。あの人、いつもそんな感じと言えばそんな感じだし。

「ダメですよ、オラシオさん。僕たちには他にやるべきことがあります。ここまで届けてくれた竜闘騎とトウエディアーネの犠牲を無駄にすることはできません!」

ただ、現実に戻ってもらう必要はあって、その役目はエルくんが果たしてくれた。
めっちゃマジの声で超怖いです。

「ぐぬぬ……い！ いいでしよう、いずれ私自身の作品でたどり着けばいいだけの話ですからねえ！ 飛竜戦艦の制御はこつちでやります！ 他は任せますよお！」

「ええ、お願いします。……では、『嵐の衣』ストームコートを一部停止します」

そして、作戦はエネルギー収集の段階に移行する。

機体とエネルギーアクタ、そして俺たち乗員を守るために終始展開されていた風魔法による防壁を解除する。

そうすれば、当然周囲の高濃度エネルギーがエネルギーアクタへ流入する。

本来ならば無限に等しい寿命を持つエネルギーアクタだが、高濃度エネルギーを流し込まれると莫大なエネルギーを得られる代わりに激しい劣化が襲い掛かる。

この作戦が終われば、どう転んでも飛竜戦艦に未来はない。それだけのものを、賭けている。

「開放型源素浮揚器を展開します！ ……第一円環形成！ ……引き続き多重展開を続行！」

そのエネルギー量のすさまじさを示すように、魔竜鬼神を中心に虹色の円環が1つ、2

つ、3つ4つと次々に形成されていく。



後の世の伝説に語られる。

空から降ってきた世界の終わりをもたらす黒雲の塊と、その上空に輝く虹色の輪。

凶兆とも吉兆とも、世界を滅ぼす力と救おうとする力の戦いとも評されるそれは、浮遊大陸が接近しつつあったセツテルンド大陸各地でも目撃され、人々の記憶に、そして歴史に深く刻まれた。



飛竜戦艦側の機体は既にズタボロだった。

内蔵されたエーテルリアクタは高濃度エーテルに晒されてほぼ全機が機能停止。

イカルガの出力とエルくんの制御で形を保ってはいるが、これから必要になる魔導兵装を除いて強化魔法を打ち切られ、装甲がバラバラと剥がれ落ちていく。

とはいえ、周囲には何重にもわたる開放型源素浮揚器が形成されているのでどこまで

も落ちていくことはなく周囲でくるくる回りながら揺蕩っている。

どこか呑気ですらあるわずかな間。

それは、最終段階へと至るための最後の段階。

下方に広がる巨大な渦巻く雲にばかりと空いた中心部、魔法生物の住処の上を、取った。

「それでは、本作戦の最終段階を実行します。みなさん、ご協力のほどを。……そして、先輩」

「あ、うん。ちよつと待ってね」

そう、ここが人類存亡の瀬戸際。

そしてたぶん、俺にとっても今までの人生で一番ヤバイ瞬間じゃないかなという気が、ちよつとする。

今俺がいるのは、飛竜戦艦の甲板上、グランレオンの中。

竜闘騎にトウエディアーネ、飛竜戦艦の操縦に関して俺の出る幕はなく、エーテライト生成に伴うエーテル流制御御というここからが俺の出番であり、そのために必要なものはエルくんが全て用意してくれている。

すなわち、俺が設計した3機の幻晶獣機。グランレオンと、ガルダウィングと、カル

デイヘッド。それらがここまでの道中で吹き飛ばないよう甲板にしがみつき、強化魔法で一体となって用意されている。

こいつらの力が、必要だ。

まず、3機は前から一列にカルデイヘッド、グランレオン、ガルダウイングの順で並んでいる。

そこで一旦強化魔法を解除してもらって、飛竜戦艦と独立した状態にする。

悠長にしていると風にあおられてすっ飛んで行ってしまいうから速やかに、まずはグランレオン背部のサブアームでガルダウイングを掴み上げ、背に乗せる。浮遊大陸ではよく使う飛行形態だ。

だが今はその機能に用がない。そのまま前に進み、カルデイヘッドの背にグランレオンでのしかかる。

この時ついでに、カルデイヘッドのフルパッケージ用エクストラアームを外し、持ち上げる。

あとはもう、ワンアクション。

カルデイヘッドがスタンディングモードへ移行し、グランレオンの頭部の向きを変える。

エクストラアームはその上に、ガルダウイングの頭部も前に倒して無駄に突き出ないようにして。

「——完成」

これからやることは、複雑にして大規模だ。

エルくんとイカルガなら単騎で済む話かもしれないが、俺ではとても真似できない。成層圏近くの高濃度エーテル環境でかき集めた莫大なエーテルを、エーテライト生成のために流し込むというその作業。俺が主に操縦する3機全てのエーテルリアクタとマジウスエンジンを総動員しなければ成しえるものではなかった。

それも、いつぞやボキューズ大森海で小王と戦った時のような、とりあえず動かせばいいというだけの結合とはわけが違う。

各制御術式と魔法現象を連動させる必要がある、しかもそれを何が起こるかわからない吹きっさらしの高空で。

3機がバラけてしまわないよう強固に結びつく必要がある、この形は必然だった。

人はそれを、「合体」という言葉で評するかもしれない。

立ち上がる。

エーテルリアクタ搭載数、実に5機。

通常の幻晶騎士と比べて全高は倍近く、重量は実に数倍に及ぶ。

カルデイヘッドの強靱な足回りがあればこそ支えられるその姿。

グランレオンの頭部がちょうど胸のあたりで前を向き、カルデイヘッドフルパッケージの巨大な腕部がむしろちょうどいいサイズに見えるだろう巨体。

幻晶騎士の合体が、為された。

「——実を言いますと、僕は人型の幻晶騎士が大好きなんです」

「アツハイ」

そして即座に声をかけてくるエルくんよ。

でも予想に反して落ち着いた口調だった。

……いやまあ、内心どんなスゴいことになってるかはお察しなんだけでも。

「先輩が作る幻晶騎士は大半が人型ではありません。でも、僕はずっと信じてたんです」

「アツハイ」

「——いつか、人型になると。新規に開発するのではなく、合体してくれると。その時、胸にはグランレオンの顔がガオーってしてると！ こっち向いてくださいもつとよく見せて!!」

「アツハイ。これでいい?」

「先輩、大好きです!」

「シャー!!」

ちなみに、シャーという叫びはアデイちゃんの威嚇です。

さすがに状況が状況なのでカササギを飛ばしてきたりはしなかったが、かつてないほどに怨念が感じられる。イカルガの周囲に満ちる高濃度のエーテルが一瞬間の色に染まった、ような?

いやまあ、気持ちはわからんでもない。

旦那が男相手に大好きとかのたまえばそうもなろう。

俺がしたことと言えば、作戦用に機体をちよつとくつつけたのと、エルくんの方を向いただけなんだけどねえ!

「あー、うん。君たちが相当頭おかしいというのはよくわかったから、とりあえず作戦を進めたまえ。他のことはあとだ、あと」

「最終目標地点、到達です。あとはもう止まれませんよお! さつさと準備してくださいねえ!」

小王さん! オラシオさん! こんなときだからこそ、あなたたちのエルくんに対する塩対応がめちやくちや頼もしいです!

「ほら、エルくんそろそろ始めよう。……エーテル流をこっちに、よろしく」
「ふう……。そ、そうですね。すみません、ちよつと錯乱しました。では改めまして、先輩。お願いします！」

気を取り直して、作戦続行。

位置と高度と速度ベクトル、それら全てが台風の目へと飛び込んでいく魔法生物への攻撃コースへ乗ったことを示している。時が、来た。

飛竜戦艦を落下させつつエーテライトを生成し、魔法生物へ直撃させる。

作戦が持つ性格上、集めに集めた莫大なエーテルを飛竜戦艦艦首の竜炎撃砲へと注ぎ込む必要があった。

本来ならば魔導兵装としてその辺りの処理も実装するべきところではあったが、何分時間と資材と設備が足りず、ないものは乗っている人間が気合で間に合わせるしかない。

そしてエルくんたちですらこれから先の手順に一杯一杯なら、そこに至るまでのことは、俺がやる。

3機合体した幻晶騎士の全能力を使う。

イカルガの出力には到底及ばないとはいえ、通常の幻晶騎士とは比較にならない5機のエーテルリアクタをフル稼働させつつ、3機分のマジウスエンジンでそれぞれ別の術

式を走らせる。

「誘導」「収束」「放出」。

エーテルリアクタに通してしまえば、あるいは人が浴びてしまえばそれだけで終わりを迎えるような高濃度エーテルが暴れ出さないよう細心の注意を払い、しかし同時に大急ぎで。

合体幻晶騎士の掲げた腕の中へと、浮遊大陸の直径以上に広がった開放型源素浮揚器のエーテル環が押し寄せる。

それはまるで、手のひらの中に納まる天体図のよう。少しでも気を緩めればはじけ飛ぶ爆弾と同じそれを、複数魔法の同時制御と半分くらい力づくで無理やりに押し込んでいく。

3つのマジウスエンジンそれぞれの術式を使うのはいいが、それぞれの必要とされる出力は刻一刻と変化する。3つの術式を並行して随時調整し、エーテル流が過剰にならないよう、散逸しないようにミリ秒単位の制御切り替えを行い、竜炎撃咆に注ぎ込む術式を、リアルタイムで作り続けるような真似をした。

「ふんぬぐぐぐぐぐぐ……！ カウントスタート！ 3、2、1……！」

「——ゼロ！」

「行きますよオ!

エーテリックバスターランス
源素収束式竜撃砲!

エクステンド
刀身展張!!」

結晶の生成には、核となる部分が必要となる。

核が過剰な成分濃度に晒されたり、温度の変化などによつて結晶はさらに成長していく。

元の状態とは比較にならない精密な構造と密度となり、モノによつては尋常ならざる硬度を持つて。

エーテライトも同じだった。

元は飛竜戦艦より巨大であったエーテライト塊を核として、地上ではありえない超高濃度のエーテルに晒されて。

——メキメキメキ、バギギギンツ!!

「ぎやああああ!! 私飛竜戦艦がああああ!!」

結晶が、伸びた。

あちこちでたらめに空間があろうとなかろうと関係なく、尖った先端は容赦なく飛竜戦艦の装甲を貫いて、内部に積載されたエーテライトをも取り込んでさらに勢いを増し、艦内をズタズタに、外部に突き出すいくつものエーテライトが虹色に塗り替えていく。

そして、ほんの一呼吸。

飛竜戦艦とはもはや言えないほどエーテライトに食い荒らされた、本作戦最大最終の兵器が、空の高みで完成した。

「では、逝きましょう。小王！ 姿勢制御の協力をお願いします！」

「仕方ないな、請け負おう。ふらつかせるんじやあないぞー！」

エーテライトは浮かばない。

自然の摂理に従って、レビテートフィールドを失った飛竜戦艦は機首を下げ、落下を始める。

もう二度と浮かび上がることはできないその運命を無駄にしないため、エルくと小王はエーテライト塊に張り付く残骸と化した飛竜戦艦の軌道を調整する。

このときのために生き残らせておいたマグウスジェットスラストに火を入れて、重力の助力をさらに高めて地上へと、魔法生物へと。

流れ星の槍が、地上へ落ちる。



「先輩、あなたはどこへ落ちたいですか？」

「魔法生物に落ちるためにここまで来たよね？」

そしてこれからも空に大地は浮かび続ける

作戦は最終段階。

あとはもう、落ちて突っ込むだけとなる。

「これ以上私にできることはないですからねえ、お先に失礼させてもらいますよお！」
「はい、ありがとうございますオラシオさん」

そして、命脈尽きようとしている飛竜戦艦と運命を共にする必要はない。飛竜戦艦の制御を担当していたオラシオさんがまず離脱する。

艦首の竜騎士像フィギュアヘッドはいざというときに分離して独立飛行が可能なのになつていて、
で、エーテライト生成前にこちら側へ移つてそのまま脱出していった。

「オラシオさん、イジエークト！」

「今回の作戦はコールサイン設定してないよねエルくん？」

とはいえ、オラシオさんは開発こそ専門家ながら操縦は畑違い。高空の風を受けてふらふらしながら飛ぶというより落ちていくが、そのまま地面に激突するほど操縦が下手なわけでもないだろうし、気にしている余裕もない。

「やれやれ、彼も大変だね。私はゆっくりと結果を見物させてもらおうとするよ。ここま

で協力したんだ、成功させたまえよエルネステイクン」

一方の小王は魔王の力を信頼し、引き出すことができる。オラシオさんと比べると大分優雅に、ふわりと機体から離れて行った。

魔法生物への直撃ルートはゆるぎなく、嵐の中で吹き荒れているだろう風も中央を通るここだけはゼロに近い。

それでもなおomagiusジェットスラスターの加速を続け、地表へ向かって突き進む。

「先輩！」

「離脱したいのはやまやまだけど、あまり高いところで離れると着地できないから。

……最後まで付き合うよ」

「……ありがとうございます」

そして、最後の最後、ギリギリまで俺とエルくん、そして絶対にエルくんから離れないことは聞くまでもないアデイちゃんが残った。

雲に囲まれて浮遊大陸の様子はわからないが、魔法生物だけはどんどんと大きく見えるようになっていく。

これまで横から柱のような姿を見上げてばかりだったので不思議な気分だが、もう二度とこんな角度から見ることはないだろう。ないと言ってくれ。

作戦通りにいけばあとはエーテライトを直撃させるだけという、最後の瞬間。

魔法生物に睨まれた、ような気がした。

魔法生物が咆哮を上げた、ような気がした。

自身の生命の根幹に係る巨大なエーテライトの接近を察知したのか単なる偶然か、それでも俺たちはここが潮時なのだそう悟る。

「限界一杯です！ 離脱します！」

「機体が大破する、くらいで着地できるといいんだけどなあ」

イカルガとグランレオンたちの合体機が飛竜戦艦から飛び出し離れたのは、これ以上くつついていると危険だからでもあるが、同時に恐れがあったのかもしれない。

イカルガの方はマグウスジェットスラストと開放型源素浮揚器を起動。俺の方も機体の手足を広げられるだけ広げてエアブレーキにしつつ、イカルガの出力には及ばないものの同じように開放型源素浮揚器を使ってなんとか落下速度を抑えていく。

一方の飛竜戦艦は、ついに単身となりながらその使命を果たす。

音速にすら迫っていると思える速度と、元の船体よりはるかに膨れ上がったエーテルの膨大な質量が持つエネルギー全て欠くことなく、魔法生物へと一直線に落ちていき。

魔法生物の体に発生した「眼球」へと、突き刺さった。



その瞬間は、地上で幻魔獣と戦っていた銀鳳騎士団やパーヴェルツィークの拠点からでも見えていた。

空の彼方から、嵐を突き破って降ってきた流星が世界を破滅させかねないエーテルの柱に鉄槌を下す。

嫌悪感を催す異様な魔獣と死闘を繰り広げ、やつとの思いで押し返したそのときに文字通り降ってきた朗報に誰もが歓喜の声を上げ。

「……やったか!？」

ついでに、言ってはならないことを言ってしまった。



「あああああああ！ エル君、止められちゃったよ！」

「そうですね、アディ。困ったものです」

魔法生物の体を構成するエーテルは、巨大エーテライト塊の直撃を受けて千々に裂け

た……かに見えて、その実脅威を悟った魔法生物が自ら体を引き裂いていたらしく勢いを受け止められてしまった。

流星槍作戦は、発揮する威力の高さは無類だがそのためにつき込める資材を全てつき込んでいる。失敗はすなわち敗北と滅亡を意味するような、乾坤一擲の切り札だった。

だからこそ、不発になると打つ手がない。

「……いけませんねえ。この作戦のために、数多の機体がその存在を賭けたんです。ダメじゃないですか。その一撃を受けたあなたが出てきちゃダメじゃないですか。死んでなきゃああ!!」

「生きるとか死ぬとかそういう生命かどうか怪しいけどね」

しかしその程度で諦められるようなエルくんではなく。

「アディ！ 触手の迎撃は任せます！」

「りょーかい！ とりやー！」

イカルガは、突っ込んだ。

無数に枝分かれした魔法生物の体のあつた空間へ、飛竜戦艦を追って。

迫る触手はアディちゃんに迎撃を任せ、取りついたのは飛竜戦艦後部でいまだ形を保っているマジウスジェットスラスト。

おそらく無事とは言えないだろうが、イカルガとエルくんなら接触さえできれば直接

かつ無理矢理に機能を復活させることができる。

「ラーフフィスト 執月之手オ！ 銀線神経が途切れているのなら！ 直接操作すればいいだけのこと！

起きなさい、黄金の蠶号、飛竜戦艦！ 最後の一仕事、派手にいきましようか!!」

それは、遠目に見ても噴射というより爆発に近い。

実際、後先を考えずイカルガの出力をフルに叩き込まれているに等しいその駆動、魔法生物が力尽きるのが先かマギウスジェットスラストが崩壊するのが先かのチキンレースに近い。

「行け……行けえー!!」

「押し込め!! そのまま、倒せー!!」

「頼む、神様……!!」

その様は、地上拠点どこかセツテルンド大陸からすら見えていたという。

祈りと応援の叫びは声こそ届かなくとも思いは同じ。

飛竜戦艦が、それに応えてくれたのか。

最後の一押しが、エーテライトごとズブリと魔法生物の中へさらにめり込み。

「……エル君、風が！」

「止まった……？」

静かだった。

急に嵐が弱まり、ほぼ同時にマジウスジェットスラストの命脈が尽きた。

あるいは、魔法生物すらも、ついに。

そんな期待にも似た沈黙が空に満ちた数秒は。

——オオオオオオオオオオオオアア!!

「また暗く……いえ、雲ではありませんね。あれは……まさか、エーテル!? 宇宙から引きずり下ろしてきましたか!」

「ど、どどどどようしよウエルくん!」

浮遊大陸史上最大級の異常の前触れでしかなかった。

空の彼方から降り注ぐオーロラの虹色が浮遊大陸を覆う。

エーテルそのものともでも言うべき魔法生物が、大量のエーテルを引き寄せてきた。

何かを企んでいること、疑いの余地はない。

そして、魔法生物そのものにも変化が訪れた。

魔法生物を形成する触腕の表面がボコボコと膨れ上がり、透明に透き通る球体となる。

異様に数は多く不気味だが、あれは「目」だ。ガンQ……じゃなかった「眼球」だ。イカルガをじつと見つめる、無数の目。

「こちらを、見ている……？」 なにを考えているのです、魔法生物」

「ちよつ、ちよつとエルくん、あれあれ！ 魔法生物の触手が！」

異常は続いていた。エーテルの降下に続いてさらに、「空が閉じる」。

魔竜鬼神の直撃を避けるために花咲くように広げていた触手が、魔竜鬼神ごと包み込むように閉じ始めた。

しかもその向こう側には高高度から引きこんだ大量のエーテル。

そして、触手表面がざわざわと蠢き。

エーテライトが、生えた。

「ほほう、どうやら大量のエーテル、そしてエーテライトを求めているようですね。……このままだと逃げ道がなくなりますか」

「言ってる場合じゃないよエルくん!？」

あれだけ苦労して、制御も何もなく無理矢理生成したエーテライトがいともたやすく生え、伸びていく。

魔法生物の規格外、ここに極まれり。

人知を超えた魔法能力、魔法現象そのものとも言える存在は息をするようにエーテルを操り、生成したエーテライトは飛竜戦艦の船内に満ちるそれらとの融合もしはじめ、空間がエーテライトによって閉じ始める。

万事休す、と言っていい。

イカルガはもはや完全に死に体となった飛竜戦艦の上、不安定になりはじめた嵐ストームコートの衣を必死に維持しながら迫りくる触腕を迎撃し続ける。

ここへとたどり着くルートであつた上方は閉じられたうえに、エーテル濃度が濃すぎて逃げることは不可能。横の触手を撃つても効果はなく、突破口は開けなかつた。

体を構築する成分そのものがエーテルなせいか、魔法生物の体の中に取り残されつつあるイカルガはエーテルの濁流の中で翻弄される木の葉に等しい。

その流れに抗う全ての動きは何一つ実を結ばない。

そう、「流れに抗う」動きは。

「なら、流れに乗らせてもらおうかあああああ!!!」

「せ、先輩!!?」
「なんでまだここにいますか!?!」

エーテルは空から降りてきて、魔法生物に吸い込まれる流れを作っている。

ならば、その流れに沿って魔法生物へ向かう動きなら、邪魔されることなくむしろ勢いを増すことさえできる。

重力、推力、エーテルの流れ。全てをまとめて、俺は魔法生物へ向かって落下することを選んだ。

それしか生き残る方法なさそうだしね！

「浮いたはいいいけど、まともに飛べなくてうろろうろしてたら取り残された！」

「なんですかそれ!? ……でも、そういうありあわせ感のある合体も好きです！」

「じゃー!!」

幻晶騎士の3機合体。

普通の幻晶騎士ではできないこともできるようになるが、なんでもできるわけではもちろんない。

一応マジウスジェットスラストがついているとはいえ、その配置はあくまで合体前に単騎で使うことを想定してのもの。開放型源素浮揚器で浮くことこそできたものの、さつきマジウスジェットスラスト使ってこの場を離れようとしたらバランス崩れてその場でできりもみ回転しかけました。

そんなわけで逃げるに逃げられず、上方からエルくんたちの最後の頑張りをずっと見ていたわけなんだけど、事ここに至って静観によって得られる未来はないことが明らか

だった。

ならば、進む。

開放型源素浮揚器を解除して重力に身を任せ、エーテルの流れに沿えばマジウスジェットスラストもバランスを崩さず加速に使える。

目指す先は、魔法生物の中心。ひととき巨大な眼球を作り出したド真ん中。

「ああもう……！ 先輩が僕より先に無茶をするなんて珍しいですね！」

「たまにはいいじゃないか。……エルくん、魔法生物を斬れるかい？」

「任せてください！ ただ、おそらくすぐに修復されます！ タイミングを合わせてくださいね！」

そんな俺にあつという間に並び、そして追い越していったのはさすがエルくんのイカルガ。

エーテルの波に乗るようにして滑らかに加速して銃装剣を振りかぶるや、そこに虹色の光が宿る。

「エーテリックコーティング源素化被膜!!」

エーテライト生成が可能になったということは、エルくとイカルガなら実戦の場においても武器にできるといふこと。

急場しのぎなせいとかごくわずかな量の生成が限度のようで、刀身を覆うだけだがそれ

で十分。

「はじめまして、魔法生物！ 僕は銀鳳騎士団団長、エルネスティ・エチエバルリア！人の意地を、一太刀馳走いたします!!」

魔法生物の眼へと飛び込むようにして、銃装剣を一閃。

幻晶騎士を飲み込めそうなほどに巨大な眼球が一文字の傷に裂け。

「隙ありじゃああああああ!!」

半ばやけっぱちの俺がブレーキなしで飛び込み、機体が半分埋もれるような勢いで拳を突きこんだ。

魔竜鬼神による流星槍作戦は、高濃度エーテル流の投射という選択肢を排除した。

魔法生物ほどの規模の存在に威力を発揮するほどのエーテル濃度はレビテートフィールドを発生させてしまい、まともにぶつけることができないからだ。

だがそれは、法撃としてエーテルを投射するならばの話。

発生が一瞬なら、ほぼ影響を受けずに済む。

発生位置が相手の内部なら、何も問題はない。

魔法生物の生理的な現象なのか、ねじ込んだ腕部の制御が干渉されているような感触がある。

宇宙からオーロラという形で引つ張ったエーテルを取り込み、光の柱となっていた魔法生物は地中へ戻つて行つた。

ついでに、その出口たる地表面にはなんとエーテライト塊が復活。

しかしそれは流星槍作戦でねじ込んだアレではない。なにせ元の塊よりデカイ。おそらく魔法生物がエルくんを真似て生成したのだろう。

しかし規模が違う。そのデカさたるや、突撃かました飛竜戦艦を丸ごと取り込んだ山のような巨大さだ。

とはいえこれによつて魔法生物が再びの眠りについたことは間違いない。

……あくまで眠りについただけで、何かあれば再び目を覚まして嵐を起こして世界を終わらせかねないと、人類に知らしめたいうえでのことではあるが。

「ふんっ！ おりやつ！ ……どっせい！」

機体に蓄積していたマナは枯渇している。

エーテルリアクタは頑丈だから無事だろうが、あちこちスタボロなせいとかコックピットハッチが開かず、閉じ込められた状態だった。

なので仕方なくグランレオンのコックピットハッチを蹴り飛ばし、やっとの思いで外に出る。

どこをどう飛んで転んだのかはわからないが、一応生きてはいるだけ儲けものだろう。

現在位置は、浮遊大陸上のどこか。かなり久々に見た気がする青空の下、少しの間途方に暮れる。

みんなと合流したくはあるけど、さてどっちへ行けばいいのやら。

だが、まあ。

浮遊大陸に来てから騒動に次ぐ騒動で忙しいばかりだったから、少しくらいゆっくりしてもいいかもしれない。

遠くを見渡すため、ズタボロになって合体が解除されたどころか手足の一部も千切れ飛んで崩れ落ちていたグランレオンたちの塊の上に腰を下ろし、一息つく。

しばらくこの空を眺めて風を浴びて、それからみんなの居場所を探しに行こう。

俺にとって、それが浮遊大陸の事件の終わりだった。

『——見つめましたよ、先輩！……ああつ、やつぱり機体が大破してる！ 役目を終えて朽ちかける最強形態……美しいですね!!』

「ああうん、そうだね？」

なお、しばらくしたらエルくん直々に探しに来てくれました。

どちらかというと、グランレオンたちを回収する前に一目見ておきたかったとかそういう理由っぽいけど。



浮遊大陸に関する騒動は終わった。

終わった、ということになった。

終わらせるために、しなければならぬことが山ほどできたとも言う。

とはいえそれらに関して、俺が関われる要素はほとんどない。

農業と殴り合いなら出番もあるが、ここから先は政治の話だ。

浮遊大陸を、どうするか。

それはすなわち、今もこの大陸の中で眠る魔法生物をいかにして刺激しないで済む枠組みを作るかという話だ。

エーテライトの塊に等しいこの大陸でこっそりワンチャン一儲け、などと考える輩は当然出てくるだろうが、考えるだけで留まるように抑えるためには最大の権力、すなわち国と国との間の関係をもって制する以外にない。

そして、幸いにしてこの場で状況を把握している人として、エムリス殿下とフリーデ

グント王女殿下がいるからなんとかなるだろう。

……外交レベルのアレコレを、本国と申し合わせなしに決めることになるので怒られるとしてもエムリス殿下やエルくんレベルで止まるだろうからセーフ！

細かい部分については知る由もないが、大筋でどういう話になるかは聞かせてもらった。

浮遊大陸の存在と、魔法生物の起こした嵐やそれを封じるための流星槍作戦は大陸にいた人たちの目にも見えていたという。

下手に放っておいたり隠したりすると、いらん噂が尾ひれ背びれどころか翼に牙と角まで生えて炎を吐きながら元気よくセツテルンド大陸中を飛び回ることになるだろうと予測された。

なので、適度に情報を公開する。

今日からこの地は浮遊大陸改め、「魔王国」となる。

小王を魔王とし、住人はハルピユア。セツテルンド大陸との間に相互不可侵を約束し、交易によってエーテライトを提供する、と。

なお、この宣言はパーヴェルツィーク王国、クシエペルカ王国、フレメヴィーラ王国、シユメフリーク王国が後ろ盾として名前を出している。

うっかり変な色気を出してちよっかい出そうものなら国ごと轢き潰されそうな名前が過半数なあたり、この宣言がガチであることがわかってもらえらるだろう。

そして。

生き残った飛空船を総動員して、速攻で各国へバラまかれた魔王国建国の怪文書。

その効力を確かなものとして説得力を持たせるためには、まず俺たち自身がこの宣言に従わなければならない。

すなわち、浮遊大陸との別れの時だ。



「……………お前も、行くのか」

「そりゃあ、まあ。俺も人間だし」

「……………!」

「いや、その、涙目で睨まれても…………」

「ヤダー——! でっかい人、行っちゃやだ——!」

「嘆くな、小さき翼よ。別れは惜しい。だが、別れを惜しむほどの出会いを得られたことは百眼のお導きだ」

「知らない！ もっと遊ぶ！」

「う、うむ……」

うーん、愁嘆場。

あつちではキッドくんがホーガラさんとしつとりした、しかし避けられない惜別を繰り広げている。

主にホーガラさんの方が割り切れていないようで、数年前にクシエペルカからフレメヴィーラに帰るときにキッドくん主演で似たような光景を見た覚えがある。

ノーラさんは藍鷹騎士団の人たちにその辺の記録を取らせているみたいで、おそらくあの報告はまず真つ先にエレオノーラ女王陛下の所へ届けられるんじゃないかなあ。

「まあ、魔王国は魔王とハルピユイアの領土だけどセツテルンド大陸側にハルピユイアが来ちやいけないうって話にはなってないし、落ち着いてからホーガラさんが遊びに来ればいいんじゃない？」

「獅子の地の趾！ 冴えているなお前は！」

「遊びに行く……それもいいね！」

そして、定められた別れがもう一つ。

「……」

「終わったかい、エルくん」

「先輩。ええ、万事つつがなく」

「小王との別れがつつがなく終わるとかマジ？」

現在、銀鳳騎士団は浮遊大陸からの撤収作業に忙しい。

人命こそ無事だったものの、それに反するようにして幻晶騎士と飛空船は無事なところが一つもないとかそういうレベルだ。

帰るにしてもまず飛空船を修理しなきゃいけないし、ドックもないこの場所で飛空船を修理するためにはまず幻晶騎士を修理しなきゃいけない、とやることは山積みだ。

エルくんはその全てに関わる、というわけではないが銀鳳騎士団団長として監督と確認、そして好き好んで首を突っ込むという仕事がある。

そんな仕事に合間を作り、小王との会談に向いたわけだ。

これから魔王国における玉座の間となるのか、ハルピユアの住処となるような立派な樹に空いた大穴の中へと特に警戒することもなくひよこひよこ入って行ったエルくんが、しばらくして何事もなかったかのように出てきた。

いやまあ、小王だっけいままさらドンパチやるような気は削がれてるだろうとは思ったけどどうも普通に帰ってくるとは、さすがに驚くよ。

「その代わり、初代魔王として魔王国の領土から永久追放されてしまいました。僕に対

する感情と魔王としての責任の折り合いを考えると、妥当なところでしよう」

「偉い人は大変だなあ」

当たり前と言えば当たり前、追放直後に合わせる顔もあるはずはなく、小王は大樹の中から出てくる気配がない。きつと、このまま二度と会うことなく別れるつもりなのだろう。

思い返せば、大森海で初めて顔を見て、しばらく世話になって、主にエルくんが大暴れして街一つ背負って飛ぶほど巨大な魔王を操る小王と戦った。

そして今回は飛竜戦艦改造機と一緒に乗って世界を救ったのだから、変な関係もあつたものだ。

その感慨に背を向けて、俺とエルくんはその場を後にし、ほどなくこの浮遊大陸を後にする。

長く、ヤバく、険しく、やっぱりエルくんがとびきりヤバかった仕事、終わる。

「では、クシエペルカ王国にエムリス殿下とキツドを返してからフレメヴィーラ王国へ帰りましょう。流星槍作戦の顛末を国王陛下に説明しなければなりませんし、まだまだやることはたくさんですわね！」

「俺、帰ったらしばらく畑仕事に専念するんだ……」

そんな現実逃避の一つや二つもしたくなるくらい、まだまだあれこれ控えていそう
だ。

少なくとも、リオタムス陛下の胃がまた爆発四散することだけは間違いない。

でもいまだけは考えることをやめることにして、ウキウキと弾む足取りで幻晶騎士の
方へ駆け寄るエルクンの背中をゆっくり歩いて追いかけた。



「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「——ところで先輩」

「幻晶騎士の合体についての検討はしないからね？」

「心を読んだんですか!？」

「エルくんは時々死ぬほどわかりやすいから……」

「やりましょうよ! 単騎で人型にもなったりする恐竜型かドラゴン型のロボで、最終

的にグレート合体を！」

「幻晶騎士の動力機構は変形とか分離とか合体に向いてないでしょ」

「動力機構そのものが異なる新機軸機……？」

「変形分離合体できる幻晶騎士を作ってくれって話じゃねえよ」